

# 八千代市ヲサル山遺跡

— 萱田地区埋蔵文化財調査報告書III —

1 9 8 6

住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部  
財団法人 千葉県文化財センター

や　ち　よ　し　を　さ　る　や　ま　い　せ　き  
八千代市ヲサル山遺跡

— 萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ —

1 9 8 6

住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県西部に位置する八千代市は東京への通勤圏にあるところから、近年人口増加が著しい地域となっています。

一方、八千代市は豊かな大地と緑・水に恵まれた地域であり、こうした自然環境はいつの時代でも人々の居住に適していたとみえ、市内には数万年前の旧石器時代からの生活や活動の跡が、歴史遺産として残されており、市民に心のやすらぎやうるおいを与えてています。

住宅・都市整備公団では、八千代市萱田地区において土地区画整理事業を計画しました。千葉県教育委員会は、用地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と慎重に協議を重ねてきましたが、工事計画の変更は困難であり、やむを得ず発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、財團法人千葉県文化財センターが、千葉県教育委員会の指導を受け、昭和52年度から実施しており、その成果としてこれまでに、權現後遺跡、北海道遺跡の報告書を刊行してきました。

このたび、昭和56年～57年度にわたって調査を実施した、ヲサル山遺跡の調査成果を報告書として刊行する運びとなりました。ヲサル山遺跡からは、約3万年前の旧石器時代から平安時代までの長い期間にわたる人々の活動の跡が発見されました。

この報告書が、千葉県や八千代市の歴史を学ぶ上で、また、教育資料や学術研究に、さらに文化財保護思想の涵養と普及に役立つことを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業までの御指導、御協力を賜わった千葉県教育委員会、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、八千代市教育委員会の諸機関、ならびに現地調査、整理作業に携わられた地元の調査補助員の皆様方に心から感謝いたします。

昭和61年3月

財團法人 千葉県文化財センター

理事長 山 本 孝 也

## 凡　　例

1. 本書は、八千代都市計画事業董田特定土地区画整理事業の実施に伴い、事前調査した八千代市ヲサル山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和56年6月16日から昭和58年1月13日の間において2次にわたり実施した。
3. 発掘調査の実施は、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部の依頼により、文化庁および千葉県教育委員会の指導を受けて、財団法人千葉県文化財センターが行った。
4. ヲサル山遺跡の遺跡コードは、行政管理庁指定統計コード八千代市(221)、千葉県文化財センター遺跡コード(007)を使用し、221-007とした。
5. 整理作業は、昭和59年4月2日から昭和60年3月30日まで実施した。
6. 本書は、昭和59年刊行の『八千代市権現後遺跡』、昭和60年刊行の『八千代市北海道遺跡』に続く董田地区埋蔵文化財調査報告書の第3冊にあたるものである。
7. 本書の作成および執筆は、調査部長鈴木道之助、部長補佐岡川宏道の助言のもとに、序章第1節、第3節1項、終章を阪田正一、序章第2節、第3節2、3項、第I部、第II部、第III部、第IV部を藤岡孝司がそれぞれ分担し、阪田が全体をまとめた。
8. 本書に使用した空中写真は、森昭写真事務所に委託したものである(図版1、2)。
9. 発掘調査から報告書刊行に至るまで御指導いただいた千葉県教育委員会をはじめ、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、同千葉北部開発事務所、八千代市教育委員会、地元関係諸機関各位に御協力をいただいた。

## 本文目次

序 文	
凡 例	
序 章.....	i
第1節 発掘調査に至る経過.....	i
第2節 遺跡の位置と環境.....	ii
第3節 調査の経過.....	iv
第I部 旧石器時代.....	1
第1章 層位と文化層.....	3
第1節 自然層.....	3
第2節 文化層.....	5
第2章 遺構と出土遺物.....	6
第1節 はじめに.....	6
第2節 第1文化層.....	6
第3節 第2文化層.....	63
第4節 第3文化層.....	81
第5節 第4文化層 .....	114
第3章 まとめ .....	119
第1節 石器群の変遷 .....	119
第2節 繩群について .....	123
第3節 ブロックの性格 .....	124
第II部 繩文時代 .....	129
第1章 繩文時代の概観 .....	131
第2章 遺構と出土遺物 .....	131
第1節 はじめに .....	131
第2節 早期の遺構と遺物 .....	132
第3節 中期の遺構と遺物 .....	148
第4節 後期の遺構と遺物 .....	155
第3章 包含層出土遺物 .....	160

第1節 層位と出土状況	160
第2節 土器	160
第3節 土製品	175
第4節 石器	179
第4章 まとめ	187
第1節 遺構について	187
第2節 遺物について	191
 第III部 弥生・古墳時代	197
第1章 弥生・古墳時代の概観	199
第2章 遺構と出土遺物	199
第1節 はじめに	199
第2節 第I群の遺構と遺物	199
第3節 第II群の遺構と遺物	226
第3章 まとめ	279
第1節 遺物について	279
第2節 遺構について	282
 第IV部 歴史時代	285
第1章 歴史時代の概観	287
第2章 遺構と出土遺物	287
第1節 はじめに	287
第2節 遺構と遺物	288
第3章 まとめ	293
 終章	i
第1節 旧石器時代の総括	i
第2節 繩文時代の総括	i
第3節 弥生・古墳時代の総括	ii
第4節 歴史時代の総括	iii
第5節 結 言	iii

## 挿 図 目 次

図 1	ヲサル山遺跡の位置と周辺地形図	iii
図 2	昭和56年度確認及び本調査範囲	v
図 3	昭和57年度確認及び本調査範囲	vi
図 4	小グリット配置図	vii
図 5	標準層序	3
図 6	遺跡土層断面図	4
図 7	ブロック配置図	7
図 8	第6ブロック遺物出土状況図	9
図 9	第7ブロック遺物出土状況図	12
図10	第7ブロック出土遺物実測図	13
図11	第8ブロック出土遺物実測図	14
図12	第8ブロック遺物出土状況図	15
図13	第10ブロック遺物出土状況図	19
図14	第10ブロック出土遺物実測図(1)	20
図15	第10ブロック出土遺物実測図(2)	21
図16	第10ブロック出土遺物実測図(3)	22
図17	第12ブロック出土遺物実測図	24
図18	第12ブロック遺物出土状況図	25
図19	第14ブロック遺物出土状況図	27
図20	第14ブロック出土遺物実測図	28
図21	第15ブロック出土遺物実測図	30
図22	第15ブロック遺物出土状況図	31
図23	第16ブロック遺物出土状況図	35
図24	第16ブロック出土遺物実測図(1)	37
図25	第16ブロック出土遺物実測図(2)	38
図26	第22ブロック遺物出土状況図	39
図27	第22ブロック出土遺物実測図	39
図28	第23ブロック遺物出土状況図	41
図29	第23ブロック出土遺物実測図(1)	44
図30	第23ブロック出土遺物実測図(2)	45

図31	第26ブロック遺物出土状況図	48
図32	第26ブロック出土遺物実測図	49
図33	第28ブロック遺物出土状況図	51
図34	第28ブロック出土遺物実測図(1)	52
図35	第28ブロック出土遺物実測図(2)	53
図36	第30ブロック遺物出土状況図	56
図37	第30ブロック出土遺物実測図	57
図38	第31ブロック遺物出土状況図	58
図39	第31ブロック出土遺物実測図	59
図40	第33ブロック遺物出土状況図	61
図41	第33ブロック出土遺物実測図	61
図42	第18ブロック遺物出土状況図	64
図43	第18ブロック出土遺物実測図	66
図44	第24ブロック遺物出土状況図	68
図45	第24ブロック出土遺物実測図	70
図46	第25ブロック遺物出土状況図	72
図47	第25ブロック出土遺物実測図(1)	73
図48	第25ブロック出土遺物実測図(2)	74
図49	第25ブロック出土遺物実測図(3)	75
図50	第27ブロック遺物出土状況図	78
図51	第27ブロック出土遺物実測図	79
図52	第3ブロック遺物出土状況図	82
図53	第3ブロック出土遺物実測図	83
図54	第4ブロック遺物出土状況図	85
図55	第4ブロック出土遺物実測図	87
図56	第5ブロック遺物出土状況図	90
図57	第5ブロック出土遺物実測図	91
図58	第13ブロック遺物出土状況図	93
図59	第13ブロック出土遺物実測図	94
図60	第17ブロック遺物出土状況図	95
図61	第17ブロック出土遺物実測図	96
図62	第29ブロック遺物出土状況図	99
図63	第29ブロック出土遺物実測図	100

図64	第32ブロック遺物出土状況図	102
図65	第32ブロック出土遺物実測図(1)	103
図66	第32ブロック出土遺物実測図(2)	104
図67	第39ブロック遺物出土状況図	107
図68	第39ブロック出土遺物実測図(1)	109
図69	第39ブロック出土遺物実測図(2)	110
図70	第40ブロック遺物出土状況図	112
図71	第40ブロック出土遺物実測図	113
図72	第21ブロック遺物出土状況図	115
図73	第21ブロック出土遺物実測図	118
図74	石器群の変遷(1)	121
図75	石器群の変遷(2)	122
図76	縄文時代早期遺構分布状況図	132
図77	P 009・010号遺構実測図	133
図78	P 009号遺構出土遺物実測図	134
図79	P 010号遺構出土遺物実測図	135
図80	P 011号遺構実測図	136
図81	P 012号遺構実測図	136
図82	P 013号遺構実測図	137
図83	P 014・015号遺構実測図	138
図84	P 014号遺構出土遺物実測図	138
図85	P 016号遺構実測図	139
図86	P 017号遺構実測図	139
図87	P 017号遺構出土遺物実測図	140
図88	P 019・020号遺構実測図	141
図89	P 019号遺構出土遺物実測図	142
図90	P 020号遺構出土遺物実測図	143
図91	P 022号遺構実測図	146
図92	P 022号遺構出土遺物実測図	147
図93	P 023号遺構実測図	147
図94	P 090号遺構実測図	148
図95	縄文時代中期遺構分布状況図	149
図96	P 003号遺構実測図	149

図97	P 003号遺構炉跡実測図	150
図98	P 003号遺構出土遺物実測図	150
図99	D 028号遺構実測図	151
図100	D 028号遺構出土遺物実測図	152
図101	P 008号遺構実測図	153
図102	P 025号遺構実測図	153
図103	P 025号遺構出土遺物実測図	154
図104	縄文時代後期遺構分布状況図	155
図105	D 037号遺構実測図	156
図106	D 037号遺構炉跡実測図	156
図107	D 037号遺構出土遺物実測図	157
図108	D 038号遺構炉跡実測図	157
図109	D 038号遺構実測図	158
図110	D 039号遺構実測図	159
図111	D 039号遺構出土遺物実測図	159
図112	第I群土器実測図	161
図113	第II群土器実測図	163
図114	第III群土器実測図(1)	165
図115	第III群土器実測図(2)	166
図116	第IV群土器実測図(1)	167
図117	第IV群土器実測図(2)	168
図118	第V群土器実測図(1)	169
図119	第V群土器実測図(2)	170
図120	第VI群土器実測図(1)	171
図121	第VI群土器実測図(2)	172
図122	第VII群土器実測図	173
図123	第VIII群土器実測図	174
図124	第IX群土器実測図	175
図125	土製品実測図(1)	176
図126	土製品実測図(2)	177
図127	石器実測図(1)	182
図128	石器実測図(2)	183
図129	石器実測図(3)	184

図130	石器実測図(4) .....	185
図131	石器実測図(5) .....	186
図132	土器片鑑計測値分布図.....	193
図133	弥生・古墳時代第I群遺構分布状況図.....	200
図134	D008号遺構実測図 .....	201
図135	D008号遺構炉跡実測図 .....	202
図136	D008号遺構出土遺物実測図 .....	203
図137	D014号遺構実測図 .....	204
図138	D014号遺構炉跡実測図 .....	205
図139	D014号遺構出土遺物実測図 .....	205
図140	D015号遺構実測図 .....	206
図141	D015号遺構炉跡実測図 .....	206
図142	D016号遺構実測図 .....	207
図143	D016号遺構炉跡実測図 .....	209
図144	D016号遺構出土遺物実測図 .....	209
図145	D017号遺構実測図 .....	210
図146	D017号遺構炉跡実測図 .....	211
図147	D017号遺構出土遺物実測図 .....	211
図148	D018号遺構実測図 .....	212
図149	D018号遺構炉跡実測図 .....	213
図150	D018号遺構出土遺物実測図 .....	213
図151	D019号遺構実測図 .....	215
図152	D019号遺構床下状況図 .....	216
図153	D019号遺構炉跡実測図 .....	217
図154	D019号遺構出土遺物実測図 .....	217
図155	D021号遺構炉跡実測図 .....	218
図156	D021号遺構出土遺物実測図 .....	218
図157	D021号遺構実測図 .....	219
図158	D023号遺構実測図 .....	220
図159	D023号遺構炉跡実測図 .....	220
図160	D023号遺構出土遺物実測図 .....	221
図161	D024号遺構実測図 .....	222
図162	D024号遺構炉跡実測図 .....	222

図163	D027号遺構実測図	223
図164	D027号遺構炉跡実測図	223
図165	D027号遺構出土遺物実測図	224
図166	D034号遺構実測図	224
図167	P004号遺構実測図	225
図168	P004号遺構出土遺物実測図	225
図169	弥生・古墳時代第II群遺構分布状況図	226
図170	D001号遺構実測図	227
図171	D001号遺構炉跡実測図	228
図172	D001号遺構出土遺物実測図	229
図173	D002号遺構実測図	230
図174	D002号遺構炉跡実測図	231
図175	D002号遺構出土遺物実測図	231
図176	D003号遺構実測図	232
図177	D003号遺構炉跡実測図	233
図178	D003号遺構出土遺物実測図	233
図179	D004号遺構実測図	234
図180	D004号遺構炉跡実測図	234
図181	D004号遺構出土遺物実測図	235
図182	D005号遺構実測図	236
図183	D005号遺構炉跡実測図	237
図184	D005号遺構出土遺物実測図	237
図185	D006号遺構実測図	238
図186	D006号遺構炉跡実測図	239
図187	D006号遺構出土遺物実測図	240
図188	D007号遺構実測図	241
図189	D007号遺構炉跡実測図	242
図190	D007号遺構出土遺物実測図	242
図191	D009号遺構実測図	243
図192	D009号遺構炉跡実測図	244
図193	D009号遺構出土遺物実測図	244
図194	D010号遺構実測図	245
図195	D010号遺構炉跡実測図	246

图196 D010号遗构出土遗物实测图	246
图197 D011号遗构实测图	247
图198 D011号遗构炉迹实测图	248
图199 D011号遗构出土遗物实测图	248
图200 D012号遗构炉迹实测图	248
图201 D012号遗构实测图	249
图202 D013号遗构实测图	250
图203 D013号遗构炉迹实测图	250
图204 D013号遗构出土遗物实测图	251
图205 D020号遗构炉迹实测图	252
图206 D020号遗构实测图	253
图207 D020号遗构出土遗物实测图	253
图208 D022号遗构实测图	254
图209 D022号遗构炉迹实测图	255
图210 D022号遗构出土遗物实测图	255
图211 D025A号遗构实测图	256
图212 D025A号遗构炉迹实测图	256
图213 D025A号遗构出土遗物实测图	257
图214 D025B号遗构实测图	258
图215 D026号遗构实测图	259
图216 D026号遗构炉迹实测图	259
图217 D026号遗构出土遗物实测图	260
图218 D029号遗构炉迹实测图	261
图219 D029号遗构实测图	262
图220 D029号遗构炭化物出土状况图	263
图221 D029号遗构出土遗物实测图	263
图222 D031号遗构实测图	264
图223 D033号遗构实测图	265
图224 D035号遗构炉迹实测图	265
图225 D035号遗构实测图	266
图226 D035号遗构出土遗物实测图	266
图227 D036号遗构实测图	267
图228 D036号遗构炉迹实测图	268

図229	D036号遺構出土遺物実測図	268
図230	MB001号遺構実測図	269
図231	MB001号遺構主体部遺物出土状況図	271
図232	MB001号遺構出土遺物実測図(1)	272
図233	MB001号遺構出土遺物実測図(2)	273
図234	MB002号遺構実測図	276
図235	MB002号遺構出土遺物実測図	277
図236	MB003号遺構実測図	278
図237	MB003号遺構出土遺物実測図	278
図238	歴史時代遺構分布状況図	287
図239	D030号遺構実測図	288
図240	D030号遺構カマド実測図	289
図241	D030号遺構出土遺物実測図	289
図242	D032号遺構実測図	290
図243	D032号遺構カマド実測図	290
図244	D032号遺構出土遺物実測図	291
図245	H001号遺構実測図	292
図A	遺構配置図	附図

## 表 目 次

表1	第6ブロック出土石器組成表	8
表2	第6ブロック母岩別資料石器組成表	8
表3	第7ブロック出土石器組成表	11
表4	第7ブロック出土石器計測表	11
表5	第7ブロック母岩別資料石器組成表	13
表6	第8ブロック出土石器組成表	14
表7	第8ブロック出土石器計測表	17
表8	第8ブロック母岩別資料石器組成表	17
表9	第8ブロック接合資料一覧表	17
表10	第10ブロック出土石器組成表	18
表11	第10ブロック母岩別資料石器組成表	22
表12	第10ブロック出土石器計測表	23
表13	第10ブロック接合資料一覧表	23
表14	第12ブロック出土石器組成表	24
表15	第12ブロック出土石器計測表	26
表16	第12ブロック母岩別資料石器組成表	26
表17	第14ブロック出土石器組成表	26
表18	第14ブロック出土石器計測表	28
表19	第14ブロック母岩別資料石器組成表	28
表20	第15ブロック出土石器組成表	29
表21	第15ブロック出土石器計測表	29
表22	第15ブロック母岩別資料石器組成表	30
表23	第16ブロック出土石器組成表	33
表24	第16ブロック出土石器計測表	33
表25	第16ブロック母岩別資料石器組成表	34
表26	第16ブロック接合資料一覧表	38
表27	第22ブロック出土石器組成表	40
表28	第22ブロック母岩別資料石器組成表	40
表29	第22ブロック接合資料一覧表	40
表30	第23ブロック出土石器組成表	43

表31	第23ブロック出土石器計測表	43
表32	第23ブロック母岩別資料石器組成表	46
表33	第23ブロック接合資料一覧表	46
表34	第26ブロック出土石器組成表	47
表35	第26ブロック出土石器計測表	47
表36	第26ブロック母岩別資料石器組成表	50
表37	第26ブロック接合資料一覧表	50
表38	第28ブロック出土石器組成表	50
表39	第28ブロック母岩別資料石器組成表	54
表40	第28ブロック接合資料一覧表	54
表41	第30ブロック出土石器組成表	55
表42	第30ブロック出土石器計測表	55
表43	第30ブロック母岩別資料石器組成表	57
表44	第30ブロック接合資料一覧表	57
表45	第31ブロック出土石器組成表	58
表46	第31ブロック出土石器計測表	60
表47	第31ブロック母岩別資料石器組成表	60
表48	第31ブロック接合資料一覧表	60
表49	第33ブロック出土石器組成表	62
表50	第33ブロック出土石器計測表	62
表51	第33ブロック母岩別資料石器組成表	62
表52	第33ブロック接合資料一覧表	62
表53	第18ブロック出土石器組成表	65
表54	第18ブロック出土石器計測表	65
表55	第18ブロック母岩別資料石器組成表	67
表56	第24ブロック出土石器組成表	69
表57	第24ブロック出土石器計測表	69
表58	第24ブロック接合資料一覧表	70
表59	第24ブロック母岩別資料石器組成表	71
表60	第25ブロック出土石器組成表	71
表61	第25ブロック出土石器計測表	76
表62	第25ブロック接合資料一覧表	76
表63	第25ブロック母岩別資料石器組成表	77

表64	第27ブロック出土石器組成表	79
表65	第27ブロック出土石器計測表	80
表66	第27ブロック母岩別資料石器組成表	80
表67	第27ブロック接合資料一覧表	80
表68	第3ブロック出土石器組成表	83
表69	第3ブロック出土石器計測表	83
表70	第3ブロック母岩別資料石器組成表	84
表71	第3ブロック接合資料一覧表	84
表72	第4ブロック出土石器組成表	88
表73	第4ブロック出土石器計測表	88
表74	第4ブロック接合資料一覧表	88
表75	第4ブロック母岩別資料石器組成表	89
表76	第5ブロック出土石器組成表	89
表77	第5ブロック出土石器計測表	91
表78	第5ブロック母岩別資料石器組成表	91
表79	第5ブロック接合資料一覧表	92
表80	第13ブロック出土石器組成表	92
表81	第13ブロック出土石器計測表	92
表82	第13ブロック母岩別資料石器組成表	94
表83	第17ブロック出土石器組成表	97
表84	第17ブロック出土石器計測表	97
表85	第17ブロック母岩別資料石器組成表	98
表86	第17ブロック接合資料一覧表	98
表87	第29ブロック出土石器計測表	99
表88	第29ブロック出土石器組成表	100
表89	第29ブロック母岩別資料石器組成表	101
表90	第32ブロック出土石器組成表	101
表91	第32ブロック出土石器計測表	105
表92	第32ブロック母岩別資料石器組成表	105
表93	第32ブロック接合資料一覧表	106
表94	第39ブロック出土石器組成表	108
表95	第39ブロック出土石器計測表	108
表96	第39ブロック接合資料一覧表	108

表97 第39ブロック母岩別資料石器組成表	111
表98 第40ブロック出土石器計測表	111
表99 第40ブロック母岩別資料石器組成表	112
表100 第40ブロック出土石器組成表	113
表101 第21ブロック出土石器組成表	117
表102 第21ブロック出土石器計測表	117
表103 第21ブロック母岩別資料石器組成表	119
表104 第21ブロック接合資料一覧表	119
表105 土器片錘計測表	177
表106 石器計測表	181
表107 M B 001号遺構主体部出土ガラス製玉類計測表	274
表108 東日本における鉄釧の類例	281

## 図版目次

- 図版 1 遺跡  
ヲサル山遺跡とその周辺
- 図版 2 遺跡  
1. 昭和56年度調査区全景（北東より）  
2. 昭和57年度調査区全景（南東より）
- 図版 3 旧石器時代 第1文化層遺構  
1. ローム層土層断面  
2. 第6ブロック石器出土状況
- 図版 4 旧石器時代 第1文化層遺構  
1. 第8ブロック石器出土状況  
2. 第10ブロック石器出土状況  
3. 第12ブロック石器出土状況
- 図版 5 旧石器時代 第1文化層遺構  
1. 第14ブロック石器出土状況  
2. 第15ブロック石器出土状況  
3. 第22ブロック石器出土状況
- 図版 6 旧石器時代 第1文化層遺構  
1. 第23ブロック石器出土状況  
2. 第26ブロック石器出土状況  
3. 第28ブロック石器出土状況
- 図版 7 旧石器時代 第1文化層遺構  
1. 第30ブロック石器出土状況  
2. 第31ブロック石器出土状況  
3. 第33ブロック石器出土状況
- 図版 8 旧石器時代  
第7、8、10、12、14~16ブロック出土石器群
- 図版 9 旧石器時代  
1. 第16ブロック出土石器  
2. 第23、30、31ブロック出土石器群
- 図版10 旧石器時代 第2文化層遺構

1. 第18ブロック石器出土状況
2. 第24ブロック石器出土状況
3. 第25ブロック石器出土状況

図版11 旧石器時代 第2文化層遺構、遺物

1. 第22ブロック石器出土状況
2. 第18、24、25、27ブロック出土石器群

図版12 旧石器時代 第2文化層遺物、第3文化層遺構

1. 第18、25ブロック出土石器群
2. 第25ブロック出土石器
3. 第3ブロック石器出土状況

図版13 旧石器時代 第3文化層遺構

1. 第4ブロック石器出土状況
2. 第5ブロック石器出土状況
3. 第13ブロック石器出土状況

図版14 旧石器時代 第3文化層遺構

1. 第17ブロック石器出土状況
2. 第29ブロック石器出土状況
3. 第32ブロック石器出土状況

図版15 旧石器時代 第3文化層遺構、遺物

1. 第39ブロック石器出土状況
2. 第40ブロック石器出土状況
3. 第32ブロック出土石器

図版16 旧石器時代 第3文化層遺物

第3～5、13、17、29、32、39、40ブロック出土石器群

図版17 旧石器時代 第3文化層遺物、第4文化層遺構、遺物

1. 第40ブロック出土石器群
2. 第21ブロック石器出土状況
3. 第21ブロック出土石器群

図版18 繩文時代 早期遺構

1. P009号遺構全景
2. P009号遺構遺物出土状況
3. P010号遺構全景

図版19 繩文時代 早期遺構

1. P011号遺構全景
2. P012号遺構全景
3. P014・015号遺構全景

図版20 繩文時代 早期遺構

1. P017号遺構全景
2. P019号遺構全景
3. P020号遺構全景

図版21 繩文時代 早期遺物

1. P022号遺構出土状況
2. P023号遺構全景
3. P090号遺構全景

図版22 繩文時代 早期遺物

1. P009・010号遺構出土遺物
2. P019・020号遺構出土遺物

図版23 繩文時代 早期遺物、中期遺構

1. P022号遺構出土遺物
2. P003号遺構全景
3. P008号遺構全景

図版24 繩文時代 中期遺構、遺物

1. D028号遺構全景
2. P025号遺構全景
3. P025号遺構出土遺物

図版25 繩文時代 後期遺構

1. D037号遺構全景
2. D037号遺構炉検出状況
3. D037号遺構遺物出土状況

図版26 繩文時代 後期遺構、遺物

1. D038号遺構全景
2. D039号遺構全景
3. D037号遺構出土遺物

図版27 繩文時代 包含層遺物

1. 第I群土器
2. 第II群土器

図版28 繩文時代 包含層遺物

第III群土器

図版29 繩文時代 包含層遺物

1. 第III群土器遺物出土狀況

2. 第III群土器

3. 第IV群土器

図版30 繩文時代 包含層遺物

第V群土器

図版31 繩文時代 包含層遺物

第VI群土器

図版32 繩文時代 包含層遺構、遺物

1. 第VI群土器

2. 繩文時代包含層遺物出土狀況

3. 第VII群土器

図版33 繩文時代 包岩層遺物

1. 第VII群土器

2. 第IX群土器

3. 石製品

図版34 繩文時代 包含層遺物

土製品

図版35 繩文時代 包含層遺物

1. 土製品

2. 石製品

図版36 繩文時代 包含層遺物

石製品

図版37 弥生・古墳時代 第I群遺構

1. D008号遺構全景

2. D014号遺構全景

3. D015号遺構全景

図版38 弥生・古墳時代 第I群遺構

1. D016号遺構全景

2. D017号遺構全景

3. D018号遺構全景

図版39 弥生・古墳時代 第I群遺構

1. D019号遺構全景
2. D019号遺構内土壤検出状況
3. D021号遺構全景

図版40 弥生・古墳時代 第I群遺構

1. D022・023号遺構全景
2. D024号遺構全景
3. D027号遺構全景

図版41 弥生・古墳時代 第I群遺構

1. D034号遺構全景
2. P004号遺構全景
3. P004号遺構遺物出土状況

図版42 弥生・古墳時代 第I群遺構

図版43 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. D001号遺構全景
2. D002号遺構全景
3. D003号遺構全景

図版44 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. D004号遺構全景
2. D005号遺構全景
3. D006号遺構全景

図版45 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. D006号遺構遺物出土状況
2. D007号遺構全景
3. D007号遺構柱穴掘形検出状況

図版46 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. D009号遺構全景
2. D009号遺構遺物出土状況
3. D010号遺構全景

図版47 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. D011号遺構全景
2. D012号遺構全景
3. D013号遺構全景

図版48 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. D013号遺構遺物出土状況
2. D013号遺構遺物出土状況
3. D020号遺構全景

図版49 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. D025A号遺構全景
2. D025B号遺構全景
3. D026号遺構全景

図版50 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. D026号遺構遺物出土状況
2. D029号遺構全景
3. D031号遺構全景

図版51 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. D033号遺構全景
2. D035号遺構全景
3. D036号遺構全景

図版52 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. MB001・002号遺構分布状況
2. MB001号遺構全景
3. MB001号遺構東溝検出状況
4. MB001号遺構西溝検出状況

図版53 弥生・古墳時代 第II群遺構

MB001号遺構遺物出土状況

図版54 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. MB001号遺構東溝土層堆積状況
2. MB001号遺構主体部全景
3. MB001号遺構主体部遺物出土状況

図版55 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. MB002号遺構全景
2. MB002号遺構西溝内土壤検出状況
3. MB002号遺構東溝検出状況
4. MB002号遺構西溝検出状況

図版56 弥生・古墳時代 第II群遺構

1. MB 002号遺構遺物出土狀況
  2. MB 002号遺構東溝土層堆積狀況
  3. MB 003号遺構全景
- 図版57 弥生・古墳時代 第II群遺物
- 図版58 弥生・古墳時代 第II群遺物
- 図版59 弥生・古墳時代 第II群遺物
- 図版60 弥生・古墳時代 第II群遺物
- 図版61 弥生・古墳時代 第II群遺物
- 図版62 弥生・古墳時代 第II群遺物
- 図版63 弥生・古墳時代 第II群遺物
- 図版64 弥生・古墳時代 第II群遺物
- 図版65 歴史時代 遺構
  1. D030号遺構全景
  2. D030号遺構土壤検出状況
  3. D032号遺構全景
- 図版66 歴史時代 遺構・遺物
  2. H001号遺構全景
  - D032号遺構出土遺物

# 序 章

## 第1節 発掘調査に至る経過

萱田地区における埋蔵文化財の発掘調査は、昭和52年度の権現後遺跡に始まり、一部用地上の問題があるため調査が未着手となっている部分があるものの、全体として順調な進捗を呈していると言って良い。

昭和53年度後半期に至って、用地上の問題も解決する方向に向い、当初において計画された萱田地区の全体的な遺構確認調査も広範囲にわたり実施できる運びとなった。

昭和53年度後半期の11月6日から翌昭和54年3月31日にわたり実施した北海道、坊山、井戸向地域の20haにおよぶ面的な遺構確認調査、さらに昭和54年度の4月2日から12月25日にわたり実施した坊山、白幡前地域の16haにおよぶ遺構確認調査により、萱田地区の遺跡群の全容がほぼ把握されるに至った。

このような状況の中で、ヲサル山遺跡については土盛部分や山林部分の支障物件が台地上に存在するために発掘調査が長い期間見送られてきた。昭和52年度には権現後遺跡に包括された中で調査を実施する予定であったが、前述した支障物件のため調査対象から除外することとなつた。

昭和54年度には3.92haの表土層の除去作業を実施し、翌年度に発掘調査を実施可能な状況になるよう計画したが、土盛部分と山林部分の撤去が諸般の事情でできなくなったため、表土層の除去作業は実施できなくなった。したがって、翌年度の発掘調査の計画も実質的に見送らざるを得ない状況に至ってしまった。

このような状況の中で、権現後遺跡は一部未調査区域を残すものほぼ全面的な発掘調査は終了しており、もはや同一台地上に位置する遺跡であるとはいえ、権現後遺跡とは分離して考えざるを得ない状況に至ってしまった。そこで権現後遺跡西側に位置するヲサル山地域をヲサル山遺跡として独立させ調査を実施することとなつた。

昭和55年度に至って住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部によって土盛部分の撤出作業、山林部分の樹木伐採作業が実施され、発掘調査可能な状況になった。そこで、千葉県教育委員会、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、千葉県文化財センターの三者による現地踏査、ならびに協議が行われた。

その結果、4.2haの内台地北側部分の2.6haについて昭和56年度に発掘調査を実施する計画が策定され、残る1.6haについては昭和57年度以後に実施することとなつた。

この実施計画に基づき昭和56年度の委託契約が締結され、昭和56年6月16日から本格的な発

掘調査を実施することとなった。発掘調査に先だって実施した表土層の除去作業はヲサル山遺跡が所在する台地が島状に造成工事から取り残された状況を呈しているため、排土の搬出作業はきわめて難航した。また、実際の発掘調査においても、土盛の土圧によって土壤がきわめて硬くしまっており支障を期した面もあり、恵まれた条件下での調査ではなかった。発掘調査は、昭和57年度に継続して実施し、昭和58年1月13日にヲサル山遺跡の全ての調査が終了した。

## 第2節 遺跡の位置と環境

ヲサル山遺跡は千葉県八千代市大和田新田字ヲサル山608番地他に所在する（図1）。

遺跡は関東地方南東部に広大に横たわる下総台地の一画に位置している。下総台地は標高20～30mの洪積台地で、地盤の隆起と海面の底下という作用によって台地化したものである。したがって、段丘面は下総上位面、下総下位面、千葉第1段丘、千葉第2段丘に細分され、当遺跡は下総下位面に相当する台地上に所在している。<sup>註1</sup>

八千代市は、印旛沼の南西部に市域が位置しており、印旛沼水系の支谷が複雑に洪積台地に入り組んだ地形を呈している。市のほぼ中央部には印旛沼に続く新川（旧平戸川）が大小の支谷を形成して流れれるが、支谷の中で最も大規模な須久茂谷津に開析された舌状台地の南半分に遺跡は位置している。

標高22～25mを計る平坦な台地で南側は新川方面より入り込む須久茂谷津、西側は北西方面に入り込む須久茂谷津の支谷によって独立している。台地の東側は南側に開口する小規模な支谷を界に本遺跡と区分した旧石器時代から歴史時代の長期間にわたって集落が形成された権現後遺跡が位置している。台地は北側に統いており、桑納川に開析される台地となる。

台地北側には縄文時代の遺跡群が、また、須久茂谷津を挟んで北海道遺跡、坊山遺跡、さらには井戸向遺跡、白幡前遺跡が所在している。遺跡は、約4ha有する。平坦な部分に立地しているが、南側及び西側は須久茂谷津が入り込むため急斜面となっている。

遺跡の名称は字名を使用するもので、遺跡内すべてが共通してヲサル山の字名をもつ。

ヲサル山の地名の由来については、明らかに把握することはできないが、市内には数多くの庚申塔群が分布しており遺跡に最も近い所でも萱田の庚申塔が位置し、庚申信仰が盛んであったことを物語っており、庚申信仰との関係において成立した地名であろうか。あるいは猿の棲息が書て認められたことに由来するものであろうか。

### 註

1 杉原重夫 「地形の発達」『市川市史』第1巻 昭和46年



図1 フサル山遺跡の位置と周辺地形図

### 第3節 調査の経過

#### 1. 調査経過の概略（図2、3）

ヲサル山遺跡が位置する地域は、董田地区における発掘調査実施の初年度であった昭和52年度において、権現後遺跡の一部として発掘調査を計画していたが、年度後半に至っても用地の確保ができなかったため、昭和52年度事業より除外する措置がとられた。さらに昭和54年度に至り、ヲサル山地域の土盛排除、樹木伐採作業等の計画を立案し、本調査へ向けて動き出したが、諸般の事由で実施できなくなり、本調査開始の時期について見通しが立たない状況に至ってしまった。

このような状況の中で権現後遺跡の調査は面的な調査も終了に近く、ヲサル山地域については権現後遺跡から切り離し、ヲサル山遺跡として独立させて取り扱うこととなった。幸いに同一台地に位置するとはいえ、小支谷により両遺跡が区分できるという地形的な特徴を有していることと、権現後遺跡の両端部分の遺構の分布状況が希薄になる状況を示していたため、ヲサル山地域には権現後遺跡とは様相の異なる集落が位置していることが判断できた。

昭和55年度に至って山林の樹木伐採、土盛部分の排除が住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部によって実施され漸く昭和56年度からの発掘調査の目安がついた。ヲサル山遺跡におけるこの間の経過については権現後遺跡の報告書に詳細を述べているので参照いただければ幸いである。

##### (1) 昭和56年度事業

昭和56年度の発掘調査は、4.2 ha の内、台地北側部分の2.6 ha について実施した。この部分は土盛部分と、一部工場跡地という関係で遺構の保存状況が心配された。この心配は遺構確認調査時に的中してしまった。山林を伐採した上に土盛を施したため、表土層中には腐食した樹林が混入しており、さらに土圧で固く締っている状況であった。遺構調査時においても覆土が固く調査が思うように進捗しなかった。しかしながら、10月2日から開始し、昭和57年3月27日の間ににおいて終了することが出来た。

昭和56年度の担当職員は下記のとおりである。なお○印は直接現場担当者、◎印は直接整理担当者である。

調査部長 白石竹雄

調査部長補佐 中山吉秀 (57. 3. 31まで)

班長 阪田正一

調査研究員 萩野谷悟

調査研究員 橋本勝雄

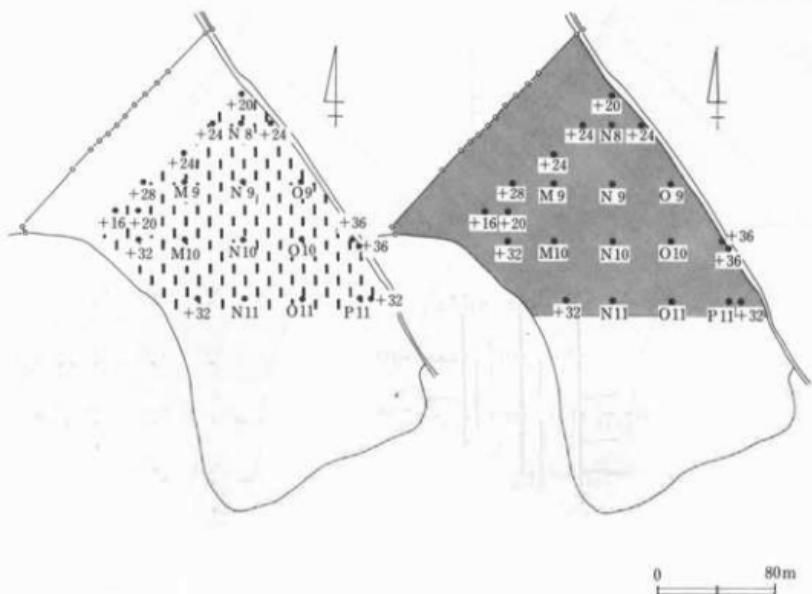


図2 昭和56年度確認及び本調査範囲

調査研究員 ○今 泉 潔 (57. 3. 31まで)

調査研究員 ○沢 野 弘 (57. 3. 31まで)

調査研究員 ○藤 岡 孝 司

調査研究員 倉 内 郁 子  
(旧姓 水野)

## (2) 昭和57年度事業

昭和57年度の発掘調査は、昭和56年度に続く調査で、台地南側の1.6 haについて実施した。この部分は山林部分だったので遺構の保存状況について心配するところがなかった。確認調査の段階で縄文土器や石器などを検出し、縄文時代の遺構が所在することが推測できたが、表土層を除去した段階ではその所在を明瞭に把握することができなかった。発掘調査は昭和57年7月16日から開始し、昭和58年1月13日で終了した。

昭和57年度の担当職員は下記のとおりである。

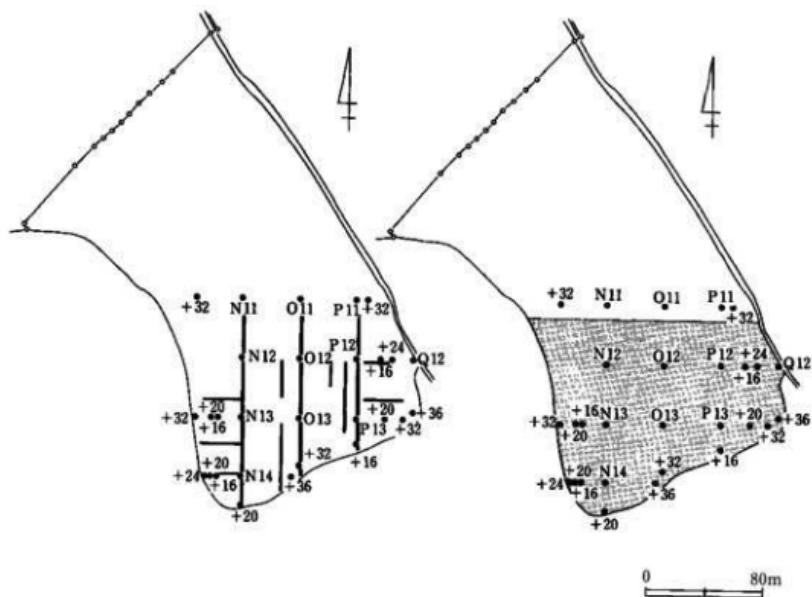


図3 昭和57年度確認及び本調査範囲

調査部長 白石竹雄

調査部長補佐 天野 努 (58. 3. 31まで)

班長 阪田正一

調査研究員 ○加藤修司 (58. 3. 31まで)

調査研究員 橋本勝雄

調査研究員 金丸誠

調査研究員 藤岡孝司

調査研究員 倉内郁子 (58. 3. 31まで)

(旧姓 水野)

調査研究員 ○宮城孝之 (58. 3. 31まで)

### (3) 昭和59年度事業

ヲサル山遺跡の発掘調査は、昭和57年度をもってすべて終了しており、萱田地区内において唯一発掘調査が完結した遺跡である。昭和58年度は北海道遺跡の原稿執筆に至るまでの作業を計画した関係で、昭和59年度に、報告書刊行に向けた作業を実施する計画を立てた。

水洗・注記の基礎整理作業は、発掘調査に併行して昭和56・57年度に終了しているため、遺物の復元作業から実測作業、図面・写真についての整理作業を行い、これらを検討、分析して、原稿執筆まで実施した。

整理作業にあたっては、すでに報告した権現後遺跡等と基本的には同一の方法とした。

昭和59年度の担当職員は下記のとおりである。

調査部長 鈴木道之助

調査部長補佐 岡川宏道

班長 ○阪田正一 (59. 3. 31まで)

調査研究員 奥田正彦

調査研究員 ○藤岡孝司

## 2. 調査の方法 (図4)

調査に先立って、発掘調査区全域にわたり公共座標(IX系)をもってグリッドを設定した。これは、遺跡全体の絶対的な平面的位置づけを確定するとともに、開発等による後世の地形的変動に対処するための処置であり、如何なる状況下においても遺跡及び遺跡内の遺構の位置を平面的、立体的に復元し得ることを目的としたものである。したがって、将来隣接地において埋蔵文化財調査を実施する際にも、位置関係が正確に把握できるものである。

ヲサル山遺跡は権現後遺跡と同一台地上に位置するため、これと基点を同一とした。したがって、北海道遺跡とは異なっている。

権現後遺跡北端に位置する三角点P-2の示す座標X=29,122,227、座標Y=25,086,545を基点にX軸、Y軸をそれぞれ40mの間隔で区切り、方眼杭を設定した。この40m×40mを大グリッドとし、X軸方向をアルファベット、Y軸方向を数字で表示した。40m間隔で区切った大グリッドはさらに4m間隔に分割し、杭を設定した。この杭はX軸方向に1の位となる数字0~9を、Y軸方向に10の位となる数字0~90をもって分配し、4m×4mの小グリッドは北西隅の杭を基準として命名した。したがって、大グリッドがA-1地区の場合、小グリッドはA-1-00~99となり、例えば、この大グリッドの北西隅がA-1-00、南西隅がA-1-90、北東隅がA-1-09、南東隅がA-1-99という表示になる。

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10									19
20									29
30									39
40									49
50									59
60									69
70									79
80									89
90	91	92	93	94	95	96	97	98	99



図4 小グリッド配置図

ヲサル山遺跡はX軸方向がL～Q、Y軸方向が8～14の大グリットを設定した。

### (1) 遺構関係

遺構は、竪穴住居跡、方形周溝墓、土壙、溝状遺構があり、調査方法は竪穴住居跡に準ずる方法をとった。基本的に権現後遺跡、北海道遺跡と同一の方法を用いている。

竪穴住居跡は四分割法に基づき、土層観察用のベルトを十字に設定し、一早く土層の堆積状況を把握した後、各分割部分を層位的に掘り進めた。この際、調査段階で出土した遺物はすべて記録に留めることを原則とし、平面分布は図面上（1／20）に、出土層位及び出土レベルは遺物台帳に記載し、記録した。この全点ドッティングを原則とした理由は、「八千代市権現後遺跡」の報文中に詳しい。

床面及び壁面を検出した後、土層観察用ベルトにより十字に土層を実測（1／20）し、ベルトを除去する。その後内部施設を精査し、遺構平面図（1／20）、エレベーション図（1／20）を作成した。

炉・カマドについては別途調査を実施し、土層断面図及び平面図の微細図（1／10）を作成した。

写真撮影は、遺構の全景、炉・カマド等内部施設の検出状況を中心とし、遺物出土状況のほか必要に応じて撮影を実施した。また、全遺構の調査終了後、空中写真の撮影を実施した。撮影に際して使用したフィルムは、4×5判モノクロネガフィルム、35%判モノクロネガフィルム、同じく35%判カラースライドフィルムである。

また写真撮影終了後、床下の調査を実施し、貼床の状況あるいは掘りかたの状況の把握に努めた。

なお、遺構調査にあたって略号を用いた。竪穴住居跡はD、方形周溝墓はMB、土壙はP、溝はM、掘立柱建物跡はH、をもって表示した。現場調査あるいは整理の進捗にしたがって、調査前に命名した略号とは性格の異なる遺構も若干出てきたが、略号及び遺構番号の変異は後に混乱を来たす要因となるので、ここでは調査時に使用した略号及び遺構番号をそのまま使用した。

### (2) 旧石器関係

まず、遺跡全体に均一に確認グリットを設定し、武藏野ローム層上面に至るまでの遺物包含層の有無の確認を実施した。

本調査はこの確認調査の成果に基づき実施した。調査に際しては平面的成果のみならず、層位的成果も充分に考慮したものとし、遺物の出土した層位を中心として、四方に放射状に調査を進展させ、ブロックの広がりの把握に努めた。これによって、ブロックはIII～IV層に至るま

で確認され、平面的には台地縁辺部に集中する傾向を認めることができた。

出土遺物は、平面分布を図面上に記録（1／20）すると同時に、出土層位、出土レベルを遺物台帳に記載し、その後さらに掘り進めて遺物の有無の確認に努めた。また、各ブロックの出土状況を的確に把握するため、必要に応じて土層断面図を作成した（1／20）。

ブロックの全景写真は、それぞれ状況に応じて撮影した。

また、遺跡全体のローム層堆積状況、すなわち旧石器時代の地形を把握するために、ブロック調査とは別に、各要所の土層断面図を作成した。なお、ブロックを表示する略号としてSを使用し、調査段階においてすでに各ブロックの認定をすると同時にS番号を付けた。これは調査時における遺物の記録等を簡略化するための処置であり、平面的な広がり、出土層位、石材等を考慮して断定したものである。しかしながら、整理段階において綿密な検討を加えた結果、ブロックとしては認め難いもの、あるいは1ブロックが分離し、また分離したものが他のブロックに統合するものがあることが判明した。

整理の方法については、旧石器関係、遺構関係のいずれにおいても権現後遺跡、北海道遺跡に準じたものであり、先に報告した『八千代市権現後遺跡』に詳しく記載しているところである。

### 3. 日誌抄

#### 昭和56年度の調査

ヲサル山遺跡については、土盛排除、樹木伐採等の問題があったため、年度当初からの調査実施是不可能であった。したがって、実際の調査は、昭和56年6月16日に遺構の確認調査より開始した。なお、発掘調査に併行して、調査に伴って出土した遺物についての水洗・注記作業を順次実施していく。

6月16日（火） 本日より2日間にわたり調査補助員の休憩所設置作業を実施する。また、併せて器材等の搬入を行う。

6月18日（木） 遺構確認調査のトレンチを設定すべく杭打ち作業を実施し、11ラインより遺構確認調査を開始する。

6月23日（火） 7月1日の井戸向遺跡空中写真撮影の実施予定に伴って、援助のためヲサル山

遺跡の確認調査を一時中断する。

6月25日（木） 午後よりヲサル山遺跡の遺構確認調査を再開する。

6月29日（月） 遺構確認調査を継続して実施する。9—60ラインまで終了し、広範囲にわたって住居跡の落ち込みを確認した。また、方形周構墓の周溝部分の落込みも併せて確認した。調査区東側の権現後遺跡に近接する地区では、遺構は検出できないという状況である。またNライン周辺においては、縄文土器片が多数出土した。

7月10日（金） 確認調査を実施出来なかつた北側部分を除いて、本日をもって確認調査のすべてを終了した。9—60ライン以南と比較して、遺構は極めて希薄であり、土器の散布も少ない傾向を示した。なお、調査補助員の休憩所については、本調査実施の段階で再度使用するため、ロー

ブ掛けなど安全対策を施し、現地に保留する。

7月14日（火） 本調査に先行して、本日より重機による表土層除去作業を実施する。

10月2日（金） 本日より遺構の本調査を開始する。まず、調査補助員の休憩所増設作業を実施するとともに、器材の搬入を行う。その後遺構確認面の精査作業を開始し、D001号遺構から調査を開始する。

10月6日（火） 表土層除去作業を一部を除き終了する。また、調査区域内の杭打ち作業を実施する。

10月12日（月） 年度当初より実施していた井戸向遺跡の発掘調査がほぼ終息に向ったため、調査補助員の増員を図った。

10月23日（金） 住居跡の調査を続行する中で、新たに方形周溝墓の調査を開始する。

10月24日（土） 表土層除去作業の末着手だった調査区内北側部分0.6haについて、重機を導入し、表土層除去作業を開始する。

10月28日（水） 本日でD015号遺構まではすべて着手することとなる。大半の住居跡は古墳時代前期に比定されるが、弥生時代終末期と思われるものも含まれることがだいに判明した。

11月4日（水） 住居跡、方形周溝墓の他、土壤の調査も開始する。また、MB001号遺構では土器が一括して出土し、埋没時の状況を推測できるものとして、遺物出土状況の写真を撮影する。

11月12日（木） 雨天が続くため、現場の進捗がはかばかしくない。土壤についてはP006号遺構まで終了する。

11月19日（木） MB001号遺構の主体部の調査を開始し、ガラス製小玉を数点出土する。住居跡はD020号遺構までは終了する。

11月25日（水） 遺構調査を継続するとともに、本日より空中写真撮影のための準備を開始する。

12月3日（木） 遺構の調査はすべて終了していないが、空中写真撮影のため調査区全面にわたり清掃作業を実施する。

12月4日（金） 晴天に恵まれたため、予定どおり空中写真撮影を実施する。

12月5日（土） 調査で使用するために排除できなかった杭を撤去し、その下に検出してD027号遺構の調査を開始する。

12月7日（月） 平面図、遺物分布図等の図面作成及び床下の調査等遺構における調査を若干残しながら、本日より遺構の存在しない北側部分より旧石器時代の確認調査を開始する。

12月19日（土） L-7-48、M-7-42のVII～VIII層にかけて石器類が出土した。相方が近接し、また特にM-7-42においては2点出土したことから、ブロックとしての広がりを有する可能性が推測できる。

12月25日（金） 本日をもって昭和56年の調査を閉鎖する。なお、長期にわたる休日に入るため、調査区域内の安全について終点検を実施する。

昭和57年1月7日（木） 本日より現場作業を再開する。旧石器時代の確認調査を続行すると同時に、床下の調査を中心とする遺構の補足調査を実施する。

1月12日（火） 旧石器時代の確認調査を続行中、J-9-49において焼土を検出したため調査を開始する。調査の進捗にしたがって炉穴であることが判明した。

1月18日（月） 調査で使用した杭の下にあつ

たため確認の遅れたD028号遺構について調査を開始する。炉穴はさらに近接して数基検出したため、順次調査を実施することとした。

1月26日（火） 旧石器時代の確認調査はほぼ終息に向い、一部本調査を開始する。

2月1日（月） M-11-25の調査区境界地点に位置するD029号遺構について、調査区外に拡大して調査を実施することになり、本日より開始する。また、炉穴群についてはさらに遺構の分布が拡大し、総計19基となる。調査継続中である。旧石器時代の確認調査は本日をもってすべて完了する。

2月23日（火） 本日をもって遺構の調査をすべて完了する。

3月27日（土） 旧石器時代の調査を終了し、本日をもってヲサル山遺跡、昭和56年度事業をすべて終了する。

#### 昭和57年度の調査

ヲサル山遺跡については、昭和56年度に調査対象外であった台地南側部分1.6 haについての遺構及び旧石器時代の確認・本調査を実施した。また併行して、調査に際して出土した遺物の水洗・注記作業を順次実施していく。

4月5日（月） 器材等の搬入後、調査体制の整備を行い、その後直ちにトレンチによる遺構の確認調査を開始する。

4月16日（金） 確認調査もかなり進捗したが、遺構としてはM-12-68、P-12-67においてそれぞれ住居跡と溝状遺構を確認した他、数基の土壤を確認したのみである。

4月21日（水） 本日をもって遺構の確認調査をすべて終了した。確認できた遺構は少ないが、

トレンチより縄文土器片が多量に出土しており、縄文期の遺構の存在も充分に推測し得る成果を得た。なお、確認調査終了に伴い、器材等の搬出も実施する。

4月30日（金） 本日より重機による表土層除去作業を開始する。

5月14日（金） 白幡前遺跡の表土層除去作業開始に伴い、ヲサル山遺跡については一時中断する。

6月4日（金） 本日より重機による表土層除去作業を再開する。

7月16日（金） 器材等を搬入し、調査の準備を実施する。

7月19日（月） 調査補助員の休憩所の修繕等環境整備を実施すると同時に、遺構確認面の精査作業も開始する。また、重機による表土層除去作業はなお継続中である。

7月30日（金） 調査開始以来、雨模様の天候が続いているが、重機がほとんど稼働できない状況であり、今後の調査工程が心配される。

8月2日（月） 台風により、調査補助員の休憩所が崩壊したため、建て直し作業を実施する。

8月9日（月） 遺構調査の開始に向けて、杭打ち作業を開始する。なお、調査の進展に伴い、本日より調査補助員を増員する。

8月20日（金） 雨天のため難航していた表土層除去作業が、本日をもって終了する。

8月24日（火） 本日より遺構調査を開始し、D030～D035号遺構について着手する。なお、D030号遺構及びD032号遺構はカマドの存在を確認している。

9月1日（水） D030～D035号遺構は、カマド・炉の調査を残す以外は調査を終了する。ま

た、本日より土壌の調査を開始する。

9月8日（水） 遺跡内の清掃作業等、空中写真撮影のための準備を実施する。

9月10日（金） 空中写真撮影のための準備を実施中、新たにD036号遺構を検出し、直ちに調査を開始する。

9月14日（火） 晴天に恵まれたため、予定どおり空中写真撮影を実施する。

9月21日（火） 遺構の床下調査を実施する。

9月22日（水） 一部土壌の平面実測を残し、

遺構の調査を終了したため、旧石器時代の確認調査を南側より開始する。

10月7日（火） N-14-24の旧石器時代の確認調査を実施中、II層中より堀之内式に比定される土器が出土したため精査したところ、住居跡を確認した。直ちに平面プランを確認し、調査を実施する。

10月20日（水） 旧石器確認調査が全体の約20%を終了し、14か所で遺物を検出した。

11月15日（月） 旧石器確認調査を実施中、特に南側台地先端部周辺において縄文土器の出土が認められることから、重機を搬入し、縄文土器の散布する地点を中心としてII層を排除し、ソフトローム上面での遺構の確認作業を実施する。

11月24日（水） 重機によるII層排除後の精査により、D038号遺構を新たに検出し、調査を開始する。

11月26日（金） 旧石器時代の確認調査がほぼ終息に向ったため、遺物を検出した地点を中心としてM-13-08より本調査を開始する。

12月1日（水） 本日をもって旧石器時代の確認調査をすべて終了し、本調査に移行する。

12月22日（水） P-12-82、83より新たに縄

文期の住居跡を確認し、直ちに調査を実施する。覆土の状況が確認面に極めて類似するため、住居跡の確認が遅れたが、縄文土器片の散布する地点を中心として慎重に精査を実施したところ、D039号遺構を検出した。このD039号を最後として遺構はすべて把握し得たと思われる。

12月24日（金） 本日をもって昭和57年の調査を閉鎖する。なお、長期にわたる休日に入るため、調査区域内の安全性について総点検を実施する。

昭和58年1月5日（水） 本日より現場作業を再開する。

1月13日（木） S-39の調査が終了し、これをもってヲサル山遺跡全域における調査のすべてを終了する。

#### 昭和59年度の整理作業

昭和59年度の整理作業は、昭和56、57年度に調査した成果について、整理、分析を行い、原稿執筆までの作業を実施することである。即ち、ヲサル山遺跡の発掘調査報告書刊行に向けての作業を実施した。

4月2日（月） 本日より報告書刊行に向けての整理作業を開始する。遺物の復元作業を実施するとともに、図面整理作業も併行して実施する。

7月10日（火） 図面整理作業を終了し、写真整理作業を開始する。なお、遺物の復元作業は継続して実施する。

8月16日（木） 写真整理作業を終了し、遺物の実測作業を開始する。なお、遺物の復元作業は継続して実施する。

10月1日（月） 遺物の復元作業を終了し、遺物の実測作業を継続して実施する。また、旧石器

の石器計測表の作成作業を開始する。

10月18日（木） 土器についての実測作業を終了し、旧石器に関する実測作業を開始する。

11月1日（木） 本日よりトレース作業を開始する。なお、実測作業は継続中である。

12月1日（土） 実測作業を終了し、遺物写真撮影及び探拓作業を開始する。なお、トレース作業は継続して実施する。

12月28日（金） 遺物写真撮影をすべて終了する。なお、本日をもって昭和59年の整理作業を閉鎖する。

昭和60年1月7日（月） 本日より整理作業を再開する。探拓及びトレース作業を継続し、挿図作成作業を開始する。

1月24日（木） 本日をもって探拓及びトレース作業を終了するが、挿図作成作業は継続して実施する。なお、原稿執筆を一部開始する。

2月12日（火） 挿図作成作業を終了し、本格的に原稿執筆を開始する。

3月15日（金） 図版作成作業を開始する。

3月30日（土） 本日をもって、ヲサル山遺跡の整理作業をすべて終了する。

## 第Ⅰ部 旧石器時代

# 第1章 層位と文化層

## 第1節 自然層

自然層は、表土層より立川ローム層最下部に至るまで12枚に分層し得た。層厚は統じて表土層が約0.5m、II層が約0.3m、III層以下立川ローム層が約1.6mとなっている(図5、6)。

権現後遺跡においてIV～VI層とした層については、ヲサル山遺跡については明確に分層することができたため、各々1つの層として独立させた。また、VI層とVIIa層との間に、始良Tn火山灰を含まない、いわゆるVIIa層に移行する漸移層が存在するが、VIIa層ほど黒色を呈しておらず、明確に分層できることから、VI'層として捉えておく。武藏野台地におけるVII層上半部に相当すると思われる。

また、従来ソフトローム層はIII層として一括して扱ってきたが、当遺跡に関しては分層が可能である。主として視覚による分層のため、これが堆積状況によるものなのか、あるいは土壤生成作用などの影響によるものなのか、その性質は不明であり、本来1つの層として独立して捉えるべきではないものなのかも知れない。しかしながら、遺跡全域にわたって比較的普遍的に認められるところであり、とりあえずIIIa層及びIIIb層として捉えておきたい。なお、ソフトローム層の分層については、北海道遺跡のR-10-00地域でも認められ、また萱田地区内ではその他井戸向遺跡、白幡前遺跡などでも認められるところである。

この自然層は下総台地に隣接する武藏野台地と対比させておく必要がある。ソフトローム層は分層されないが、基本的にはIII～VI層に至るまでは共通である。VI層以下は呼び方が異なっており、VI'層及びVIIa層は武藏野台地のVII層、VIIb層はVIII層、VIIc層はIX層、VIII層はX層にそれぞれ対比される。

以下、各層特徴を解説する。

I層 表土(耕作土) 暗褐色土層、厚さ約50

cmで軟質である。

II層 暗褐色土層、ソフトロームに至る漸移層で、やや粘性がある。縄文時代の包含

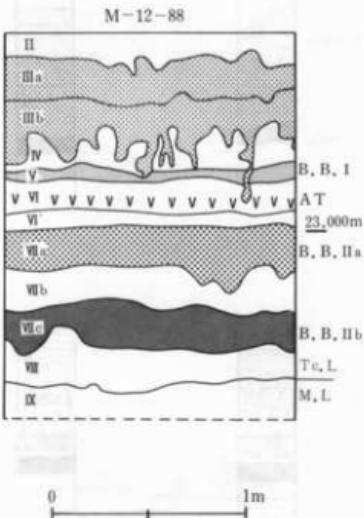


図5 標準層序

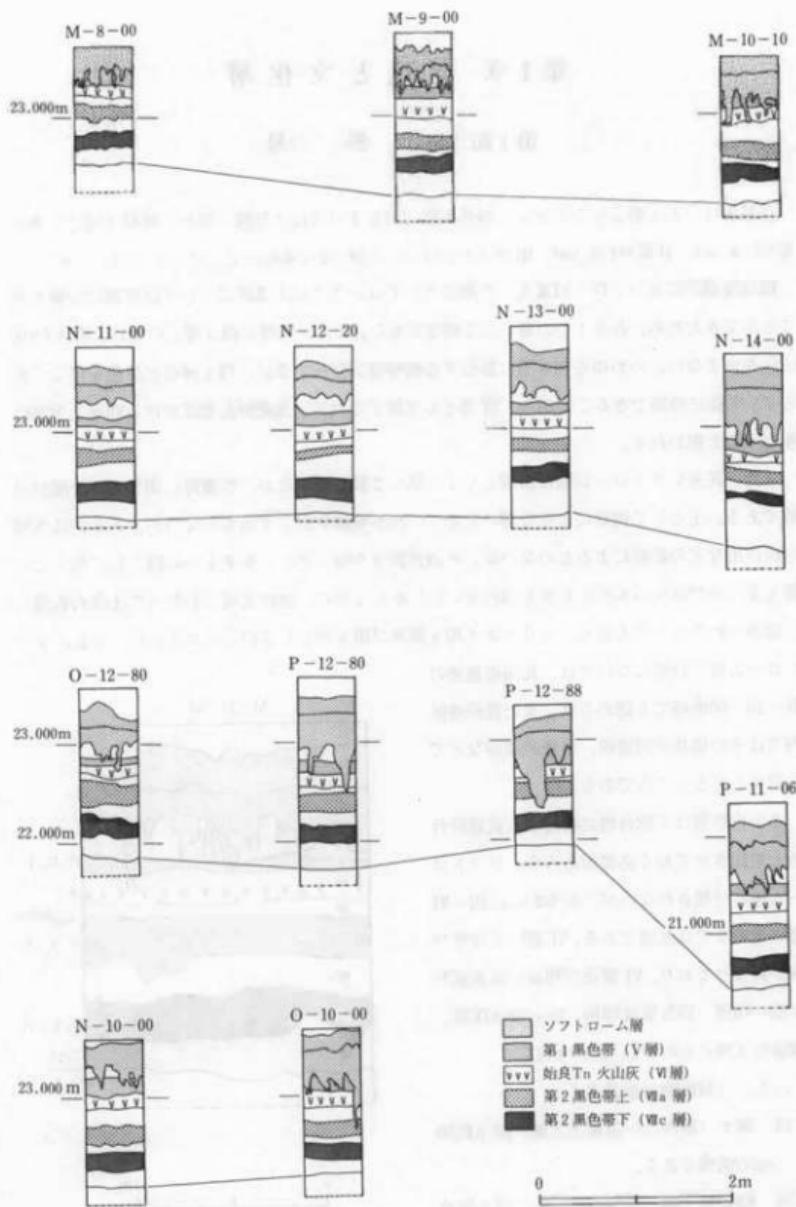


図6 遺跡土層断面図

層である。

III a 層 暗黄褐色軟質ローム層、いわゆるソフトローム層の上半部にあたる。空隙があり、軟質である。

III b 層 黄褐色軟質ローム層、いわゆるソフトローム層の下半部にあたる。

IV 層 黄褐色硬質ローム層、いわゆるハードローム層の最上部にあたる。一部を除き、比較的普遍的に認められる。

V 層 淡暗褐色硬質ローム層、いわゆる第1黒色帯である。色調は淡いが、比較的明確に判断可能である。

VI 層 明黄褐色硬質ローム層、始良Tn火山灰層で、広範囲にわたって鍵層となる層である。

VII 層 淡暗褐色硬質ローム層、VII a 層に至る漸移層で始良Tn火山灰は含まない。

VII a 層 暗褐色粘土質ローム層、第2黒色帯の上半部にあたる。V層に比べると色調が濃い。

VII b 層 褐色粘土質ローム層、第2黒色帯の間層帶である。厚さ5~30cmと幅広いが、全域に普遍的に認められる。

VII c 層 暗褐色粘土質ローム層、第2黒色帯の下半部にあたる。VII a 層に比べると色調が濃い。

VIII 層 黄褐色硬質ローム層、立川ローム層の最下部にあたる。

IX 層 褐色硬質ローム層、武藏野ローム層最上部にあたる。粘性があり、スコリアを含む。高密度である。

## 第2節 文化層

ヲサル山遺跡では、次の4つの文化層に区分できる。

第1文化層(III~V層段階) 第6~8、10、12、14~16、22、23、26、28、30、31、33ブロックの計15ブロック。

第2文化層(VI層段階) 第18、24、25、27ブロックの計4ブロック。

第3文化層(VII a 層段階) 第3~5、13、17、29、32、39、40ブロックの計9ブロック。

第4文化層(VII c ~VIII層段階) 第21ブロックの1ブロックのみである。

以上の文化層は、層位的根拠に基づく分類であるが、型式学的所見も考慮に入れた。

総じて、およそ1.6mの厚さを計る立川ローム層の中にあって、各文化層における石器群は30~50cm程度のレベル幅をもって成立しているため、文化層の同定は極めて困難である。したがって、今後他の遺跡との比較検討などによりさらに細分できる可能性があろう。

各文化層より出土した石器類には、剥片、碎片の他、ナイフ形石器、尖頭器、石錐、搔器、削器、ピエス・エスキュー、2次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、敲石、礫器などがあり、多種にわたる。

ブロックの形成は台地縁辺部に集中する傾向が認められるが、各文化層ごとにさらに細かく見えていくと、北へ入り込む谷津をのぞむ台地西側縁辺部には、第1、第3、第4の各文化層が、台地南側に大きく横たわる谷津をのぞむ台地南側縁辺部には第1、第2、第3の各文化層が、展開している。

## 第2章 遺構と出土遺物

### 第1節 はじめに

本遺跡では、台地縁辺部を中心として29ブロックを検出し、石器群と礫群が合わせて1,781点出土した（図7）。

自然層におけるIII層上面からV層に至るまで立川ローム層全面にわたって出土しており、層位の上から連続的に生活が営まれたことが判明した。

文化層は5つに分割可能で、第1文化層は887点、第2文化層は335点、第3文化層は538点、第4文化層は22点出土する。石器群8点より成る小ブロックから石器群274点より成る大ブロックまで様々であるが、第5文化層においては大ブロックは形成されていない。

また、いずれの文化層も台地縁辺部を中心として展開しているが、立地上各文化層ごとの傾向が認められるところである。

### 第2節 第1文化層

III～V層段階の文化層である。第6～8、10、12、14～16、22、23、26、28、30、31、33ブロックの計15ブロック、統計887点の石器群及び礫群を検出した。10点の石器群より成る第7ブロックから274点の石器群より成る第10ブロックまで、大小のブロックが混在する文化層と言えよう。

いずれも台地縁辺部に位置しているが、立地上2グループに分離できる。第6～8、10、12、14～16ブロックと第22、23、26、28、30、31、33ブロックであり、前者は台地西側縁辺部、南側から入り込む谷津に面しており、後者は台地南側縁辺部を中心とし、権現後遺跡との境界となっている、南側に開口する小規模な谷津の奥まで伸びている。後者については第3文化層と同一の立地を示しており、第3文化層への移行が窺い知れよう。

遺物としては、剥片、碎片の他ナイフ形石器、ビエス・エスキュー、搔器、削器、石錐、2次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、敲石あるいは礫片などが出土しており、多岐にわたっている。

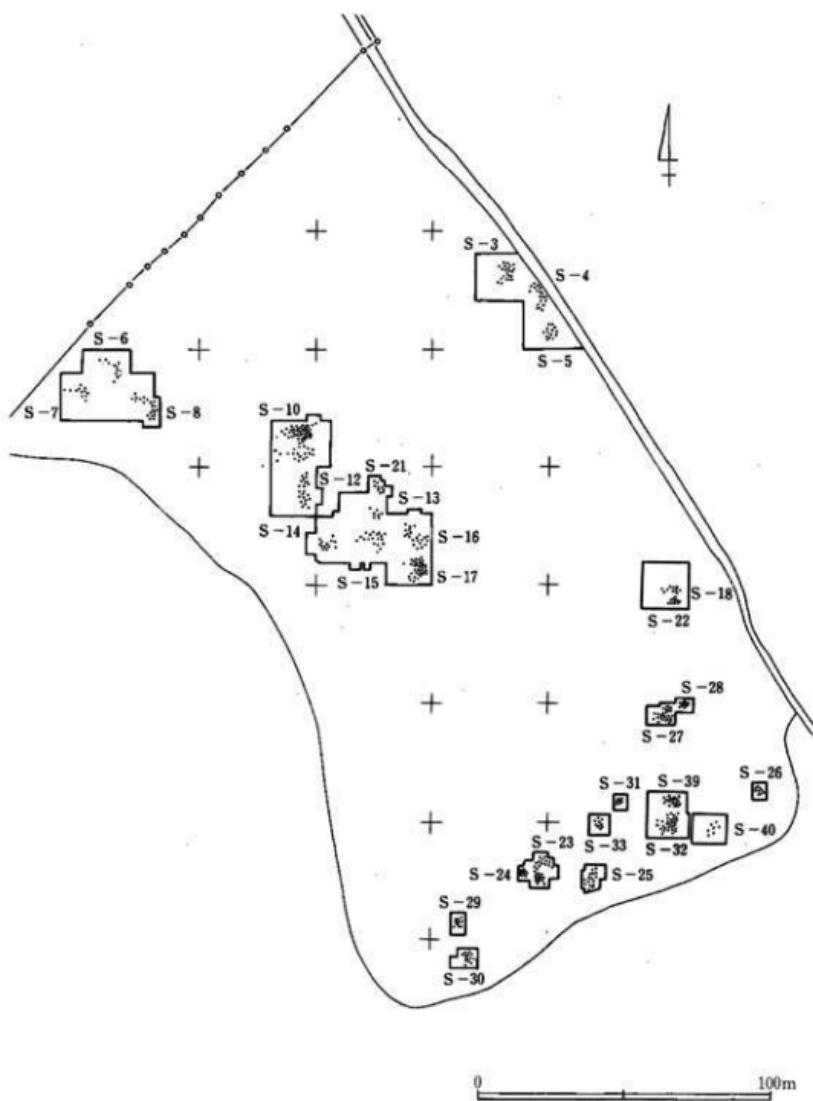


図7 ブロック配置図

### 1. 第6ブロック(図8、表1、2、図版3)

**出土状況** 第7・8ブロックの北側に隣接するブロックで、遺跡西側に入り込んでいる谷津に面した縁辺部に形成されている。したがって、谷津に向って若干の傾斜を呈している。石器群はソフトローム層上部からVI層にかけて分布しており、最大レベル差0.45mを計る。平面分布は長径14m、短径5mで、長楕円形の範囲内であり、やや散漫な分布状況である。

**出土遺物** 総計13点である。石器組成は剝片、碎片、礫片で、利器は皆無である。剝片は不定形を呈しており、礫片はいずれも破碎されている。

**母岩別資料・接合資料** 点数の割に母岩は多く、石材5種8母岩により構成される。石材で

表1 第6ブロック出土石器組成表

石材	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 鏃	搔 器	削 器	ビエス- エスキュー	2次加工 ある剝片 ある剝片	石 斧	削 片	剝 片	碎 片	石核	敲石	礫 片	計
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
珪質頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.5	-	-	-	7.5
黒曜石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.5	-	-	-	-	7.5
石英岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	31.0	31.0	-	-	-	62.0
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1

表2 第6ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 鏃	搔 器	削 器	ビエス- エスキュー	2次加工 ある剝片 ある剝片	石 斧	削 片	剝 片	碎 片	石核	敲石	礫 片	計
安山岩1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
珪質頁岩1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
黒曜石1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
黒曜石2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	2
黒曜石3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
黒曜石4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2
砂岩1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
石英岩1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	3	-	-	-	11
%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

TK-9-14

TK-9-24

TK-9-34

A+

○

TK-9-13

TK-9-23

TK-9-33

TK-9-12

TK-9-22

TK-9-32

■ 骨片  
○ 骸・鱗片

0 2m

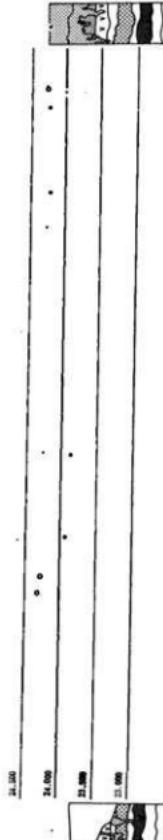


図8 第6ブロック遺物出土状況図

は黒曜石が最も多くを占めるが、4母岩にわたっている。なお、接合資料はない。

まとめ 小規模なブロックであり、出土状況、出土遺物、母岩別資料などの検討により極めて廃棄の色彩が濃いものと言えよう。

## 2. 第7ブロック（図9、10、表3～5、図版8）

**出土状況** 第6・8ブロックの西側に隣接するブロックで、遺跡西側に入り込んでいる谷津に面した縁辺部に形成されており、谷津に向って若干の傾斜を呈している。石器群はソフトローム層を中心として出土しており、最大レベル差0.8mを計る。平面分布は径9mの円形範囲内であるが、剥片が中央に纏まり、周囲にナイフ形石器及び礫片が散漫な状況で出土している。

**出土遺物** 総計10点で、石器組成はナイフ形石器2点、剥片6点、碎片1点、礫片1点である。1、2ともにナイフ形石器で2側刃加工である。刃つぶし加工は急角度で行われており、1の右側刃は抉るような形状を呈している。また、1は刃部に若干の刃こぼれが認められる。

**母岩別資料・接合資料** 石材は5種、母岩は計7種に識別し得た。全体に数量が少なく、単独出土の母岩が大部分であるが、珪質頁岩がやや主体的である。が、その反面ナイフ形石器は

表3 第7ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 錐	搔 器	削 器	ビエス+ エスキュー		2次加工 ある剥片	使用 量 ある剥片	石 斧	削 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	礫 片	計
							数量	%										
安山岩	数量	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	2
	%	10.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.0	—	—	—	—	20.0
珪質頁岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	1	—	—	—	5
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	40.0	10.0	—	—	—	50.0
頁岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.0	—	—	—	—	10.0
黒曜石	数量	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	%	10.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.0
砂岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.0 10.0
計	数量	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	1	—	—	1	10
	%	20.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	60.0	10.0	—	—	10.0	100

表4 第7ブロック出土石器計測表

辨認 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位 置	裏面 調整 有無	欠損の 有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-7-7	ナイフ形石器	6.3	2.4	1.5	45°	15.2	2側刃	無	無	有	黒曜石
2	S-7-8	ナイフ形石器	2.4	0.8	0.4	45°	0.7	2側刃	無	無	無	安山岩

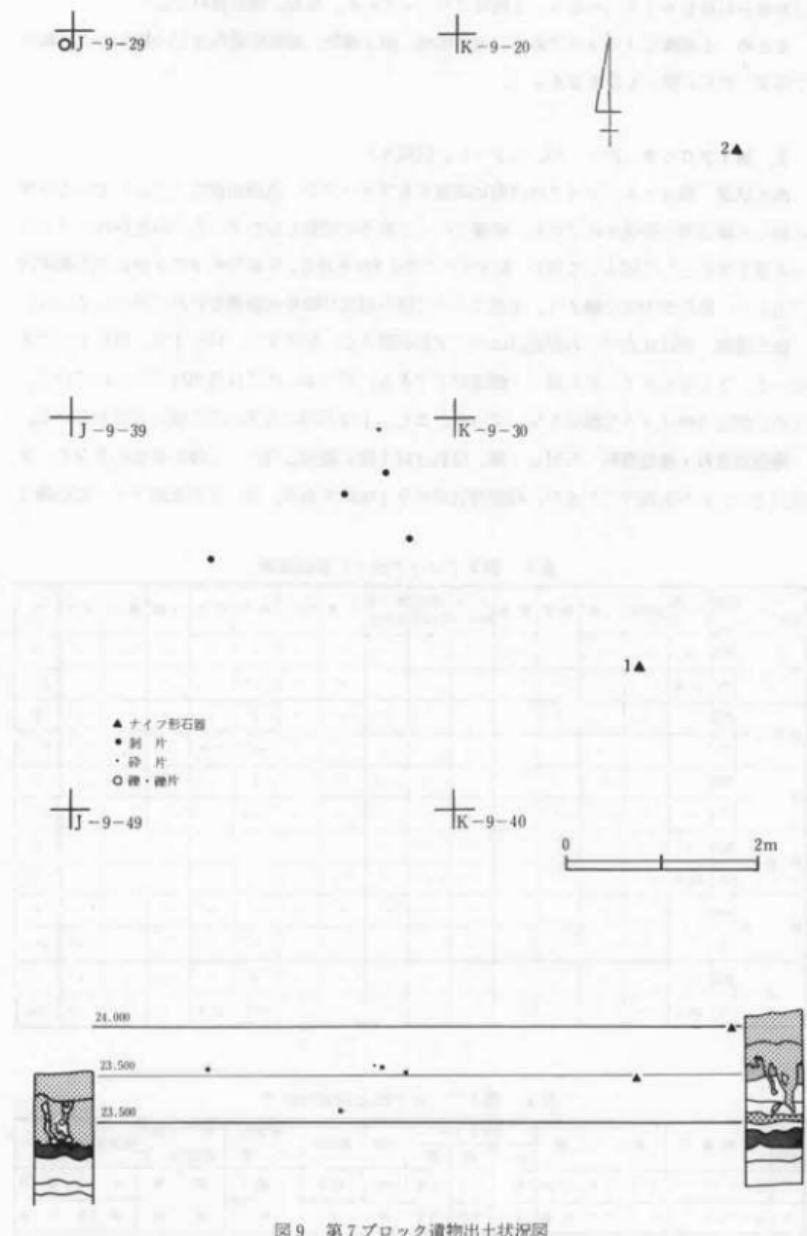


図9 第7ブロック遺物出土状況図



図10 第7ブロック出土遺物実測図

表5 第7ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種 ナイフ形 石 器	尖頭器	石 錐	様 器	削 器	ビエッ エスキース	2次加工 ある剥片	使 用痕 ある剥片	石 斧	削 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	蹠 片	計
安山岩 1	-	-	-	-	-	--	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
安山岩 2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
珪質頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2
珪質頁岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	3
頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
黒曜石 1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
計	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	1	-	-	1	10

いずれも珪質頁岩製ではない。接合資料は皆無である。

まとめ 数量が少ない上に母岩の種類が多く、検討に堪える状況ではないが、そうした中にあってナイフ形石器が2点出土したのは注目できる。

### 3. 第8ブロック (図11、12、表6~9、図版4、8)

**出土状況** 第6・7ブロックに近接し、遺跡西側に入り込んでいる谷津に面した縁辺部に形成されている。石器群はソフトローム層下部からV層にかけて出土しており、最大レベル差0.6mを計る。平面分布は長径8.5m、短径7mの橢円形の範囲内であり、比較的整った分布状況を示している。剥片、碎片などと利器が混在している。

**出土遺物** 総計30点で、石器組成はナイフ形石器1点、2次加工のある剥片4点、使用痕のある剥片5点、剥片14点、碎片3点、石核1点、蹠片2点である。1はナイフ形石器で、縦長

表6 第8ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石	尖頭器	石 鋸	擦 器	削 器	ビエス・ エスキーー ある剥片	2次加工用 剥片	石 砕	削 片	刮 片	碎 片	石 核	敲 石	擦 片	計
安山岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	2	3
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.3	—	6.7	10.0	
珪質頁岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	6.7	—	—	—	—	—	6.7
黒曜石	数量	1	—	—	—	—	4	5	—	—	12	3	—	—	—	25
	%	3.3	—	—	—	—	13.3	16.7	—	—	40.0	10.0	—	—	—	83.3
計	数量	1	—	—	—	—	4	5	—	—	14	3	1	—	2	30
	%	3.3	—	—	—	—	13.3	16.7	—	—	46.7	10.0	3.3	—	6.7	100

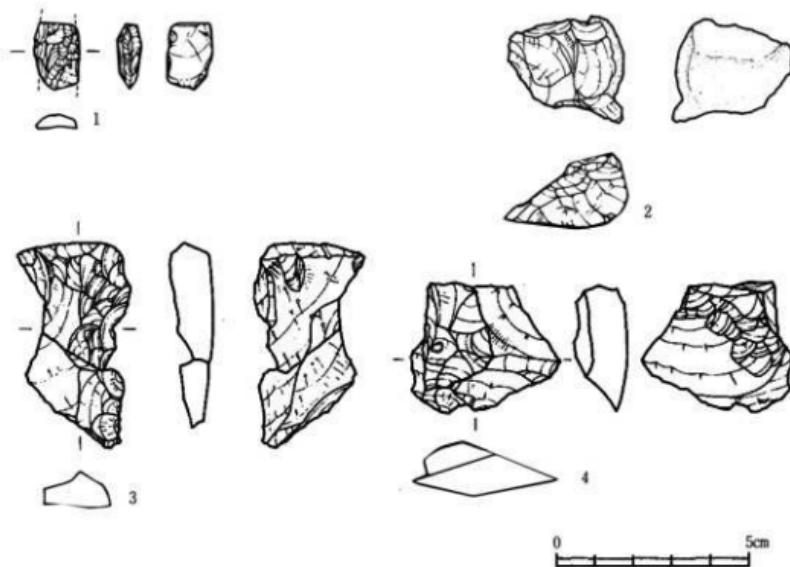
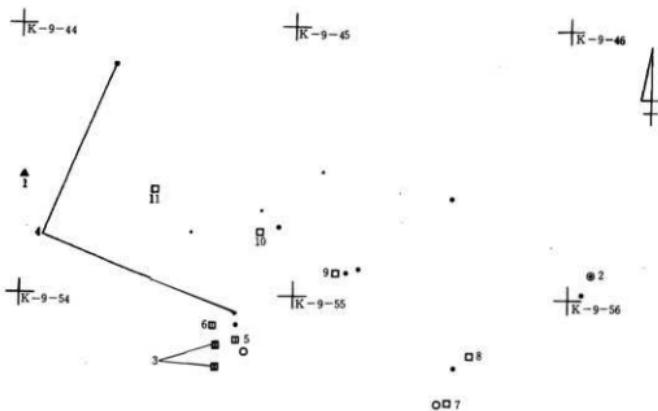


図11 第8ブロック出土遺物実測図

剥片を素材としたものだが、欠損品である。2は石核で、横長剥片を生産したものである。3は剥片どうしの接合であり、いずれも1側辺に2次加工が施されている。

**母岩別資料・接合資料** 石材は3種、母岩は計9種に識別し得た。黒曜石が主体的に出土しており、他の石材についてはブロック内において大きな展開は認められない。石器を見ると、



- ▲ ナイフ形石器
- 2次加工ある剥片
- 使用感ある剥片
- 剥片
- 砕片
- ◎ 石核
- 売・礫片

0 2m

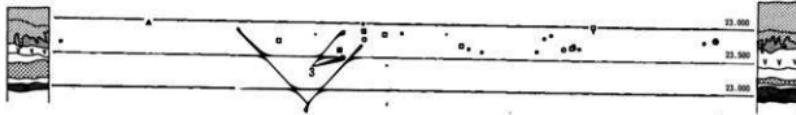


図12 第8ブロック遺物出土状況図

石核 1 点が安山岩である他は、すべて黒曜石で占められている。接合資料は 2 次加工のある剝片どうしが 1 例、剝片どうしが 1 例でいずれも黒曜石である。なお、黒曜石は夾雜物を多量に含んだものである。

表 7 第 8 ブロック出土石器計測表

擇回 番号	遺物 号	器 種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の 位置	裏面 調整 有無	欠損の 有無	使用痕	石 材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-8-29	ナイフ形石器	1.7	1.2	0.6	—	1.1	2側辺	一部有	有	—	黒曜石
2	S-8-10	石核	2.6	3.5	1.9	—	15.4	—	—	無	—	安山岩
3	S-8-23	2次加工ある剝片	1.9	2.5	0.9	50°	3.9	1側辺	無	無	無	黒曜石
3	S-8-24	2次加工ある剝片	3.3	2.7	1.0	—	7.1	1側辺	無	無	無	黒曜石
5	S-8-21	2次加工ある剝片	4.1	1.8	0.8	60°	5.2	1側辺	無	無	無	黒曜石
6	S-8-25	2次加工ある剝片	6.2	3.7	2.0	55°	46.0	1側辺	無	無	無	黒曜石
7	S-8-5	使用痕ある剝片	7.6	3.6	2.2	50° 55°	44.6	—	—	無	2側辺	黒曜石
8	S-8-8	使用痕ある剝片	2.4	2.1	0.8	35°	3.3	—	—	無	1側辺	黒曜石
9	S-8-14	使用痕ある剝片	2.0	1.5	0.4	30° 45°	1.3	—	—	無	2側辺	黒曜石
10	S-8-17	使用痕ある剝片	5.6	4.4	1.1	75°	39.0	—	—	無	1側辺	黒曜石
11	S-8-27	使用痕ある剝片	3.7	2.5	1.1	55°	10.6	—	—	無	1側辺	黒曜石

表 8 第 8 ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 名	ナイフ形 石	尖頭器	石 核	研 器	削 器	ビエス- エスキース	2次加工 あら剥片	使 用 痕	石 斧	削 片	剝 片	砂 片	石 核	敲 石	微 片	計
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	2	3
珪質頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
珪質頁岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
黒曜石 1	1	—	—	—	—	—	1	1	—	—	1	—	—	—	—	4
黒曜石 2	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	3	1	—	—	—	7
黒曜石 3	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2	—	—	—	—	4
黒曜石 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
黒曜石 5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—	—	—	5
黒曜石 6	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	2
計	1	—	—	—	—	—	4	5	—	—	14	1	1	—	2	28

表 9 第 8 ブロック接合資料一覧表

擇回 番号	母岩別資料	内 訳	内 容	数 量
3	黒曜石 6	2次加工ある剝片 2	(S-8-23)+(S-8-24)	2
4	黒曜石 5	剝片 2	(S-8-19)+(S-8-28)	2

**まとめ** 黒曜石を主体とした小規模なブロックである。2次加工のある剝片及び使用痕のある剝片が、全体の数量に比べて多いのが特徴として挙げられ、また同時に碎片が少ない点も指摘できる。剝片生産を反映したブロックとして考えられるが、資料的欠如があるため断定し難いところである。

#### 4. 第10ブロック (図13~16、表10~13、図版4、8)

**出土状況** 第12ブロックの北側に隣接するブロックで、遺跡西側に入り込んでいる谷津に面した縁辺部に形成されている。石器群はソフトローム層下部を中心としてVI層まで出土しており、最大レベル差0.85mを計る。平面分布は径8mの円形範囲内であるが、特にその北側部分に集中する傾向が認められる。かなり密な分布状況を示しているが、利器は比較的周辺部に分布する状況が看取できる。

**出土遺物** 総計274点で、石器組成はナイフ形石器4点、角錐状石器1点、削器3点、2次加工のある剝片5点、使用痕のある剝片2点、剝片96点、碎片153点、石核5点、礫片4点である。1~4はナイフ形石器で、1~3は縦長剝片、4は横長剝片を素材としたものである。3は切先部破片であるため、1側辺の刃つぶし加工のみ確認し得るが、他はいずれも2側辺加工を施しており、特に1、3は急勾配を呈する刃つぶし加工が認められる。5は角錐状石器で、調整加工は全面に及ぶ。6~8は削器である。6は横長剝片を素材とし、右側辺に調整加工を施している。7は基部破片である。8は横長剝片を素材とするが、中央部で2分割に欠損する。2側辺に調整加工が施され、また基部右側辺は抉るような形状を呈している。9~13は石核で、10は頁岩、他は全て黒曜石である。いずれも横長剝片を生産したもので、特に11、12は加撃面を多方向に有していたことが看取できる。17は2次加工のある剝片で、剝片との接合資料であ

表10 第10ブロック出土石器組成表

石材	器種															計	
	ナイフ形 石 削 片	尖頭器	石 錐	擦 器	削 器	ピエス・ エスター	2次加工 ある剝片	使 用 痕 ある剝片	石 砕	剝 片	剝 片	碎 片	石 核	敲 石	礫 片		
珪質頁岩	数 量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.3	—	—	—	0.3	
頁 岩	数 量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.3	—	—	0.3	
黒 曜 石	数 量	4	2	—	—	4	—	5	2	—	—	93	152	4	—	—	266
	%	1.5	0.7	—	—	1.5	—	1.8	0.7	—	—	34.0	55.9	1.5	—	—	97.6
砂 岩	数 量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	4	5	
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.3	—	—	1.5	1.8	
計	数 量	4	2	—	—	4	—	5	2	—	—	94	153	5	—	4	273
	%	1.5	0.7	—	—	1.5	—	1.8	0.7	—	—	34.3	56.2	1.8	—	1.5	100

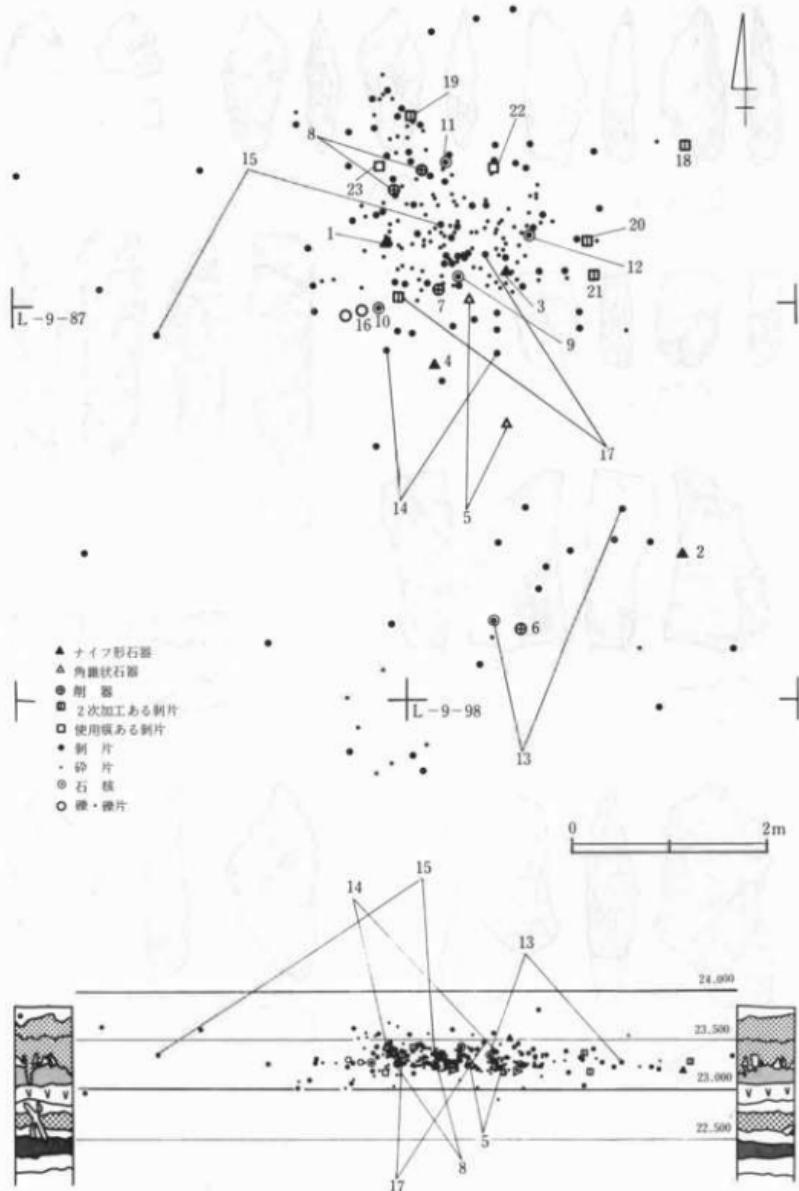


図13 第10ブロック遺物出土状況図

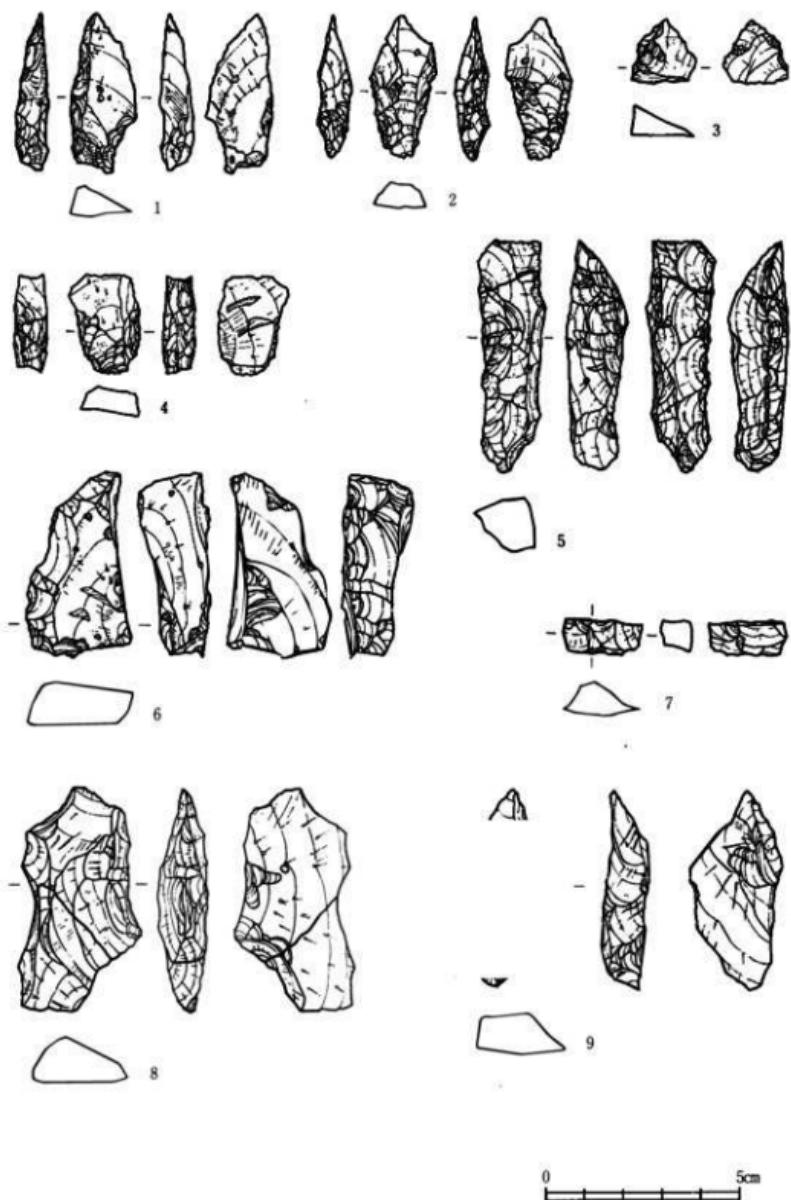


図14 第10ブロック出土遺物実測図(1)

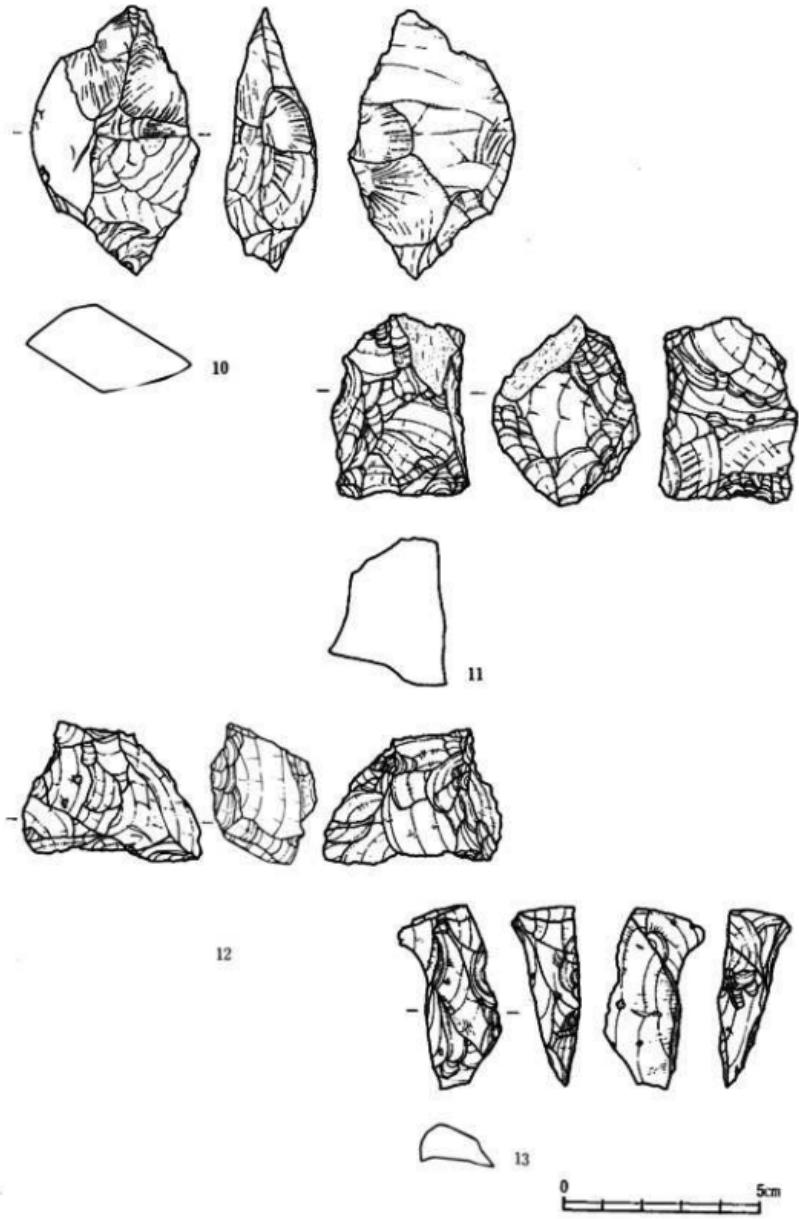


図15 第10ブロック出土遺物実測図(2)

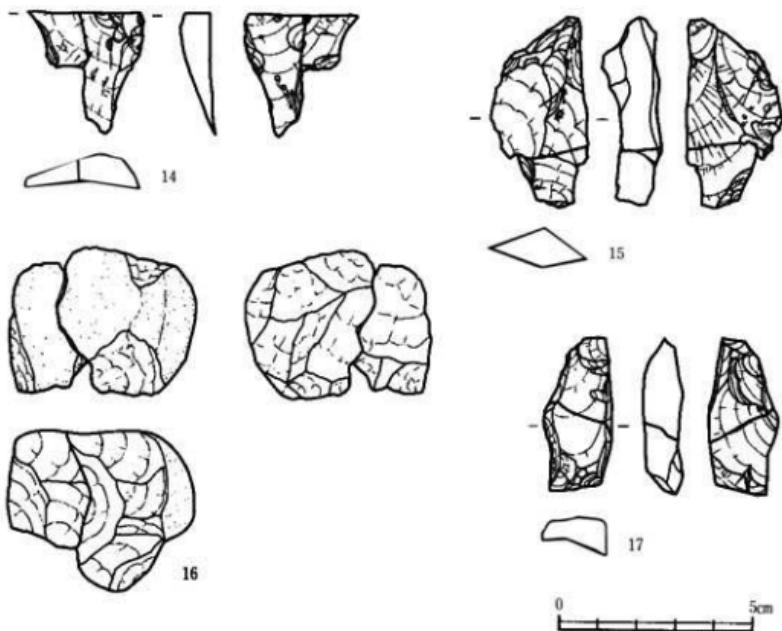


図16 第10ブロック出土遺物実測図(3)

表11 第10ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	圓錐 石	ナイフ形 石	角錐状 石	圓石	石 錐	標 器	削 器	ビエス エスター	2次加工 ある剥片	使用 ある剥片	石 斧	削 片	剝 片	碎 片	石 核	敲 石	擦 片	計
珪質頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
黒曜石 1	-	2	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	6
黒曜石 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-	4
黒曜石 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2	-	-	-	-	6
黒曜石 4	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	4
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	4	
砂岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
計	-	2	-	-	2	-	1	-	-	-	11	3	4	-	4	-	27	

る。1側辺に2次加工痕が認められる。

**母岩別資料・接合資料** 石材は4種、母岩は黒曜石4種以上、その他4種である。大多数が黒曜石で占められており、他はむしろ稀と言ふべき状況である。黒曜石はいずれも多量の夾雜

表12 第10ブロック出土石器計測表

標図 番号	遺物番号	器 種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の 位置	裏面 調整	欠損の 有無	使用痕	石 材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-10-285	ナイフ形石器	4.2	1.8	0.9	35°	4.6	2側辺	無	無	有	黒曜石
2	S-10-47	ナイフ形石器	3.7	1.7	0.8	55°	4.9	2側辺	有	無	有	黒曜石
3	S-10-108	ナイフ形石器	(1.6)	(1.7)	(0.8)	35°	1.5	—	—	有	—	黒曜石
4	S-10-53	ナイフ形石器	(2.6)	(1.7)	0.8	30°	3.9	2側辺	無	有	—	黒曜石
5	S-10-51 S-10-111	角盤状石器	6.0	1.8	1.5	45°	16.0	全面	有	有	無	黒曜石
6	S-10-43	削	4.7	2.7	1.7	70°	20.1	1側辺	無	無	無	黒曜石
7	S-10-114	削	—	(1.0)	2.0	1.0	45°	1.6	—	無	有	—
8	S-10-201 S-10-288	削	50.8	3.3	1.2	60°	19.1	2側辺	無	有	無	黒曜石
9	S-10-113	石核	5.2	2.3	1.1	—	12.6	—	—	無	—	黒曜石
10	S-10-130	石核	6.9	4.3	2.2	—	50.0	—	—	無	—	頁岩
11	S-10-219	石核	4.7	3.4	4.0	—	59.0	—	—	無	—	黒曜石
12	S-10-240	石核	3.4	4.4	2.4	—	38.5	—	—	無	—	黒曜石
13	S-10-38	石核	4.6	2.3	1.7	—	9.2	—	—	無	—	黒曜石
17	S-10-133	2次加工ある剝片	2.3	1.9	1.0	—	4.0	1側辺	有	無	無	黒曜石
18	S-10-76	2次加工ある剝片	3.1	1.7	0.8	60°	3.8	上端	有	無	無	黒曜石
19	S-10-90	2次加工ある剝片	2.4	1.9	0.7	—	3.9	2側辺	無	無	無	黒曜石
20	S-10-103	2次加工ある剝片	2.9	2.0	1.4	35°	3.7	2側辺、 上端	一部有	無	無	黒曜石
21	S-10-138	2次加工ある剝片	2.8	1.3	0.8	—	1.9	1側辺	無	無	無	黒曜石
22	S-10-245	使用痕ある剝片	2.4	1.5	0.3	45°	1.1	—	—	無	有	黒曜石
23	S-10-289	使用痕ある剝片	2.6	1.8	0.6	30°	1.8	—	—	無	有	黒曜石

表13 第10ブロック接合資料一覧表

標図 番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
5	黒曜石1	尖頭器2	(S-10-51)+(S-10-111)	2
8	黒曜石1	削器2	(S-10-201)+(S-10-288)	2
13	黒曜石2	石核1、剝片1	(S-10-38)+(S-10-50)	2
14	黒曜石2	剝片2	(S-10-28)+(S-10-59)	2
15	黒曜石4	剝片2	(S-10-11)+(S-10-212)	2
16	砂岩1	標片2	(S-10-131)	2
17	黒曜石4	2次加工ある剝片1、剝片1	(S-10-133)+(S-10-143)	2

物が含まれており、母岩の識別は極めて困難と言える。黒曜石4の母岩は多量の夾雜物を含む他、表面の光沢がまったくなく、母岩の識別不可能であったものと同一の特徴である。したがって、これらは同一母岩の可能性もあるが、仮にそうだとするならば、原石はかなり大形であ

ったと想定できる。頁岩は石核1点が出土するが、他に同一母岩となる資料がなく、検討に堪えない。接合資料は尖頭器と削器の欠損が各1例、石核と剥片の接合1例、破片どうしの接合2例、礫片どうしの接合1例、2次加工のある剥片と剥片の接合1例である。

**まとめ** 点数の割に小規模に纏ったブロックである。横長剥片を中心とした剥片生産及びナイフ形石器、削器などを中心とした石器調整、この2つの工程を配したブロックとして位置づけられ、良好な資料を提示している。

### 5. 第12ブロック (図17、18、表14~16、図版4、8)

**出土状況** 第10ブロックの南側に隣接するブロックで、遺跡西側に入り込んでいる谷津に面した縁辺部に形成されている。石器群はソフトローム層全般にわたって出土するが、ソフトローム下部を中心としており、最大レベル差0.30mを計る。平面分布は長径10m、短径6mの梢円形の範囲内であり、散漫な分布状況を示している。

**出土遺物** 総計28点で、石器組成は剥片16点、碎片8点、石核2点、礫片2点である。1、2は石核で、1は横長剥片、2は縦長剥片を生産したものである。

表14 第12ブロック出土石器組成表

石材	剥離石	ナイフ形石器	尖頭器	石核	擦器	削器	ビエス・エスクープ	2次加工	使用痕ある剥片	石斧	剥片	剥片	碎片	石核	敲石	礫片	計
黒 増 石	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16	6	2	-	-	24
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	57.0	22.0	7.0	-	-	86.0	
砂 岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	2	4	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.0	-	-	7.0	7.0	14.0	
計	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16	8	2	-	2	28	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	57.0	29.0	7.0	-	7.0	100	

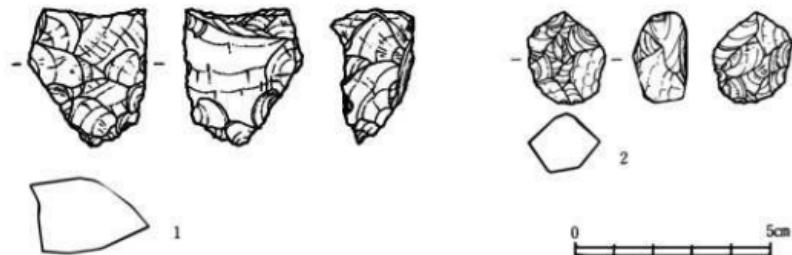


図17 第12ブロック出土遺物実測図

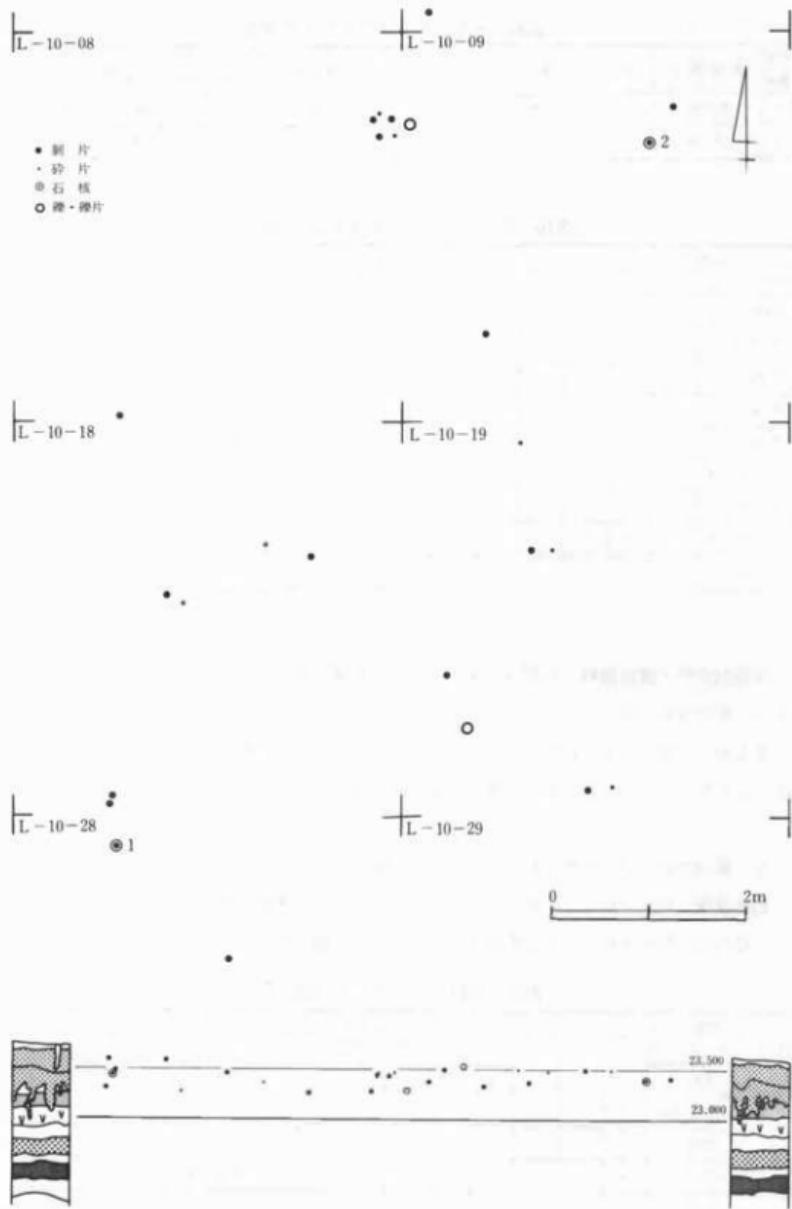


図18 第12ブロック遺物出土状況図

表15 第12ブロック出土石器計測表

標図 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位 置	裏面 調整	欠損の有 無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-12-30	石核	3.5	3.0	2.0	-	19.6	-	-	無	-	黒曜石
2	S-12-14	石核	2.3	2.0	1.4	-	5.2	-	-	無	-	黒曜石

表16 第12ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	ナイフ形 石	尖頭器	石錐	擗器	削器	ビエス- エスキュー	2次加工 ある剝片	使用痕 ある剝片	石斧	削片	剥片	碎片	石核	敲石	礫片	計
黒曜石 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	2	1	-	-	12
黒曜石 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-	4
黒曜石 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	3
黒曜石 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
黒曜石 5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
砂岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
砂岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16	5	2	-	2	25

母岩別資料・接合資料 石材は2種、母岩は計8種に識別し得た。主体となるのは黒曜石である。接合資料はない。

まとめ 石核、剥片、碎片を中心としたブロックであるが、数量的に少なく、また散漫な出土状況を呈している点などから、検討するに堪えないブロックである。

## 6. 第14ブロック（図19、20、表17～19、図版5、8）

出土状況 第15ブロックの西側に隣接するブロックで、遺跡西側に入り込んでいる谷津に面した縁辺部に形成されている。石器群はソフトローム層上部を中心として出土しており、最大

表17 第14ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石	尖頭器	石錐	擗器	削器	ビエス- エスキュー	2次加工 ある剝片	使用痕 ある剝片	石斧	削片	剥片	碎片	石核	敲石	礫片	計
堆積質岩	数値	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	%	8.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8.3
黒曜石	数値	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	8	1	-	-	-	11
	%	-	-	-	-	-	8.3	8.3	-	-	-	66.8	8.3	-	-	-	91.7
計	数値	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	8	1	-	-	-	12
	%	8.3	-	-	-	-	8.3	8.3	-	-	-	66.8	8.3	-	-	-	100

L-10-69

M-10-60

1

4

L-10-79

M-10-70

3

- ▲ ナイフ形石器
- ピエス・エスキーユ
- 2次加工ある剥片
- 剥片
- 砕片

L-10-89

M-10-80

0

2m

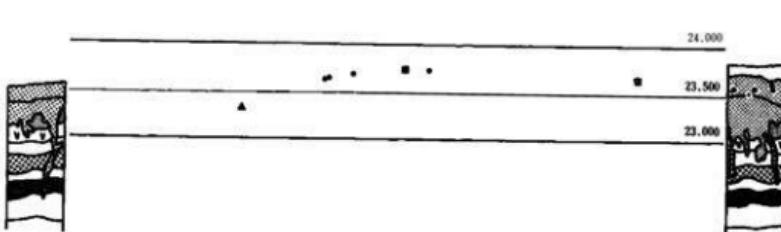


図19 第14ブロック遺物出土状況図

レベル差0.35mを計る。平面分布は長径7m、短径2mの長橿円形の範囲内であり、全体に比較的纏って出土している。

**出土遺物** 総計12点で、石器組成はナイフ形石器1点、ビエス・エスキュー1点、2次加工のある剝片1点、剝片8点、碎片1点である。1はナイフ形石器で縦長剝片を素材としている。2はビエス・エスキューで、上下両端に刃ぶれが認められるが、上端と下端では刃部が継位に約90°の差が生じており、ねじれの相対関係にある。3は2次加工のある剝片で、下端の一部に細かな2次加工痕が認められる。

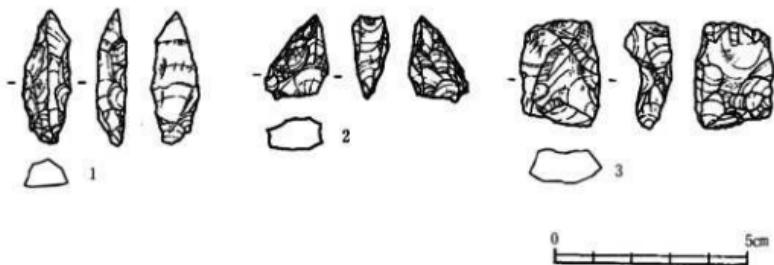


図20 第14ブロック出土遺物実測図

表18 第14ブロック出土石器計測表

母岩 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の 位置	裏面 調整	欠損の 有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-14-16	ナイフ形石器	3.3	1.2	0.7	55°	3.0	2側刃	無	無	無	珪質頁岩
2	S-14-11	ビエス・エスキュー	2.0	1.6	0.9	60° 40°	2.2	—	—	無	有	黒曜石
3	S-14-9	2次加工ある剝片	2.6	2.0	1.2	—	6.1	下端	無	無	無	黒曜石

表19 第14ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	ナイフ形 石 器	尖頭器	石斧	標器	削器	ビエス・ エスキュー	2次加工 ある剝片	使用痕 ある剝片	石斧	削器	剝片	砂片	石核	敲石	標片	計
珪質頁岩1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
黒曜石1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	2
黒曜石2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	2
黒曜石3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	2
黒曜石4	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2	—	—	—	—	3
黒曜石5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
計		1	—	—	—	—	1	1	—	—	—	7	1	—	—	—	11

**母岩別資料・接合資料** 石材は2種、母岩は計6種に識別し得た。ナイフ形石器が珪質頁岩製である以外はすべて黒曜石であり、主体を成している。しかしながら母岩は小さく分類された上、全体的に数量も少ないので検討できない。接合資料は皆無である。

**まとめ** 数量が少ないため、具体的な検討は不可能である。

### 7. 第15ブロック (図21、22、表20~22、図版5、8)

**出土状況** 第14ブロックの東側、第16ブロックの西側に隣接するブロックで、当遺跡西側に入り込んでいる谷津に面した縁辺部に形成されている。石器群はソフトローム層上部を中心として出土しており、最大レベル差0.45mを計る。平面分布は最大幅17mを計り、弓状の平面形を呈している。やや散漫な出土状況である。

**出土遺物** 総計14点で、石器組成は削器2点、剥片4点、碎片5点、石核1点、礫片1点である。1、2は削器である。2は1側辺を調整し、1は2側辺を調整するが、1側辺は比較的鋭利に、2側辺は平坦に加工が施されている。3は石核で、横長剥片を生産したものである。

**母岩別資料・接合資料** 石材は4種、母岩は計10種に識別し得た。石材では黒曜石が主体を成しているが、7種の母岩に分類可能で、数量に比べて極めて多い状況を呈している。そうし

表20 第15ブロック出土石器組成表

石材	器種	タイプ 石	尖頭器	石 離	挫 器	削 器	ビエス・ エスキー	2次加工 ある剥片	使 用 痕	石 核	剥 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	礫 片	計
珪質頁岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.7	-	-	-	-	7.7
チャート	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.7	-	-	-	-	7.7
黒曜石	数量	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	3	4	1	-	-	10
	%	-	-	-	-	15.5	-	-	-	-	-	23.0	30.7	7.7	-	-	76.9
砂岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.7	7.7	
計	数量	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	4	5	1	-	1	13
	%	-	-	-	-	15.5	-	-	-	-	-	30.7	38.4	7.7	-	7.7	100

表21 第15ブロック出土石器計測表

辨認 番号	遺物番号	器種	幅	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位 置	裏面	欠損の有 無	使用痕	石材
				長さ	幅	厚さ							
1	S-17-14	削	圓	3.6	2.3	1.1	70°	7.3	2側辺	有	無	無	黒曜石
2	S-17-6	削	圓	2.8	1.7	0.6	40°	2.9	1側辺	有	無	無	黒曜石
3	S-14-21	石核	圓	4.6	3.0	1.9	-	22.8	-	-	無	一	黒曜石

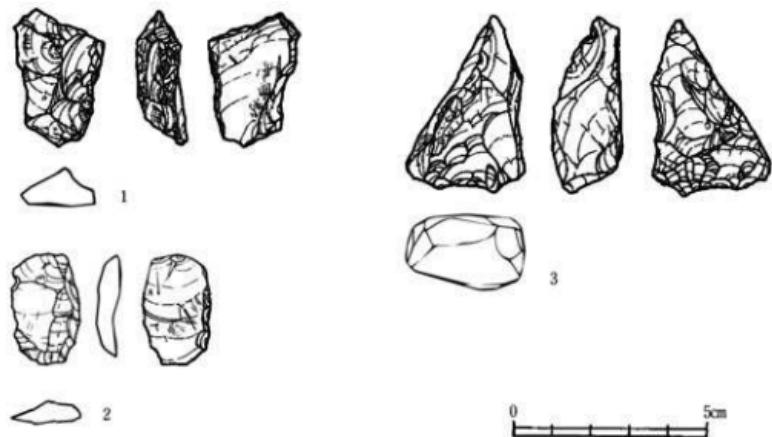


図21 第15ブロック出土遺物実測図

表22 第15ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種 ナイフ形 石 器	尖頭器	石 鎌	擦 器	削 器	ビエス- エスキード	2次加工 ある剥片	使 用 痕 ある剥片	石 矛	削 片	剥 片	碎 片	石核	敲石	礫 片	計
珪質頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
チャート 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
黒曜石 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
黒曜石 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
黒曜石 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
黒曜石 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	2
黒曜石 5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2
黒曜石 6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
黒曜石 7	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
計	-	-	-	-	2	-	-	-	-	4	5	1	-	1	13	

た中にあって削器 2 点が同一母岩より成っていることは注目できる。接合資料は皆無である。

まとめ 利器を中心とした櫛りが認められるが、数量に比べて石材・母岩が多岐にわたっており、具体的なブロックの性格について検討することができない。

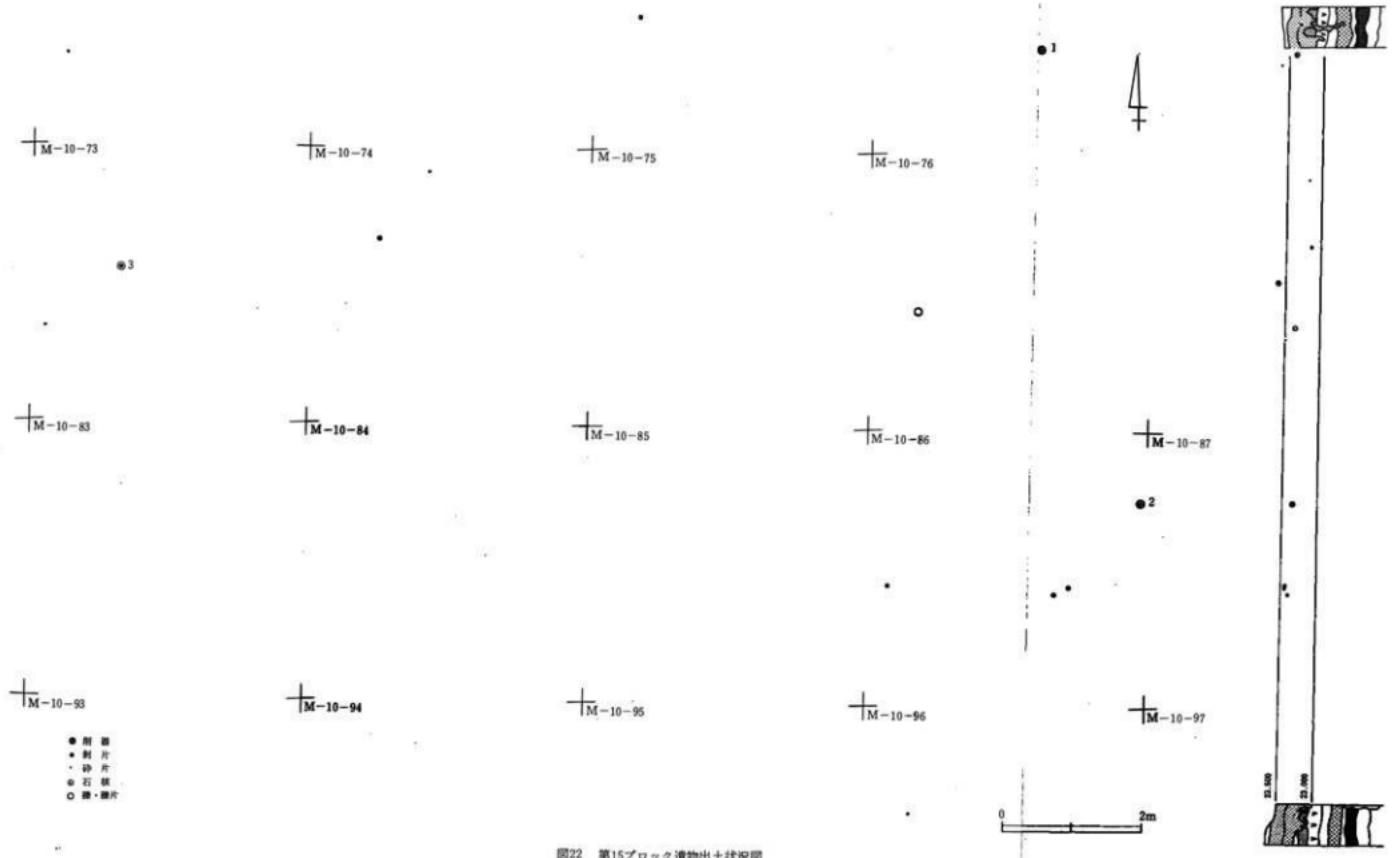


図22 第15ブロック遺物出土状況図

### 8. 第16ブロック (図23~25、表23~26、図版8、9)

**出土状況** 第15ブロックの東側に隣接するブロックで、遺跡西側に入り込んでいる谷津に面した縁辺部に形成されている。石器群はソフトローム層上部を中心としてVI層まで出土しており、最大レベル差0.7mを計る。平面分布は長径15m、短径5mの長楕円形の範囲内であり、比較的密な分布状況を示しているが、中央部には剝片、碎片が集中し、周辺に利器が分布する傾向が認められる。

**出土遺物** 総計52点で、石器組成はナイフ形石器1点、尖頭器1点、石錐1点、削器1点、ピエス・エスキュー2点、剝片18点、碎片20点、石核2点、敲石2点、礫片4点である。ナイ

表23 第16ブロック出土石器組成表

石材	部種	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 錐	攝 器	削 器	ピエス・ エスキュー	2次加工 ある剝片	使用痕 ある剝片	石 斧	削 片	剝 片	碎 片	石 核	敲 石	礫 片	計
安山岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	3	—	—	—	5
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.0	6.0	—	—	—	10.0
珪質頁岩	数量	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	1	—	—	4
	%	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.0	—	2.0	—	—	8.0
頁岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	2
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.0	—	2.0	—	—	4.0
黒曜石	数量	—	1	1	—	1	2	—	—	—	—	15	17	—	—	—	37
	%	—	2.0	2.0	—	2.0	4.0	—	—	—	—	28.0	32.0	—	—	—	70.0
砂岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	4
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.0	4.0	8.0
計	数量	1	1	1	—	1	2	—	—	—	—	20	20	2	2	2	52
	%	2.0	2.0	2.0	—	2.0	4.0	—	—	—	—	38.0	38.0	4.0	4.0	4.0	100

表24 第16ブロック出土石器計測表

標 番 号	遺 物 番 号	器 種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の 位 置	裏面 調整	欠損の 有 無	使用痕	石 材
			長 さ	幅	厚 さ							
1	S-16-10	ナイフ形石器	(3.2)	2.0	0.7	30°	3.8	2側辺	無	有	無	珪質頁岩
2	S-16-40	尖頭器	(2.8)	1.5	0.6	刃先角 20°	1.6	2側辺	有	有	無	黒曜石
3	S-16-19	石錐	3.0	1.6	0.7	刃先角 35°	2.4	2側辺	一部有	無	無	黒曜石
4	S-16-15	削器	3.5	2.1	0.8	45°	4.3	1側辺	無	無	有	黒曜石
5	S-16-13	ピエス・エスキュー	1.6	1.2	0.4	45° 40°	0.7	—	—	無	有	黒曜石
6	S-16-37	ピエス・エスキュー	(1.6)	1.2	0.7	55°	1.3	—	—	有	有	黒曜石
7	S-16-43	石核	4.3	2.7	1.6	—	15.2	—	—	無	—	珪質頁岩
8	S-16-5	石核	3.6	2.8	2.1	—	16.1	—	—	無	—	頁岩
9	S-16-50	敲石	—	(3.9)	(2.9)	—	32.4	—	—	有	有	砂岩
11	S-16-18	敲石	10.0	6.4	5.3	—	497.0	—	—	有	有	砂岩

形石器は1で、刃先部を欠損する。縦長剣片を素材とし、2側刃を加工するが、背部は細かな調整が施されており、左側刃は抉るような形状を呈している。尖頭器は2で、基部を欠損する。石錐は3で、縦長剣片を素材とする。削器は4で、縦長剣片を素材とする。二次的調整により刃部を造り出しており、使用痕も認められる。ビエス・エスキューは5、6で、5は上下両端に刃つぶれが認められるが、6は上端を欠損し、下端に刃つぶれが認められる。石核は7、8で、いずれも横長剣片を生産したものである。敲石は9、11で、欠損品であるが、いずれも敲打痕が認められる。

**母岩別資料・接合資料** 石材は5種、母岩は計19種に識別し得た。石材から見ると黒曜石が主体的であるが、母岩は多岐にわたっており、特に黒曜石以外の石材においては1点1母岩が大部分を占める。接合資料は1例のみで、礫片どうしの接合である。

**まとめ** 黒曜石を主体とするブロックであるが、2点の石核はそれぞれ頁岩、珪質頁岩であり、単独の母岩として出土する。また、利器に欠損品が多いことも指摘できる。母岩が多岐にわたっていることを考え併せると、廃棄の色彩がやや濃いものと言えるかも知れない。

表25 第16ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	ナイフ石	尖頭器	石錐	撥器	削器	ビエス・エスキュー	2次加工ある剣片	使用痕有る剣片	石斧	削片	剣片	粹片	石核	敲石	礫片	計
安山岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	3
安山岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
安山岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
珪質頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
珪質頁岩 2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
珪質頁岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2
頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
頁岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
黒曜石 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	3
黒曜石 2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	4	-	-	-	-	7
黒曜石 3	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	4	-	-	-	-	7
黒曜石 4	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	5	3	-	-	-	-	10
黒曜石 5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	4
黒曜石 6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-	5
黒曜石 7	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
砂岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
砂岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
砂岩 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
計	1	1	1	-	1	2	-	-	-	20	20	2	2	2	2	52	

■ 6

▲ 2

+ M-10-57

+ M-10-58

+ M-10-59

■ 11

▲ 3

+ M-10-67

+ M-10-68

+ M-10-69

□ 9

● 4  
■ 5

○ 8

- ▲ ナイフ形石器
- ▲ 角端状石器
- ▲ 石 鋸
- 刮 剣
- ピクス・エスキース
- 刃 片
- 鋸 片
- 石 板
- 角 端 石
- 鋸・鋸片

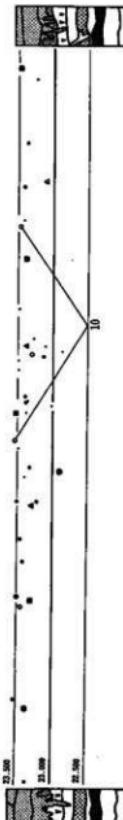
+ M-10-77

+ M-10-78

+ M-10-79



図23 第16ブロック遺物出土状況図



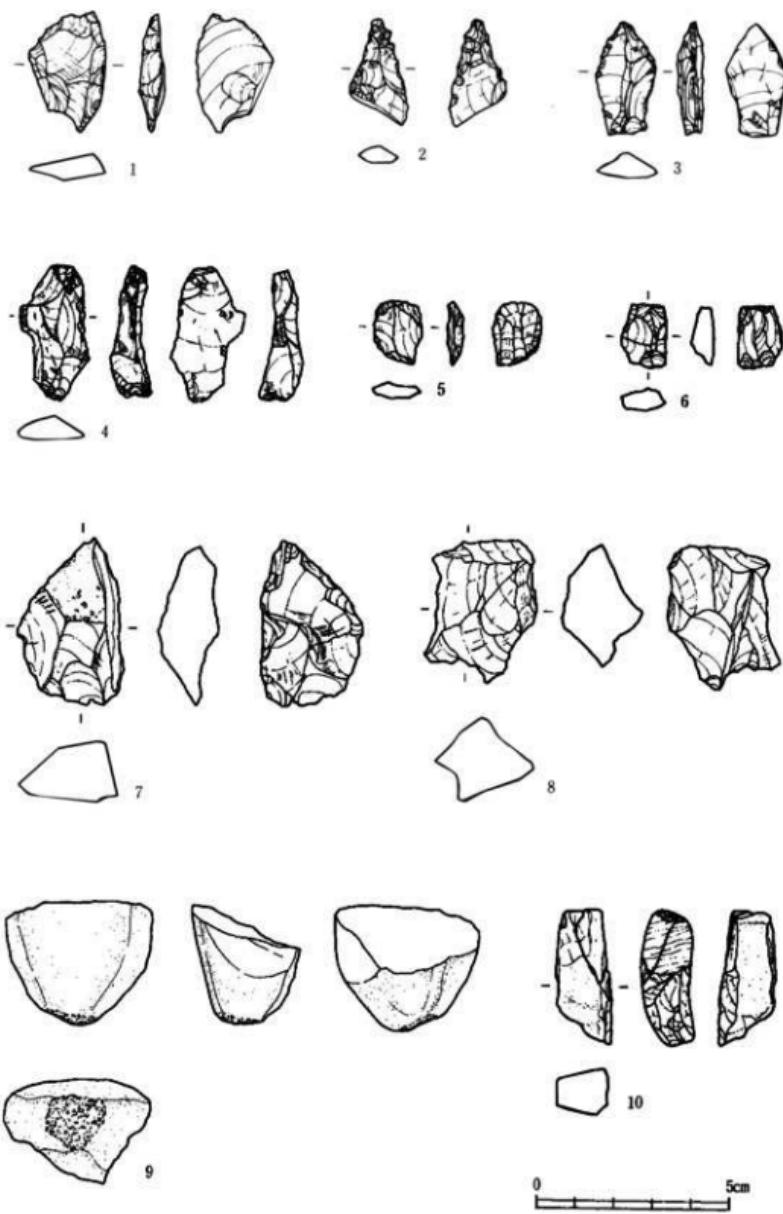


図24 第16ブロック出土遺物実測図(1)

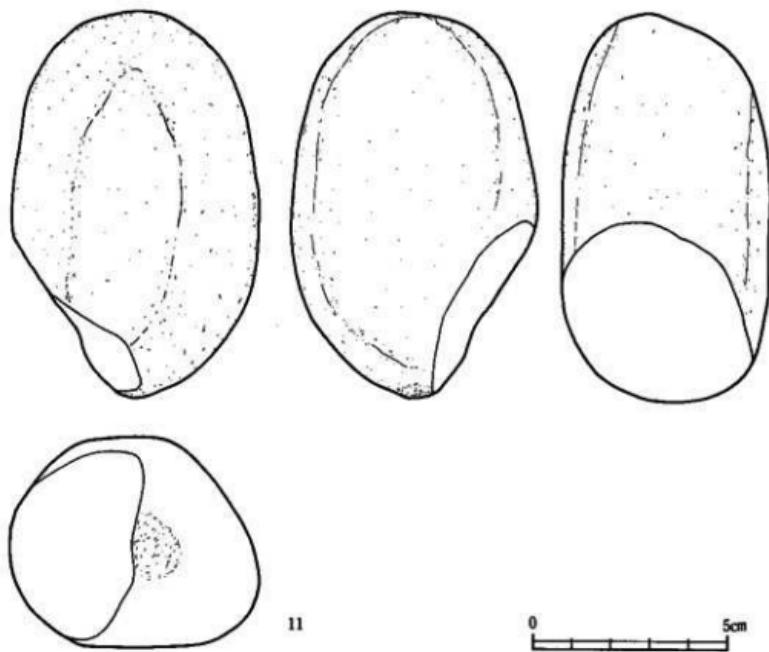


図25 第16ブロック出土遺物実測図(2)

表26 第16ブロック接合資料一覧表

擇出番号	母岩別資料	内 訳	内 容	数 量
10	珪質頁岩 3	礫片 2	(S-16-44)+(S-16-53)	2

#### 9. 第22ブロック (図26、27、表27~29、図版5)

**出土状況** 権現後遺跡との境界に展開する小規模な谷津の奥部に面した傾斜部に形成されており、最大比高差約0.3mを計る。礫群はいずれもソフトローム層下部より出土しており、レベル差はほとんどない。また、平面分布は径1.7mの円形範囲内に小さく纏った状況である。

**出土遺物** 総計11点で、すべて礫片である。いずれも受熱し、表面及び割れ口が赤化した状況が認められる。

**母岩別資料・接合資料** 石材は石英斑岩と砂岩である。石英斑岩は4種、砂岩は2種の母岩に識別し得る。接合資料は石英斑岩の礫片2点の接合1例の他、図示していないが砂岩の接合1例が認められる。いずれも完形に復元し得るものではない。

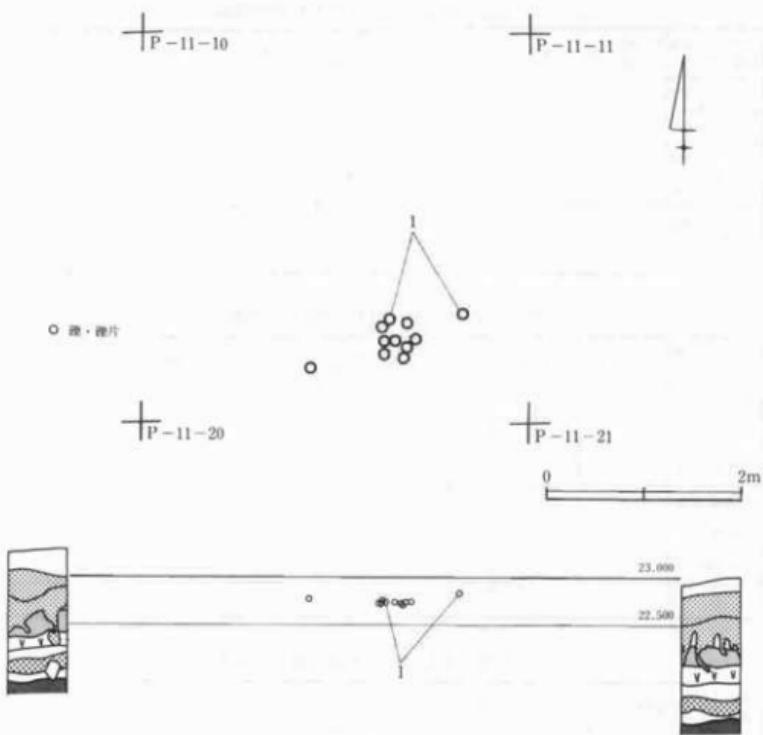


図26 第22ブロック遺物出土状況図

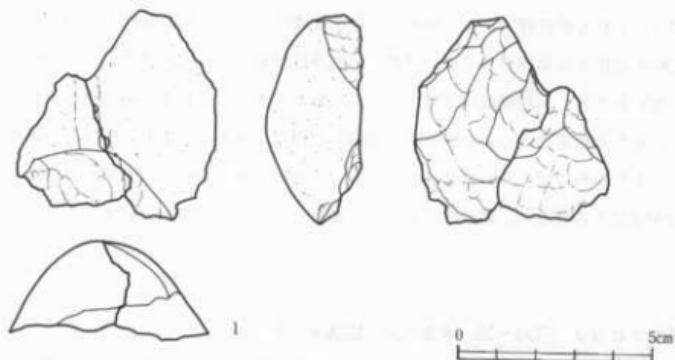


図27 第22ブロック出土遺物実測図

表27 第22ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石 削 片	尖端器	石 錐	搔 器	削 器	ビエス・ エスキース	2次加工 ある削片	使 用 石 片	石 斧	削 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	標 片	計
砂 岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27.3	27.3	
石英斑岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	8	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	72.7	72.7	
計	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11	11	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	100	

表28 第22ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	ナイフ形 石 削 片	尖端器	石 錐	搔 器	削 器	ビエス・ エスキース	2次加工 ある削片	使 用 石 片	石 斧	削 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	標 片	計
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	
砂岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	
石英斑岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	
石英斑岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	
石英斑岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	
石英斑岩 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11	11	

表29 第22ブロック接合資料一覧表

標記番号	母岩別資料	内 訳	内 容	数 量
1	石英斑岩 1	標片 2	(S-22-5)+(S-22-11)	2

まとめ いずれも破碎砾であり、極めて小規模な砾群である。接合資料も2例あるのみであるが、比較的近接する第28ブロックの砾群との関連性が考えられる。ブロック間の接合資料は認められないものの、石材構成はまったく同一である。また、砂岩1と第28ブロック砂岩2は、受熱しているため断定できないが、極めて類似した母岩と言える。また、いずれの砾片も受熱しているにもかかわらず、それに関連した状況、すなわち周辺ロームの受熱の痕跡あるいは炭化物の集中は認められない。数量的にみても、拠点となるべきブロックは他に求めなければならない。

#### 10. 第23ブロック(図28~30、表30~33、図版6、9)

出土状況 台地南側に展開する谷津に面した縁部に形成され、一部第3文化層第24ブロックと重複する。石器群はソフトローム層からIV層にかけて出土しており、最大レベル差0.60m

+ 10-13-31

- ▲ ティフ形石器
- ▲ 大切器
- 砕器
- 刃器
- 2次加工ある剣片
- 使用痕ある剣片
- 剣片
- 砕片
- 石核
- 鋸石

+ 10-13-41

+ 10-13-51

+ 10-13-30

+ 10-13-40

+ 10-13-50

+ 10-13-39

+ N-13-49

+ N-13-59

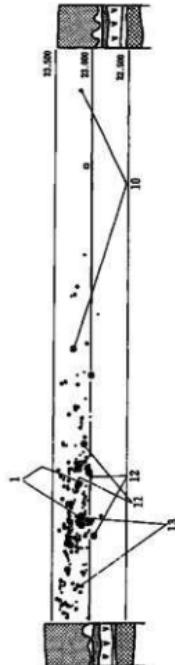


図28 第23ブロック遺物出土状況図

を計る。平面分布は長径10m、短径7.5mの橢円形の範囲内であるが、特に南側において密な状況を呈している。

**出土遺物** 総計209点で、石器組成はナイフ形石器3点、搔器1点、削器1点、2次加工のある剝片2点、使用痕のある剝片2点、剝片91点、碎片100点、石核8点、敲石1点である。1、

表30 第23ブロック出土石器組成表

石材	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 核	搔 器	削 器	ビエス・ エスキュー ある剝片	2次加工 ある剝片	使用痕 ある剝片	石 斧	削 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	破 片	計	
安山岩	数値	1	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3	1	—	—	8	
	%	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	1.4	1.4	0.5	—	—	3.8	
頁岩	数値	2	—	—	—	—	—	—	—	—	4	1	—	—	—	7	
	%	0.9	—	—	—	—	—	—	—	—	1.9	0.5	—	—	—	3.3	
黒曜石	数値	—	—	—	1	1	—	2	2	—	—	84	96	7	—	—	193
	%	—	—	—	0.5	0.5	—	0.9	0.9	—	—	40.2	45.1	3.3	—	—	92.4
凝灰岩	数値	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.5	—	0.5	
計	数値	3	—	—	1	1	—	2	2	—	—	91	100	8	1	—	209
	%	1.4	—	—	0.5	0.5	—	0.9	0.9	—	—	43.5	48.0	3.8	0.5	—	100

表31 第23ブロック出土石器計測表

辨別番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(kg)	調整の位置	裏面調整	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-23-14 S-23-15	ナイフ形石器	7.7	2.7	1.1	50°	18.5	2側辺	無	有	無	買岩
2	S-23-173	ナイフ形石器	3.3	1.8	0.8	30°	4.3	2側辺	無	無	無	安山岩
3	S-23-47	削器	2.7	1.6	0.7	40°	2.9	全周	無	無	有	黒曜石
4	S-23-201	搔器	3.7	4.2	1.0	65°	16.5	上端以外 (刃部)	無	無	無	黒曜石
5	S-23-120	石核	4.4	2.1	1.0	—	6.3	—	—	—	—	黒曜石
6	S-23-163	石核	4.0	4.1	2.0	—	26.8	—	—	—	—	黒曜石
7	S-23-165	石核	3.3	2.5	2.3	—	14.3	—	—	—	—	黒曜石
8	S-23-126	石核	2.6	2.8	1.3	—	6.6	—	—	—	—	黒曜石
9	S-23-192	石核	4.1	3.1	1.5	—	16.5	—	—	—	—	黒曜石
10	S-23-60	石核	5.4	3.5	3.4	—	79.8	—	—	—	—	安山岩
11	S-23-202	石核	4.4	2.8	2.7	—	29.5	—	—	—	—	黒曜石
12	S-23-131	石核	2.6	2.0	1.7	—	7.7	—	—	—	—	黒曜石
14	S-23-42	敲石	6.0	3.6	2.5	—	56.9	—	—	有	有	凝灰岩
15	S-23-9	2次加工ある剝片	3.3	1.7	0.9	—	1.1	上端、1側辺	有	無	—	黒曜石
16	S-23-138	2次加工ある剝片	2.5	1.1	0.7	55°	1.8	上端、1側辺	無	無	—	黒曜石
17	S-23-31	使用痕ある剝片	4.1	2.7	1.0	55°	9.0	—	—	無	有	黒曜石
18	S-23-95	使用痕ある剝片	2.9	3.2	0.9	20°	6.1	—	—	無	有	黒曜石

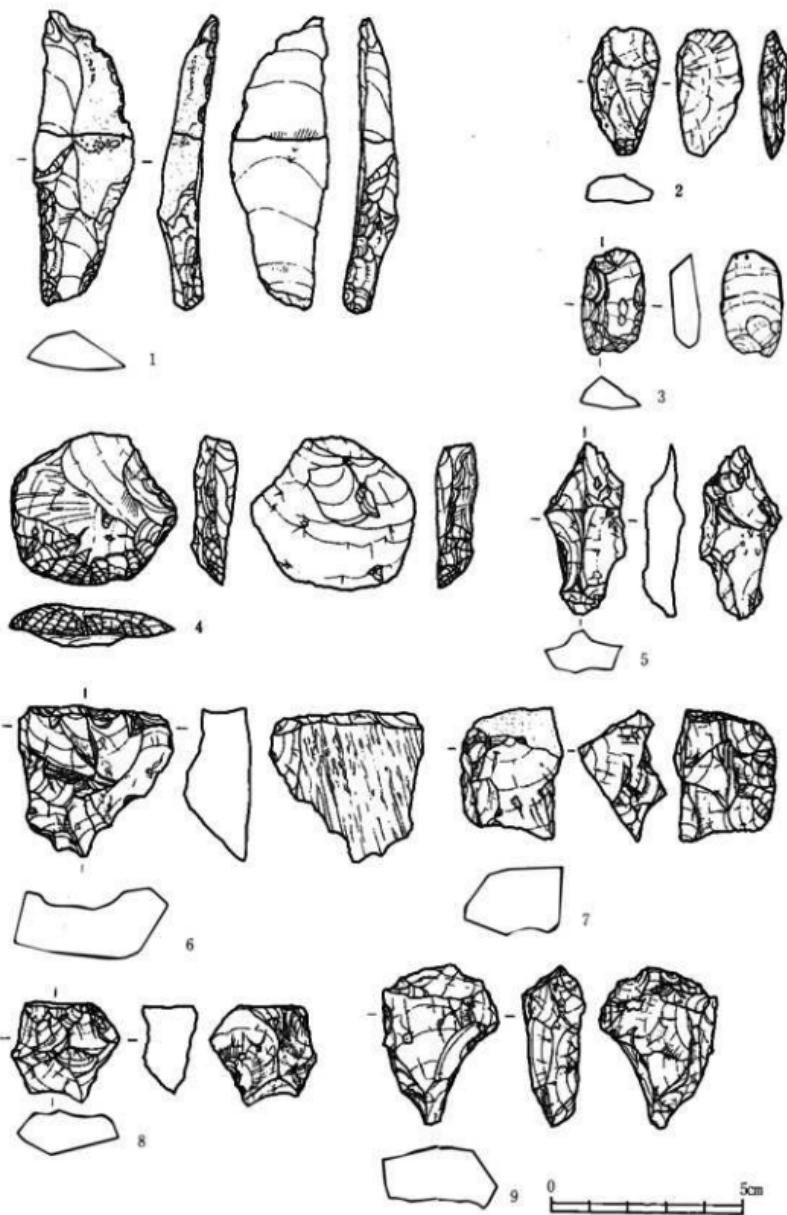


図29 第23ブロック出土遺物実測図(1)

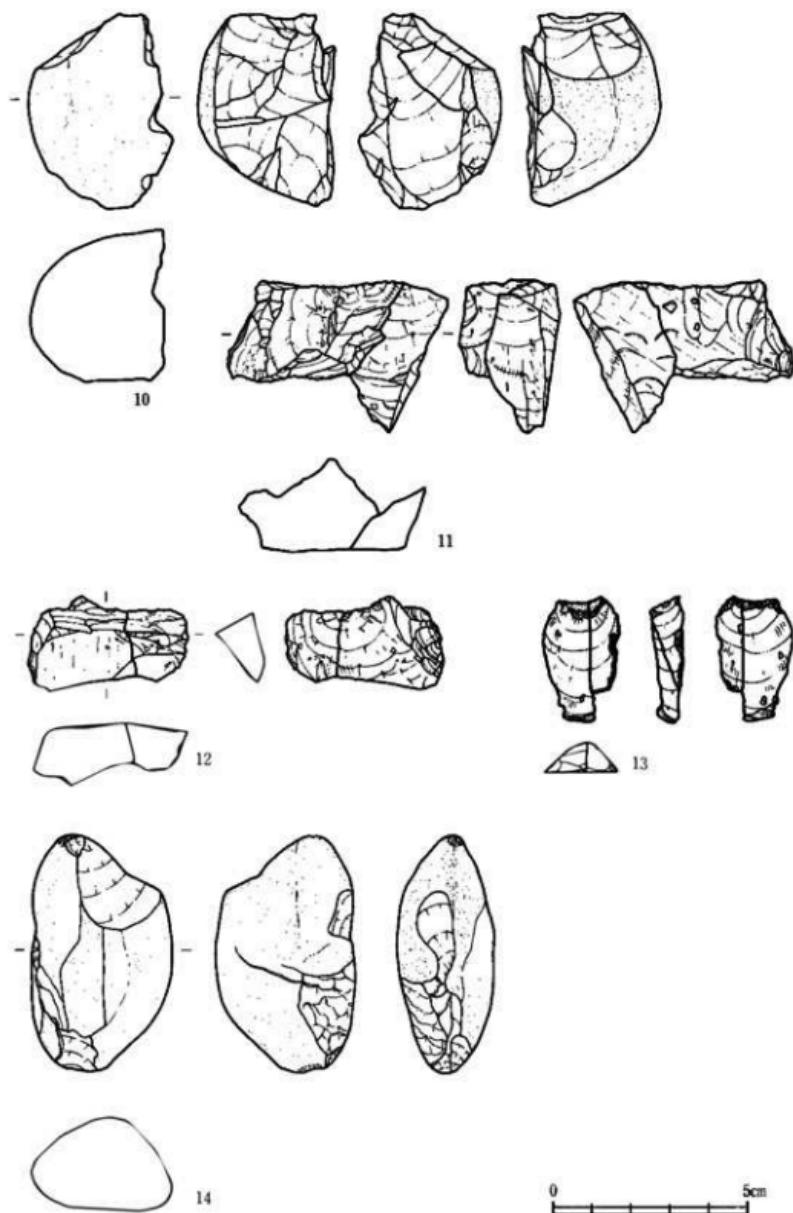


図30 第23ブロック出土遺物実測図(2)

2はナイフ形石器である。1は縦長剝片を素材としたものだが、表面に一部自然面が見られる。2は横長剝片を素材としたものである。削器は3で、縦長剝片を素材とし、左側辺は刃つぶし加工が施されている。搔器は4で、円盤状の形状を呈している。5~12は石核で、いずれも横長剝片を生産したものである。14は敲石で欠損するが、両端に敲打痕が認められる。

**母岩別資料・接合資料** 石材は4種、母岩は計14種に識別し得た。黒曜石が他を圧倒的に上回っており、全体の92.4%を占めている。利器、石核等多量に出土するが、特に黒曜石における石核は同一母岩に識別され、大形の原石が存在したものと考えられる。黒曜石は夾雜物を多量に含むものである。また、安山岩の石核と尖頭器が同一母岩であることも注目できよう。接合資料はナイフ形石器の欠損1例、石核と剝片の接合3例、剝片どうしの接合1例である。黒曜石の他、安山岩などの接合も認められる。

表32 第23ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	石器										計					
		ナイフ形 石 器	尖頭器	石 核	搔 器	削 器	ビニス・ エスキュー	2次加工	使用 度	ある剝片	ある剝片						
安山岩 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	1	—	—	4		
安山岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	2		
安山岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1		
安山岩 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1		
頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	2		
頁岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1		
頁岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	2		
頁岩 4	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2		
黒曜石 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	26	16	—	—	—	42		
黒曜石 2	—	—	—	—	1	—	1	1	—	41	35	—	—	—	79		
黒曜石 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1		
黒曜石 4	—	—	—	1	—	—	1	1	—	14	5	7	—	—	29		
黒曜石 5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	2		
凝灰岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1		
計		3	—	—	1	1	—	2	2	—	—	90	61	8	1	—	169

表33 第23ブロック接合資料一覧表

標図 番号	母岩別資料	内 訳	内 容	数 量
1	頁岩 4	ナイフ形石器 2	(S-23-14)+(S-23-15)	2
10	安山岩 1	石核 1、剝片 1	(S-23-30)+(S-23-60)	2
11	黒曜石 4	石核 1、剝片 1	(S-23-10)+(S-23-202)	2
12	黒曜石 4	石核 1、剝片 1	(S-23-131)+(S-23-206)	2
13	黒曜石 4	剝片 2	(S-23-181)+(S-23-195)	2

**まとめ** 小規模に纏ったブロックと言える。石器組成は多岐にわたっており、かつ欠損品の少ないことが特徴の1つとして挙げられる。石核が多量に出土することも考えると、黒曜石を中心として安山岩、頁岩の剥片生産から石器調整までの性格を有しており、自己完結的なブロックとして捉えられよう。なお、利器は縦長剥片を素材としたものを中心とするが、石核はすべて横長剥片を生産したものであることには注目する必要があろう。

### 11. 第26ブロック (図31、32、表34~37、図版6)

**出土状況** 台地南側に展開する谷津と権現後遺跡との境界に展開する小規模な谷津に面しており、斜面部に形成されている。最大比高差約0.3mを計る。石器群はいずれもソフトローム層より出土しており、最大レベル差0.5mを計る。平面分布は径4mの円形範囲内であり、小規模に纏った状況を呈している。

**出土遺物** 総計28点で、石器組成は2次加工のある剥片1点、剥片22点、碎片4点、石核1点である。1は石核で、横長剥片を生産したものである。

**母岩別資料・接合資料** 石材は不明なものを含めて5種、母岩は計7種に識別し得た。頁岩

表34 第26ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石	尖頭器	石 鑿	攝 器	削 器	ピエス・ エスキュー	2次加工 ある剥片	使 用 施 設	石 羽	削 片	剥 片	碎 片	石 極	巣 石	轟 片	計
安 山 岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3.6	-	-	-	3.6
頁 岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11	1	1	-	13
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	39.1	3.6	3.6	-	46.3
チャート	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	-	-	5
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14.3	3.6	-	-	17.9
砂 岩	数量	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	2	-	-	4
	%	-	-	-	-	-	-	3.6	-	-	-	-	3.6	7.1	-	-	14.3
不 明	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	5
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17.9	-	-	-	17.9
計	数量	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	22	4	1	-	28
	%	-	-	-	-	-	-	3.6	-	-	-	-	78.5	14.3	3.6	-	100

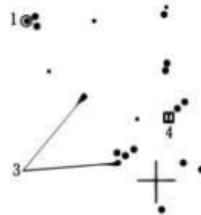
表35 第26ブロック出土石器計測表

押区 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位 置	裏面 調整 有無	欠損の 有無	使用痕	
			長さ	幅	厚さ							
1	S-26-13	石核	7.0	4.9	3.9	-	109.0	-	-	無	-	頁岩
4	S-26-22	2次加工ある剥片	5.0	2.7	1.8	70°	17.5	1側面	無	無	無	砂岩

が主体的な状況であるが、数量的にはいずれも少ない。接合資料は剥片どうしの接合2例である。

P-12-57

P-12-58



P-12-67

- 2次加工ある剥片
- 剥片
- 破片
- 石核

2

0 2m

P-12-77

P-12-78



2  
3

22.000

21.500

21.000



図31 第26ブロック遺物出土状況図

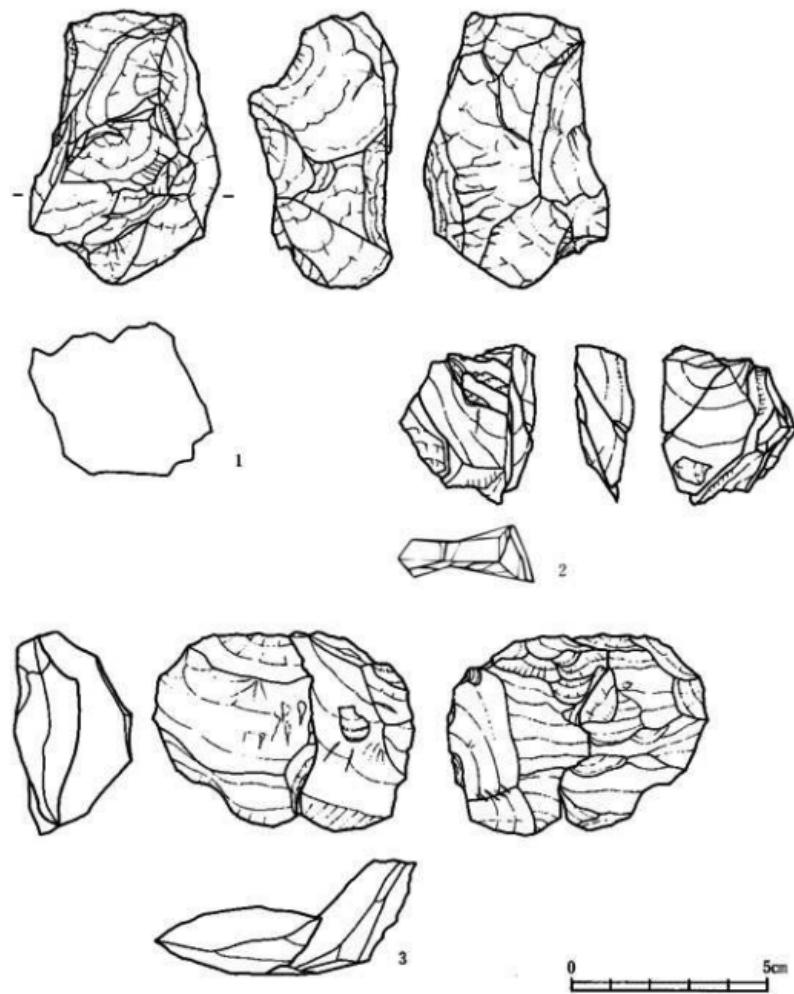


図32 第26ブロック出土遺物実測図

まとめ 小規模に纏ったブロックであるが、石器組成は貧弱であり、数量的にも少ないところから充分な検討には堪えない。しかしながら、頁岩1の資料には見るべきものがあり、剥片生産としての性格を有していると言える。いずれにせよ、他ブロックとの関わりが感じられるブロックである。

表36 第26ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種 ナイフ形 石器	尖頭器	石 鋸	振 器	削 器	ビエス・ エスキーー ある剝片	2次加工用 ある剝片	石 手	削 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	標 片	計	
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
頁 岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	1	1	—	—	11
頁 岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	2
チャート 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—	4
チャート 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
砂 岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	—	4
不 明 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	—	—	—	5
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	22	4	1	—	—	28

表37 第26ブロック接合資料一覧表

擇回 番号	母岩別 資料	内 計	内 容	数 量
2 不 明 1	剥片 5		(S-26-1)+(S-26-2)	5
3 頁 岩 1	剥片 2		(S-26-8)+(S-26-11)	2

## 12. 第28ブロック (図33~35、表38~40、図版 6)

**出土状況** 権現後遺跡との境界に展開する小規模な谷津に面した斜面部に形成されており、最大比高差0.20mを計る。ソフトローム層下部からIV層にかけて出土しており、最大レベル差0.25mを計る。平面分布は長径5m、短径3mの楕円形の範囲内にあり、密な分布状況を呈している。石器群と礫群は平面分布をやや異としており、石器群が南西側に集中する傾向が認められるが、垂直分布においては石器群内に礫群が挟在する状況が認められる。

**出土遺物** 石器群は総計7点で、石器組成は剥片6点、碎片1点である。利器の出土は皆無

表38 第28ブロック出土石器組成表

石材	器種 ナイフ形 石器	尖頭器	石 鋸	振 器	削 器	ビエス・ エスキーー ある剝片	2次加工用 ある剝片	石 手	削 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	標 片	計	
チャート	數量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	1	—	—	—	7
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9.8	1.6	—	—	—	11.4
砂 岩	數量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	16
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	26.2
石英斑岩	數量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	38
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	62.4
計	數量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	1	—	—	—	61
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9.8	1.6	—	—	—	88.6
																100

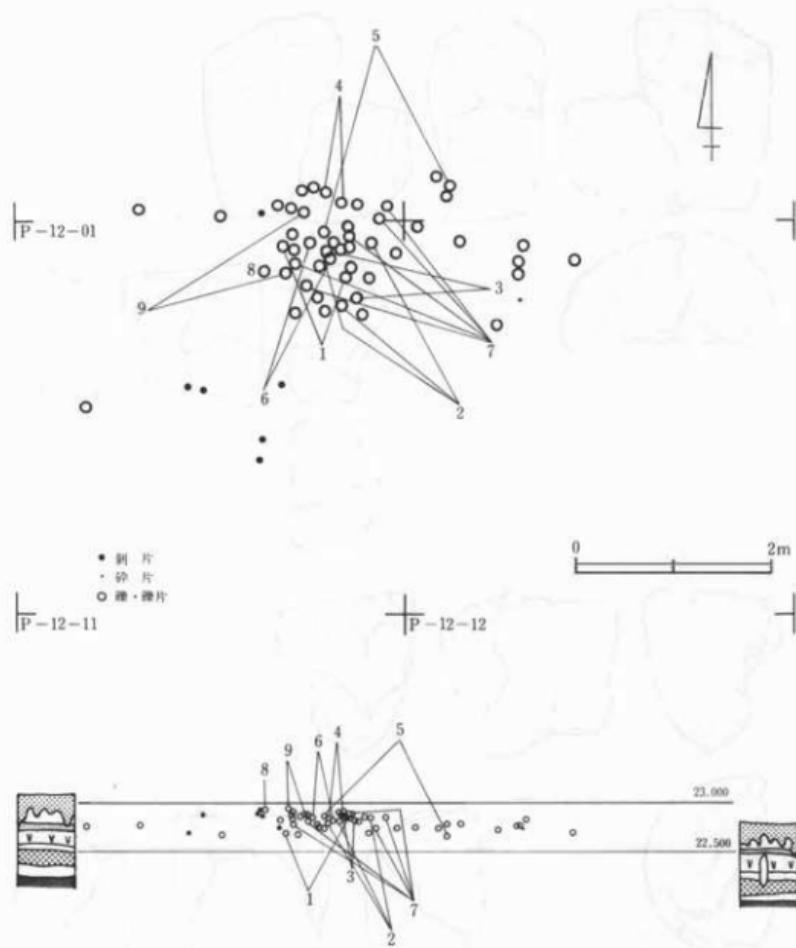


図33 第28ブロック遺物出土状況図

である。礫群は総計54点出土している。いずれも受熱によって比較的小片に破碎されており、表面は部分的に赤化が認められる。また、破碎面にも赤化が多く認められるところである。

**母岩別資料・接合資料** 石器群における石材はチャートで、4種の母岩に識別し得た。接合資料は皆無である。礫群における石材は石英斑岩と砂岩の2種で、母岩は計11種に識別し得た。接合資料は9例あるが、いずれも完形には復元できなかった。

まとめ 石器群については石核、利器等がなく、数量的にも検討に堪える状況ではない。本

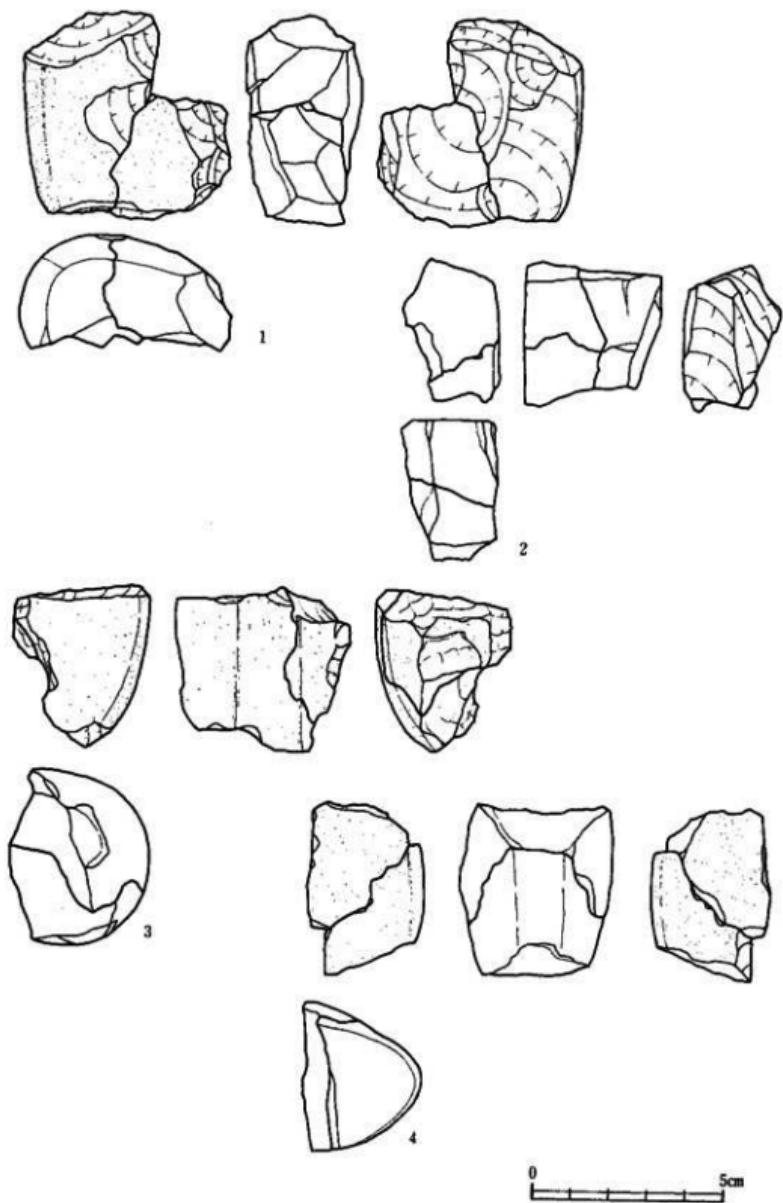


図34 第28ブロック出土遺物実測図(1)

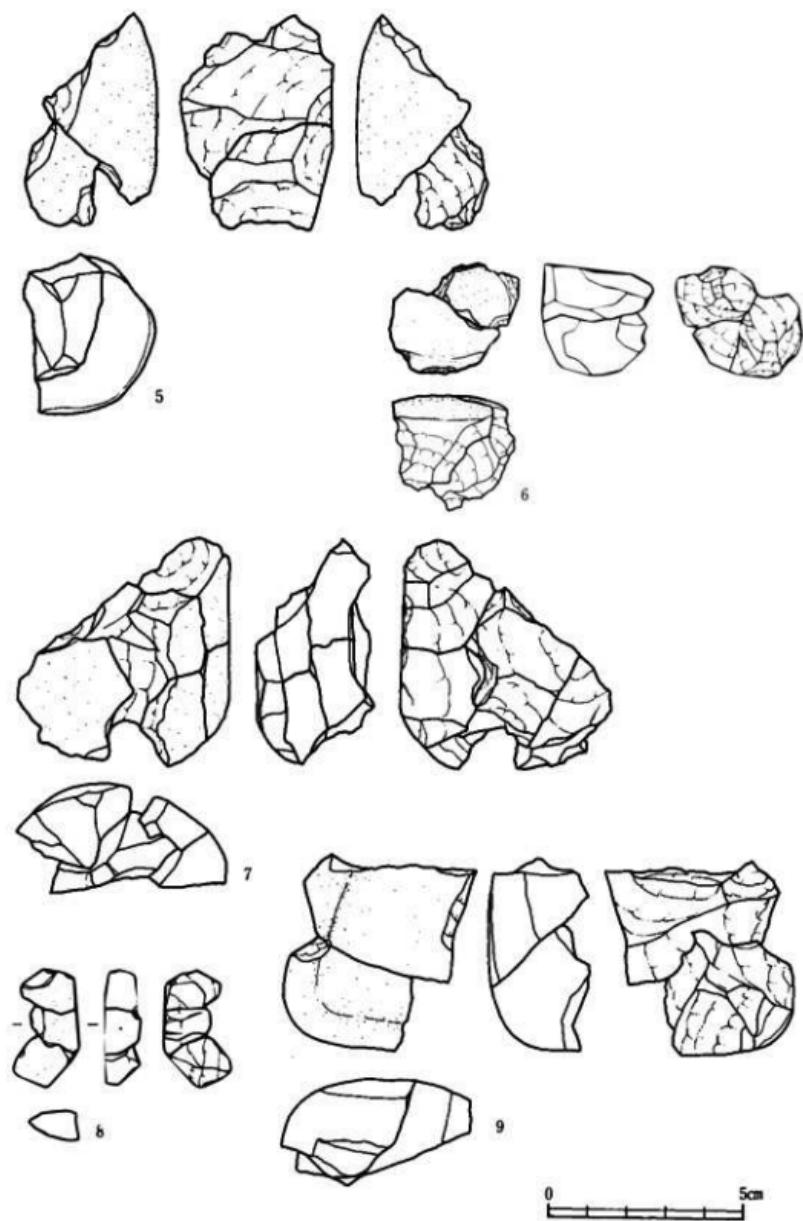


図35 第28ブロック出土遺物実測図(2)

表39 第28ブロック母岩別資料石器組成表

母岩 斜線	石 器	尖頭器	石 錐	刮 削 器	削 器	ビニス・ エスクロ ーク	2次加工 用 具	有 る 削 片	石 斧	削 片	刮 削 片	砂 片	石 核	敲 石	礫 片	計
チャート1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
チャート2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—	4
チャート3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
チャート4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
砂 岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	9
砂 岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	6
砂 岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
石英斑岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	5
石英斑岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	7
石英斑岩3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	14	14
石英斑岩4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
石英斑岩5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
石英斑岩6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
石英斑岩7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
石英斑岩8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	5
計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	1	—	—	54	61	

表40 第28ブロック接合資料一覧表

押回 番号	母岩別資料	内 訳	内 容	数 量
1	石英斑岩8	礫片2	(S-28-8)+(S-28-18)	2
2	石英斑岩4	礫片3	(S-28-14)+(S-28-24)+(S-28-47)	3
3	石英斑岩7	礫片2	(S-28-16)+(S-28-48)	2
4	石英斑岩6	礫片2	(S-28-29)+(S-28-41)	2
5	石英斑岩2	礫片2	(S-28-21)+(S-28-50)	2
6	石英斑岩2	礫片2	(S-28-20)+(S-28-46)	2
7	砂 岩 2	礫片5	(S-28-12)+(S-28-23)+(S-28-27)+(S-28-42)+(S-28-44)	5
8	砂 岩 1	礫片3	(S-28-9)	3
9	砂 岩 1	礫片2	(S-28-6)+(S-28-10)	2

ブロックは礫群が主体となるブロックである。接合資料も多く認められるところであるが、完形に復元し得るものが皆無であることも注意しなければならない。先の第22ブロックの項でも記述したが、本ブロックは第22ブロックとの関連性が考えられるブロックである。ただし、受熱のためやや不明瞭ではあるが、ブロック間相互に同一母岩と考えられるものはない。第22ブ

ロックとの関連性を見た場合、本ブロックは礫群における中心的な性格を有しているとも考えられるが、いずれの礫片も表面及び割れ口が受熱しているにもかかわらず、周辺のロームでは受熱の痕跡あるいは炭化物の集中等は認められなかった。

### 13. 第30ブロック (図36、37、表41~44、図版7、9)

**出土状況** 第2文化層中最も南側に位置し、台地南側に展開する谷津に面した縁辺部に形成されている。石器群はIV層を中心として出土しており、最大レベル差0.50mを計る。平面分布は長径6.0m、短径4.0mの楕円形の範囲内であるが、中央部に密な状況を呈している。利器は周辺部に分布する。

**出土遺物** 総計77点で、石器組成はナイフ形石器1点、削器1点、搔器1点、2次加工のある剝片1点、剝片33点、碎片40点である。1はナイフ形石器で、幅広な縦長剝片を素材としたものである。2側刃加工を施しており、左側辺は急勾配を呈する刃つぶし加工が施される。2は削器で、縦長剝片を素材としたものである。3は搔器である。

**母岩別資料・接合資料** 石材は4種、母岩は計8種に識別し得た。黒曜石が主体を成してお

表41 第30ブロック出土石器組成表

石材	組成														計	
	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 錐	搔 器	削 器	ピエス、 エスキー ある剝片	2次加工 ある剝片	使 用 量 ある剝片	石 斧	削 片	剝 片	碎 片	石 核	敲 石	礫 片	
珪質頁岩	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.3	—	—	—	—	1.3
頁岩	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	4
	数量	1	—	—	—	—	—	—	—	—	3.9	—	—	—	—	5.2
チャート	%	1.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.3
	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
黒曜石	%	—	—	—	1	1	—	1	—	—	29	39	—	—	—	71
	数量	—	—	—	1.3	1.3	—	1.3	—	—	37.7	50.6	—	—	—	92.2
計	数量	1	—	—	1	1	—	1	—	—	33	40	—	—	—	77
	%	1.3	—	—	1.3	1.3	—	1.3	—	—	42.9	51.9	—	—	—	100

表42 第30ブロック出土石器計測表

標 名 番 号	遺 物 番 号	器 種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の 位 置	裏面 調整 有 無	欠損の 有 無	使用痕 有 無	石 材
			長 さ	幅	厚 さ							
1	S-30-6	ナイフ形石器	4.1	2.1	0.8	25°	4.6	2側辺	無	無	無	頁岩
2	S-30-49	削器	(4.0)	(2.6)	1.1	刃先角 55°	9.9	1側辺	無	有	無	黒曜石
3	S-30-5	搔器	3.1	2.1	1.2	75°	7.3	1側辺	無	有	無	黒曜石
5	S-30-22	2次加工ある剝片	4.4	3.2	1.3	40° 50°	16.2	上場、1側辺	無	無	無	黒曜石

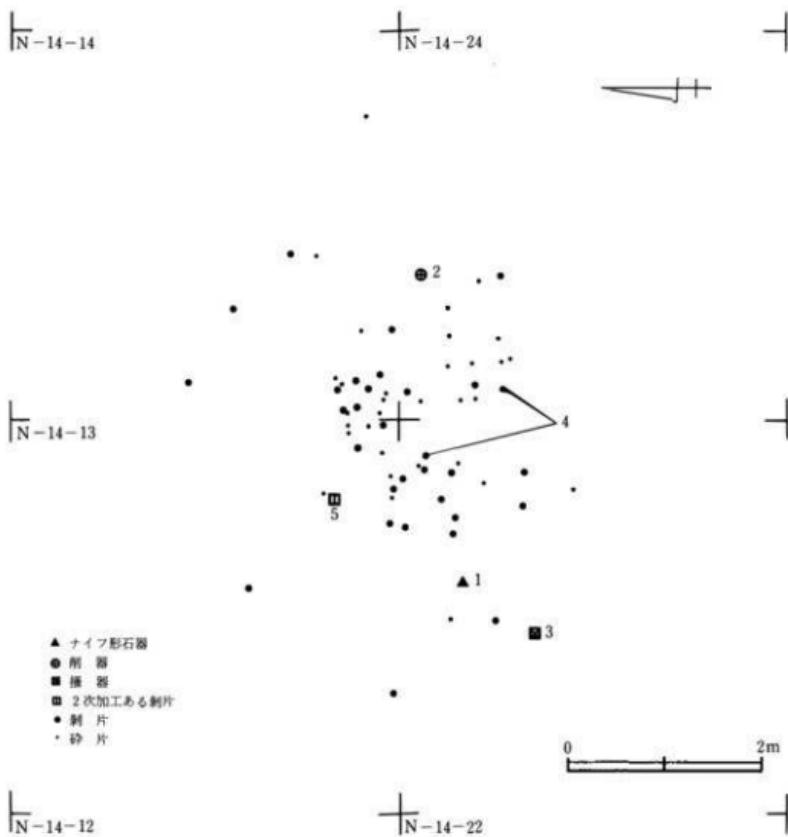


図36 第30ブロック遺物出土状況図

り、他はいずれも稀少である。接合資料は1例で、黒曜石の剥片どうしの接合である。

まとめ 黒曜石を主体とした小規模なブロックである。石器組成は貧弱であり、石核も欠落しているが、剥片生産と石器調整を反映したブロックとして捉えられよう。

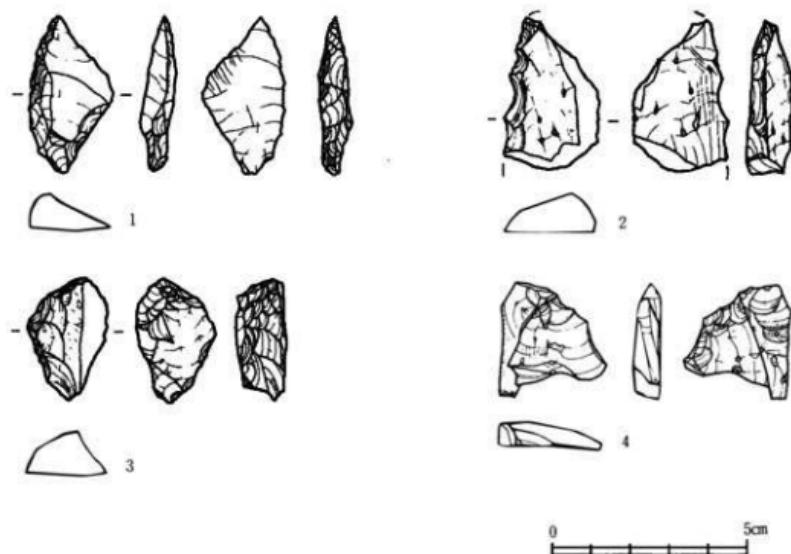


図37 第30ブロック出土遺物実測図

表43 第30ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種 石器	ナイフ形 石器	尖頭器	石 雪	刮 器	削 器	ビエス エスキー	2次加工 ある剥片	使 用 ある剥片	石 犁	削 片	剥 片	石 核	敲 石	礫 片	計
珪質頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
頁 岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2
頁 岩 2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
頁 岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
チャート 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
黒 磷 石 1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	11	12	-	-	-	24
黒 磷 石 2	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	17	16	-	-	-	35
黒 磷 石 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
計	1	-	-	1	1	-	1	-	-	-	33	29	-	-	-	66

表44 第30ブロック接合資料一覧表

標 因 番 号	母岩別資料	内 訳	内 容	数 量
4	黒 磷 石 2	剥片 2	(S-30-14) + (S-30-40)	2

14. 第31ブロック (図38、39、表45~48、図版7、9)

出土状況 台地南側に展開する谷津に面した縁辺部に形成されており、第33ブロックに近接。

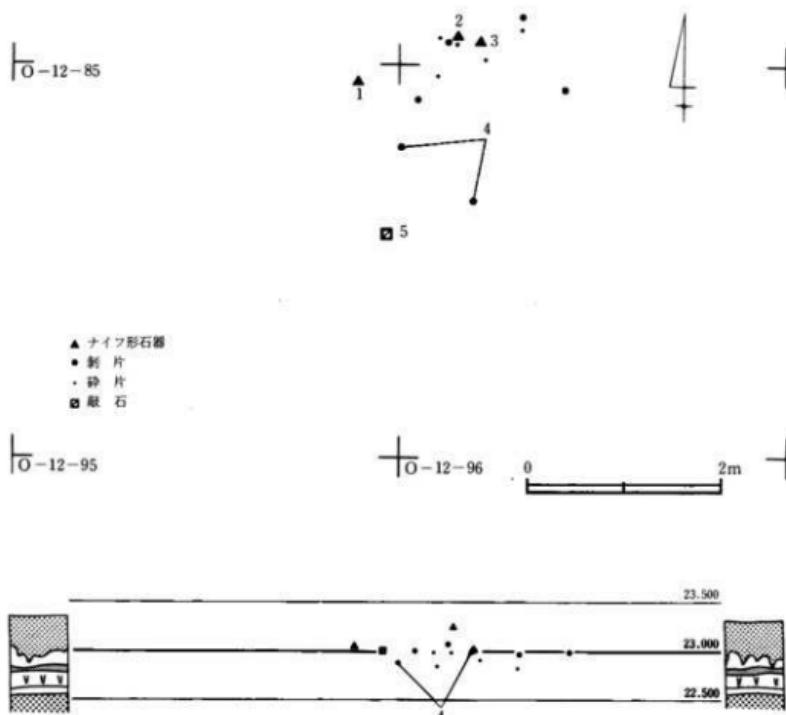


図38 第31ブロック遺物出土状況図

表45 第31ブロック出土石器組成表

石材	器種 石器	ナイフ形 石器	尖頭器	石 鋸	挫 器	削 器	ビエス・ エスキーク	2次加工 ある剝片	使 用 石	石 井	削 片	剃 片	硕 片	石 核	敲 石	礫 片	計
黒 墨 石	数量	3	-	-	-	-	-	-	-	-	4	5	-	-	-	12	
	%	20.0	-	-	-	-	-	-	-	-	27.0	33.0	-	-	-	80.0	
頁 岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13.0	-	-	-	-	13.0	
砂 岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.0	-	7.0	
計	数量	3	-	-	-	-	-	-	-	-	6	5	-	1	-	15	
	%	20.0	-	-	-	-	-	-	-	-	40.0	33.0	-	7.0	-	100	

する。石器群はソフトローム層下部からIV層にかけて出土しており、最大レベル差は0.40mを計る。平面分布は長径4.0m、短径2.2mの橢円形範囲内にあるが、北側において集中する傾向が認められる。

**出土遺物** 総計15点で、ナイフ形石器3点、剝片6点、碎片5点、敲石1点である。1～3はナイフ形石器で、1は横長剝片、2、3は縦長剝片を素材としたものである。1は1側辺が折断面となっている。2、3は1側辺に急角度の刃つぶし加工が施され、3は欠損するがかな

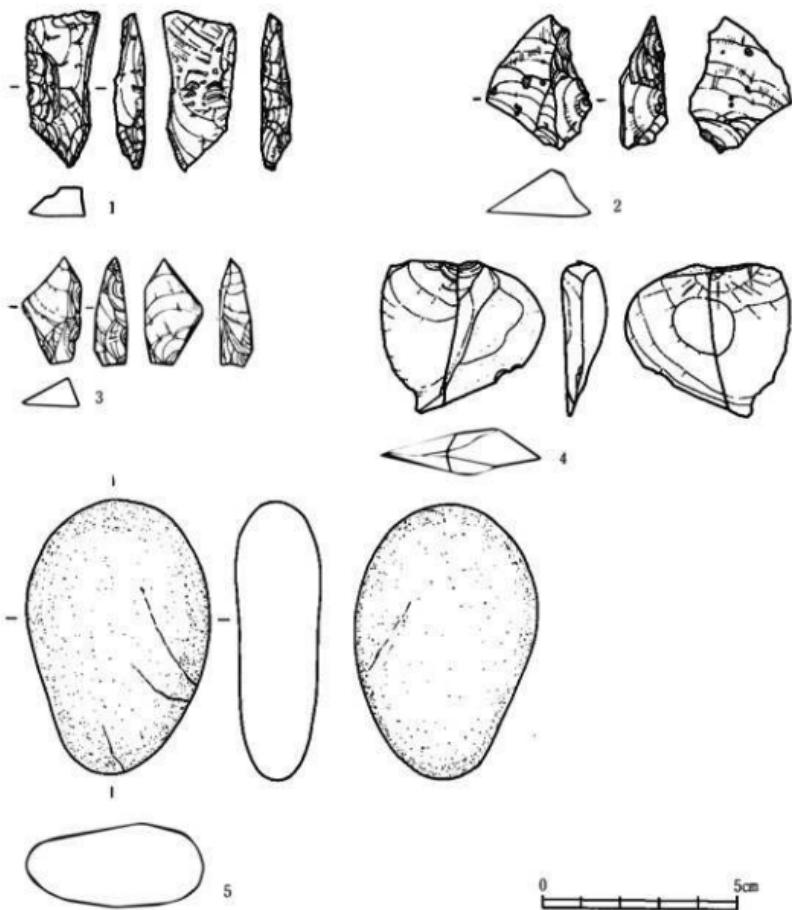


図39 第31ブロック出土遺物実測図

表46 第31ブロック出土石器計測表

探査番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位置	裏面調整	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-31-7	ナイフ形石器	4.0	1.9	0.8	30°	5.7	2側刃	無	有	無	黒曜石
2	S-31-6	ナイフ形石器	(3.6)	2.7	1.2	40°	6.7	1側刃	無	有	無	黒曜石
3	S-31-5	ナイフ形石器	(2.8)	(1.5)	0.9	35°	2.2	1側刃一部	無	有	無	黒曜石
5	S-31-8	敲 石	7.0	4.8	2.2	—	98.1	—	—	無	無	砂岩

表47 第31ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	ナイフ形石器	尖頭器	石錐	擦器	削器	ビエス・2次加工による剥片	使用痕	石斧	削片	剥片	碎片	石核	敲石	標片	計
黒曜石 1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	4	4	—	—	—	—	10
黒曜石 2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2
砂岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
計	3	—	—	—	—	—	—	—	—	6	4	—	1	—	—	14

表48 第31ブロック接合資料一覧表

探査番号	母岩別資料	内訳		内容		数量
		内	外	内	外	
4	頁岩	剥片 2		(0-12-86-4) + (0-12-86-5)		2

りの大形品と考えられる。5は敲石と考えられるが、使用痕は認められない。

**母岩別資料・接合資料** 石材は3種、母岩は計4種に識別し得た。黒曜石が主体を成し、他は稀少であるが、全体に数量は少ない。接合資料は頁岩の剥片どうしの接合1例である。

**まとめ** 極めて小規模に纏ったブロックである。数量の割に利器が多いが、いずれも欠損品であるのもまた特徴として挙げられよう。石器組成が貧弱であり、数量的根拠にも欠けることから、検討するに堪えないが、極めて廃棄の色彩が濃いものとして捉えられよう。

### 15. 第33ブロック(図40、41、表49~52、図版7)

**出土状況** 台地南側に展開する谷津に面した縁辺部に形成されており、第31ブロックに近接する。石器群はソフトローム下部からVI層にかけて出土しており、最大レベル差0.40mを計る。平面分布はおよそ径3mの円形範囲内にあり、小規模に纏った状況を呈している。

**出土遺物** 総計53点で、使用痕のある剥片3点、剥片8点、碎片42点である。使用痕のある剥片は図示していないが、2、3は大形品で、鋭利な剝離面を刃部として幅広く利用している。

**母岩別資料・接合資料** 石材は頁岩と黒曜石の2種で、それぞれ単一の母岩に識別し得た。

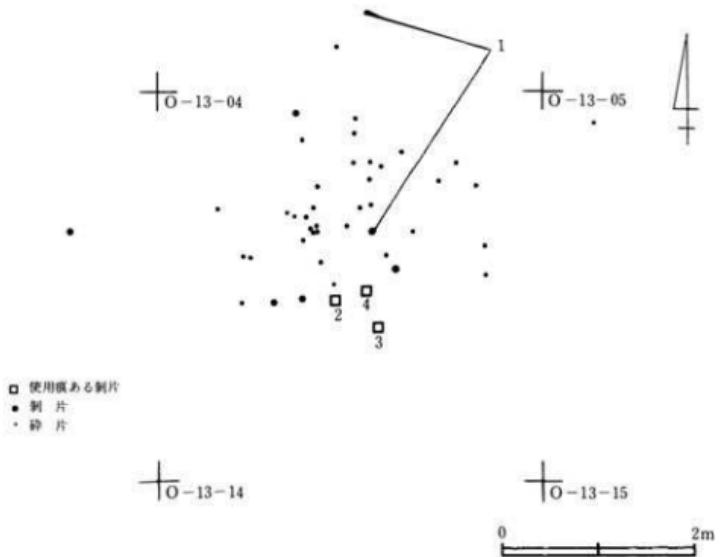


図40 第33ブロック遺物出土状況図

頁岩は剝片1点のみで、他はすべて黒曜石であるが、夾雜物を比較的多く含むものである。接合資料は剝片どうしの接合1例のみである。

まとめ 小規模に纏ったブロックである。石器組成は貧弱で、数量的にも少ないため、積極的にブロックの性格を決定することはできないが、剝片生産と石器調整を反映したブロックとして捉えられよう。

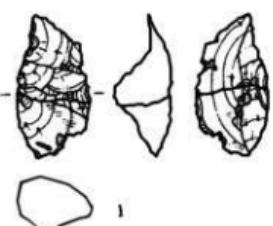


図41 第33ブロック出土遺物実測図

表49 第33ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石	尖頭器	石 鋸	擂 器	削 器	ビエス・ エスキー	2次加工 ある剝片	使 用 ある剝片	石 片	削 片	刮 片	碎 片	石 桿	敲 石	標 片	計
										石 片	削 片	刮 片	碎 片	石 桿	敲 石	標 片	計
頁 岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.9	—	—	—	—	1.9
黒 曜 石	数量	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	7	42	—	—	—	52
	%	—	—	—	—	—	—	—	5.7	—	—	13.2	79.2	—	—	—	98.1
計	数量	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	8	42	—	—	—	53
	%	—	—	—	—	—	—	—	5.7	—	—	15.1	79.2	—	—	—	100

表50 第33ブロック出土石器計測表

辨認 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(kg)	調整の 位 置	裏面 調整	欠損の 有無	使用痕	石 材
			長さ	幅	厚さ							
2	S-33-23	使用痕ある剝片	6.5	5.6	1.8	40°	47.0	—	—	無	有	黒曜石
3	S-33-24	使用痕ある剝片	4.6	4.7	1.5	45°	24.9	—	—	無	有	黒曜石
4	S-33-25	使用痕ある剝片	3.8	1.9	0.9	20°	4.0	—	—	無	有	黒曜石

表51 第33ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	ナイフ形 石	尖頭器	石 鋸	擂 器	削 器	ビエス・ エスキー	2次加工 ある剝片	使 用 ある剝片	石 片	削 片	刮 片	碎 片	石 桿	敲 石	標 片	計
										石 片	削 片	刮 片	碎 片	石 桿	敲 石	標 片	計
頁 岩	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
黒 曜 石	1	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	7	40	—	—	—	50
計	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	8	40	—	—	—	51

表52 第33ブロック接合資料一覧表

辨認 番号	母岩別資料	内 訳		内 容				数 量
		内	訳	内	容			
1	黒 曜 石 1	(S-33-1)+(S-33-15)						2

## 16. 第1文化層のまとめ

自然層におけるIII~V層階に相当する文化層である。石器群と疊群に大別でき、前者には第6~8、10、12、14~16、23、26、30、31、33ブロック、後者には第22、28ブロックがそれぞれ該当する。

石器群は立地上2つに大別できる。1つは台地西側縁辺部、南側から入り込んでいる谷津に面して立地するもので、第6~8、10、12、14~16ブロックの8ブロックが該当する。石材は第7ブロックのみが珪質頁岩を主体とするブロックであり、他はいずれも黒曜石を主体とする。黒曜石は多量の夾雜物を含むもので、母岩の識別が困難なものが多い。総じて小規模なブロック

クと言うことができ、また各ブロック、母岩が多岐にわたっていることなど、ブロックの性格については不明な点が多いと言わざるを得ない。これは、第1文化層が縄文期以降の遺構によって破壊されている可能性が高いことにも起因するものと考えられる。そうした中にあって、第10ブロックは良好な資料を提示しているものとして注目でき、横長剝片を中心とする剝片生産とナイフ形石器、削器等を中心とする石器調整の両者を配したブロックとして捉えられる。

もう1つは台地南側縁辺部に立地するブロックで、第23、26、30、31、33ブロックが該当する。第26ブロックでは黒曜石は1点も含まれないが、他のブロックでは圧倒的に黒曜石が主体を成している。これらもまた小規模に纏ったブロックであるが、統じて剝片生産及び石器調整の色彩を有するものとして捉えられよう。石器組成は、ナイフ形石器、搔器、削器、ビエス・エスキューなどがあるが、全体に貧弱と言える。技術的特徴としては、利器は縦長剝片及び横長剝片の相方を素材としたものが認められるが、特にナイフ形石器については縦長剝片を素材としたものが多く見られる。これに対し、石核は横長剝片を生産したものである。

礫群は立地上石器群とはやや異なっており、権現後遺跡との境界となっている、南側に開口する小規模な谷津の奥に面して立地している。母岩の構成を見ると、第22ブロックと第28ブロックは相互に関連性を有していると考えられる。いずれも破碎礫によって構成されており、表面及び割れ口が受熱し、赤化した状況が看取できる。接合資料も多いが、完形に復元できたものは皆無である。第28ブロックが中心的位置を示し、第22ブロックが從属的な感があるが、いずれのブロックにおいても受熱したロームあるいは炭化物の集中は認められず、これらの礫片が受熱した場所とは言い難い。この状況はまた、礫群の性格の一端を示すものと言えようか。

### 第3節 第2文化層

VI層段階の文化層である。

第18、24、25、27ブロックの計4ブロック、総計334点の石器群を検出した。

いずれも台地縁辺部に位置しており、権現後遺跡との境界となっている南側に開口する小規模な谷津奥直上から台地南側にかけて立地している。これは、第1文化層と類似した立地をしているものである。

遺物としては、剝片、碎片の他ナイフ形石器、搔器、削器、ビエス・エスキュー、2次加工のある剝片、使用痕のある剝片、石核、敲石等が出土する。

#### 1. 第18ブロック（図42、43、表53～55、図版10～12）

**出土状況** 権現後遺跡との境界に展開する小規模な谷津の奥部に面した斜面部に形成されており、最大比高差約0.5mを計る。石器群はVI～VIIa層にかけて分布するが、VI層を中心として

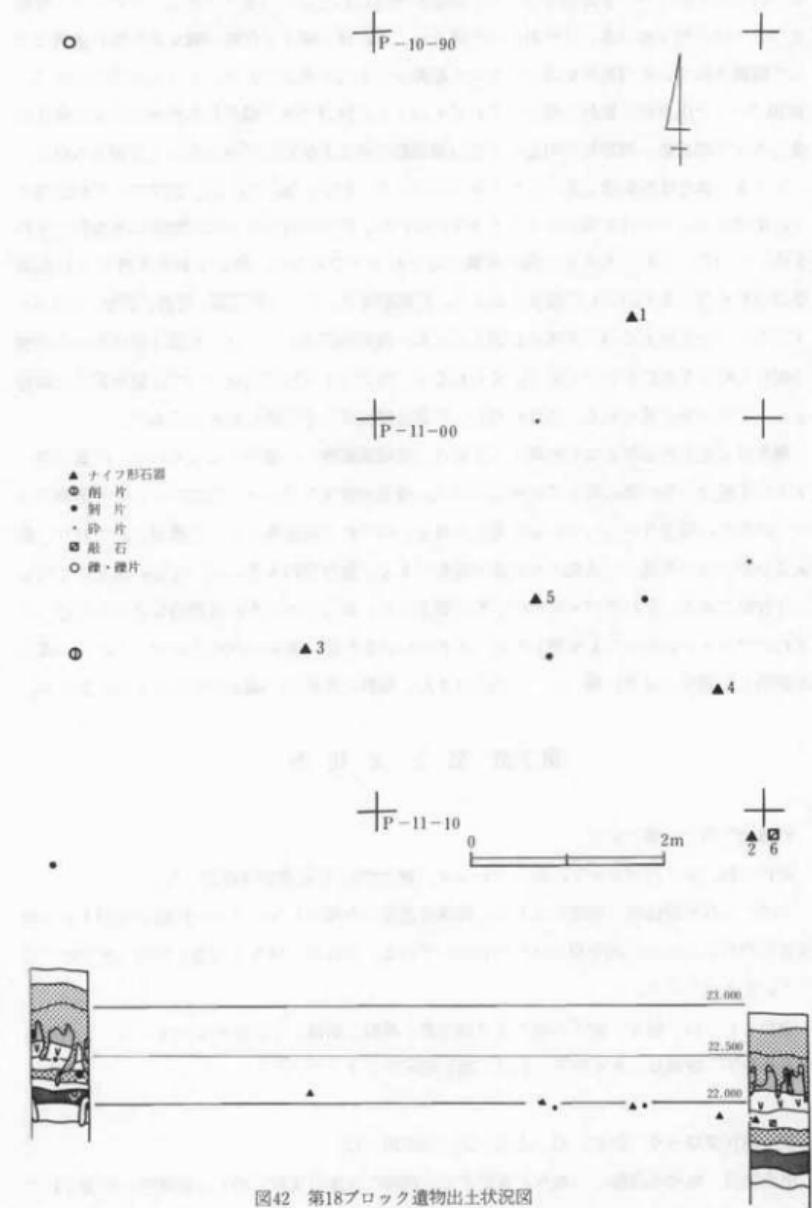


図42 第18ブロック遺物出土状況図

おり、最大レベル差0.3mを計る。平面分布は長径11.0m、短径8.0mの楕円形の範囲内であるが、南東側3.0mの範囲内に集中する傾向が認められる。また、利器がブロック内に広く点在する状況が指摘できる。

**出土遺物** 総計13点で、石器組成はナイフ形石器5点、削片1点、剝片3点、碎片2点、敲石1点、蹠片1点である。ナイフ形石器は1~5で、1、5が完存品、2が刃先部欠損、3が基部破片、4が刃先部破片である。いずれも縦長剝片を素材としたものである。1は2側辺を刃部として調整加工したもので、先端部を鋭利に造り出している。2は左側辺に刃つぶし加工が施されており、刃部には刃こぼれが認められる。3、4は右側辺に刃つぶし加工が施されている。5は2側辺加工で、先端部の加工を施しており、また右側辺基部は截断面が認められ抜

表53 第18ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石器	尖頭器	石 核	擦 器	刮 器	削 器	ビエス エスキュー	2次加工 ある制片	使用 石 斧	石 斧	削 片	剝 片	碎 片	石 核	敲 石	蹠 片	計
安山岩	数量	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	2
	%	7.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.7	—	—	—	—	—	15.4
頁岩	数量	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	3
	%	15.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.7	—	—	—	—	—	23.1
チャート	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	2
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.7	7.7	—	—	—	—	—	15.4
黒曜石	数量	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	4
	%	15.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15.4	—	—	—	—	—	30.7
砂岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.7	—	7.7
不明	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.7	—	7.7
計	数量	5	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	2	—	1	1	—	13
	%	38.4	—	—	—	—	—	—	—	—	7.7	23.1	15.4	—	7.7	7.7	—	100

表54 第18ブロック出土石器計測表

標因 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位 置	裏面 調整 有無	欠損 有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-18-12	ナイフ形石器	6.9	2.0	1.1	刃先角 30°	14.1	2側辺	一部有	無	無	頁岩
2	S-18-7	ナイフ形石器	(5.9)	2.7	0.9	40°	13.4	2側辺、下 端	一部有	有	有	黒曜石
3	S-18-3	ナイフ形石器	(2.2)	(1.6)	0.8	—	2.4	2側辺	有	有	—	黒曜石
4	S-18-9	ナイフ形石器	(2.0)	(1.3)	0.4	35°	0.8	(1側辺)	無	有	無	安山岩
5	S-18-4	ナイフ形石器	4.6	1.7	0.6	60°	5.7	2側辺	無	無	無	頁岩
6	S-18-8	敲石	7.0	5.0	4.0	—	179.2	—	—	無	有	砂岩

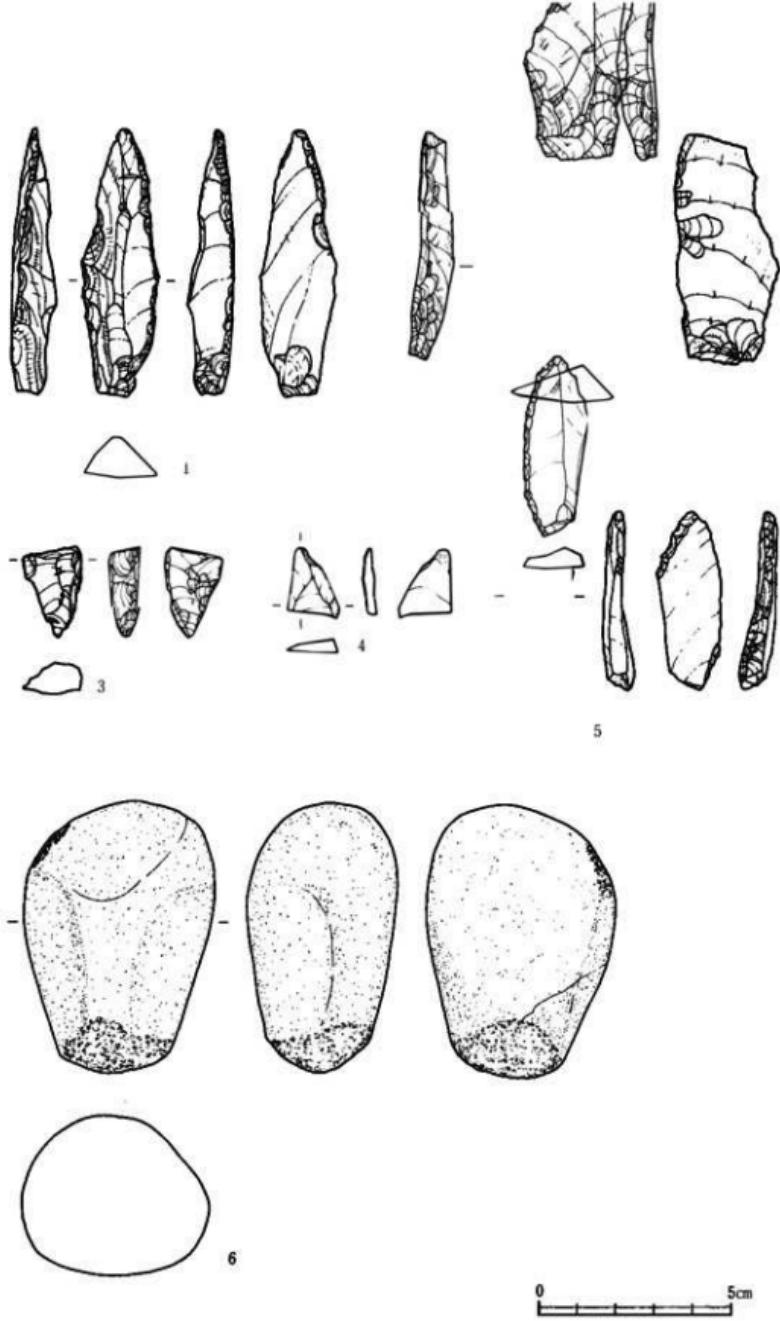


図43 第18ブロック出土遺物実測図

表55 第18ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	タイプ別 石	尖頭器	石 鋸	捶 器	削 器	ビエス・ エスキューある 剝片	2次加工 ある剝片	使用 面	石 刃	削 片	剥 片	石 核	敲 石	礫 片	計
安山岩 1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
安山岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
真 岩 1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2
真 岩 2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
チャート 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2
黒 喙 石 1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	3
黒 喙 石 2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
砂 岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
不 明 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
計	5	-	-	-	-	-	-	-	1	3	2	-	1	1	-	13

るような形状を呈している。敲石は6で、2か所において広範囲にわたる使用痕が認められる。なお、図示していないが、ブレイド・スポールが1点出土する。

**母岩別資料・接合資料** 石材は5種、母岩は不明を含めて計9種に識別し得た。特に主体と成るべき石材はなく、1点1母岩に近い状況である。接合資料は皆無である。

**まとめ** 利器を中心としたブロックであり、しかも1点1母岩に近い状況を呈していることから、石器生産及び調整の場としての性格は有していない。使用痕の認められるもの、欠損品が多いことも注意する必要があろう。

## 2. 第24ブロック（図44、45、表56～59、図版10、11）

**出土状況** 台地南側に展開する谷津に面した縁辺部に形成され、第25ブロックに比較的近接するブロックである。石器群はVI層を中心として出土しており、最大レベル差0.35mを計る。平面分布は径7mの円形範囲内に密集しているが、石器種類別に比較的纏った分布を示している。

**出土遺物** 総計118点で、石器組成は、撃器1点、ビエス・エスキュー3点、2次加工のある剝片2点、剝片49点、碎片56点、石核2点、礫片5点である。1は撃器で、調整によって刃部を造り出している。刃部は刃渡り1.2cmを計り、それ以外の部分についてはほぼ垂直に切断して、全体に円形の形状にまとめている。2、3、8はビエス・エスキューである。2は上端に刃つぶれが認められるが、下端には認められず、ビエス・エスキューとするにはやや疑問が残る。3は下端を欠損するが、上端には刃つぶれが認められる。8は上下両端に刃つぶれが認められ、また剝片と接合関係を有している。4、10は2次加工のある剝片である。10は図示しえなかつたが、4は下端及び両側辺に2次加工の痕跡が認められる。5、6は石核で、縦長剝片

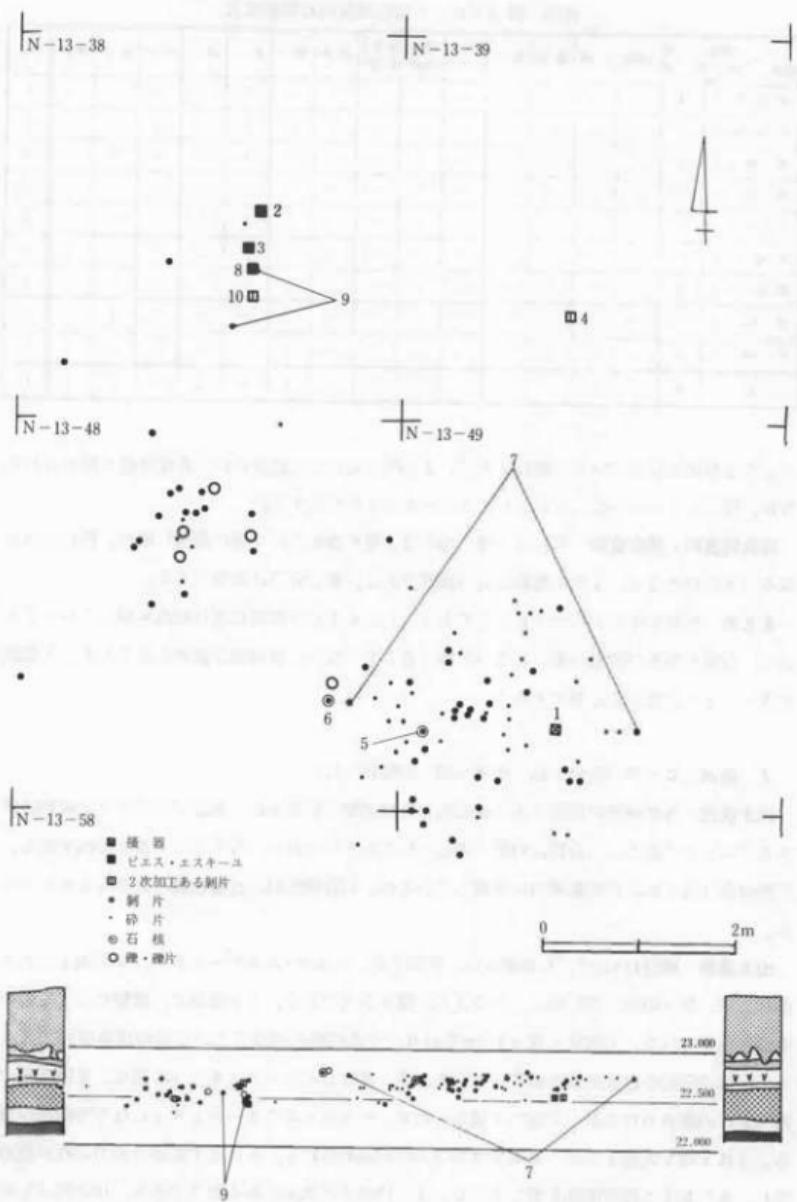


図44 第24ブロック遺物出土状況図

表56 第24ブロック出土石器組成表

石材	断面 タイプ 石	ナイフ形 面	尖頭器	石 鋸	標 器	削 器	ビエス・ エスキュー	2次加工 ある剥片	使 用 有る剥片	石 刃	削 片	剥 片	砂 片	石 核	敲 石	雕 片	計
安 山 岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	3
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.8	0.8	-	-	0.8	2.4
珪質頁岩	数量	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-	9	8	-	-	-	21
	%	-	-	-	-	-	2.4	0.8	-	-	-	7.6	6.4	-	-	-	17.2
頁 岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	1	-	-	1	7
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.0	0.8	-	-	0.8	5.6
黒 曜 石	数量	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	34	47	2	-	-	85
	%	-	-	-	0.8	-	-	0.8	-	-	-	28.8	41.2	1.6	-	-	73.2
砂 岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.6	1.6
計	数量	-	-	-	1	-	3	2	-	-	-	49	56	2	-	5	118
	%	-	-	-	0.8	-	2.4	1.6	-	-	-	41.2	49.2	1.6	-	3.2	100

表57 第24ブロック出土石器計測表

測定 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位 置	裏面 調整	欠損の 有無	使用面	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-24-73	標器	3.1	3.4	0.9	35°	8.0	刃部	無	無	無	黒曜石
2	S-24-2	ビエス・エスキュー	2.9	3.9	1.4	80°	12.7	上端	有	無	無	珪質頁岩
3	S-24-4	ビエス・エスキュー	2.7	1.3	0.7	80° 85°	2.4	上端	有	有	無	珪質頁岩
4	S-24-1	2次加工ある剥片	2.5	1.9	1.0	-	4.1	2側面、下端	無	有	無	黒曜石
5	S-24-36	石核	3.0	1.8	1.8	-	6.4	-	-	無	-	黒曜石
6	S-24-27	石核	4.0	2.9	2.1	-	18.8	-	-	無	-	黒曜石
8	S-24-5	ビエス・エスキュー	2.6	3.0	0.6	40° 60°	5.3	-	-	有	有	珪質頁岩
10	S-24-6	2次加工ある剥片	2.8	1.8	0.8	30°	2.2	上端	無	無	無	珪質頁岩

を生産したものである。

**母岩別資料・接合資料** 石材は5種、母岩は計9種に識別し得た。黒曜石が主体的であるが、珪質頁岩も比較的多く出土する。また、砂岩を除き、各母岩とも剝片、碎片が大部分を占めている。石核が存在する黒曜石2の母岩を中心として、剝片生産から石器調整の工程を反映していると言えよう。接合資料は2例で、剝片どうしの接合とビエス・エスキューと剝片との接合である。

**まとめ** 小規模に纏ったブロックであり、点数に比べて利器が少ないので特徴として挙げられる。ビエス・エスキューと剝片との接合資料、石核の存在などからも、黒曜石、珪質頁岩を中心とした剝片生産から石器調整の工程を反映しているブロックとして性格づけられよう。

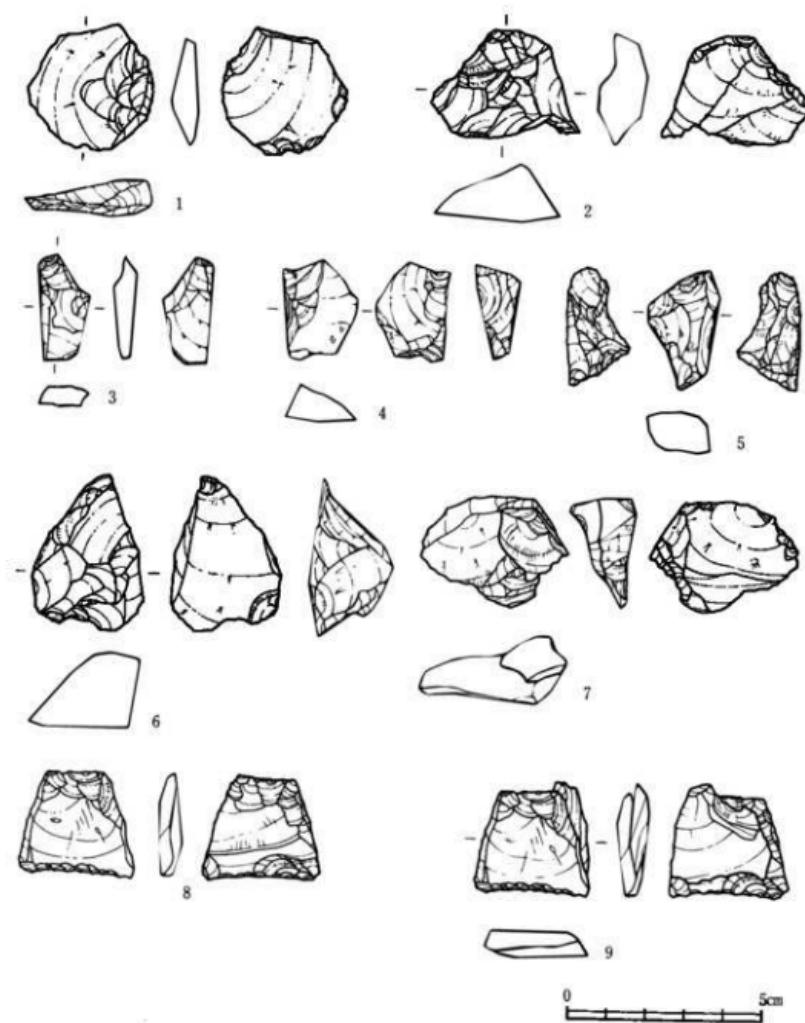


図45 第24ブロック出土遺物実測図

表58 第24ブロック接合資料一覧表

標記番号	母岩別資料	内 訳	内 容	数 量
7	黒 磷 石 1	剥片 2	(S-24-28)+(S-24-70)	2
9	地質頁岩 1	ピエス+エスキュー1、剥片 1	(S-24-5)+(S-24-7)	2

表59 第24ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	ナイフ形 石器	尖頭器	石錐	擦器	削器	ピエス+ エスキース	2次加工 ある剝片	使用痕 ある剝片	石斧	削片	刮片	碎片	石核	敲石	礫片	計
安山岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
安山岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	2
珪質頁岩 1	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	7	8	-	-	-	18
珪質頁岩 2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	3
頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	1	-	-	1	7
黒曜石 1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	9	8	-	-	-	18
黒曜石 2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	17	12	2	-	-	32
黒曜石 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	9	-	-	-	16
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
計	-	-	-	1	-	3	2	-	-	-	48	39	2	-	5	99

## 3. 第25ブロック(図46~49、表60~63、図版10~12)

**出土状況** 台地南側に展開する谷津に面した縁辺部に形成され、第24ブロックに比較的近接するブロックである。石器群はVI層からVIIa層にかけて出土しており、最大レベル差0.45mを計る。平面分布は長辺8m、短辺4.5mの長楕円形範囲内にあるが、礫片及び敲石を中心として纏った状況を示している。

**出土遺物** 総計55点で、石器組成は、削器1点、ピエス・エスキース1点、使用痕のある剝

表60 第25ブロック出土石器組成表

石材	ナイフ形 石器	尖頭器	石錐	擦器	削器	ピエス+ エスキース	2次加工 ある剝片	使用痕 ある剝片	石斧	削片	刮片	碎片	石核	敲石	礫片	計	
安山岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	3	6	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3.6	-	1.8	-	5.4	10.8	
珪質頁岩	数量	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	3	1	-	-	7	
	%	-	-	-	-	1.8	1.8	-	1.8	-	-	5.4	1.8	-	-	12.6	
頁岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	1	15	12	-	-	8	36	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8	27.4	21.9	-	-	14.7	65.8	
石英斑岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8	1.8	
砂岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	4	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.4	1.8	
シルト岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8	
計	数量	-	-	-	-	1	1	-	1	-	1	20	14	1	4	55	
	%	-	-	-	-	1.8	1.8	-	1.8	-	1.8	36.4	25.5	1.8	7.2	21.9	100

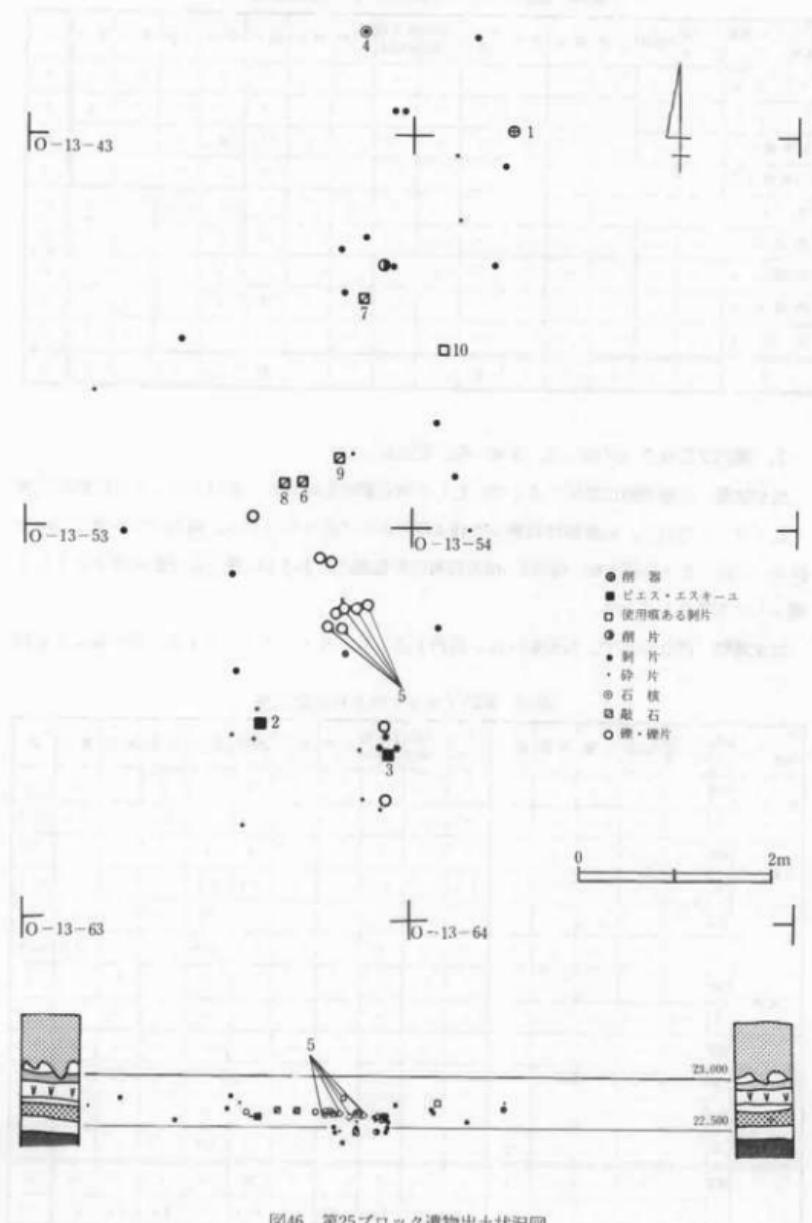


図46 第25ブロック遺物出土状況図

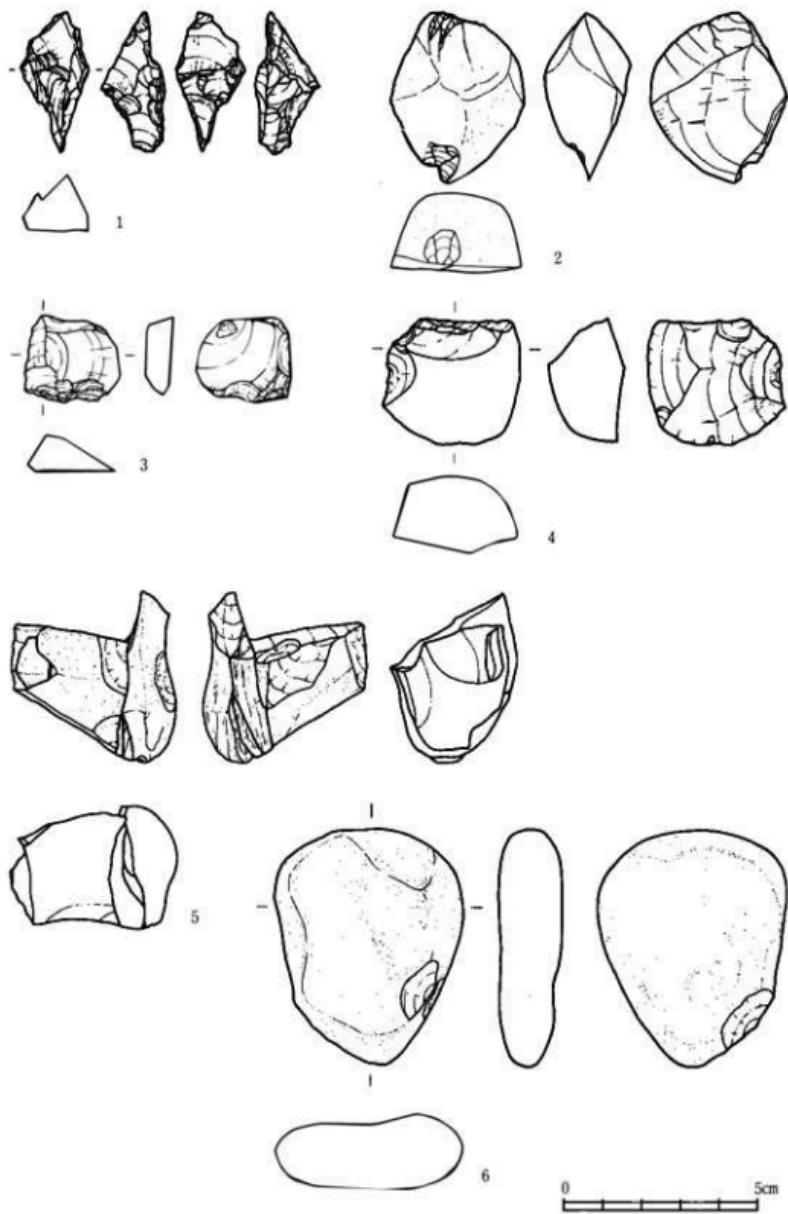


図47 第25ブロック出土遺物実測図(1)

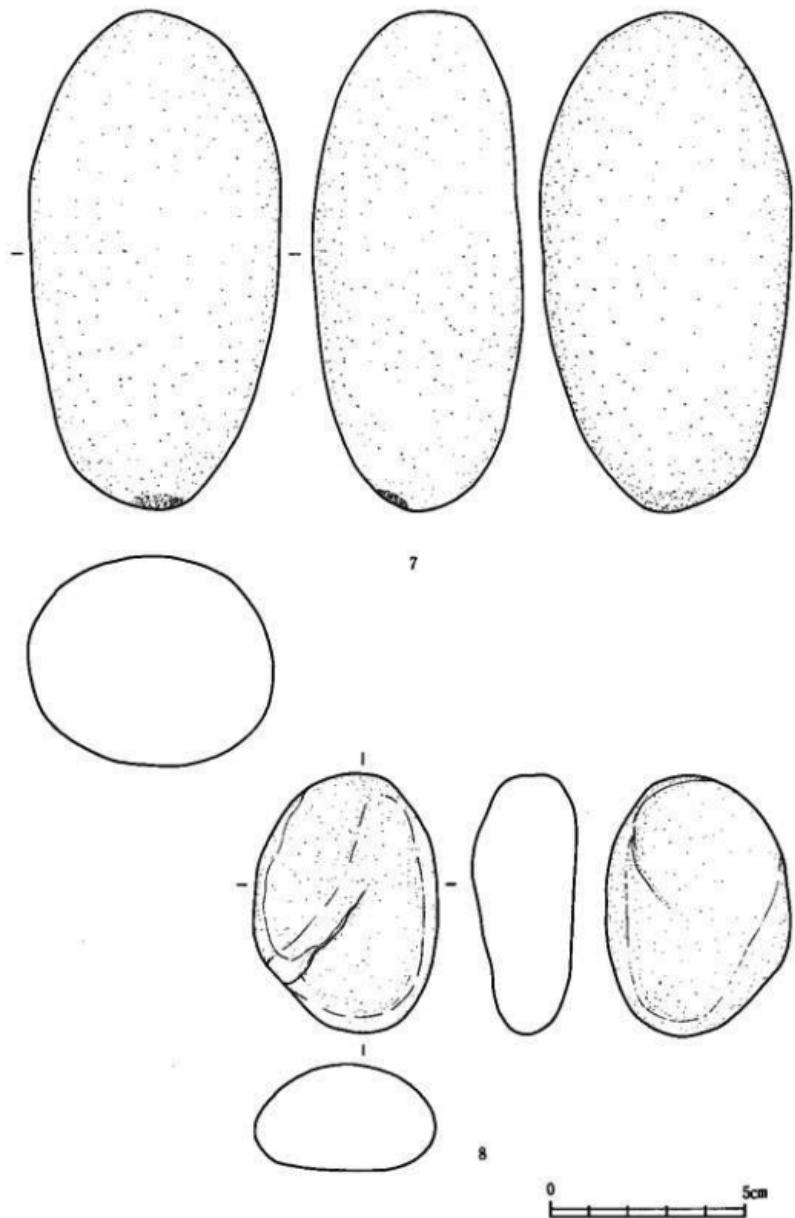


図48 第25ブロック出土遺物実測図(2)

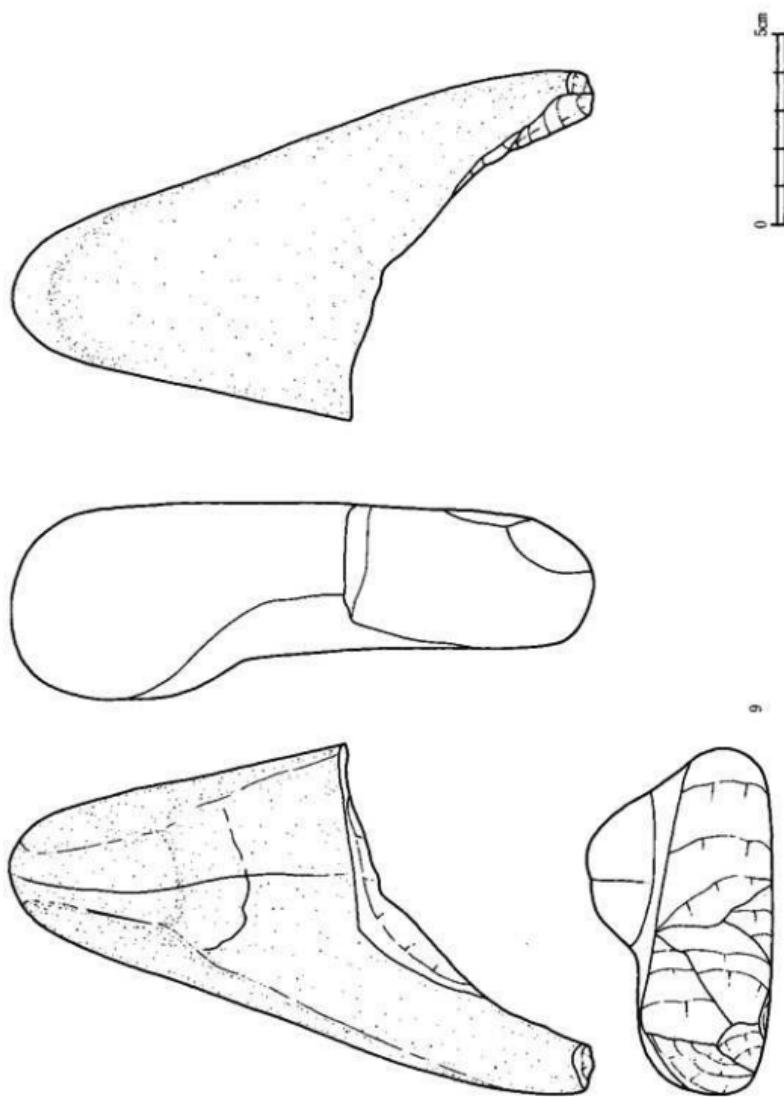


図49 第25ブロック出土遺物実測図(3)

片1点、削片1点、剥片20点、碎片15点、石核1点、敲石4点、礫片11点である。1は削器である。刃部調整は片面にのみ施され、また右側辺は平坦に調整される。3はビエス・エスキューで下端に刃つぶれが認められる。4は石核である。6～9は敲石で、7、8は完存品、6、9は欠損品である。9は欠損のため不明だが、7は一端に敲打痕が認められる。また、2は礫片であるが、剥離痕が認められる。しかしながら、敲打の方向によりビエス・エスキューには断定し難い。なお、図示していないが、使用痕のある剥片が1点出土しており、上下両端を刃部として刃こぼれが認められる。

**母岩別資料・接合資料** 石材は6種、母岩は計24種に識別し得た。頁岩が主体的であり、母岩別資料の識別も比較的容易であった。それによると、頁岩が10種の母岩に分類し得たのをはじめとして、母岩が多岐にわたる傾向が捉えられた。特に頁岩10は受熱の痕跡を残す礫片を中心としており、接合資料として挙げられるところであるが、完形に復元し得るものではない。また、安山岩1は第27ブロックの安山岩1と極めて類似しており、直接接合関係はないものの同一母岩の可能性が高い。

**まとめ** 全体としては小規模に纏ったブロックと言えるが、石材、母岩が多岐にわたっていることが特徴としてあげられる。利器が少なく、欠損品も含まれること、また礫片が完形に復元し得ないことなど、極めて廃棄の色彩が濃いものと言えよう。また、安山岩1の状況から第27ブロックとの関連性が注目されるところである。

表61 第25ブロック出土石器計測表

標図 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(kg)	調整の 位置	裏面 調整	欠損の 有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-25-5	削器	3.6	1.8	1.8	60°	6.5	2側辺	無	無	無	珪質頁岩
3	S-25-32	ビエス・エスキュー	2.2	2.4	1.0	70° 55°	3.0	—	—	無	有	珪質頁岩
4	S-25-1	石核	3.2	3.6	1.9	—	27.0	—	—	無	—	安山岩
6	S-25-13	敲石	6.1	5.0	2.0	—	78.9	—	—	有	無	砂岩
7	S-25-44	敲石	12.8	6.4	5.3	—	617.0	—	—	無	有	石英斑岩
8	S-25-14	敲石	6.6	4.8	2.8	—	124.9	—	—	無	無	砂岩
9	S-25-45	敲石	(15.2)	(9.0)	5.0	—	524.0	—	—	有	—	砂岩
10	S-25-10	使用痕ある剥片	3.5	2.5	0.7	40° 20°	6.3	—	—	無	有	珪質頁岩

表62 第25ブロック接合資料一覧表

標図 番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
5	頁岩	10 磕片5	(S-25-22)+(S-25-24)+(S-25-25)+(S-25-26)+(S-25-27)	5

表63 第25ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	ナイフ形 石器	尖頭器	石錐	標器	削器	ピエス・ エスキュー	2次加工 ある剝片	使 用 痕 ある剝片	石斧	剝片	刮片	碎片	石核	敲石	礫片	計
安山岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	3
安山岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
安山岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
珪質頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
珪質頁岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
珪質頁岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
珪質頁岩 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2
珪質頁岩 5	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	1	-	-	-	-	-	6
頁岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
頁岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	1	5
頁岩 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	3
頁岩 5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	2
頁岩 6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	4
頁岩 7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
頁岩 8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	-	-	-	-	-	5
頁岩 9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
頁岩 10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	6	8	
石英斑岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
砂岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
砂岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
砂岩 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
シルト岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
計	-	-	-	-	1	1	-	1	-	1	20	14	1	4	12	55	

## 4. 第27ブロック (図50、51、表64~67、図版11)

**出土状況** 権現後遺跡との境界に展開する小規模な谷津に面した縁辺部に形成されており、若干の傾斜を呈している。石器群はVI層からVII層にかけて出土しており、最大レベル差は約0.5mを計る。平面分布は径0.7mの円形範囲内に密集するが、剝片、碎片を除く石器については総じて北側に集中する傾向が認められる。

**出土遺物** 総計148点で、石器組成はナイフ形石器1点、ピエス・エスキュー1点、2次加工のある剝片1点、使用痕のある剝片1点、剝片21点、碎片121点、石核2点である。1はナイフ形石器で、細長剝片を素材としたものである。2側刃加工を施したもので、左側刃を刃つぶし

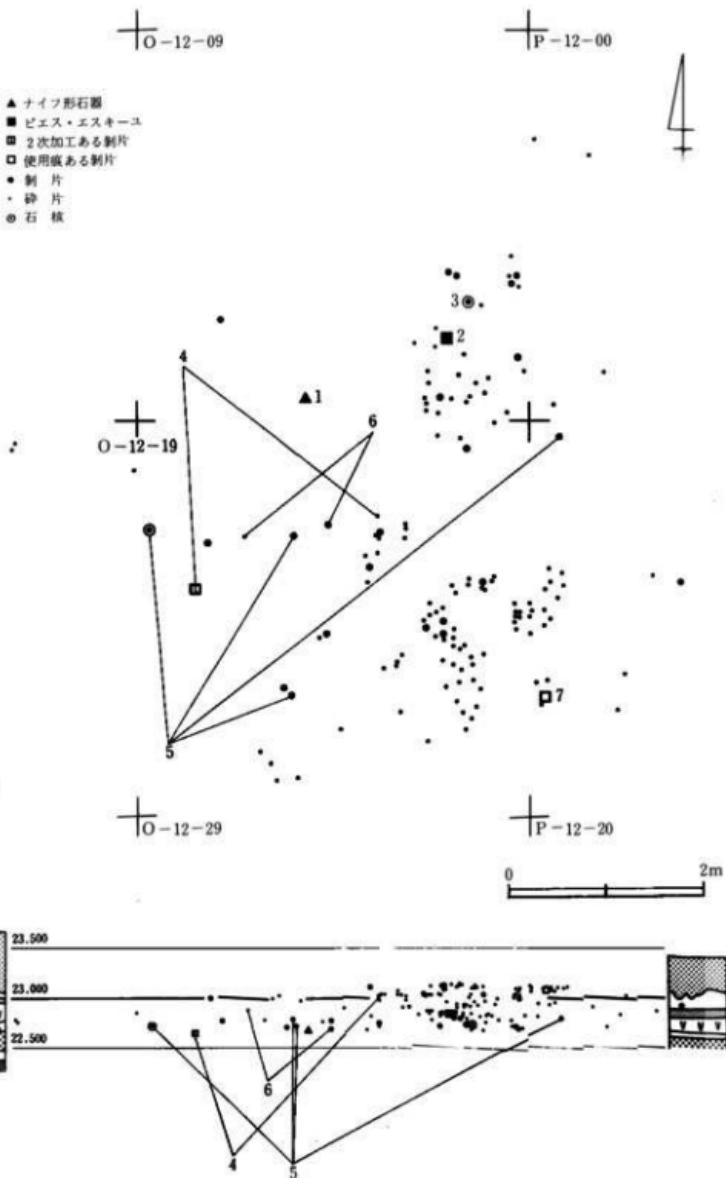


図50 第27ブロック遺物出土状況図

表64 第27ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 錐	標 器	削 器	ビエス・ エスキュー	2次加工用 エスキュー ある側面 ある側面	石 斧	削 片	剥 片	砂 片	石 核	敲 石	擦 片	計	
安山岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	7	1	—	—	18	
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.7	4.7	0.7	—	—	12.1	
珪質岩	数量	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
	%	0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.7	
頁岩	数量	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	1	—	—	—	3	
	%	—	—	—	—	—	0.7	—	—	—	0.7	0.7	—	—	—	2.1	
黒曜石	数量	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	11	112	1	—	—	126
	%	—	—	—	—	—	0.7	—	0.7	—	—	7.4	75.6	0.7	—	—	85.1
計	数量	1	—	—	—	—	1	1	1	—	—	21	121	2	—	—	148
	%	0.7	—	—	—	—	0.7	0.7	0.7	—	—	14.8	81.0	1.4	—	—	100

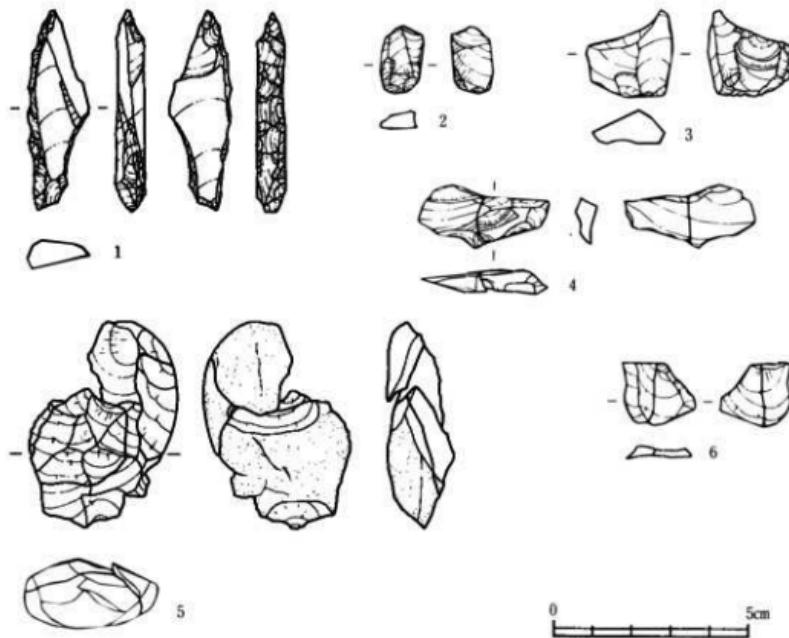


図51 第27ブロック出土遺物実測図

加工、右側刃基部を抉るような形で刃つぶし加工を施している。刃部先端には2次的な剥離痕が認められる。2はビエス・エスキューで上下両端に刃つぶれが認められる。3、5は石核で、

いずれも縦長剥片を生産したものである。4は剥片どうしの接合であるが、右側剥片は2次加工が認められる。なお、図示していないが、使用痕のある剥片が1点出土する。

**母岩別資料・接合資料** 石材4種、母岩計8種に識別し得た。黒曜石が主体的であるが、接合資料は皆無であり、安山岩に良好な接合資料が見られる。石核と剥片及び剥片と碎片の接合資料である。その他、頁岩において2次加工のある剥片と剥片の接合資料がある。各母岩ごとに比較的纏った出土状況を呈していると言えよう。

**まとめ** 石器組成は貧弱な状況であり、剥片生産、石器調整の色彩が濃いブロックとして捉えられよう。また、剥片が比較的少なく、碎片が多量に出土する点は特徴的であり、剥片生産

表65 第27ブロック出土石器計測表

標図 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(kg)	調整の位 置	裏面 調整	欠損の有 無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-27-34	ナイフ形石器	5.1	1.6	0.8	45°	5.6	2側辺	無	無	無	珪質頁岩
2	S-27-22	ピエス・エスキュー	1.6	1.1	0.6	40° 35°	0.8	—	—	無	有	黒曜石
3	S-27-9	石核	2.1	2.2	0.9	—	3.4	—	—	無	—	黒曜石
4	S-27-116	2次加工ある剥片	1.9	1.2	0.6	70°	1.1	1側辺	無	無	無	頁岩
5	S-27-117	石核	3.4	3.4	1.5	—	15.1	—	—	無	—	安山岩
7	S-27-100	使用痕ある剥片	4.0	3.3	0.8	30°	9.1	—	—	無	有	黒曜石

表66 第27ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種 石器番号	ナイフ形 石器番号	尖頭器	石錐	擴張器	削器	ピエス・ エスキュー	2次加工 ある剥片	使用痕 ある剥片	石斧	削片	剥片	碎片	石核	敲石	機片	計
安山岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	6	1	—	—	17	
安山岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	
珪質頁岩1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	1	—	—	—	3	
黒曜石1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	6	36	—	—	43	
黒曜石2	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2	30	1	—	—	34	
黒曜石3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	19	—	—	—	20	
黒曜石4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	
計	1	—	—	—	—	1	1	1	—	—	21	93	2	—	—	120	

表67 第27ブロック接合資料一覧表

標図 番号	母岩別 資料	内訳	内容	数量
4	頁岩1	2次加工ある剥片1、剥片1	(S-27-39)+(S-27-116)	2
5	安山岩1	石核1、剥片3	(S-27-14)+(S-27-37)+(S-27-48)+(S-27-117)	4
6	安山岩1	剥片1、碎片1	(S-27-36)+(S-27-38)	2

から石器調整の工程が順調に行われ、生産された石器は他へ持ち運ばれた状況を看取することができる。

## 5. 第2文化層のまとめ

自然層におけるVI層段階に相当する文化層である。計4ブロックの石器群を検出したが、総体的に台地南側縁辺部に集中する傾向が窺える。

石材としては、黒曜石が主体的であるが、第24ブロックと第27ブロック出土の黒曜石は夾雜物を多量に含む点において共通性が指摘できる。なお、ともに剥片生産から石器調整の工程を反映しているブロックであり、同一時期の所産として捉えられる可能性を大にしているところである。

第18ブロックはナイフ形石器を中心とする利器の占める割合が高く、しかも1点1母岩に近い状況であることなど、石器生産の場とは考え難く、生活に直接密着した場として捉えるのが妥当であろう。これに対して、第25ブロックは利器が少なく、しかも1点1母岩に近い状況であり、廃棄の色彩が濃いブロックと言えよう。

石器組成は全体に貧弱で、欠損品もやや多い点が指摘できる。ナイフ形石器はいずれも縦長剥片を素材としたものであり、特に第27ブロック出土のナイフ形石器は刃部の裏面を調整段階で剝離するという、他とは異なる調整が施されている。

## 第4節 第3文化層

VIIa層段階の文化層である。

第3～5、13、17、29、32、39、40ブロックの計9ブロック、総計541点の石器群を検出した。ブロックの数は第2文化層に次いで多いが、全体的に小規模な石器群が多い文化層である。

立地上大別すると、台地縁辺部と台地平坦部となるが、さらに細別すると、台地縁辺部が西側の谷津に面するものと、南側の谷津に面するものとに分割できる。第3文化層が唯一台地平坦部に石器群を有している文化層である。

遺物としては、剥片、碎片の他ナイフ形石器、削器、ビエス・エスキュー、2次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石核、敲石などが出土する。

### 1. 第3ブロック（図52、53、表68～71、図版12、16）

**出土状況** 権現後遺跡との境界に位置し、台地平坦部に形成されており、第4ブロック、第5ブロックに隣接する。石器群はVI層からVIIa層にかけて出土しており、最大レベル差0.40mを計る。平面分布は径4mの円形範囲内にあり、中央部に砾片、周辺部に剥片、碎片などが集中する傾向が認められる。

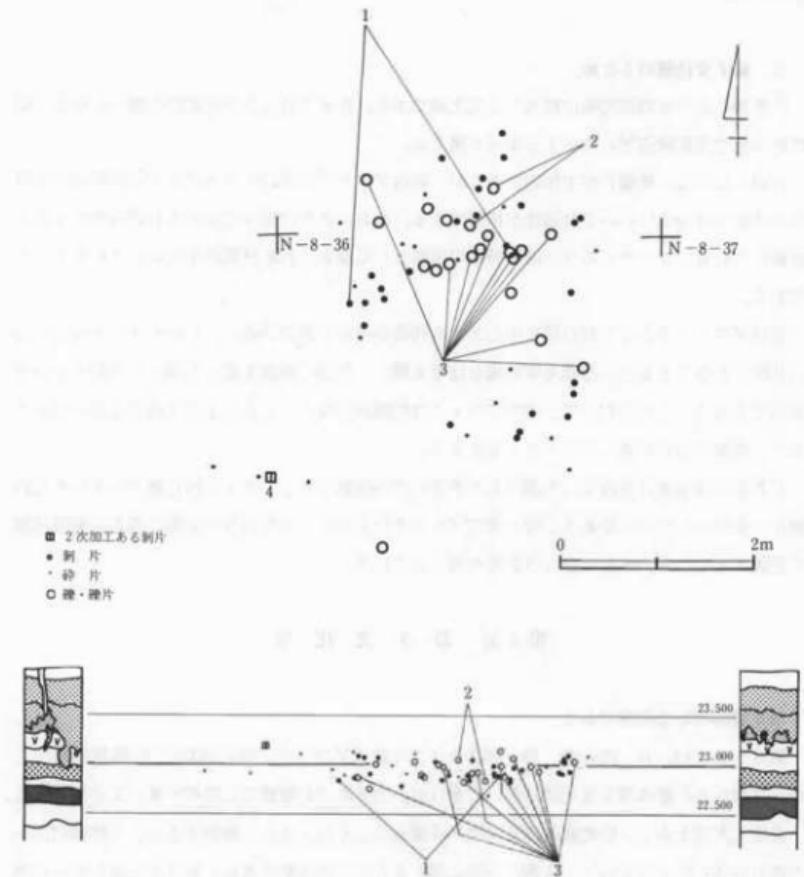


図52 第3ブロック遺物出土状況図

**出土遺物** 石器群は総計44点で、石器組成は2次加工のある剝片1点、剝片26点、碎片17点である。2次加工のある剝片は図示していないが、1側辺に調整加工を施すものである。縫群は総計20点である。頁岩5は受熱の有無は不明瞭であるが、砂岩については、いずれも受熱が認められ、赤化している。特に砂岩2は表面にタル状黒色物の付着が見られる。その他石材不明のものについても受熱し、赤化しているが、頁岩、砂岩が比較的小片に破碎されているのに対して若干の欠損が見られるのみである。付着物は認められない。

**母岩別資料・接合資料** 石器群における石材は安山岩と頁岩の2種で、母岩は計6種に識別

表68 第3ブロック出土石器組成表

石材	磨様 石 面	ナイフ形 石 面	尖頭器	石 錐	擦 器	削 器	ビエス・ エスキース	2次加工 ある剝片	使 用 痕	石 斧	剝 片	刮 片	砂 片	石 核	敲 石	擦 片	計
安山岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	16	4	—	—	—	20
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	25.0	6.2	—	—	—	31.2
質岩	数量	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	10	11	—	—	10	32
	%	—	—	—	—	—	—	1.6	—	—	—	15.6	17.2	—	—	15.6	50.0
砂岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	11
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	17.2	17.2
不明	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.6	1.6
計	数量	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	26	15	—	—	22	64
	%	—	—	—	—	—	—	1.6	—	—	—	40.6	23.4	—	—	34.4	100

表69 第3ブロック出土石器計測表

辨認 番号	遺物番号	器 種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の 位 置	裏面 調整 有無	欠損の 有無	使用痕	石 材
			長さ	幅	厚さ							
4	S-3-5	2次加工ある剝片	3.1	2.3	0.6	20°	3.6	1側辺	無	無	無	質岩

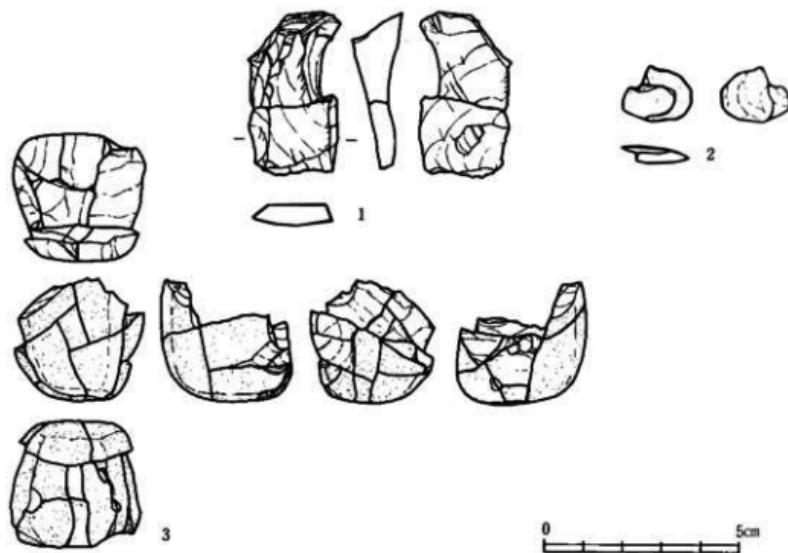


図53 第3ブロック出土遺物実測図

表70 第3ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	圓錐 石 器	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 錐	研 器	附 器	ビエス エスキー	2次加工 ある剥片	使 用 有 る剥片	石 斧	削 片	刮 片	碎 片	石 核	敲 石	礫 片	計
安山岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16	4	-	-	-	-	20
頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	9	-	-	-	-	15
頁岩 2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2
頁岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2
頁岩 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2
頁岩 5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	10	
頁岩 6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	9	
砂岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	
砂岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	
不明 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	
計	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	26	15	-	-	22	64	

表71 第3ブロック接合資料一覧表

標図 番号	母岩別資料	内 訳	内 容	数 量
1	頁岩 1	剥片 2	(S-3-55)+(S-3-57)	2
2	砂岩 1	礫片 2	(S-3-18)+(S-3-60)	2
3	頁岩 5	礫片 10	(S-3-13)+(S-3-17)+(S-3-23)+(S-3-29)+(S-3-33)+(S-3-41)+(S-3-46)+(S-3-52)+(S-3-64)+(S-3-65)	10

し得た。特に頁岩 5 と第4ブロック頁岩 3 は、同一母岩に識別し得るものである。接合資料は剥片どうしの接合 1 例である。礫群における石材は頁岩、砂岩と不明 1 種の計 3 種で、母岩は計 5 種に識別し得た。接合資料は 2 例であるが、完形に復元し得るものではない。

まとめ 石器群については、石器組成が貧弱で石核もなく、また数量的にも決定的根拠に欠けるが、剥片生産と石器調整の可能性を有するブロックである。礫群については、頁岩が比較的よく接合するが、完形に復元し得るものではなく、また他の母岩について纏りが感じられない。極めて廃棄の色彩が濃いものと言えよう。

## 2. 第4ブロック (図54、55、表72~75、図版13、16)

出土状況 権現後遺跡との境界に位置し、台地平坦部に形成されており、第3ブロック、第5ブロックに隣接する。石器群はVI層からVIIa 層にかけて出土しており、最大レベル差0.30m を計る。平面分布は長径15m、短径 5 m の長楕円形の範囲内にあり、散漫な状況を呈している

+ N-8-49

+ N-8-59

+ N-8-69

+ N-8-79

+ N-8-48

+ N-8-58

+ N-8-68

+ N-8-78

■2

+ N-8-47

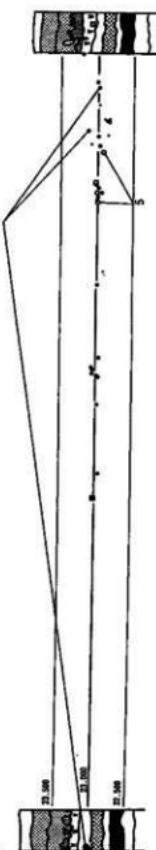
+ N-8-57

36

- ▲ ナイフ形石器
- ピス・ヌスキュー
- 使用痕ある鉋片
- ＊ 鉋片
- ＊ 砕片
- ◎ 石核
- 破・礫片



図54 第4ブロック遺物出土状況図



が、剝片を中心として数ヶ所に纏りが認められる。

**出土遺物** 総計33点で、石器組成はナイフ形石器1点、ピエス・エスキュー1点、使用痕のある剝片2点、剝片21点、碎片4点、石核1点で、その他礫片3点である。1はナイフ形石器で、縦長剝片を素材としたものである。先端部は欠損するが、2側辺に加工が施され、基部に截断面が認められる。2はピエス・エスキューである。3は石核と剝片の接合例であるが、石核は横長剝片を生産したものである。

**母岩別資料・接合資料** 石材は5種、母岩は計11種に識別し得た。数量的には安山岩が最も

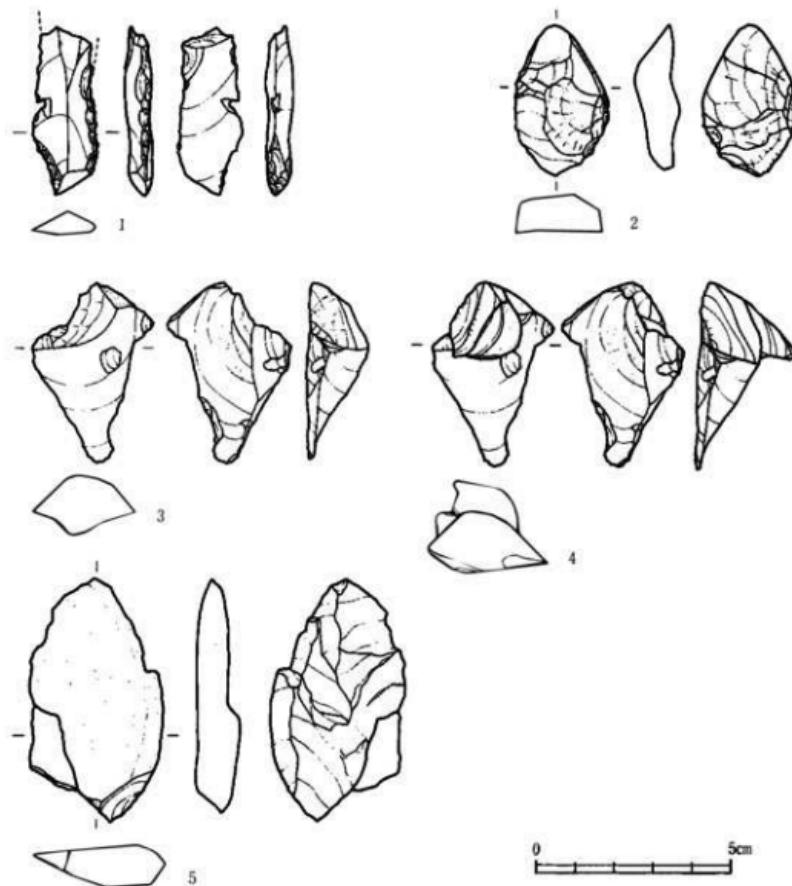


図55 第4ブロック出土遺物実測図

多くを占めているが、全体に数量が少なく、特に主体となる石材はない。なお頁岩3は第3ブロック頁岩5と、チャート1は第5ブロックチャート1と同一母岩に識別できる。接合資料は石核と剝片の接合1例、礫片どうしの接合1例である。礫片は受熱し、赤化した状況が認められる。

まとめ 石器組成は貧弱で母岩は多岐にわたり、また数量的にも少ない状況である。分布状況も散漫な状況であることから、剝片生産及び石器調整の性格を有する可能性もあるものの、廃棄の色彩が濃いブロックと言えよう。また、礫片については隣接する第3ブロックとの関連

表72 第4ブロック出土石器組成表

石材	器種		尖頭器	石 鋸	擦 滑	削 器	ビエス・エスキュー	2次加工	使 用	重	石 片	剝 片	碎 片	石 板	敲 石	礫 片	計
	数	石															
安山岩	数	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	9	3	—	—	1	15
	%	—	—	—	—	—	3.0	—	3.0	—	—	28.0	9.0	—	—	3.0	46.0
珪質頁岩	数	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	%	3.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.0
頁岩	数	—	—	—	—	—	—	1	—	—	5	—	1	—	—	—	7
	%	—	—	—	—	—	—	3.0	—	—	15.0	—	3.0	—	—	—	21.0
チャート	数	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	1	—	—	—	8
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	21.0	3.0	—	—	—	24.0
砂岩	数	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.0	6.0
計	数	1	—	—	—	—	1	—	2	—	—	21	4	1	—	3	33
	%	3.0	—	—	—	—	3.0	—	6.0	—	—	64.0	12.0	3.0	—	9.0	100

表73 第4ブロック出土石器計測表

埠固 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位 置	裏面 調整	欠損の 有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-4-14	ナイフ形石器	(4.2)	1.6	0.7	45°	4.8	2側刃	一部有	有	無	珪質頁岩
2	S-4-28	ビエス・エスキュー	3.7	2.4	1.0	40° 75°	9.2	—	—	無	有	安山岩
3	S-3-2	石核	4.5	3.2	1.5	—	11.0	—	—	無	—	頁岩
6	S-4-5	使用痕ある剝片	5.4	3.9	1.0	45°	16.3	—	—	無	有	頁岩
7	S-4-9	使用痕ある剝片	4.2	2.7	0.7	20°	7.2	—	—	無	有	安山岩

表74 第4ブロック接合資料一覧表

埠固 番号	母岩別資料	内 訳	内 容	数 量
4	頁岩 3	石核1、剝片2	(S-3-2)+(S-4-10)+(S-4-16)	3
5	砂岩 1	礫片2	(S-4-2)+(S-4-30)	2

性が考えられるところであるが、接合資料及び同一母岩は認められない。

表75 第4ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 錐	標 器	削 器	ビエス・ エスキュー 式	2次加工 ある剝片	使 用 石 器	石 斧	削 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	擦 片	計
安山岩 1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	5	1	-	-	-	7
安山岩 2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	2
安山岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	2	-	-	-	5
安山岩 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
珪質頁岩 1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
頁岩 1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	2
頁岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
頁岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	3
頁岩 4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
チャート 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	1	-	-	-	-	8
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
計	1	-	-	-	-	1	-	2	-	-	21	4	1	-	3	33

### 3. 第5ブロック (図56、57、表76~79、図版13、16)

**出土状況** 権現後遺跡との境界に位置し、台地平坦部に形成されており、第3ブロック、第4ブロックに隣接する。石器群はVI群からVII b層にかけて出土しており、最大レベル差0.3mを計る。平面分布は径5.5mの円形範囲内にあり、比較的密に分布している。

**出土遺物** 総計36点で、石器組成はビエス・エスキュー1点、剝片19点、碎片16点である。

表76 第5ブロック出土石器組成表

石材	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 錐	標 器	削 器	ビエス・ エスキュー 式	2次加工 ある剝片	使 用 石 器	石 斧	削 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	擦 片	計
安山岩	数 量	-	-	-	-	-	-	-	-	4	3	-	-	-	-	7
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	11.1	8.3	-	-	-	-	19.4
頁岩	数 量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.6	-	-	-	-	5.6
チャート	数 量	-	-	-	-	1	-	-	-	6	4	-	-	-	-	11
	%	-	-	-	-	2.8	-	-	-	16.7	11.1	-	-	-	-	30.6
メノウ	数 量	-	-	-	-	-	-	-	-	9	7	-	-	-	-	16
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	25.0	19.4	-	-	-	-	44.4
計	数 量	-	-	-	-	1	-	-	-	19	16	-	-	-	-	36
	%	-	-	-	-	2.8	-	-	-	52.8	44.4	-	-	-	-	100

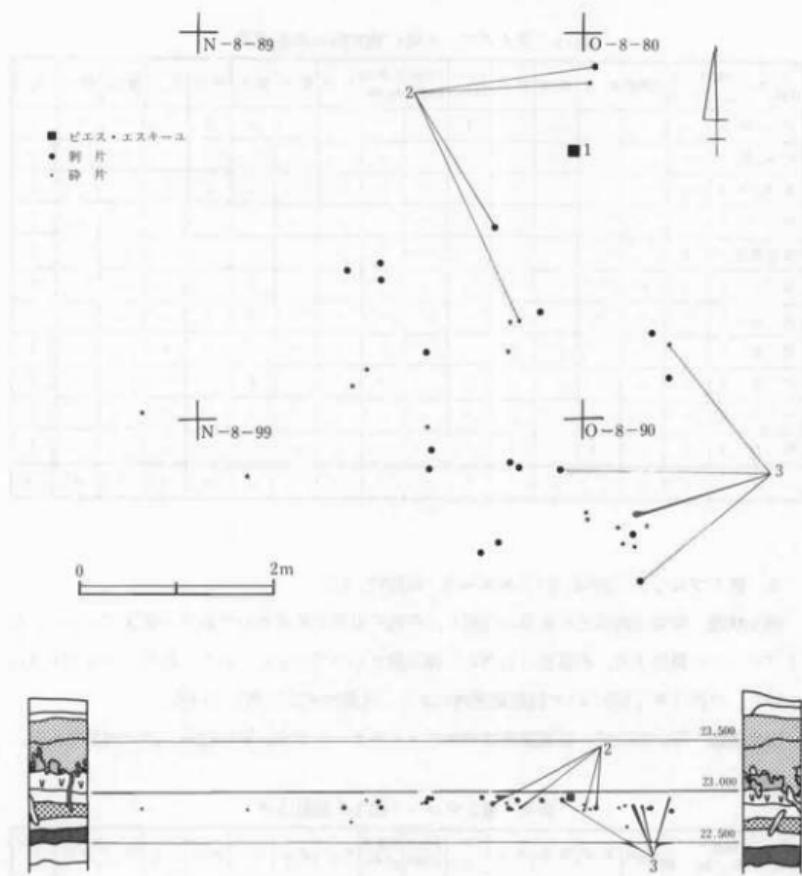


図56 第5ブロック遺物出土状況図

1はピエス・エスキューで、上下両端に刃つぶれが認められる。

**母岩別資料・接合資料** 石材は4種、母岩は計8種に識別し得た。メノウが最も多いものの、特に主体的とは言い難く、混在する状況である。なお、チャート1は第4ブロックチャート1と同一母岩に識別し得る。接合資料は剥片と碎片の接合2例である。

**まとめ** 小規模に纏ったブロックである。石器組成は貧弱で、石核も欠くことから技術的特徴の復元はできないが、剥片生産及び石器調整の性格を有するブロックとして捉えられよう。

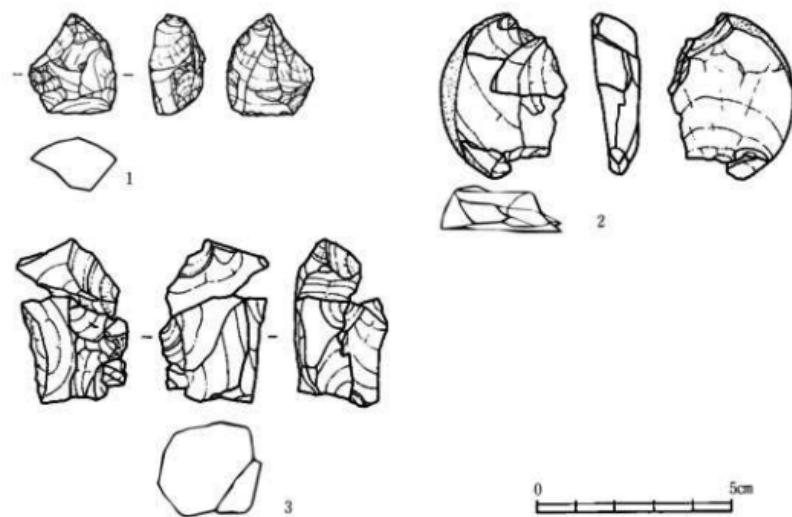


図57 第5ブロック出土遺物実測図

表77 第5ブロック出土石器計測表

博団 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の 位置	裏面 調整 有無	欠損の 有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-5-22	ピエス・エスキュー	2.6	2.2	1.3	75°	6.9	—	—	無	有	チャート

表78 第5ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	ナイフ形 石	尖頭器	石鎌	搔器	削器	ピエス・ エスキュー	2次加工 ある剥片	使用 ある剥片	石斧	削片	刮片	碎片	石核	敲石	礫片	計
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	3	—	—	—	7
頁岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	2
チャート 1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	5	1	—	—	—	—	7
チャート 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	—	—	3
メノウ 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
メノウ 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	3
メノウ 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	3	—	—	—	—	5
メノウ 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	1	—	—	—	—	4
計	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	19	12	—	—	—	—	32

表79 第5ブロック接合資料一覧表

擇回 番号	母岩別 資料	内 訳	内 容	数 量
2	安山岩 1	剥片2、砂片2	(S-5-18)+(S-5-23)+(S-5-24)+(S-5-25)	4
3	メノウ 4	剥片3、砂片1	(S-5-2)+(S-5-4)+(S-5-9)+(S-5-21)	4

## 4. 第13ブロック (図58、59、表80~82、図版13、16)

**出土状況** 遺跡西側に入り込んでいる谷津に面した縁辺部に形成されており、第17ブロックに近接している。石器群はVIIa層からVIIc層にかけて出土しており、最大レベル差0.20mを計る。平面分布は径6.0mの円形範囲内にあり、やや散漫な状況を呈している。

**出土遺物** 総計14点で、石器組成は2次加工のある剥片1点、使用痕のある剥片2点、剥片

表80 第13ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石	尖頭器	石 錐	搔 器	削 器	ビエス・ エスキュー		2次加工 ある剥片	使 用 痕 ある剥片	石 犁	剥 片	剥 片	砂 片	石 桿	敲 石	礫 片	計
							数量	%										
安山岩	数量	-	-	-	-	-	1	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	4
	%	-	-	-	-	-	7.2	7.2	-	-	14.4	-	-	-	-	-	-	28.0
珪質頁岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	2
	%	-	-	-	-	-	-	-	7.2	-	-	7.2	-	-	-	-	-	14.4
頁岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	2
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14.4	-	-	-	-	-	-	14.4
玄武岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.2	-	-	-	-	-	-	7.2
チャート	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	3
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14.4	7.2	-	-	-	-	-	21.6
黒曜石	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.2	-	-	-	-	-	-	7.2
砂岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.2	7.2
計	数量	-	-	-	-	-	1	2	-	-	9	1	-	-	-	-	1	14
	%	-	-	-	-	-	-	-	7.2	14.4	-	-	64.0	7.2	-	-	7.2	100

表81 第13ブロック出土石器計測表

擇回 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刀角	重量(g)	調整の位 置	裏面 調整	欠損の 有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-15-15	使用痕ある剥片	2.9	0.9	0.3	35°	0.9	-	-	無	有	安山岩
2	S-15-9	使用痕ある剥片	4.4	1.9	0.5	30°	2.5	-	-	無	有	珪質頁岩
3	S-15-12	2次加工ある剥片	2.2	1.9	0.8	30°	3.4	1側邊	有	有	無	安山岩

M-10-54

+ M-10-55

H M-10-64

+ M-10-65

H M-10-74

+ M-10-75

0 2m

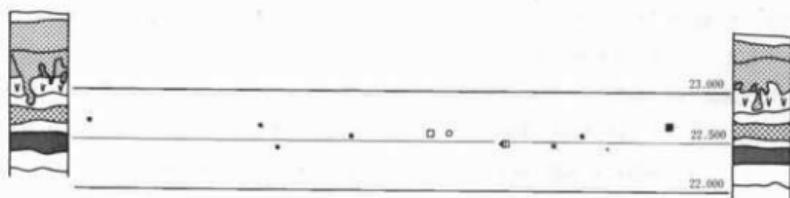


図58 第13ブロック遺物出土状況図

9点、碎片1点、礫片1点である。1は使用痕のある剝片で、左側辺に刃こぼれが認められる。

**母岩別資料・接合資料** 石材は7種、母岩は計11種に識別し得た。いずれも1点1母岩に近い状況であり、特に主体となるものはない。接合資料はない。

**まとめ** 石器組成は貧弱で、数量も少ない。また分布も散漫な状況であることなど、極めて廃棄の色彩が濃いものと言えよう。

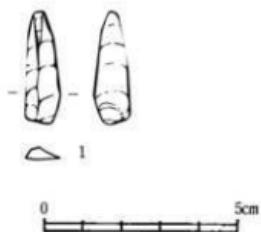


図59 第13ブロック出土遺物実測図

表82 第13ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	ナイフ形 石	尖頭器	石 核	器	削器	ビエス・ エスキュー	2次加工 ある剝片	使 用 痕 ある剝片	石 片	剝 片	剝 片	碎 片	石 核	砾 石	礫 片	計
安山岩 1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	2
安山岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
安山岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
珪質頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
珪質頁岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2
玄武岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
チャート 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2
チャート 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
黒曜石 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
計	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	9	1	-	-	1	14	

### 5. 第17ブロック (図60、61、表83~86、図版14、16)

**出土状況** 遺跡西側に入り込んでいる谷津に面した縁辺部に形成されており、第13ブロックに近接している。石器群はVI層からVIIc層にかけて出土しており、最大レベル差0.80mを計る。平面分布は長径7m、短径5mの楕円形の範囲内にあるが、北東部地区に特に密に集中する傾向が認められ、種々の石器が混在する。

**出土遺物** 総計172点で、石器組成は削器2点、ビエス・エスキュー2点、2次加工のある剝片4点、剝片75点、碎片86点、石核3点である。1、2は削器である。3、4はビエス・エスキューで、上下両端に刃こぼれが認められる。5~7は石核で、いずれも横長で剝片を生産したものである。加撃面を多方向に有していたことが看取できる。

**母岩別資料・接合資料** 石材は7種、母岩は計12種に識別し得た。安山岩が主体を成してお

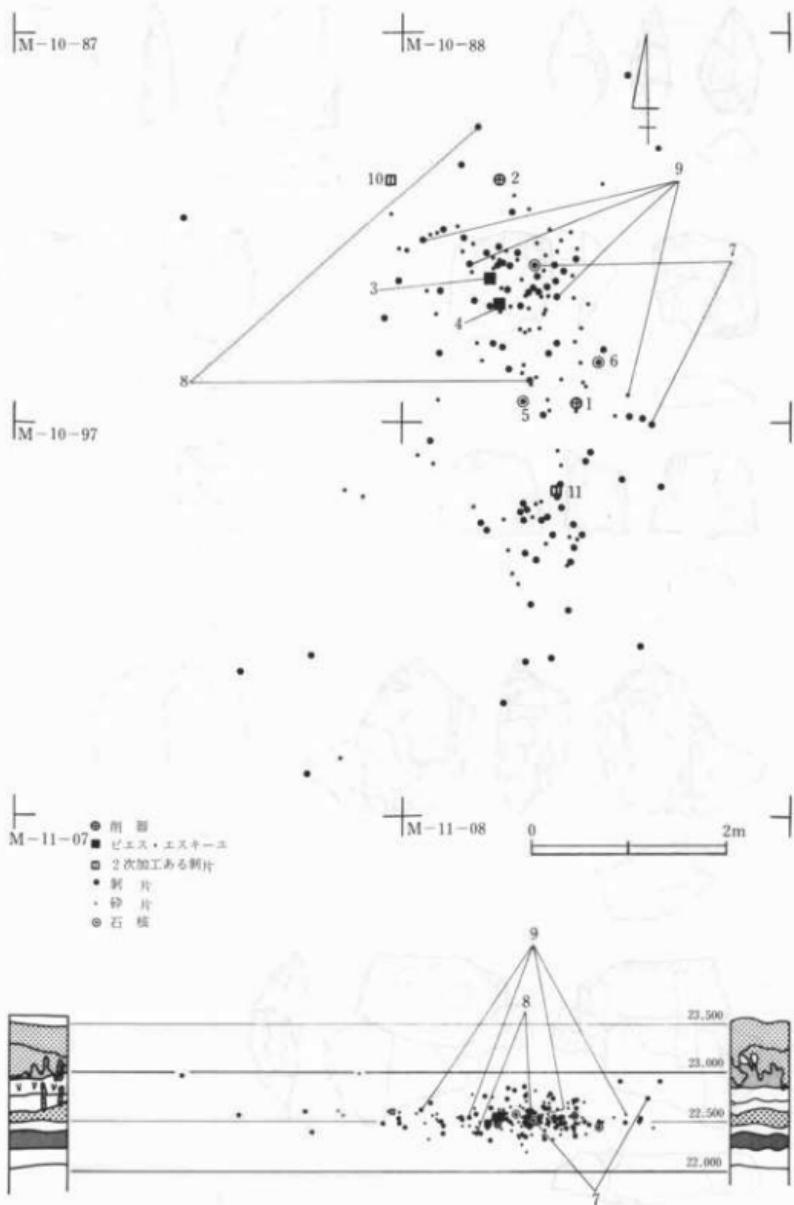


図60 第17ブロック遺物出土状況図

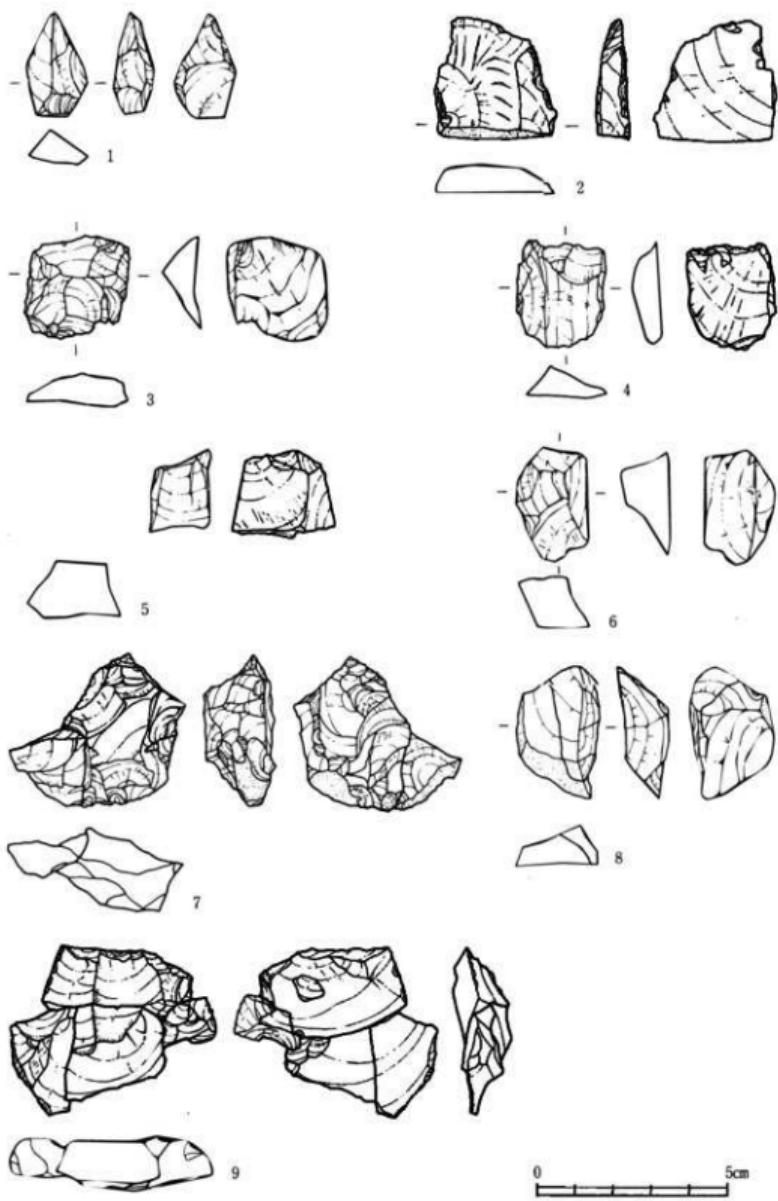


図61 第17ブロック出土遺物実測図

表83 第17ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石器	尖頭器	石 錐	擦 器	削 器	ビエス・ エスキュー	2次加工 ある剥片	使用 ある剥片	石 斧	削 片	碎 片	石 核	敲 石	擦 片	計	
安山岩	数量	—	—	—	—	1	2	2	—	—	—	67	73	2	—	—	147
	%	—	—	—	—	0.6	1.2	1.2	—	—	—	39.0	42.7	1.2	—	—	85.9
頁岩	数量	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	3
	%	—	—	—	—	0.6	..	—	—	—	—	0.6	0.6	—	—	—	1.8
チャート	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	5	1	—	—	10
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.3	2.9	0.6	—	—	5.8
黒曜石	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.6	—	—	—	0.6
粘板岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.6	—	—	—	—	0.6
凝灰岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	6	—	—	—	8
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.2	3.5	—	—	—	4.7
シルト岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.6	—	—	—	—	0.6
計	数量	—	—	—	—	2	2	2	—	—	—	77	86	3	—	—	171
	%	—	—	—	—	1.2	1.2	1.2	—	—	—	44.3	50.3	1.8	—	—	100

表84 第17ブロック出土石器計測表

辨認番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位置	裏面調整有無	欠損有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-17-136	削器	2.7	1.6	0.8	65°	2.7	1側刃、下端	有	無	無	安山岩
2	S-17-91	削器	3.2	3.2	0.8	40°	9.6	1側刃、上端	無	無	無	頁岩
3	S-17-154	ビエス・エスキュー	2.7	2.7	1.0	45° 40°	6.3	—	—	無	有	安山岩
4	S-17-176	ビエス・エスキュー	2.8	2.3	0.9	35° 70°	5.2	—	—	有	有	安山岩
5	S-17-52	石核	2.2	2.7	1.5	—	10.3	—	—	無	—	安山岩
6	S-17-100	石核	2.9	1.9	1.4	—	6.9	—	—	無	—	安山岩
7	S-17-147	石核	4.1	3.1	1.8	—	21.1	—	—	無	—	チャート
10	S-17-89	2次加工ある剥片	2.1	1.9	0.3	—	1.1	1側刃、上端	無	無	無	安山岩
11	S-17-128	2次加工ある剥片	3.6	2.2	1.2	60°	8.9	1側刃、下端	有	無	無	安山岩

り、全体の85.9%を占めている。したがって石器についても安山岩製のものが多い。接合資料は石核と剥片の接合1例、剥片と碎片の接合1例、剥片どうしの接合1例で計3例である。前者2例がチャート1、後者1例が安山岩1の接合資料である。

まとめ 比較的小規模に纏ったブロックである。安山岩を主体とした剥片生産及び石器調整の場としての性格を有したブロックと言える。利器が少ないとことなどから、他への搬出が考え

られる。

表85 第17ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 核	標 器	削 器	ビエス・ エスキュー	2次加工 ある剥片	使 用 度 ある剥片	石 斧	削 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	擦 片	計
安山岩 1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	41	50	-	-	-	93
安山岩 2	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	25	20	2	-	-	50
安山岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
頁岩 2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
頁岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
チャート 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	5	1	-	-	-	10
黒曜石 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
粘板岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
凝灰岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2
凝灰岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	5	-	-	-	-	-	6
シルト岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
計	-	-	-	-	2	2	2	-	-	-	76	83	3	-	-	-	168

表86 第17ブロック接合資料一覧表

辨認番号	母岩別資料	内 説	内 容	数 量
7	チャート 1	石核1、剥片1	(S-17-147)+(S-17-23)	2
8	安山岩 1	剥片2	(S-17-53)+(S-17-121)	2
9	チャート 1	剥片3、碎片1	(S-17-25)+(S-17-63)+(S-17-71)+(S-17-81)	4

### 6. 第29ブロック (図62、63、表87~89、図版14、16)

**出土状況** 第3文化層中最も南側に位置し、台地南側に展開する谷津に面した縁辺部に形成される。石器群はVI層からVIIa層にかけて出土するが、VIIa層を中心としており、最大レベル差0.30mを計る。平面分布は長径4.5m、短径3.0mの楕円形の範囲内にあるが、南側に集中する傾向が認められる。利器は周辺部に分布する。

**出土遺物** 総計18点で、石器組成はビエス・エスキュー2点、2次加工のある剥片1点、削片1点、剥片9点、碎片4点、石核1点である。1、2はビエス・エスキューで、上下両端に刃つぶれが認められる。いずれも一面に自然面を有している。3はビエス・エスキュー・スホールで、下端は欠損するが、上端には刃つぶれが認められる。4は石核で、縦長剥片を生産したものである。

**母岩別資料・接合資料** 石材は6種、母岩は計8種に識別し得た。シルト岩が最も多いが、いずれも数量が少なく、特に主体を成しているものはない。ただ、メノウは第32ブロック出土

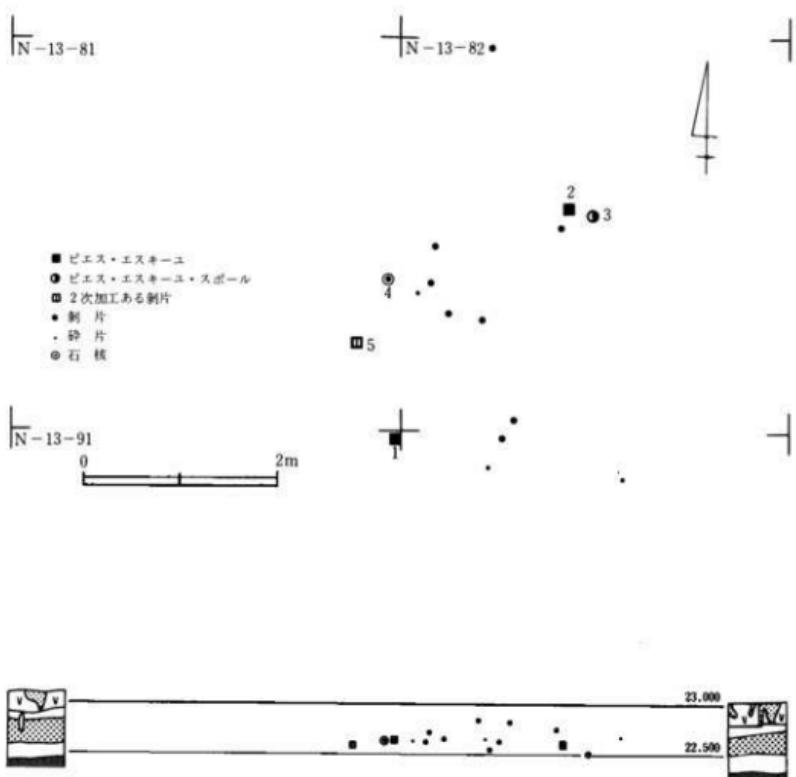


図62 第29ブロック遺物出土状況図

表87 第29ブロック出土石器計測表

博覧 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位 置	裏面 調整	欠損 有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-29-6	ピエス・エスキュー	4.6	3.9	1.4	60° 45°	25.2	—	—	無	有	頁岩
2	S-29-11	ピエス・エスキュー	4.5	2.7	1.4	80° 35°	22.0	—	—	無	有	砂岩
3	S-29-10	ピエス・エスキュー ・スパール	(4.8)	3.0	0.6	—	9.6	—	—	有	—	頁岩
4	S-29-4	石核	3.1	2.8	1.1	—	7.8	—	—	無	—	頁岩
5	S-29-5	2次加工ある剝片	2.3	1.8	0.4	25°	1.4	1側刃、上 端	無	無	無	メノウ

表88 第29ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石 剑	尖頭器	石 破	擦 磨	削 器	ピエス- エスキューある剥片	2次加工 使用 ある剥片	石 刃	削 片	剥 片	石 槌	敲 石	擦 片	計
安山岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	11.0	-	-	-	-	11.0
珪質頁岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	5.5	-	-	-	-	5.5
頁岩	数量	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	1	-	4
	%	-	-	-	-	5.5	-	-	-	5.5	5.5	-	5.5	-	22.0
メノウ	数量	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	2
	%	-	-	-	-	-	5.5	-	-	-	5.5	-	-	-	11.0
砂岩	数量	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	2
	%	-	-	-	-	5.5	-	-	-	-	5.5	-	-	-	11.0
シルト岩	数量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	4	-	-	7
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17.5	22.0	-	-	39.5
計	数量	-	-	-	-	2	1	-	-	1	9	4	1	-	18
	%	-	-	-	-	11.0	5.5	-	-	5.5	50.5	22.0	5.5	-	100

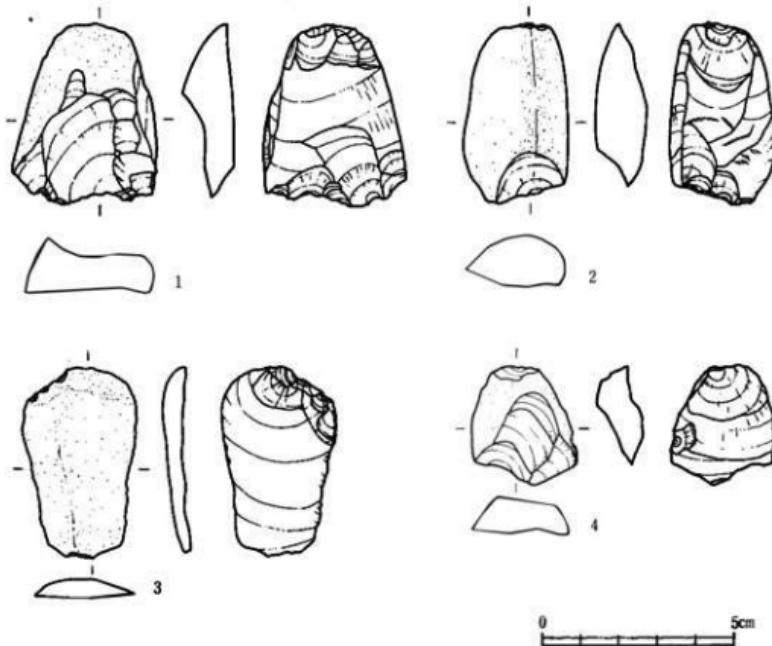


図63 第29ブロック出土遺物実測図

表89 第29ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	ナイフ形 石	尖頭器	石 鋸	標 器	削 器	ビエス・ エスキュー	2次加工 ある削片	使用 ある削片	石 刃	削 片	剥 片	砂 片	石 核	敲 石	標 片	計
安山岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2
珪質頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
頁 岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
頁 岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	2
頁 岩 3	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
メノウ 1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	2
砂 岩 1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2
シルト岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	4	-	-	-	-	7
計	-	-	-	-	2	1	-	-	1	9	4	1	-	-	-	18

のものと同一母岩に識別できるものである。接合資料は皆無である。

まとめ 小規模に纏ったブロックで、ビエス・エスキューを中心とする。数量が少なく、ブロックの具体的な性格などについての検討に堪える状況ではない。

### 7. 第32ブロック (図64~66、表90~93、図版14、16)

**出土状況** 台地南側に展開する谷津に面した縁面部に形成されており、第39ブロック、第40ブロックに隣接する。石器群はVI層からVIIb層にかけて出土しており、最大レベル差0.65mを計る。平面分布は長径7m、短径5mの橢円形の範囲内にあり、石核を中心として密な状況が看取できる。

**出土遺物** 総計137点で、石器組成はナイフ形石器1点、削器1点、剥片95点、碎片35点、石

表90 第32ブロック出土石器組成表

石材	ナイフ形 石	尖頭器	石 鋸	標 器	削 器	ビエス・ エスキュー	2次加工 ある削片	使用 ある削片	石 刃	削 片	剥 片	砂 片	石 核	敲 石	標 片	計
珪質頁岩	数値	-	-	-	-	1	-	-	-	-	36	8	1	-	-	46
	%	-	-	-	-	0.7	-	-	-	-	26.2	5.8	0.7	-	-	33.4
頁 岩	数値	-	-	-	-	-	-	-	-	-	18	6	-	-	-	24
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13.2	4.3	-	-	-	17.5
メノウ	数値	1	-	-	-	-	-	-	-	-	41	20	4	-	-	66
	%	0.7	-	-	-	-	-	-	-	-	30.1	14.6	3.0	-	-	48.4
不明	数値	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
	%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.7	-	-	-	-	0.7
計	数値	1	-	-	-	1	-	-	-	-	95	35	5	-	-	137
	%	0.7	-	-	-	0.7	-	-	-	-	69.5	25.4	3.7	-	-	100

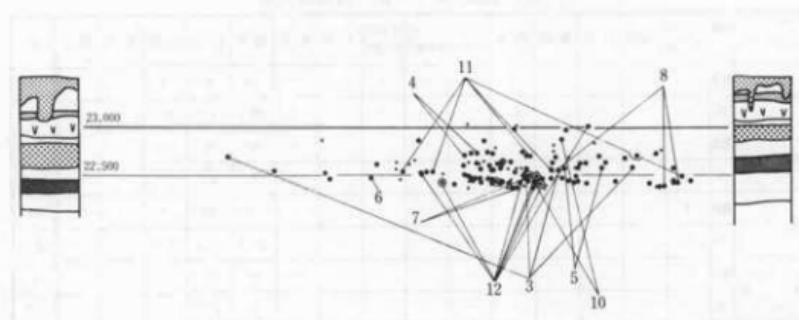
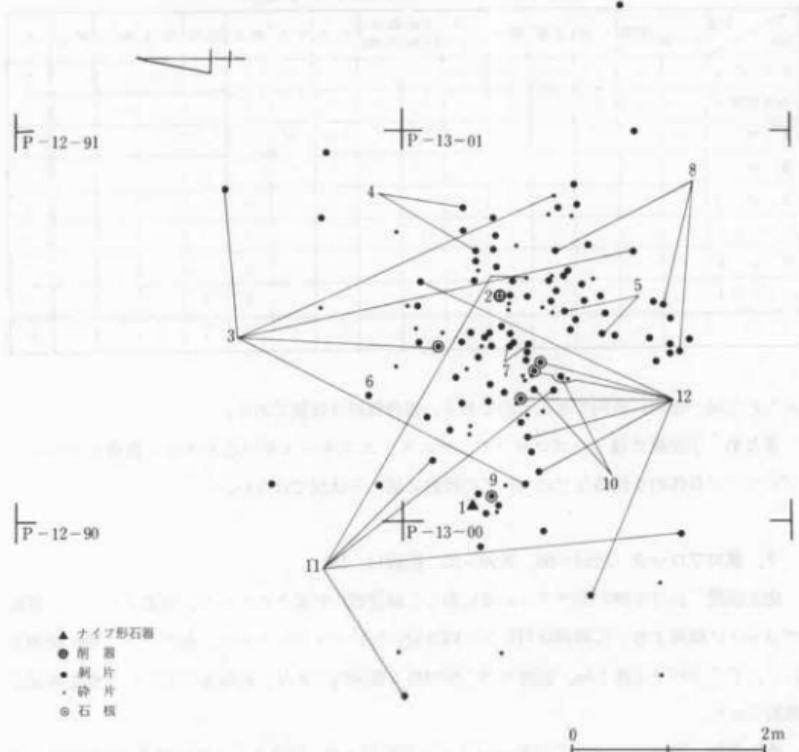


図64 第32ブロック遺物出土状況図

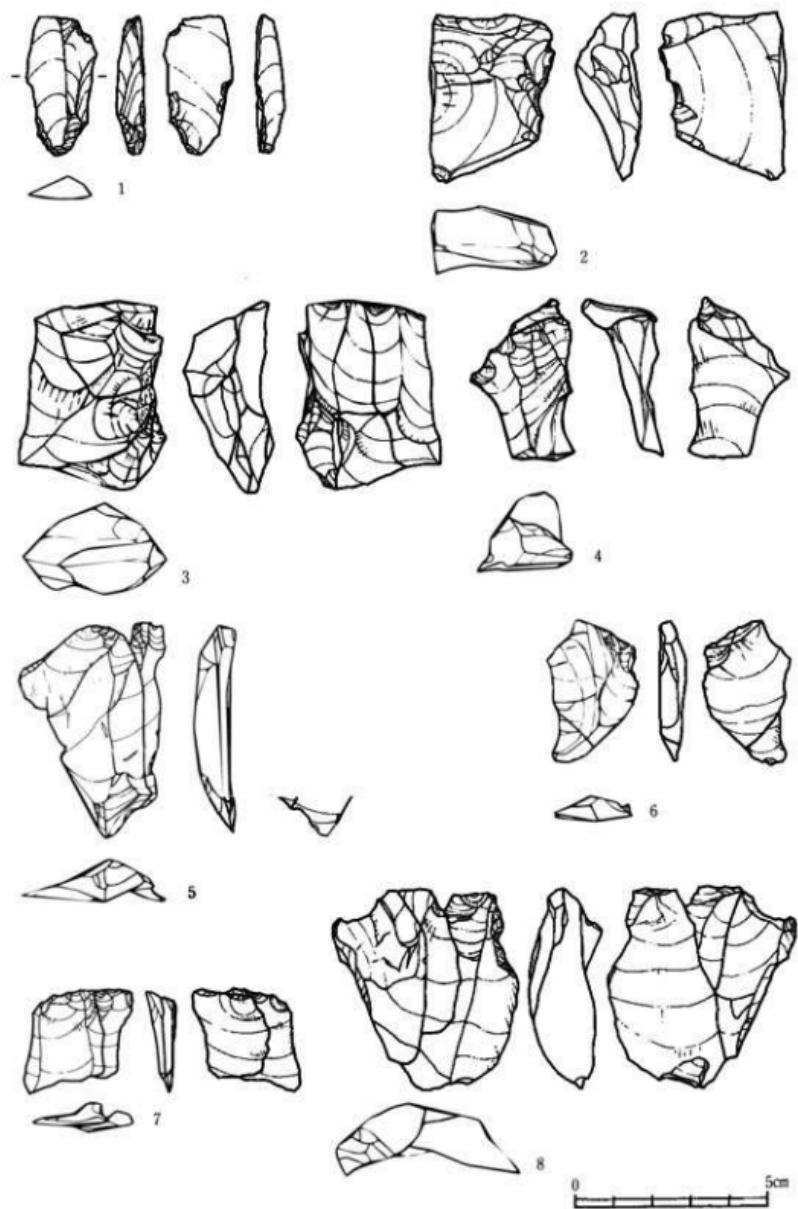


図65 第32ブロック出土遺物実測図(1)

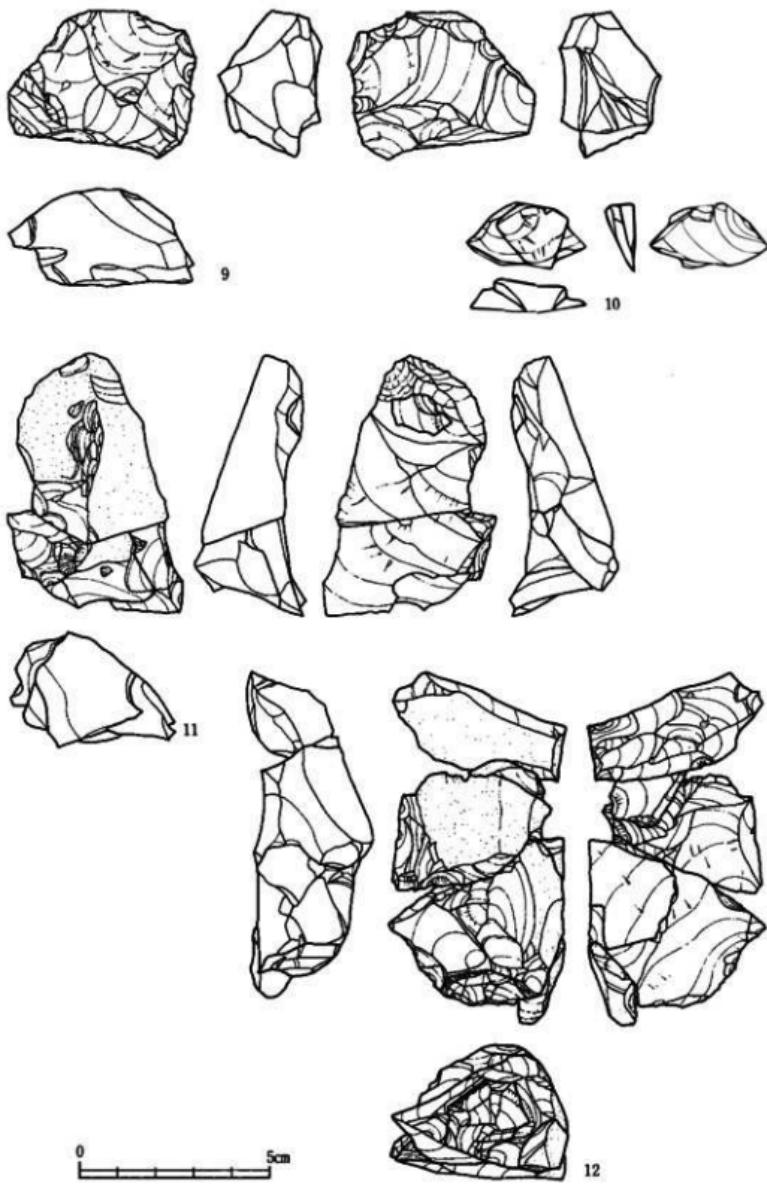


図66 第32ブロック出土遺物実測図(2)

表91 第32ブロック出土石器計測表

押出番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位置	裏面調整	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-32-19	ナイフ形石器	(3.6)	1.8	0.7	30°	3.9	2側辺	有	有	無	メノウ
2	S-32-65	削器	4.4	3.3	1.6	60°	23.3	1側辺	一部有	無	無	珪質頁岩
3	S-32-106	石核	4.3	3.4	1.7	—	19.5	—	—	無	—	珪質頁岩
9	S-32-21	石核	5.0	3.7	2.7	—	49.9	—	—	無	—	メノウ
12	S-32-100	石核	5.1	4.0	2.5	—	50.5	—	—	無	—	メノウ
12	S-32-102	石核	4.8	3.4	2.3	—	30.1	—	—	無	—	メノウ
12	S-32-117	石核	4.5	2.7	1.7	—	21.7	—	—	無	—	メノウ

表92 第32ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	ナイフ形石器	尖頭器	石鏟	擂器	削器	ビエス・エスキース	2次加工	使用痕	石片	削片	剥片	碎片	石核	敲石	礫片	計
珪質頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15	3	—	—	—	—	—	18
珪質頁岩2	—	—	—	—	1	—	—	—	—	19	5	1	—	—	—	—	26
珪質頁岩3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	2
頁岩1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	1	—	—	—	—	—	12
頁岩2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	5	—	—	—	—	—	11
頁岩3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
メノウ1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	39	20	4	—	—	—	—	64
メノウ2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	2
不明1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
計	1	—	—	—	1	—	—	—	—	95	35	5	—	—	—	—	137

核5点である。1はナイフ形石器で、縦長剥片を素材としたものである。先端部を欠損するが、2側辺に加工が施されている。2は削器で、1側辺に調整加工が施される。3、9は石核で、いずれも縦長剥片を生産したものである。12は石核と剥片の接合例であるが、3点の石核が含まれる。

**母岩別資料・接合資料** 石材は不明1種を含めて4種、母岩は計9種に識別し得た。メノウが主体的であるが、珪質頁岩、頁岩も少なからず認められる。珪質頁岩は赤褐色の斑点が多く認められるものである。接合資料は石核と剥片の接合2例、剥片どうしの接合6例、剥片と碎片の接合1例で計9例ある。中でも石核と剥片の接合は技術的特徴の復元に良好な資料であり、特にメノウについては石核3点を含む接合資料がある。また、メノウ1は比較的大形の原石を有するものと思われる。

**まとめ** 本ブロックは剥片生産技術について良好な資料を示している。メノウ1を母岩と

表93 第32ブロック接合資料一覧表

標印番号	母岩別資料	内 説	内 容	数 量
3	珪質頁岩 1	石核 1、剥片 3、碎片 1	(S-32-106)+(S-32-1)+(S-32-23)+(S-32-56)+(S-32-86)	5
4	珪質頁岩 2	剥片 2	(S-32-75)+(S-32-77)	2
5	珪質頁岩 2	剥片 2	(S-32-52)+(S-32-60)	2
6	珪質頁岩 2	剥片 2	(S-32-13)	2
7	珪質頁岩 2	剥片 2	(S-32-128)+(S-32-129)	2
8	頁 岩 1	剥片 3	(S-32-46)+(S-32-47)+(S-32-81)	3
10	メノウ 1	剥片 2	(S-32-40)+(S-32-101)	2
11	メノウ 1	剥片 4、碎片 1	(S-32-34)+(S-32-41)+(S-32-63)+(S-32-90)+(S-32-97)	5
12	メノウ 1	石核 3、剥片 4	(S-32-100)+(S-32-102)+(S-32-117)+(S-32-6)+(S-32-24)+(S-32-26)+(S-32-93)	7

する接合資料12で原石よりまず3点以上の剥片を生産し、それらを各々石核に転用している。転用した石核の内1点については縦長剥片を生産した痕跡が認められる。また、同一母岩のナイフ形石器も出土しており、切先部を欠損するが、2側辺に加工が施されている。本ブロックは剥片生産から石器調整に至る良好な資料と成り得るであろう。

#### 8. 第39ブロック(図67~69、表94~97、図版15、16)

**出土状況** 台地南側に展開する谷津に面した縁辺部に形成されており、第32ブロック、第40ブロックに隣接する。石器群はVIIa層からVIIb層を中心として出土しており、レベル差0.30mの範囲内にあるが、12の敲石に関してはさらにレベル差0.30mを計り、VII層出土である。あるいは第2文化層に属する単独出土となり得る可能性もある。平面分布は長径7.0m、短径4.0mの橿円形の範囲内にあり、比較的密な分布状況を示している。

**出土遺物** 総計58点で、石器組成はナイフ形石器2点、剥片34点、碎片18点、石核2点、敲石2点である。1、2はナイフ形石器で、いずれも縦長剥片を素材としたものである。1は切先部を欠損するが、1側辺に急角度な刃つぶし加工が施され、基部に截断面が認められる。2は刃部先端を欠損するが、やはり急角度な刃つぶし加工が施される。3、4は石核である。11、12は敲石である。11は上下両端に使用痕が認められるが、下端は特に顯著であり、その際にできたと思われる剝離痕が認められる。12は使用痕は認められず、敲石というよりもむしろ剥片生産の原石の可能性も考えられる。

**母岩別資料・接合資料** 石材は6種、母岩は計13種に識別し得た。頁岩がやや主体的であり、利器、石核、剥片、碎片と、一連の石器生産工程が捉えられる。接合資料は石核と碎片の接合1例、剥片と碎片の接合2例、剥片どうしの接合4例である。

+ P-12-70

+ P-12-71

+  
+

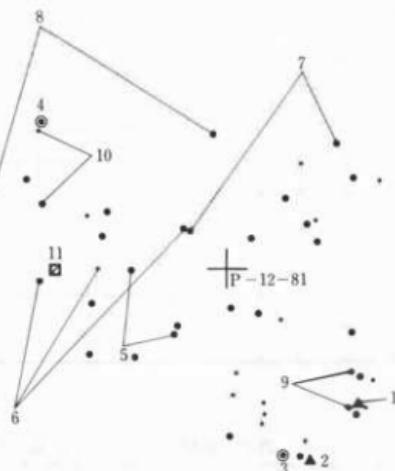
+ P-12-80

12

+ P-12-81

11

12



- ▲ ナイフ形石器
- 刺 片
- ・ 鋸 片
- ◎ 石 棘
- ▣ 鏽 石

+ P-12-90

+ P-12-91

2m

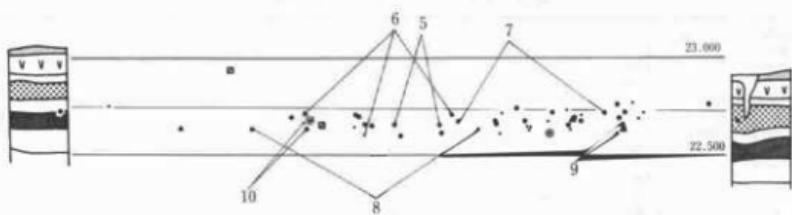


図67 第39ブロック遺物出土状況図

表94 第39ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 鏟	標 器	削 器	ビニス・ エスキュー	2次加工 ある剝片	用 石 ある剝片	石 斧	削 片	剥 片	砂 片	石 核	敲 石	擦 片	計
安山岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	1	—	—	—	7
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.3	1.7	—	—	—	12.0
頁岩	数量	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13	5	2	—	—	21
	%	3.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	22.5	8.6	3.4	—	—	37.9
チャート	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	1	—	—	3
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.4	—	1.7	—	—	5.1
黒曜石	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	8	—	—	—	11
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.1	139	—	—	—	19.0
砂岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	1	—	1	—	5
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.1	1.7	—	1.7	—	8.5
シルト岩	数量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	1	—	—	—	10
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15.8	1.7	—	—	—	17.5
計	数量	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	34	18	2	2	—	58
	%	3.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	58.8	31.0	3.4	3.4	—	100

表95 第39ブロック出土石器計測表

擇因 番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位 置	高衝 調整	欠損の有 無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-39-52	ナイフ形石器	(2.5)	1.1	0.5	25°	1.5	1側辺	無	有	無	頁岩
2	S-39-39	ナイフ形石器	(1.9)	1.3	0.6	35°	0.9	1側辺	無	有	無	頁岩
3	S-39-37	石核	3.2	2.6	2.0	—	13.3	—	—	無	—	頁岩
4	S-39-2	石核	8.5	6.3	3.8	—	212.0	—	—	無	—	頁岩
11	S-39-7	敲石	7.8	4.7	4.1	—	216.0	—	—	有	有	砂岩
12	P-12-80-1	敲石	7.2	3.9	2.5	—	79.9	—	—	無	無	チャート

表96 第39ブロック接合資料一覧表

擇因 番号	母岩別資料	内訳	内容	数量
3	頁岩 1	石核1、砂片1	(S-39-37)	2
5	シルト岩 2	剥片2	(S-39-11)+(S-39-12)	2
6	シルト岩 1	剥片2、砂片1	(S-39-8)+(S-39-13)+(S-39-15)	3
7	頁岩 1	剥片2	(S-39-16)+(S-39-25)	2
8	頁岩 4	剥片2	(S-39-5)+(S-39-18)	2
9	安山岩 1	剥片2	(S-39-41)+(S-39-53)	2
10	砂岩 2	剥片1、砂片1	(S-39-3)+(S-39-6)	2

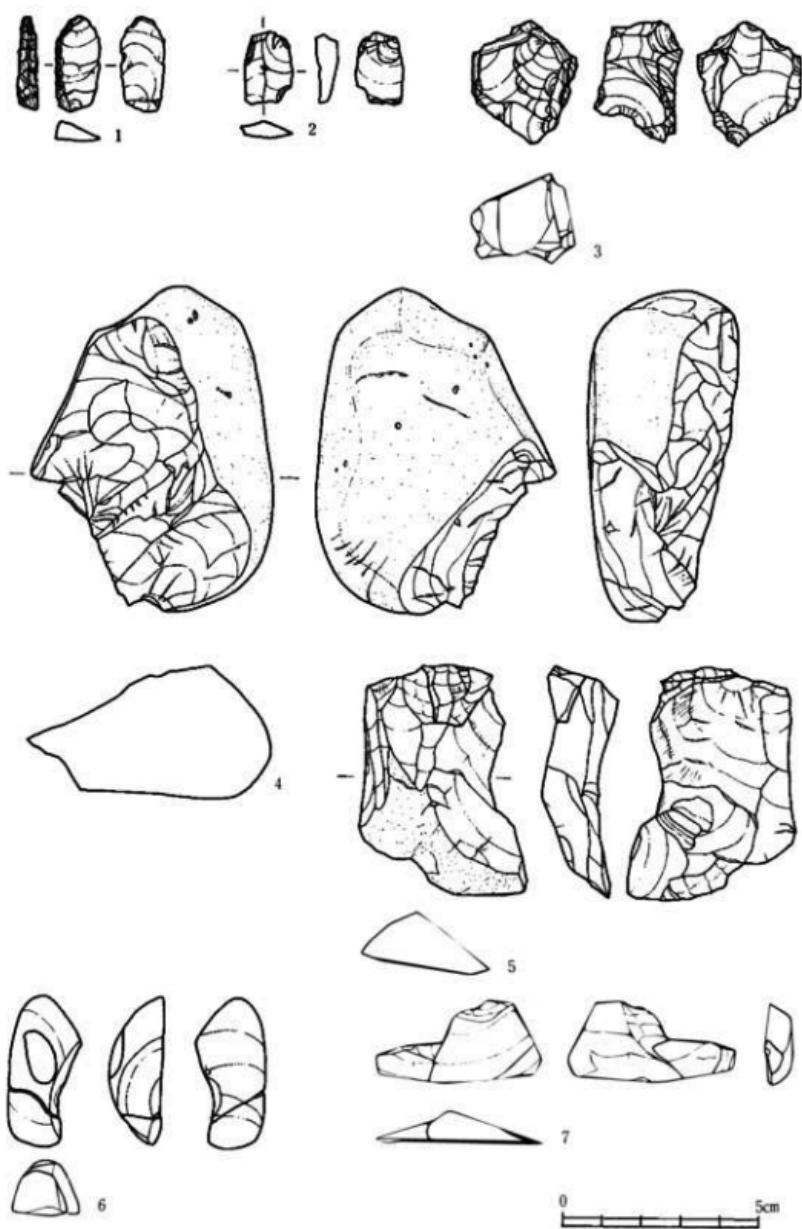


図68 第39ブロック出土遺物実測図(1)

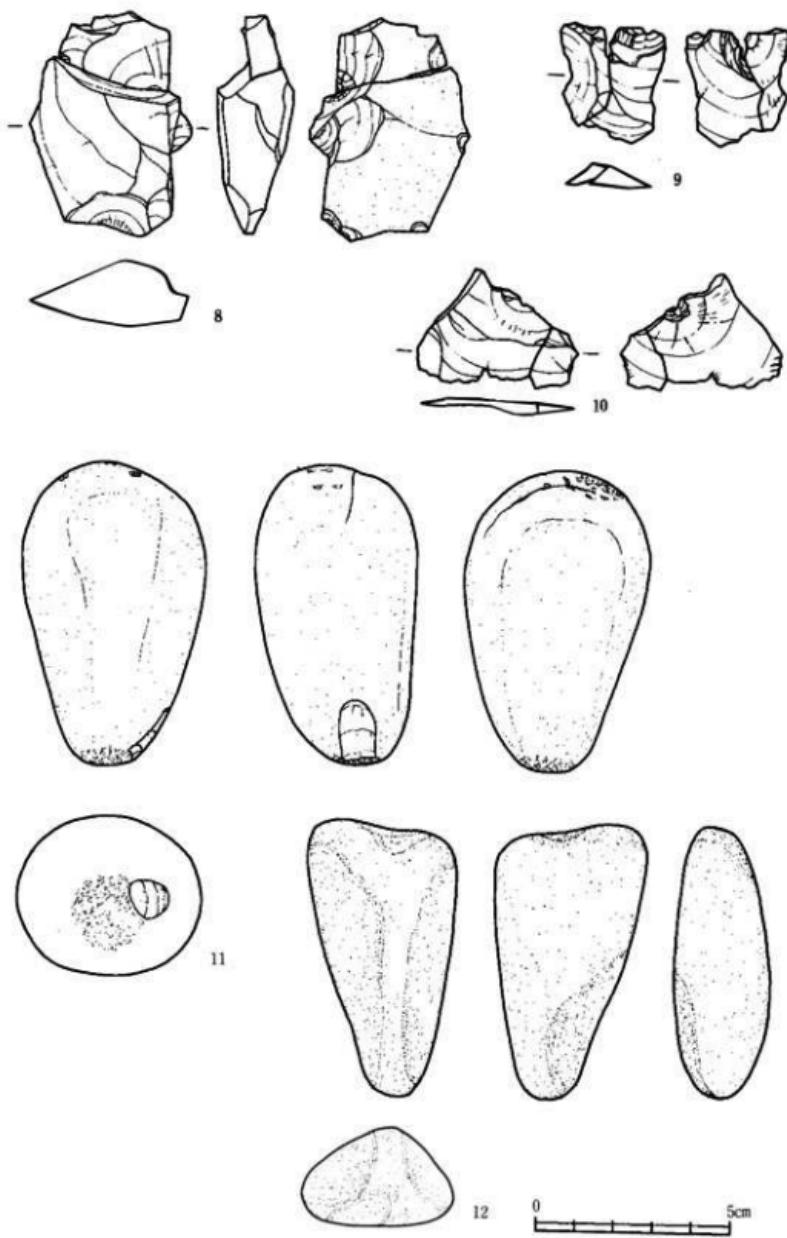


図69 第39ブロック出土遺物実測図(2)

表97 第39ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種 タイプ形 石	尖頭器	石 鋸	擴 器	削 器	ビエス・ エスキー		2次加工 ある剥片	使 用 有る剥片	石 砕	削 片	剥 片	碎 片	石 核	敲 石	礫 片	計
						エスキー	ビエス										
安山岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	1	-	-	-	6
安山岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
頁 岩 1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	4	1	-	-	-	13
頁 岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
頁 岩 3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2
頁 岩 4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-	6
チャート 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2
チャート 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
黒曜石 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	5	-	-	-	-	8
砂 岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
砂 岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-	-	4
シルト岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-	5
シルト岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	5
計	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	34	15	2	2	-	-	55

まとめ 小規模に纏ったブロックである。剥片生産及び石器調整を反映したブロックとして考えられ、利器の出土は少ないものの、一連の工程を考えられる資料は存在する。また、大形の石核の存在などにより、遺棄された状況が看取できよう。

### 9. 第40ブロック（図70、71、表98～100、図版15、17）

**出土状況** 台地南側に展開する谷津に面した縁辺部に形成されており、第32ブロック、第39ブロックに隣接する。石器群はVIIa層からVIIb層にかけて出土しており、最大レベル差0.20mを計る。平面分布は径3mの円形範囲内にあり、小規模に纏る分布を示している。

**出土遺物** 総計9点で、石器組成はナイフ形石器1点、使用痕のある剥片1点、剥片4点、碎片2点、石核1点である。1はナイフ形石器で、縦長剥片を素材としたものである。1側辺に刃つぶし加工が施され、基部には截断面が認められる。2は石核で、縦長剥片を生産したものである。

表98 第40ブロック出土石器計測表

擇回 番号	遺 物 番 号	器 種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の 位 置	裏面 調整 有無	欠損の 有無	使 用 痕	
			長さ	幅	厚さ							
1	S-40-3	ナイフ形石器	3.2	1.5	0.8	45°	3.7	1側辺、下端	無	無	有	頁 岩
2	S-40-7	石 核	8.5	4.2	3.2	-	172.2	-	-	無	-	砂 岩
3	S-40-5	使 用 痕 有る 剥 片	3.9	2.4	0.7	15°	4.7	-	-	無	有	珪質頁岩

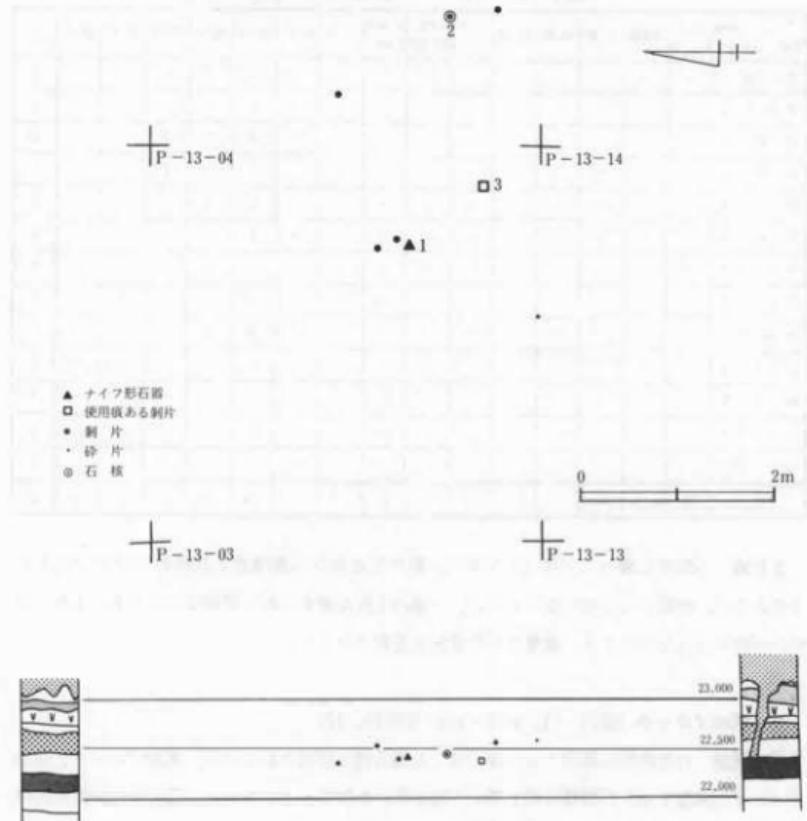


図70 第40ブロック遺物出土状況図

表99 第40ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	器種	ナイフ形 石器	尖頭器	石 錐	撲 器	削 器	ビエス・ エスキュー	2次加工 ある剝片	発 見 有 る 剝片	石 核	剝 片	剝 片	碎 片	石 核	敲 石	礫 片	計
安山岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
珪質頁岩 1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
頁岩 1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	4
頁岩 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
チャート 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
砂岩 1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
計		1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	4	2	1	-	-	9

表100 第40ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石 器	尖頭器	石 鏃	搔 器	削 器	ビヌス・ エスカーネ 2次加工用 ある剥片 ある剥片	石 斧	削 片	刮 片	碎 片	石 核	敲 石	礫 片	計
		数 量	%	数 量	%	数 量	%	数 量	%	数 量	%	数 量	%	数 量	数 量
安山岩	数 量	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	11.1	—	—	—	—	11.1
珪質頁岩	数 量	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
	%	—	—	—	—	—	—	11.1	—	—	—	—	—	—	11.1
頁岩	数 量	1	—	—	—	—	—	—	—	3	1	—	—	—	5
	%	11.1	—	—	—	—	—	—	—	33.4	11.1	—	—	—	55.6
チャート	数 量	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	11.1	—	—	—	—	11.1
砂岩	数 量	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1
	%	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11.1	—	—	11.1
計	数 量	1	—	—	—	—	—	1	—	—	4	2	1	—	9
	%	11.1	—	—	—	—	—	11.1	—	—	44.5	22.2	11.1	—	100

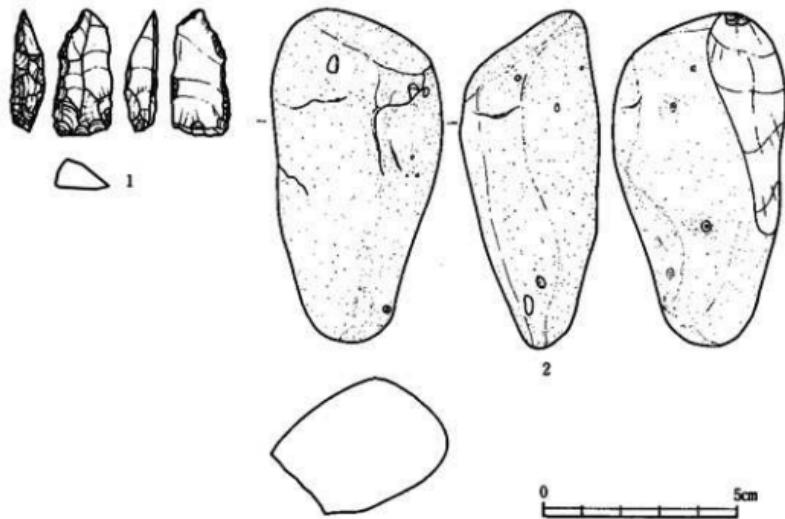


図71 第40ブロック出土遺物実測図

母岩別資料・接合資料 石材は5種、母岩は計6種に識別し得た。数量が少なく、主体と成り得るものは指摘できないが、頁岩が最も多く、他は各1点である。

まとめ 数量が少なく、検討に堪えうる資料ではない。

## 10. 第3文化層のまとめ

自然層におけるVIIa層段階に相当する文化層である。計9ブロックの石器群を検出したが、立地上以下の3つに分類可能である。

- ① 台地平坦部。
- ② 台地西側縁辺部。(南側から入り込む谷津に面する)
- ③ 台地南側縁辺部。

①は第3、4、5ブロックが相当する。いずれも石器組成は貧弱で、利器の出土が極めて少ないと特徴が認められる。剝片生産及び石器調整を反映したブロックとして捉えられるものである。

②は第13、17ブロックが相当する。やはり石器組成は貧弱で、利器の出土は少ない。第13ブロックは廃棄の色彩が濃いブロックだが、第17ブロックは安山岩を中心として剝片生産及び石器調整を反映したブロックとして捉えられる。

③は第29、32、39、40ブロックが相当する。計4ブロックを数えるが、第29、40ブロックは数量が少なく、検討に堪えうる資料ではない。第32、39ブロックは剝片生産及び石器調整の性格を有するブロックとして捉えられる。いずれにも石核の出土が見られ、特に第32ブロックについては技術的な復元において良好な資料を提示している。原石を適当な大きさに分割した後、目的剝片を生産する手法であり、剝片を石核に転用した例である。石核は剝片生産がまだそれ程進んでいない状況で出土しているが、一部に縦長剝片を生産した痕跡が認められる。

以上、立地別に特徴を挙げてみた。当文化層全体としては、搬入石材に関して特異な状況が看取できる。第1、第2文化層が黒曜石を主体としているのに対し、当文化層は安山岩、頁岩を主体として成立している。また、第32ブロックにおいてはメノウが主体を成している点も特異な状況として指摘できよう。石材の搬入経路などにおいても興味が持たれるところである。

## 第5節 第4文化層

VIIc～VIII層段階の文化層である。

第21ブロックの1ブロックのみであり、総計22点の石器群を検出した。小規模に展開するブロックであり、当遺跡最古の石器群である。

台地西側縁辺部に位置しており、第2文化層に隣接して検出した。

遺物としては、剝片、碎片の他、削器、石錐、ビエス・エスキュー、石斧が出土している。

### 1. 第21ブロック (図72、73、表101～104、図版17)

出土状況 第2文化層に属する第13ブロックの北側に隣接するブロックで、当遺跡西側に入

+

+

+

+

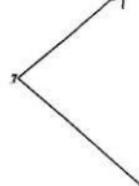


M-10-23

M-10-24

M-10-25

M-10-26



M-10-33

M-10-34

M-10-35

M-10-36

M-10-43

M-10-44

M-10-45

- 磁器
- ピース・エスカーエ
- ◎ 石灰岩
- \* 骨片
- \* 牙片

図72 第21ブロック遺物出土状況図

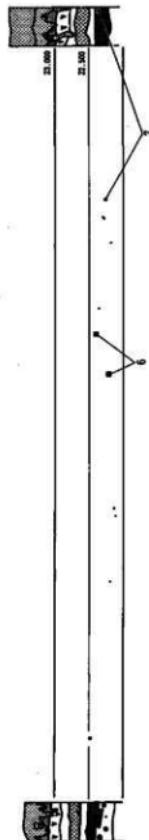


表101 第21ブロック出土石器組成表

石材	器種	ナイフ形 石 鋸	尖頭器	石 錐	標 器	削 器	ビエス- エスキュー	2次加工用 器具	使用 ある剥片 ある剥片	石 斧	削 片	剥 片	石 核	敲 石	標 片	計
	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%	数量	%
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	4
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	18.2	-	-	-	18.2
珪質頁岩	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2
	-	-	-	-	4.5	-	-	-	-	-	4.5	-	-	-	-	9.1
頁岩	-	-	1	-	-	3	-	-	-	1	2	-	-	-	-	7
	-	-	4.5	-	-	13.7	-	-	-	4.5	9.1	-	-	-	-	31.8
黒曜石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.5	-	-	-	4.5
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	4	-	-	-	8
	-	-	-	-	-	-	-	-	9.1	-	9.1	18.2	-	-	-	36.4
計	数量	-	-	1	-	1	3	-	-	2	1	5	9	-	-	22
	%	-	-	4.5	-	4.5	13.7	-	-	9.1	4.5	22.7	41.0	-	-	-

表102 第21ブロック出土石器計測表

辨認番号	遺物番号	器種	大きさ(cm)			刃角	重量(g)	調整の位置	裏面調整有無	欠損の有無	使用痕	石材
			長さ	幅	厚さ							
1	S-13-8	石錐	2.0	1.3	0.4	40°	0.8	2側辺	無	有	無	頁岩
2	S-13-16	削器	(1.6)	(2.2)	0.8	50°	2.1	1側辺	一部有	有	無	珪質頁岩
3	S-13-14	ビエス・エスキュー	2.0	1.4	0.4	40°	1.2	-	-	有	有	頁岩
4	S-21-2	ビエス・エスキュー	1.9	1.8	0.4	45°	1.4	-	-	無	有	頁岩
5	S-21-3	ビエス・エスキュー	1.8	2.1	0.6	40°	2.6	-	-	無	有	頁岩
7	S-13-12	石斧	(2.7)	4.4	1.3	-	21.5	-	-	有	-	砂岩
8	S-13-15	石斧	(3.6)	5.9	2.0	-	39.9	-	-	有	-	砂岩

り込んでいる谷津に面した縁辺部に形成されている。石器群はVIIc層からVIII層にかけて分布しており、最大レベル差0.35mを計る。平面分布は径13mの円形範囲内であるが、周辺部に集中しており、ドーナツ状の広がりを呈している。全体的にはかなり散漫な分布状況である。

**出土遺物** 総計22点で、石器組成は石錐1点、削器1点、ビエス・エスキュー3点、ビエス・エスキュー・スポール1点、石斧2点、剥片5点、碎片9点である。1は石錐で、一部欠損するが2側辺に微細な調整痕が認められる。2は削器で、基部を欠損する。3~5はビエス・エスキューで、上下両端に刃つぶれが認められる。7、8は石斧基部である。刃部を欠損するため詳細は不明だが、一部で研磨痕が認められるため、いずれも局部磨製石斧であろう。

**母岩別資料・接合資料** 石材は5種、母岩は計11種に識別し得た。数量に比べ、石材、母岩

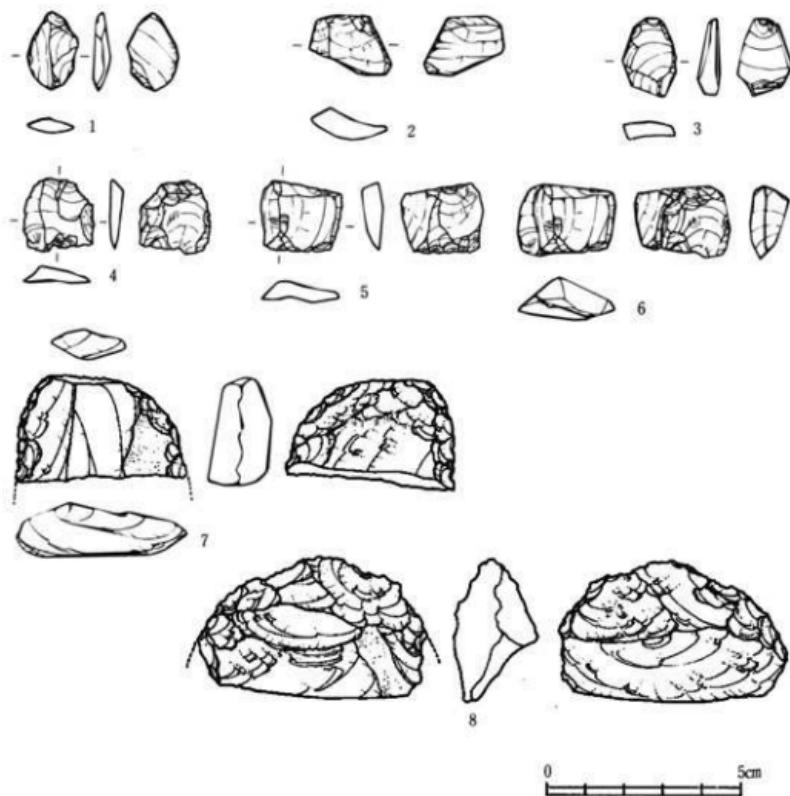


図73 第21ブロック出土遺物実測図

が多岐にわたっており、黒曜石の碎片単独出土をはじめとし、特に主体となるべき石材はない。接合資料は、ビエス・エスキュどうし1例、剥片どうし1例である。

まとめ 母岩が多岐にわたっている状況が当ブロックの特徴としてあげられる。利器についても欠損品が多く、廃棄の様相を呈していると言えるが、そうした中にあって、ビエス・エスキュ3点、内2点の接合例があることは注目できよう。また、石斧については欠損品のため不明な点も少なくないが、特に7については橢円形の形状を呈していると考えられ、権現後遺跡第6文化層第11ブロック出土<sup>注1</sup>例に類似する。

#### 註

1 千葉県文化財センター「八千代市権現後遺跡」 昭和59年

表103 第21ブロック母岩別資料石器組成表

母岩	ナイフ形 石 器	尖頭器	石錐	削器	削器	ビエス・ エスキュー	2次加工 ある剝片	使用 ある剝片	石斧	削片	剥片	碎片	石核	敲石	礫片	計
安山岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	4
珪質頁岩 1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪質頁岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
頁岩 1	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	2	—	—	—	—	4
頁岩 2	—	—	1	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	3
黒曜石 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
砂岩 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	2
砂岩 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
砂岩 3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	—	3
砂岩 4	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
砂岩 5	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
計	—	—	1	—	1	3	—	—	2	1	5	9	—	—	—	22

表104 第21ブロック接合資料一覧表

標題番号	母岩別資料	内 訳	内 容	数 量
6	頁 岩 1	ビエス・エスキュー2	(S-21-2)+(S-21-3)	2
7	頁 岩 1	剝片2	(S-21-9)+(S-21-10)	2

### 第3章 まとめ

#### 第1節 石器群の変遷

##### 1. I期(図74)

第4文化層に相当し、VIIc～VIII層段階に生活面を有する石器群である。1ブロック検出したのみであり、数量的にも稀少である。

石器組成は剝片、碎片の他、石錐、削器、ビエス・エスキュー、石斧であり、ナイフ形石器は出土していない。欠損品が大半を占めているため、技術的復元は困難と言わざるを得ない。しかしながら、2点の石斧の出土は注目でき、権現後遺跡第6文化層第11ブロックの出土例に類似する。当期設定の指標となり得た資料である。<sup>註1</sup>

石材は安山岩、珪質頁岩、頁岩、黒曜石、砂岩の5種で、頁岩、砂岩が最も多く出土する。しかしながら、数量的に少ないとから、この状況をもって直ちに当期の傾向とは言い難い。

## 2. II期 (図74)

第3文化層に相当し、VIIa層段階に生活面を有する石器群である。9ブロック、総計512点の石器群を検出した。

石器組成は石核、剝片、碎片の他、ナイフ形石器、削器、ピエス・エスキュー、2次加工のある剝片、使用痕のある剝片、敲石であり、種類、数量ともやや貧弱な状況である。ナイフ形石器はいずれも縦長剝片を素材としたものである。1側辺及び2側辺に刃つぶし加工が施され、大半の基部に截断面が認められる。基部一側辺がわずかに抉られた形状を呈するものである。ピエス・エスキューは比較的大形で、他器種に比べると多い部類である。石核は、縦長剝片を生産したもの及び横長剝片を生産したものいすれも認められる。

石材は安山岩、珪質頁岩、頁岩、チャート、メノウ、玄武岩、黒曜石、粘板岩、凝灰岩、砂岩、シルト岩の11種で多岐にわたっている。III期、IV期ではいずれも黒曜石を主体とした状況が認められるのに対し、当期は安山岩、頁岩を主体としており、黒曜石はほとんど見られない。I期においても頁岩の占める割合が大きいことから、当期を境として黒曜石の搬入はほとんどなかったことが看取できよう。この状況は先に報告した権現後<sup>出2</sup>遺跡、北海道<sup>出3</sup>遺跡についても同一であり、原産地の推定を含めた当地域の時期別搬入形態を知る上で良好な資料を提示したものと言えよう。

## 3. III期 (図74)

第2文化層に相当し、VI層段階に生活面を有する石器群である。4ブロック、総計315点の石器群を検出した。

石器組成は石核、剝片、碎片の他、ナイフ形石器、削器、搔器、ピエス・エスキュー、2次加工のある剝片、使用痕のある剝片、敲石であり、数量的にはナイフ形石器、ピエス・エスキューが他を凌駕している。ナイフ形石器はいずれも縦長剝片を素材としたものである。2側辺加工が施されており、精緻な刃つぶし加工が認められるものと刃部を調整加工したものがある。前者はS-27-1に代表されるもので、後者はS-18-1に代表されるものである。基部側辺が抉られたような形状を呈するものも認められるが、そうでないものが大半を占めており、形態的にはバラエティに富んだ状況を呈していると言えよう。ピエス・エスキューはII期に比べるとやや小形化しており、大形のものは見られない。石核は縦長剝片を生産したものが認められる。

石材は安山岩、珪質頁岩、頁岩、チャート、黒曜石、石英斑岩、砂岩、シルト岩の8種である。主体を成しているのは黒曜石で、夾雜物を多量に含むものであるが、ブロック間の同一母岩の識別については、直接接合関係にあるものではなく、識別し難いところである。

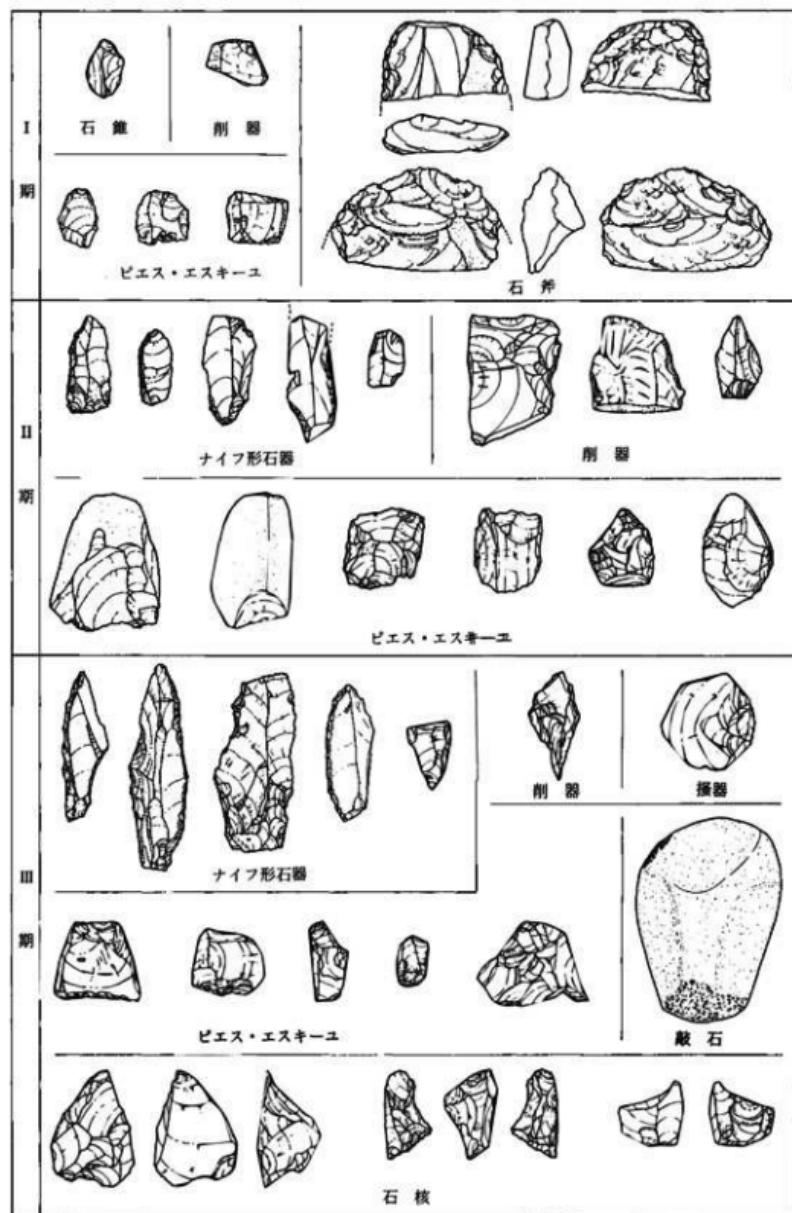


図74 石器群の変遷(1)

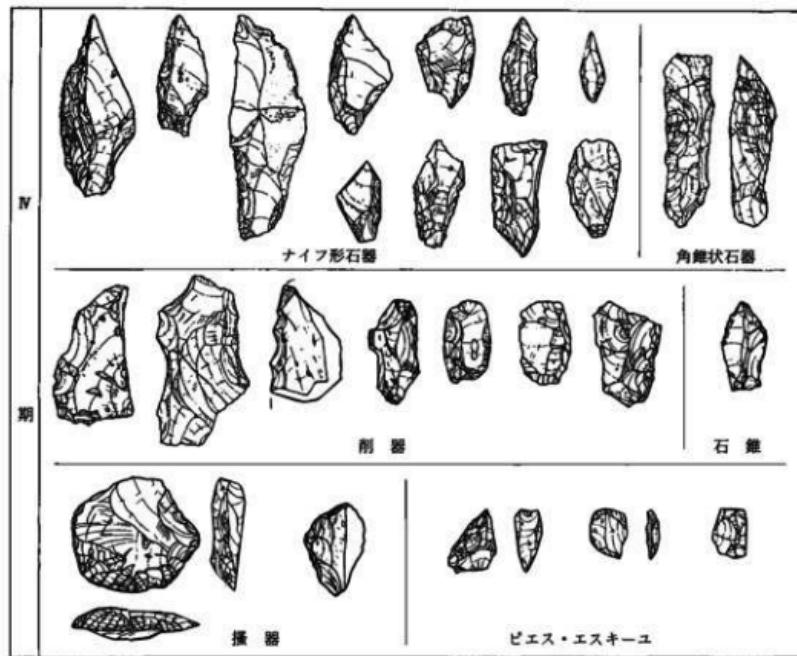


図75 石器群の変遷(2)

#### 4. IV期 (図75)

第1文化層に相当し、III～V層段階に生活面を有する石器群である。15ブロック、総計807点の石器群を検出した。

石器組成は石核、剝片、碎片の他、ナイフ形石器、角錐状石器、削器、石錐、搔器、ビエス・エスキュー、敲石があり、I～IV期中最も多岐にわたっている。ナイフ形石器、削器が他器種を凌駕する状況であり、特に削器については他期に比べて数量的にはるかに優位である。それに対し、ビエス・エスキューは少なくなり、いずれも小形である。ナイフ形石器はII、III期で見られた縦長剝片を素材とするものに加え、横長剝片を素材とするものも見られ、切り出し形の形状を呈するものが存在する。また、精緻な刃つぶし加工を施すものも認められる。石核は多数出土しているが、大半が横長剝片を生産したもので、縦長剝片を生産した例は稀少である。I期においては石核が出土していないため対比できないが、II期及びIII期が縦長剝片生産を主体としている状況と対照的である。削器等、利器にも横長剝片を素材としたものがしばしば認められるが、当期の特徴として捉えられよう。

石材は安山岩、珪質頁岩、頁岩、チャート、黒曜石、凝灰岩、砂岩の7種で、黒曜石が圧倒的多数を占めている。黒曜石は夾雜物が比較的少ない良質なものも見られるが、III期と同様に夾雜物を多量に含むものが多く、母岩の識別も困難である。したがって、ブロック間における同一母岩の認定は難しいところである。

なお、IV期においてはIII～V層と時間幅を広く設けてあるが、これはIV層ないしはV層の一部までソフトローム化した箇所があること、また石器群がIII～V層にかけてレベル差をもって成立している例が多いことなどに拠依するところが大きい。したがって、今後さらに細分される可能性が高いことを付記しておきたい。

#### 註

- 1 千葉県文化財センター『八千代市権現後遺跡』 昭和59年
- 2 註1と同じ
- 3 千葉県文化財センター『八千代市北海道遺跡』 昭和60年

### 第2節 磚群について

石器群の変遷に関連して設定した各期にしたがって、まとめてみたい。なお、I期については磚あるいは礫片を出土していない。

#### 1. II期

礫片を出土するブロックは、第3、4、13ブロックの3ブロックで、総計26点出土する。石材は頁岩、砂岩、安山岩などで、不明を含めて4種である。砂岩が主体的であり、頁岩は数量的にはこれに次ぐものだが、1母岩に接合し得るものである。

群として構成されるのは第3ブロックのみであるが、5母岩が出土するのみであり、性格の解明には至らない。

いずれも破砕礫であり、完形に復元し得るものは皆無である。また、頁岩については赤化等受熱の痕跡は認められなかったが、他はいずれも赤化しており、受熱した状況が看取できる。しかしながら、出土地点における炭化物の集中、ローム面の受熱の状況等は確認していない。また、一部にタール状の付着物が認められる。

なお、ブロック間相互の関連性は不明である。

#### 2. III期

礫片を出土するブロックは第18、24、25ブロックの3ブロックで、総計20点出土する。石材

は安山岩、頁岩、砂岩などで、不明を含めて4種である。

いずれも破碎礫であり、接合し得る資料は皆無である。また、小破片が多く、母岩も多岐にわたることから、特に群として捉えられるブロックはなく、廃棄の可能性が非常に大きいものである。

小破片のためか、受熱の認められる資料は少なく、第25ブロック出土の頁岩2、1点のみである。その他砂岩は比較的大きな破碎礫であるが、赤化等受熱した状況は認められない。

### 3. IV期

礫片を出土するブロックは、第6～8、10、12、15、16、22、28の9ブロックで、総計80点出土する。数量的には他期を圧倒的に凌駕しているが、単独出土を含め散発的な出土が大半で、群を構成するのは第22、28ブロックの2ブロックのみである。石材は、石英斑岩、砂岩、安山岩の3種で、前2種で大半を占めている。

1点だけ完形の礫があるが、その他すべてが破碎礫であり、それらはいずれも完形に復元し得ない。破碎礫については、赤化し、受熱した状況が認められるが、II期において一部の礫片に見られたようなタール状の付着物は確認できなかった。

散発的な出土状況を示しているブロックも含めて、砂岩、石英斑岩が大半を占めており、母岩の識別によるブロック間相互の関連性は見い出せなかったものの、第22、28ブロックを中心として相互の関連性の存在を想定することは充分に可能であろう。しかしながら、ここでもやはり礫群の出土地点周辺において炭化物の集中、あるいはローム受熱の状況が確認されなかつたのは注意しておく必要がある。

なお、砂岩については一部利器に使用されてはいるが、全般に石器群とは石材を異としており、石器製作とは区別していた状況が看取できる。これは石材の搬入形態を考察する上において重要な意味を示しており、石器製作と同時に礫の使用が当時の生活において重要な位置を占めていたことを示唆するものである。

## 第3節 ブロックの性格

### 1. I期

当期に該当するのは、第21ブロックの1ブロックのみである。数量的に稀少である上、母岩も多岐にわたり、しかも欠損品が大半を占めるという状況により、極めて廃棄の色彩が濃いブロックと言えよう。

## 2. II期

当期に該当するのは、第3～5、13、17、29、32、39、40ブロックの計9ブロックである。立地を見ると、他期に比べて最もバラエティに富んだ状況である。

- ①台地平坦部。
- ②台地西侧縁辺部。
- ③台地南側縁辺部。

以上の3地域であり、各地域内において少なからず関連性が見い出される。それに対して、各地域間の母岩別資料における関連性は見い出されない。

①に該当するのは、第3～5ブロックである。ブロック間の接合資料はないが、第3ブロックと第4ブロックの頁岩及び第4ブロックと第5ブロックのチャートに同一母岩として識別し得る資料が含まれる。また、同一母岩には識別し得ないが、いずれにも安山岩が少なからず含まれている。石器組成は貧弱で、剝片及び碎片を中心とした出土状況を示している。剝片生産及び石器調整を反映したブロックとして捉えられるが、利器については他へ移動したものと考えられる。

②に該当するのは、第13、17ブロックである。第13ブロックは点数が少ない上、母岩が多岐にわたり検討に堪えない。また、第17ブロックと同一母岩に識別し得る資料もない。極めて廃棄の色彩が濃いブロックである。第17ブロックは安山岩を中心とした、剝片生産及び石器調整を反映したブロックとして捉えられ、自己完結的なブロックである。

③に該当するのは、第29、32、39、40ブロックである。第39、40ブロックは石材において共通性が見られるが、同一母岩に識別し得るのは安山岩のみである。第32ブロックは前2ブロックとはまったく様相を異なりメノウ、珪質頁岩を主体とし、特にメノウは全期を通じて唯一纏った出土である。珪質頁岩は褐色の斑点が見られるもので、他3ブロックでは見られない。また、第29ブロックにおいて、第32ブロックのメノウと同一母岩に識別し得る資料が出土している。第29ブロックは第32ブロックとの関連性の上で、廃棄の様相を有するブロックと言えよう。第32、39ブロックは剝片生産及び石器調整を反映したブロックとして捉えられ、特に第32ブロックは良好な資料を提示したものと言える。第40ブロックについては検討に堪えうる状況ではない。

なお、第5ブロック出土のメノウは第32ブロック出土のメノウと同一母岩ではない。

## 3. III期

当期に該当るのは、第18、24、25、27ブロックの計4ブロックである。

立地的にみると、権現後遺跡との境界に展開する小谷津に面して形成させる第18、27ブロックと、台地南側縁辺部に形成される第24、25ブロックに大別される。しかしながら、各立地別

の共通性は見い出されない。

母岩の検討からは、第25ブロックと第27ブロック、第24ブロックと第27ブロックに共通性が認められる。前者は安山岩においてであり、接合関係は無いものの、同一母岩として捉えられるものである。ただし、第27ブロックにおいて圧倒的主体を成す黒曜石が第25ブロックにおいて1点も出土していないことなど、不明な点も多く、両者の関連性を認める積極的な資料には成り難いところである。後者は黒曜石においてであり、相方とも夾雜物を多く含んでいる。ただし、これについてもまた接合関係なく、しかも同一母岩の識別が困難な状況であるため、直接の関連性を指摘することはできない。

第18ブロックは数量的には極めて稀少である。1点1母岩に近い状況であり、しかもナイフ形石器を中心とする利器が主体的で剥片、碎片などは少ないとから、石器生産の場とは異なり、生活に密着した場としての性格を有するブロックとして捉えられよう。これに対して、第25ブロックは数量的にはやや多いものの、1点1母岩に近い状況である上、利器も少なく、廃棄の色彩が濃いブロックと言えよう。

第24、27ブロックは、先に述べたように夾雜物を多量に含む黒曜石を主体としており、剥片、碎片を多く出土することから、剥片生産及び石器調整を反映したブロックとして捉えられよう。ただし、石器組成は貧弱で、利器が少なく、他へ搬出されたものと考えられる。ここで第18ブロックのような性格を有するブロックの存在が確立してこよう。

#### 4. IV期

当期に該当するのは、第6～8、10、12、14～16、22、23、26、28、30、31、33ブロックの計15ブロックである。第22、28ブロックは疊群で、他はすべて石器群である。疊群については前節で述べているので、ここでは石器群を中心とするブロックの性格について触れてみたい。

石材は絶対的にみて黒曜石を主体とするが、夾雜物を多く含むもので、ブロック間の同一母岩の識別は困難と言わざるを得ない。したがって、頁岩あるいは珪質頁岩等によって同一母岩の識別を試みたが、各ブロック間において同一母岩に識別し得るものは認められなかった。

立地上、台地西側縁辺部に形成される第6～8、10、12、14～16ブロックと、台地南側縁辺部に形成される第23、26、30、31、33ブロックとに大別できる。総じて、小規模なブロックであるということができるが、前者のグループは特に散漫で、ブロックの性格解明についても不明な点が多い。後者のグループも小規模に形成されるブロックではあるが、ブロックの性格解明の手がかりを有するブロックが多い。これは、縄文期以降の遺構の分布状況に左右されたためと考えられる。したがって、前者のグループの場合、縄文期以降の遺構によって一部を破壊された可能性が高い。

台地西側縁辺部に形成されるグループの内、唯一纏った出土状況を示すのは第10ブロック

である。第10ブロックは、当遺跡の中でも石器組成は豊富な部類であり、利器、石核、剥片、碎片を具備したブロックである。夾雜物を多く含む黒曜石を主体としており、母岩の識別は極めて困難なところであるが、横長剥片を中心とする剥片生産及びナイフ形石器、削器等を中心とする石器調整の性格を有するブロックとして捉えられる。

台地南側縁辺部に形成されるグループは、総じて剥片生産及び石器調整の性格を有するブロックと言える。特に第23ブロックについては利器、石核、剥片、碎片を具備しており、数量的にも充分である。他ブロックについては大半が石核を欠き、利器等の出土も少ないことから、他へ搬出されたことが考えられる。

## 第II部 繩文時代

## 第1章 繩文時代の概観

萱田地区における発掘調査の成果について既に上梓している権現後遺跡ならびに北海道遺跡では繩文時代の遺構はまったく検出していない。権現後遺跡においては繩文時代早期から後期にわたる遺物が出土しており、生活の痕跡は認められるが、遺物包含層としても小規模なものであり、遺跡の性格づけについては確定できるものではなかった。

このような状況の中で、ツサル山遺跡の発掘調査の結果から、繩文時代の遺構を検出したことは、萱田地区内における繩文時代の遺跡について補完できたと言っても過言ではないであろう。

検出した繩文時代の遺構は前期、晩期の遺構は検出できなかったものの、早期では炉穴跡、陥し穴状土壙、中期では竪穴住居跡、竪穴状遺構、土壙、後期では竪穴住居跡がある。早期の遺構は台地西側縁辺部、中期の遺構は台地西側縁辺から平坦部にかけて、後期の遺構は台地南側縁辺部に立地しており、時期によって台地の利用に違いを生じた分布状況を呈している。

一方、台地北側部分を除く地域では、暗褐色土層中の遺物包含層が分布している。遺物の分布はおよそ9ラインを境として台地先端部にわたるが、縁辺部において多く出土しており、この部分がまとまりのある範囲と言える。包含層より出土する遺物は早期から晩期まで認められ、長期間にわたり台地が生活に密着した位置を占めていたことが窺われる。

包含層から出土した遺物は中期、後期に比定できるものが多いが、それは遺構の分布とおよそ整合する状況が認められ、中期、後期の遺物が多く出土するのも遺構の所在と無関係でないことが窺われる。

一方、早期の遺構は調査対象外の地域に広がりをもつ可能性や擾乱部分があるため検出した遺構がすべてであると断言できないが、相当数を有する群を構成していることが推測できる。

土器以外の遺物は石器、土製品の出土も多く認められるところである。土製品は全て土器片錐である。石器は石鏃、石斧がある。

## 第2章 遺構と出土遺物

### 第1節 はじめに

早期に比定できる遺構は炉穴跡19基、陥し穴状土壙1基、中期は竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構2基、土壙1基、後期は竪穴住居跡3軒で、前期、晩期に比定できる遺構は検出できなかった。遺構の占地状況を見ると、各期それぞれ異った状況を呈している。早期では調査区域北西部

分の台地西側縁辺部を占地しており、さらに北方に遺構が展開する可能性が充分に考えられる。中期では台地西側縁辺部から台地中央部の範囲に占地しており、広範囲に分布する状況を呈しているが、土器を埋設したと考えられるような小規模な土壤、あるいは住居としては断定し難い竪穴状の遺構等、やや趣を異とした遺構をもって構成されている。後期については台地南側縁辺部に占地しており、集落としては他に見るべき遺構が存在しないことから、3軒の住居跡をもって完結するものと考えられる。

## 第2節 早期の遺構と遺物

早期に比定できる遺構は炉穴跡19基、陥し穴状土壤1基で、竪穴住居跡等の遺構は検出できなかった(図76)。遺跡西側は、須久茂谷津に接続する谷津の幅員が部分的に広くなっているため、丁度台地が区切られるようになっており、炉穴群はその部分から谷津の最奥部近くの台地縁辺部に占地している。調査対象外の地域に広がる可能性をもっており、検出した遺構がすべてとは断言できない。各遺構は群としてのまとまりを呈しており、中には重複を生じている。陥し穴状土壤は台地南側縁辺部に占地しており、炉穴群とは隔絶しているものの、占地条件として台地縁辺部を利用する点は共通するものと言いうことができよう。

時期は出土遺物によって判断するものであるが、炉穴跡では比較的多く出土する遺構と皆無の遺構があり、一様な出土状況は呈していない。しかしながら、検出状況や覆土の状況等から総合的に判断して、19基の遺構は近接した時期の所産であることは間違いないであろう。また、陥し穴状遺構からの出土遺物も皆無であるため、明確な時期を決定することはできないが、ここでは早期の遺構として捉えておきたい。

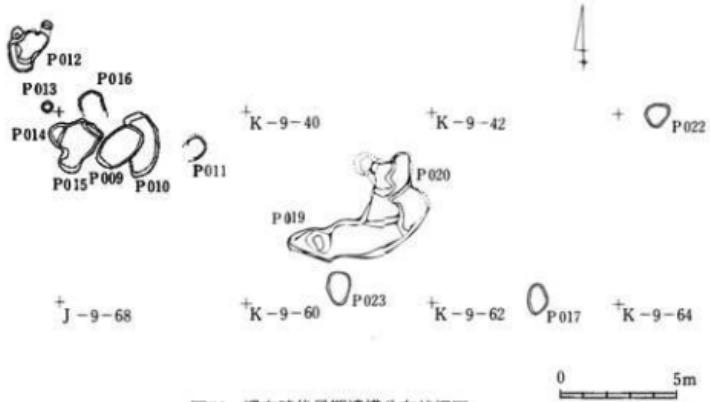


図76 猿文時代早期遺構分布状況図

1. P 009号遺構 (図77、78、図版18、22)

P010遺構と重複し、また、P014～P016号遺構に近接して位置する。特にP015号遺構とは主軸をほぼ同一とする。

**遺構** 長径2.30m、短径1.30mで楕円形の平面形を呈する炉穴跡である。主軸を北東から南西方向にもち、火床部は南西側に認められる。壁はほぼ垂直に1.40m掘り込んで底面に達しているが、火床部では1.55mを計る。底面は平坦で、特に踏み固められた形跡は認められない。一段低くなる火床部には炭化物を含む焼土が充満しており、厚さ0.18mを計る。

**遺物出土状況** 遺物は火床部を中心として出土し、焼土上及び覆土下層より出土する。

**出土遺物** 遺物はいずれも深鉢形土器である。1は胴部中位以下を欠く。現存部で胴部に2つの細隆起線文が、また口唇部も若干隆起する状況が認められ、その頂部に刻目が施される。

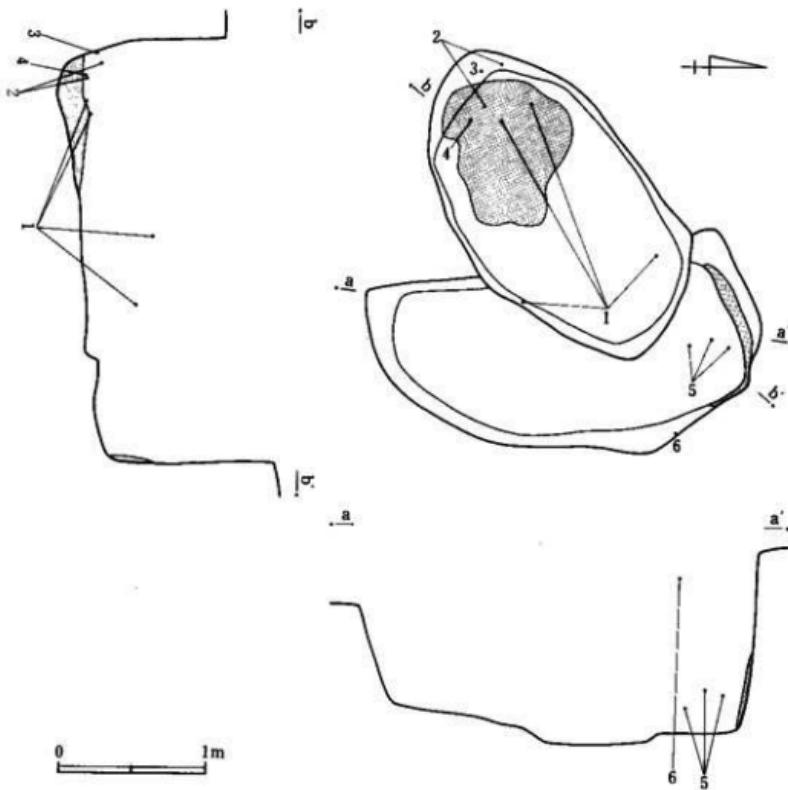


図77 P 009・010号遺構実測図

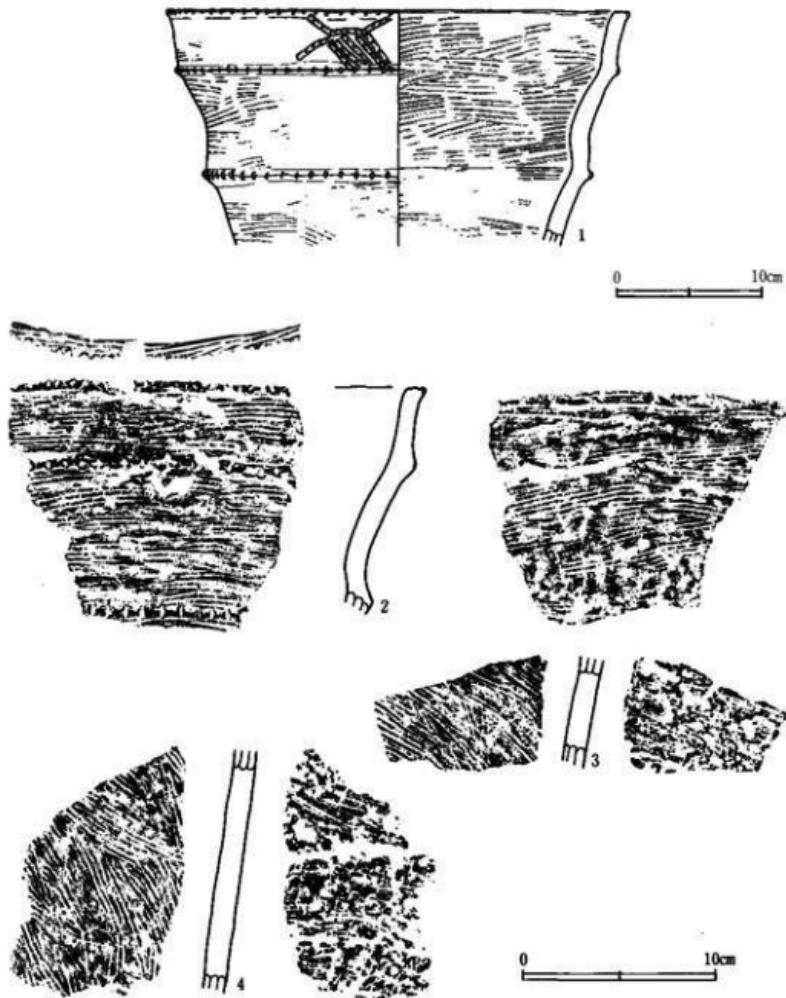


図78 P009号遺構出土遺物実測図

口唇部直下の区画帯には一部（半截）竹管による角押文が認められ、その他外面及び口唇部上端には貝殻条痕文が施される。2は口縁部破片だが、基本的には1と同一である。ただし、現存部分において1で見られる角押文は認められない。3、4は胴部破片で、内外面に貝殻条痕文が施される。

## P009出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	深鉢	—	32.4	—	脚下半部欠損	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
2	深鉢	—	—	—	口縁部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
3	深鉢	—	—	—	脚部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	深鉢	—	—	—	脚部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	茶褐色	

## 2. P010号遺構 (図77、79、図版18、22)

P009号遺構と重複し、またP011号、P014～P016号遺構に近接して位置する。P016号遺構と主軸をほぼ同一とする。

**遺構** 長径2.55m、短径1.25mでやや不整な梢円形の平面形を呈する炉穴跡である。主軸を南北方向にもち、火床部は北側に認められる。壁はほぼ垂直に1.13m掘り込んで底面に達しているが、火床部では1.25mを計る。底面は平坦で、踏み固められた形跡は認められない。火床部では焼土の堆積はほとんど認められないが、壁が一部焼土化を呈しており、熱を受けた形跡が認められる。

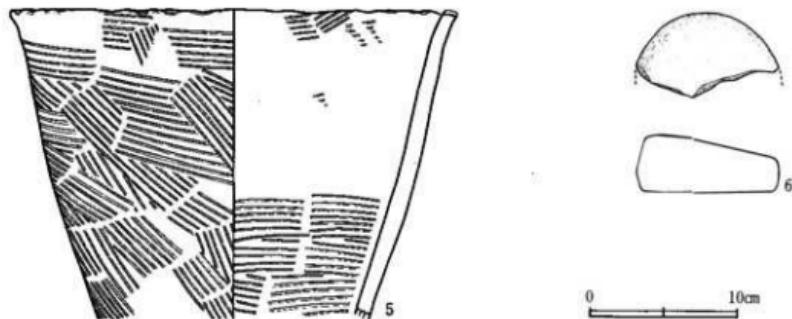


図79 P010号遺構出土遺物実測図

**遺物出土状況** 遺物は火床部において出土するが、底面より若干浮いている。

**出土遺物** 遺物は深鉢形土器と石製品がある。5は深鉢形土器で、内外面に貝殻条痕文が施される。口縁部は不整な波状を呈しており、口唇部には全体に竹管状のものによる不規則な押

## P010出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
5	深鉢	—	31.0	—	脚下半部欠損	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	茶褐色	

跡が認められる。6は花崗岩製のものであるが、使用痕は認められない。

### 3. P011号遺構（図80、図版19）

P010号遺構に近接して位置するが、主軸はP009号、P015号遺構とほぼ同一である。

遺構 本来橢円形を呈していたと考えられるが、擾乱を受けているため遺存状況が悪い。短径0.84mを計り、主軸を北東から南西方向にもつ。壁は若干オーバーハングして底面に達しており、深さ1.10mを計る。火床部は北東側に認められ、厚さ0.05mの焼土が充満する。出土遺物は皆無である。

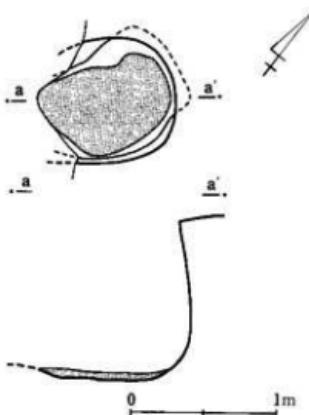


図80 P011号遺構実測図

### 4. P012A号遺構（図81、図版19）

炉穴群の内、最も北側に位置するもので、調査対象地区界際に位置する。調査時にはP012号遺構として一括して取り扱ったが、2基が重複しているため、区別して報告する。南北方向に検出したものをAとし、それよりやや東へ主軸を振ったものをBとする。AはBによって一部切断されている。

遺構 長径1.95m、短径1.05mを計り、橢円形の平面形を呈する炉穴跡である。壁は若干傾斜を呈して0.50m掘り込んで底面に達する。底面は平坦で、ハードロームまで達しているため堅緻である。火床部は北側に認められ、張り出し状を呈しているが、一段高くなっている。深さ

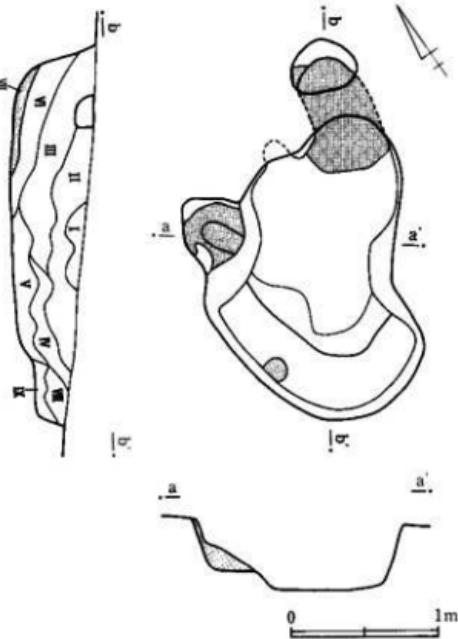


図81 P012号遺構実測図

0.38mを計る。厚さ0.17mの焼土が堆積しており、壁及び底面は熱を受けた形跡が認められる。

**遺物出土状況** VIII層ロームブロック・焼土ブロック混入茶褐色土層、IX層黄褐色土層が堆積する。出土遺物は皆無である。

### 5. P012B号遺構 (図81、図版19)

P012号遺構の内、A号遺構を切断して構築する。

**遺構** 煙道施設を有するタイプで、煙道部を除くと、推定長径1.60m、短径1.03mを計る不整な梢円形の平面形を呈する炉穴跡である。煙道施設は現存状態で0.19mの陸橋を有するトンネル状のものである。煙出口は径0.40mを計る。壁は若干傾斜を呈するが、部分的にオーバーハングしている箇所も認められ、0.60m掘り込んで底面に達している。底面は平坦だが、踏み固められた形跡は認められない。火床部は厚さ0.07mの焼土が堆積しており、煙出口直下まで焼土が認められる。また、壁も熱を受けた形跡が認められる。

**遺物出土状況** I層ローム粒混入茶褐色土層、II層ロームブロック混入茶褐色土層、III層暗茶褐色土層、IV層暗褐色土層、V層ロームブロック層、VI層ロームブロック混入暗茶褐色土層、VII層焼土層が堆積する。出土遺物は皆無である。

### 6. P013号遺構 (図82)

P014～016号遺構に近接して位置する。

**遺構** 径0.45mを計り、円形の平面形を呈する炉穴跡である。上部をかなり攪乱されているため、壁高は0.08mを計るのみであるが、本来の掘り込みはかなり上方から掘り込まれていたものと考えられる。検出できたのは火床部のみで、厚さ0.05mの焼土が堆積する。壁は熱を受けた形跡が認められる。

**遺物出土状況** I層焼土層、II層ロームブロック層が堆積する。出土遺物は皆無である。

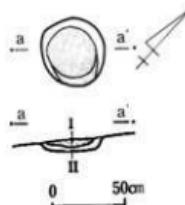


図82 P013号遺構実測図

### 7. P014号遺構 (図83、84、図版19)

P015号遺構と直交する形で重複している。また、P009、016号遺構に近接して位置する。

**遺構** 主軸を東西方向にもち、長径2.00m、短径1.00m以上の梢円形の平面形を呈すると考えられる炉穴跡である。壁は若干傾斜を呈して0.50m掘り込んで底面に達している。火床部は西側に認められ、深さ0.40mを計る。厚さ0.20mの焼土が堆積しており、壁には熱を受けた形跡が認められる。火床部以外の底面に関しては、P015号遺構と重複するため詳細は不明である。

**遺物出土状況** 遺物は数点の出土でいずれも覆土上層からである。

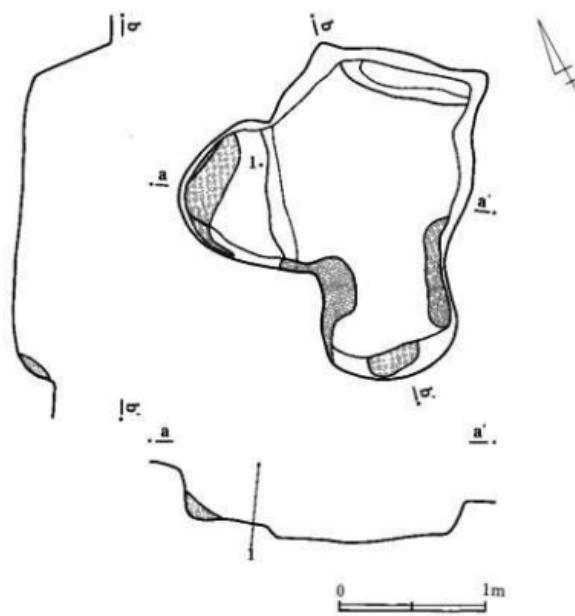


図83 P 014・015号遺構実測図

**出土遺物** 図示し得た遺物は1点で、深鉢形土器胸部破片である。内外面に貝殻条痕文が施される。

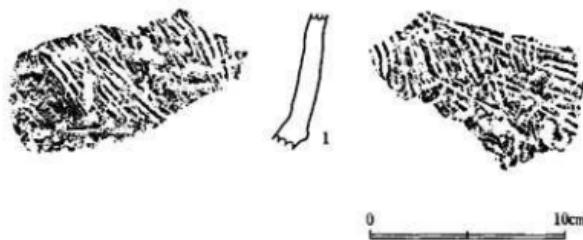


図84 P 014号遺構出土遺物実測図

014出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	深鉢	-	-	-	胸部破片	貝殻条痕文	砂粒	軟	褐茶褐色	

### 8. P 015号遺構 (図83、図版19)

P 014号遺構と直交する形で重複している。P 009、013、016号遺構に近接して位置する。P 009号遺構と主軸を同一にする。

**遺構** 長径2.24m、短径1.40mを計り、不整な楕円形の平面形を呈する炉穴跡である。主軸を南北方向にもつ。壁は若干傾斜を呈して0.57m掘り込んで底面に達するが、南側に認められる火床部に向って緩やかな傾斜を呈しており、火床部では深さ0.65mを計る。底面は踏み固められた形跡は認められない。火床部は焼土の堆積は少ないが、壁が焼土化しており、熱を受けた形跡が認められる。また北壁直下には、幅0.25m、深さ0.03mを計る溝を検出した。なお、出土遺物は皆無である。

### 9. P 016号遺構 (図85)

P 009、010号遺構、P 013～015号遺構に近接して位置しており、特にP 010号遺構とは主軸を同一にする。遺構の南半分に擾乱を受けているため、全容は明らかでない。

**遺構** 南側に擾乱を受けるため正確な規模は不明であるが、短径0.93mを計る楕円形の平面形を呈すると考えられる炉穴跡である。主軸を南北方向にもつ。壁は垂直に0.58m掘り込んで底面に達する。火床部は北側に認められ、底面よりさらに0.10m掘り窪められており、その中に焼土が充満している。しかしながら、壁はほとんど熱を受けた形跡は認められない。

**遺物出土状況** I層茶褐色土層、II層暗茶褐色土層、III層焼土粒混入暗茶褐色土層、IV層焼土層が堆積する。出土遺物は皆無である。

### 10. P 017号遺構 (図86、87、図版20)

炉穴群の内、最も南側に位置する。最も近接して位置するのはP 020号遺構だが、相対的に他とはやや距離をおいて存在する。

**遺構** 長径1.28m、短径0.85mで楕円形の平面形を呈する炉穴跡である。壁は垂直に0.52m掘り込んで底面に達している。底面は若干の凹凸が認められるものの、平坦であるが、踏み固められた状況は認められない。底面に焼土の堆積はなく、壁に熱を受けた形跡も認められない。しかしながら、最下層にロー

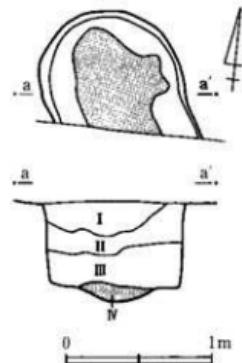


図85 P 016号遺構実測図

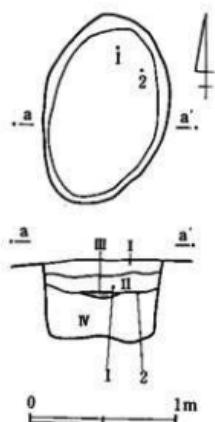


図86 P 017号遺構実測図

ムを主体とする層が約0.30m堆積しており、その上部よりやや纏った焼土が位置するため人為的に若干埋めもどしを行った後、炉穴として使用したものと考えられる。

**遺物出土状況** I層茶褐色土層、II層焼土粒混入黄褐色土層、III層焼土層、IV層黄褐色土層が堆積する。遺物は北壁付近より集中して出土しており、IV層直上を中心とする。

**出土遺物** 遺物は深鉢形土器がある。1、2のいずれも口縁部破片で、内外面に貝殻条痕文が施される。



図87 P017号遺構出土遺物実測図

P017出土土器一覧

番号	器種	法 直(cm)			遺存度	調 整	胎 土			備 考
		高	口径	底径			混 入 物	焼 成	色 調	
1	深 鉢	—	—	—	口縁部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
2	深 鉢	—	—	—	口縁部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや堅強	茶褐色	

### 11. P019号遺構（図88、89、図版20、22）

P020号遺構と重複しており、北より弓状に彎曲して西へ伸びる。最も西側に位置する遺構をP019号遺構として捉える。P023号遺構に近接する。

**遺構** 東側をP020号遺構と重複するため、範囲が明確でないが、最大幅1.37mを計り、イチジク形の平面形を呈すると考えられる炉穴跡である。主軸を東西方向にもつ。壁は若干傾斜を呈して底面に達するが、底面は平坦ではなく、中央部に向って緩やかな傾斜を呈しており、最深部で0.48mを計る。底面は踏み固められた形跡は認められない。火床部は深さ0.23mを計る播鉢状の掘り込みが認められ、焼土が充満する。

**遺物出土状況** I層黄褐色土層、II層茶褐色土層、III層焼土層が堆積する。遺物は比較的多く、いずれも火床部における出土である。

**出土遺物** 遺物は全て深鉢形土器で、1～5である。いずれも内外面に貝殻条痕文が施される。

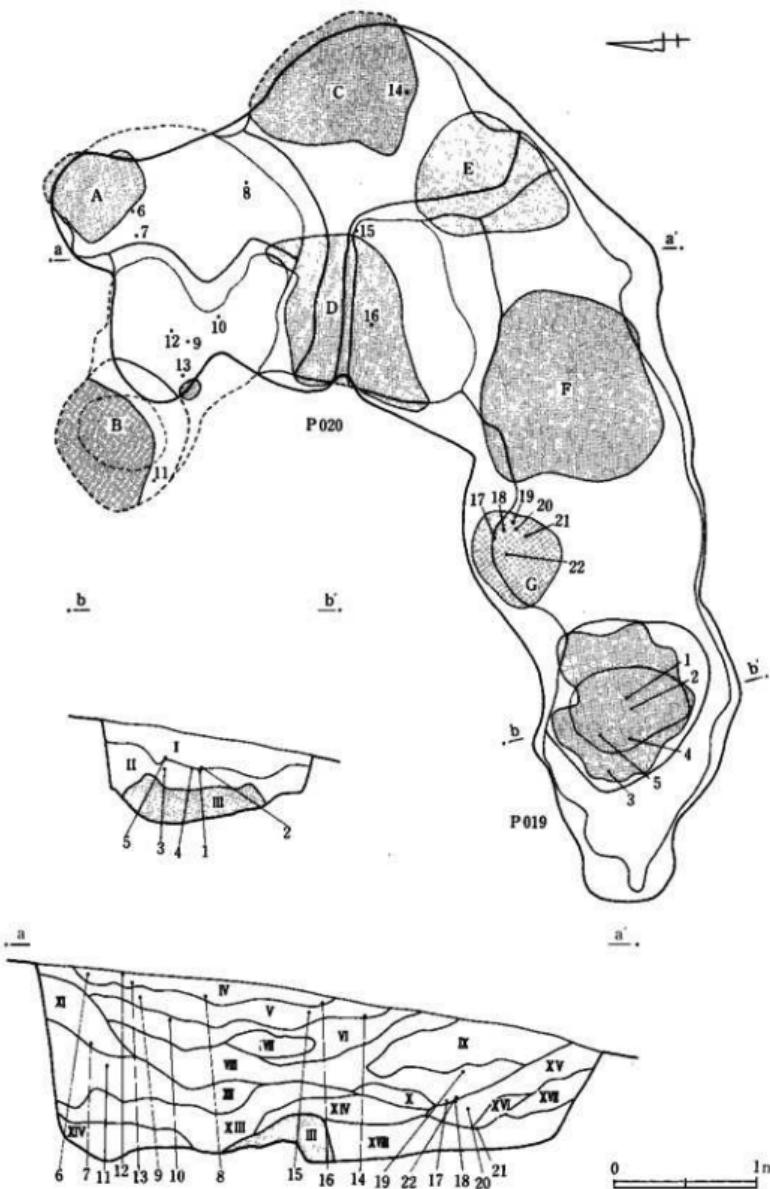


図88 P019・020号構造実測図

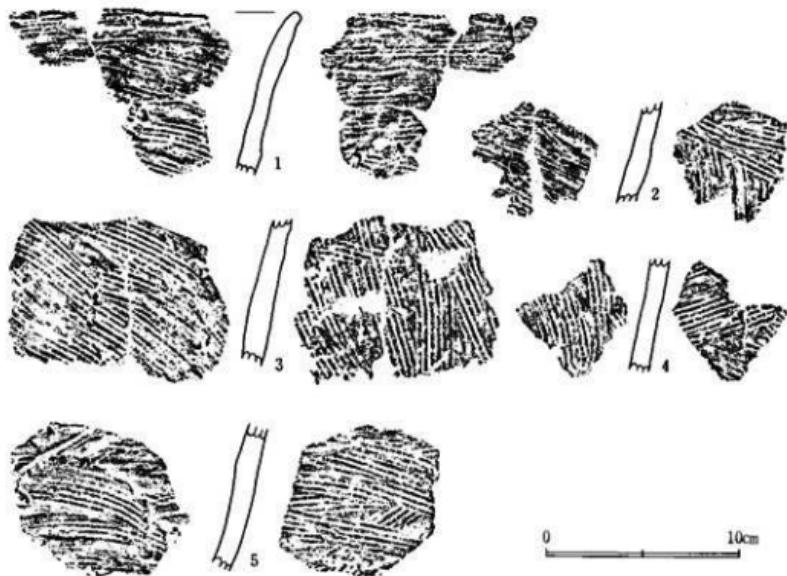


図89 P 019号遺構出土遺物実測図

P 019出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	深鉢	—	—	—	口縁部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや乾燥	黒褐色	
2	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや乾燥	茶褐色	
3	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	軟弱	茶褐色	
4	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	軟弱	茶褐色	
5	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや乾燥	黒褐色	

### 12. P 020 A号遺構 (図90、図版20、22)

P 019号遺構と重複しており、北より弓状に弯曲して西へ伸びる。最も西側に位置するP 019号遺構以外をP 020号遺構とするが、P 019号遺構を含めて8基が複雑に重複している。北に位置するものから順にA～Gとする。土層観察による重複関係が把握できたのはCのみである。AはBと重複する。

**遺構** 主軸を南北方向にもち、梢円形の平面形を呈すると考えられる炉穴跡である。壁は火床部を中心として若干オーバーハングする状況が認められる。底面は火床部に向ってしだいに

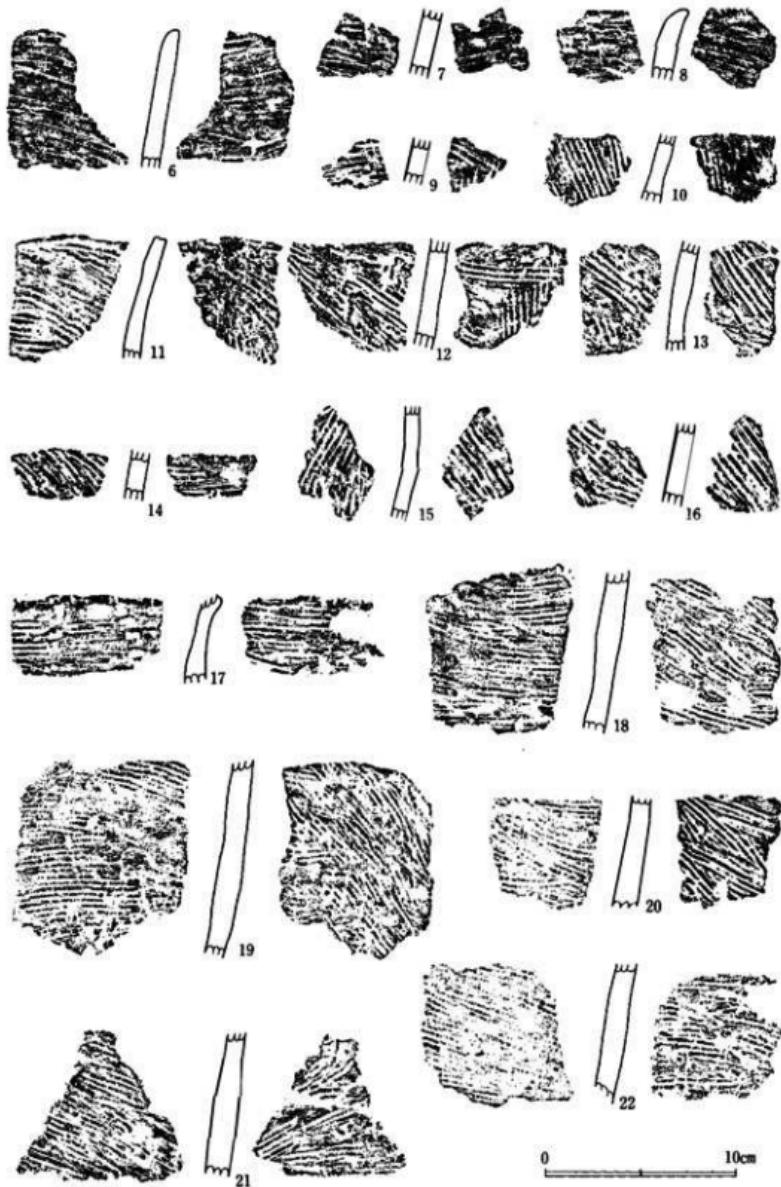


圖90 P 020號遺構出土遺物實測圖

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		高	口径	底径			混入物	焼成色	調	
6	深鉢	—	—	—	口縁部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
7	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
8	深鉢	—	—	—	口縁部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
9	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
10	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
11	深鉢	—	—	—	口縁部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや堅密	茶褐色	
12	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
13	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	茶褐色	
14	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや堅密	茶褐色	
15	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや堅密	茶褐色	
16	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
17	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや堅密	茶褐色	
18	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや堅密	茶褐色	
19	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや堅密	茶褐色	
20	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや堅密	茶褐色	
21	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	黒褐色	
22	深鉢	—	—	—	胴部破片	貝殻条痕文	砂粒	やや軟弱	黒褐色	

高くなる状況を呈しており、最深部で1.25m、最浅部で1.15mを計る。踏み固められた形跡は認められない。火床部は厚さ0.15mの焼土が堆積し、壁は熱を受けた形跡が認められる。

**遺物出土状況** III層焼土層、IV層焼土粒混入暗茶褐色土層、V層炭化粒混入黒褐色土層、VI層ロームブロック混入茶褐色土層、VII層焼土粒混入赤褐色土層、VIII層焼土ブロック混入明茶褐色土層、IX層明茶褐色土層、X層ロームブロック層、XI層ロームブロック混入黄褐色土層、XII層ロームブロック混入明茶褐色土層、XIII層ローム粒混入茶褐色土層、XIV層焼土ブロック混入暗茶褐色土層、XV層ロームブロック混入暗茶褐色土層、XVI層ローム粒混入暗茶褐色土層、XVII層暗茶褐色土層、XVIII層ロームブロック・焼土ブロック混入暗茶褐色土層、XIX層ローム粒混入黄褐色土層が堆積する。遺物は僅少で、火床部周辺を中心とした出土であり、覆土上層から中層にかけての出土である。

**出土遺物** 遺物は深鉢形土器で、6～8が相当する。いずれも内外面に貝殻条痕文が施される。

### 13. P020B号遺構(図90、図版20、22)

BはA、Dと重複する。

**遺構** 主軸を北西から南東方向に有し、横円形の平面形を呈する炉穴跡である。壁はオーバーハングする状況が認められ、特に火床部は天井部を有する構造となる。深さ1.20mを計る。

底面は平坦だが、踏み固められた形跡は認められない。火床部は深さ0.10mの壠鉢状の掘り込みを呈しており、焼土が充満する。また、天井部を有しているが、壁及び天井部は熱を受けた形跡が認められる。

**遺物出土状況** 遺物の出土は稀少である。火床部からの出土も見られるが、むしろそれ以外の箇所からの出土が大半であり、いずれも覆土上層から中層にかけての出土である。

**出土遺物** 遺物は深鉢形土器で、9～13が相当する。いずれも内外面に貝殻条痕文が施される。

#### 14. P020C号遺構 (図90、図版20、22)

D、Eと重複するが、いずれよりも新しく構築されたもので、上層断面の所見によれば少なくともDがⅣ層まで埋没した後に構築されている。

**遺構** 主軸を北東から南西方向に有し、橢円形の平面形を呈すると考えられる炉穴跡である。壁は垂直に掘り込まれて底面に達するが、火床部では若干オーバーハングする状況が認められる。底面はP020E号遺構にまで達していると考えられるが、P020E号遺構の火床部が遺存することから、比較的浅い掘り込みと思われる。したがって、火床部に向って深くなっていく状況を呈していると言えよう。火床部は厚さ0.30mの焼土が堆積し、壁は熱を受けた形跡が認められる。

**遺物出土状況** 遺物は稀少で、覆土上層からの出土である。

**出土遺物** 遺物は深鉢形土器が出土し、14が相当する。内外面に貝殻条痕文が施される。

#### 15. P020D号遺構 (図90、図版20、22)

A、B、C、Eと重複するため、全容については把握できない。

**遺構** 主軸を東西方向に有すると考えられる炉穴跡である。規模、形態は不明である。火床部は厚さ0.25mの焼土が堆積するが、壁は熱を受けた形跡は認められない。

**遺物出土状況** 遺物は稀少で、火床部を中心として出土するが、覆土上層からの出土である。

**出土遺物** 遺物は深鉢形土器胴部破片で、15、16が相当する。いずれも内外面に貝殻条痕文が施される。

#### 16. P020E号遺構 (図90、図版20、22)

C、D、Fと重複するため、全容については把握できない。

**遺構** 主軸を北東から南西方向に有し、F方向に伸びていたと考えられる炉穴跡である。規模、形態は不明である。火床部は厚さ約0.10mの焼土が堆積するが、底面及び壁は熱を受けた形跡は認められない。出土遺物は皆無である。

### 17. P020F号遺構 (図90、図版20、22)

E、Gと重複する。

**遺構** 主軸を東西方向に有する炉穴跡である。火床部は西側に位置しており、厚さ0.13mの焼土が堆積するが、底面及び壁は熱を受けた形跡は認められない。底面は踏み固められた形跡は認められない。出土遺物は皆無である。

### 18. P020G号遺構 (図90、図版20、22)

FとP019号遺構と重複する。

**遺構** 主軸を南北方向に有し、長径1.67mを計る炉穴跡である。楕円形の平面形を呈すると考えられる。火床部は北側に認められ、厚さ0.10mの焼土が堆積しており、壁は熱を受けた状況が認められる。底面は踏み固められた形跡は認められない。

**遺物出土状況** 遺物はいずれも火床部で出土しており、焼土に密着する状況で出土する。

**出土遺物** 遺物は深鉢形土器で、17~22が相当する。いずれも内外面に貝殻条痕文が施される。17は口唇部に微隆起線を有し、外面には縦位に2連の刺突文が施される。

### 19. P022号遺構 (図91、92、図版21、23)

炉穴群中最も東側に位置する。P017号遺構に最も近接するが、相対的にやや距離をおき、単独の感がある。

**遺構** 南壁に攪乱を受けているため、全容を把握し得ないが、残存部では径約1mを計り、不整な円形の平面形を呈する炉穴跡である。壁は傾斜を呈して0.17m掘り込んで底面に達している。底面は若干の凹凸が認められるものの、平坦である。火床部は厚さ約0.10mの焼土が堆積し、壁及び底面は熱を受けた形跡が認められる。

**遺物出土状況** I層暗茶褐色土層、II層茶褐色土層、III層焼土層、IV層ロームブロック層が堆積する。遺物は比較的多く、底面及びIII層を中心として出土している。

**出土遺物** 遺物は深鉢形土器がある。1は底部を欠損するが、口縁部以下内外面全てに貝殻条痕文が施される。2、3は胸部破片で、内外面に貝殻条痕文が施される。

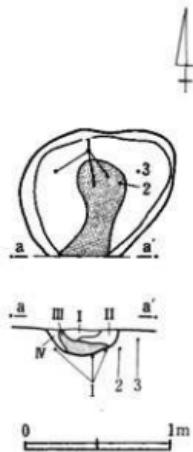


図91 P022号遺構実測図

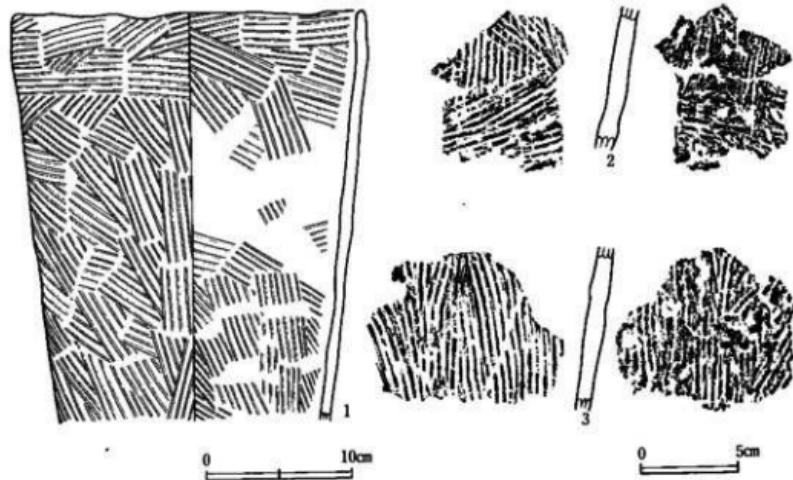


図92 P 022号遺構出土遺物実測図

P 022出土土器一覧

番号	器種	法 量(cm)			遺存度	調 整	胎 土			備 考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色 調	
1	鉢	—	G4.0	—	肩下半部欠損 貝殻条痕文		砂粒	やや軟弱	黒褐色	
2	鉢	—	—	—	胴 部 破 片 貝殻条痕文		砂粒	やや軟弱	黒褐色	
3	鉢	—	—	—	胴 部 破 片 貝殻条痕文		砂粒	やや軟弱	黒褐色	

## 20. P 023号遺構 (図93、図版21)

P 019、020号遺構に近接して位置する。

遺構 長径1.45m、短径0.85mでやや不整な梢円形の平面形を呈する炉穴跡である。主軸を南北方向に有する。壁はほぼ垂直に掘り込み底面に達する。底面は火床部が若干高くなる状況を呈しており、最深部で0.33m、最浅部で0.26mを計る。踏み固められた形跡は認められない。火床部は北側に認められ、厚さ0.12mの焼土が堆積し、壁にも熱を受けた形跡が認められる。

遺物出土状況 I層茶褐色土層、II層ロームブ

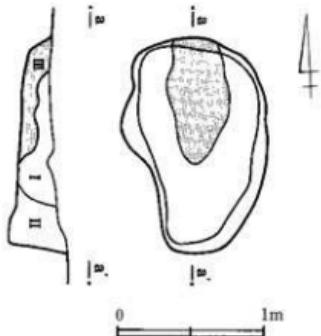


図93 P 023号遺構実測図

ロック混入茶褐色土層、III層焼土層が堆積する。

出土遺物は皆無である。

### 21. P 090号遺構 (図94、図版21)

台地南側縁辺部に単独で位置し、立地上炉穴群とは状況をやや異にする。

**遺構** 長径1.42m、短径1.07mで、やや不整な楕円形の平面形を呈する陥し穴状土壌である。壁は1.90m掘り込まれて底面に達するが、中位まではやや傾斜を呈し、中位より若干オーバーハングした状況を呈する。底面は平坦である。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層暗褐色土層、III層褐色土層、IV層黄褐色土層、V層ロームブロック層、VI層炭化物混入茶褐色土層が堆積する。IV～VI層はまったくしまりのない土である。遺物は上層において小片が数点出土したのみであり、図示し得る遺物は皆無である。

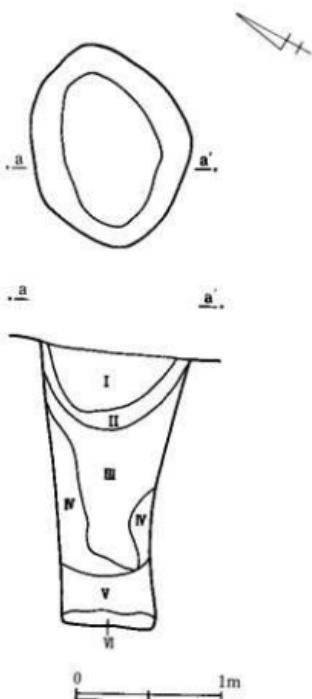


図94 P 090号遺構実測図

### 第3節 中期の遺構と遺物

中期に比定できる遺構は、竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構2基、土壙1基である。遺構は広範囲に分布しており、散漫な状況を呈していると言って良く、群としてのまとまりは認められない。絶対的に遺物の出土が少なく、中には皆無であった遺構もあり、時期を決定するうえできわめて難しい状況である。遺物包含層との関係や遺構間の平面形態の対比等から中期として扱うこととするが、P 003号遺構は加曾利E式土器を伴う可能性があり、他の遺構は阿玉台式土器を伴うと考えられる状況からすれば中期のごく限定された時期に遺構が存在したとは言えないようである。遺構の分布状況もこのことを物語るかのように散漫であり、計画的な集落構成は認められるものではない（図95）。

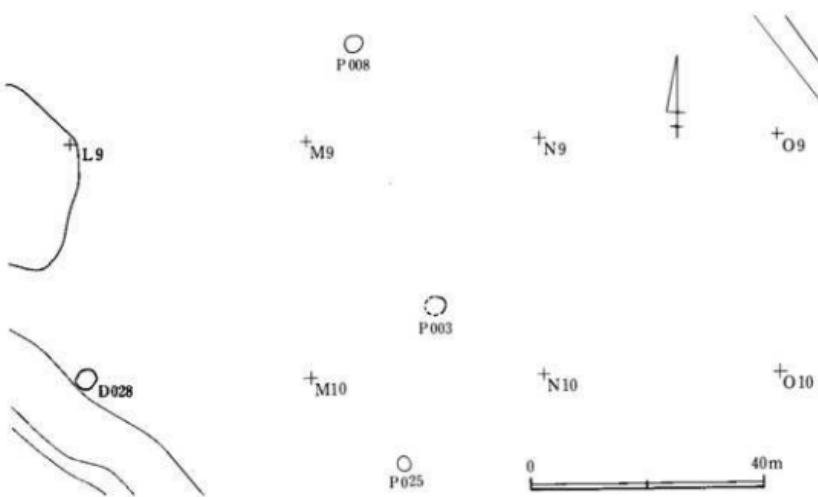


図95 繩文時代中期遺構分布状況図

### 1. P003号遺構 (図96~98、図版23)

D018号遺構により西側半分を切断される。当初ピットとして調査したが、炉の検出により竪穴住居跡として判断する。

**遺構** 径3.00mを計り、やや不整な円形の平面形を呈すると考えられる竪穴住居跡である。  
壁は傾斜を呈して0.46m掘り込まれ、床面に達している。床面は遺存部では全体に軟弱である。  
壁溝、柱穴などは検出できなかった。

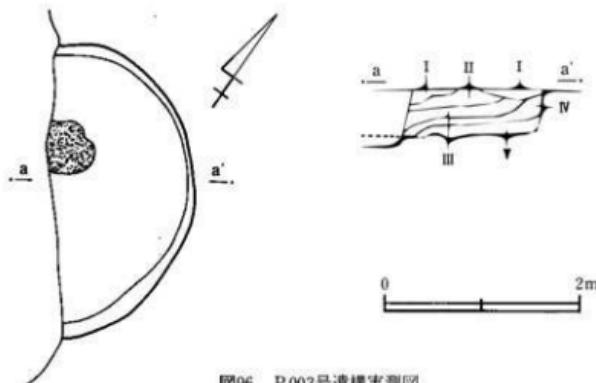


図96 P003号遺構実測図

**炉** 中央部より若干北寄りに位置するが、西側の一部をD018号遺構により切られている。東西規模は不明だが、径0.52m、深さ0.08mを計り、厚さ0.04mの焼土が堆積する。火床部は固く熱変している。

**遺物出土状況** I層黒色土層、II層ローム粒混入暗茶褐色土層、III層暗茶褐色土層、IV層茶褐色土層、V層明茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少で、いずれも小片であり、床面上からの出土は皆無である。

**出土遺物** 遺物は深鉢形土器がある。1は胸部破片、

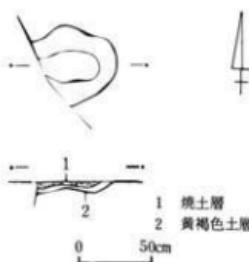


図97 P003号遺構炉跡実測図

2は口縁部破片である。図示した土器はいずれも加曾利E式と思われるが、むしろ阿玉台式土器が多くを占めていることは注意したい。



図98 P003号遺構出土遺物実測図

P003出土土器一覧

番号	器種	法 直(cm)			遺存度	調 整	胎 土			備 考
		高	口径	底径			混 入 物	燒 成	色 調	
1	鉢	-	-	-	胸部破片	RL輪文	砂粒	堅	黒褐色	
2	鉢	-	-	-	口縁部破片	RL輪文 LR輪文	砂粒	堅	黒褐色	

## 2. D028号遺構 (図99、100、図版24)

当初竪穴住居跡として調査を進めたが、炉跡、柱穴などがなく、竪穴住居跡として断定し得る積極的な根拠に欠けるため、竪穴状遺構として扱うこととする。

**遺構** 径3.14mでやや不整な円形の平面形を呈する竪穴状遺構である。壁は傾斜を呈して掘り込み、床面に達する。北東壁が最も深く0.45m、南西壁が最も浅く0.28mを計る。床面は東

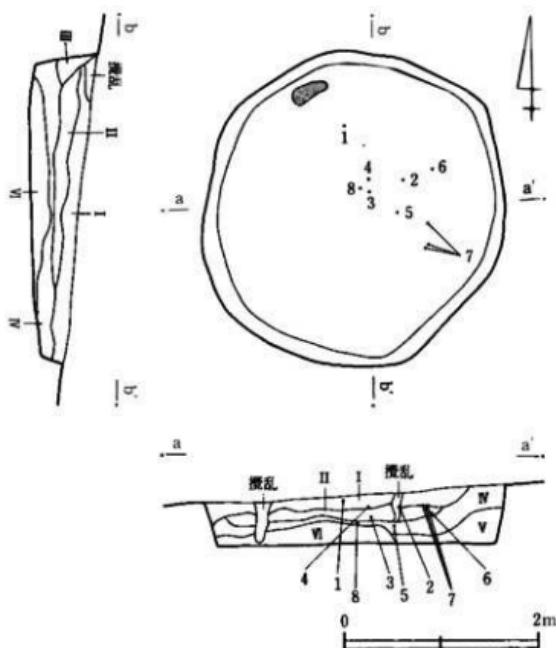


図99 D028号遺構実測図

側部分で比較的堅緻であるが、西側部分ではやや軟弱である。北壁に近接して焼土の散乱が認められたが、性格は不明である。柱穴、壁溝、炉などの施設は検出できなかった。

**遺物出土状況** I層暗茶褐色土層、II層黒色土層、III層茶褐色土層、IV層黒褐色土層、V層ローム粒混入暗茶褐色土層、VI層明茶褐色土層が堆積する。遺物は中央部を中心として出土しており、壁に近接する位置での出土はない。また、床面上出土は皆無であり、II層を中心とし

D028出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎 土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	鉢	—	—	—	口縁部破片	角押文	青母、石英	堅	褐色	
2	鉢	—	—	—	口縁部破片	角押文	金青母、石英	堅	褐色	
3	鉢	—	—	—	口縁部破片	微隆起帯、沈線	金青母、石英	堅	褐色	
4	鉢	—	—	—	口縁部破片	角押文	長石、石英	堅	褐色	
5	鉢	—	—	10.0	底部のみ	隆等	金青母、石英	やや軟弱	茶褐色	
6	鉢	—	—	12.0	底部のみ	瓜形文	金青母、石英	やや堅	褐色	
7	鉢	—	—	11.0	底部のみ	—	金青母、石英	やや軟弱	茶褐色	
8	鉢	—	—	8.4	底部のみ	—	長石、石英	やや堅	褐色	

た出土である。

**出土遺物** 遺物はいずれも深鉢形土器で、1～4は口縁部破片、5～8は底部破片である。1、2、4は隆帯と角押文で構成される。3は微隆起帶と沈線で構成される。5は隆帯、6は爪形文が認められる。1、2、4は阿玉台II式とされるものだが、3はさらに古手に位置づけられよう。

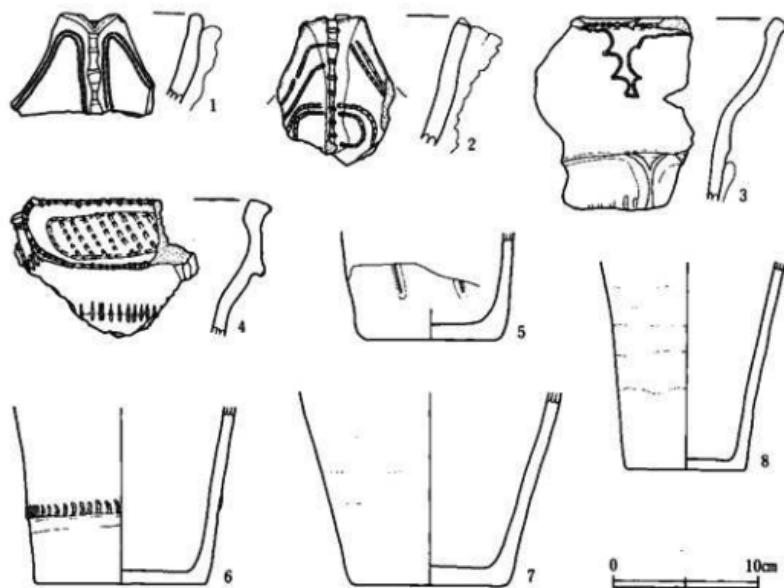


図100 D028号遺構出土遺物実測図

### 3. P008号遺構（図101、図版23）

当遺跡において検出した遺構の北限を示すものである。

**遺構** 径3.10mを計り、不整な円形の平面形を呈する遺構である。壁はやや傾斜を呈して0.52m掘り込み、底面に達している。底面は全体にやや軟弱だが、平坦である。ピットは壁に近接して北西侧にP<sub>1</sub>、南東側にP<sub>2</sub>を検出し、相対して位置する。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>はそれぞれ径0.33m、0.18m、深さ0.14m、0.23mを計る。その他施設は検出できなかった。

**遺物出土状況** I層ロームブロック混入茶褐色土層、II層黒褐色土層、III層ロームブロック混入黒褐色土層、IV層明茶褐色土層、V層暗茶褐色土層、VI層茶褐色土層、VII層ロームブロック

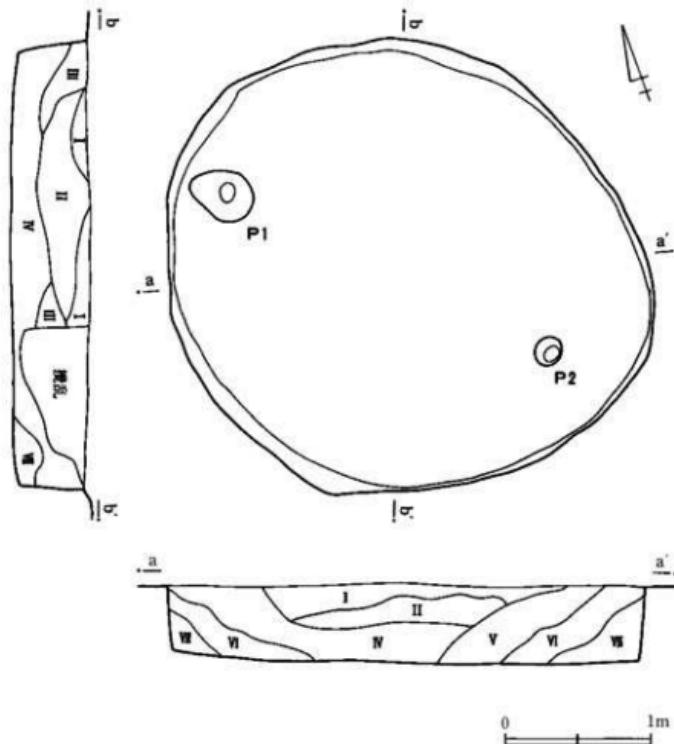


図101 P 008号遺構実測図

ク層が堆積する。出土遺物は皆無である。

#### 4. P 025号遺構 (図102、103、図版24)

当期の遺構の内、最も南側に位置するものである。

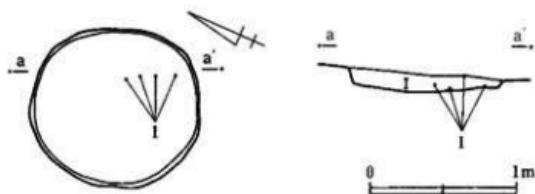


図102 P 025号遺構実測図

**遺構** 径1.16mを計り、円形の平面形を呈する土壇である。壁はやや傾斜をもって0.12mを計り底面に達している。底面は若干の凹凸が認められるものの、ほぼ平坦である。特に何らかの施設等は検出できなかった。

**遺物出土状況** I層ローム粒混入茶褐色土層が堆積し、単一層である。遺物は南寄り部分に集中して出土する。

**出土遺物** 遺物は1の深鉢形土器がある。底部は欠損しており、不明である。阿玉台II式に比定される。

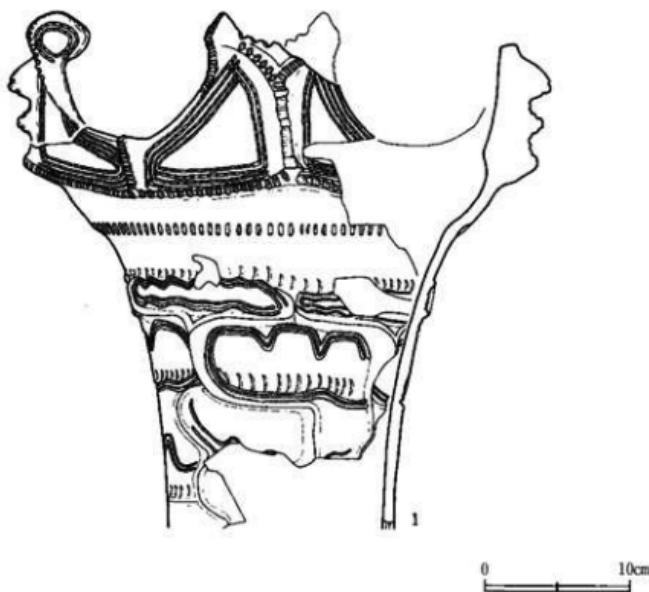


図103 P 025号遺構出土遺物実測図

P 025出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	深鉢	-	(38.6)	-	頂上半部 1/2	角押文、隆起線	金雲母 石英、長石	堅致	黒褐色	

#### 第4節 後期の遺構と遺物

後期に比定できる遺構は竪穴住居跡のみで、三軒を検出した。いずれも台地南側縁辺部を占地しており、これより南側は急斜面となって須久茂谷津の沖積地に続くため、検出した3軒の竪穴住居跡をもって集落全体を検出したといって良いであろう。したがって、集落自体は台地最先端部に展開する小規模なものである。集落が大きな展開を呈さない点は中期の場合と同様なあり方を示していると言つて良いであろう。しかし、中期の場合広範囲に台地中央部まで遺構が占地しているのに対し、後期はごく限定された台地縁辺部に位置しており、占地からみれば異なったあり方を呈している(図104)。

また、3軒というきわめて小規模な集落であるが、分布状況から1軒だけ他とはやや距離を置いて存在する住居跡があり、場合によってはさらに2グループに分離できる可能性がある。

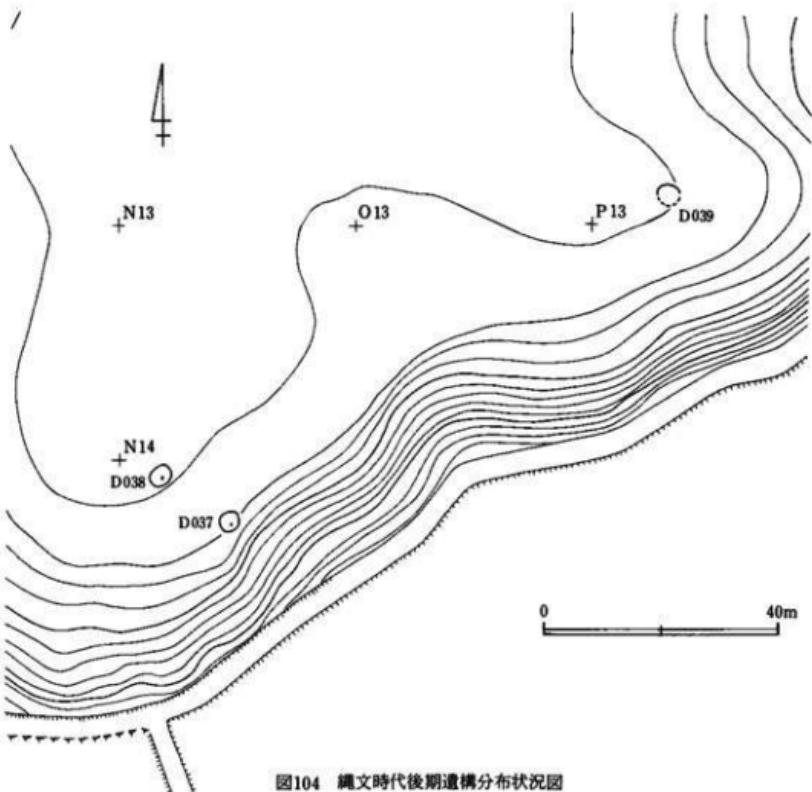


図104 縄文時代後期遺構分布状況図

### 1. D037号遺構 (図105~107、図版25、26)

南東コーナー部は調査区域外へ伸びるため検出できなかった他、一部擾乱を受ける。D038号遺構に近接する。

**遺構** 径3.82mでやや不整な円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して0.24m掘り込み、床面に達する。床面は特に堅密な部分は認められない。壁溝、柱穴は検出できなかった。

**炉** 住居中央よりやや東寄りに位置する。径0.75m、深さ0.30mを計り、厚さ0.08mの焼土が堆積する。炉壁より若干内側において厚さ0.17mの焼土ブロックがドーナツ状に巡っている状況が認められる。このことより掘りかたを若干埋めもどした後炉として使用し、また比較的長期間使用されていたことが看取できる。同類例としてはD038号遺構があげられる。

**遺物出土状況** I層暗茶褐色土層、II層焼土層、III層焼土ブロック層、IV層褐色土層が堆積する。遺物は稀少で床面上を中心として出土する。

**出土遺物** 遺物は深鉢形土器と石製品がある。深鉢形土器は1、2である。1は口縁部に3か所の小波状が認められる。2は底部破片である。後期の粗製土器で、堀之内式と考えられよう。3は安山岩製の敲石だが、欠損しており、残存部では使用痕は認められない。

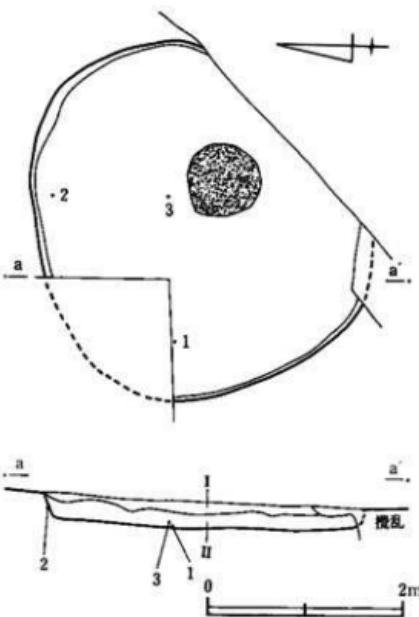


図105 D037号遺構実測図

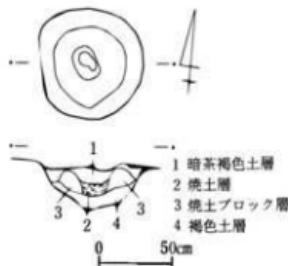


図106 D037号遺構炉跡実測図

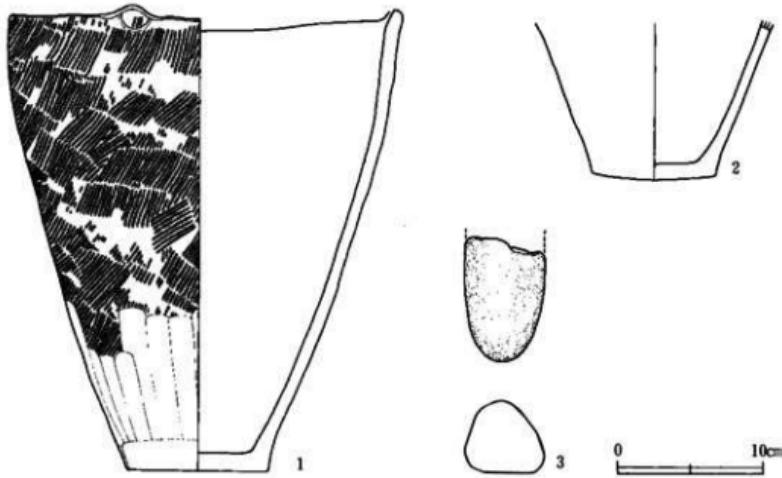


図107 D037号遺構出土遺物実測図

D037出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	深鉢	31.0	27.3	9.8	略完形 L.R.縞文 ヘラ削り		砂粒	やや堅緻	黒褐色	
2	深鉢	—	—	8.6	底部のみ ヘラ削き		砂粒	堅緻	茶褐色	

## 2. D038号遺構 (図108、109、図版26)

斜面部から平坦部に移行した位置で検出した。D037号遺構に近接する。

遺構 長径4.22m、短径3.66mでやや南北に細長い円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して0.12m掘り込んで、床面に達する。床面は全体に軟弱な状況を呈する。壁溝、柱穴は検出できなかった。

炉 住居中央よりやや東寄りに位置する。径0.60m、深さ0.31mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積する。炉壁より若干内側において厚さ0.20mの焼土ブロックがドーナツ状に巡っている状況が認められ、

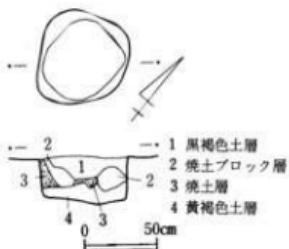


図108 D038号遺構炉跡実測図

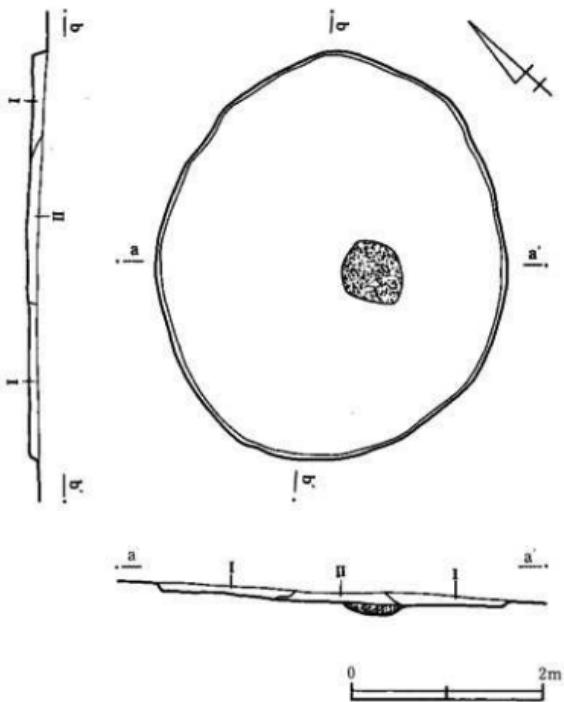


図109 D038号遺構実測図

D037号遺構と同様な状況を呈している。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層焼土粒混入黒褐色土層が堆積する。出土遺物は稀少でいずれも小片である。

### 3. D039号遺構（図110、111、図版26）

斜面部から平坦部に移行した位置で検出した。D037、038号遺構とはやや距離をおく。

**遺構** 遺構の一部が遺存しているのみで、規模については把握できない。残存部で最長3.25mを計り、円形の平面形を呈する堅穴住居跡と考えられる。壁はやや傾斜を呈して掘り込まれ、確認面より0.12mを計って床面に達する。床面は全体にやや軟弱である。柱穴は東西方向に2列に並ぶP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を検出したが、南側にもこれらに対応する4個の柱穴が残存していたものと推定できる。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は径平均0.15m、深さ平均0.05m、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>は残存部において径平均0.18m、深さ0.07mを計る。壁溝、炉は検出できなかったが、炉については削平された部分に残存

していた可能性も考えられる。

**遺物出土状況** I層暗褐色土層、II層ローム粒混入茶褐色土層が堆積する。遺物は数点しか出土しておらず、いずれも小片である。床面上より軽石が1点出土している。

**出土遺物** 遺物は深鉢形土器と石製品がある。深鉢形土器は2~4で、いずれも胴部破片である。1は軽石で、端部の一部に使用痕が認められる。土器は加曾利B式に比定されるものであるが、いずれも小片であり、しかも覆土中からの出土であることから、当住居跡の時期決定は即断できない。

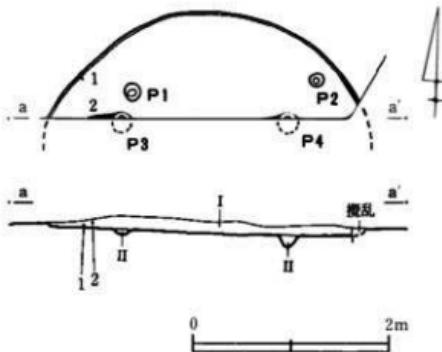


図110 D039号遺構実測図



図111 D039号遺構出土遺物実測図

D039出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調 整	胎 土			備 考			
		器高	口径	底径			混入物	焼 成	色 調				
2	深 鉢	—	—	—	体 部 破 片	沈線文	砂粒、石英	堅	淡茶褐色	二次焼成痕			
3	深 鉢	—	—	—	体 部 破 片	沈線文	砂粒、石英	堅	淡茶褐色				
4	深 鉢	—	—	—	体 部 破 片	沈線文	砂粒	堅	淡茶褐色				

## 第3章 包含層出土遺物

### 第1節 層位と出土状況

台地北側部分では用地が資材置場として供されていたためかなり大規模な擾乱を受けた形跡が認められる。また、ソフトローム層上面は耕作による擾乱土層となっており、遺物包含層は認められない。この北側部分を除く大部分の地域では包含層を検出しておらず、縄文土器あるいは石器等を多数検出した。

縄文包含層はソフトローム層と耕作による擾乱土層の中間に位置するもので、暗褐色土層で構成される単一層である。全域にわたり厚さ約20cm前後の堆積が認められ、台地南側縁辺部では平坦部分より深く約40cmの堆積した状況が認められる。

包含層からの遺物出土状況は、およそ9ラインを北限とし、台地先端部に至る範囲に多量に認められる。台地東側は、権現後遺跡と区分される小支谷に向うにしたがって少なくなる傾向が指摘できる。縄文土器は早期から晩期に至るまで出土しており、台地が長期間にわたって利用されていたことが推察できる。

中期及び後期に比定できる土器が最も多く出土しており、晩期に比定できる土器はわずか2点だけである。遺構は検出した時期の遺物出土地点については、遺構の分布とほぼ重複する分布状況を示している。

### 第2節 土 器

縄文土器は、早期から晩期の各期にわたっているが、支配的に出土したのは中期と後期である。特に中期の阿玉台式が際立つ。早期では撚糸文系土器、沈線文系土器、貝殻条痕文系土器があり、前期では黒浜式土器、浮島式土器が、中期では五領ヶ台式土器、勝坂式土器、阿玉台式土器、加曾利E式土器が、後期では堀之内式土器、加曾利B式土器、安行式土器が、晩期では千綱式土器が認められる。

各期の土器を以下に示すとおり第I～IX群に分類し、必要に応じてさらに細別した。

#### 1. 第I群土器（図112、図版27）

早期の土器を一括して含める。出土量全体の3.7%を占める。撚糸文系土器、沈線文系土器、条痕文系土器に細別できるが、早期の遺構は条痕文系土器を伴うものであり、包含層においても早期の内最も多くを占めている。

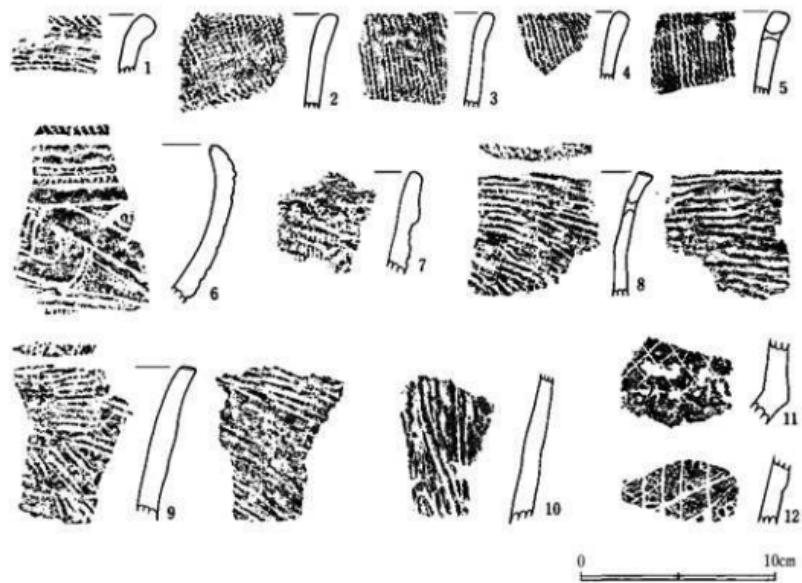


図112 第I群土器実測図

#### A類 撫糸文系土器

1～5が相当する。いずれも深鉢形土器の口縁部破片で、繩文を施したものと撫糸文を施したものがある。

a種 口唇部が肥厚し、繩文で構成されるものをいう。1が相当し、口唇部にR L繩文、その下に押圧繩文が施され、口縁部直下に若干の無文帯を残して横位にR L繩文を施す。

b<sub>1</sub>種 口唇部の肥厚は認められず、繩文を施すものをいう。2～4が相当し、口唇部から脇部にかけてR L繩文を斜行ぎみに施す。

b<sub>2</sub>種 撫糸文を施す。5が相当し、口唇部は若干肥厚、外反する。口唇部から脇部にかけて撫糸文を施す。なお、口縁部直下に補修孔が認められる。

a種は井草I式、b種は井草II式に比定できる。

#### B類 沈線文系土器

6の1点のみである。胎土には長石・石英の粒子の他纖維を含み、焼成は良好である。口縁は内彎する。口唇部には刻目を有し、口縁部直下には波状沈線文が施される。文様は沈線によるS字状の入組文によって構成され、上下は1条の沈線及び3条の沈線文と貝殻腹縁による圧痕文の組み合わせによって区画される。また、S字状の入組文と上下の沈線文との間にも貝殻

腹縁による圧痕文が施される。

田戸上層式に比定できる。

#### C類 条痕文系土器

炉穴跡の集中する台地西側縁辺部を中心として出土する。7～12が相当するが、いずれも深鉢形土器で、7～9は口縁部破片、10～12は胸部破片である。

a種 絡条体圧痕文により構成される。7が相当する。胎土に纖維を多く含み、焼成はあまり良好でない。口縁は小波状を呈し、斜位及び横位に絡条体圧痕文を施す。

b種 貝殻条痕文によってのみ構成される。8～10が相当する。胎土に纖維を含み、焼成は良好でない。8、9は内外面に貝殻条痕文を施し、口唇部に貝殻腹縁を利用した押圧が施される。10は外面にのみ貝殻条痕文を施す。

c種 格子状の沈線によって構成される。11、12が相当する。胎土に纖維を含み、焼成はあまり良好とは言えない。11は微隆起帯を有して屈曲するが、刻目が一部認められる。文様は箆工具による格子目文が施される。12は半截竹管による格子目文が施される。

いずれも細片のための不明瞭であるが、a種は茅山上層式直後の上の山式あるいは入海I式、b種は広義の茅山式、c種は鶴ガ島台式に比定されよう。

## 2. 第II群土器（図113、図版27）

前期の土器を一括して含める。出土量は全体の4.3%と少なく、この時期の遺構も検出していない。羽状繩文系とされる黒浜式と浮島式とに大別できる他、前期末から中期初頭に比定されるものが1点出土する。

#### A類 黒浜式土器

台地南側縁辺部を中心として出土する。1～9が相当するが、いずれも深鉢形土器の胴部破片で、胎土に纖維を多量に含む。文様により以下の4種に分類できる。

a種 無筋の繩文が施されるものをいう。1～3が相当する。2は一部羽状のような文様形態をとるが、これは多方向からの施文によるもので、羽状繩文とは異なるものである。

b種 沈線文が施されるものの内、箆状工具によるものをいう。4が相当し、横位に沈線文が施される。下部には斜位に文様が施されるが、器面の状態が悪く不明瞭である。

b<sub>2</sub>種 沈線文が施されるものの内、半截竹管によるものをいう。5～7が相当し、いずれも横位に沈線文が施される。

c種 アナグラ属の貝殻腹縁による圧痕文が施されるものをいう。8が相当し、貝殻腹縁による圧痕文が平行に施される。

d種 上記以外のものをいう。9が相当する。器面が荒く不鮮明だが、竹管状の工具で圧痕していると考えられる。

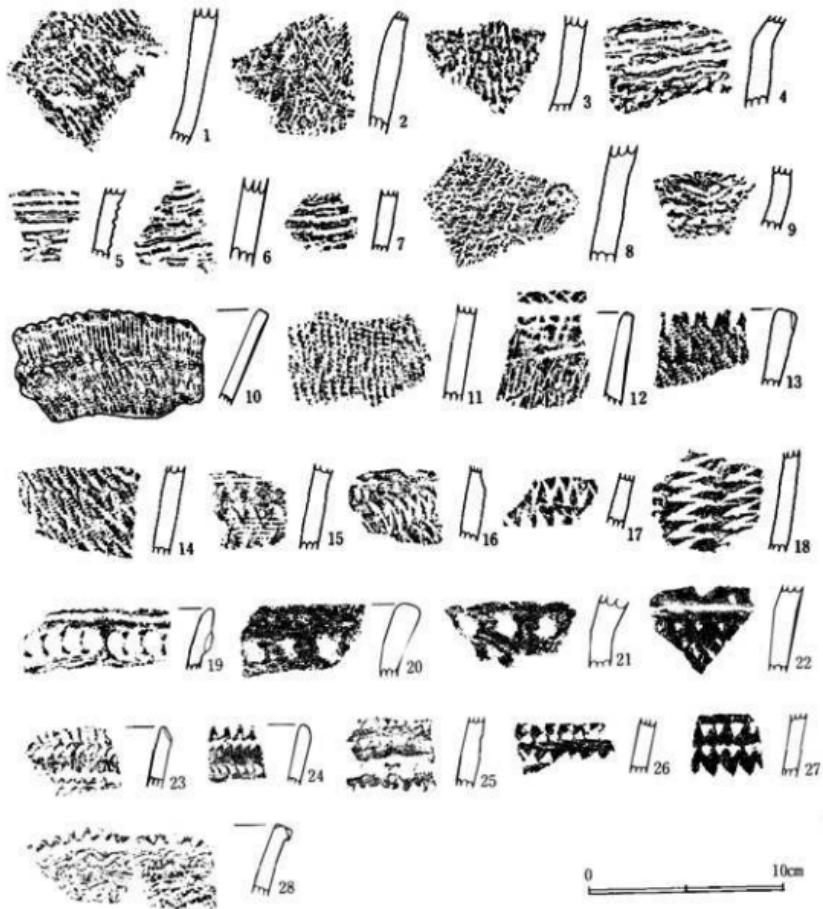


図113 第II群土器実測図

以上を一応黒浜式土器として捉えておくが、器面の状態が悪く、またいざれも細片のため不明瞭である。

#### B類 浮島式土器

台地の西側縁辺部を中心として出土する。文様により大きく4種に分類できる。

a<sub>1</sub>種 アナグラ属の貝殻腹縁による連続波状貝殻文が施されるものをいう。10~12が相当する。10は口唇部に竹管による押捺が施され、口唇部直下には半截竹管による縦位の条線文がある。

施される。12は口唇部に半截竹管による格子目状の刻目が、口唇部直下には半截竹管による斜行ぎみの条線文が施される。また条線文の下には半截竹管による刺突が施される。連続波状貝殻文は、10は比較的明瞭だが、11、12はやや雑である。

a<sub>2</sub>種 a<sub>1</sub>種と基本的には同一で、アナグラ属を利用した連続波状貝殻文が施文される。しかし、a<sub>1</sub>種のように貝殻の腹縁のみでなく、背の部分も利用したもので、連続した施文を容易にしているものと思われる。従って、連続波状貝殻文が明瞭に認められる。13～15が相当する。13は口唇部に半截竹管による刺突状の刻目が認められる。いずれも横位の連続波状貝殻文である。

a<sub>3</sub>種 ハマグリ類の貝殻腹縁による連続波状貝殻文が施文されるものをいう。16～18が相当し、16、17は横位に、18は縦位に連続波状貝殻文が施される。

b種 指頭による押捺が施されるものをいう。19が相当し、口縁に平行して指頭による連続した押捺が施される。

c種 半截竹管による刺突が施されるものをいう。20、21が相当する。全体に肉厚で、口唇部はさらに若干肥厚する。工具を立てて使用し、左から右方向へ刺突するように施文する。

d種 いわゆる三角文であるが、工具をより鋭角に使用しており、刺突に近いものをいう。やや不連続である。22が相当する。

d<sub>2</sub>種 連続三角文を施文するものをいう。23～27が相当する。23、24は口唇部に半截竹管の内側を利用した刻目が認められる。

以上、a～d種までいざれも浮島III式に比定されよう。

#### C類 前期末～中期初頭の土器

28の1点のみ出土する。口唇部は隆起し、表裏に結節文を押捺する。口縁部には結節文を施す。

興津式以降に比定されると考えているが、口唇部が独特な様相を呈しており、類例を待ちたい。

### 3. 第III群土器 (図114、115、図版28、29)

中期の土器の内、五領ヶ台式土器、勝坂式土器、阿玉台式土器をいう。五領ヶ台式及び勝坂式に比定される土器は各1点ずつ出土するのみであるが、阿玉台式に比定される土器は全時期を通じて64.3%を占めており、主体となるものである。台地西側縁辺部を中心として出土しており、当期の遺構の占地状況と重複する。

#### A類 五領ヶ台式土器

2が相当する。胸部破片で、胎土に石英、長石を含むが、焼成は比較的良好である。縦位に沈線を施し、沈線上に半截竹管による刺突を施す。また一部横位の連続爪形文を施文する。

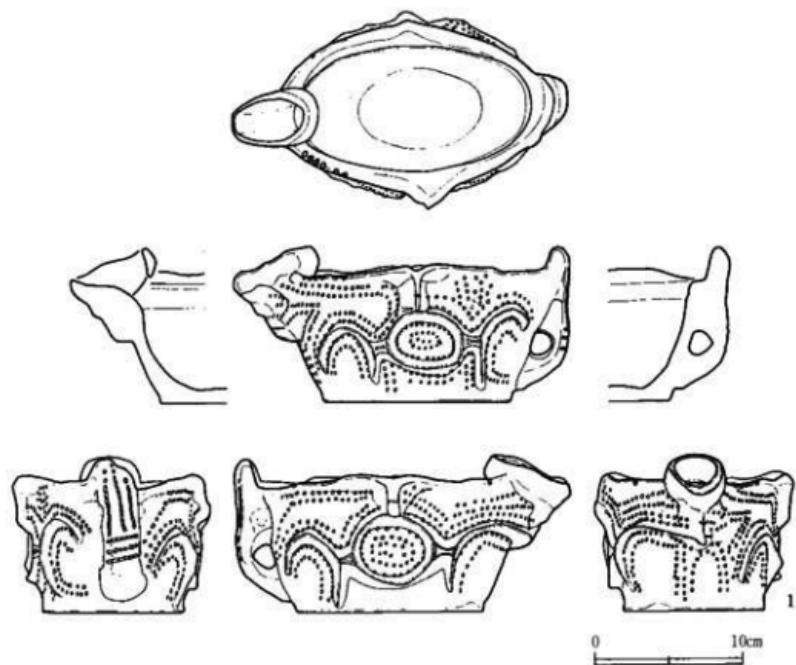


図114 第III群土器実測図(1)

五領ヶ台II式に比定されよう。

#### B類 勝坂式土器

3が相当する。口縁部破片だが、かなり肉厚で、円形竹管による3連続刺突文を施す。また、竹管による二条の沈線が認められる。

勝坂式に比定されるものは1点のみである。

#### C類 阿玉台式土器

1、4~17が相当する。1は注口付舟形鉢形土器、4~17は深鉢形土器である。形態あるいは文様構成により7種に分類可能である。

a種 注口付舟形鉢形土器をいう。1が相当し、完形である。胎土は石英、金雲母を多く含み、焼成はあまり良好とは言えずもろい。注口部は片口状を呈し、相対する位置に把手を有する。口縁部は受口状を呈しており、木蓋等の存在も想定できよう。文様構成は隆起線及び刺突文を基本とする。側面は、中央部に円形状の、左右に半弧状の隆起線を配し、その隆起線に沿って2列の円形竹管による刺突文が施される。把手部には縦位及び横位に各3列の角押文が施

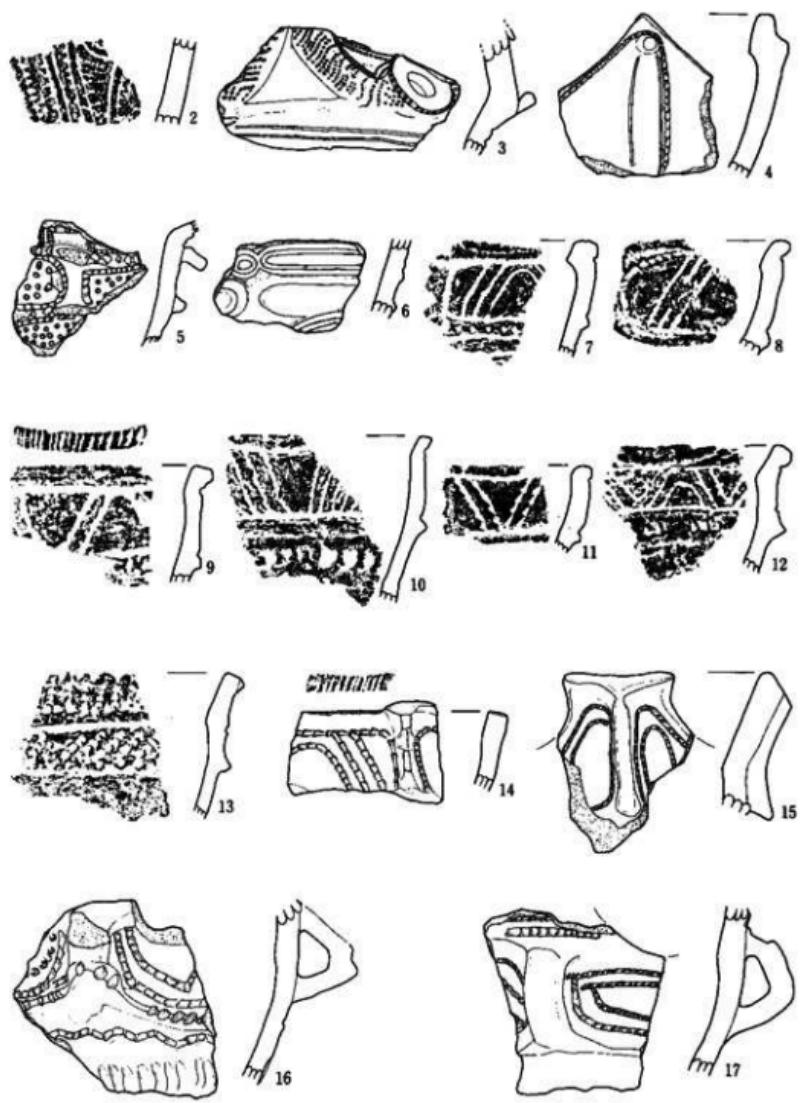


図115 第三群土器実測図(2)

される。

b種 隆起線及び1列の角押文による文様構成をとるもの。4が相当する。胎土は、石英は含むが、雲母をほとんど含まない。

c<sub>1</sub>種 隆起線及び角押文に刺突文が加わるもの。5が相当する。胎土は、雲母、石英を含むが少ないと。

c<sub>2</sub>種 隆起線及び沈線による文様構成をとるもの。6が相当する。上部は半截竹管による沈線によって擬隆起線を成し、下部は隆起線を配する。胎土は、石英は含むが、雲母をほとんど含まない。

c<sub>3</sub>種 隆起線及び1列の角押文による文様構成をとるもの。7～14が相当する。いずれも口縁部破片で、胎土は、雲母、石英を多量に含んでいる。

d種 隆起線及び2列の角押文による文様構成をとるもの。15～17が相当し、16、17は把手を有する。胎土は、17は雲母、石英を多量に含むが、15、16は雲母をほとんど含まない。

b種はI a式、c種はI b式、d種はII式に比定されよう。なお、a種の注口付舟形鉢形土器は現在のところ類例がなく、時期の決定は困難である。

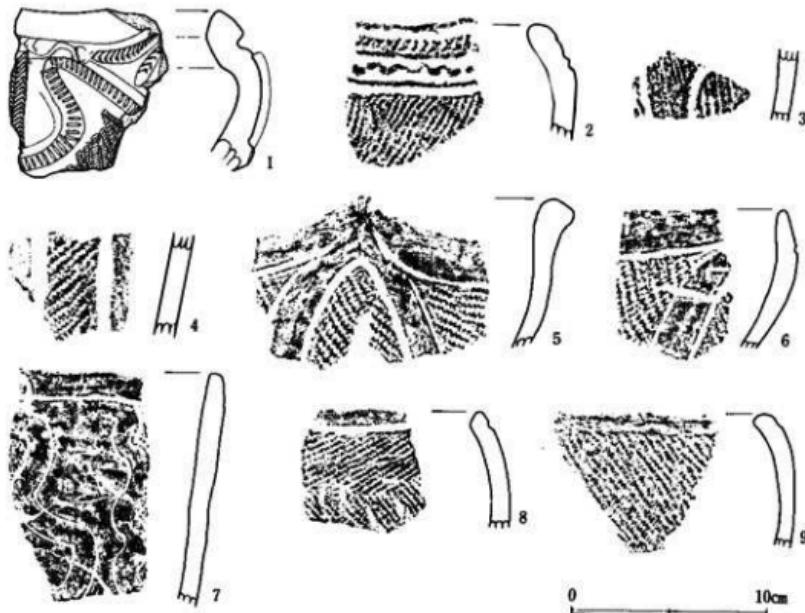


図116 第IV群土器実測図(1)

#### 4. 第IV群土器 (図116、117、図版29)

中期の土器の内、中峠式土器、加曾利E式土器をいう。全体の1.8%の出土量であるが、台地全面にわたり散在する。

##### A類 中峠式土器

1が1点出土する。胎土に雲母、砂粒を含み、焼成は良好である。口縁は内彎し、肉厚である。文様は、隆起線及び連続三角文、RL繩文により構成される。蛇行する隆起線には箆状工具による刻目を付し、それより上部は竹管の押引きによる連続三角文を、下部にはRL繩文を施す。

加曾利E I式よりやや前出、中峠式に比定されよう。

##### B類 加曾利E式土器

a種 口縁部文様帯が比較的発達している。2が相当する。胎土に金雲母、石英を含み、焼成は良好である。口縁部は上下を沈線により区画した中に刻目と幅広の沈線を配し、幅広の沈線内にはさらに波状の隆起線と円形竹管による刺突が付される。下位にはLR繩文を施す。

b種 沈線と繩文によって構成される。3が相当する。

c種 沈線と繩文によって構成されるが、いわゆる「磨消繩文」の技法を有する。4～6が相当する。5は口唇部に突起を有する。

d種 口縁部に無文帯を有し、その下位に繩文を施す。8～11が相当する。8、10は文様帯の間に沈線を施しており、9、10は無文体下部をヨコナデにより若干窪めているもの、明瞭な沈線を施していない。

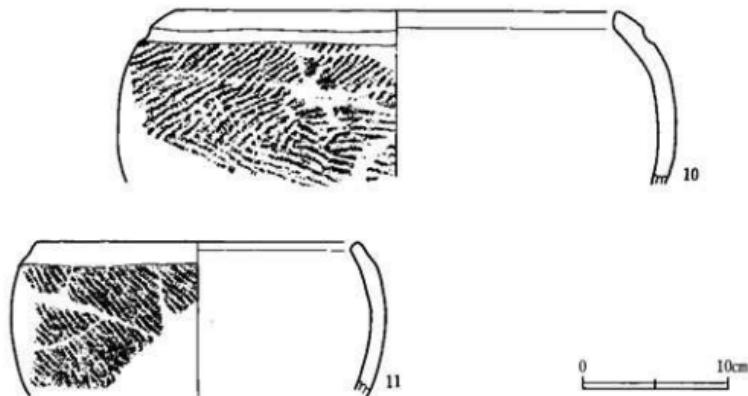


図117 第IV群土器実測図(2)

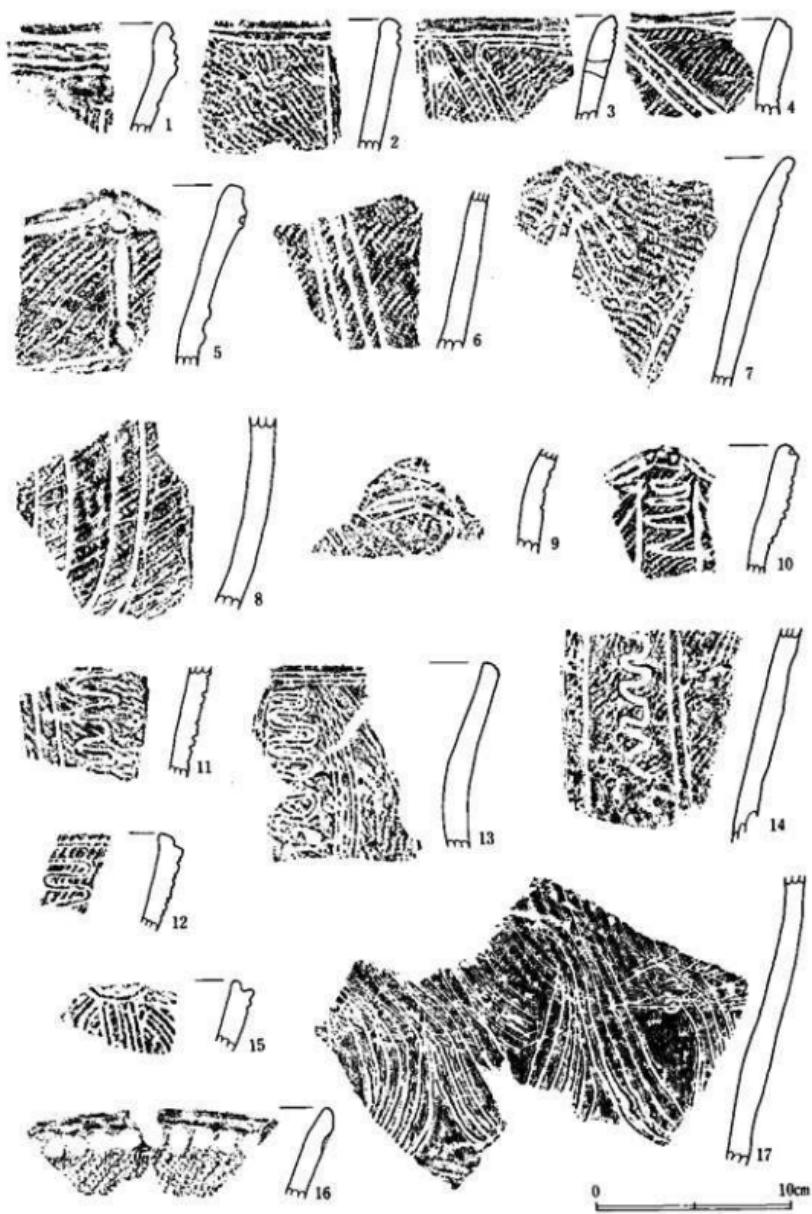


图118 第V群土器実測図(1)

e種 文様が櫛描文により構成されるもの。7が相当する。口縁に平行する1条の沈線と縦位に配する2条連結の波状櫛描文を施文する。

いずれも小破片であるため、決め手に欠けるところが大であるが、a種は加曾利E I式、b～e種は加曾利E III式に比定されよう。

##### 5. 第V群土器 (図118、119、図版30)

後期の土器の内、堀之内式土器を一括して扱う。全体の12.3%の出土量を占める。台地全面に散在するが台地南側部分に比較的多く出土する。文様構成により6種に大別できる。

a種 独立した口縁部文様帯を有する。1が相当する。半截竹管による平行沈線文及びその間に短い沈線を連続して施す。

b種 繩文を地とし、加えて平行沈線を施文する。2～9が相当する。2～4は口唇部及び直下に2条の沈線を施しており、また3は補修孔を有する。5はドーナツ状の浮文を有する。8は一部繩文の磨消が認められる。

c<sub>1</sub>種 繩文を地とし、加えて平行沈線及び沈線による流水文を施文する。半截竹管の外側を利用したものとする。10、11、14が相当する。

c<sub>2</sub>種 c<sub>1</sub>種と基本的には同一だが、半截竹管の内側を利用したものとする。12、13が相当する。

d種 円形の押捺文と繩文によって構成される。16が相当する。

e<sub>1</sub>種 半截竹管による沈線によって構成される。15が相当し、沈線を密に配する。

e<sub>2</sub>種 幕状工具による沈線によって構成される。17が相当する。

f種 繩文を地とし、半截竹管による沈線を施文するが、いわゆる充填沈線により構成される。18～20が相当する。

a～f種はいずれも堀之内I式に比定されよう。



図119 第V群土器実測図(2)

## 6. 第VI群土器 (図120、121、図版31、32)

後期の土器の内、加曾利B式土器を一括して扱う。全体の6.3%を占める出土量である。台地全面にわたり散在するが、縁辺部において比較的多く出土する。文様構成により4種に大別できる。

a種 沈線によってのみ構成されるもの。1が相当する。朝顔形の形状を呈しており、底部は小さく口縁部は大きく外反する。有段部と平行沈線の間に斜行する沈線が充填し、底部を含めて沈線を施さない部分は研磨が施される。なお沈線は箆状工具によるものである。

b<sub>1</sub>種 沈線と磨消繩文帯によって構成されるもの。3、4が相当し、3は口唇部に刻目が施される。

b<sub>2</sub>種 沈線と磨消繩文帯と連続刺突文によって構成される。5、6が相当する。

c種 繩文によってのみ構成されるもの。7が相当する。

d<sub>1</sub>種 繩文を地として、その上に半截竹管による沈線を施すもの。2、8～13が相当する。口唇部には隆帯が巡り、指頭による押捺が認められる。全体に肉厚である。

d<sub>2</sub>種 d<sub>1</sub>種の退化したものとして捉えられる。14～24が相当する。14～19、21は隆帯が巡るあまり突出せず、押捺は細かく施される。14、18、21の押捺は指頭によるものではなく、箆

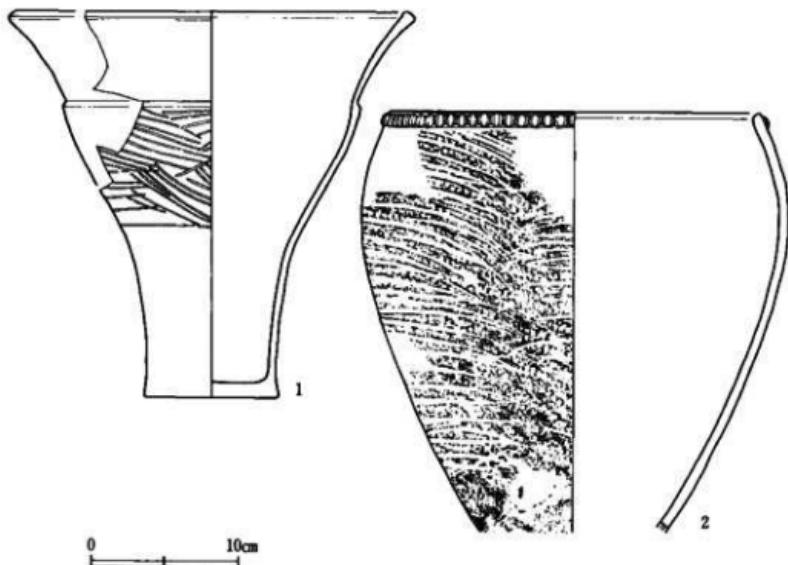


図120 第VI群土器実測図(1)

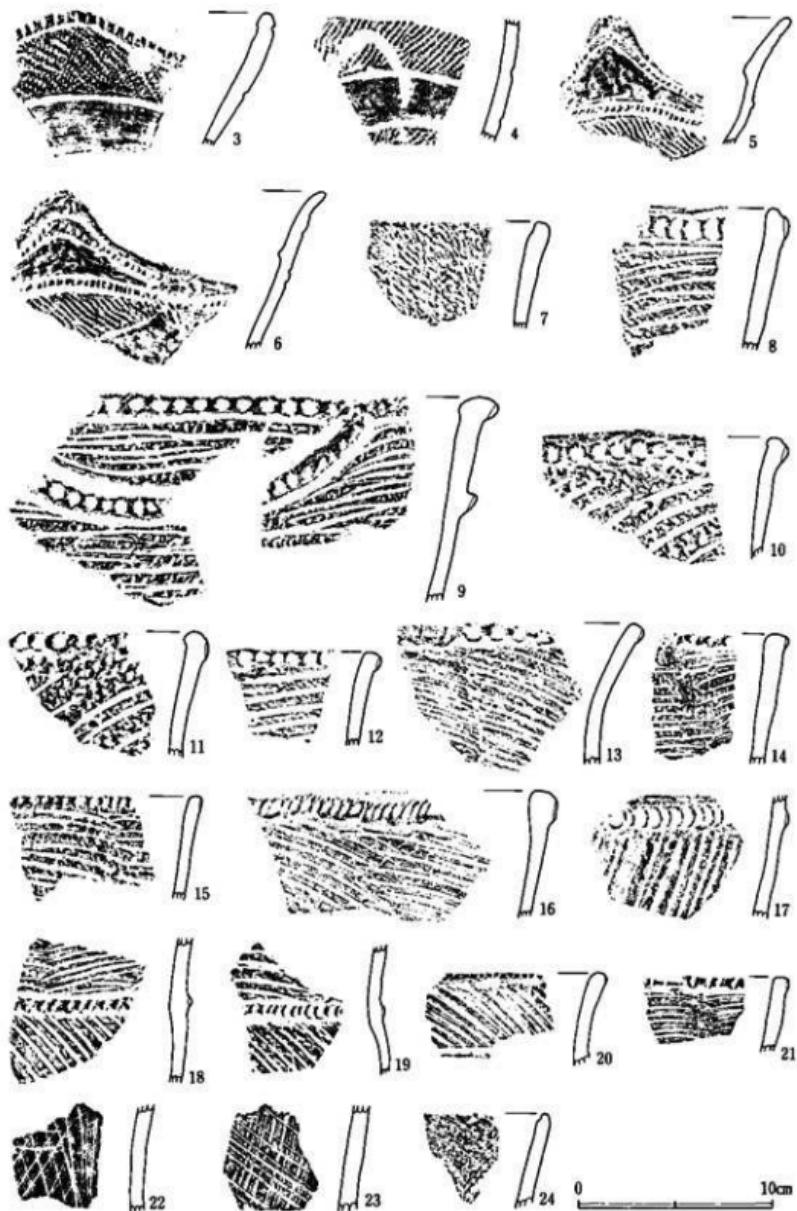


図121 第VI群土器実測図(2)

状工具によるものであり、また20は隆帯は有さないが、口唇部に竜状工具による押捺が認められる。24は隆帯を有さない。また、地文として縄文を施文しないのが一般的であり、施文したと思われる14、15、19、23、25は磨消してある。全体にd<sub>1</sub>種より肉薄である。

a、b種は精製土器、c、d種は粗製土器の部類に属するものである。b<sub>1</sub>種とb<sub>2</sub>種、d<sub>1</sub>種とd<sub>2</sub>種を比較すると、それぞれ後者の方がやや新出的であろうか。

## 7. 第VII群土器（図122、図版32）

後期の土器の内、安行式土器を一括して扱う。全体のわずか2.7%を占める出土量である。

a<sub>1</sub>種 沈線で区画された隆起帶縄文によって構成される。1～3が相当する。1、2は瘤が確認され、特に1は大型で半截竹管による沈線が縦位に3条施される。また、縄文を施さない部分は研磨される。

a<sub>2</sub>種 基本的にはa<sub>1</sub>種と同一で、沈線で区画された隆起帶縄文によって構成されるが、明確な隆起帯の形状をとらず、全体に雑な造りである。4が相当する。瘤を有するが小型で、沈線の施文も雑である。

b種 連続刺突文と弧線文、磨消縄文により構成される。5～7が相当する。5、6は同一個体と思われるが、輪積痕を二段残しており、端部に縄文を施文する。また、連続刺突文は押

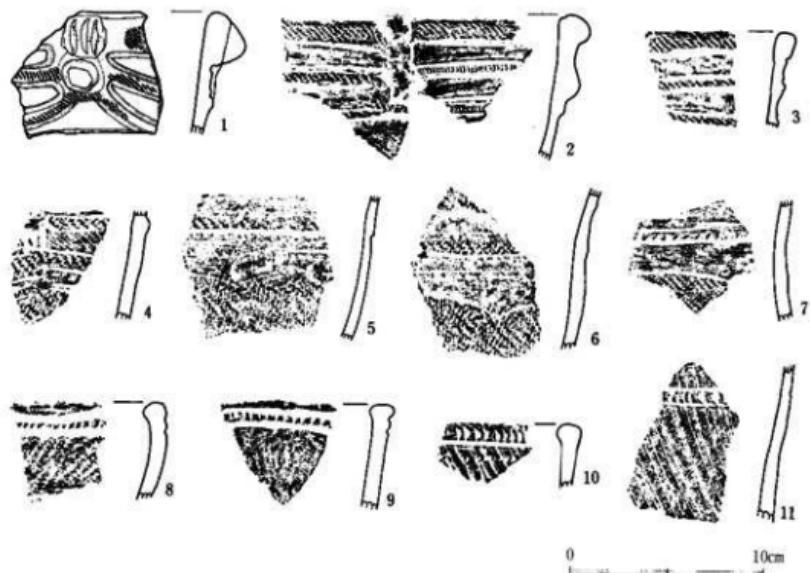


図122 第VII群土器実測図

引き状を呈する。5は2段目の刺突文上に瘤を有していたと思われる。弧線文はいずれも不明瞭である。

c<sub>1</sub>種 2条の沈線と箆状工具による刻目により構成され、下位には縄文を施文する。8が相当する。

c<sub>2</sub>種 2条の沈線と箆状工具による刻目により構成され、下位は無文である。9が相当する。

c<sub>3</sub>種 2条の沈線と半截竹管による押捺により構成され、下位は斜行沈線を施文する。10、11が相当する。斜行沈線は不明瞭である。

a～c種までいずれも安行I式に比定されよう。

#### 8. 第VII群土器 (図123、図版33)

後期粗製土器を一括して扱う。全体の4.6%、後期の土器の17.7%を占める出土量である。いずれも縄文を主体とするが、口縁部の形状により2種に分類する。なお、粗製土器は形式変化に乏しく、所属する型式は不明である。

a種 竹管による押捺のため、口縁部が波状を呈する。1が相当し、R L縄文を施す。

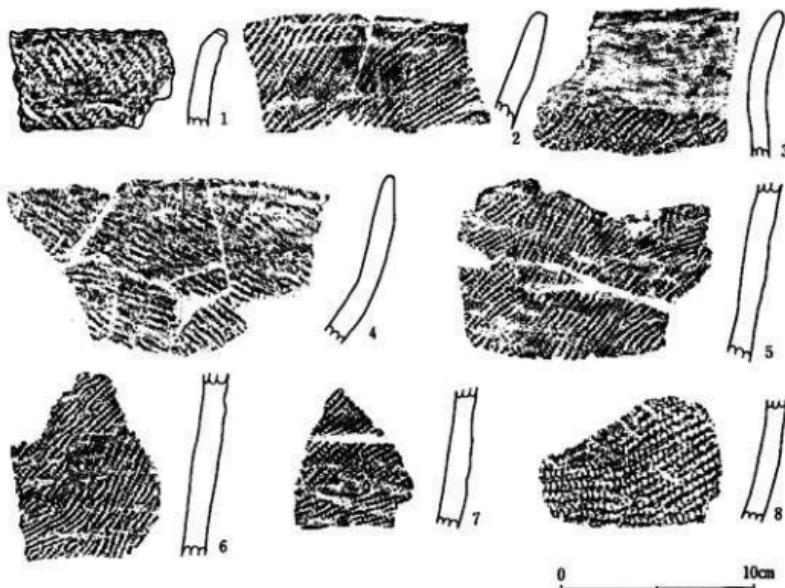


図123 第VII群土器実測図

b種 平口縁を呈する。2～8が相当する。4はRL縄文で、他は全てLR縄文を施す。3、4は口縁部の縄文を磨消した形跡が認められる。

#### 9. 第Ⅸ群土器 (図124、図版33)

晩期の土器を一括して含める。わずかに2点出土したのみである。

1、2のいずれも燃糸文を施す。

1は複合口縁を呈しており、新たに粘土紐を継ぎ合わせることによって口縁を形成する。胎土に石英等小石を混入する。

いずれも粗製土器の範疇に含まれるものだが、千綱式として捉えられよう。



図124 第Ⅸ群土器実測図

### 第3節 土 製 品

土製品としては、土器片錐74点が出土し、台地南西部に集中する傾向が認められる（図125、126、図版34、35）。

いずれも中期の土器片を利用したもので、阿玉台式及び加曾利E式に属するものであるが、阿玉台式に比定されるものが大多数を占める。形状は方形、長方形、円形、橢円形と様々であるが、方形のものが最も多く、整形が不完全なものも少なくない。刻痕は2か所のものが66点、4か所のものが8点と、2か所のものが全体の90%を占める。また、刻痕を新たに設定するかわりに爪形文あるいは刻目等をそのまま利用するものも認められる。

土器片の利用に際しては、口縁部利用のものが3点の他はすべて胸部利用である。また、隆帯の残存するものについては、そのまま利用するものと刻目を入れて利用するものがある。器種、部位、文様等の条件は、土器片錐として再利用する際の土器片の選択にはほとんど無関係であったと言えよう。

欠損するものも少なくないが、最大で長軸6.8cm、短軸5.5cm、重量62.0gを計り、最小で長軸2.8cm、短軸2.1cm、重量6.2gを計る。規模の把握できる範囲内での全体の平均は、長軸4.5cm、短軸3.7cm、重量22.4gを計る。

磨耗が特に著しく認められるものはなく、中にはほとんど磨耗の認められないものも含まれる。

整形は雑なものと丁寧なものとがあり、雑→丁寧をI～IIIの度数によって表わすこととする（表105）。



図125 土製品実測図1)

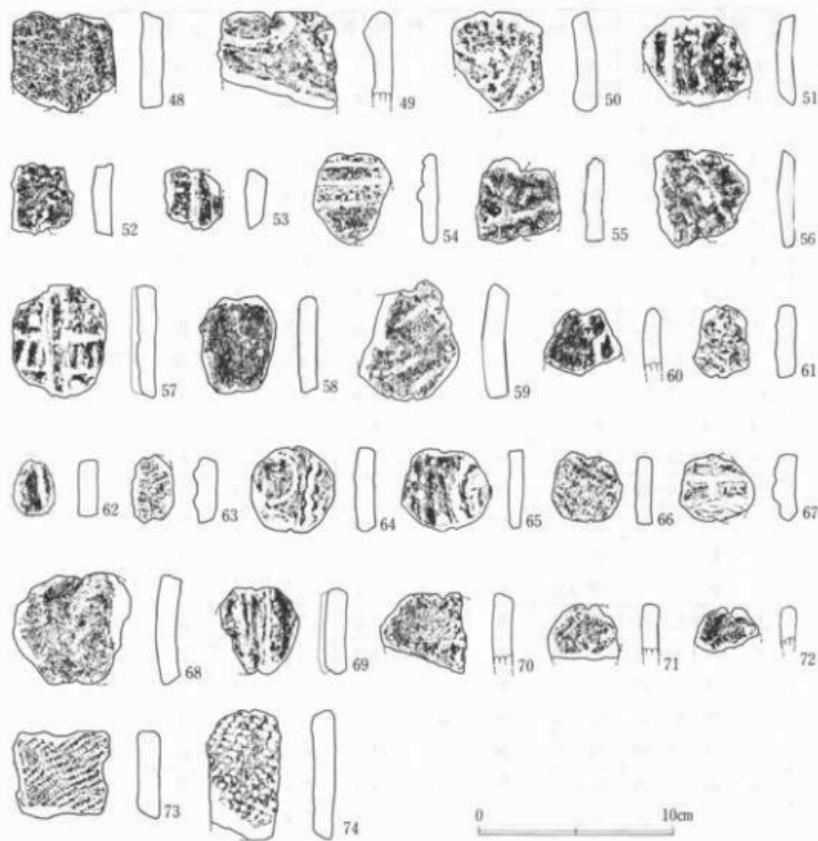


図126 土製品実測図(2)

表105 土器片錐計測表

插番 図号	出土地点	時 期	欠損の有無	長 軸 (cm)	短 軸 (cm)	重 量 (g)	刻 痕	整 形 度	備 考
1	K-9-00	阿玉台	無	6.3	5.1	44.9	4	III	
2	M-10-62	阿玉台	無	4.3	4.1	25.2	4	III	隆帯に刻痕有
3	M-10-62	阿玉台	無	4.7	4.4	20.7	4	II	
4	K-9-00	阿玉台	無	4.2	3.8	16.9	4	III	
5	M-10-62	阿玉台	無	4.7	4.2	25.4	4	III	刻痕の1つは瓜形文の凹凸を利用
6	L-9-87	(阿玉台)	有	(3.4)	(2.9)	10.3	4	III	
7	M-10-62	阿玉台	無	3.8	3.0	13.1	4	III	

擇番 号	出土地点	時 期	欠損の 有無	長 軸 (cm)	短 軸 (cm)	重 量 (g)	刻痕	整形度	備 考
8	N-10-60	阿玉台	有	3.4	2.7	9.2	2	II	
9	L-10-08	阿玉台	無	3.7	2.6	9.5	2	II	
10	L-10-26	阿玉台	無	4.1	3.6	18.0	2	II	
11	M-10-62	阿玉台	無	4.4	3.3	16.7	2	I	
12	L-10-08	阿玉台	無	4.3	3.5	18.6	2	I	
13	L-10-08	阿玉台	有	(3.2)	(2.4)	11.7	2	II	
14	M-10-62	阿玉台	無	5.1	3.7	26.5	2	III	口縁部利用
15	M-10-62	阿玉台	有	5.1	3.0	16.8	2	III	
16	M-10-62	阿玉台	無	5.0	3.5	22.5	2	III	
17	N-10-9	阿玉台	無	6.8	5.5	62.0	2	III	隆帯に刻痕有
18	M-10-62	阿玉台	有	5.6	4.5	27.7	2	III	
19	M-10-62	阿玉台	有	5.7	(4.3)	25.9	2	I	
20	M-10-62	阿玉台	無	5.0	4.5	26.3	2	II	
21	L-10-26	阿玉台	有	(4.0)	3.1	14.0	(2)	I	
22	L-9-86	阿玉台	無	4.5	4.1	25.7	2	III	
23	K-9-00	(阿玉台)	有	(3.7)	3.9	18.2	2	III	
24	K-9-00	(阿玉台)	有	5.5	4.4	22.5	2	I	
25	M-10-62	阿玉台	無	5.1	4.6	27.3	2	III	
26	M-10-62	阿玉台	無	4.9	4.3	27.0	2	II	
27	M-10-88	阿玉台	無	4.6	3.7	19.3	2	I	
28	M-10-62	阿玉台	無	4.5	3.5	27.0	2	III	
29	M-10-62	阿玉台	無	4.6	4.0	20.9	2	II	
30	K-9-00	(阿玉台)	無	4.5	4.1	20.4	2	II	
31	L-10-08	阿玉台	無	4.8	4.2	23.4	2	III	隆帯に摩滅痕有
32	L-10-26	阿玉台	有	4.3	3.5	19.3	2	III	
33	L-10-26	阿玉台	無	4.0	3.5	20.2	2	III	
34	M-10-18	阿玉台	無	4.4	4.1	36.8	2	II	口縁部利用
35	L-10-08	阿玉台	無	3.6	2.8	11.9	2	III	
36	M-10-62	阿玉台	無	4.6	4.3	27.1	2	II	口縁部利用
37	L-9-68	阿玉台	有	(3.6)	3.5	13.1	2	III	
38	L-10-08	阿玉台	有	3.5	(3.1)	11.4	2	II	
39	D017	(阿玉台)	有	3.9	3.7	23.6	2	III	
40	M-10-62	阿玉台	有	3.7	3.2	13.0	2	II	
41	D008	阿玉台	有	3.6	2.8	11.6	2	III	
42	L-10-08	阿玉台	有	3.1	2.4	6.3	2	II	
43	M-10-62	阿玉台	有	4.6	4.3	17.8	2	II	
44	M-10-62	阿玉台	有	4.1	3.8	19.0	2	III	

標番 団号	出土地点	時 期	欠損の 有無	長 軸 (cm)	短 軸 (cm)	重 量 (g)	刻 痕	整 形 度	備 考
45	L-9-79	阿玉台	有	4.2	3.9	24.9	2	III	
46	L-10-08	阿玉台	無	3.7	(2.5)	11.2	(2)	I	
47	L-10-26	阿玉台	有	3.5	(3.0)	13.5	2	III	
48	L-10-08 (阿玉台)	有	5.3	(5.0)	34.6	2	II		
49	N-10-60	阿玉台	有	6.0	(4.1)	36.9	2	III	
50	M-10-62	阿玉台	有	5.1	4.6	25.9	2	III	
51	N-10-60	阿玉台	有	5.5	(4.5)	28.0	2	I	
52	L-9-79 (阿玉台)	有	3.4	3.0	13.4	2	III		
53	L-10-08	阿玉台	有	(3.0)	2.8	10.3	2	III	
54	M-10-62	阿玉台	有	4.5	4.1	16.2	2	III	
55	M-10-62	阿玉台	有	4.3	3.5	21.1	2	II	
56	L-9-59	阿玉台	有	5.0	4.5	19.9	2	I	
57	M-10-62	阿玉台	無	5.7	4.7	31.3	2	III	
58	M-10-62	阿玉台	無	4.8	3.8	21.9	2	II	
59	K-9-00	阿玉台	有	5.8	(5.0)	34.6	2	I	
60	表 採 (阿玉台)	有	(3.2)	(3.9)	11.7	(2)	III		
61	M-10-08	阿玉台	無	3.6	2.4	10.0	2	II	
62	L-10-08	阿玉台	有	2.8	2.1	6.2	2	III	
63	L-9-79	阿玉台	無	3.3	2.1	7.7	2	I	
64	M-10-88	阿玉台	無	4.3	4.3	20.7	2	III	
65	L-10-08	阿玉台	無	4.5	4.0	16.7	2	II	
66	L-10-26	阿玉台	無	3.4	3.4	12.1	2	III	
67	M-10-46	阿玉台	無	3.8	3.3	15.4	2	III	隆蒂に刻痕有
68	K-9-00	阿玉台	有	5.5	5.6	43.0	2	II	
69	L-10-08	阿玉台	有	4.3	(4.0)	19.7	2	II	
70	M-10-98	阿玉台	有	(3.5)	(4.7)	18.9	2	III	
71	L-10-08	阿玉台	有	(2.6)	3.4	9.0	2	III	
72	L-10-08	阿玉台	有	(2.0)	(3.3)	6.0	2	III	
73	K-9-00	加曾利E	無	5.0	4.3	27.7	4	III	
74	N-10-09	加曾利E	有	(6.5)	3.7	33.3	2	II	

#### 第4節 石 器

縄文期の遺構より出土したもの以外はすべてここで扱うが、II層より出土している他、他時期の遺構覆土及び表面採集によるものが含まれる。

石器の総計は33点で、種類別に見ると石錐19点、磨製石斧6点(内1点は両刃石斧)、打製石

斧7点、垂飾石製品1点となっている。これらは欠損品が多く、完形品の割合はきわめて低いと言える。

分布状況を見ると、M-10-00を中心とした地域に集中する傾向が認められ、台地南側縁辺部及び台地北側平坦部においては出土しない。

### 1. 石 鐵 (図127、表106、図版33)

総計19点出土するが、完形品は2点のみであり、他はいずれも欠損している。欠損している箇所は尖頭部及び基部であり、使用頻度の高いものであることから、消耗の激しいことが窺い知れるところである。

いずれも無茎鐵に属するものであるが、尖頭部及び基部の形態により分類可能である。

尖頭部では、I直線的なもの、II外彎するもの、基部では、a八字状に開くもの、b八字状に開かず内彎するもの、c直線的だが若干凹状を呈するもの、d凹状を呈しておらず、側面が全体に内彎するもの、である。

I-aに属するものが最も多く、1~12が相当する。尖頭部から基部までの長さは、欠損品が多くやや不明瞭であるが、おおむね1.5~3.7cmと広範囲にわたっている。尖頭部が直線的であるため、全体に鋭利な様相を呈している。石材は1~7が黒曜石、8が安山岩、9がチャート、10、11が頁岩、12が珪質頁岩である。

II-aに属するものは、13の1点のみである。I-a型とII-b型の中間的なものである。尖頭部から基部までの長さは2.5cmを計り、スマートな形状を呈する。石材は黒曜石である。

II-bに属するものは、14の1点のみである。他と比べ独特な形状を呈しており、造りも丁寧である。尖頭部から基部までの長さは3.2cmを計り、比較的大形であるが、幅がやや広いためスマートな感じは受けない。石材は頁岩である。

II-cに属するものは15~18である。欠損品があるため長さの上限は明確にし得ないが、1.7cm以上を計り、総じて小形である。石材は15、16がチャート、17が頁岩、18が黒曜石である。なお、18は一部鋭利な剝離面をそのまま刃部として利用しており、細かな調整はやや難である。

II-dに属するものは、19の1点のみである。基部を欠損しているが、柳葉状の形状を呈しているものと思われる。石材は黒曜石である。

### 2. 磨製石斧 (図128、129、表106、図版35、36)

大別すると、刃部を両端に有するものと一端に有するものがある。

刃部を両端に有する、いわゆる両刃石斧は20である。従来「独鉛石」として扱われることが多かったが、明らかに刃部を形成しているため、石斧として扱う必要がある。中央部には括れを有しており、鋭利なもので丹念に調整されている。両端は扁平な刃部であり、刃角は75~80°

表106 石器計測表

擇図 番号	器種	遺物番号	大きさ(cm)			刃角 (刃先角)	重量(g)	使用痕 の有無	欠損の 有無	石材
			長さ	幅	厚さ					
1	石 鐵	S014-2	3.6	2.4	0.6	50°	3.1	無	無	黒曜石
2	石 鐵	D009-61	(2.2)	2.4	0.6	—	(2.1)	—	有	黒曜石
3	石 鐵	N-11-00-1	(2.0)	(2.4)	0.5	—	(1.6)	—	有	黒曜石
4	石 鐵	S011-8	2.4	(1.6)	0.4	50°	(0.9)	無	有	黒曜石
5	石 鐵	S012-10	(2.1)	(1.7)	0.4	60°	(0.8)	無	有	黒曜石
6	石 鐵	D001-826	(2.9)	2.2	0.6	60°	(2.3)	無	有	黒曜石
7	石 鐵	D029-32	(2.6)	1.6	0.5	55°	(1.5)	無	有	黒曜石
8	石 鐵	D018-144	(2.9)	2.0	0.5	55°	(2.3)	無	有	安山岩
9	石 鐵	S012-15	2.5	1.7	0.5	45°	(1.4)	無	有	チャート
10	石 鐵	S014-19	(2.2)	1.6	0.5	45°	(1.1)	無	有	頁岩
11	石 鐵	D017-18	1.7	1.5	0.3	60°	(0.7)	無	有	頁岩
12	石 鐵	L-9-79-1	(1.4)	1.5	0.4	65°	(0.6)	無	有	珪質頁岩
13	石 鐵	S017-2	2.4	1.4	0.3	50°	(0.7)	無	有	黒曜石
14	石 鐵	D025-23	(3.1)	2.0	0.3	55°	(1.6)	無	有	頁岩
15	石 鐵	D029-242	1.8	1.3	0.4	60°	0.8	無	無	チャート
16	石 鐵	M-11-46-5	(1.5)	(1.7)	0.5	—	(1.3)	—	有	チャート
17	石 鐵	S010-13	1.7	1.2	0.4	60°	(0.9)	無	有	頁岩
18	石 鐵	D025-22	(2.3)	(2.2)	0.6	50°	(2.5)	無	有	黒曜石
19	石 鐵	L-9-82-2	(2.6)	1.3	0.7	55°	(1.8)	無	有	黒曜石
20	両刃石斧	N-12-74-9	19.3	3.9	2.7	80° 75°	330.0	有	無	粘板岩
21	磨製石斧	N-9-4-1	—	(5.5)	—	25°	(122.5)	無	有	粘板岩
22	磨製石斧	M-9-70-1	—	—	—	—	(14.9)	無	有	砂岩
23	磨製石斧	S012-18	—	(5.3)	(2.2)	—	(82.9)	—	有	砂岩
24	磨製石斧	L-10-08-1	—	(4.3)	(1.8)	50°	(70.4)	無	有	チャート
25	磨製石斧	P-12-00-4	—	—	—	—	(38.5)	無	有	砂岩
26	打製石斧	S012-1	12.6	4.0	2.4	40°	141.9	有	無	砂岩
27	打製石斧	S012-2	8.3	5.2	1.9	35°	97.5	無	無	珪質粘板岩
28	打製石斧	M-9-72-1	8.7	6.6	2.4	35°	158.9	無	無	砂岩
29	打製石斧	S012-12	—	(6.5)	(2.1)	30°	(151.3)	有	有	砂岩
30	打製石斧	L-9-99-1	—	(4.7)	(1.7)	50°	(58.0)	無	有	砂岩
31	打製石斧	N-10-60-1	—	—	(1.5)	40°	(46.3)	無	有	砂岩
32	打製石斧	S014-18	—	—	(2.1)	—	(26.5)	—	有	泥岩
33	垂飾品	L-10-08-2	(4.6)	2.3	0.7	—	(12.2)	—	有	滑石

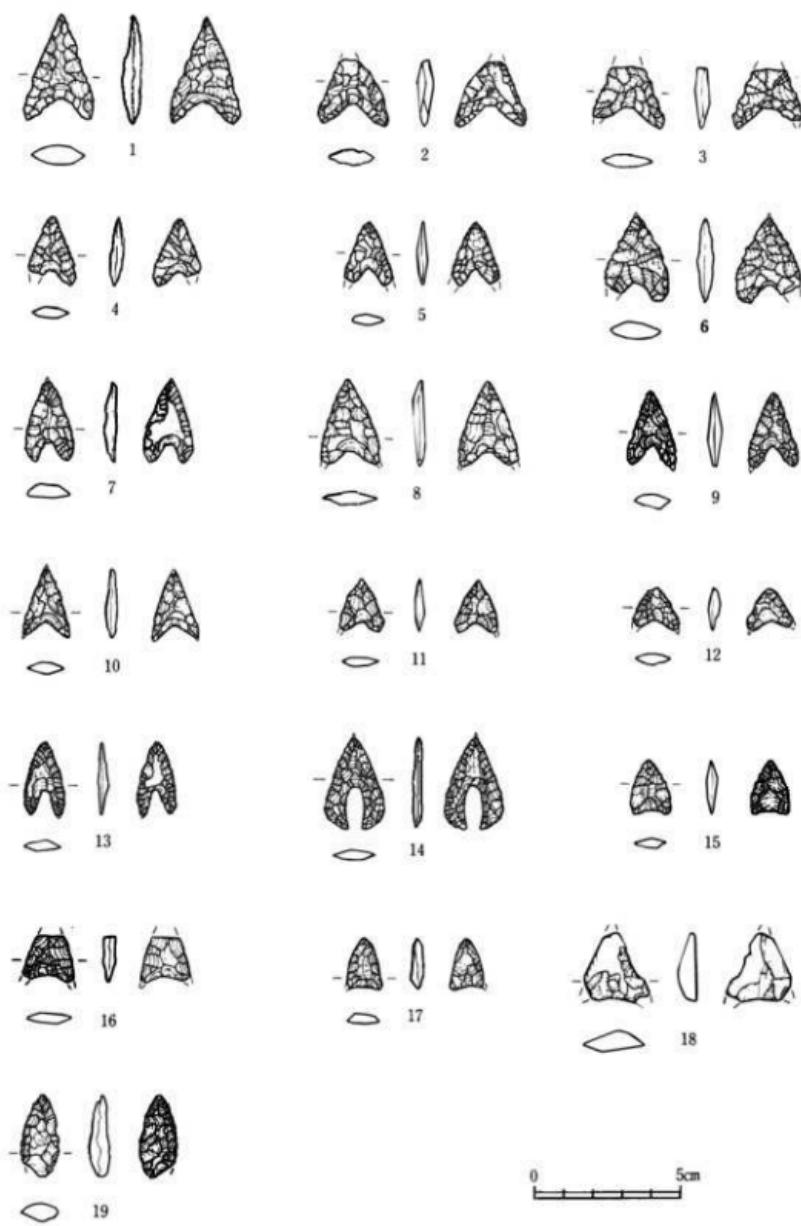


図127 石器実測図(1)

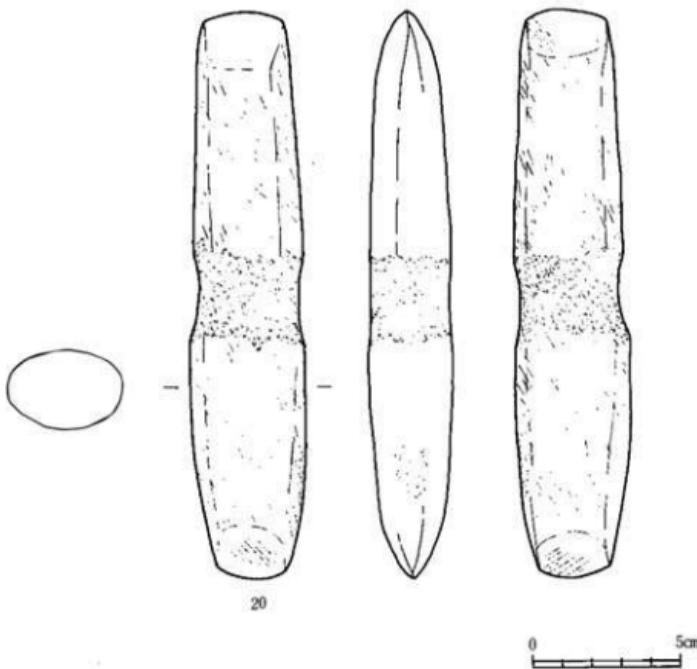
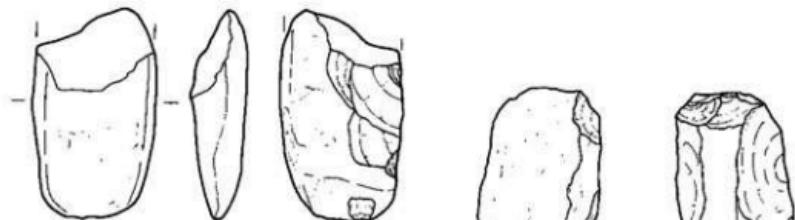
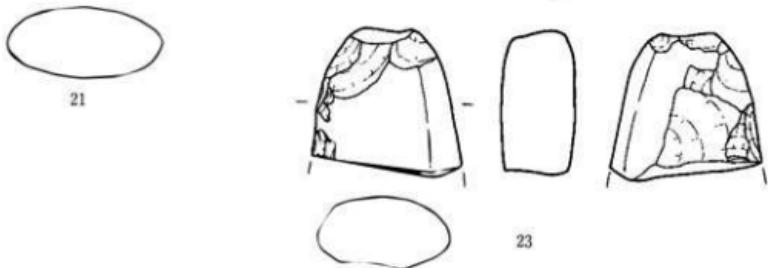
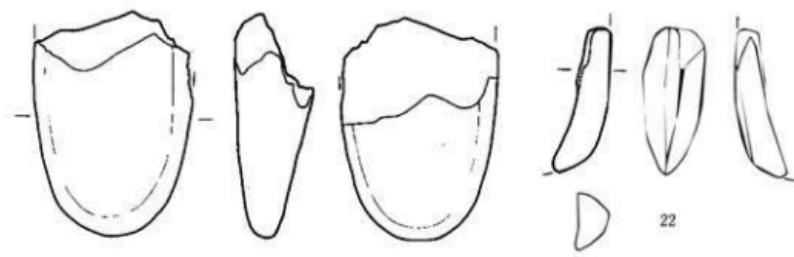


図128 石器実測図(2)

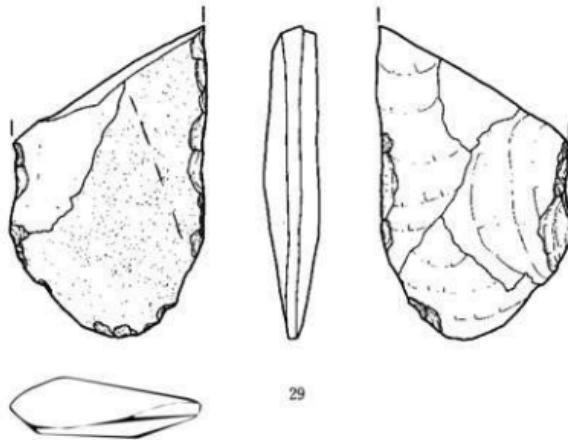
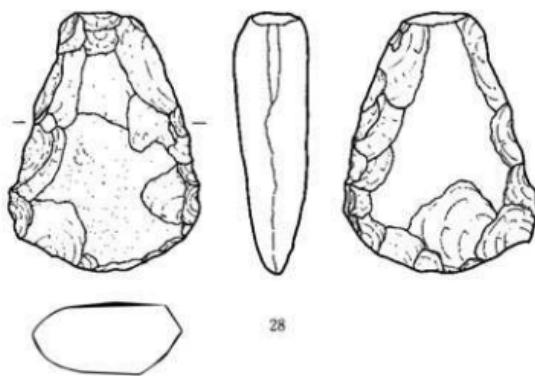
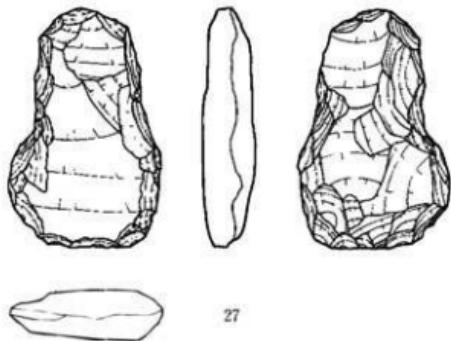
とほぼ同一であるが、縦位方向に若干のねじれが認められる。表面には研磨による線状痕が顕著に認められる。また、刃部には両端とも使用痕が認められると同時に、研磨による線状痕は不明瞭となっている。使用痕として認められるのは、若干の刃こぼれの他、使用に伴う斜位の線状痕である。一端は特に顕著であり、一端はやや不鮮明ではあるが、研磨による線状痕が摩滅していることなども使用されたことを物語っている。石材は粘板岩である。

刃部を片方に有する、いわゆる片刃石斧は21～25である。いずれも欠損品で、全貌を把握し得るものは皆無であるが、23が基部欠損品で、他は刃部欠損品である。23は基部のためか、整形がやや雑である。他の4点については刃部の形状により2種に大別できる。I 刀部先端が直線的で幅が広いもの、II 刀部先端が丸く尖がるもの、であり、Iに属するものは22、24、IIに属するものは21、25である。24のみ若干の刃こぼれがあり、使用痕が認められる。25は全体に丸味を帯びた形状を呈しているが、他はいずれも扁平な形状を呈している。石材は21が粘板岩、22、23、25が砂岩、24がチャートである。



0 5cm

図129 石器実測図(3)



0 5cm

図130 石器実測図(4)

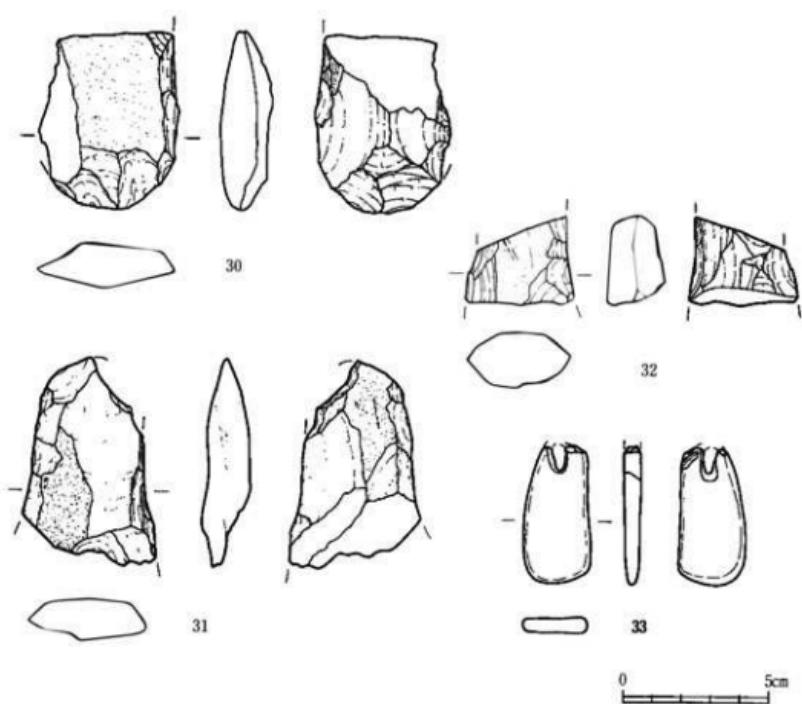


図131 石器実測図(5)

### 3. 打製石斧 (図129~131、表106、図版36)

統計 7 点で、26~32が相当する。形状により、(1)短冊形、(2)撥形、(3)分銅形に分類できるが、欠損品が多く、不明なものもある。

(1)に相当するものは26、29、30である。26は片面に大きく自然面を残すが、刃部に相当する部分については、先端から側面に至るまで鋭角に調整が施されている。29は全体に扁平な形状を呈する。片面に大きく自然面を残すが、刃部に相当する部分については細かな調整が施されている。しかしながら、26のように必ずしも鋭角ではなく、丸味を持っていることが特徴と言えよう。30は刃部欠損品で扁平な形状を呈する。石材はいずれも砂岩である。

(2)に相当するものは28のみである。扁平な形状を呈しており、片面に大きく自然面を残す。周辺部は全体に調整が施されており、特に刃部については鋭角に仕上げられている。また一部タガネ痕が認められることから、整作時に刃部幅約 2 cm のタガネ状工具が用いられたことが推察できる。石材は砂岩である。

(3)に相当するものは27、31、32である。27は完形品で、刃部先端は直線的である。刃部を中心として周辺は調整が施されているが、I、II類に比べると鋭さに欠ける。31、32は欠損品であるため、不明瞭な点が多いが、いずれも基部である。石材は27が珪質粘板岩、31が砂岩、32が泥岩である。

#### 4. 垂飾石製品（図131、表106、図版33）

1点のみ出土しており、33が相当する。

全体に扁平な形状を呈している。研磨の痕跡が認められず、自然礫をそのまま利用したものと考えられるが、裏面の穿孔部脇に切り込み痕が認められることや上端残存部の状況より上端部のみ切断していることが窺い知れる。

穿孔は表裏面より施されており、2か所にわたって穿孔することによって細長い孔を形成している。上端部はかなり薄く造られていたような状況を呈しており、このために欠損したものであろう。

石材は滑石である。

## 第4章 ま　と　め

### 第1節 遺構について

当遺跡において、早期、中期、後期に比定される遺構を検出したが、その他隣接する権現後遺跡をはじめとする萱田地区遺跡群内において、白幡前遺跡の陥し穴状土壤を除いて、縄文時代に比定される遺構の存在は確認されていない。

この状況は立地的な観点からも現われており、ヲサル山遺跡が権現後遺跡とともに標高約24mを計る台地上に立地するのに対して、他の遺跡は標高10~20mを計る段丘上に立地している。また、権現後遺跡とは同一台地上となっているが、遺構の分布には片寄りが認められる。両遺跡とも南側には東西に伸びる須久茂谷津を望むが、権現後遺跡が印旛沼より注ぐ新川に面しているのに対して、ヲサル山遺跡はやや奥まったところに位置している。こうした状況も、当該期の遺構の分布状況に影響を与えた要因の1つであろう。ヲサル山遺跡が居住空間として捉えられるのに対し、権現後遺跡は他要素の空間として捉えていく必要があろう。

また、各時期ごとにみても、立地等特徴的な状況が認められる。以下、時期別にまとめてみたい。

## 1. 早期

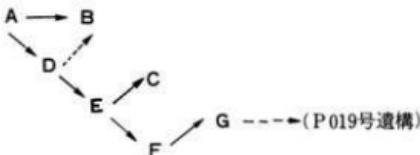
早期に比定される遺構としては、炉穴跡と陥し穴状土壙がある。

炉穴跡は19基確認でき、さらに調査区域外に遺構が存在する可能性があることは先述したとおりである。いずれも定形化した形態とは言えないが、おおむね楕円形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれるのが一般的であるが、P011号、P020A号、P020B号、P020C号遺構のように火床部に続く壁がオーバーハングしているものや、P012B号遺構のように掘り抜きの煙道部を有するものも存在する。特にP020B号については、オーバーハングというよりもむしろ壁を大きく抉って火床部を形成しているにもかかわらず、煙道を有していないという状況が見られ、明らかに構造上の違いを指摘することができよう。

構造としては、いずれも火床部が設定されていることが大きな特徴である。一段高くなっているものと、一段低くなっているものとがあるが、いずれも焼土が堆積し、さらに壁に熱を受けた形跡の認められるものもある。これはいわゆる「炉」部と称されており、楕円形の平面形の内、長径方向のどちらか一方に位置しているのが通常である。これに対して、焼土の検出されない、熱を受けた形跡の認められない部分を、いわゆる「足場」と称している。当遺跡検出例において、足場に相当する箇所に踏み固められた形跡の認められるものは皆無である。

炉穴跡は重複して検出される例が多いが、当遺跡においても例外ではなく、19基中13基を占めている。従来、炉穴跡の重複の規則性について言われているが、当遺跡においてこの点については当てはまらない。重複する遺構の主軸に規則性は認められず、また「炉」あるいは「足場」を共有したと考えられる例もない。タイプ別に分類すると、(1)重複しないもの、(2)前遺構埋没後に重複して構築されるもの、(3)前遺構埋没前に重複して構築されるもの、が挙げられる。(1)はP011・013・016・017・022・023号遺構である。(2)はP009・010号遺構、P012A・012B号遺構、P014・015号遺構でいずれも2基の重複である。(3)はP019・020号遺構で、埋没前に次々と構築されている。

P019・020号遺構は、



の順で構築されている。おおむね北から南そして西へと展開している状況が認められ、短期間に造り替えられたものである。

以上、(1)、(2)と(3)とは明らかに様相を異としていると言えよう。

また、強いて規則性を指摘するならば、主軸の方向性に若干の傾向が見い出せる。P009～016

号遺構の一群について見るならば、P010・012A・016号遺構とP009・015号遺構がそれぞれ同一の主軸方向を有する。「炉」部の配置についても、前者は北側、後者は南側に配する。これが即同時性を示すものとは断定できないが、可能性は高いと言えよう。

## 2. 中期

中期に比定される遺構としては、竪穴住居跡、竪穴状遺構、土壙がある。これらの中には遺物が稀少で、明確な時期を決定し得ない遺構もあり、すべてを同一時期の所産に断定することはできない。

竪穴住居跡は一軒で、弥生時代後期の竪穴住居跡に約半分を切断されているため、全容は明確にできない。また、包含層における遺物の分布状況を考慮すると、他に当台地上に当該期の竪穴住居跡は存在しないと考えられる。出土遺物はいずれも覆土中からの出土であり、阿玉台式土器と加曾利E式土器が見られるが、前者が大半を占めており、遺構近隣に阿玉台式土器の分布が多く認められることから、阿玉台式期の可能性が大であろう。ただし、詳細な時期については不明である。

竪穴状遺構は2基検出した。1基については出土遺物が皆無であり時期は不明であるが、遺構周辺において阿玉台式あるいは加曾利E式等中期の土器の分布が見られたこと等により、中期に包括した。他の1基であるD028号遺構はやや特異な状況を呈している。床面に堅緻な部分が認められるものの、炉、柱穴等の施設はなく、竪穴住居跡として断定するには検証資料に欠く。また、遺物の出土状況は床面上からの出土は皆無であり、すべて覆土中、しかもII層からの出土である。また、壁際での出土はほとんど見られず、中央部を中心として出土している。以上の状況より埋没過程における廃棄活動と見ることができ、「吹上パターン」に類似すると捉えることが可能である。「吹上パターン」は完形もしくは完形に近い土器の廃棄を示すに対し、D028号遺構からは完形に近く復元し得る土器は皆無であるという相違点があるものの、遺構の窪みを利用した土器の廃棄活動という観点から見れば同一に扱って差し支えないと思われる。出土土器はいずれも阿玉台式で、若干古い様相を呈するものが含まれるもの、大半がII式に比定されるものである。従って、当遺構は阿玉台II式期以前で比較的近接した時期の所産であろう。

土壙は1基である。P025号遺構で小規模なものだが、土器の一括した出土が認められる。本来中央に直立して置かれていたものが転倒したと考えられるが、火の使用を想定できる状況は認められず、また墓壙として捉えるにも積極的な状況は認められない。類例を待って検討したい。時期は出土土器により阿玉台II式期に比定できる。

D028号遺構とP025号遺構は阿玉台II式期で、ほぼ同時期の所産であろう。他遺構については詳細は不明で、中期のすべての遺構が同一時期とは言えないようである。しかしながら、遺

物の分布状況から加曾利E式期あるいは阿玉台式期に小規模ながら生活空間として当台地上が占地されていたことは明確となった。

### 3. 後期

後期に比定される遺構は、竪穴住居跡のみである。

竪穴住居跡を3軒検出したが、いずれも台地南側縁辺部に位置しており、斜面部上端から平坦部にかけて検出した。台地中央平坦部では一軒の検出もなく、また、南側は急斜面となっているため、遺構が存在する可能性はまずないと言ってよかろう。従って、3軒をもって当遺跡における後期遺構のすべてを把握したことになる。しかしながら、3軒がすべて同時期の所産であるとするには疑問が残るところである。

まず、配置から2グループに分類可能である。D037号、D038号遺構とD039号遺構である。D037号とD038号遺構は台地南側縁辺部の内最先端部に位置しており、同時存在が可能な距離を保って近接して存在する。D039号遺構はそれらとは約100m距離を置いて存在し、単独の感がある。

これは構造上からも指摘することが可能である。D039号遺構は遺存部が2分の1以下のため、構造を充分に明確にできないが、柱穴に相当すると思われるピットを計4個（推定8個）検出している。それに比べ、D037号遺構、D038号遺構は炉以外柱穴等の施設を持たない。炉についても、D039号遺構の遺存状況が悪いため存在の有無すら不明と言わざるを得ないが、D037号遺構、D038号遺構は共通点を指摘することができる。いずれも同一の構築方法をとっており、焼土塊の状況により使用期間もほぼ同一であることが想定できる。

遺物に関しては概して出土量が少ないとから、断定は避けねばならないが、D037号遺構より堀之内式土器が伴出するのに対し、D039号遺構からは加曾利B式土器の破片が出土する。ただし、後者については出土状況等によっても遺構に関わる時期の所産か否か疑問の残るところである。

以上の状況により、D037号、D038号遺構とD039号遺構とは若干時期が異なる可能性があることを指摘しておこう。

#### 註

1 町田市田中谷戸遺跡調査会「町田市・田中谷戸遺跡」 昭和51年

## 第2節 遺物について

遺物は土器をはじめとし、土製品、石器が数多く出土している。

土製品はすべて土器片を再利用した土器片鍾であり、土製品を含めた土器の出土量が大多数を占めている。また、石器はそのほとんどが縄文期以外の遺構あるいはグリッドの出土であり、帰属する時期は不明なものが多い。

### 1. 土 器

遺構に伴って出土するものと、遺構外より出土するものとがあるが、遺構外出土が大多数を占める。いずれも完形に近く復元し得た土器は極めて少なく、大部分が小破片という状況である。

早期から晩期にわたって各期の土器の出土が認められるが、早期、中期、後期が主体を成しており、遺構の分布と一致する状況を示している。完形のものを含めて概要の知り得る土器はすべて早期、中期、後期に比定されるものであり、前期、晩期に比定される土器はいずれも小破片である。

時期別に、権現後遺跡との対比を行いながらみていいくことにする。

#### a. 早期

燃糸文系土器、沈線文系土器、条痕文系土器がそれぞれ出土するが、燃糸文系土器、沈線文系土器はわずかに小片が出土したのみであり、遺構の伴う条痕文系土器が主体を成している。燃糸文系土器としては井草Ⅰ式、井草Ⅱ式、沈線文系土器としては田戸上層式、条痕文系土器としては鶴ガ島台式、茅山式の他、上の山式あるいは入海Ⅰ式に比定されるものがある。<sup>註1</sup> 遺構に伴う土器については広義の茅山式に比定されるものだが、大部分が条痕文によってのみ構成されており、具体的な時期決定を行う資料に欠ける。唯一良好な資料として、P009号遺構における出土土器があげられる。条痕文の他、口唇部直下に角押文が施されるものであり、鶴ガ島台式に比定されよう。遺構に関してはいずれも近接した時期の所産と考えられることから、他の条痕文によってのみ構成される土器についても、鶴ガ島台式もしくは茅山下層式に比定される可能性が大である。

以上、ヲサル山遺跡においては茅山式を中心とする条痕文系土器が主体を成しているが、それに対して権現後遺跡においては井草式・夏島式・稻荷台式等燃糸文系土器が主体を成している。ヲサル山遺跡において条痕文系土器を伴う炉穴跡を多数検出したことも考え併せると、ヲサル山遺跡が条痕文系期に生活空間として占地されていたのに対し、権現後遺跡は燃糸文系期に生活空間として占地されていたと言えよう。いずれにしても、燃糸文系期の遺構は検出して

おらず、従属的な状況である。

b. 前期

全体の中で占める量はわずかであり、遺構の存在も認められない。黒浜式土器と浮島式土器があるが、いずれも小破片であり、全体の器形を把握し得るものは皆無である。特に黒浜式土器と称した一群は、器面の状態も悪く不明瞭である。

権現後遺跡においても黒浜式土器と浮島式土器を出土するが、総じて量は少ない状況である。両遺跡ともこの期においては生活空間の中で従属的な位置を占めていると言えるが、ヲサル山遺跡が相対的にやや多く出土している点だけ指摘しておきたい。

c. 中期

全体の66.1%を占める出土量を示しており、当遺跡において主体を成す時期である。類別すると、五領ヶ台式、勝坂式、阿玉台式、中峠式、加曾利E式の土器があり、中期全般にわたっている。しかしながら、五領ヶ台式、勝坂式、中峠式は各1点ずつの出土であり、大半は阿玉台式に比定されるものである。検出した中期の遺構も、時期不明を除きいずれも阿玉台式期に比定されるものであり、中期の中でも最も盛行した時期と言えよう。

特筆すべきは、図114-1の舟形鉢形土器で、片口状の注口部を有する土器である。類例がなく、時期等検討するに堪えない状況であるが、類似資料として県内においては阿玉台貝塚、県外では青森県石神遺跡、三内遺跡、山形県百々山遺跡、牧野遺跡などに散見できる。阿玉台貝塚出土資料は写真による限りでは、輪積痕が一部認められ、口唇部に刻目を有する。また、当遺跡出土例の注口部下端には脛を有するが、これに類似した脛が阿玉台貝塚出土例にも認められる。しかしながら、注口あるいは片口状は呈していないようである。石神遺跡出土資料は舟形の器形を呈する浅鉢形土器である。その内2点は円筒下層a式に比定されており、舟形鉢形土器の初見になると考えられる。しかも、1点については一端が片口となっている点も見逃せない特徴である。また、三内遺跡においては把手を有する舟形鉢形土器が見られる。円筒上層a式及びb式に比定されているもので、この時期には確実に舟形鉢形土器に把手が付されていたことが認められる。なお、把手とともに片口も認められ、注口の形状は呈していないものの、当遺跡出土例にきわめて類似した形態のものも見い出せる。さらに東北地方南部にあたる百々山遺跡あるいは牧野遺跡に舟形鉢形土器が見られる。やはり注口部は有さないが、百々山遺跡出土例では把手を付している。いずれも大木7b式に比定されている。

以上概観を探ってみたが、千葉県近隣の各県での出土例が見い出せないため、積極的な検討は出来ない状況である。しかしながら、諸類例により当遺跡出土例は阿玉台式の中でも比較的古手に位置づけられるのではないかと推察したい。

#### d. 後期

中期に次ぐ土器の出土量で、全体の25.8%を占める。堀之内式土器、加曾利B式土器、安行式土器の他、粗製土器も多く認められるが、特に、堀之内式土器が主体を成しており、遺構の検出状況と一致する。粗製土器については、具体的な所属時期を明らかにすることはできなかった。

当遺跡が堀之内式土器を主体とするのに対し、権現後遺跡は加曾利B式土器を主体とする。堀之内式期に関しては当遺跡において遺構を検出しているため居住空間としての位置づけが可能となるが、加曾利B式期に関しては両遺跡とも遺構を検出できなかつたため、生活空間の一部としては認められるものの、居住空間は他地域に求めなければならない。

#### e. 晩期

小破片がわずかに2点出土したのみである。燃糸文により構成され、頸部に括れを有する。粗製土器で、千綱式に比定されるものだが、荒海貝塚において類似する資料が見い出せる。

なお、権現後遺跡においては皆無である。

## 2. 土製品

土製品として認められるのは土器片錐のみであり、74点出土する。

土器片の利用に際しては、いずれも深鉢形土器と思われるが、これは当時の社会において深鉢形土器の占める割合が圧倒的に多かったための現象であろう。部位は底部を除き認められるが、これは底部に相当する箇所が全体から見ると少ないと、意味があり他に比べ加工しにくいことに起因していると思われる。また、厚いことにより重量の問題もあったとも考えられるが、これは土器片錐の性格にも関わることなので早急な結論は避けたい。また、隆帯の有無等文様に関しては特に傾向は認められない。ただ、隆帯を有する場合、側面の刻痕を結ぶ線上にあたる箇所に刻目を入れるものも少なからず存在する。

整形も雑なものから丁寧なものまで認め

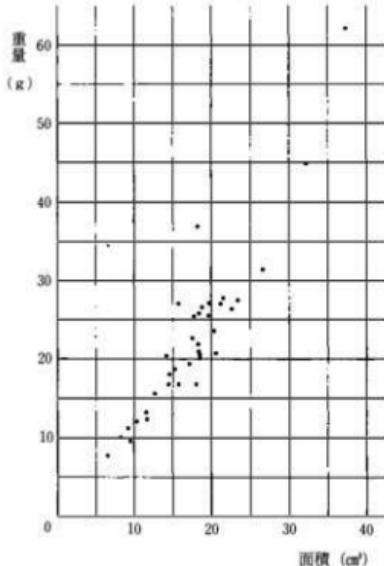


図132 土器片錐計測値分布図

られるが、4か所に刻痕を有するものは、絶じて丁寧な整形が成されていると言える。ただし、出土例が少ないため、これが一般的な傾向であるとは断定し難い。

最後に、土器片錐を考えるのに最も重要な要素に成り得ると考えられる重量の問題について若干触れておこう。

今回出土したものは、最大で62.0g、最小で6.2gと、10：1の大差がついている。したがって、重量が土器片錐の絶対的な条件とは言えないが、少なくとも傾向としては捉えられそうである。図132に示したように15.0～30.0gにおよそ集中しており、相対的にみて大形の破片を利用したものは極端に少なくなる。この状況より、土器片選択の際大形破片は避けたか、あるいは割断して使用したことが窺い知れよう。

### 3. 石 器

石器として石鎌、磨製石斧、打製石斧、石製品として垂飾品が出土する。量的には石鎌が最も多く、遺存状況が比較的良好なものも石鎌であるが、土器に比べると圧倒的に少ない状況である。また、土器に比べると形式変化に乏しく、明確な時期決定は困難となっている。

分布状況は、両刃石斧を除きM-10-00を中心として集中する傾向が認められる。石鎌はその性格上必ずしも居住空間に存在するとは限らないが、ある程度集中的に出土したこと等を考慮すると、時期的には石斧等とほぼ同一であると考えて差し支えなかろう。また、阿玉台式土器の分布とほぼ重複していることが指摘できる。

両刃石斧は、従来独鉛石として理解されることが往々にしてあったが、当遺跡出土例を見るに明らかに両端に刃部を形成しており、実用品としての性格を有していたことが明らかであり、石斧として捉えるものである。本例は使用痕の状況により「縁斧」<sup>註9</sup>と考えられ、時期的には後期に出現し、晩期に盛行すると言われるが、当遺跡からは晩期に比定される遺物は小片が2点出土したのみであり、また台地南側縁辺部に展開する後期堀之内式期の集落に近接して出土していることなどから、後期の所産であると考えられよう。

なお、類例として新潟県三仏生遺跡の出土例が見い出せるが、刃部が薄く鋭利に造られている点や中央部に括れを有していない点、また塗料の付着により祭祀性を有していると考えられる点等相違点も認められる。また、茨城県小山台貝塚出土の資料も類似するが、刃部の形状に大きな相違が認められる。いずれも同類としては扱い難いものである。

#### 註

1 a 我孫子昭二「子母口式土器の再検討—清水柳遺跡第2群土器の検討を中心として—」『東京考古』

1 昭和57年

b 「シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題 記録・論考集」『神奈川考古』第18号 昭

- 和59年
- 2 永峯光一編『縄文土器大成2 中期』 昭和56年
- 3 江坂輝弥編『石神遺跡』 昭和45年
- 4 註2と同じ
- 5 村山市史編纂委員会『村山市史』別巻1 原始・古代編 昭和57年
- 6 註5と同じ
- 7 西村正衛『石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として—』 昭和59年
- 8 a 佐原 真「石斧論—横斧から縱斧へ—」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集—』 昭和52年
- b 佐原 真「石斧再論」『森貢次郎博士古稀記念古文化論集』 昭和57年
- 9 中村孝三郎『越後の石器』 昭和53年
- 10 図書刊行会『小山台貝塚』 昭和51年

### 第III部 弥生・古墳時代

## 第1章 弥生・古墳時代の概観

権現後遺跡における弥生時代第IV群が弥生時代終末から古墳時代初頭の過渡期であったよう、ヲサル山遺跡における集落も弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落が展開している。本来ならば弥生時代と古墳時代を分離して記載しなければならないところであるが、集落の移行過程が認識できるため、あえて分離せず過渡期の様相を理解しようとした試みの結果である。

弥生時代終末から古墳時代初頭に移行する集落の内容は堅穴住居跡、方形周溝墓、ビットがある。遺構群は権現後遺跡の集落と不可分の関係が集落の分布状況から把握できるところであるが、須久茂谷津に直交する小支谷によって地形的な自然環境は分離されるものと考えてよい。この小支谷は須久茂谷津の沖積地と台地を結ぶ重要な位置を占めていると考えられ、ヲサル山遺跡における集落の立地に大きな影響を与えている。権現後遺跡においては台地縁辺部を中心にして集落が大きく展開しているのに対して、ヲサル山遺跡においては小支谷の最奥部より北側の台地平坦部に集落が展開していることからも推察できよう。弥生時代終末の様相を呈する遺構群を第I群、古墳時代初頭の様相を呈する遺構群を第II群として便宜上捉え、報告したい。

## 第2章 遺構と出土遺物

### 第1節 はじめに

弥生時代終末から古墳時代初頭の過渡期に比定される遺構は、堅穴住居跡34軒、方形周溝墓3基、土壙1基である。

これらの遺構群をもって集落全体を把握したものではなく、同一台地上東側に位置する権現後遺跡と不可分の関係を呈する集落である。特に権現後遺跡における弥生時代第IV群とは時代的にも同一であり、小支谷を介しているとはいえ切り離して考えることのできない遺構群として捉えなくてはならない。

住居跡群の中には方形周溝墓が存在しており、「居住域」と「墓域」との有機的関係が認められる集落の様相を呈しているといえる。その他土壙の存在も充分に考慮しなくてはならない集落構造である。

## 第2節 第I群の遺構と遺物

既に指摘したように弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて連続的な集落の変遷が捉えられることから、弥生時代と古墳時代を分離して捉えることは不可能であるため、出土遺物、平面プラン、内部構造等総合的な所見に基づいて、弥生時代終末の様相を呈する遺構群を第I群とした。

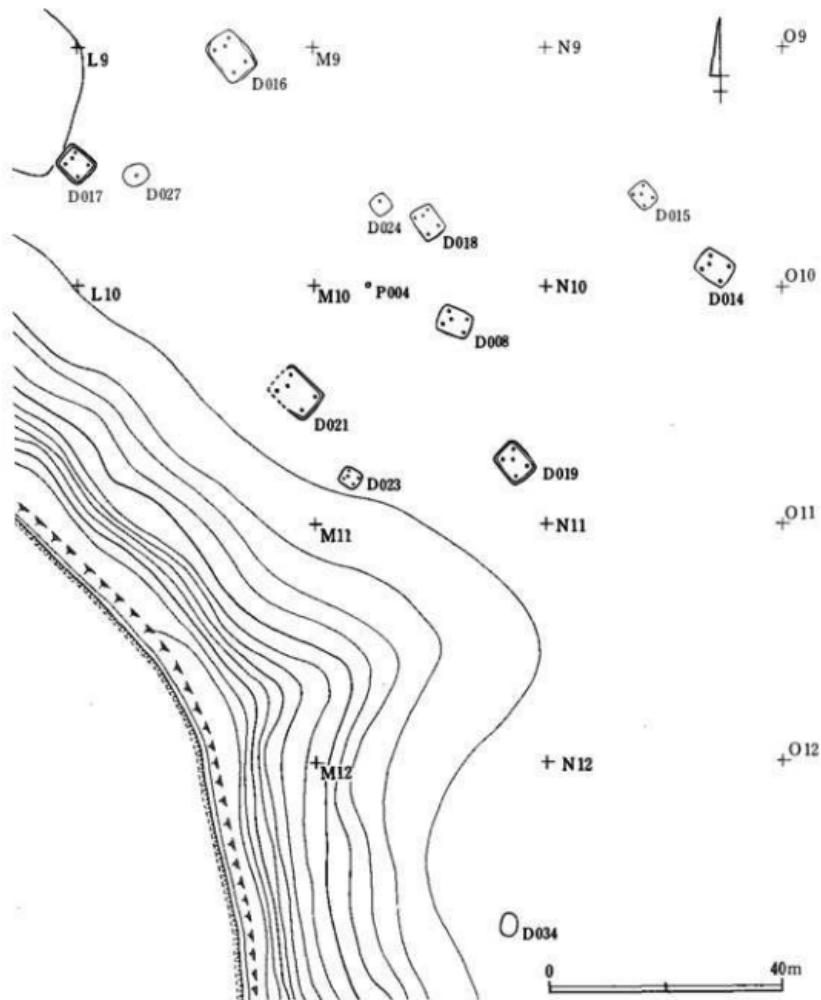


図133 弥生・古墳時代第I群遺構分布状況図

第I群に属する遺構は、竪穴住居跡12軒、土壙1基である（図133）。

総じて第II群よりも北側に位置しており、部分的に重なっている権現後遺跡における弥生時代第IV群Aとした集落と不可分の関係にある。

遺構の分布状況は台地中央部より西側の谷津に寄って位置しており、12軒の住居をもって完結した群として捉えて良いであろう。

### 1. D008号遺構（図134～136、図版37、42）

第I群の住居群においてほぼ中央に位置し、D018号遺構に近接する。

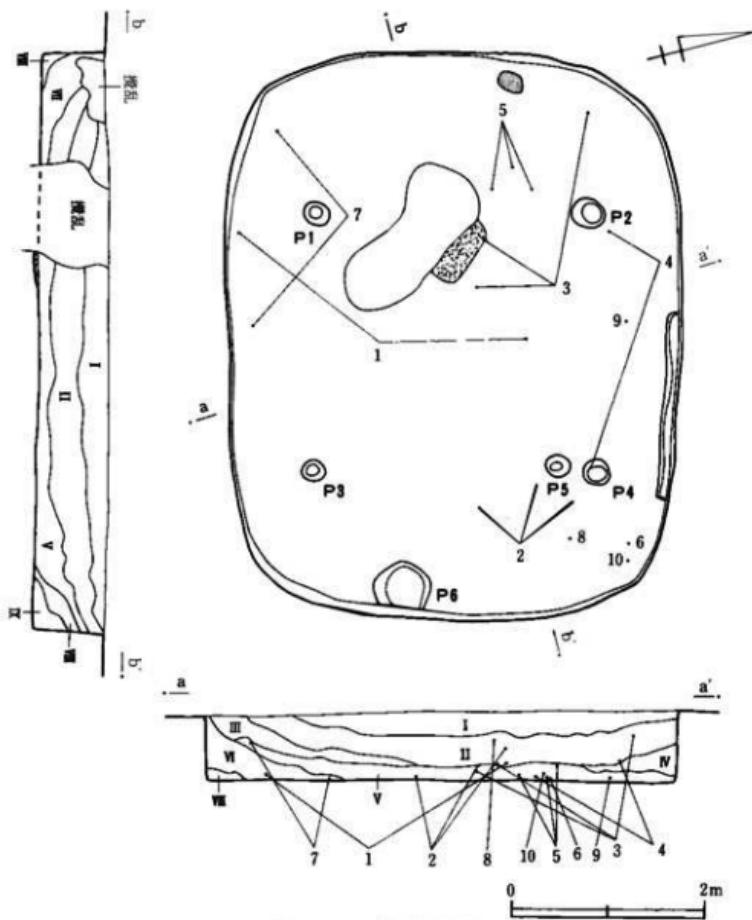


図134 D008号遺構実測図

**遺構** 東壁4.25m、北壁5.46mで隅丸長方形の平面形を呈する堅穴住居跡である。壁は垂直に0.70m掘り込んで床面に達する。北壁中央部直下にのみ幅0.14m、深さ0.03mの壁溝が認められる。床面は全体に非常に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置するP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を検出した。径は平均0.25m、深さ平均0.56mを計る。

その他ピットは、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>を検出した。P<sub>5</sub>は主柱穴P<sub>4</sub>の補助的なもの、P<sub>6</sub>は貯蔵穴と考えられる。

**炉** P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を結ぶ中間点よりやや南寄りに位置する。一部擾乱を受けているため、規模は正確に把握できないが、長径0.73mを計る楕円形を呈するものと思われる。

厚さ0.07mの焼土が堆積する。

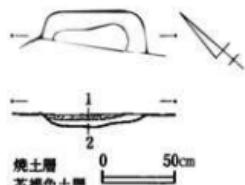


図135 D008号遺構炉跡実測図

**遺物出土状況** I層ローム粒混入黒褐色土層、II層ロームブロック混入黒褐色土層、III層茶褐色土層、IV層焼土粒混入茶褐色土層、V層黒褐色土層、VI層ロームブロック混入茶褐色土層、VII層暗茶褐色土層、VIII層茶褐色土層、IX層明茶褐色土層が堆積する。遺物は南東コーナー部を除きほぼ全面にわたり出土している。床面直上を中心として出土しているが、完形もしくはそれに近い個体は皆無である。

**出土遺物** 遺物は甕、壺形土器と石製品がある。甕形土器は1～7である。1は「く」字状に外反する口縁部を有する。2～4及び7は輪積痕を残し、2、3、7は1段の輪積痕下端に竹管による刺突が、4は2段以上の輪積痕が認められる。5、6は胸部及び底部の破片である。壺形土器は8、9である。8は折り返し口縁で、折り返し部には羽状繩文帯及び下端に繩文原体による押圧痕が認められる。9は胸部破片で、上方は附加状繩文、下方は鋸歯状沈線文が施され、沈線により区切られている。鋸歯状沈線文下には赤彩が認められる。10は敲石で、使用

D008出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		高	口径	底径			投入物	焼成色	調	
1	甕	—	15.6	—	底部欠損	ハケ目	砂粒	堅	黒色 内面茶褐色	二次焼成痕
2	甕	—	—	7.0	口縁部欠損	S字状輪筋文 羽状繩文 及L字形繩文	砂粒	堅	黒褐色	二次焼成痕
3	甕	—	—	—	胸部破片	ヘラナデ S字状輪筋文	砂粒	堅	黒褐色	二次焼成痕
4	甕	—	—	—	胸部砂片	ヘラナデ 輪積痕	砂粒、石英	堅	茶褐色	
5	甕	—	—	—	胸部破片	ヘラナデ	砂粒	堅	茶褐色	
6	甕	—	—	6.5	底部破片	外面ヘラナデ 内面ヘラケズリ	砂粒	堅	黒褐色	二次焼成痕
7	甕	—	—	—	胸部破片	ハケ目	砂粒	堅	茶褐色	
8	壺	—	—	—	口縁部破片	羽状繩文	砂粒、長石	堅	淡茶褐色	
9	壺	—	—	—	胸部破片	附加状繩文 山形状繩文	砂粒	堅	淡茶褐色	一部赤彩

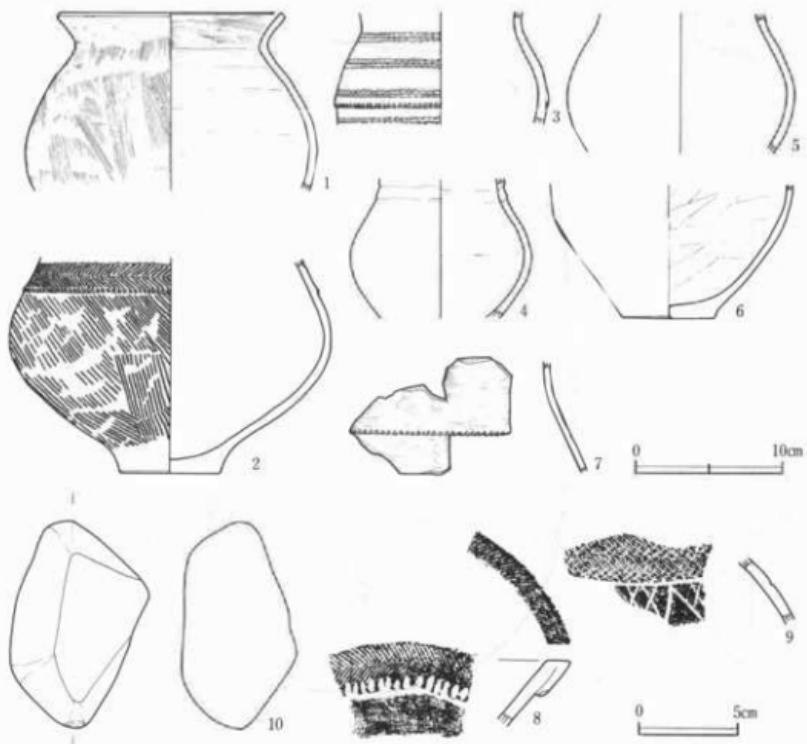


図136 D008号遺構出土遺物実測図

痕が認められる。

## 2. D014号遺構 (図137~139、図版37、42)

第1群の住居群において最も東側に位置し、D015号遺構に近接する。

遺構 北壁4.25m、東壁6.12mで梢円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.64m掘り込んで床面に達する。床面は全体に非常に堅緻な状況を呈する。柱穴はほぼ対角線上に位置するP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>及びP<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>間のやや南側に位置するP<sub>5</sub>を検出した。径0.32~0.48m、深さ0.41~0.58mを計る。P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>についてはP<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>に付随する柱穴と考えられる。その他南壁に近接してP<sub>8</sub>を検出し、径0.77m、深さ0.10mを計る。また、P<sub>8</sub>の東側において若干の焼土を検出した。壁溝は検出できなかった。

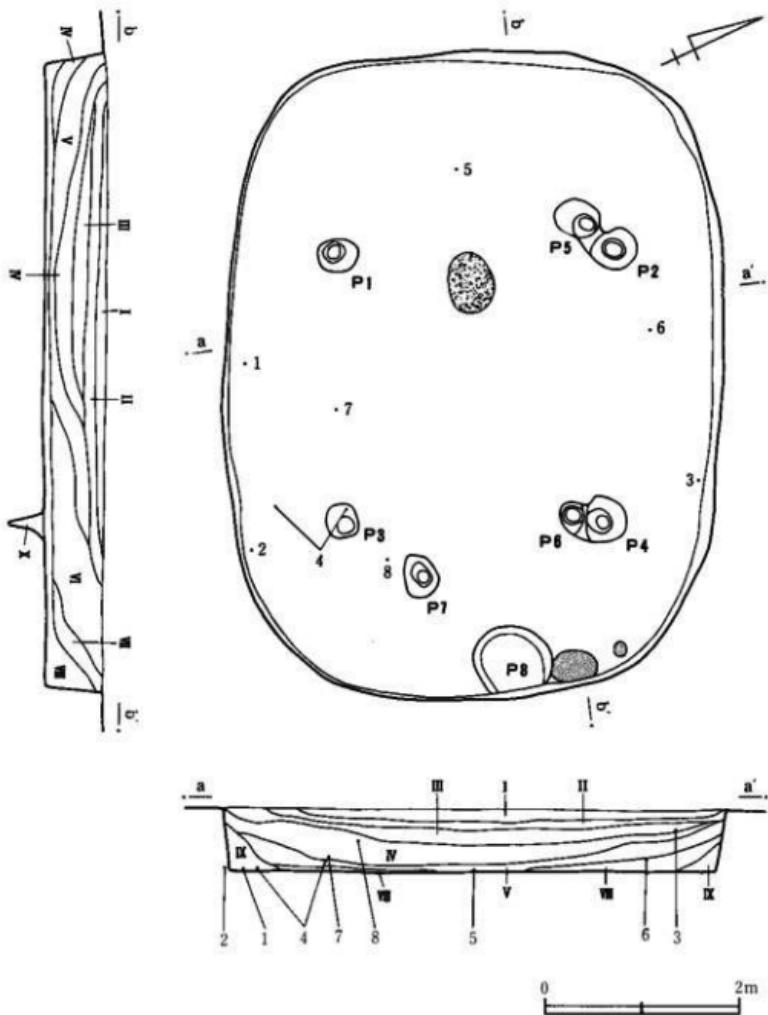


図137 D014号遺構実測図

**炉** P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を結ぶ中間点よりやや南寄りに位置する。長径0.63m、短径0.47m、深さ0.15mを計り、厚さ0.06mの焼土が堆積する。火床部は明白に熱変している。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層黒色土層、III層暗茶褐色土層、IV層ローム粒混入黒色土層、V層ローム粒混入暗茶褐色土層、VI層暗褐色土層、VII層ロームブロック混入黒褐色土層、

VII層ローム粒混入暗褐色土層、IX層明茶褐色土層、X層ローム粒混入黒褐色土層が堆積する。遺物は量的にはそれほど多くなく、床面上及びV層を中心として出土する。

**出土遺物** 遺物は台付甕、甕、壺形土器と石製品がある。台付甕形土器は3の台部破片である。甕形土器は1、2、4～6である。

1、2は底部～胴部破片、4は口縁部破片で

折り返し口縁を呈する。5、6は胴部破片で、いずれも輪積痕を残し、6は輪積痕下端に竹管による刺突が認められる。壺形土器は7で、頸部が急激に窄まる形状を呈する。8は凝灰岩製の砥石で、両端を欠く。



図138 D014号遺構炉跡実測図

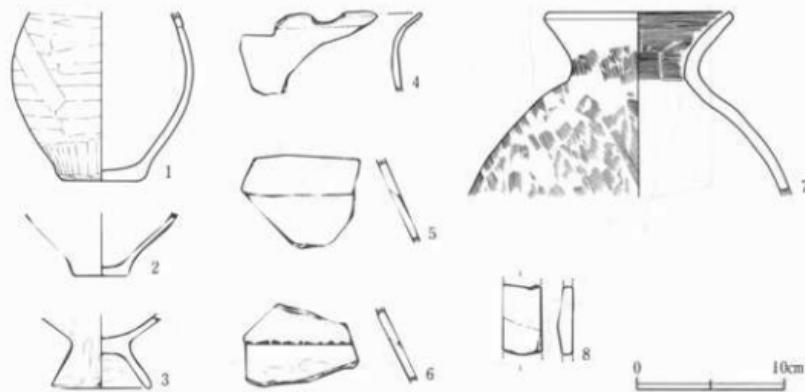


図139 D014号遺構出土遺物実測図

#### D014出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	5.8	口縁部欠損 輪積痕	ヘラ削り 輪積痕	砂粒、石英	堅	黒褐色	
2	甕	—	—	3.9	底部のみ	ヘラナゲ	砂粒	堅	黒褐色	
3	台付甕	—	—	6.8	台部のみ	ヘラ削り	砂粒、石英	堅	茶褐色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナゲ	砂粒	堅	黒褐色	二次燒成痕
5	甕	—	—	—	胴部破片	輪積痕	砂粒、長石	堅	茶褐色	
6	甕	—	—	—	胴部破片	ナゲ	砂粒	堅	黒褐色	竹管による刺突
7	壺	—	—	13.0	胴上半部	ハケ目の後一部ヘラ 削き	砂粒、石英	堅	茶褐色	

### 3. D015号遺構 (図140、141、図版37)

第I群の住居群において東側に位置し、D014号遺構に近接する。遺構に伴う遺物は皆無で、遺物の検討から時期を判断することはできない。

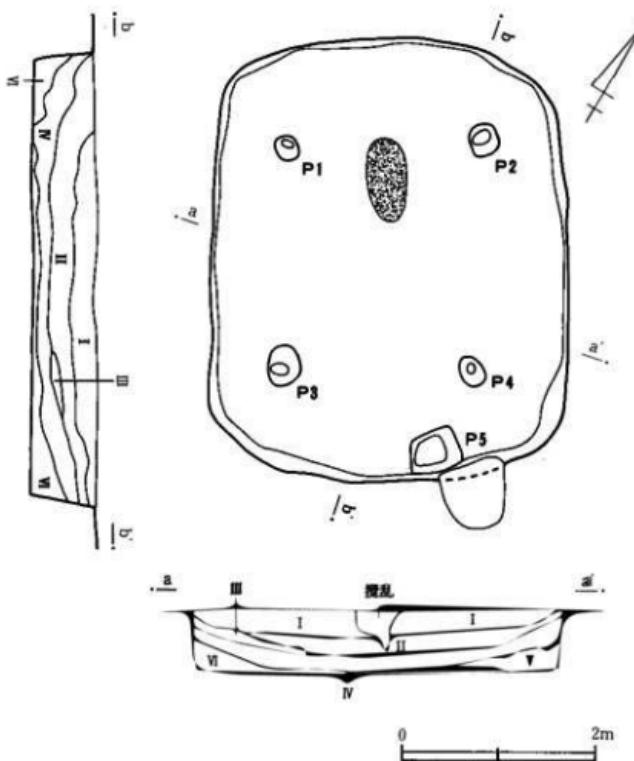


図140 D015号遺構実測図

**遺構** 北壁3.20m、東壁3.80mで胴張隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.68m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置するP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を検出し、径0.26～0.39m、深さ0.49～0.55mを計る。その他ピットは南壁直下にP<sub>5</sub>を検出し、径0.50m、深さ0.13mを計る。壁溝は検出できなかった。

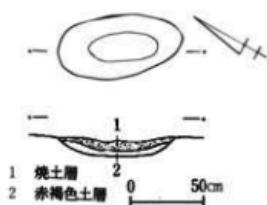


図141 D015号遺構炉跡実測図

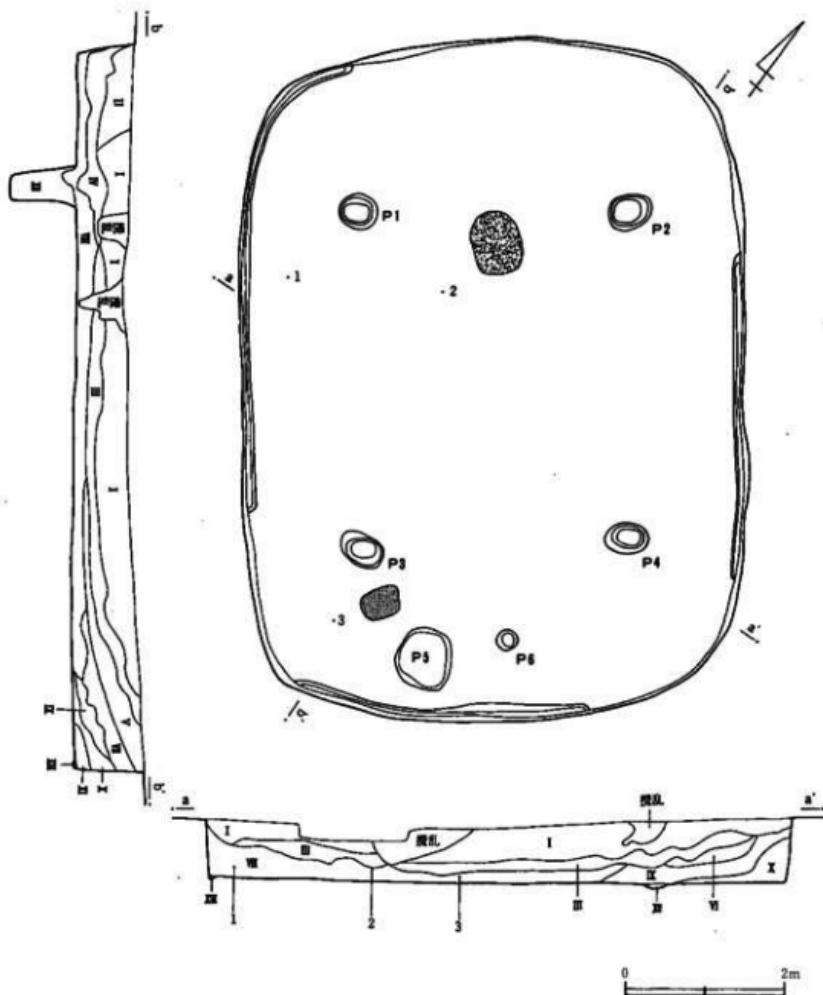


图142 D016号遗构实测图

**炉**  $P_1$ と $P_2$ を結ぶ中間点よりやや南寄りに位置する。長径0.85m、短径0.41m、深さ0.10mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積する。火床部は明白白色で熱変している。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層茶褐色土層、III層暗茶褐色土層、IV層ローム粒混入黒褐色土層、V層ロームブロック混入黒褐色土層、VI層黄褐色土層が堆積する。遺物は覆土中より壺胴部の小片がわずか1点出土したのみで、図示可能なものはない。

#### 4. D016号遺構（図142～144、図版38）

第I群の住居群において最も北側に位置し、D027号遺構に接する。

**遺構** 北壁5.75m、東壁7.76mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.80m掘り込んでおり、北壁を除く壁直下の一部に幅0.15m、深さ0.04mの壁溝が認められる。床面は炉周辺部を中心として堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置する $P_1$ ～ $P_4$ を検出した。径0.45～0.50m、深さ0.80～0.93mを計る。いずれも二段に掘り込まれたものである。その他ピットは南壁に近接して $P_5$ 、 $P_6$ を検出し、それぞれ径0.75m、0.27m、深さ0.13m、0.14mを計る。 $P_3$ 、 $P_5$ 間に若干の焼土を検出し、床面も火の影響を受けた状況が認められる。

**炉**  $P_1$ と $P_2$ を結ぶ中間点よりやや南寄りに位置する。長径0.75m、短径0.61m、深さ0.11mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積する。火床部は明白白色で熱変している。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層ロームブロック混入暗茶褐色土層、III層黒色土層、IV層茶褐色土層、V層ローム粒混入黒褐色土層、VI層ロームブロック混入黒褐色土層、VII層ローム粒混入茶褐色土層、VIII層暗茶褐色土層、IX層ロームブロック層、X層ローム粒混入暗茶褐色土層、XI層ロームブロック混入明茶褐色土層、XII層ロームブロック混入茶褐色土層、XIII層明茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少でVII層を中心として出土する。

**出土遺物** 遺物は壺形土器と石製品がある。壺形土器は1、2で、1は底部破片、2は内面に輪積痕が残る。3は安山岩製磨石で、使用痕が認められる。

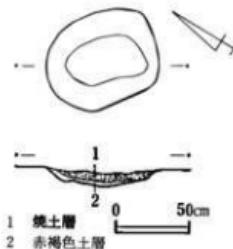


図143 D016号遺構炉跡実測図

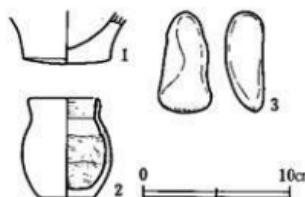


図144 D016号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		器高	口径	底径			流入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	6.0	底部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅	淡茶褐色	
2	壺	6.8	5.0	3.8	略完形	ヘラ磨き	砂粒、貝石	やや軟弱	茶褐色	

## 5. D017号遺構(図145~147、図版38)

第I群の住居群において北側に位置し、D027号遺構に近接する。

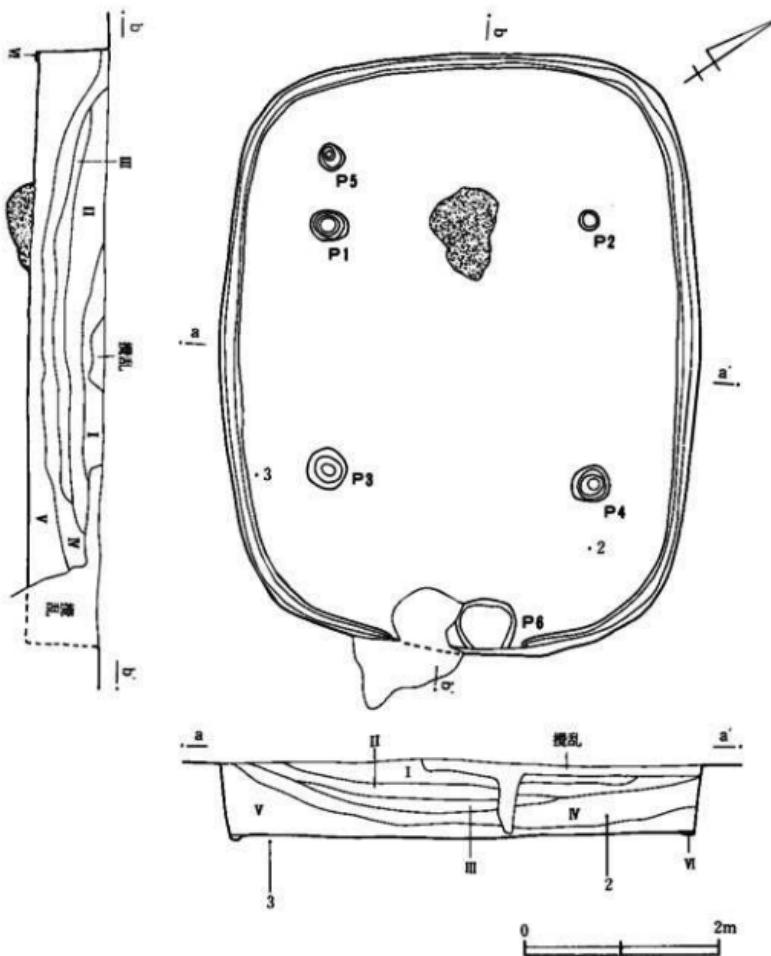


図145 D017号遺構実測図

**遺構** 北壁4.60m、東壁5.90mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.68m掘り込んでおり、直下には幅0.15m、深さ0.04mの壁溝が南壁中央部分を除いて認められる。床面は中央部及び南西コーナー部を中心として堅緻な状況を呈している。柱穴はほぼ対角線上に配置するP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を検出した。P<sub>2</sub>を除き二段に掘り込まれており、径0.22～0.41m、深さ0.40～0.65mを計る。その他ピットはP<sub>1</sub>の北側に近接してP<sub>5</sub>、南壁中央部直下にP<sub>6</sub>を検出した。それぞれ径0.28m、0.62m、深さ0.21m、0.11mを計る。

**炉** P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を結ぶ間に位置する。長径0.90m、短径0.55m、深さ0.27mを計り、やや不整形を呈している。厚さ0.07mの焼土が堆積する。火床部は明白に熱変している。

**遺物出土状況** I層黒色土層、II層ローム粒混入暗茶褐色土層、III層ロームブロック混入黑色土層、IV層暗茶褐色土層、V層茶褐色土層、VI層明茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少で、ほとんどが覆土中に散在する状況である。

**出土遺物** 遺物は甕、壺形土器と石製品である。甕形土器は1で、胴部破片である。2段以上の輪積痕を残す。壺形土器は2で、口縁部破片である。口唇部にR L繩文を施す。3は石器で、用途は不明だがくさび形を呈する。

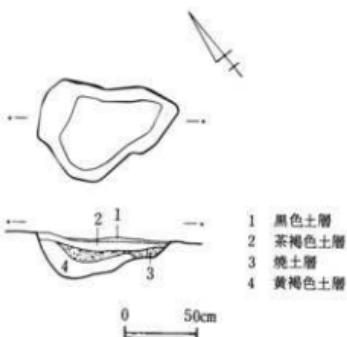


図146 D017号遺構炉跡実測図

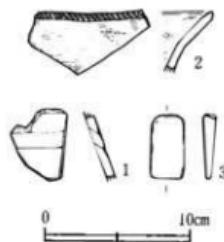


図147 D017号遺構出土遺物実測図

#### D017出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			進存度	調整	胎土			備考
		幅	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部破片	輪積痕	砂粒、雲母	堅緻	茶褐色	
2	壺	—	—	—	口縁部破片	R L繩文	砂粒	堅緻	茶褐色	

## 6. D018号遺構 (図148~150、図版38、42)

第I群の住居群においてほぼ中央に位置し、D024号遺構に近接する。

遺構 北壁4.60m、東壁4.80mでやや胴張りの隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.57m掘り込んで床面に達している。床面は中央部を中心として、堅致な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置するP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>及び南北列ほぼ中央に配置するP<sub>8</sub>～P<sub>10</sub>を検出した。P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>は径0.23～0.26m、深さ約0.47mを計り、P<sub>2</sub>、P<sub>6</sub>は深さ約0.70

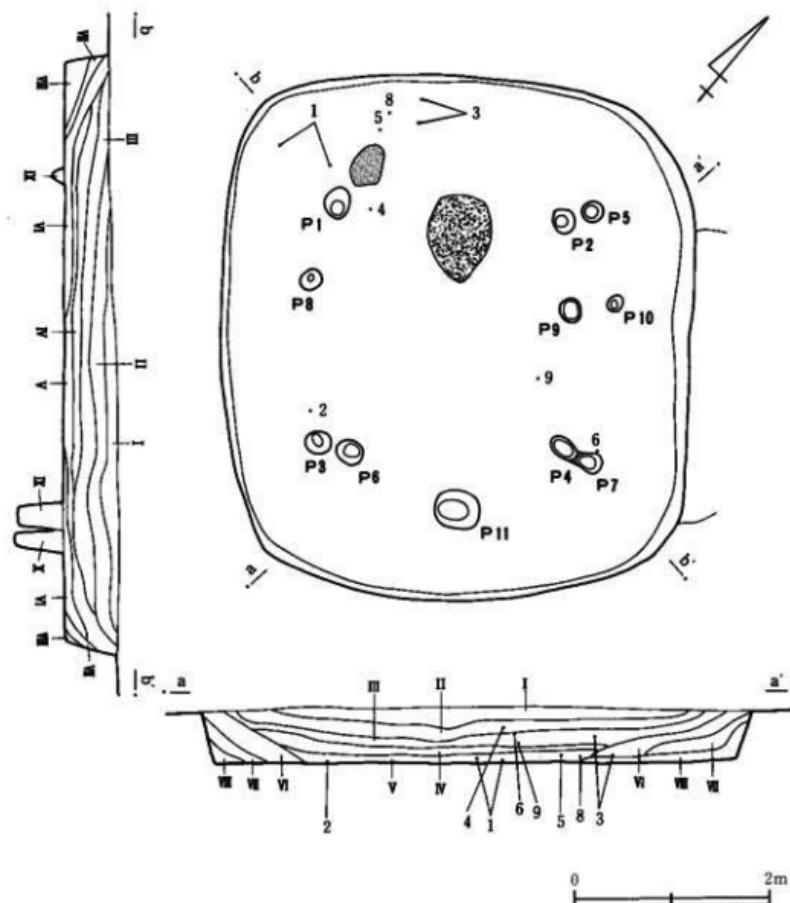


図148 D018号遺構実測図

mを計る。P<sub>8</sub>～P<sub>10</sub>は径0.18～0.23m、深さ0.21～0.29mを計る。配置、規模等の検討により、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は主柱穴、P<sub>8</sub>～P<sub>10</sub>は補助的な柱穴として考えられる。その他ピットは南壁中央部に近接してP<sub>11</sub>を検出し、径0.48m、深さ0.20mを計る。

**炉** P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>を結ぶ中間点に位置する。長径0.89m、短径0.65m、深さ0.24mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積する。火床部は固く熱変している。

**遺物出土状況** I層黒色土層、II層褐色土層、III層ロームブロック混入黒褐色土層、IV層ローム粒混入黒色土層、V層暗褐色土層、VI層ローム粒混入暗褐色土層、VII層黒褐色土層、VIII層明茶褐色土層、IX層ローム粒混入茶褐色土層、X層ロームブロック混入茶褐色土層が堆積する。遺物は小破片が多く、III層以下を中心として出土する。柱穴付近に比較点多く出土する傾向が認められる。

**出土遺物** 遺物は甕、壺、器台、高坏形土器がある。甕形土器は1～6である。1、2はいずれも口縁部欠損で、1は附加条繩文を施し、2は同じ形状であるが文様はない。3～5は口縁部破片で、3、4は口唇部に押捺を加えて波状を呈する。6は台付甕形土器の台部破片で小形である。壺形土器は9で胴部破片である。外面無文の部分には赤彩が施される。器台形土器は7で、受部のみである。折り返し口縁で、口唇部には繩文の施文が認められる。高坏形土器は8の坏部のみである。



図149 D018号遺構跡実測図

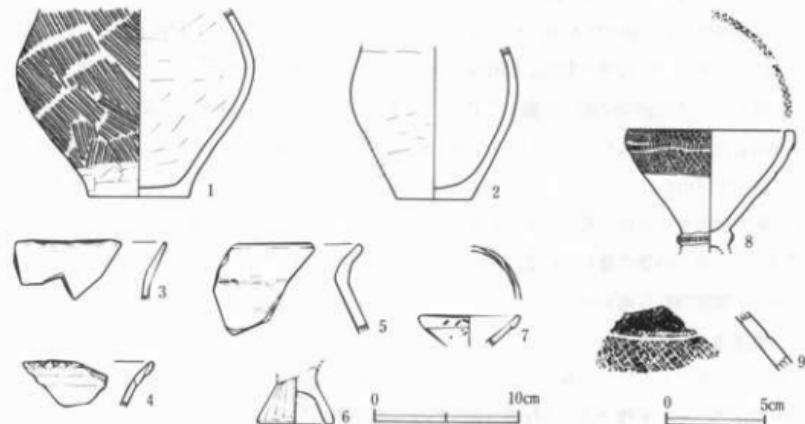


図150 D018号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)			造存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	7.0	口縁部欠損	附加施文 ヘラ削り	砂粒、雲母	堅緻	黒褐色	
2	甕	—	—	5.2	口縁部欠損	ヘラナデ	砂粒、雲母	堅緻	淡黒褐色	
3	甕	—	—	—	口縁部破片	ヨコナデ	砂粒	堅緻	黒褐色	
4	甕	—	—	—	口縁部破片	ナデ	砂粒、石英	堅緻	黒褐色	
5	甕	—	—	—	口縁部破片	ハケ目	砂粒、石英	堅緻	黒褐色	
6	台付甕	—	—	5.3	台部のみ	ヘラ削り	砂粒、石英	堅緻	淡茶褐色	
7	籠台	—	7.1	—	受部のみ	ナデ、一部施文(附加 奈?)	砂粒	堅緻	茶褐色	
8	高坏	—	11.4	—	脚部欠損	ヘラミガキ? 附加施文	砂粒、石英、 貝石	堅緻	淡茶褐色	
9	釜	—	—	—	脚部破片	ヘラミガキ 網目擗捺系文	砂粒	堅緻	淡茶褐色	赤彩

## 7. D019号遺構 (図151~154、図版39)

D008、023号遺構に近接する。

遺構 北壁5.34m、東壁7.00mでやや胴張りの隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.70m掘り込んでおり、直下には幅0.16m、深さ0.05mの壁溝が南壁の一部を除いて認められる。床面は全体に堅緻な状況を呈するが、中央部及び南西部分において特に顯著である。柱穴は対角線上に配置するP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>と南北列ほぼ中央に配置するP<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>、さらにP<sub>8</sub>あるいはP<sub>4</sub>とP<sub>6</sub>、P<sub>5</sub>間をそれぞれ二分割するかのように配置するP<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>及びP<sub>10</sub>、P<sub>11</sub>を検出した。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は径平均0.38m、深さ0.75~0.84m、P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>は径平均0.32m、深さ平均0.52m、P<sub>7</sub>は径0.27m、深さ0.27m、P<sub>8</sub>~P<sub>11</sub>は径0.25~0.34m、深さ平均0.42mを計る。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴、P<sub>5</sub>~P<sub>11</sub>はその補助、間仕切りあるいはそれに類する施設のものとも考えられる。その他ピットは北壁中央部に近接してP<sub>12</sub>、P<sub>2</sub>~P<sub>7</sub>に近接してP<sub>13</sub>、南壁中央部に近接してP<sub>14</sub>を検出した。P<sub>12</sub>、P<sub>13</sub>はそれぞれ径0.27m、0.20m、深さ0.23m、0.24mを計り、P<sub>14</sub>は径0.63m、深さ0.16mを計る。P<sub>12</sub>、P<sub>13</sub>はいわゆる貯蔵穴として考えられよう。なお、床下精査の結果、新たに西壁中央部に接してP<sub>15</sub>を検出した。長径2.62m、短径1.34m、深さ0.94mを計り、東西方向に長く西壁に接している。P<sub>15</sub>の上部には貼り床を確認しており、土層観察によっても住居存続期間内には埋め戻されていたものである。したがって、当住居に付随する施設ではなく、他遺構として捉えた方が妥当であろう。

炉 住居中央よりやや北寄りに位置する。長径1.13m、短径0.58m、深さ0.10mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積する。火床部は固く熱変している。

遺物出土状況 I層ローム粒混入茶褐色土層、II層暗茶褐色土層、III層ロームブロック混入茶褐色土層、IV層ローム粒・ロームブロック混入明茶褐色土層、V層ローム粒混入黒褐色土層、

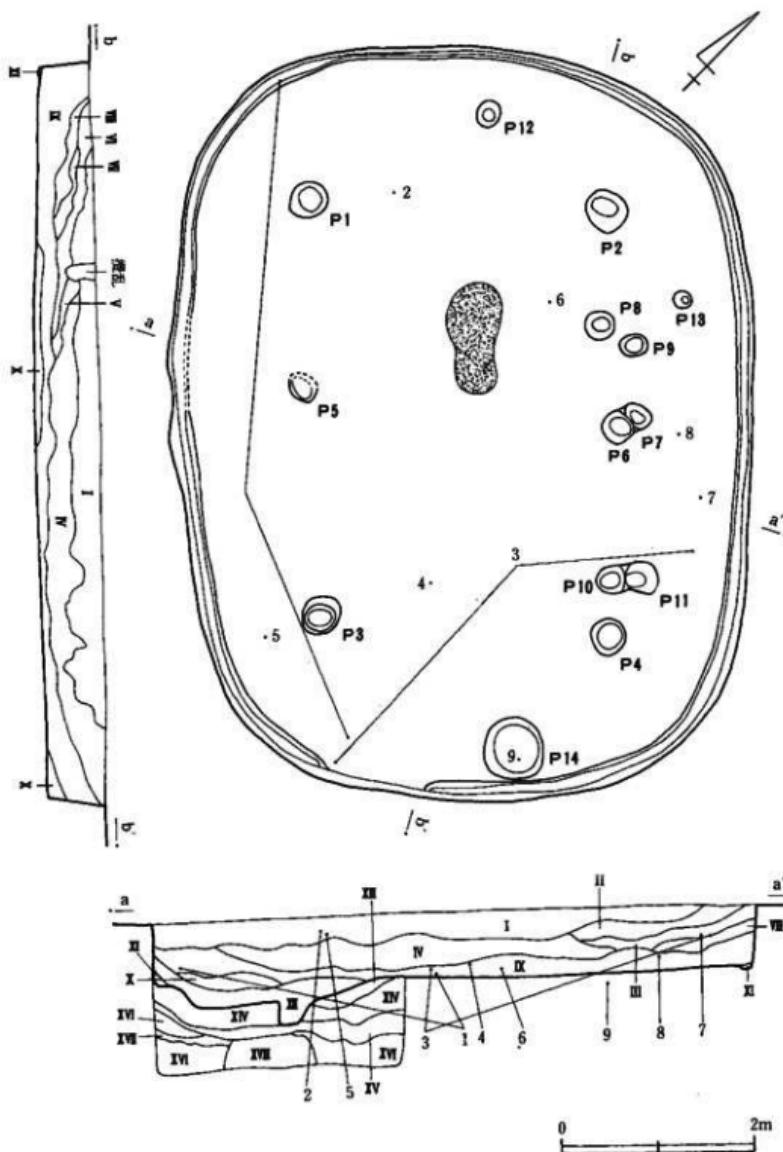


図151 D019号遺構実測図

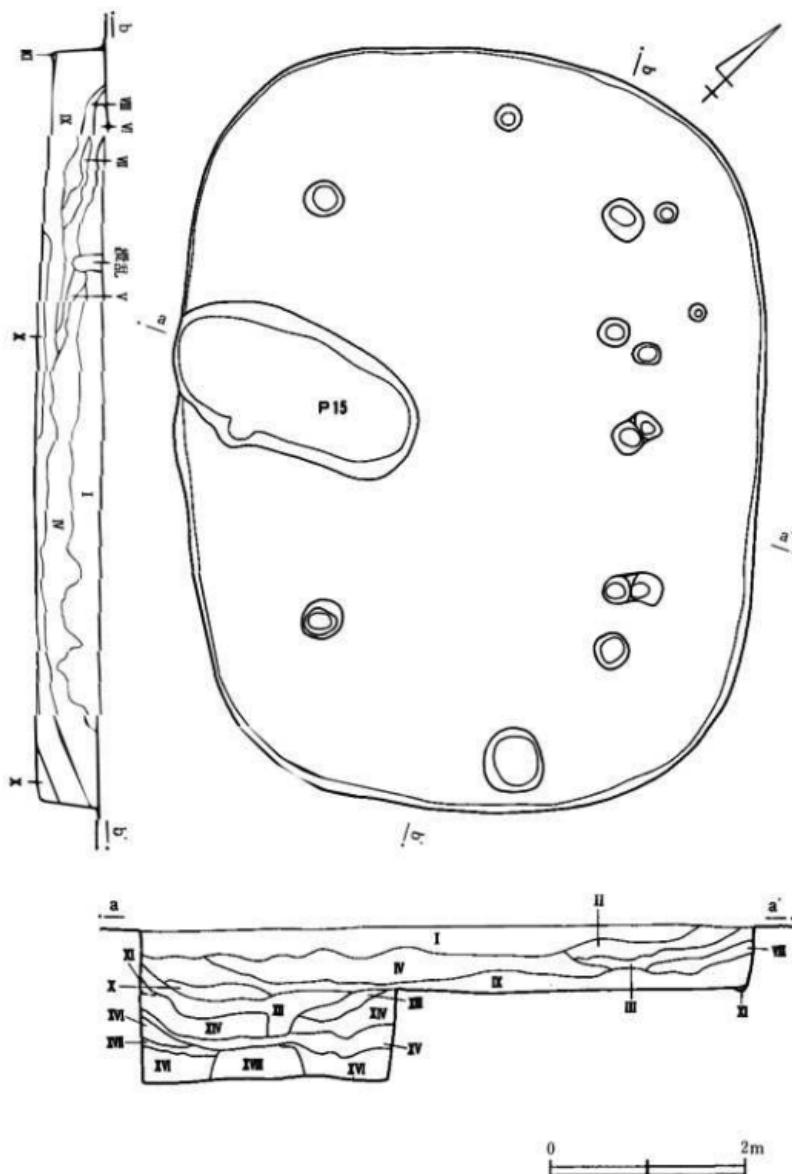


图152 D019号遗构床下状况图

VII層ローム粒・ロームブロック混入茶褐色土層、VII層黒褐色土層、VIII層茶褐色土層、IX層ローム粒混入暗茶褐色土層、X層ロームブロック混入明茶褐色土層、XI層明茶褐色土層、XII層ロームブロック混入暗茶褐色土層、XIII層ロームブロック混入黄褐色土層、XIV層黄褐色土層、XV層暗黄褐色土層、XVI層黒色土混入ロームブロック層、XVII層ロームブロック混入黒褐色土層、X層ロームブロック層が堆積する。遺物は床面上及びIX層出土を中心とするが、ほとんどが小破片であり、特に纏まつた出土傾向は認められない。

**出土遺物** 遺物は甕、壺、高坏形土器と石製品である。甕形土器は1～3で、1、2は胸部破片、3は底部破片である。1、2は輪積根を残す。壺形土器は4～6で、4、5は口縁部破片、6は胸部破片である。5は繩文施文部分を除き、赤彩が認められる。高坏形土器は7で、脚部破片である。端部は折り返しを呈し、繩文原体による押捺が認められる。8は凹石で、両面に凹部が認められる。9は形状より敲石と考えられるが、使用痕は認められない。

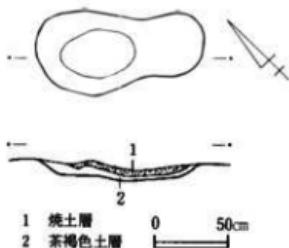


図153 D019号遺構炉跡実測図

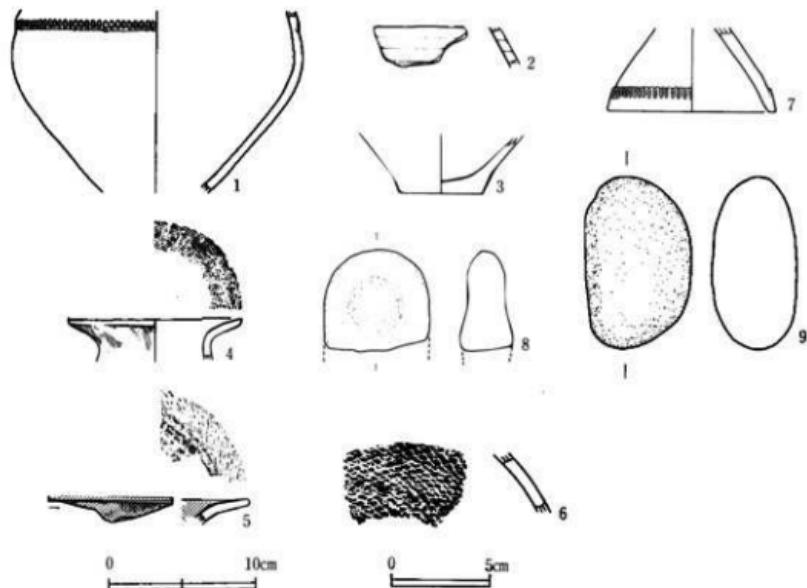


図154 D019号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	—	銅部のみ	ヘラナダ	砂粒、石英	堅緻	黒褐色	二次焼成痕
2	壺	—	—	—	銅部破片	軸腹痕	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	壺	—	—	5.7	底部のみ	ヘラナダ	砂粒	堅緻	外面茶褐色 内面黒色	
4	壺	—	11.8	—	口縁部のみ	ハケ目	砂粒	堅緻	茶褐色	
5	壺	—	—	—	口縁部破片	ハケ目の後ナダ	砂粒	堅緻	淡茶褐色	赤彩
6	壺	—	—	—	銅部破片	網目模様文	砂粒、白色粒	堅緻	淡茶褐色	
7	壺	—	—	11.5	銅部のみ	ヘラナダ	砂粒、白色粒	堅緻	淡茶褐色	

## 8. D021号遺構(図155~157、図版39)

第I群の住居群において西側に位置し、D023号遺構に近接する。

遺構 南壁5.80m、東壁7.38mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に掘り込んでおり、遺存状況が比較的良好な南壁部分で0.62mを計る。直下には幅0.15m、深さ0.02mの壁溝が認められるが、北西部では削平されているため確認できなかった。床面は残存部分では全体に堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置するP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>を検出し、径0.35~0.44m、深さ0.73~0.88mを計る。その他南壁中央部に近接してP<sub>5</sub>を検出し、径0.28m、深さ0.08mを計る。

炉 P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を結ぶ中間点よりやや南寄りに位置する。上部を削平されているため遺存状況は悪いが、径0.32m、深さ0.05mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積する。

遺物出土状況 I層ロームブロック混入茶褐色土層、II層黒褐色土層、III層茶褐色土層、IV層明茶褐色土層、V層暗茶褐色土層が堆積する。遺構の遺存状況が悪いこともあり、遺物は少

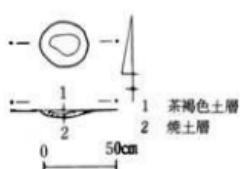


図155 D021号遺構炉跡実測図

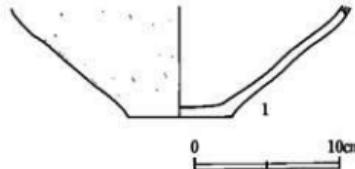


図156 D021号遺構出土遺物実測図

## D021出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	7.2	底部のみ	ヘラナダの後ヘラミガキ	砂粒、石英	堅緻	茶褐色	

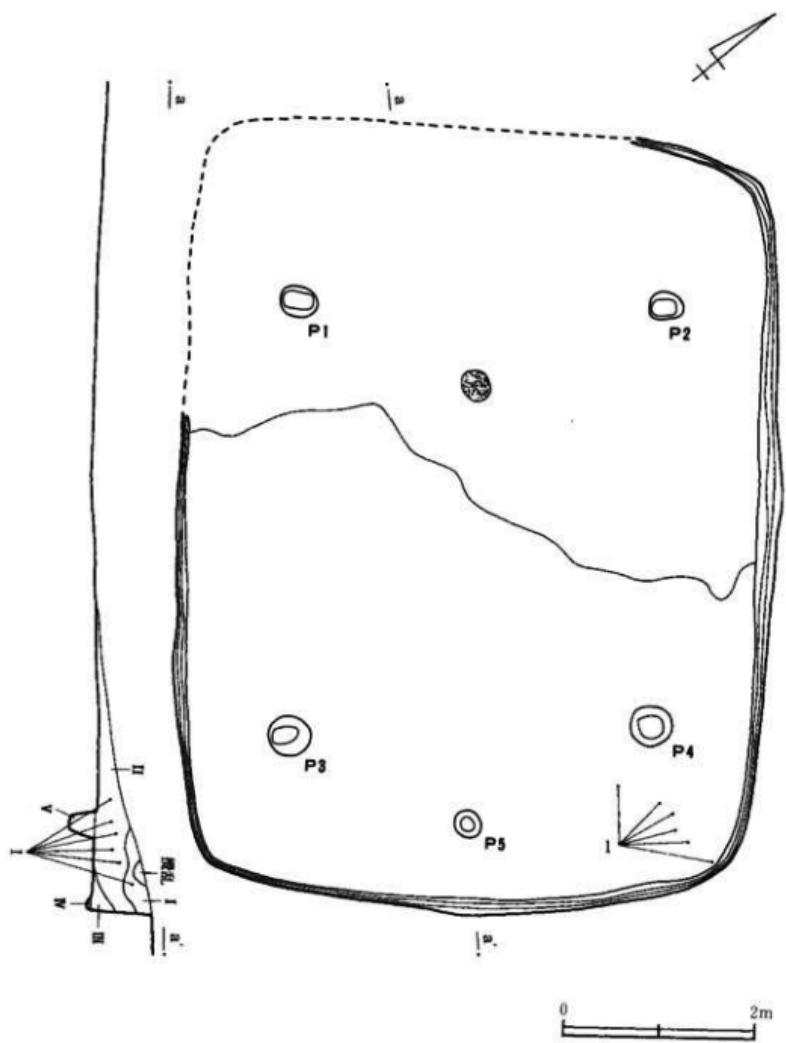


図157 D021号遺構実測図

なく、いずれも小破片である。

**出土遺物** 図示可能な遺物は1の壺形土器底部破片のみである。

9. D 023号遺構 (図158~160、図版40、42)

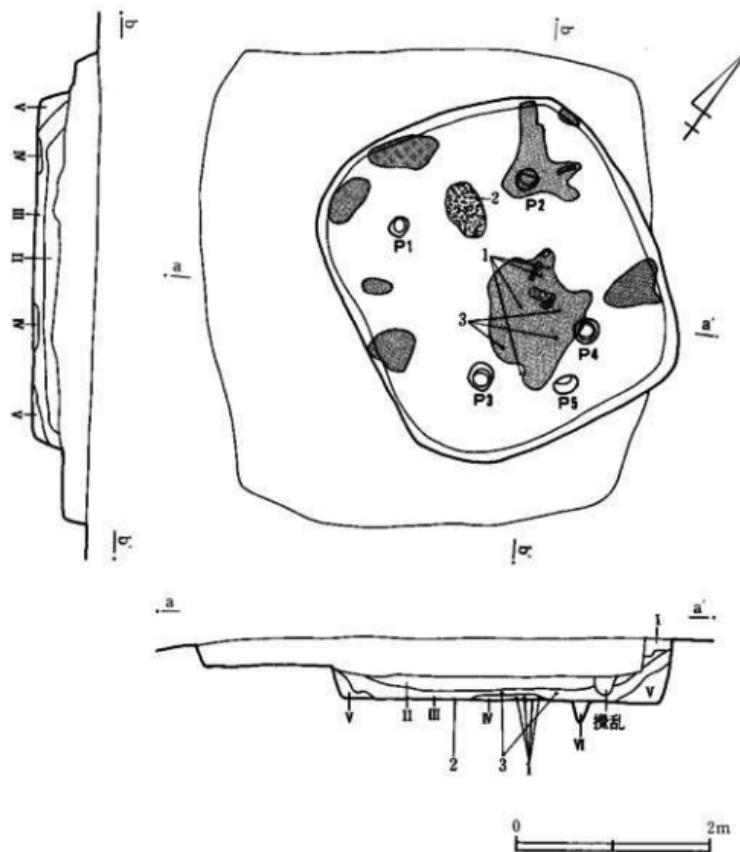


図158 D 023号遺構実測図

第Ⅰ群の住居群において西側に位置し、D 021号遺構に接する。D 022号遺構によって切られているため、完全に残存しているのは東壁コーナー部のみである。

**遺構** 北壁2.94m、東壁3.13mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.66m掘り込み、床面に達している。床面は中央部を中心として非常に堅緻な状況を呈している。床面上には多量の焼

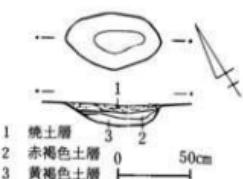


図159 D 023号遺構炉跡実測図

土に伴い、炭化物、炭化粒を多く検出した。住居全面にわたっていることなどから、焼失の際の所産として考えられる。柱穴は対角線上に配置する P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を検出し、径0.20～0.27m、深さ平均0.65mを計る。南列の柱穴P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>間はやや狭くなっている。その他南壁中央部に近接してP<sub>5</sub>を検出し、径0.17m、深さ0.19mを計る。南壁側から中央部に向って掘り込まれている。

**炉** P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を結ぶ間に位置する。長径0.65m、短径0.38m、深さ0.14mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積する。火床部は固く熱変している。

**遺物出土状況** I層ローム粒混入黒褐色土層、II層黒褐色土層、III層暗茶褐色土層、IV層黒色土層、V層明茶褐色土層、VI層茶褐色土層が堆積する。遺物は量的には少ないが、床面上を中心として出土している。

**出土遺物** 遺物は甕、壺、高坏形土器がある。甕形土器は1で、胴部破片である。壺形土器は2で、底部破片である。高坏形土器は3で脚部を欠損する。

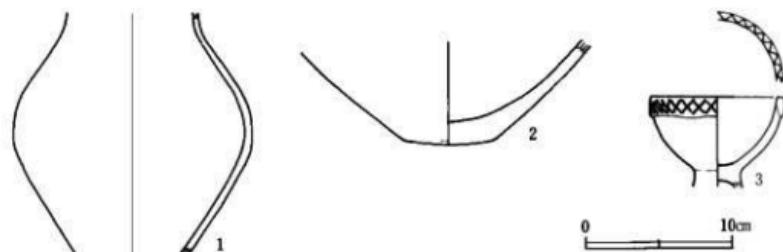


図160 D023号遺構出土遺物実測図

D023出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	胴部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅	淡黒褐色	
2	壺	—	—	6.0	底部のみ	ヘラナデ	砂粒、石英	堅	茶褐色	外表面摩耗
3	高坏	—	9.1	—	脚部欠損	ヘラ磨き 網目標様文	砂粒	堅	淡茶褐色	

#### 10. D024号遺構(図161、162、図版40)

D018号遺構に近接している。遺構に伴う遺物の出土が皆無であり、遺物により時期決定は不可能である。

**遺構** 北壁2.90m、東壁2.90mで丸味を帯びた胴張り隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡

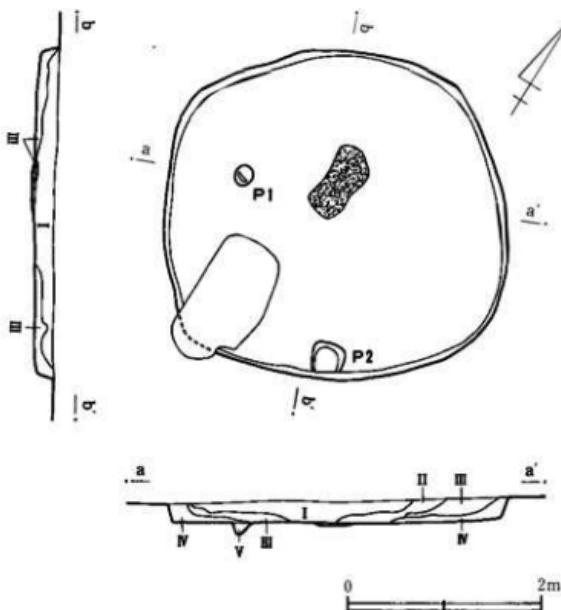


図161 D024号遺構実測図

である。壁はやや傾斜を呈して0.23m掘り込み床面に達する。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈する。ピットは西壁に近接してP<sub>1</sub>、南壁中央部に接してP<sub>2</sub>を検出し、それぞれ径0.20m、0.34m、深さ0.14m、0.13mを計る。P<sub>1</sub>は柱穴、P<sub>2</sub>は貯蔵穴と思われる。

**炉** 住居中央よりやや北寄りに位置する。長径0.77m、短径0.33m、深さ0.07mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積する。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層茶褐色土層、IV層ロームブロック混入黒褐色土層、V層黄褐色土層が堆積する。遺物は少なく、数点の出土があり、さらに小破片である。

#### 11. D027号遺構 (図163～165、図版40、42)

第I群の住居群において北側に位置し、D017号遺構に近接する。

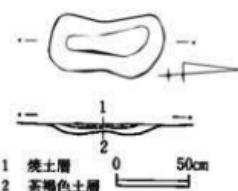


図162 D024号遺構炉跡実測図

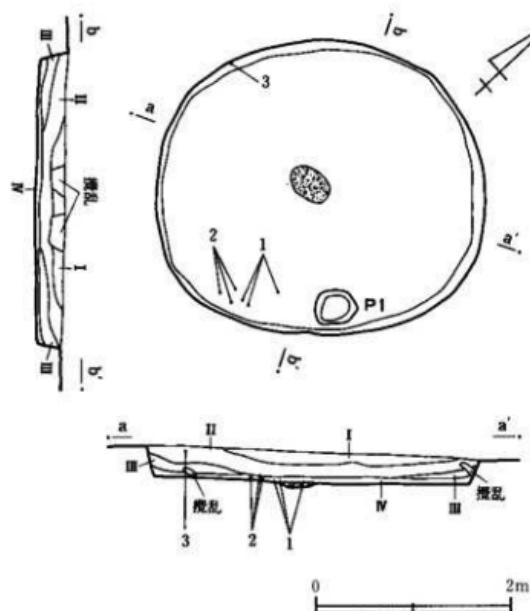


図163 D027号遺構実測図

**遺構** 東西3.36m、南北3.03mでやや角ばった円形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.30m掘り込み、床面に達する。床面は中央部では堅緻であるが、周辺部はやや軟弱である。ピットは南壁に近接してPIを検出し、径0.42m、深さ0.10mを計る。柱穴、壁溝は検出できなかった。

**炉** 住居はほぼ中央部に位置する。長径0.44m、短径0.30m、深さ0.07mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積する。火床部は明白に熱変している。

**遺物出土状況** I層暗茶褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層黒褐色土層、IV層ローム粒混入暗茶褐色土層が堆積する。遺物の出土は稀少であるが、南壁に近接した床面上より繩った出土が認められる。

**出土遺物** 遺物は甕、壺形土器である。甕形土器は1、2で、1は底部欠損、2は底部破片である。壺形土器は3の底部破片である。

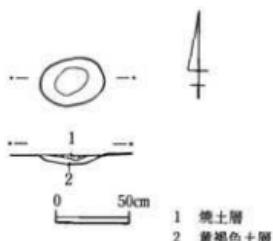


図164 D027号遺構炉跡実測図

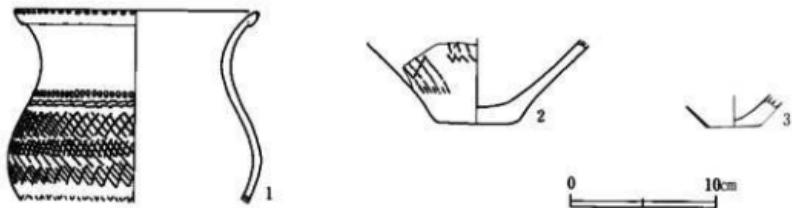


図165 D027号遺構出土遺物実測図

D027出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			造存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	16.8	—	壺上半部	附加条縞文 S字状筋節文	砂粒	堅緻	黒褐色	二次焼成痕
2	壺	—	—	6.0	底部のみ	附加条縞文	砂粒	堅緻	黒褐色	
3	壺	—	—	3.8	底部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	茶褐色	

#### 12. D034号遺構 (図166、図版41)

第I群の住居群において最も南側に位置しており、他とはやや距離を置いて存在する。D019号遺構が最も近接するが、70m以上離れている。なお、遺構に伴う遺物は皆無であり、遺物による時期決定は不可能である。

遺構 長径3.46m、短径2.94mで楕円形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.15m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱で、またやや擂鉢状に中央部が深い状況が認められる。壁溝、柱穴、炉等の施設は検出で

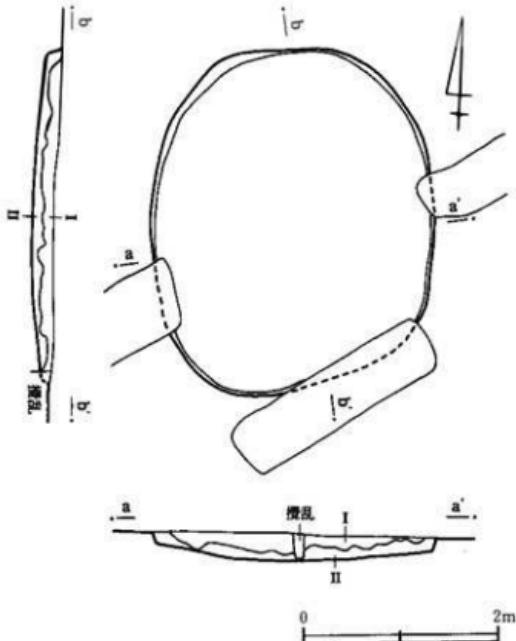


図166 D034号遺構実測図

きなかった。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層暗茶褐色土層が堆積する。遺物はわずか数点出土したのみで、いずれも小片であるため図示し得ない。

### 13. P004号遺構（図167、168、図版41、42）

第I群の遺構群においてほぼ中央に位置し、D008、018号遺構に近接する。

**遺構** 長径0.77m、短径0.55mを計り、橢円形の平面形を呈する土壙である。掘り込みは緩傾斜を呈し、0.13mを計って底面に達している。底面はやや軟弱だが、平坦である。特に何らかの施設等は検出できなかった。

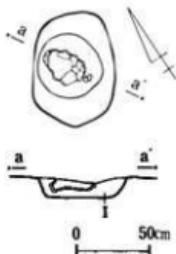


図167 P004号遺構実測図

**遺物出土状況** I層茶褐色土層が堆積し、単一層である。遺構中央部より転倒した状況で變形土器が出土した。

**出土遺物** 遺物は1つの變形土器がある。口縁部は欠損で不明だが、頸部下位に二条のS字状結節文が認められ、若干の無文帶を残して以下胴部全面に附加状繩文が施文される。底部には木葉痕が認められる。

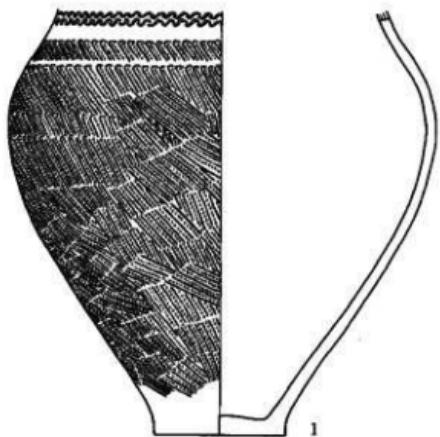


図168 P004号遺構出土遺物実測図

P004出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	變	-	-	9.0	口縁部欠損	S字状結節文 附加状繩文	砂粒	堅	茶褐色	底部に木葉痕

### 第3節 第II群の遺構と遺物

弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構群の内、古墳時代の様相を呈する一群を第II群とした。第II群に属する遺構は、竪穴住居跡22軒、方形周溝墓3基であり、第I群の倍近い数である。また、第I群に比べ総じて住居群は南側に位置しており、權現後遺跡の分布状況と同一の立地を呈しており、權現後遺跡における弥生時代第IV群Bと関連する一群として捉えることができる（図169）。

なお、第II群には方形周溝墓も存在しており、「居住域」と「墓域」の関連性を遺構の分布と併せて考えなくてはならない。また、各方形周溝墓とも主体部を有しており、主体部からは鉄釧をはじめとする副葬品が出土していることは注目できる。

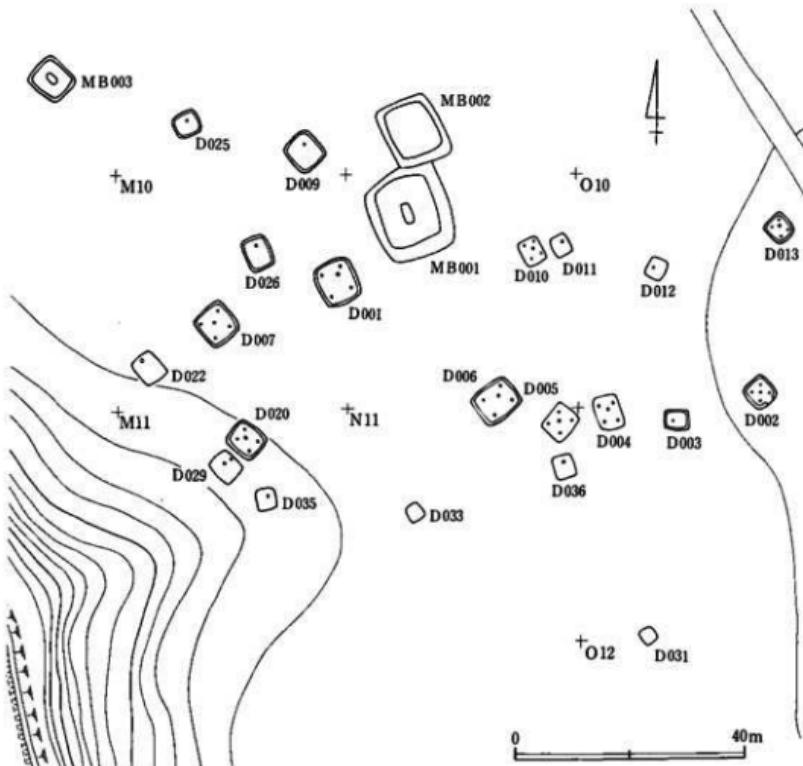


図169 弥生・古墳時代第II群遺構分布状況図

1. D001号遺構 (図170~172、図版43、57)

第II群の遺構群においてほぼ中央に位置し、D026号遺構及びMB001号遺構に近接する。

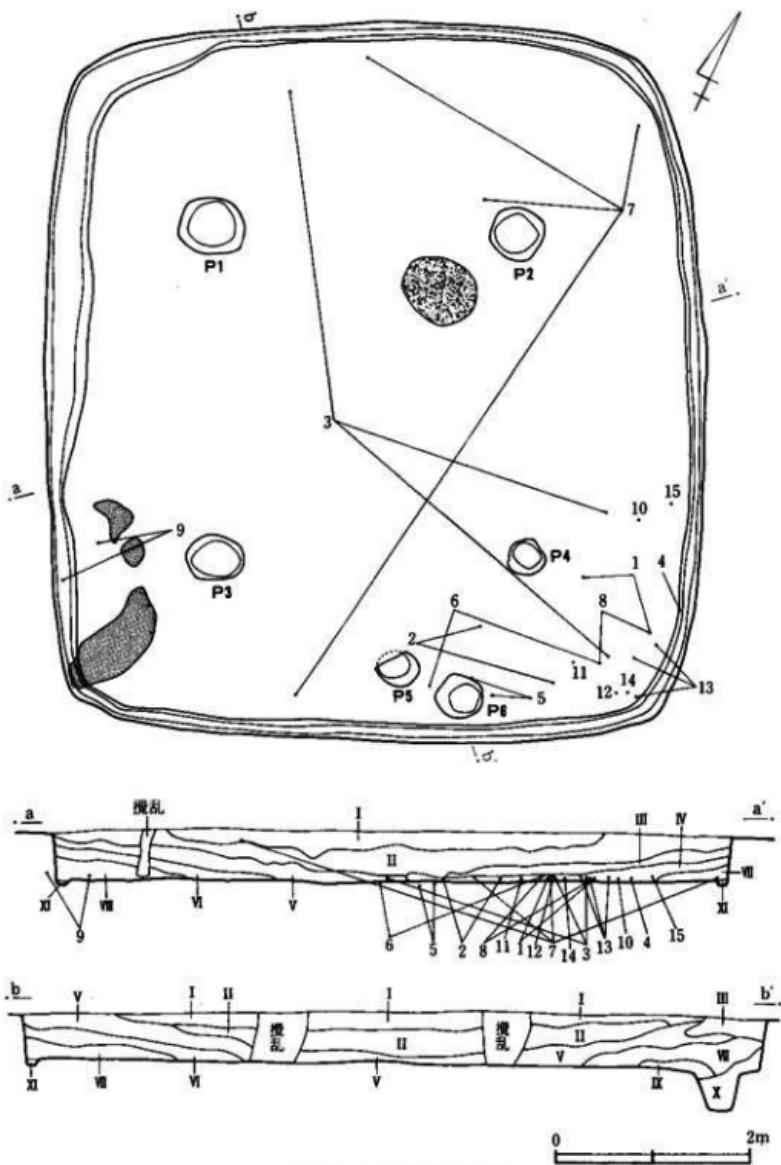


図170 D001号遺構実測図

**遺構** 北壁6.30m、東壁7.00mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.50m掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.06mの壁溝が認められる。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置するP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を検出した。径0.37～0.63m、深さ0.21～0.42mを計る。いずれも柱痕は認められない。その他、南壁ほぼ中央に近接してP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>を検出した。P<sub>5</sub>は径0.38m、深さ0.29mを計り、北側方向に傾斜して掘り込む。P<sub>6</sub>は径0.46m、深さ0.35mを計る。南西コーナー部分の床面上に焼土を検出したが、床面との間に若干の黒色土を含む。

**炉** P<sub>2</sub>の南西方向に近接して位置する。長径0.77m、短径0.62m、深さ0.26mを計り、厚さ0.20mの焼土が堆積する。火床部は明白に熱変している。

**遺物出土状況** I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層ロームブロック混入黒褐色土層、IV層焼土粒混入暗茶褐色土層、V層ロームブロック層、VI層暗黒褐色土層、VII層明茶褐色土層、VIII層焼土ブロック混入明茶褐色土層、IX層焼土粒混入黒褐色土層、X層ロームブロック混入黄褐色土層、XI層黄褐色土層が堆積する。遺物は南東コーナー部に集中し、ほとんどが床面直上からの出土である。



図171 D001号造構炉跡実測図

D001出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			追存度	調整	胎 土			備考
		高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	—	21.0	—	台部欠損	ハケ目	砂粒、長石	やや堅密	黒褐色	二次焼成痕 ハケ状工具による刻目
2	台付甕	—	17.0	—	口縁部のみ	ハケ目	砂粒、長石	堅密	黒褐色	二次焼成痕
3	台付甕	—	—	11.6	台部のみ	ハケ目の後ヘラナデ	砂粒	堅密	茶褐色	
4	台付甕	19.4	13.0	8.6	充 形	ハケ目の後(2回後ヘラナデ)	砂粒	ほぼ堅密	黒褐色	二次焼成痕
5	壺	—	—	11.4	底部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅密	黒褐色	
6	壺	—	—	8.0	口縁部欠損	ヘラナデ	砂粒	堅密	淡茶褐色	外外面とも摩滅顯著
7	壺	—	—	3.4	口縁部欠損	ヘラ磨き	砂粒	堅密	茶褐色	
8	壺	—	—	4.4	底部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅密	茶褐色	
9	鉢	—	—	5.0	口縁部欠損	ハケ目の後ヘラナデ	砂粒	堅密	淡茶褐色	
10	壺	—	—	4.6	口縁部欠損	ヘラナデ	砂粒	堅密	淡茶褐色	胴部に穿孔有
11	壺	7.3	5.7	3.4	充 形	ヘラナデ 口唇部ヨコナデ	砂粒	堅密	淡茶褐色	胴部に穿孔有
12	壺	—	—	3.2	口縁部欠損	ハケ目の後ヘラナデ	砂粒、長石	堅密	茶褐色	
13	高 壺	—	21.6	—	脚 部 欠 損	ハケ目の後ヘラ磨き	砂粒	堅密	赤褐色	
14	器 台	7.8	6.7	11.5	充	ヘラ磨き	砂粒	堅密	茶褐色	胴部3孔

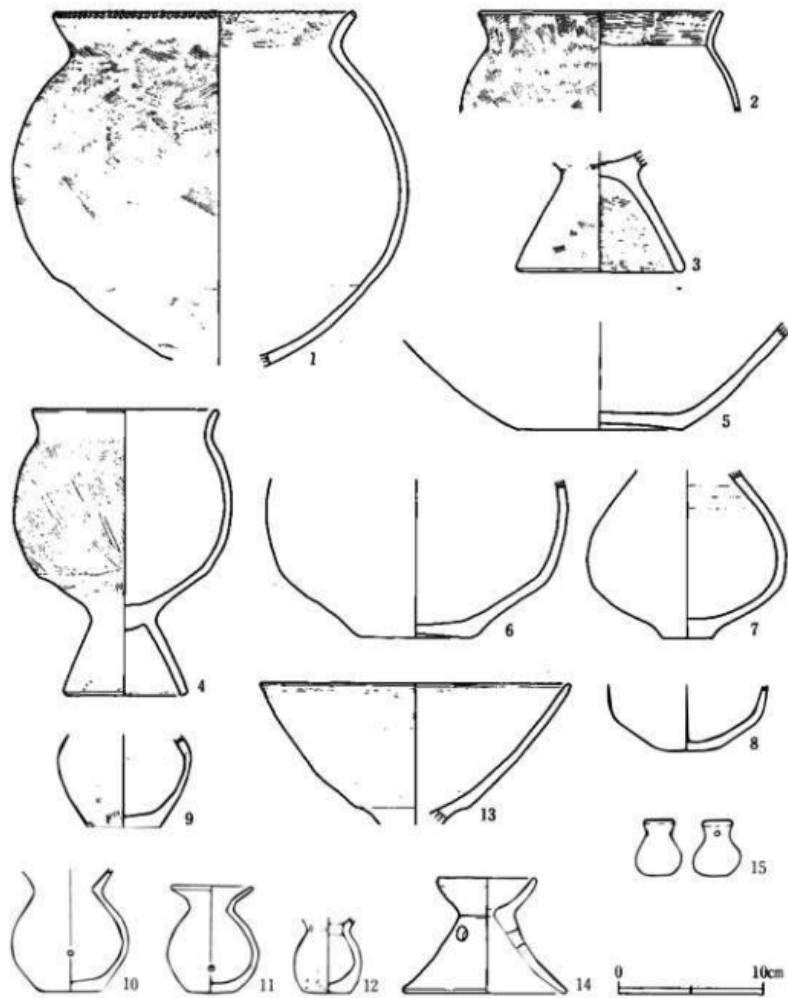


図172 D 001号遺構出土遺物実測図

**出土遺物** 遺物は台付壺、壺、鉢、高環、器台形土器と土製品がある。台付壺形土器は1～4で、4は小形の部類に属する。壺形土器は5～8、10～12である。5、6、8は底部破片、7は頭部以上を欠損する。10、11は胴下半部に穿孔が施されており、小形なものである。9は鉢形土器で、口縁部は欠損する。13は高環形土器で脚部を欠損する。14は器台形土器で、脚部に

3か所穿孔が認められる。土製品は15で壺形を模し、頸部に穿孔が認められる。

## 2. D002号遺構 (図173~175、図版43、57)

第II群の遺構群において東側に位置し、D003号遺構に近接する。

遺構 北壁4.43m、東壁4.25mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.35m掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.05mの壁溝が南壁中央部分を除いて認められる。床面は部分的に堅緻な状況が認められるが、全体にやや軟弱である。柱穴は対角線上に配置するP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>を検出し、径0.34~0.44m、深さ0.55~0.70mを計る。いずれも二段に掘り込まれている。

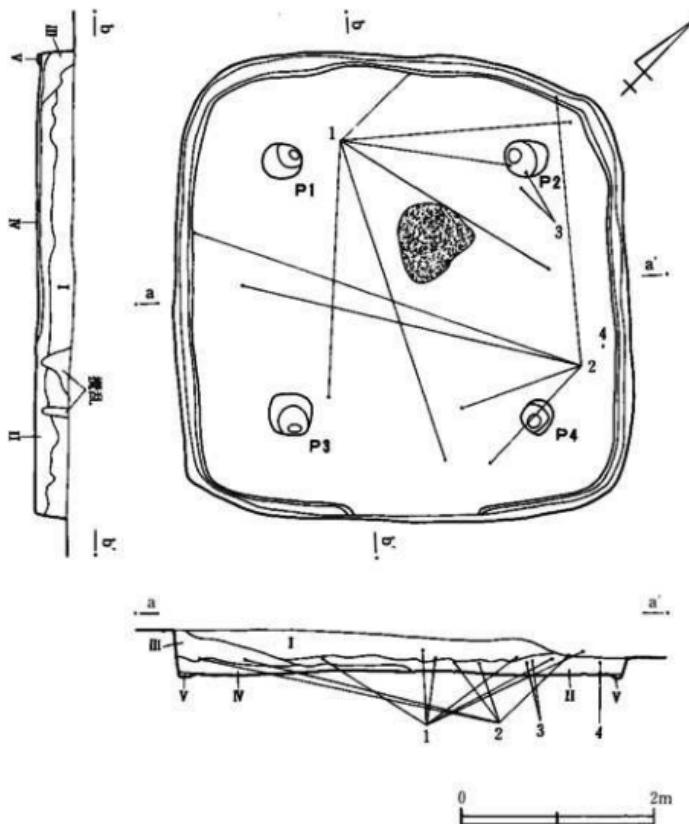


図173 D002号遺構実測図

**炉** 住居中央より若干北寄りに位置する。径0.72mで不整な形状を呈している。深さ0.20m掘り込み、厚さ0.10mの焼土が堆積している。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層暗茶褐色土層、III層ローム粒混入黒褐色土層、IV層明茶褐色土層、V層茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上出土のものは皆無であり、II層を中心として出土している。

**出土遺物** 遺物は台付壺、壺、高环形土

器がある。1は台付壺形土器である。壺形土器は2の胸部破片である。高环形土器は3、4で、3は坏部破片、4は脚部破片であるが、3と4は同一個体の可能性がある。

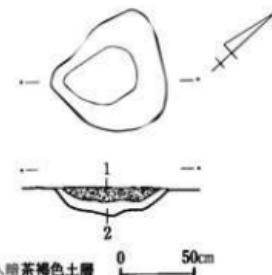


図174 D002号遺構炉跡実測図

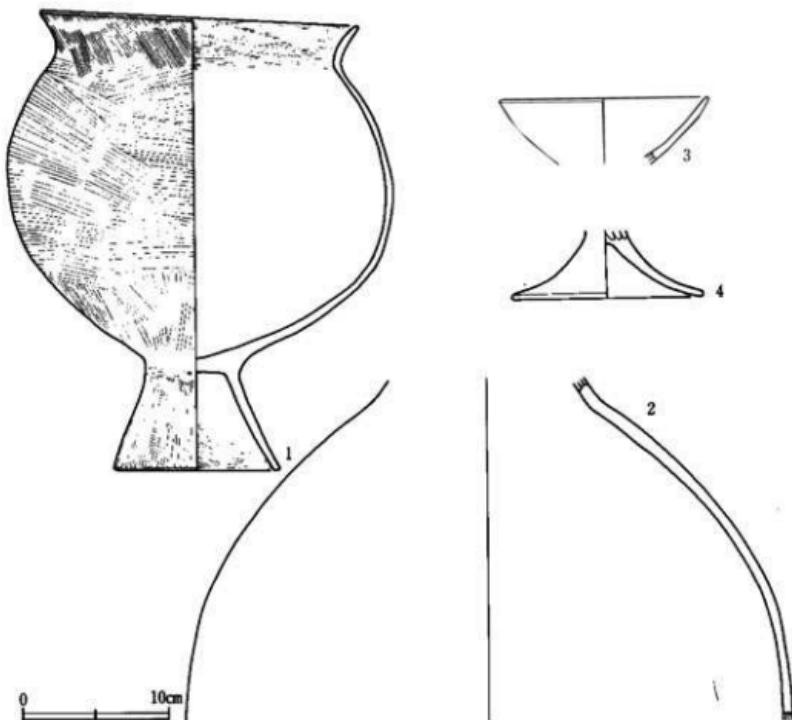


図175 D002号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調 整	胎 土			備 考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色 調	
1 台付壺	30.4	21.9	11.4	—	少	ハケ目	砂粒	堅 黒	褐色	二次燒成痕
2 壺	—	—	—	壺部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅 黒	茶褐色	内面摩擦顯著	
3 高 坯	—	14.5	—	坏部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅 黒	茶褐色		
4 高 坯	—	—	13.1	坏部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅 黒	茶褐色		

## 3. D003号遺構(図176～178、図版43)

第II群の遺構群において南側に位置し、D002、004号遺構に近接する。

遺構 北壁4.00m、西壁3.24mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.28m掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.05mの壁溝が認められる。床

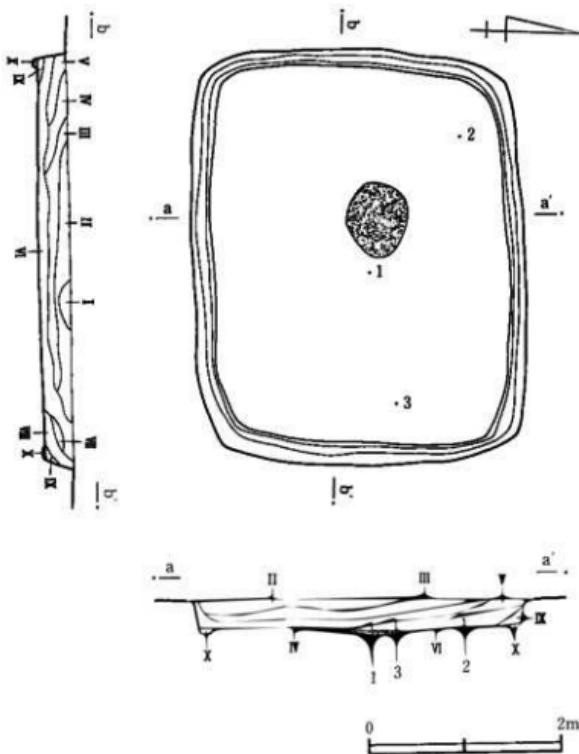


図176 D003号遺構実測図

面は住居中央部を中心として堅密な状況を呈するが、壁際においてはやや軟弱である。柱穴は検出できなかった。

**炉** 住居中央より若干西寄りに位置する。長径0.76m、短径0.61m、深さ0.22mを計り、厚さ0.14mの焼土が堆積する。火床部は明白に熱変している。

**遺物出土状況** I層黒色土層、II層暗茶褐色土層、III層ローム粒混入黒色土層、IV層ローム粒混入暗茶褐色土層、V層黒褐色土層、VI層暗褐色土層、VII層ローム粒混入黒褐色土層、VIII層ローム粒混入暗褐色土層、IX層黄褐色土層、X層明茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少で、すべて覆土中での出土である。

**出土遺物** 遺物は壺と高环形土器がある。壺形土器は1で、平底の底部破片である。高环形土器は2・3で、いずれも脚部破片であり、2には脚部に4個の穿孔が認められる。

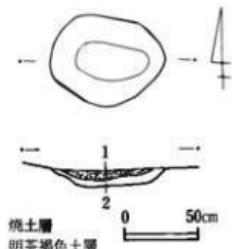


図177 D003号遺構跡実測図

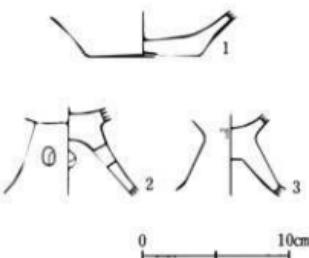


図178 D003号遺構出土遺物実測図

D003出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調 整	胎 土			備 考
		縦高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	7.8	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅	淡黒褐色	
2	高环	—	—	—	脚部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅	淡茶褐色	脚部4孔
3	高环	—	—	—	接合部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅	淡茶褐色	

#### 4. D004号遺構 (図179~181、図版44、58)

第II群の遺構において南側に位置し、D003、005、036号遺構に近接する。

**遺構** 北壁4.70m、東壁5.20mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.52m掘り込んで床面に達している。床面は住居中央部を中心として堅密な状況が認められるが、壁際においては軟弱である。柱穴は主柱穴として対角線上にP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>を検出した。径0.57~0.67m、深さ0.51~0.58mを計る。また、壁に沿ってP<sub>5</sub>~P<sub>12</sub>を検出し、径平均0.18m、深さ平均0.16mを計る。その他ピットは円形の平面形を呈するP<sub>13</sub>~P<sub>16</sub>、梢円形を呈するP<sub>17</sub>を検出した。特にP<sub>13</sub>、P<sub>14</sub>は貯蔵穴として考えられるもので、それぞれ径0.44m、0.58

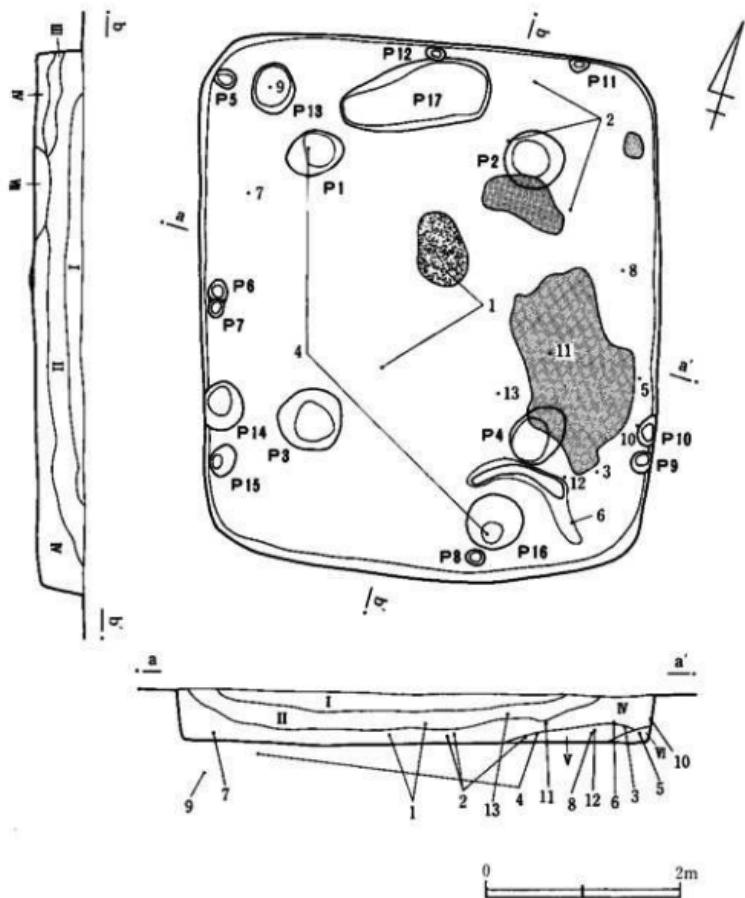


図179 D004号遺構実測図

m、深さ0.53m、0.75mを計る。P<sub>16</sub>の周辺には土手状の高まりが認められる。住居東側半分を中心として焼土を検出したが、床面上ではなく、廃絶後の流れ込みによるものと考えられる。壁溝は検出できなかった。

**炉** 住居中央より若干北寄りに位置する。長径0.80m、短径0.50m、深さ0.16mを計り、焼

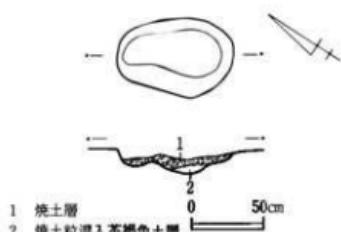


図180 D004号遺構炉跡実測図

土は厚さ0.10m堆積する。火床部は明白白色に熱変している。

**遺物出土状況** I層黒色土層、II層暗茶褐色土層、III層ロームブロック混入茶褐色土層、IV層ローム粒混入暗茶褐色土層、V層赤褐色土層、VI層焼土粒混入茶褐色土層、VII層焼土粒混入暗茶褐色土層が堆積する。遺物はIV層出土のものが多く、南東コーナー部に比較的集中している。

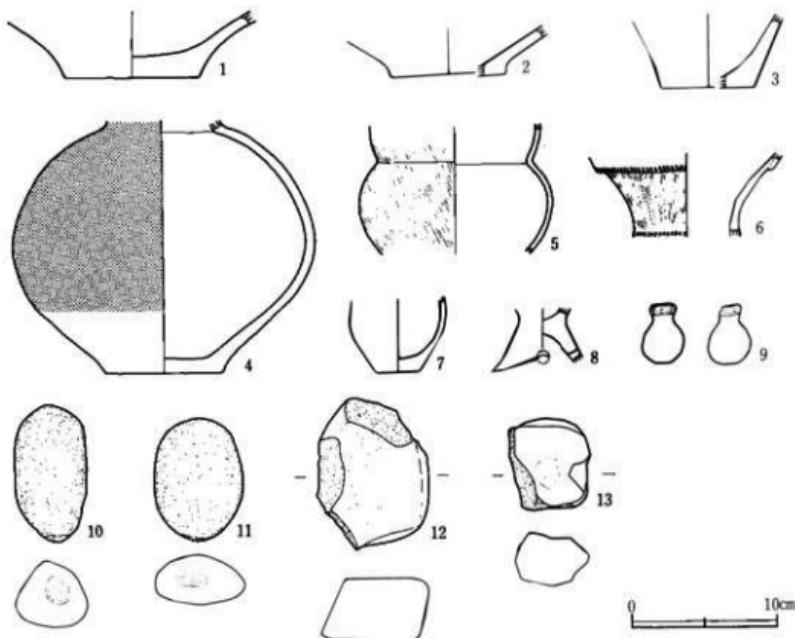


図181 D004号遺構出土遺物実測図

D004出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			造形度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	9.4	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅	茶褐色	
2	壺	—	—	8.2	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅	茶褐色	
3	壺	—	—	8.2	口縁部欠損	ヘラ磨き	砂粒、石英	堅	淡茶褐色 脚部外表面赤彩	
4	壺	—	—	—	胴部のみ	ハケ目の後一部ヘラナデ 口縁部ヨコナデ	砂粒	堅	茶褐色	
5	壺	—	—	—	口縁部のみ	ハケ目	砂粒	堅	茶褐色	
6	壺	—	—	6.6	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅	茶褐色	
7	壺	—	—	3.0	口縁部欠損	ヘラナデ	砂粒	堅	茶褐色	
8	器台	—	—	—	複合部のみ	ヘラ磨き	砂粒、長石	堅	茶褐色 脚部4孔	

る。柱穴P<sub>1</sub>覆土中及びP<sub>13</sub>底面上からの出土も認められる。

**出土遺物** 遺物は甕、壺、器台形土器と土製品、石製品がある。甕形土器は1～3で、いずれも底部破片である。壺形土器は4～7である。4は口縁部を欠損するが、胸部外面は赤彩される。5は口唇部及び底部を欠く。6は折り返し口縁を呈す。7は小形で、口縁部を欠く。器台形土器は8で、脚部に4個の穿孔を有する。土製品は9の壺形を模したものである。10、11は磨石で、10は砂岩、11は石英斑岩である。いずれにも使用痕が認められる。12、13は凹石である。12は中央部に若干の窪みが認められる。

5. D005号遺構 (図182～184、図版44)

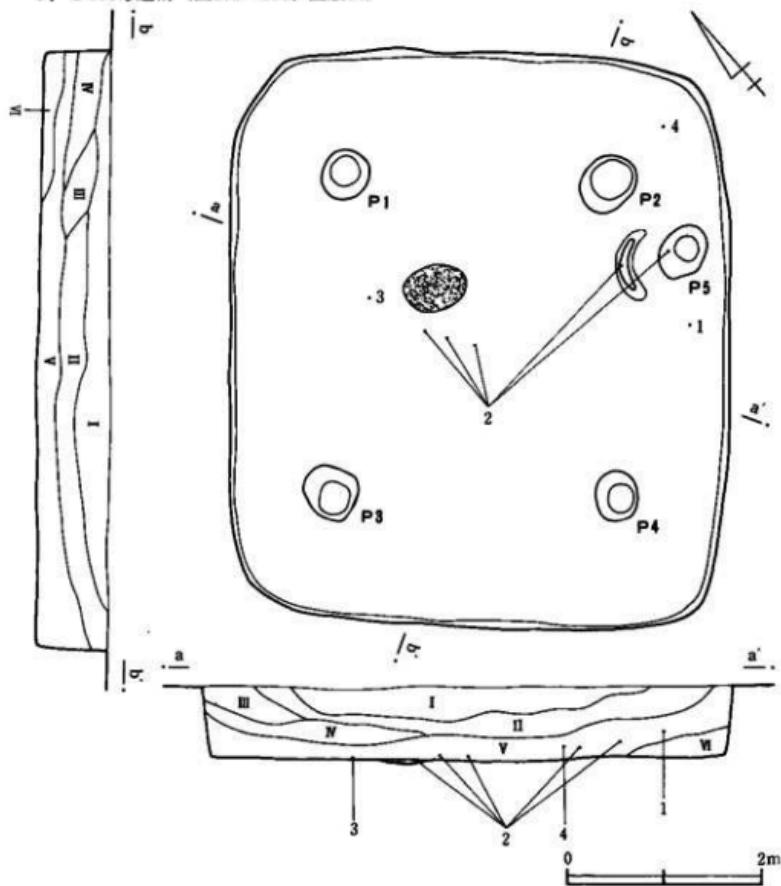


図182 D005号遺構実測図

第II群の遺構群において南側に位置し、D004、006、036号遺構に近接する。

**遺構** 北壁4.95m、東壁5.68mで隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.70m掘り込んで床面に達している。床面は全体的にやや軟弱である。柱穴は対角線上にP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を検出し、径0.48～0.58m、深さ0.49～0.69mを計る。いずれも柱痕を確認した。貯蔵穴は東壁北寄り部分に近接してP<sub>5</sub>を検出し、径0.48m、深さ0.70mを計る。周辺に土手状の高まりを有するものである。壁溝は検出できなかった。

**炉** 住居中央より若干P<sub>1</sub>寄りに位置する。長径0.66m、短径0.48m、深さ0.06mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積する。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層黑色土層、III層暗茶褐色土層、IV層茶褐色土層、V層ローム粒・ロームブロック混入黒褐色土層、VI層ロームブロック混入茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少で、覆土中に散在して出土する。

**出土遺物** 遺物は壺、壺、高環形土器がある。變形土器は1、壺形土器は2、3でいずれも底部破片である。高環形土器は4で環部破片である。

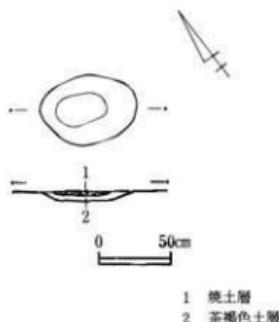


図183 D005号遺構炉跡実測図

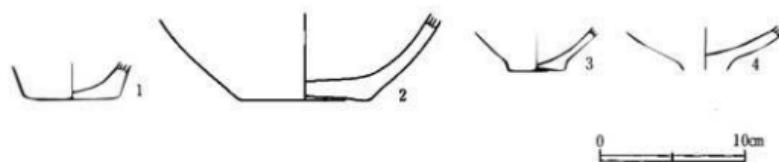


図184 D005号遺構出土遺物実測図

D005出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	—	—	6.8	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	やや堅固	淡茶褐色	
2	壺	—	—	9.2	底部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅 固	茶 楢 色	内面摩擦顯著
3	壺	—	—	4.0	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅 固	茶 楢 色	
4	高 壕	—	—	—	複合部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅 固	茶 楢 色	

6. D006号遺構 (図185~187、図版44、45、58、59)

第II群の遺構群において南側に位置し、D005号遺構に近接する。

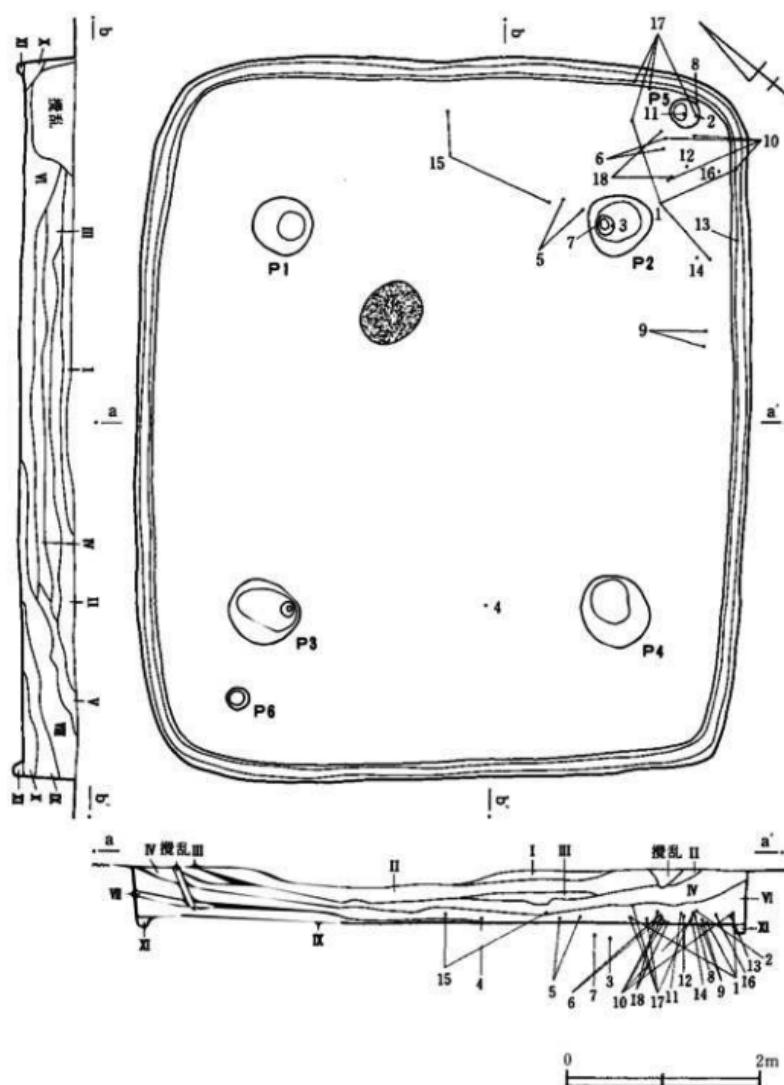


図185 D006号遺構実測図

**遺構** 北壁6.10m、東壁7.04mで隅丸長方形の平面形を呈する堅穴住居跡である。壁は垂直に0.56m掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.10mの壁溝が認められる。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上にP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を検出し、径0.62～0.76m、深さ0.47～0.60mを計る。P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>においては二段に掘り込んでいる。ピットは北東コーナー部にP<sub>5</sub>、南西コーナー部にP<sub>6</sub>を検出した。それぞれ径0.31m、0.24m、深さ0.26m、0.22mを計る。IV層において焼土を検出したが、本遺構と直接の関係は認められない。

**炉** 住居中央よりP<sub>1</sub>寄りに位置する。長径0.68m、短径0.56m、深さ0.12mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積する。火床部は明白に熱変している。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層黒色土層、IV層焼土粒混入赤褐色土層、V層ローム粒混入暗茶褐色土層、VI層茶褐色土層、VII層ロームブロック混入暗茶褐色土層、VIII層明茶褐色土層、IX層暗茶褐色土層、X層ロームブロック混入黄褐色土層、XI層黄褐色土層が堆積する。遺物は北東コーナー部に集中しており、いずれ

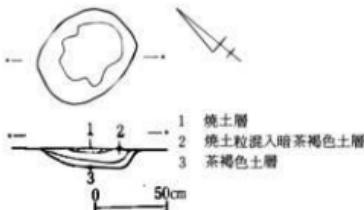


図186 D006号遺構炉跡実測図

D006出土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	—	19.5	—	台部欠損	ハケ目	砂粒	堅	黒褐色	二次焼成痕 内面摩滅顯著
2	台付甕	17.3	11.1	8.1	%	ハケ目の後へラナデ	砂粒	堅	黒褐色	二次焼成痕 内面摩滅や顯著
3	台付甕	—	—	10.0	台部のみ	ハケ目	砂粒、石英	堅	茶褐色	
4	台付甕	—	—	10.8	台部のみ	ハケ目	砂粒、石英	堅	茶褐色	
5	台付甕	—	—	—	台部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅	黒褐色	
6	台付甕	—	—	6.8	台部のみ	ハケ目の後へラナデ	砂粒、石英	堅	黒褐色	
7	台付甕	—	—	9.0	台部のみ	ハケ目の後一部へラナデ	砂粒	堅	茶褐色	
8	甕	—	—	—	胴部のみ	ハケ目の後へラ磨き	砂粒、長石	堅	赤褐色	内面摩滅顯著
9	甕	—	—	5.6	口縁部欠損	ヘラ磨き	砂粒、長石	堅	淡茶褐色	内面摩滅顯著
10	甕	15.1	8.4	3.8	略完形	ヘラ磨き	砂粒、骨母	堅	茶褐色	
11	甕	10.4	8.6	5.0	完形	ヘラ磨き	砂粒	堅	茶褐色	
12	鉢	6.7	8.0	4.3	%	ナデ、锯齒状紋	砂粒	堅	茶褐色	
13	鉢	8.2	9.3	3.8	%	ヘラナデ	砂粒	堅	茶褐色	
14	鉢	7.3	8.8	4.2	%	ヘラナデ	砂粒、石英	堅	茶褐色	内面摩滅や顯著
15	鉢	3.8	5.7	2.8	%	ヘラ磨き	砂粒	堅	茶褐色	
16	鉢	4.1	6.5	3.8	完形	ナデ(一部へラ削り)	砂粒	堅	淡茶褐色	
17	高環	17.0	21.0	12.0	%	ヘラ磨き	砂粒	堅	赤褐色	内面摩滅顯著
18	標台	8.0	8.0	8.6	%	ヘラナデ	砂粒	堅	茶褐色	

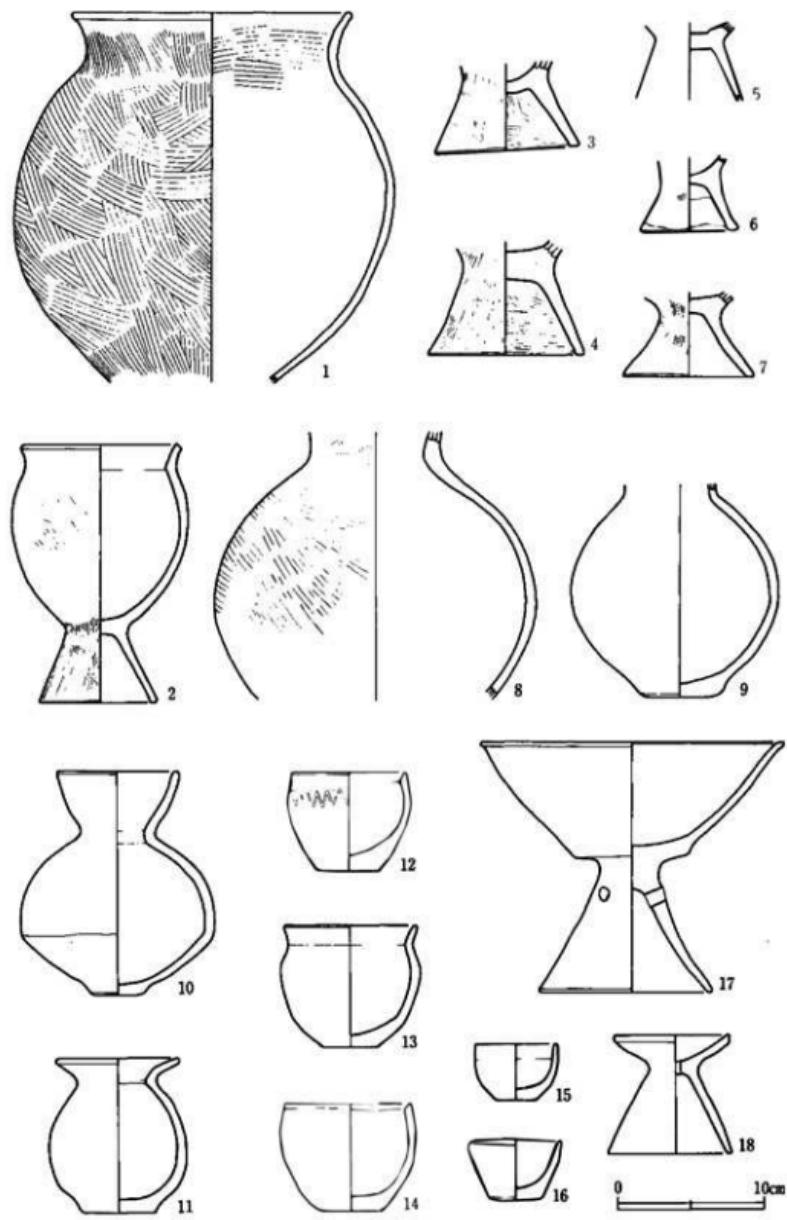


图187 D 006号窑址出土遗物实测图

も廃絶時の位置をほぼ保っているものと考えられる良好な一括資料である。

**出土遺物** 遺物は台付壺、壺、鉢、高坏、器台形土器がある。台付壺形土器は1~7で、1は台部を欠き、3~7は台部破片である。壺形土器は8~11で、8は胸部破片、9は口縁部欠損である。10はひさご形を呈する小形の壺である。鉢形土器は12~16である。12、13は口縁部が若干外反し、15、16は直線的に伸びる。12は体部上端に鋸歯状の沈線を有する。高坏形土器は17で、脚部に4孔を有し、坏部内面の摩滅が著しい。器台形土器は18で、小形である。

### 7. D007号遺構（図188～190、図版45、59）

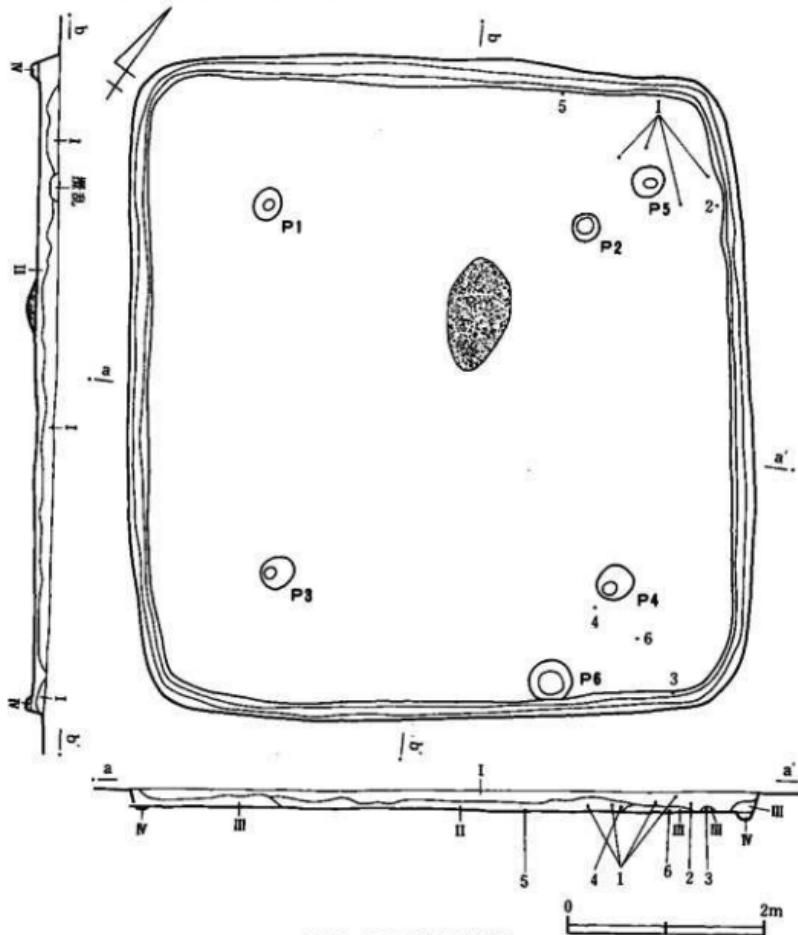


図188 D007号遺構実測図

第II群の遺構群において西側に位置し、D022、026号遺構に近接する。

**遺構** 北壁6.10m、東壁6.35mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.20m掘り込んでおり、直下には幅0.18m、深さ0.07mの壁溝が認められる。床面は全体的にやや軟弱な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置するP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を検出し、径0.28～0.37m、深さ0.51～0.63mを計る。

小形ではあるが、かなりしっかりとした掘りかたである。ピットは北東コーナー部にP<sub>3</sub>、南壁に近接してP<sub>4</sub>を検出し、それぞれ径0.31m、0.32m、深さ0.30m、0.63mを計る。

**炉** 住居中央より若干P<sub>2</sub>寄りに位置する。長径1.14m、短径0.64m、深さ0.24mを計り、やや大形である。厚さ0.13mの焼土が堆積する。火床部は明白に熱変している。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層茶褐色土層、III層ロームブロック混入茶褐色土層、IV層明茶褐色土層が堆積する。遺物はII層を中心として出土するが、やや散在する状況である。

**出土遺物** 遺物は台付壺、壺、壺、鉢、器台、高環形土器である。台付壺形土器は1で台部を欠損する。壺形土器はこの底部破片である。壺形土器は6で、内面赤彩が施される。鉢形土器は3で、底部を欠損する。器台形土器は4で、脚部に3孔を有する。外面及び受部内面は赤彩が施される。高環形土器は5で、脚部は4孔を有すると考えられる。

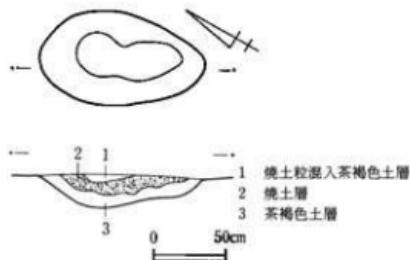


図189 D007号遺構炉跡実測図

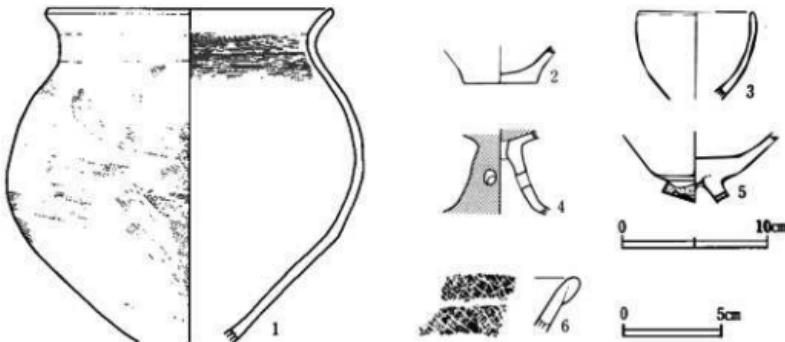


図190 D007号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付壺	—	20.0	—	台部欠損	ハケ目	砂粒	堅緻	黒褐色	二次焼成痕
2	小形壺	—	—	5.2	底部のみ	ヘラナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	鉢	—	8.2	—	底部欠損	ナデ	砂粒	堅緻	茶褐色	
4	器台	—	—	—	脚部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	輪部3孔 内外面赤彩
5	高環	—	—	—	接合部のみ	ハケ目の後ヘラ磨き	砂粒	堅緻	赤褐色	輪部4孔
6	壺	—	—	—	口縁部破片	附加条縞文	砂粒	堅緻	淡茶褐色	内面赤彩

## 8. D009号遺構 (図191~193、図版46、59)

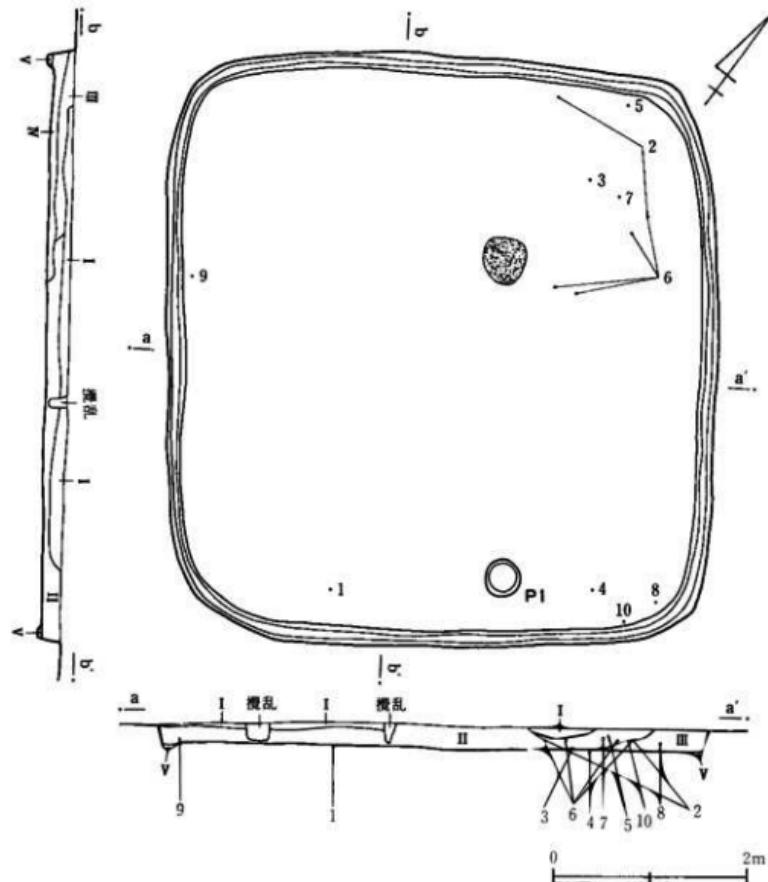


図191 D009号遺構実測図

第II群の遺構群においてほぼ中央に位置し、D025、026号遺構及びMB 001、002号遺構に近接する。

**遺構** 北壁5.20m、東壁5.74mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.23m掘り込んでおり、直下には幅0.16m、深さ0.07mの壁溝が認められる。床面は全体的にやや軟弱な状況

を呈する。ピットは南壁に近接してP<sub>1</sub>を検出し、径0.38m、深さ0.41mを計る。柱穴は検出できなかった。

**炉** 住居中央より若干北東寄りに位置する。径0.48m、深さ0.07mを計り、厚さ0.05mの焼土が堆積する。火床部は明白白色に熱変している。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層暗茶褐色土層、III層ロームブロック混入黒褐色土層、IV層茶褐色土層、V層明茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土しており、北東コーナー部及び南東コーナー部に集中する傾向が認められる。

**出土遺物** 遺物は台付壺、甕、壺、高杯、鉢、器台形土器がある。台付甕形土器は1～3で、いずれも台部破片である。甕形土器は4で胸部破片であるが、2段以上の輪積痕を残す。壺形土器は5、8で、5は複合口縁を呈する。高杯形土器は6、7で、6は外面及び杯部内面に赤彩が施される。7は脚部を欠く。鉢形土器は9で、全体に内彫ぎみに立ち上がる。器台形土器



図192 D009号遺構炉跡実測図

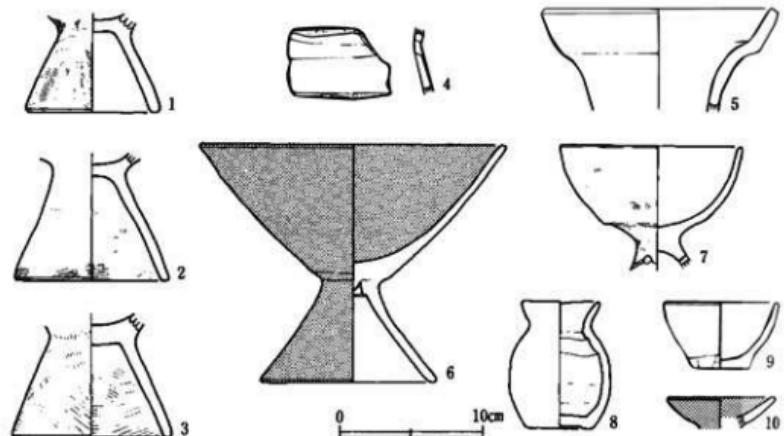


図193 D009号遺構出土遺物実測図

は10で、受部のみであるが、内外面とも赤彩が施される。

D009出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1 台付壺	—	—	9.2	台部のみ	ハケ目		砂粒	堅	茶褐色	
2 台付壺	—	—	10.6	台部のみ	ハケ目の後ヘラナデ		砂粒・長石	堅	茶褐色	
3 台付壺	—	—	11.0	台部のみ	ハケ目		砂粒・石英	堅	茶褐色	
4 壺	—	—	—	頸部破片	ナデ 輪郭痕		砂粒	堅	淡茶褐色	
5 盾	—	16.5	—	口部のみ	ヘラ磨き		砂粒	堅	淡茶褐色	
6 高坪	16.2	21.4	12.2	略 完形	ヘラ磨き		砂粒・石英	堅	赤褐色	内外面赤彩
7 高坪	—	12.7	—	脚部欠損	外面ハケ目 内面ヘラ磨き		砂粒・石英	堅	茶褐色	内面摩訶顯著
8 盾	8.7	5.4	4.4	%	ヘラナデ		砂粒	堅	茶褐色	
9 鉢	4.5	8.0	4.0	略 完形	ヘラ磨き		砂粒	堅	黒褐色	

### 9. D010号遺構 (図194～196、図版46、60)

第II群の遺構群においてほぼ中央に位置し、D011号遺構に近接する。

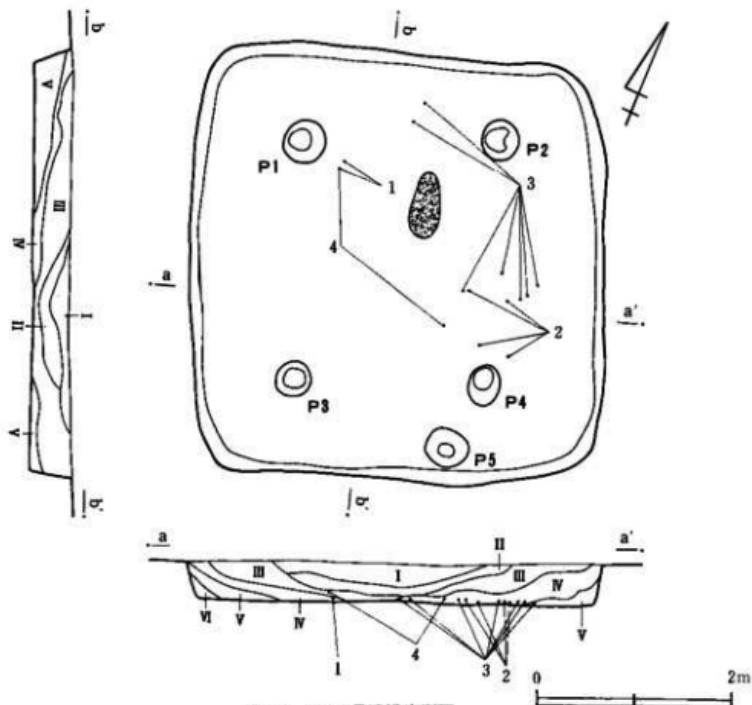


図194 D010号遺構実測図

**遺構** 北壁3.90m、東壁4.16mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.40m掘り込んで床面に達している。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上にP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を検出した。径0.36～0.45m、深さ0.31～0.45mを計る。ピットは南壁に近接してP<sub>5</sub>を検出し、径0.41m、深さ0.27mを計る。壁溝は検出できなかった。

**炉** 住居中央より若干北寄りに位置する。長径0.65m、短径0.32m、深さ0.13mを計り、厚さ0.04mの焼土が堆積する。火床部は明白白色に熱変している。

**遺物出土状況** I層ローム粒混入黒色土層、II層明茶褐色土層、III層黒色土層、IV層ロームブロック混入明茶褐色土層、V層暗茶褐色土層、VI層黒褐色土層が堆積する。遺物は稀少であるが、いずれも床面上での出土である。

**出土遺物** 遺物は甕、壺、高坏形土器がある。甕形土器は1の口縁部破片である。壺形土器は2の下脇らみの器形である。高坏形土器は3、4である。3は外面及び坏部内面に赤彩が施され、4は脚部破片である。

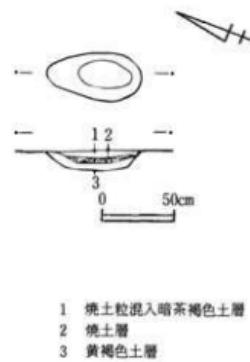


図195 D010号遺構炉跡実測図

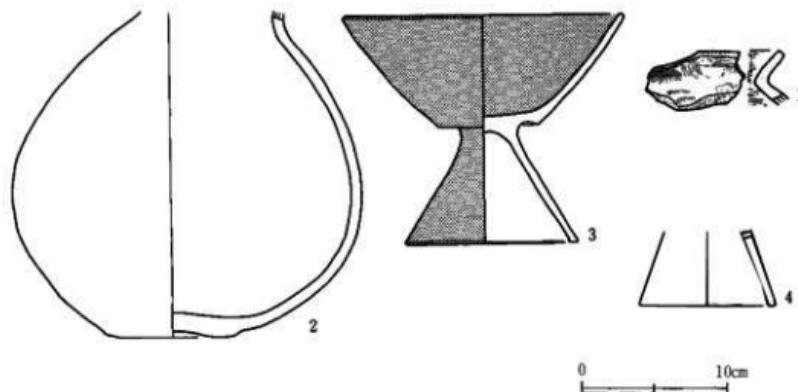


図196 D010号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	—	—	—	口縁部破片	ハケ目	砂粒	堅	茶褐色	
2	甕	—	—	9.2	口縁部欠損	ヘラ磨き	砂粒、石英	堅	黒褐色	
3	高環	15.5	19.6	12.0	%	ヘラ磨き	砂粒	堅	赤褐色	内外面赤彩
4	高環	—	—	9.4	脚部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅	茶褐色	穿孔有

## 10. D011号遺構 (図197~199、図版47、60)

第II群の遺構群においてほぼ中央に位置し、D010号遺構に近接する。

遺構 北壁3.34m、東壁3.46mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾

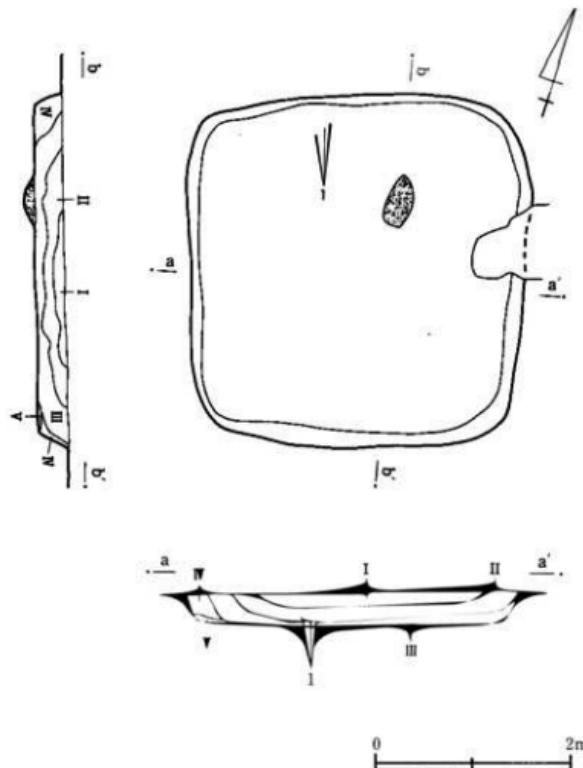


図197 D011号遺構実測図

斜を呈して0.34m掘り込んで床面に達する。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈する。柱穴、壁溝は検出できなかった。

**炉** 住居中央より若干北東寄りに位置する。長径0.55m、短径0.27m、深さ0.12mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積する。火床部は明白白色に熱変している。

**遺物出土状況** I層暗茶褐色土層、II層黒色土層、III層ローム粒混入暗茶褐色土層、IV層黒褐色土層、V層明茶褐色土層が堆積する。遺物は稀少で、床面上よりほぼ完形の變形土器が1点出土した以外は覆土中に散在して出土する状況である。

**出土遺物** 図示できる遺物は變形土器1点である。口唇部に刷毛状工具により刺突を有する。



図198 D011号遺構炉跡実測図

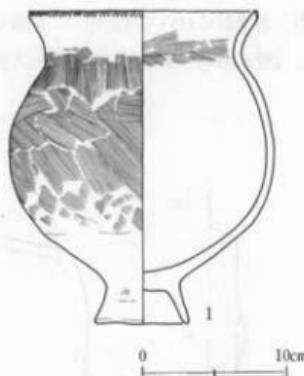


図199 D011号遺構出土遺物実測図

D011出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	21.2	16.0	6.6	略 完 形	ハケ目 脚部ヘラナデ	砂粒	堅 織	黑 褐 色	刷毛状工具による刺突

### 11. D012号遺構(図200、201、図版47)

第II群の遺構群において東側に位置し、D011、013号遺構に近接する。遺構に伴う遺物は皆無であり、出土遺物による時期の検討是不可能である。

**遺構** 北壁3.45m、東壁3.60mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.38m掘り込んで床面に達している。床面は中央部では堅緻な状況を呈しているが、壁際においては軟弱である。壁溝、



図200 D012号遺構炉跡実測図

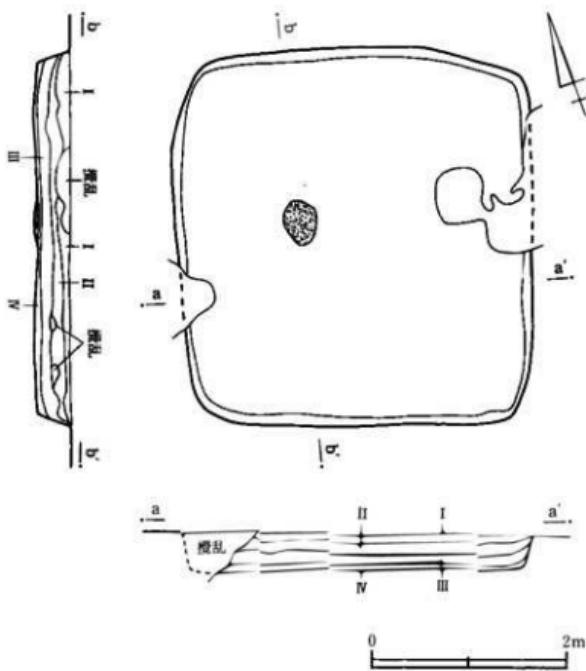


図201 D012号遺構実測図

柱穴は検出できなかった。

**炉** 住居中央より若干西寄りに位置する。長径0.47m、短径0.33m、深さ0.09mを計り、厚さ0.06mの焼土が堆積する。火床部は明白に熱変している。

**遺物出土状況** I層黒色土層、II層暗茶褐色土層、III層黒褐色土層、IV層褐色土層が堆積する。遺物は極めて稀少で覆土中に散在するのみである。図示できるものはない。

## 12. D013号遺構 (図202~204、図版47、48、60、61)

第II群の遺構群において最も東側に位置し、D012号遺構に近接する。なお、床面上及び床面に近い位置より焼土、炭化材を検出し、よって、本遺構は焼失した遺構であることが判明した。

**遺構** 南壁3.55m、東壁3.74mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.56m掘り込んでおり、直下には幅0.15m、深さ0.07mの壁溝が認められる。床面は中央部を中心として堅敏な状況を呈する。柱穴はほぼ対角線上に配置するP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>を検出した。径0.29~0.50m、深さ0.18~0.26mを計る。配列が不規則で、全体的には南側に片寄る配

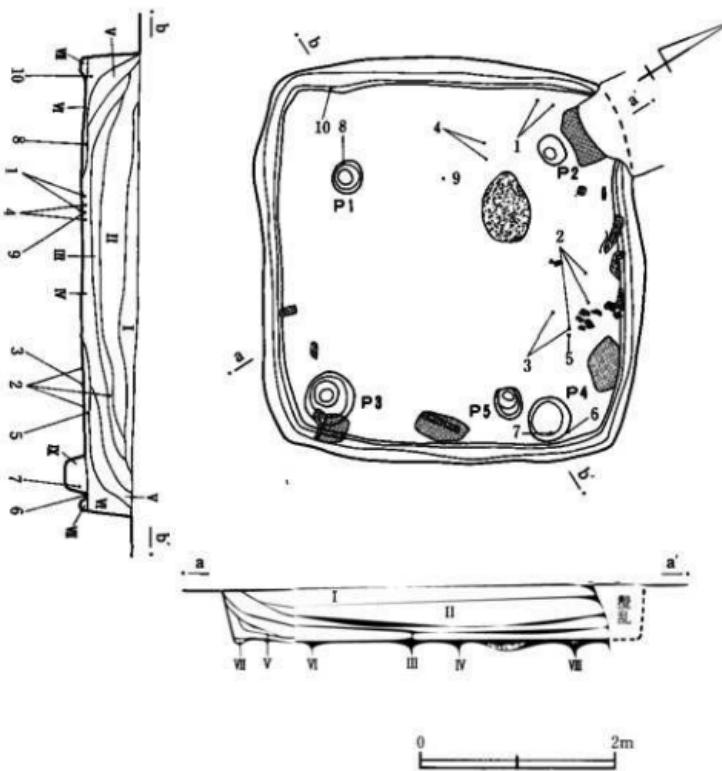


図202 D013号遺構実測図

置となる。特に  $P_3$ 、 $P_4$  は規模がやや大きく、全体の配列と関連性を有するものであろうか。その他ピットは  $P_4$  に近接して  $P_5$  を検出したが、住居中央部に向って斜めに掘り込まれている。径 0.32m、深さ 0.54m を計る。なお、北壁を除く壁直下には焼土及び炭化材を散在する状況で検出した。

**炉** 住居中央より  $P_2$  寄りに位置する。長径 0.74m、短径 0.49m、深さ 0.13m を計り、厚さ 0.04m の焼土が堆積する。火床部は明白白色に熱変している。

**遺物出土状況** I 層黒褐色土層、II 層黒色土層、III 層ローム粒混入黒褐色土層、IV 層ローム

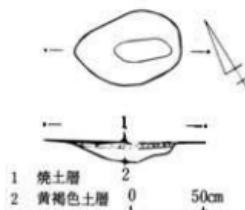


図203 D013号遺構炉跡実測図

粒混入暗茶褐色土層、V層暗茶褐色土層、VI層茶褐色土層、VII層明茶褐色土層、VIII層ローム粒混入暗褐色土層、IX層暗褐色土層が堆積する。遺物は北壁及び東壁に近接して出土する傾向が認められ、床面上を中心として出土する。6、7はP<sub>4</sub>の、8はP<sub>1</sub>の上方において出土した。

**出土遺物** 遺物は台付甕、甕、壺、器台形土器がある。台付甕形土器は1～5で、1～4は台部を欠き、5は台部のみである。1～3は「く」字状に外反する口縁を有し、4はやや緩やかに外反する。1の口唇部は竹管による押捺が認められる。壺形土器は6～9で、6は広口壺、7は略完形、8は口縁部破片、9は底部破片である。器台形土器は10の小形な土器である。

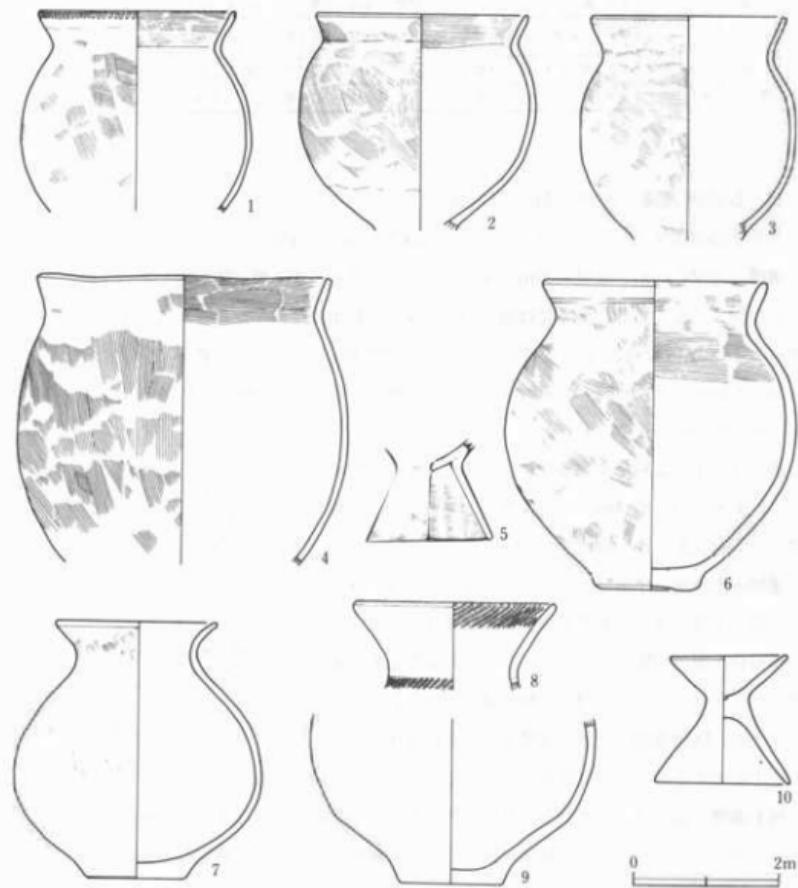


図204 D013号遺構出土遺物実測図

D013出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付壺	—	13.6	—	台部欠損	ハケ目の後ヘラナダ	砂粒、長石	堅	暗茶褐色	二次焼成痕
2	台付壺	—	14.8	—	台部欠損	ハケ目の後一部ヘラナダ	砂粒、石英	堅	淡黒褐色	二次焼成痕
3	台付壺	—	(13.6)	—	台部欠損	ハケ目	砂粒、雲母	やや堅	黒褐色	二次焼成痕
4	台付壺	—	(20.0)	—	台部欠損	ハケ目の後一部ヘラナダ	砂粒、石英	堅	暗茶褐色	
5	台付壺	—	—	8.8	台部のみ	ハケ目の後ヘラナダ	砂粒	堅	淡黒褐色	
6	広口壺	20.8	15.6	7.4	略完形	ハケ目の後一部ヘラナダ	砂粒、長石	堅	暗茶褐色	内面摩擦顯著
7	壺	17.4	11.2	7.0	略完形	ハケ目の後ヘラ磨き	砂粒、石英	堅	暗茶褐色	
8	壺	—	14.2	—	口部のみ	ヘラ磨き LR斜線文	砂粒、石英	堅	淡茶褐色	
9	壺	—	—	7.2	脚下半部	ヘラ磨き	砂粒、石英	堅	暗茶褐色	
10	器台	8.5	8.2	9.4	略完形	ヘラ磨き	砂粒、長石	堅	淡茶褐色	

## 13. D020号遺構(図205~207、図版48、61)

第II群の遺構群において南西部に位置し、D029、035号遺構に近接する。

遺構 北壁4.80m、東壁5.30mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.37m掘り込んでおり、直下には幅0.20m、深さ0.15mの壁溝が認められる。床面は中央部を中心として堅緻な状況を呈している。柱穴は対角線上に配置するP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>を検出した。径0.34~0.58m、深さ0.54~0.65mを計る。その他南壁中央部に近接してP<sub>5</sub>を検出した。径0.30m、深さ0.23mを計る。

炉 住居中央よりやや北寄りに位置する。長径0.87m、短径0.64m、深さ0.11mを計り、厚さ0.06mの焼土が堆積する。火床部は固く熱変している。

遺物出土状況 I層ローム粒混入暗茶褐色土層、II層暗茶褐色土層、III層茶褐色土層、IV層明茶褐色土層、V層黒褐色土層、VI層ロームブロック混入茶褐色土層、VII層ロームブロック混入黒褐色土層、VIII層ローム粒混入茶褐色土層、IX層黄褐色土層が堆積する。遺物は床面上出土を中心とするが、量的には少なく、またほとんどが小片である。3、4は柱穴内出土である。

出土遺物 遺物は台付壺、壺、鉢形土器がある。台付壺形土器は1で台部破片である。壺形土器は2、3で、折り返し口縁部の破片である。鉢形土器は4で、略完形である。

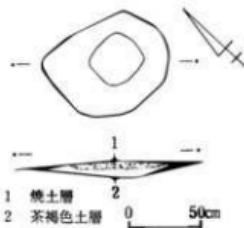


図205 D020号遺構炉跡実測図

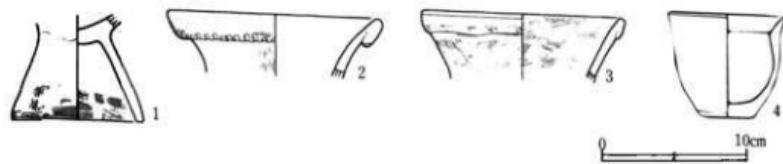
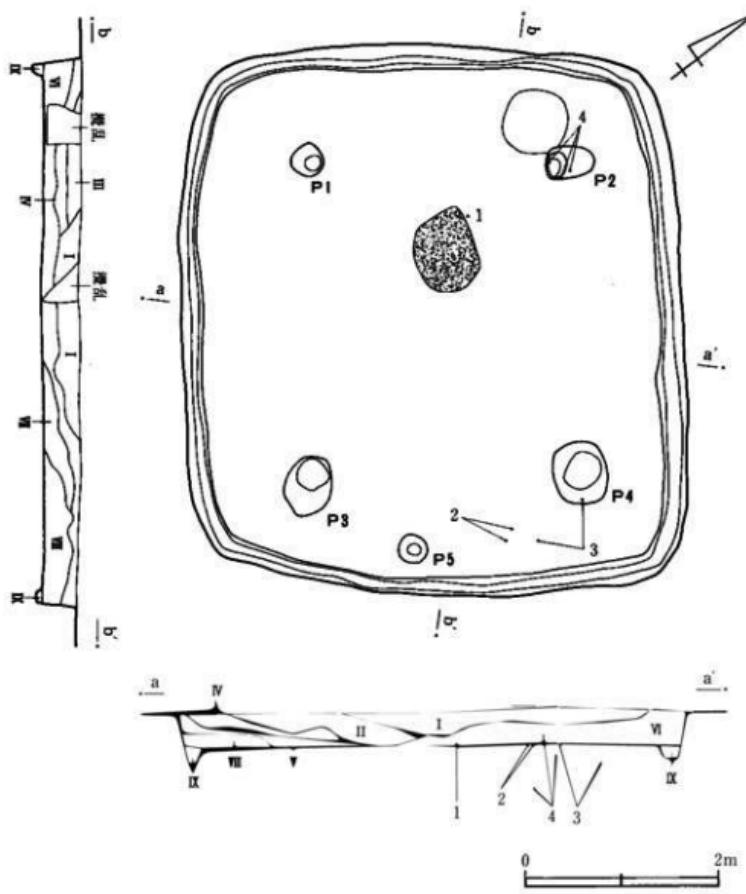


图207 D020号遺構出土遺物実測図

D020出土土壤一覽

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		高さ	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	—	—	9.2	台部のみ	ハケ目の後ヘラナダ	砂粒、石英	やや堅密	茶褐色	
2	壺	—	15.0	—	口縁部のみ	ハケ目の後ナダ	砂粒	堅密	茶褐色	
3	壺	—	14.3	—	口縁部のみ	ハケ目	砂粒	やや堅密	茶褐色	内外面試験器
4	鉢	7.0	8.2	3.6	3%	ヘラナダ	砂粒	堅密	茶褐色	

#### 14. D022号遺構（図208～210、図版40）

第II群の遺構群において西側に位置し、D007号遺構に近接する。第I群に属するD023号遺構

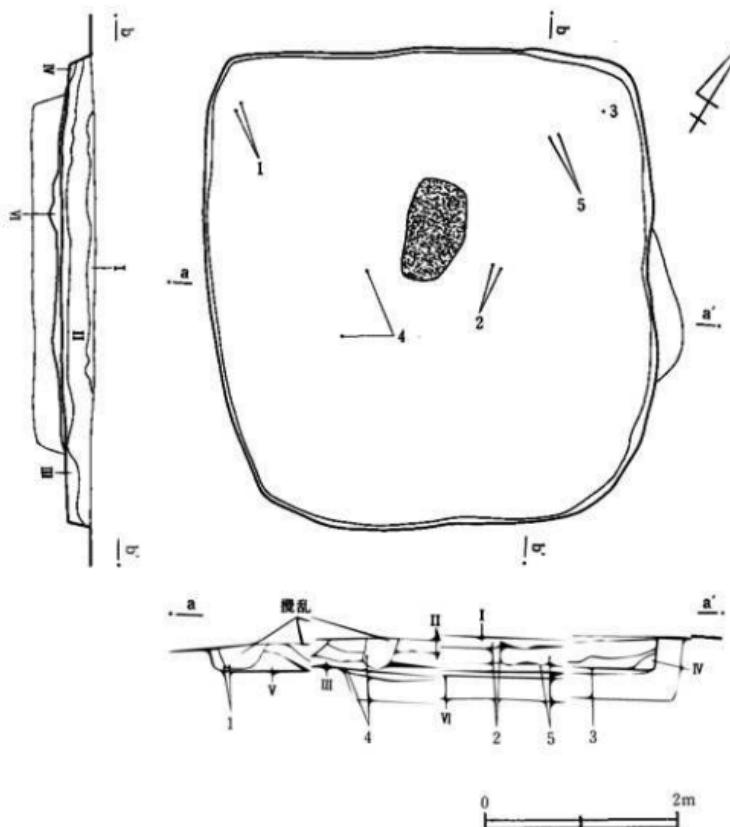


図208 D022号遺構実測図

構を切断して構築している。

**遺構** 北壁4.40m、東壁4.70mでやや不整な隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.35m掘り込んで床面に達している。貼り床が施されているが、全体に軟弱である。壁溝・柱穴は検出できなかった。

**炉** 住居中央より若干北寄りに位置する。長径1.06m、短径0.61m、深さ0.08mを計り、厚さ0.04mの焼土が堆積する。

**遺物出土状況** I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層暗褐色土層、IV層ローム粒混入暗褐色土層、V層ロームプロック混入暗褐色土層、VI層黄褐色土層が堆積する。VI層は貼り床を示す。遺物は北寄りに多いが、全体的には少なく、ほとんどが小破片である。III、V層を中心として出土する。

**出土遺物** 遺物は甕、壺形土器がある。壺形土器は1～4で、1、2、4は口縁部破片、3は底部破片である。壺形土器は5の底部破片である。

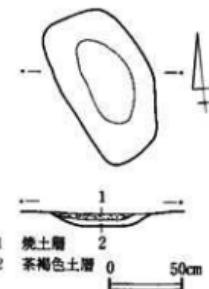


図209 D022号遺構炉跡実測図

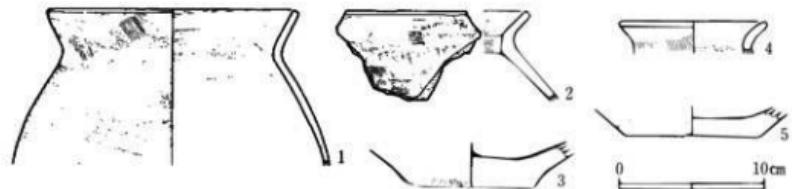


図210 D022号遺構出土遺物実測図

D022出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調 整	胎 土			備 考
		高	口径	底径			混入物	焼成	色 調	
1	甕	—	17.4	—	胸上半部	ハケ目	砂粒	堅	茶褐色	
2	甕	—	—	—	口縁部破片	ハケ目	砂粒	堅	茶褐色	
3	甕	—	—	9.0	底 部 のみ	ハケ目の後ヘラナダ	砂粒、石英	やや堅	黒褐色	
4	甕	—	—	10.2	—	口縁部のみ	ハケ目	堅	黒褐色	
5	壺	—	—	9.1	底 部 のみ	ハケ目の後ヘラ磨き	砂粒	堅	茶褐色	

### 15. D025A号遺構（図211～213、図版49、61）

第II群の遺構群において北側に位置し、D009号遺構に近接する。また、第II群の住居群においてMB003号遺構に最も近接する遺構である。なお、本遺構は一度拡張し、建て替えを行った

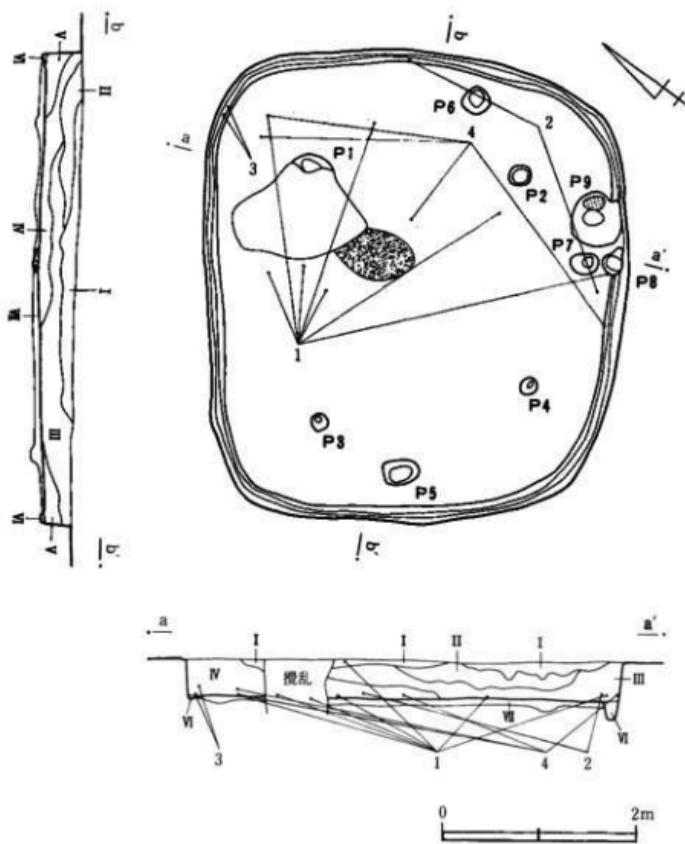


図211 D025A号遺構実測図

遺構である。建て替え後をA、建て替え前をBとする。

遺構 北壁4.10m、東壁4.10mでやや不整な隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.40m掘り込んでおり、直下には幅0.16m、深さ0.05mの壁溝が認められる。床面は中央部を中心として堅敏な状況を呈している。柱穴



図212 D025A号遺構炉跡実測図

は対角線上に配置する。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を検出した。径平均0.20m、深さ平均0.45mを計る。その他ピットは南壁中央部に近接してP<sub>5</sub>、北東コーナー部にP<sub>6</sub>及びP<sub>7</sub>～P<sub>9</sub>を検出した。P<sub>5</sub>は径0.36m、深さ0.22mを計る。P<sub>6</sub>～P<sub>9</sub>は径0.22～0.28m、深さ0.10m～0.17m、P<sub>9</sub>は貯蔵穴と考えられるもので径0.56m、深さ0.33mを計り、内部から白色粘土を若干検出した。

**炉** 住居中央よりややP<sub>1</sub>寄りに位置する。一部攪乱を受けているが長径0.83m、短径0.52m、深さ0.12mを計り、厚さ0.06mの焼土が堆積する。火床部は固く熱変している。

**遺物出土状況** I層ローム粒混入黒褐色土層、II層暗茶褐色土層、III層黒褐色土層、IV層茶褐色土層、V層黒色土層、VI層黄褐色土層、VII層ローム粒混入茶褐色土層が堆積する。VII層は貼り床を示す。遺物は床面上を中心として出土しており、平面的には北寄りに多く出土する。

**出土遺物** 遺物は甕、壇形土器がある。甕形土器は1、2で、1は台部を欠く。2は台部のみだが、中央に焼成後の穿孔があり、器台に転用されたものと考えられる。壇形土器は3、4で、3は口縁部破片である。

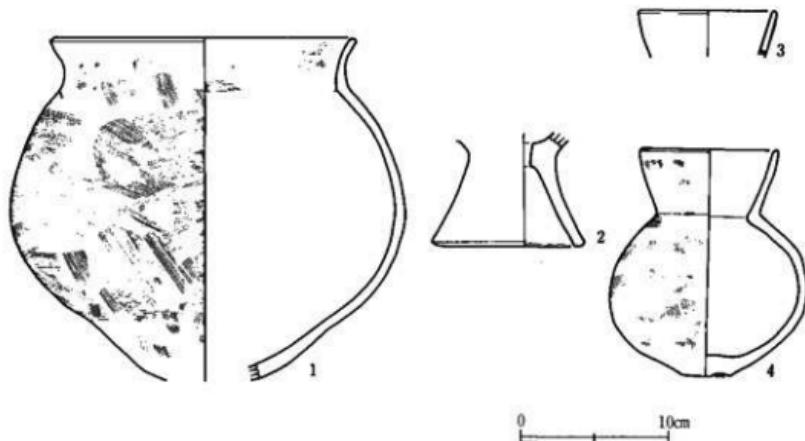


図213 D025A号遺構出土遺物実測図

D025A出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	—	21.0	—	台部欠損	ハケ目の後一部ナデ	砂粒	堅	黒褐色	二次焼成痕
2	台付甕	—	—	10.5	台部のみ	ヘラナデ	砂粒	やや堅	淡黒褐色	接合部に焼成後の穿孔有
3	壇	—	9.4	—	口縁部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅	茶褐色	
4	壇	15.3	9.4	3.2	%	ハケ目の後ヘラ磨き	砂粒	堅	茶褐色	

16. D025B号遺構 (図214、図版49)

**遺構** 北壁2.80m、東壁3.20mで長方形に近い隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。確認面より0.44m掘り込んで床面に達するが、拡張後のAとほぼ同一レベルの床面であるため、壁は確認できず、壁溝のみ検出した。壁溝は幅0.20m、深さ0.04mを計る。ピットは東壁中央部に近接してP1を検出し、径0.28m、深さ0.28mを計る。

**炉** 住居中央よりやや北寄りに位置する。遺構築時より建て替えを行った後まで一貫して同一の炉を使用したものと考えられる。

**遺物出土状況** 遺物は全てD025A号に継続されている。

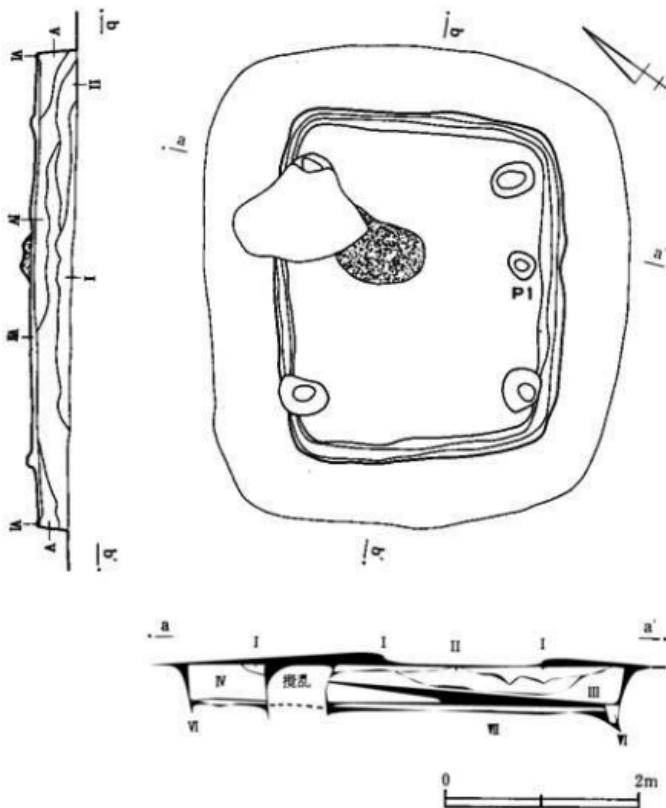


図214 D025B号遺構実測図

17. D026号遺構 (図215～217、図版49、50、61、62)

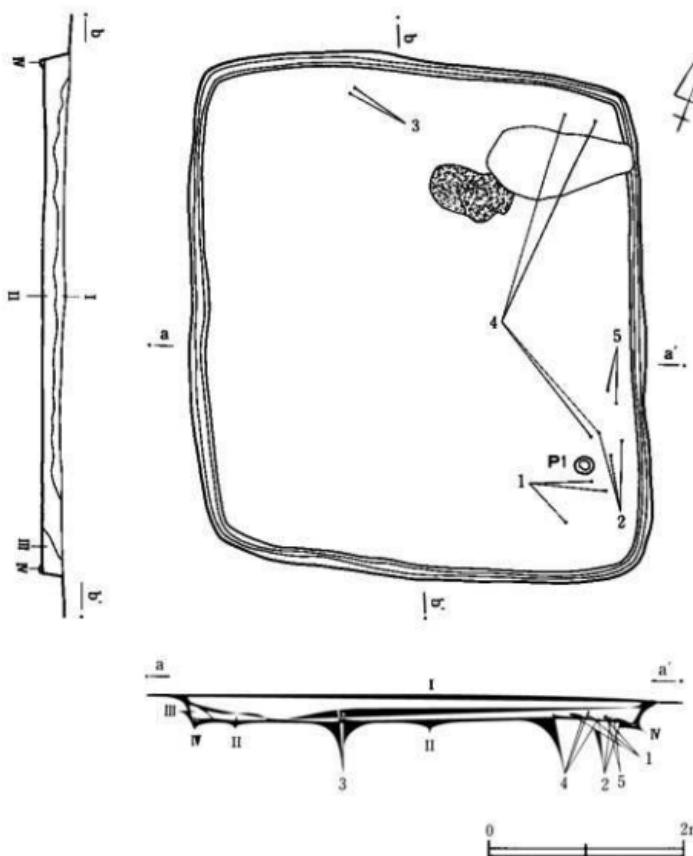


図215 D026号遺構実測図

第II群の遺構群においてほぼ中央部に位置し、D001、  
007号遺構に近接する。

**遺構** 北壁4.50m、東壁5.00mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.20m掘り込んでおり、直下には幅0.12m、深さ0.30mの壁溝が認められる。床面は中央部ではやや堅緻であるが、周辺部では軟弱である。ピットは南東コーナー部に近接してP<sub>1</sub>を検出

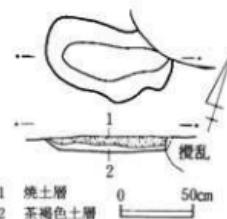


図216 D026号遺構炉跡実測図

し、径0.20m、深さ0.32mを計る。柱穴は検出できなかった。

**炉** 北寄りに位置するが、中心部よりやや東に寄っている。長径0.84m、短径0.50m、深さ0.10mを計り、厚さ0.07mの焼土が堆積する。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層茶褐色土層、III層暗茶褐色土層、IV層明茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上を中心として出土しており、覆土中出土は少ない。南東コーナー一部、すなわちP付近に纏った傾向が認められる。

**出土遺物** 遺物は甕、壺形土器がある。壺形土器は1～3で、2は台部を欠き、3は台部破片である。壺形土器は4、5で、いずれも胸部下半以下を欠く。4は折り返し口縁を呈し、4

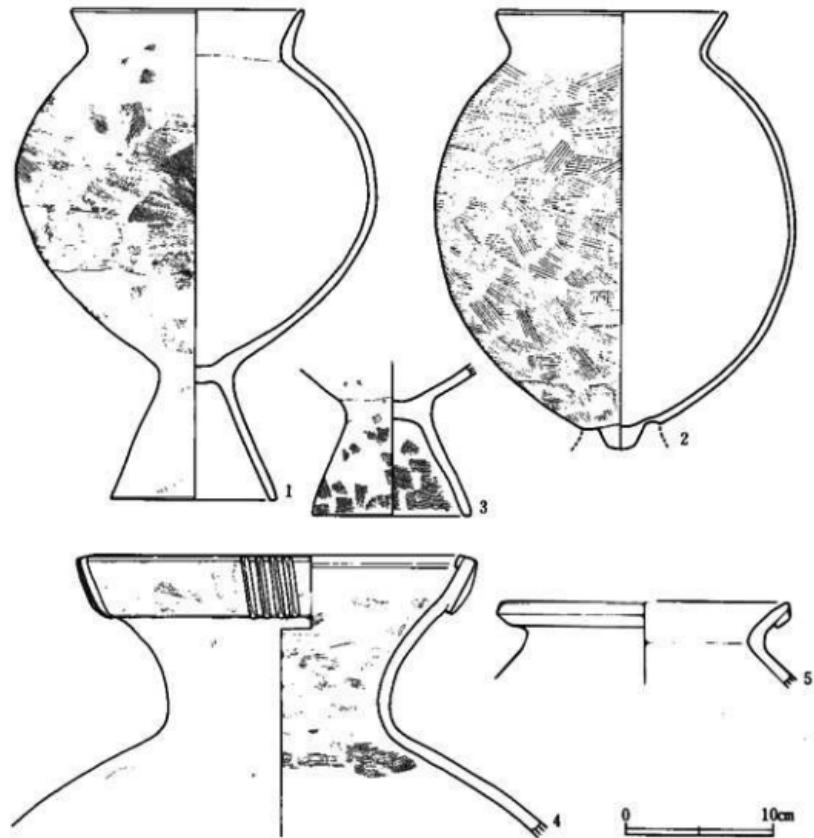


図217 D026号遺構出土遺物実測図

D026出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	33.0	15.8	11.2	3%	ハケ目の後一部ヘラナデ	砂粒	堅	黒褐色	二次焼成痕
2	台付甕	—	15.8	—	台部欠損	ハケ目	砂粒、石英、長石	堅	黒褐色	二次焼成痕
3	台付甕	—	—	10.9	台部のみ	ハケ目	砂粒、長石	堅	黒褐色	二次焼成痕
4	甕	—	26.8	—	口縁部のみ	ハケ目の後ヘラ磨き	砂粒、青母	堅	暗茶褐色	4列の棒状浮文が4組有
5	甕	—	19.8	—	口縁部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅	暗茶褐色	

個一組の棒状浮文が4か所で認められる。口唇部内側に凸帯が巡る。5は口唇部に凸帯を巡らすことにより、二重口縁を呈する。

### 18. D029号遺構(図218~221、図版50、62)

第II群の遺構群において南西部に位置し、D020、035号遺構に近接する。なお、床面上より多量の焼土と炭化材を検出し、焼失した遺構であることが判明した。

**遺構** 北壁3.96m、東壁4.36mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は傾斜を呈して掘り込み床面に達するが、遺構が斜面に構築されているため、東壁では最も深く0.40m、西壁では最も浅く0.15mを計る。床面は中央部では非常に堅緻な状況を呈するが、周辺部では軟弱である。ピットは東壁中央部に近接してP<sub>1</sub>を検出し、長径0.68m、短径0.50m、深さ0.08mを計る。やや不整な梢円形の平面形を呈する。壁溝、柱穴は検出できなかった。なお北寄り部分を中心として、床面上より多量の炭化材、焼土を検出した。

**炉** 住居中央よりやや北寄り部に1か所、その東側に近接して1か所、合計2か所で検出した。前者は長径0.56m、短径0.46m、深さ0.14mを計り、厚さ0.04mの焼土が堆

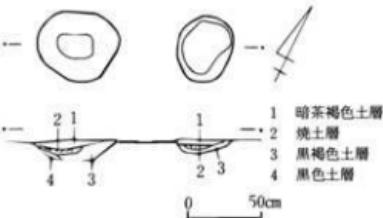


図218 D029号遺構炉跡実測図

D029出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調査	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付甕	30.2	17.6	11.1	略完形	ハケ目の後一部ヘラナデ	砂粒	堅	黒褐色	二次焼成痕
2	台付甕	—	14.6	—	台部欠損	ハケ目の後ヘラナデ	砂粒	堅	黒褐色	二次焼成痕
3	台付甕	—	—	6.0	台部のみ	ハケ目の後ヘラナデ	砂粒	堅	黒褐色	
4	甕	—	22.6	—	口縁部のみ	ハケ目の後ヘラ磨き	砂粒	堅	茶褐色	
5	高坏	—	13.2	—	脚部欠損	ヘラ磨き	砂粒	堅	赤褐色	内外面とも赤影

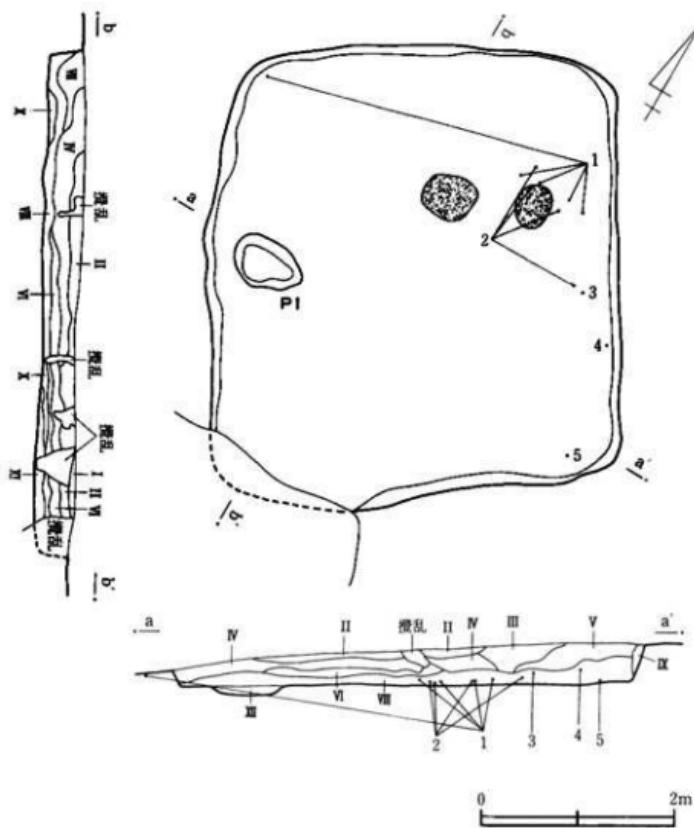


図219 D 029号遺構実測図

積する。後者は長径0.44m、短径0.36m、深さ0.09mを計り、厚さ0.03mの焼土が堆積する。前者の方が焼土を多く検出したが、相方とも火床部は熱変していない。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層ローム粒混入茶褐色土層、III層茶褐色土層、IV層ローム粒混入暗茶褐色土層、V層暗茶褐色土層、VI層明茶褐色土層、VII層ロームブロック混入暗茶褐色土層、VIII層暗褐色土層、IX層黄褐色土層、X層ローム粒混入明茶褐色土層、XI層ローム粒混入黒褐色土層、XII層ローム粒・ロームブロック混入暗茶褐色土層が堆積する。遺物は床面上出土を中心とし、住居東寄りに比較的集中するが、特に1、2の台付甕は炉周辺より出土する。

**出土遺物** 遺物は台付甕、壺、高环形土器がある。台付變形土器は1～3で、2は台部を欠損、3は台部破片である。1、2は口唇部に刷毛状工具による刻目が認められる。壺形土器は

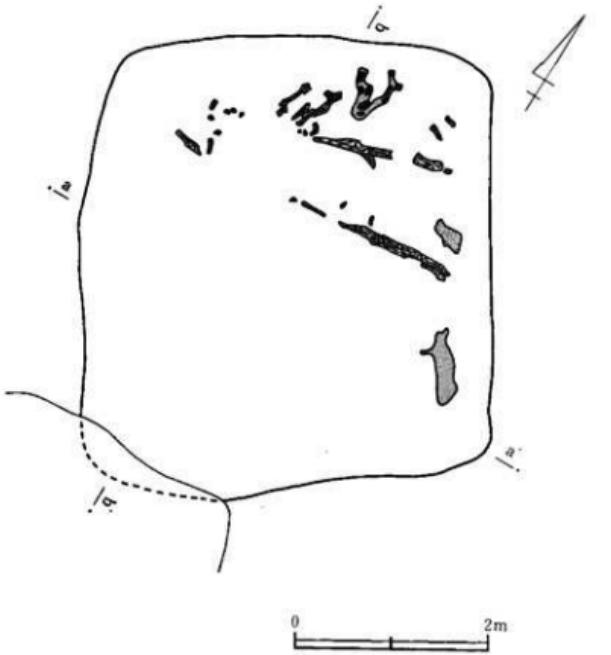


図220 D029号 遺構炭化物出土状況図

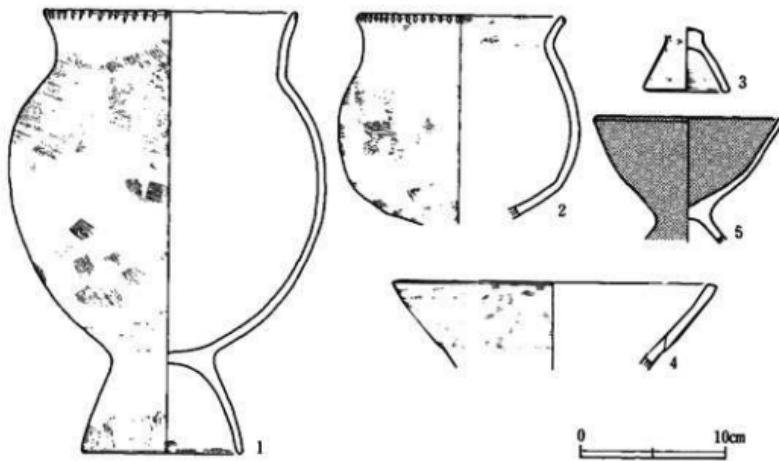


図221 D029号遺構出土遺物実測図

4で、口縁部破片である。複合口縁を呈する。高環形土器は5で、脚部内面を除き、全体に赤彩が施される。

#### 19. D031号遺構（図222、図版50）

第II群の遺構群のうち最も南側に位置し、最も近接しているD036号遺構とも約30mの距離をおく。東側部分約40%に擾乱を受け、炉など内部施設に欠落が認められるものの、床面の状況から住居跡と考えて差し支えないであろう。

遺構 北壁2.48m、東壁2.30

mで若干歪みを生じる方形の平

面形を呈する竪穴住居跡である。

壁はほぼ垂直に0.46m掘り込んで床面に達する。床面は中央部では堅緻であるが、壁際ではやや軟弱である。ピットは一部擾乱によって切られるが、南壁中央部に近接して径0.38m、深さ0.38mを計るP<sub>1</sub>を検出した。壁溝、柱穴、炉は検出できなかつた。

遺物出土状況 I層暗褐色土層、II層黒色土層、III層黒褐色土層、IV層ローム粒混入暗褐色土層、V層明茶褐色土層、VI層ローム粒混入黒色土層、VII層ローム粒混入黒褐色土層が堆積する。遺物は小破片で数点出土したのみであり、図示し得るものには皆無である。

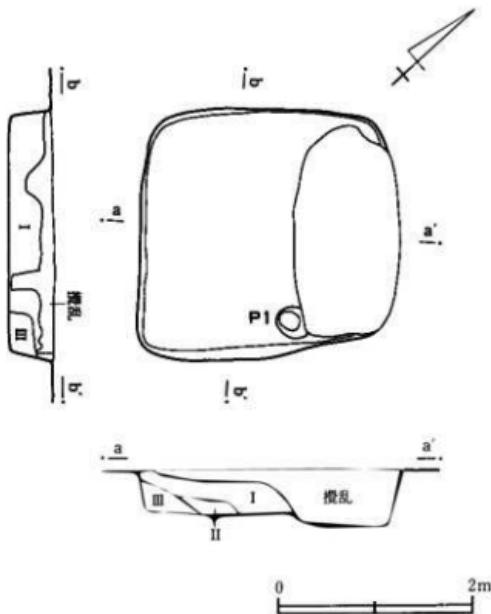


図222 D031号遺構実測図

#### 20. D033号遺構（図223、図版51）

第II群の遺構群において最も南側に位置し、D006、035号遺構が最も近接する。

遺構 北壁2.50m、東壁2.85mでやや不整な方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はやや傾斜を呈して0.18m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱であり、平坦でない。壁

溝・柱穴・炉は検出できなかつた。なお、住居北東側において床面上より焼土を検出したが、状況等の検討により、焼失に関係するものとは判断できない。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層明茶褐色土層が堆積する。遺物はわずか4点出土したのみである。いずれも甕の小片であるが、図示し得るものは皆無である。

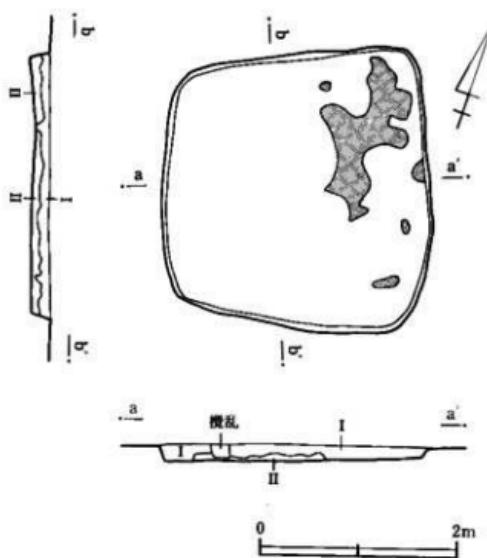


図223 D033号遺構実測図

### 21. D035号遺構 (図224~226、図版51、62)

第II群の遺構群において南西側に位置し、D020、029号遺構に接する。

**遺構** 北壁3.65m、東壁3.65mで隅丸方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に掘り込んで床面に達する。緩やかな斜面に構築されているため壁高は一様ではなく、東壁部が最も深く0.52m、西壁部が最も浅く0.28mを計る。床面は全体に堅緻な状況を呈する。ピットは南西コーナー部に近接してP<sub>1</sub>、南東コーナー部に近接してP<sub>2</sub>を検出した。P<sub>1</sub>は径0.40m、深さ0.10m、P<sub>2</sub>は径0.45m、深さ0.25mを計るが、性格は不明である。壁溝・柱穴は検出できなかった。

**炉** 住居中央より若干北寄りに位置する。長径0.57m、短径0.43m、深さ0.15mを計り、厚さ0.08mの焼土が堆積する。火床部は固く熱変している。

**遺物出土状況** I層暗茶褐色土層、II層茶褐色土層、III層黒褐色土層、IV層暗褐色土層が堆積する。遺物は周辺部に多く、床面上を中心として出土するが、ほとんどが小片である。図示

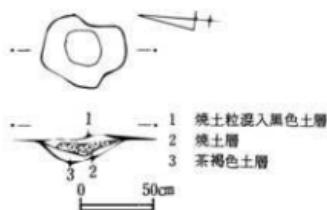


図224 D035号遺構炉跡実測図

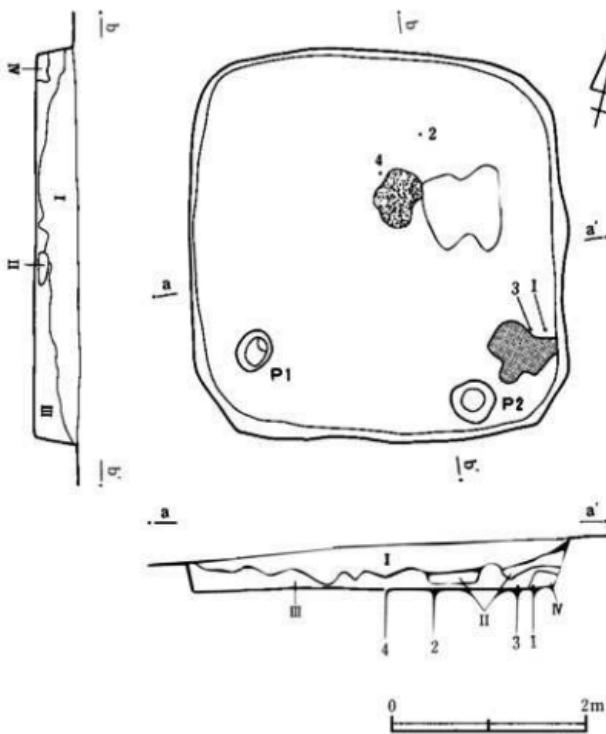


図225 D 035号遺構実測図

し得たものは壺及び高壺の脚部のみである。

**出土遺物** 遺物は台付壺、高壺形土器がある。台付壺形土器は1～3で、いずれも台部破片である。高壺形土器は4で、脚部破片である。

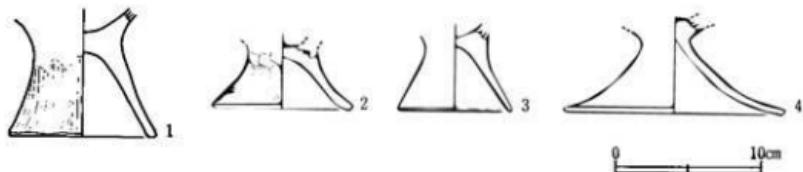


図226 D 035号遺構出土遺物実測図

## D035出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	台付壺	—	—	10.1	台部のみ	ハケ目の後ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
2	台付壺	—	—	9.8	台部のみ	ハケ目の後一部ヘラ削り	砂粒	堅緻	茶褐色	
3	台付壺	—	—	8.0	台部のみ	ヘラナデ	砂粒	やや堅緻	黒褐色	
4	高環	—	—	15.2	脚部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅緻	茶褐色	

## 22. D036号遺構(図227～229、図版51、62)

第II群の遺構において南側に位置し、D004、005号遺構に近接する。

遺構 北壁3.75m、東壁3.96mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.34m掘り込んで床面に達する。床面は全体に堅緻な状況を呈する。ピットは南壁中央部に近接し

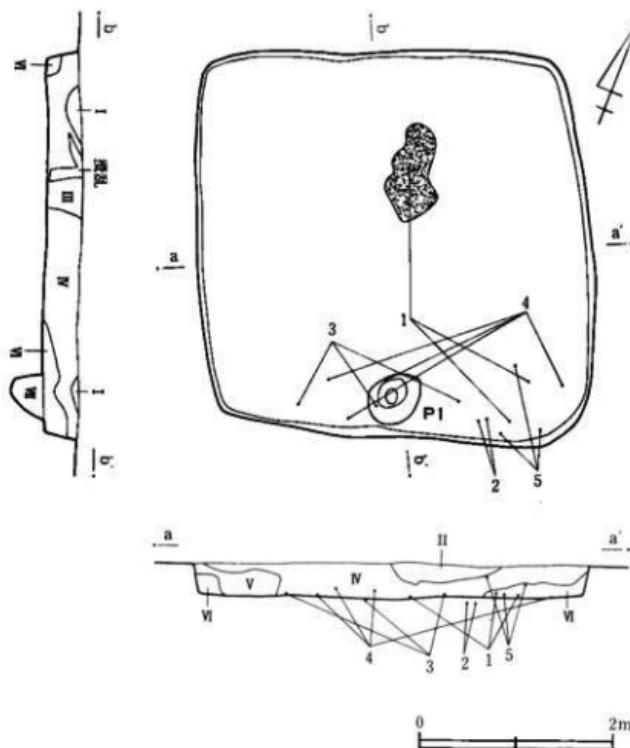


図227 D036号遺構実測図

てP<sub>1</sub>を検出し、径0.48m、深さ0.85mを計る。

2段に掘り込んでおりやや深い。壁溝、柱穴は検出できなかった。

**炉** 住居中央より北寄り部に位置する。長径0.98m、短径0.40m、深さ0.16mを計り、やや不整な楕円形の平面形を呈する。厚さ0.10mの焼土が堆積する。

**遺物出土状況** I層褐色土層、II層ローム粒混入黒褐色土層、III層黒褐色土層、IV層暗茶褐色土層、V層焼土粒混入暗茶褐色土層、VI層明茶褐色土層、VII層粘質灰褐色土層が堆積する。遺物は床面上出土を中心とするが、住居北側においては少なく、大部分が南側において出土している。



図228 D036号遺構炉跡実測図

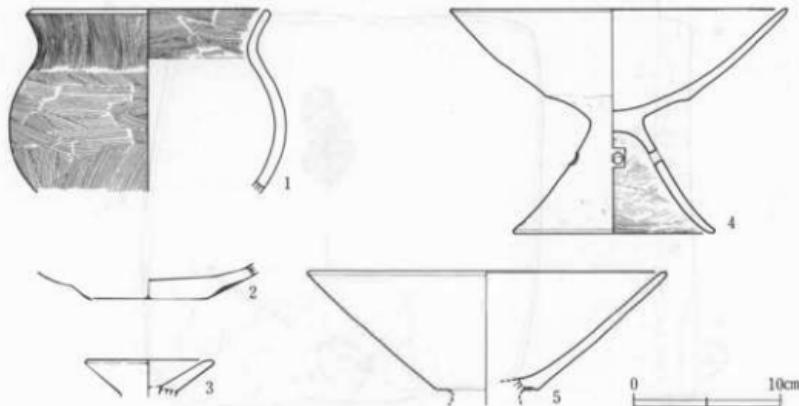


図229 D036号遺構出土遺物実測図

D036出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調 整	施 土			備 考
		器高	口径	底径			嵌入物	焼成	色調	
1	台付甕	—	16.6	—	肩上半部	ハケ目	砂粒	堅 砕	黑 楔 色	二次焼成痕
2	甕	—	—	8.6	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅 砕	黑 楔 色	
3	器 台	—	8.8	—	受部のみ	ヘラ削き	砂粒	堅 砕	茶 楔 色	
4	高 坯	15.1	23.2	13.8	%	环部ヘラ削き 底部ハケ目の後ヘラ削き	砂粒	堅 砕	淡 茶 楔 色	脚部4孔
5	高 坯	—	(24.0)	—	环部のみ	ヘラ削き	砂粒	堅 砕	赤 楔 色	

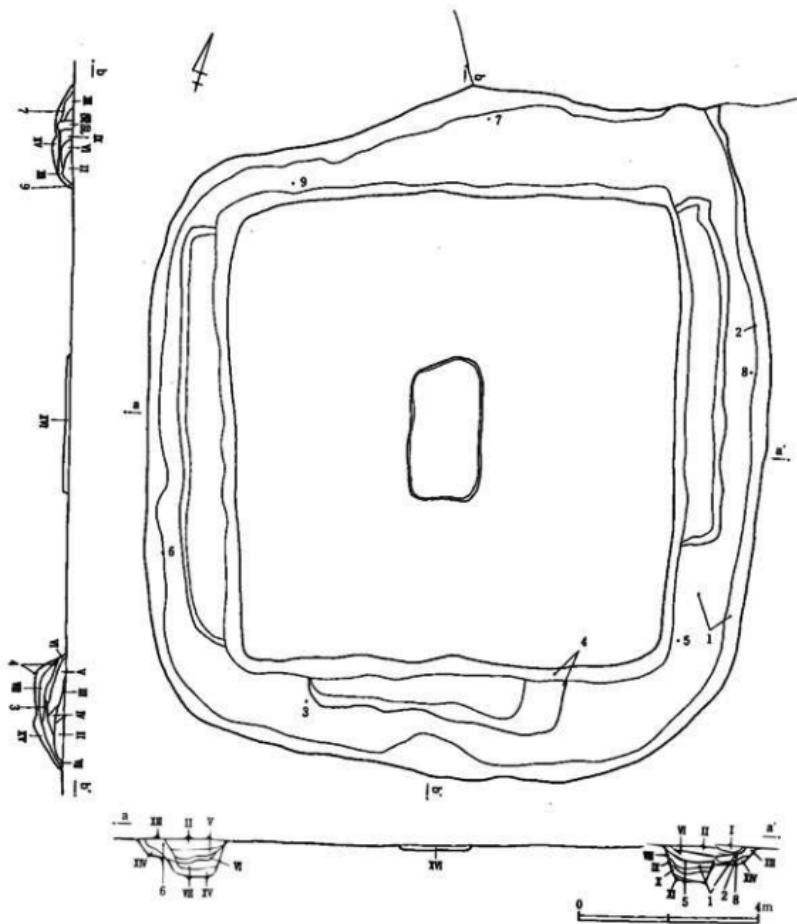


图230 MB 001号遗構実測図

**出土遺物** 遺物は台付甕、甕、器台、高坏形土器がある。台付變形土器は1で胴部下半以下を欠く。變形土器は2で底部破片である。器台形土器は3で脚部を欠く。高坏形土器は4、5である。4は脚部に4孔を有し、5は脚部を欠く。

### 23. MB 001遺構 (図230~233、表107、図版52~54、63、64)

第II群の遺構群においてほぼ中央に位置し、D001、009、010号遺構に近接する。MB002号遺構とは重複関係にあるが、詳細は後述するところである。なお、主体部をはじめとして豊富な量の遺物が出土しており、当集落を考える上においても重要な意味を有するところである。

**遺構** 最大幅2.74m、最小幅1.24mを計る周溝が、連続して四角に巡る方形周溝墓である。周溝は幅が一様ではなく、全体に溝中央部が広く、コーナー部が狭い状況を呈している。また、周溝は2度にわたって掘り込まれており、北溝を除く三方の溝の台状部側に認められる溝状の落ち込みは再度の掘り込みによるものである。周溝底面はやや凹凸状を呈するが、構築時は深さ約0.40m、再構築時は北溝を除く三方の溝で深さ0.50~0.75mを計る。

いずれも基本的には断面がU字状を呈するものと考えられる。なお、東溝については、覆土下層の状況から、人為的な埋め戻しの可能性が大であり、あるいはMB 002号遺構において認められる溝中埋葬施設の存在の可能性も考えられる。台状部は東西9.78m、南北10.52mを計り、中央部に南北方向に主軸をもつ土壙を有する。これが主体部に比定できるもので、北壁1.50m、東壁3.10mを計り、長方形の平面形を呈する。現在では深さ0.10mを計るが、本来さらに上位より掘り込まれていたと考えられる。なお、構築はMB 002号遺構よりも古い段階で行われているが、再構築段階では相方に直接の切り合い関係は成立していない。

**遺物出土状況** I層ローム粒混入

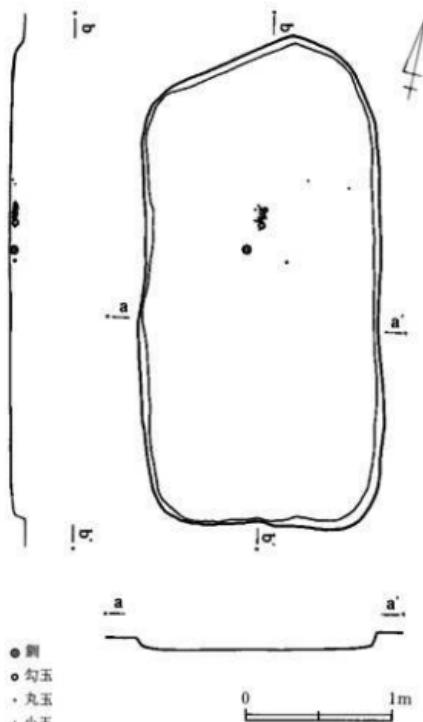


図231 MB 001号遺構主体部遺物出土状況図

黒色土層、II層ロームブロック混入茶褐色土層、III層黒色土層、IV層黒褐色土層、V層ローム  
ブロック混入黑褐色土層、VI層ロームブロック混入黑色土層、VII層暗茶褐色土層、VIII層ローム  
ブロック混入明茶褐色土層、IX層ローム粒混入明茶褐色土層、X層ローム粒・ロームブロック  
混入黑色土層、XI層黄褐色土層、XII層ローム粒混入茶褐色土層、XIII層茶褐色土層、XIV層明

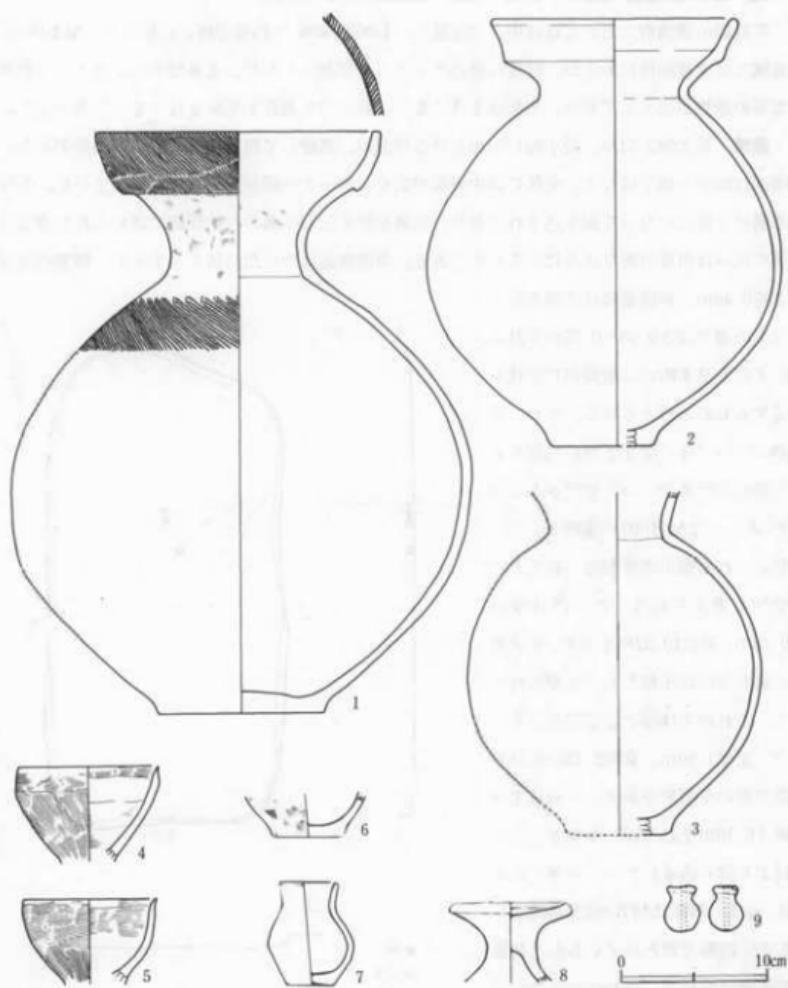


図232 MB 001号遺構出土遺物実測図(1)

茶褐色土層、XV層ローム粒・ロームブロック混入明茶褐色土層、XVI層ローム粒混入暗茶褐色土層が堆積する。遺物は東溝を中心として出土する傾向が認められるが、北溝においてはミニチュア土器を中心として出土する。いずれも覆土中層以上から出土しており、周溝埋没過程において流れ込んだものである。台状部縁辺に設置されていた供獻土器が流れ込んだものではないかと考えられる。台状部中央に位置する主体部からは、鉄釧、玉類がやや北寄りの位置において出土する。

**出土遺物** 遺物は周溝内より壺、鉢、高環形土器と土製品、主体部より鉄釧、勾玉、丸玉、

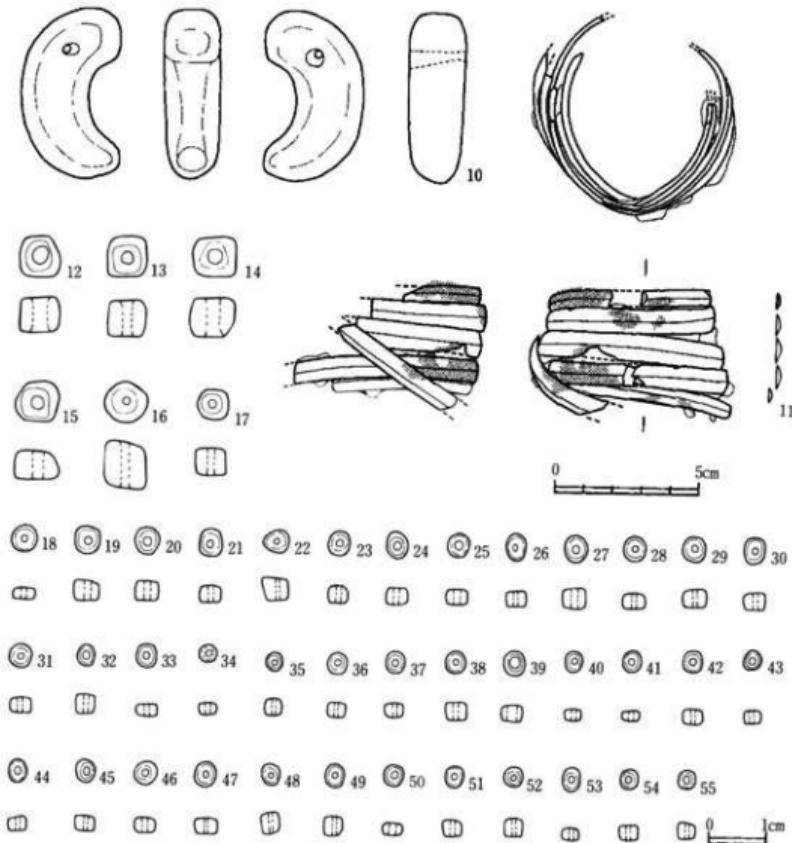


図233 MB 001号遺構出土遺物実測図(2)

## MB001出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		器高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	壺	40.0	19.6	11.3	略 完形	ヘラ磨き(環部はハケ) R.L.縞文	砂粒	堅 磨	赤褐色	
2	壺	29.3	17.2	7.1	劣	ヘラ磨き	砂粒	堅 磨	茶褐色	外面摩擦著
3	壺	—	—	7.3	口縁部欠損	ヘラ磨き	砂粒	堅 磨	茶褐色	焼成後底部打碎
4	鉢	—	9.6	—	底部欠損	ハケ目	砂粒	やや堅 磨	黒褐色	
5	鉢	—	9.0	—	底部欠損	ハケ目	砂粒	やや堅 磨	黒褐色	
6	壺	—	—	5.1	底部のみ	ハケ目	砂粒	堅 磨	黒褐色	
7	壺	7.1	4.2	3.3	略 完形	ナデ	砂粒	堅 磨	淡黒褐色	
8	高杯	—	—	—	腰合部のみ	ヘラ磨き	砂粒	堅 磨	茶褐色	

表107 MB001号遺構主体部出土ガラス製玉類計測表

捕団番号	名称	色調	大きさ(mm)			孔径(mm)	捕団番号	名称	色調	大きさ(mm)			孔径(mm)
			長径	短径	厚さ					長径	短径	厚さ	
12	丸玉	濃青色	7.9	7.1	5.5	2.5	34	小玉	青緑色	3.2	3.0	2.0	1.2
13	丸玉	濃青色	7.5	7.2	6.9	2.0	35	小玉	青緑色	3.1	3.1	2.8	0.9
14	丸玉	濃青色	7.5	7.3	6.2	3.0	36	小玉	青緑色	4.1	4.1	2.5	1.5
15	丸玉	濃青色	8.0	7.0	6.2	2.2	37	小玉	青緑色	3.8	3.7	2.2	1.2
16	丸玉	濃青色	7.0	7.0	8.2	1.9	38	小玉	青緑色	4.0	3.8	3.2	1.0
17	丸玉	濃青色	5.6	5.2	4.3	1.9	39	小玉	青緑色	4.0	4.0	2.8	2.0
18	小玉	青緑色	4.2	4.2	2.0	1.2	40	小玉	青緑色	3.3	3.0	1.8	1.2
19	小玉	青緑色	4.7	4.4	3.1	1.2	41	小玉	青緑色	3.3	3.3	2.1	1.2
20	小玉	青緑色	4.8	4.2	3.5	1.4	42	小玉	青緑色	3.8	3.6	2.8	1.0
21	小玉	青緑色	4.7	4.0	3.0	1.3	43	小玉	青緑色	3.2	3.2	2.5	1.1
22	小玉	青緑色	4.0	4.0	4.0	1.0	44	小玉	淡青色	3.9	3.2	2.1	1.2
23	小玉	青緑色	4.0	4.0	3.0	1.2	45	小玉	淡青色	3.9	3.5	2.4	0.9
24	小玉	淡青色	4.3	4.0	2.9	1.0	46	小玉	青緑色	4.0	4.0	2.6	1.2
25	小玉	青緑色	4.2	4.1	2.8	1.0	47	小玉	青緑色	3.0	3.0	2.6	1.0
26	小玉	淡緑色	4.0	3.5	3.0	1.2	48	小玉	淡青色	3.4	3.0	3.9	1.0
27	小玉	青緑色	4.0	4.0	3.2	1.5	49	小玉	青緑色	3.8	3.2	3.2	0.9
28	小玉	青緑色	4.0	3.9	2.6	1.1	50	小玉	淡青色	3.8	3.8	2.0	1.6
29	小玉	青緑色	4.0	4.0	2.9	1.0	51	小玉	青緑色	3.6	3.5	2.8	1.0
30	小玉	青緑色	4.5	4.0	3.3	1.0	52	小玉	青緑色	3.2	3.2	3.0	1.1
31	小玉	青緑色	3.8	3.6	2.5	1.0	53	小玉	青緑色	3.5	3.0	2.2	1.0
32	小玉	青緑色	3.8	3.4	3.0	1.4	54	小玉	青緑色	3.8	3.8	2.5	1.6
33	小玉	青緑色	4.0	3.8	2.0	1.4	55	小玉	青緑色	3.0	3.0	3.0	1.1

小玉が出土した。壺形土器は1～3、6、7である。1はほぼ完形で、複合口縁を呈する。2は複合口縁を呈する。胸部中位から底部にかけて一部欠損しており、人為的に打ち碎いた可能性も考えられる。3は球形に近い形状を呈す。底部は一部を除き欠損している。7はミニチュアで、6は底部破片、7はほぼ完形である。鉢形土器は4、5で、いずれも底部を欠損する。高壺形土器は8で接合部分のみである。器台形土器として再利用された可能性も考えられる。土製品は9の壺を模したもので、上部から底部にかけて穿孔が認められる。主体部より出土した遺物は10～55である。10は硬玉製の勾玉で、長さ5.8cm、中央部幅2.3cm、厚さ2.0cmを計る大形品である。12～17はガラス丸玉で、色調はいずれも濃青色である。やや角ばった形状を呈し、一辺平均0.70cm、厚さ0.43～0.82cmを計る。18～55はガラス小玉で、色調は青緑色のものと淡青色のものがある。丸味をもった形状を呈し、径平均0.37cm、厚さ0.18～0.40cmを計る。11は鉄製の釧であるが、約1/3を欠損し、また錆化のためのもあり不明な点も少なくない。螺旋状に5段巻き上げたもので、中央が最も幅広く0.9cm、両端はしだいに幅狭くなり0.5cmを計る。端部として確認できるのは最下段に一か所のみである。断面は三角形の形状を呈し、側面は鋭利である。外面には布の痕跡が認められるが、内面には認められない。

#### 24. MB002号遺構（図234、235、図版52、55、56、64）

MB001号遺構の北側に位置し、D009号遺構に接する。

**遺構** 最大幅1.90m、最小幅0.94mを計る周溝が、連続して四角に巡る方形周溝墓である。周溝を含めた規模は東西に10.94m、南北に11.70mを計る。周溝は幅が一様ではなく、各コーナー部が狭くなる状況を呈する。周溝断面はU字状を呈するが、底面はやや凹凸が認められる。深さは一定ではなく、0.20～0.60mを計るが、全体的に西溝から南溝にかけて浅く、東溝では深い。台状部は東西に7.80m、南北に8.67mを計る。台状部上に土壤状の落ち込みは検出できなかったが、東溝に土壤A、西溝に土壤Bをそれぞれ検出した。土壤Aは東溝のほぼ中央の外方寄りに位置して検出した。長軸2.20m、短軸0.70m、深さ0.74mを計る。土壤Bは西溝のほぼ中央に位置して検出され、長軸2.05m、短軸0.70m、深さ0.74mを計る。短軸は周溝幅と同一であり、また周溝底面の高さまで人為的に埋めもどされた形跡が認められる。相方とも溝と同一方向に掘り込まれているが、土壤Aは周溝埋没後に再度掘り込まれたものであり、土壤Bは周溝埋没前に掘り込まれたものである。土壤B内より出土した遺物は皆無であるが、土壤Aの底面より管玉が出土しており、相方とも埋葬施設と考えてよいであろう。MB001号遺構との切り合い関係は、MB001号遺構に示したとおりである。

**遺物出土状況** I層ローム粒混入黒色土層、II層ローム粒混入暗茶褐色土層、III層ロームブロック混入暗茶褐色土層、IV層ローム粒混入明茶褐色土層、V層ローム粒・ロームブロック混入暗茶褐色土層、VI層黒褐色土層、VII層黒色土層、VIII層暗茶褐色土層、IX層明茶褐色土層、X

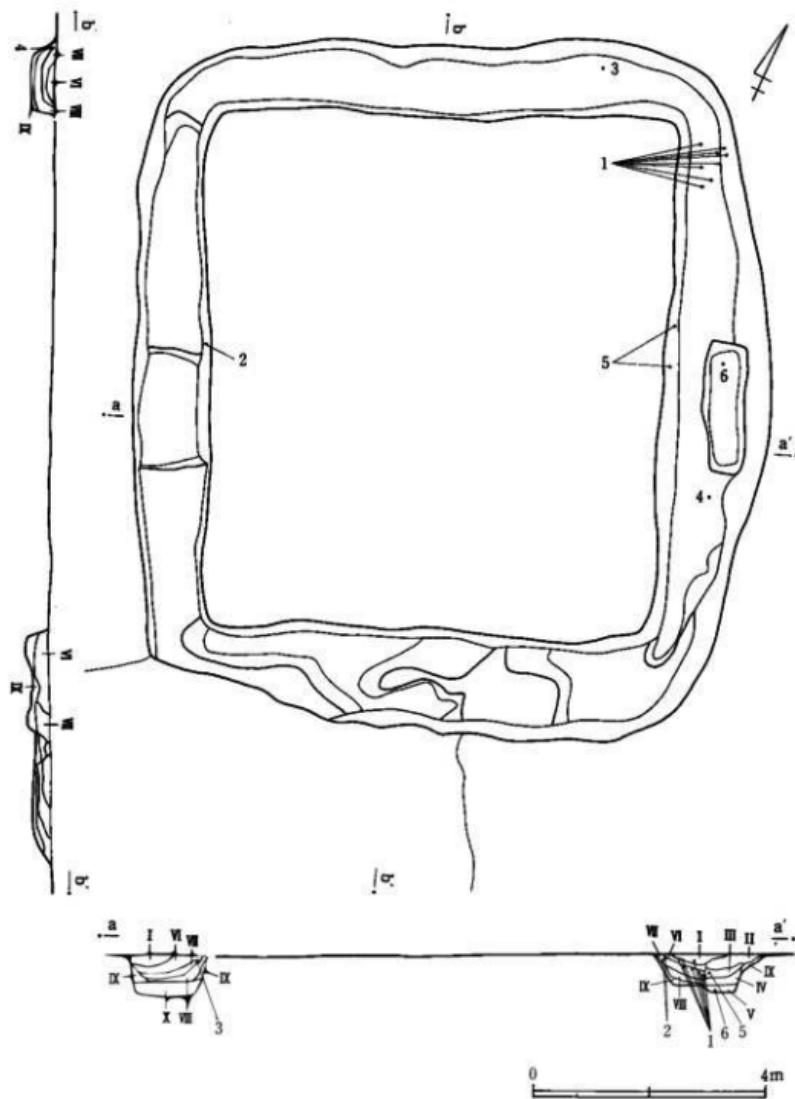


图234 MB 002号遗构实测图

層茶褐色土層が堆積する。遺物は全体に少ないが、東溝に集中する傾向が認められる。いずれも覆土中へ上層にかけての出土であるが、特に北東コーナー部においてはかなり破損した状況での出土が認められる。土壌Aの底面上より管玉が出土した。

**出土遺物** 遺物は周溝内より壺、壺形土器、土壌Aより管玉が出土する。壺形土器は2で口縁部破片である。壺形土器は1、3～5である。1は底部が一部欠損する。また、口縁部も欠損する。4はミニチュア土器で、口縁部を欠く。3は底部破片、5は口縁部破片である。6は碧玉製の管玉で両側より穿孔が成されている。

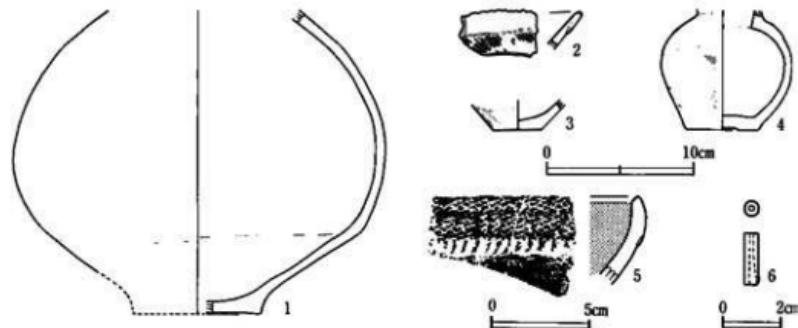


図235 MB002号遺構出土遺物実測図

MB002出土土器一覧

番号	器種	法 葉(cm)		遺存度	調 整	胎 土			備 考
		器高	口径			混入物	焼成	色 調	
1	壺	—	—	8.8	口縁部欠損 ヘラ磨き	砂粒	堅 織	茶褐色	焼成後底部打砂
2	壺	—	—	—	口縁部破片 RL斜線文	砂粒	堅 織	淡茶褐色	
3	壺	—	—	3.3	底 部 のみ ハケ目	砂粒	堅 織	茶褐色	
4	壺	—	—	5.1	底 部 のみ ハケ目	砂粒	堅 織	淡茶褐色	
5	壺	—	—	—	口縁部破片 附加条線文 ヘラ磨き	砂粒	やや堅 織	淡茶褐色	

## 25. MB003号遺構（図236、237、図版56）

第II群の遺構群において最も北側に位置し、やや孤立の感があるが、D025号遺構に最も近接する。また、MB001、002号遺構とは主軸も若干異なる。

**遺構** 幅平均0.55m、深さ平均0.20mを計る周溝が連続して四角に巡る方形周溝墓である。周溝を含めた規模は東西に5.86m、南北に7.00mを計る。周溝底面は平坦であり、断面はU字

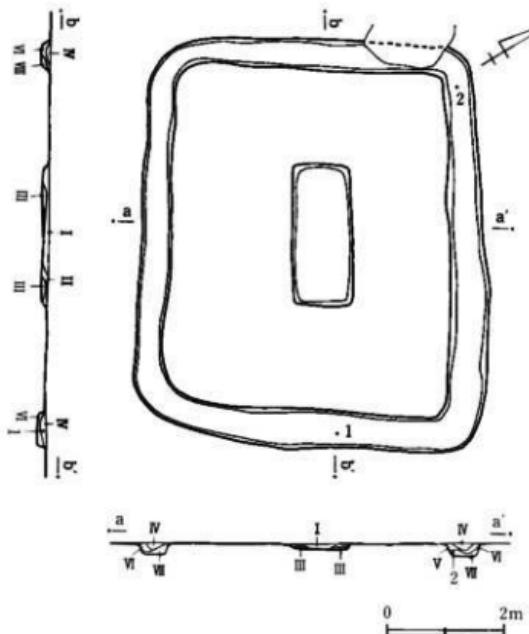


図236 MB 003号遺構実測図

状を呈する。台状部は東西に4.78m、南北に5.80mを計り、中央部に南北方向に位置する土壤を有する。これが主体部に想定できるもので、北西壁0.98m、北東壁2.42mを計り、長方形の平面形を呈する。現在では深さ0.12mを計るが、本来さら位高位から掘り込まれていたと考えられる。しかしながら、周溝部と主体部の標高差は小さく、MB 001号遺構と比較すると、周溝部が極めて小規模であることが指摘できる。

**遺物出土状況** I層茶褐色土層、II層明茶褐色土層、III層ロームブロック層、IV層ローム粒混入黒褐色土層、V層暗黒褐色土層、VI層ロームブロック混入茶褐色土層、VII層黒褐色土層、VIII層ロームブロック混入明茶褐色土層が堆積する。遺物は周溝部より2個体分の破片が出土したのみであり、主体部での出土は皆無である。

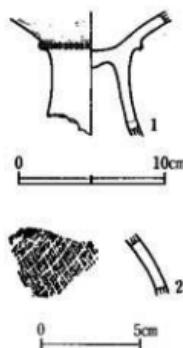


図237 MB 003号遺構出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		縦高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	高坏	—	—	—	接合部のみ	坏部ハケ目の後ナデ 脚部へラ磨き	砂粒	軟弱	茶褐色	脚部穿孔有
2	壺	—	—	—	脚部砂片	附加条縄文	砂粒	堅硬	黑色褐色	

**出土遺物** 遺物は、高坏、壺形土器がある。高坏形土器は1で、坏部と脚部の接合部には凸帯が巡り、棒状工具による押捺が施される。2は壺形土器破片で、附加条縄文が施される。

## 第3章 まとめ

### 第1節 遺物について

#### 1. 弥生式土器の様相

これまでにもしばしば述べてきたように、ヲサル山遺跡は権現後遺跡とは同一台地上に立地しており、当該期の集落について密接な関連性が指摘できる。しかしながら、出土遺物の対比からは相違する側面を有していることも指摘できる。

まず大きな点としては、久が原、弥生町式に比定される土器が出土していない、すなわち当地方特有の弥生文化を展開していることである。ただ、権現後遺跡において久が原、弥生町式文化を展開する一群は、基本的には第I群内に認められるのみであり、立地上ヲサル山遺跡とはやや異なることを考慮すれば理解できよう。

次にヲサル山、権現後両遺跡を通じて主体的である印手式土器についても相違点を指摘できる。壺形土器については、胸部に施される附加条縄文が網目様を呈するもの、あるいはS字状結節文によってのみ構成されるものが認められる。また、高坏形土器が多く出土している点も指摘できる。特に、壺形土器にも認められる網目様を呈する附加条縄文を施しているものもあり、文様構成上器種を越えた状況が看取される。これらの状況は、時期差として捉えるべきであろう。網目様を呈する文様構成、あるいはS字状結節文の多用化は、南関東地方のいわゆる久が原、弥生町式と対応されるならば、進出的要素として捉えることが可能であろう。また、壺形土器主体の文化であると一般に言われている当地方において、高坏形土器が少なからず認められる状況は、印手式文化からの脱皮前夜の様相を呈していると言ってよいと考えている。

また、当該期の住居跡に五領式土器の混入が多く認められることや、第II群とした五領式期に比定される遺構群と立地を同一としていることから、弥生時代最終末期、すなわち五領式期直前期として位置づけたい。

なお、権現後遺跡第IV群Aについても一部同一の様相を呈するものが認められることから、ヲサル山遺跡第I群と時期的な重なりが存在するものと考えている。

## 2. 五領式土器の様相

当台地上においては、弥生時代最終末期から五領式期への連続的な変遷が考えられるところであるが、土器の上からは様相が大きく変化しており、一大画期として捉えることができる。器種の分化が著しく、壺、壺、鉢、高壺、器台形土器の他、各種ミニチュア土器（壺、鉢形）が認められる。

壺形土器はいずれも台部を有するものであるが、権現後遺跡においては平底のものも存在する。この平底のものについてはいずれもスヌの付着が認められ、煮沸機能を有していたことが窺われる。したがって、台部の有無によって機能的な差を考えることはできない。東葛地域を除く、東京湾東岸地域では平底の壺形土器を主体としており、平底文化圏とでも言える状況である。ただ、東葛地域においては東京湾西岸地域と同一であり、台付壺形土器を主体としていることから、ヲサル山遺跡はむしろ東葛地域に近い状況を呈していると言えるが、平底の壺形土器も客体的ではあるが確実に存在することから、台付文化圏の境界あたりに当遺跡が位置していると考えられる。こうした状況は、あたかも弥生時代終末期において印手式と久が原、弥生町式が同一集落内において混在している状況と合致するものと言えよう。ただ、弥生時代後期において平底文化と言われる印手式が主体であった当台地上において、五領式期に至っては台付のものが主体となった状況は注意する必要があり、やはり大きな画期として捉えておく必要があろう。

壺形土器は大形のものと小形のものに分類できる。大形のものについては全容を知り得る資料は皆無であるが、棒状浮文など弥生的特徴を有したものがある。小形のものについてはいわゆる「ヒサゴ状」を呈するものである。

高壺形土器は、壺部下端に稜を有し直線的に開くタイプが見られる。東海西部地方、いわゆる欠山式に系譜を求める能够で、当遺跡において主体を成すタイプである。

器台形土器は、受部が直線的に開くタイプとやや内彎するタイプがある。しかしながら、これとセットを成すと考えられる小形丸底壺は一点も出土しておらず、この状況は権現後遺跡においても同一である。

以上、各種土器の様相から、五領式土器の中でも古く位置づけられるものと考えられ、小形丸底壺出現前段階として捉えることができる。

## 3. 鉄釧について

MB001号遺構より鉄釧が出土している。東日本において管見に触れるところでは、長野県須

表108 東日本における鉄釧の類例

遺跡名	地域	出土遺構	規模(cm)		形態	布の付着	共伴遺物 (土器以外)	時期
			内径	幅				
須多ヶ峯	長野・飯山	方形周溝墓	5.2	3.8	螺旋状に8重	外面	勾玉	箱清水式期
丘中学校	長野・塙尻	#	5.2~5.8	0.7~0.9	螺旋状に3~4重	#	管玉、ガラス小玉	弥生時代後期~古墳時代前期
石墨	群馬・沼田	土壙墓(4.7)	0.5	(破片13片)	なし	なし		弥生時代後期?
#	#	#	4.0	0.6	螺旋状に7重	内外面	なし	#
有馬	群馬・渋川	稚床墓	—	—	螺旋状に3重	—	—	博式期?
受地だいやま	神奈川・横浜	方形周溝墓	—	0.6	(破片1片)	なし	管玉、ガラス小玉	朝光寺原式期
ヲサル山	千葉・八千代	#	5.3~5.7	0.5~0.9	螺旋状に5重	外面	勾玉、ガラス丸玉、小玉	古墳時代前期

註1 多ヶ峯遺跡、丘中学校遺跡、群馬県石墨遺跡、有馬遺跡、神奈川県受地だいやま遺跡で出土しており、本例を加えて6遺跡となる。方形周溝墓、稚床墓など、いずれも埋葬施設からの出土であり、時期的には弥生時代終末期から古墳時代初頭に限定されるようである。

大きさ、形状についてはほとんど同一に近く、螺旋状に巻き上げられ、断面は凸レンズ状を呈している。また、漆が塗布されている関係から錆化があり進んでおらず、遺存状況は良好である。このように漆が塗布された例は現在のところ確認していない。

また出土位置は、勾玉等玉類が集中して出土した地点より15cm程南側であり、玉類が被葬者の胸部にあたる位置を示していると考えるならば、鉄釧は鳩尾付近に位置すると言える。したがって、被葬者は鉄釧を装着した手を鳩尾付近に置いていたことが想定でき、右手に装着していたものと考えられる。なお、他の例が示すように、本例も被葬者の衣服の一部として捉えられる布痕が認められる。

中部高地地方に分布の中心をもつ鉄釧がいかなる背景のもとに当遺跡に取り入れられたか、また漆が塗布された状況をどのように捉えるか。鉄釧を取り巻く問題は、集落構造を考えいく上においても大きな課題である。

### 註

1. この類は今まで弥生式土器には存在しないと考えられていたものだが、ヲサル山、權現後遺跡では少なからず確認しており、他遺跡でも誤認されていた可能性が大である。網目様織糸文が見られる南関東系と附加条縞文が見られる北関東系の合体地域において存在することは注目すべきことであり、今後とも注意する必要があろう。

2. a 高橋 桂「北信濃須多ヶ峯弥生式墓塙調査略報」『考古学雑誌』第51巻3号 昭和41年

- b 高橋 桂「須多ヶ峯弥生式墓壙発見の鉄釧再報」『考古学雑誌』第52巻3号 昭和42年
3. 塩尻市教育委員会「丘中学校遺跡」 昭和58年
4. 沼田市教育委員会「石墨遺跡」 昭和60年
5. a 友廣哲也「有馬遺跡」「年報2」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和58年  
b 友廣哲也「有馬遺跡弥生礎床墓」「研究紀要1」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和59年
6. a 横浜市緑区奈良地区遺跡調査団「(No11)受地だいやま遺跡発掘調査概報 I」 昭和57年  
b 横浜市緑区奈良地区遺跡調査団「(No11)受地だいやま遺跡発掘調査概報 II」 昭和58年
7. 5 b と同じ
8. 6世紀末頃にも鉄釧が見られ、群馬県金山古墳群第2号古墳で出土するが、福岡県広石古墳群II-2号墳出土例に類似し、形態的にもまったく異なることから、別系統として扱う必要があろう。  
群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財事業団「大釜遺跡・金山古墳群」 昭和58年  
福岡市教育委員会「広石古墳群」 昭和52年

## 第2節 遺構について

弥生時代最終末期に比定されるのは第I群の住居群である。出土遺物は絶じて少ない状況であるが、遺構の配置状況、土器の混入状況など多方向からの検討により1時期として扱って差し支えないであろう。

平面形態は隅丸長方形を呈するものが主体を占めており、D024号遺構に代表される1辺2.9mを計る小形住居跡から、D016号遺構に代表される1辺7.8mを計る大形住居跡まで変化に富む。また、D024、D027、D034号遺構の小形住居跡以外は柱穴を具備しており、柱穴を有するタイプが優位に立っていることが指摘できる。がその反面、D023号遺構といった小形で柱穴を有する住居跡も認められ、櫛現後遺跡I、II、III群とは異なった状況を看取することができる。

なお、第I群に所属するP004号遺構からは印手式に比定される菱形土器が出土するが、墓壙としての可能性も考えられる土壤である。五領式期に至って方形周構墓が構築されるが、それ以前の葬制について知り得る資料となるかも知れないことを付記しておきたい。

第I群から連続的な変遷が考えられる住居群は、五領式期に比定される第II群である。土器様相からは1時期として捉えられるものだが、重複関係はないものの、到底同時存在が考えられないほど接近した住居跡があることから、すべてが同時期の所産とは言えないようである。

平面形態は隅丸方形に統一され、規模についても多少の大小は認められるものの、第I群に比べると平均化してきたようである。また、柱穴を有するタイプと有しないタイプはほぼ同じ割合で存在し、規模との関連性は認められない。

また、当該期には方形周溝墓が存在する。権現後遺跡において検出した3基が住居群とは占地を異にしているのに対し、ヲサル山遺跡では同一の占地状況を示している。これは出土遺物の様相とも合致した状況であり、権現後遺跡M010号遺構の出土土器が集落出土のものと異なる様相を呈しているのに対し、ヲサル山遺跡出土土器については集落出土のものとほとんど同一の様相を呈する土器群である。このことはまた、住居群と方形周溝墓が時期的に近似していることを裏付けているとも言えよう。

## 第IV部 歷 史 時 代

## 第1章 歴史時代の概観

歴史時代に比定できる遺構は竪穴住居跡と掘立柱建物跡、それに溝状遺構である。いずれも遺構数が少なく、南側に開口する小規模な支谷によって区切られている台地東側に位置する権現後遺跡で当該期の住居跡67軒を検出しているのとは、きわめて対照的なあり方を示していると言ってよいであろう。南側に開口する小支谷が当該期の集落が展開するうえで重要な役割を演じていたことは容易に想像されよう。萱田地区遺跡群全体をみても、このような集落構成は認められず、特異な状況を呈していると言える。権現後遺跡において検出した67軒の当該期の住居跡は、いずれも新川をのぞむ台地東側縁辺地域に集中して展開しており、ツサル山遺跡に展開した2軒の住居跡とは明らかに異なる一群として捉えて良いであろう。

こうした権現後遺跡をはじめとする、萱田地区遺跡群の状況と対比させて考えていくことが必要であろう。

## 第2章 遺構と出土遺物

### 第1節 はじめに

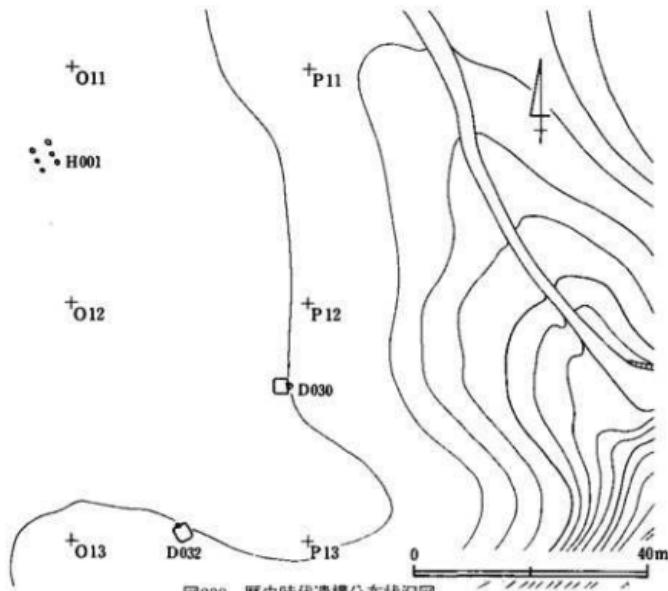


図238 歴史時代遺構分布状況図

歴史時代に比定できるのは一群のみであり、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟で構成される。台地南側縁辺地域を中心として立地しており、南側は急斜面を呈して須久茂谷津の沖積地に続くため、これらの遺構をもって完結する一群として捉えることができる。(図238)

ヲサル山遺跡における当該期の遺構は少ないが、時期あるいは立地上の問題等を考慮した上で、萱田地区遺跡群内における位置づけを行っていくことが、当遺跡における集落解明の手がかりとなっていくであろう。

## 第2節 遺構と遺物

### 1. D 030号遺構(図239~241、図版65)

権現後遺跡と区分する小支谷の最奥部近くの右側平坦部に立地している。南西30mにD 032号遺構が位置している。

遺構 北壁2.40m、東壁2.30mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁は垂直に0.33m掘り込んで床面に達する。床面は全体にやや軟弱である。ピットは各壁コーナー部分に近接してP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>、それに西壁中央部に近接してP<sub>5</sub>を検出した。P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>は径0.25~0.32m、深さ0.10~0.14mを計る。柱穴の可能性も考えられるピットである。P<sub>4</sub>は長径0.90m、短径0.62m、深さ0.45mを計り、底面において焼土を検出した。焼土の性格については不明だが、いわゆる貯蔵穴の可能性を有するピットと考えられる。P<sub>5</sub>は径0.46m、深さ0.18mを計る。焼土をカマド周辺部及びP<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>部分にかけての床面上より多量に検出されたが、わずかに炭化粒が認められた程度で、炭化物、炭化材は認められない。壁溝は検出できなかった。

カマド 東壁中央部を0.92m掘り込んで、黄灰色砂質粘

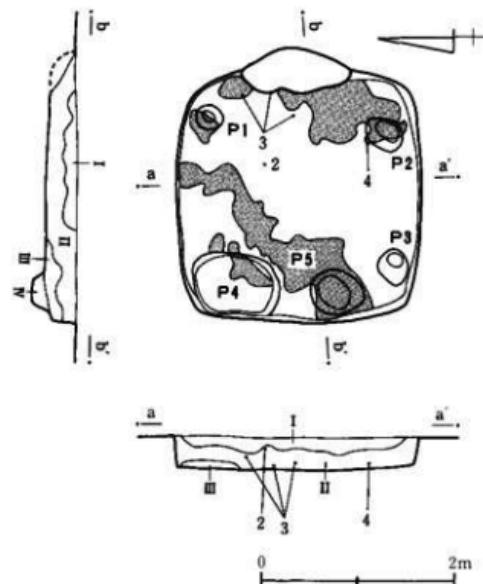


図239 D 030号遺構実測図

土をもって構築している。粘土の貼り込みは袖から煙道部まで一体化を呈しているが、遺存状態が悪いため袖部が一部残存しているにすぎず、天井部は遺存しない。火床部は深さ0.07mで擂鉢状を呈している。

**遺物出土状況** I層黒色土層、II層黒褐色土層、III層焼土層、IV層茶褐色土層が堆積しており、II層を中心として出土しているが稀少である。

また、カマド内からの出土もある。

**出土遺物** 遺物は甕、壺形土器と石製品がある。甕形土器は1、2で、1は口唇部に特徴のある口縁部破片、2は底部破片である。壺形土器は3である。石製品は4の凝灰岩製の砥石で、片面を極度に使用している。

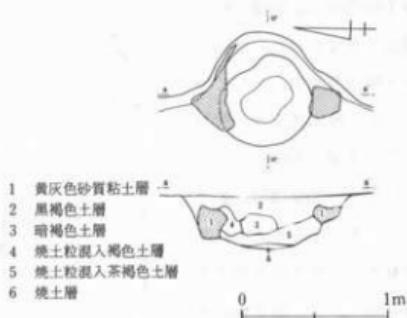


図240 D030号遺構カマド実測図

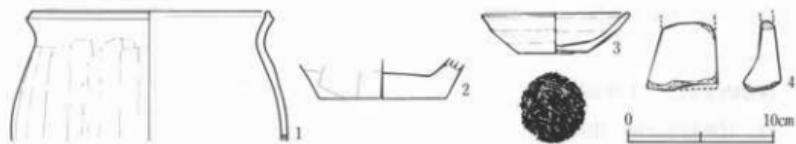


図241 D030号遺構出土遺物実測図

D030出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考			
		高	口径	底径			混入物	焼成	色調				
							ヨコナダヘラ削り	砂粒	堅緻茶褐色				
1	甕	—	35.4	—	胴上半部	ヨコナダヘラ削り	砂粒	堅緻茶褐色					
2	甕	—	—	8.9	底部のみ	ヘラ削り	砂粒	堅緻茶褐色					
3	壺	2.7	10.3	4.7	%	底部回転糸切り	砂粒	堅緻黒褐色					

## 2. D032号遺構 (図242~244、図版65、66)

台地の南側縁辺部に近く、D030号遺構の南東30mに位置する。

**遺構** 北壁2.56m、東壁2.62mで方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。壁はほぼ垂直に0.32m掘り込んで床面に達する。床面は全体に軟弱である。南東壁コーナー部分に南北方向に橢円形の平面形を呈する掘り込みを検出した。長径1.72m、短径0.68m、深さ0.29mを計り、

底面は凹凸がやや激しい。性格は不明である。壁溝、柱穴は検出できなかった。焼土をカマド周辺部を中心として検出したが、検出状況等の検討により、家屋の焼失に伴う所産ではなく、埋没過程における流入であろうと考えられる。

**カマド** 北壁西寄り部分を0.86m掘り込み、黄灰色砂質粘土で構築している。粘土は5層上面に貼り込まれているが、遺存状態が悪いため全体は把握できない。一部袖が残存するのみである。火床部は深さ0.12mで擂鉢状を呈している。

**遺物出土状況** I層黒褐色土層、II層褐色土層、III層焼土粒混入茶褐色土層、IV層黄褐色土層、V層焼土ブロック層、VI層ローム粒混入茶褐色土層が堆積しており、カマド周辺部を中心として出土しているものの、大部分が小片であり、しかも稀少である。

**出土遺物** 図示できる遺物は變形土器2点のみである。1、2は器高に若干違いがあるものの、形状、整形は同一で、口唇部の突出する特徴は酷似する。底部は回転糸切りの後周囲にヘラ削りを施して

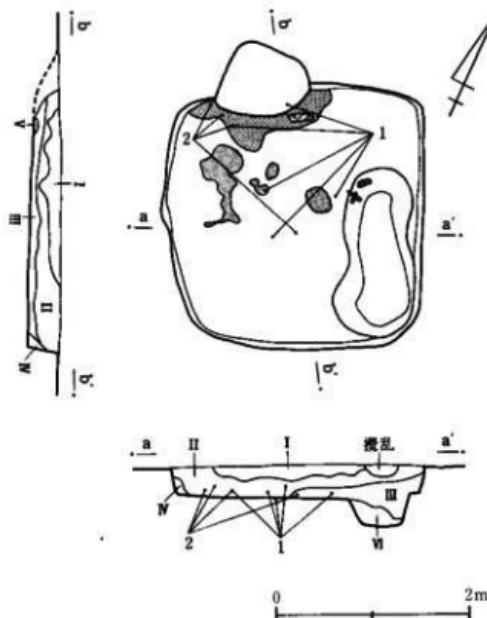


図242 D032号遺構実測図

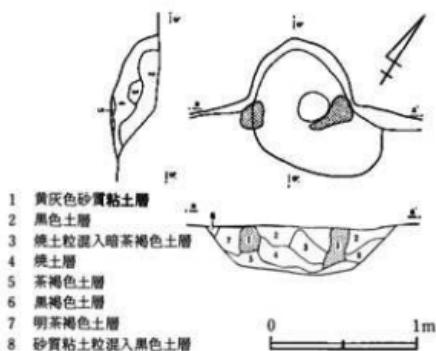


図243 D032号遺構カマド実測図

いる。

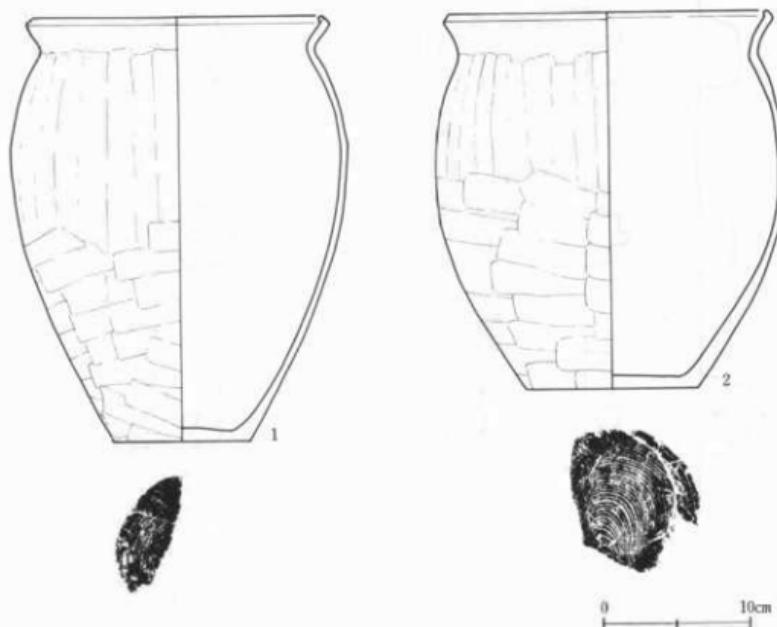


図244 D032号遺構出土遺物実測図

D032出土土器一覧

番号	器種	法量(cm)			遺存度	調整	胎土			備考
		高	口径	底径			混入物	焼成	色調	
1	甕	29.2	20.0	9.5	%	ヨコナデ、ヘラ削り、底部回転糸切り後周囲ヘラ削り	砂粒	堅	褐色	
2	甕	25.9	22.0	11.8	%	ヨコナデ、ヘラ削り底部回転糸切り後周囲ヘラ削り	砂粒	堅	褐色	

### 3. H001号遺構 (図245、図版66)

台地中央平坦部に位置し、住居群とはやや距離をおく。

**遺構** 遺構として確認できるのは柱穴のみで、2間×1間の南北棟建物跡である。柱掘りかたは統一的でなく、3つの形状がみとめられる。 $P_1 \cdot P_2$ は径0.80m、深さ平均0.37m、 $P_3 \cdot P_4$ は径平均0.69m、深さ平均0.33mを計り円形の平面形を呈する。 $P_5 \cdot P_6$ は長辺0.95m、短辺0.70

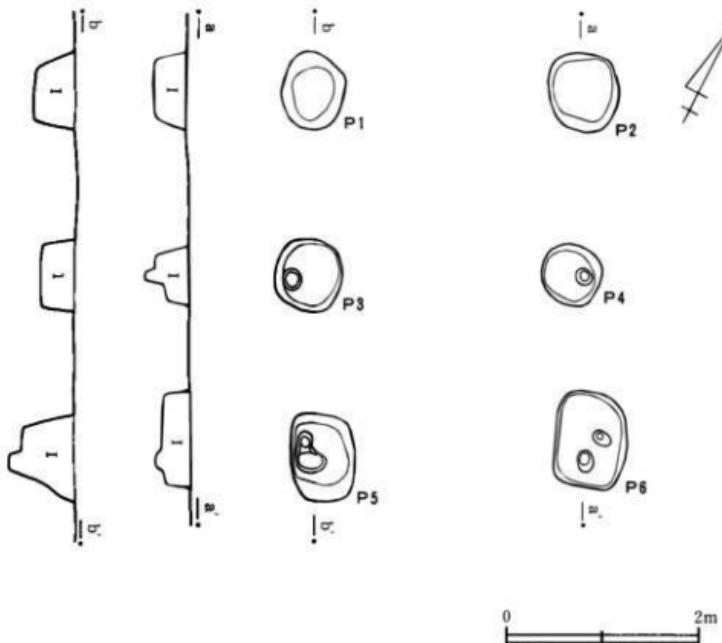


図245 H001号遺構実測図

m、深さ0.34mを計り長方形の平面形を呈する。また、P<sub>3</sub>～P<sub>6</sub>においてはさらに底面において柱痕を検出しており、径平均0.18m、深さ0.30～0.67mを計る。いずれも黒色土層の単一層であり、土層断面において柱の痕跡は認められない。なお、遺物の出土は皆無である。

#### 4. M001号遺構（図A）

M、N、0—8地域の南側において検出した遺構である。

**遺構** 東西に連なる溝で、現存幅員0.09～0.22m、深さ0.03～0.15mを計る。本来、確認面よりさらに上位から掘り込まれていたもので、幅、深さとも検出した数値よりも大きいものと考えられる。そのため、2か所で遺構が途切れており、3本の溝となっているが、本来1本として捉えられるものである。出土遺物は覆土中より数点の破片が出土しているが、いずれも図示し得るものではなく、遺構に伴うものは皆無である。覆土の状況等により比較的新しい時代の所産であろう。

## 5. M002号遺構（図A）

P—12地域において検出した遺構である。

遺構 ほぼ90°に屈曲した溝で、幅員平均0.07mを計る。深さは0.10m前後で、底面は丸い状況を呈する。出土遺物は皆無であるが、覆土の状況等により、比較的新しい時期の所産であろう。

## 第3章 まとめ

ヲサル山遺跡における歴史時代の遺構は竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟で、これをもって完結する一群である。しかしながら、標高約24mを計る同一台地上に位置する権現後遺跡、あるいは標高12m前後を計る段丘上に位置する北海道遺跡では、歴史時代の大規模な集落が展開しており、これらとの関係が注目されるところである。

豈田地区遺跡群は新川の形成する須久茂谷津あるいは寺谷津をのぞむ台地上あるいは段丘上に展開する状況が認められ、歴史時代の集落は台地東側に集中して認められる。こうした状況にあって、ヲサル山遺跡において検出した歴史時代の遺構群は数量は少ない小規模なまとまりを呈しており、特異なあり方を示していると言つてよい。

遺構の平面プランはいずれも方形であるが、若干丸味をもった形状を呈していることが認められ、当該期の竪穴住居跡としては一般的な傾向を示すものである。規模は一辺2.5m前後を計り小形な住居として捉えられる。1辺が2.5m以下の規模の住居としては、権現後遺跡の第I群D163、北海道遺跡の第I群D140、第III群D062、D066、D114、第IV群のD086、第V群のD009、第VII群のD028、D079があげられる。権現後遺跡では1例、北海道遺跡では8例を数えており、規模の点について言えば、北海道遺跡の状況に類似すると言えよう。

遺物は甕、壺形土器が認められるが、甕形土器はロクロ使用が考えられるものである。権現後遺跡および北海道遺跡において、ロクロの使用が認められる大形甕形土器は出土していない。口唇部にも特徴を有しており、共伴する小型の壺形土器からも、時期的には全体にこれらより新しい様相を呈していると言えよう。

どのような背景においてこうした小規模な集落が展開してきたのか、立地の問題を含めて今後の課題とするところである。

## 終 章

### 第1節 旧石器時代の総括

ヲサル山遺跡では、大きく捉えて4期にわたる石器群の流れが認められたが、台地利用状況は各期において特徴が認められる。I期は1ブロックのみであるため特徴と言えるか疑問であるが、台地西側縁辺部から台地中央部に寄って位置している。II期はI期よりブロック数が急増するためか台地全域にわたり位置するが、特に台地縁辺部を中心とした地域に認められる。III期はブロック数が縮小する関係で台地南側縁辺部を中心に須久茂谷津より入り込む小支谷に面した部分に位置しているのみである。IV期は最もブロック数が多いためか、ほぼ全域にわたり位置している。II期のブロックの展開に近いが分布域はさらに広く遺跡北西部にまでわたり認めることができる。

ブロック間のつながりは直接的な接合関係がないため明らかにできない面があるものの複数のブロック間において同一母岩と考えられる資料が認められることは自己完結のブロックを中心としながらも相互補完的なブロックの存在も充分に考慮しなければならない問題であろう。

一方、石材として搬入されたのは安山岩、珪質頁岩、頁岩、黒曜石、砂岩、チャート、メノウ、玄武岩、粘板岩、凝灰岩などがあり、石材選定にあたっては時期別の相違が認められるところである。I、II期は安山岩、頁岩、砂岩を主体とし、黒曜石はほとんど見れないが、III、IV期では黒曜石を主体としており、II、III期を接点として黒曜石の搬入が活発になったと考えられる。I、II期の石材搬入の状況は、権現後、北海道両遺跡においても当該期のブロックに同様認められるところであり、石材の搬入形態を知る上で良好な資料となろう。

### 第2節 繩文時代の総括

萱田地区における繩文時代の遺構、遺物は、弥生時代以降のそれに比してきわめて稀薄であると言つて良い状況である。権現後遺跡においても繩文時代の遺構の検出はできず、一部遺物包含層として把握できた地域があった程度であり、これもまた遺物の出土量が稀少であったため性格を充分に究明できるものではなかった。

このような状況下にあって、ヲサル山遺跡においては、繩文時代早期の炉穴19基、陥穴1基、中期の竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構2基、土壙1基、それに後期の竪穴住居跡3軒を検出した。

検出した遺構数は少なく、しかも台地全面にわたり散漫な状況を呈して分布しており、集落構成について究明するに堪えない資料であるが、先にも指摘したように萱田地区において実態

不明であった縄文時代の遺構が検出できたことは、空白時期であった当該期の資料の補完を果す貴重な資料を言えるであろう。

早期の炉穴群は、台地西側縁辺部に近く位置しており、かなり複雑な重複関係を呈している。中期の遺構は台地中央部を占地しており、かなり散漫な状況を呈している。遺構間の関係については出土遺物も稀少で、不明の点が多い。後期の遺構は台地南側縁辺部、須久茂谷津をのぞむ一部斜面にかかる地域に位置している。遺構の状況は良好でなく、加えて出土遺物も稀少であるため遺構間の関係については不明である。

一方、出土遺物は土器、石器が出土しているが、土器では注口付舟形鉢形土器の出土が特筆される。類例は少なく、舟形状を呈する鉢形土器は東北地方に分布しているが、注口付の例は初見となるものであろう。また、石器については石鎌、石斧などが出土しているが、特に両刃磨製石斧の出土は、同じ様な形状を呈する独鉛石を考えるうえで貴重な資料となるであろう。

### 第3節 弥生・古墳時代の総括

権現後遺跡における弥生時代第IV群が弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて連続的に集落が営まれていると同様な状況が、ヲサル山遺跡においても認められた。

弥生時代終末期に比定できるのは、竪穴住居跡12軒、土壤1基であり、権現後遺跡弥生時代第IV群Aと不可分の関係にある集落である。したがって、この遺構数をもって完結するものとして捉えることはできない。土器の様相、住居跡の占地状況などから、権現後、ヲサル山遺跡の弥生時代集落の中において、最も新しい時期の所産として捉えることができ、弥生時代最終末に位置づけられる遺構群である。小形住居跡を含めて柱穴を有するものが優位に立っている点など、構造的にもやや古手と考えられる権現後遺跡弥生時代第I群、第II群、第III群とは様相を異にしていることが指摘できた。

古墳時代初頭に比定できるのは、竪穴住居跡22軒、方形周溝墓3基であり、権現後遺跡弥生時代第IV群Bと不可分の関係にある集落である。したがって、やはりこの遺構数をもって完結するものとして捉えることはできない。土器の様相から、五領式の中でも古手に位置づけられると考えられることから、弥生時代最終末の集落から連続的な変遷が考えられるが、平底から台付の變形土器主体となる点や、住居跡の規格性、統一性など、一大画期として指摘できる。こうした状況は墓制にも現われており、鉄剣をはじめとして豊富な玉類を有する方形周溝墓の出現は、階層分化という内的要因から生じてきたものとして捉えられよう。また、これら方形周溝墓の出現と同時に集落が当台地上より消え去った要因をどこに求めればよいか、当台地上における方形周溝墓をめぐる集落については今後とも検討していく必要があろう。

## 第4節 歴史時代の総括

歴史時代に比定できた遺構は、竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟であり、台地東側に位置する権現後遺跡における歴史時代の集落とは対照的なあり方を示していると言って良いであろう。遺構数が極端に少ないとすることながら、遺構自体の規模、あるいは占地状況など、事実記載において報告したとおりの内容であり、権現後遺跡とは対比するに堪えられない内容である。

権現後遺跡においては空白地帯をうまくとり込みながら第Ⅰ群から第Ⅳ群までの住居群が把握できており、群内の遺構数は統一的でないものの、2軒で構成された群は皆無であった。ヲサル山遺跡におけるこのような状況は、北海道遺跡における歴史時代第Ⅱ群、第Ⅳ群に近い状況を呈していると言って良く、ヲサル山遺跡は小支谷によって権現後遺跡と分離された地形的特徴を呈しているが集落自体は分離して考えることはできず、同一の集落として捉えて良いであろう。出土遺物から2軒の住居跡はほぼ同時期と考えて差し支えないと考えられるところであるが、掘立柱建物跡を含めて群として捉える場合、住居間のカマド指向方向が異なる点、あるいは住居と掘立柱建物跡が50mの距離を隔てて位置することなど群としての構造自体は疑問の生じるところである。このような群が集落に成立する背景については萱田地区内の遺跡群の成果をまって明らかにできることと思われる。

## 第5節 結 言

ヲサル山遺跡は、当初権現後遺跡に包括された中で昭和52年度に調査を実施する予定であったが諸般の事由で着手できず、以後昭和56年度まで調査が実施できなかった経緯を有している。本来ならば権現後遺跡と同一の報告書において報告すべきであろうが、先に述べた理由のため分離して取り扱わざるを得なかった。

遺跡内には大きく攢乱を受けた地域や、調査区域が必ずしも地形的な特徴と整合しないため調査対象地外にも遺跡の広がりが考えられるなど、必ずしも遺跡の全容を検出したわけではないが、検出した遺構および遺物は膨大な量に達している。一方、実際の発掘作業において実測した図面をはじめ写真、遺物台帳、発掘調査日誌などの記録類も膨大な量に達している。

報告書の作成にあたっては、これら膨大な資料を整理し、分類、分析し作業を進めてきたわけであるが、整理の過程において作成した様々な台帳類をはじめとするバックデータについても全て報告書に掲載することは不可能であるため、極力記述することでその欠を補うよう考慮したが意に反して充分なものではなかったか危惧されるところである。したがって、報告書掲載の

資料を活用するにあたっては記録類をはじめ実際の遺物も併せて活用いただければと考えている。

ヲサル山遺跡において検出した遺構、遺物は我々に新知見を多く提供したと言って良いであろう。旧石器時代にあっては、面的な発掘調査をとおして検出したブロックは時期の違いによる立地条件の相違が把握でき、さらに石材選定の相違も認めることができた。弥生時代から古墳時代にあっては、集落自体は権現後遺跡と分離することは不可能であるが、集落内に位置する大形な方形周溝墓からは鉄釧の出土があり、弥生時代最終末期から古墳時代前半期の当地域における集落と墓域の関係を窺うことができた。歴史時代にあっては権現後遺跡の大集落から隔絶したかのような状況で掘立柱建物跡を伴う小集落を検出した。このような状況は北海道遺跡においても認められるところで今後の成果をまって明らかにできることと思われる。

ヲサル山遺跡における成果については各章各節において記載したとおりであるが、既に刊行している『八千代市権現後遺跡』、『八千代市北海道遺跡』との対比や、今後刊行される萱田地区遺跡群の調査報告書をとおして萱田地区の遺跡群が理解いただければ誠に幸甚である。

ヲサル山遺跡方眼杭成果一覧

杭名 (測点)	X	Y	H (杭標高)
M 9	-29,442.227	24,606.545	24.870
M 10	-29,482.227	24,606.545	24.564
N 8	-29,402.227	24,646.545	24.849
N 9	-29,442.227	24,646.545	24.737
N 10	-29,482.227	24,646.545	24.353
N 11	-29,522.227	24,646.545	24.460
N 12	-29,562.227	24,646.545	24.290
N 13	-29,602.227	24,646.545	24.765
N 14	-29,642.227	24,646.545	24.517
O 9	-29,442.227	24,686.545	24.580
O 10	-29,482.227	24,686.545	24.286
O 11	-29,522.227	24,686.545	24.265
O 12	-29,562.227	24,686.545	24.714
O 13	-29,602.227	24,686.545	24.116
P 11	-29,522.227	24,726.545	23.966
P 12	-29,562.227	24,726.545	24.247
P 13	-29,602.227	24,726.545	24.567

ヲサル山遺跡の成果は、北海道遺跡より、Xがー方向（南方向）に2.227m、Yがー方向（西方向）に13.455mの座標差があり、権現後遺跡と同一である。

測量は日経コンサルタント株式会社に委託したものである。

# 写 真 図 版



遺  
跡

タサル山遺跡とその周辺

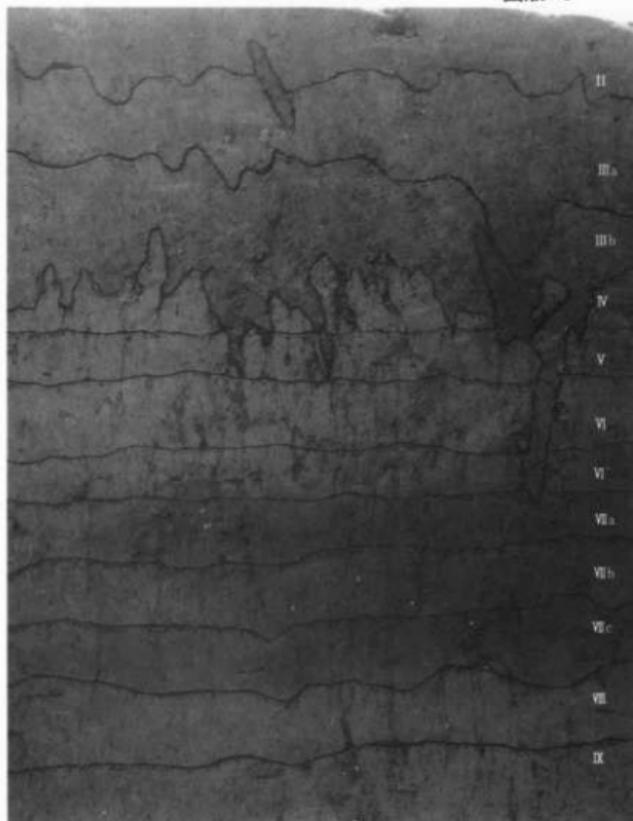


1. 昭和56年度調査区全景（北東より）

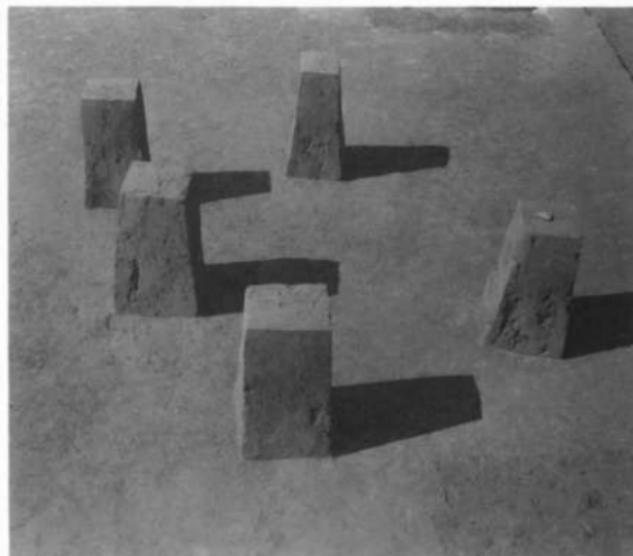


2. 昭和57年度調査区全景（南東より）

遺  
跡



1. ローム層土層断面



2. 第6ブロック石器出土状況



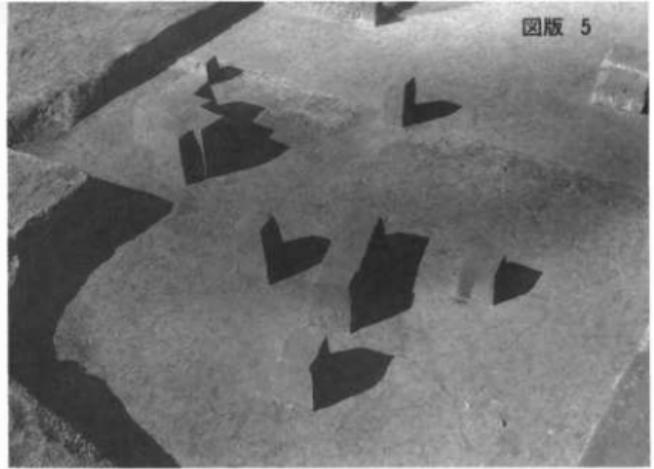
1. 第8ブロック石器出土状況



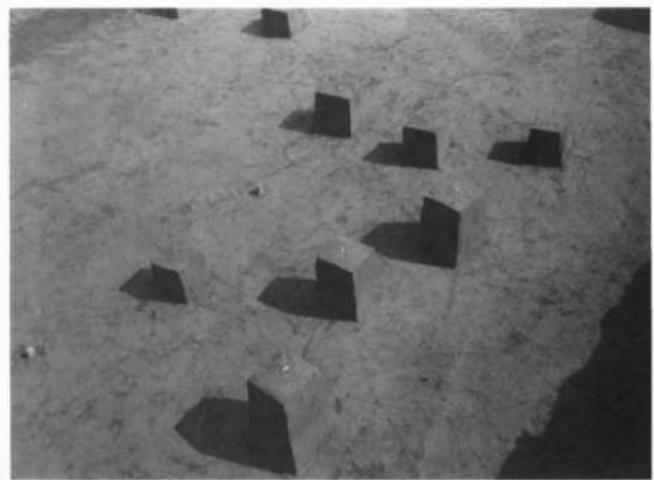
2. 第10ブロック石器出土状況



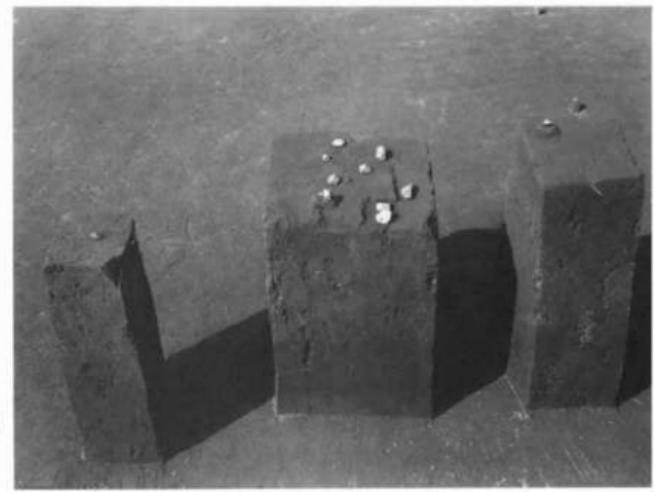
3. 第12ブロック石器出土状況



1. 第14ブロック石器出土状況



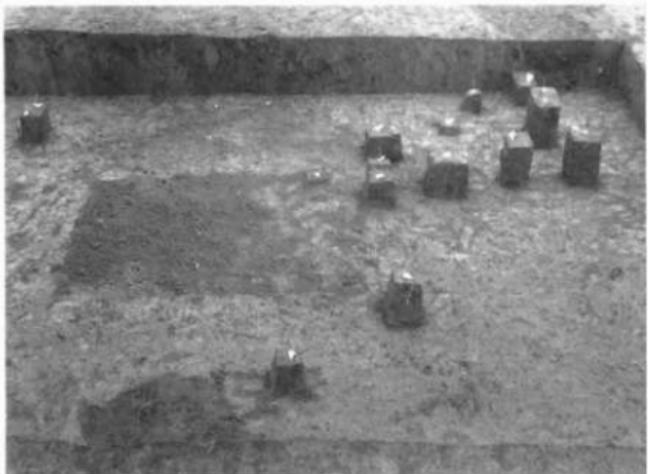
2. 第15ブロック石器出土状況



3. 第22ブロック石器出土状況



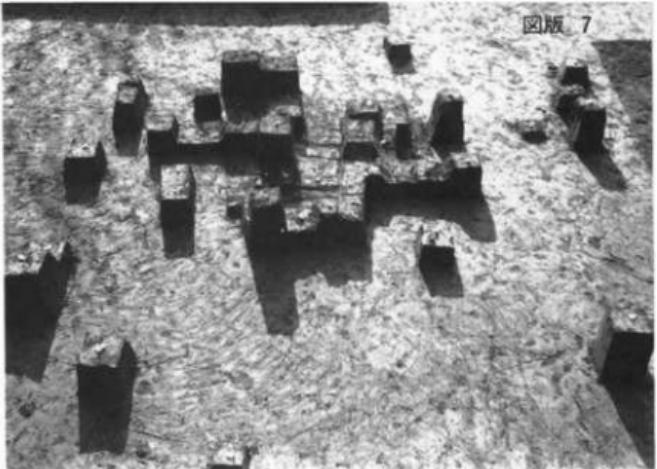
1. 第23ブロック石器出土状況



2. 第26ブロック石器出土状況



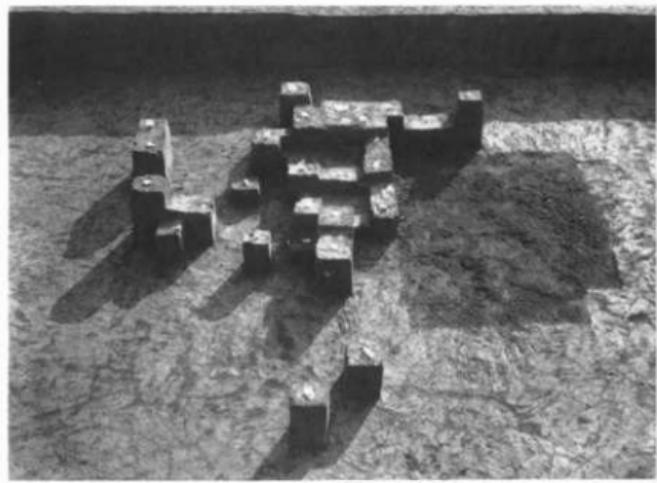
3. 第28ブロック石器出土状況



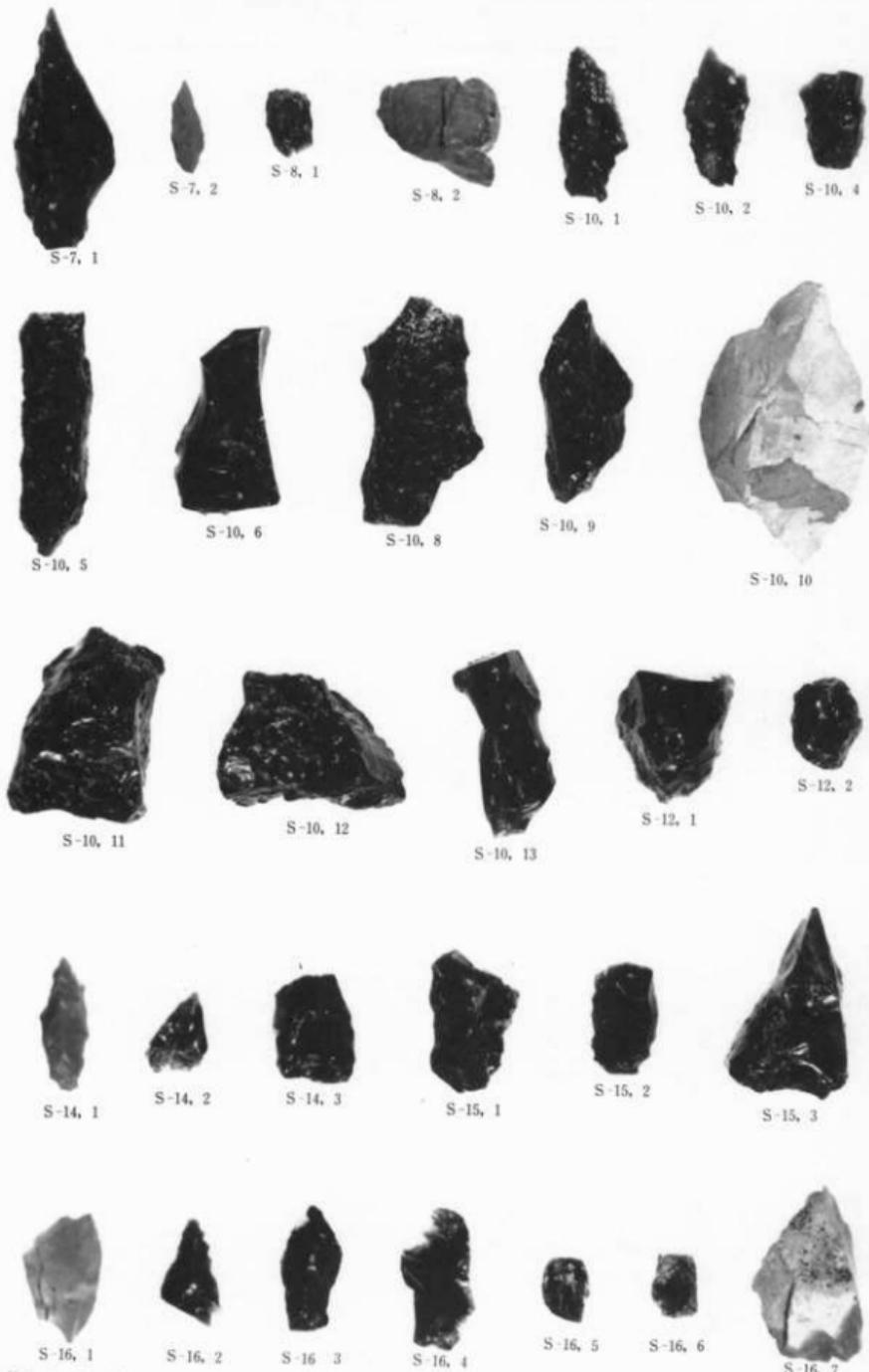
1. 第30ブロック石器出土状況



2. 第31ブロック石器出土状況



3. 第33ブロック石器出土状況



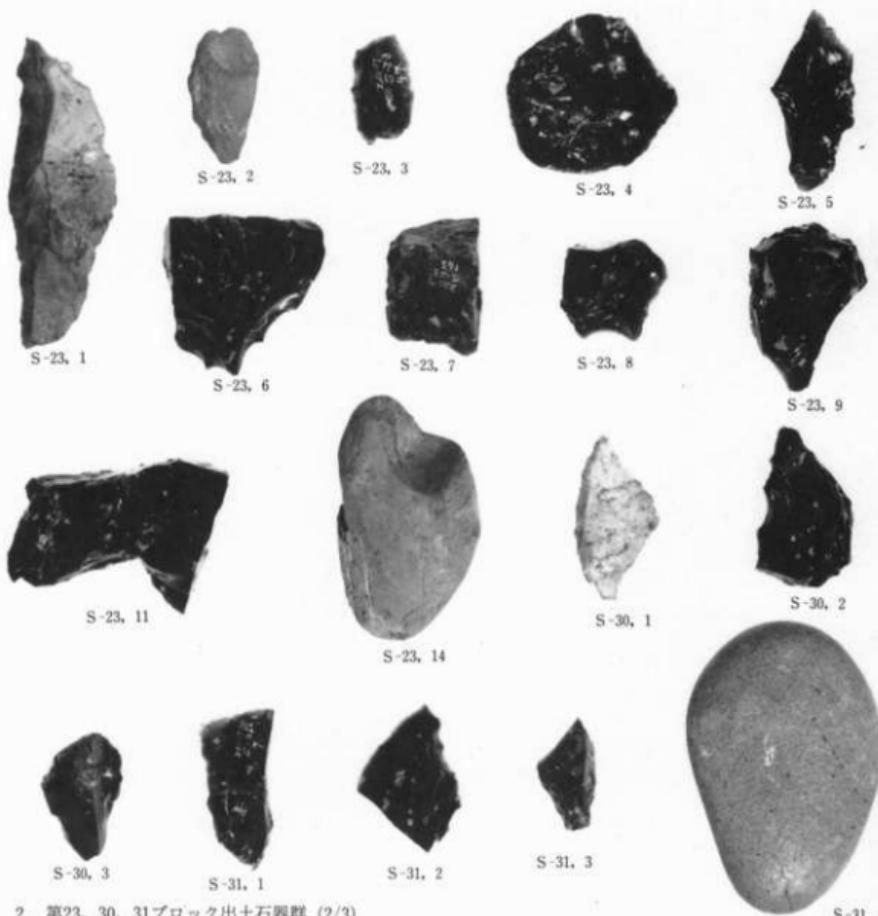
旧石器時代第1文化層遺物

第7, 8, 10, 12, 14~16ブロック出土石器群 (2/3)



S-16, 11

## 1. 第16ブロック出土石器(2/3)

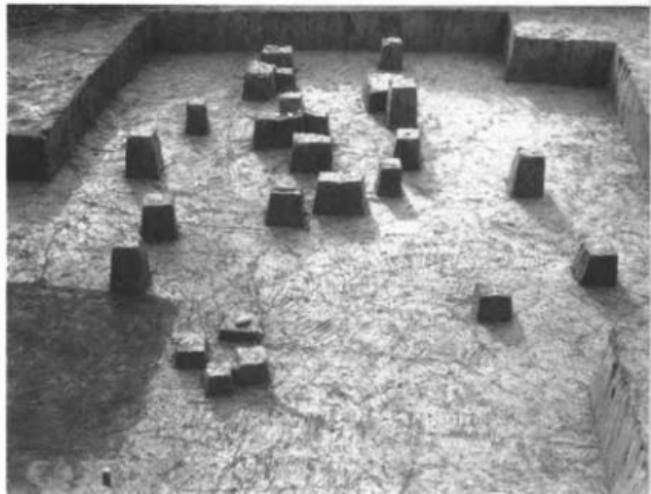




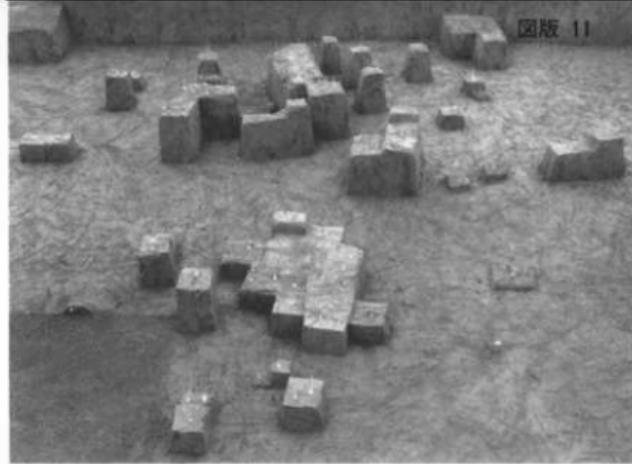
1. 第18ブロック石器出土状況



2. 第24ブロック石器出土状況



3. 第25ブロック石器出土状況



1. 第27ブロック石器出土状況



S-18, 1



S-18, 2



S-18, 3



S-18, 4



S-18, 5



S-24, 1



S-24, 2



S-24, 3



S-24, 5



S-24, 6



S-24, 8



S-25, 1



S-25, 2



S-27, 1



S-27, 2



S-27, 3

2. 第18, 24, 25, 27ブロック出土石器群(2/3)



S-18, 6



S-25, 6



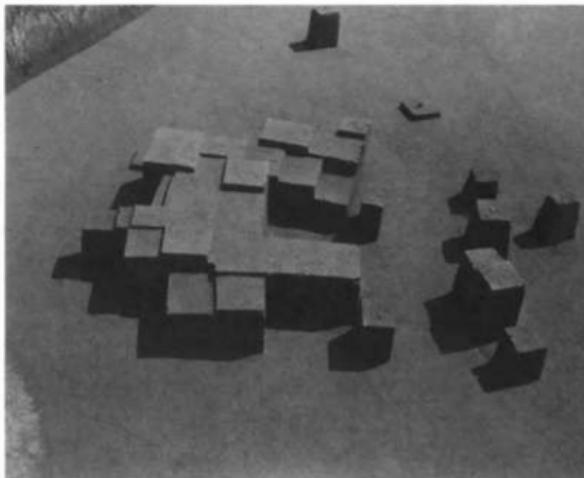
S-25, 8

1. 第18, 25ブロック出土石器群(2/3)



S-25, 8

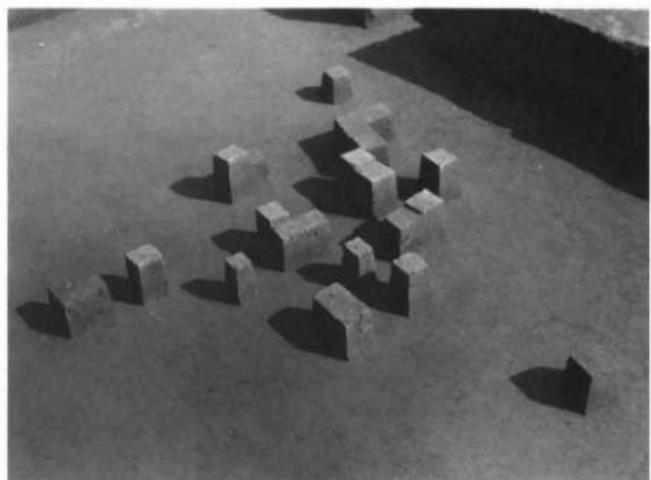
2. 第25ブロック出土石器(2/3)



3. 第3ブロック石器出土状況



1. 第4ブロック石器出土状況



2. 第5ブロック石器出土状況



3. 第13ブロック石器出土状況



1. 第17ブロック石器出土状況



2. 第29ブロック石器出土状況



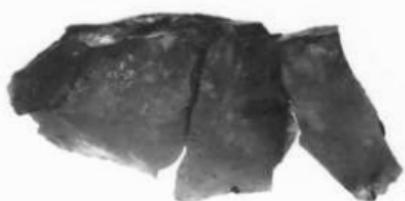
3. 第32ブロック石器出土状況



1. 第39ブロック石器出土状況

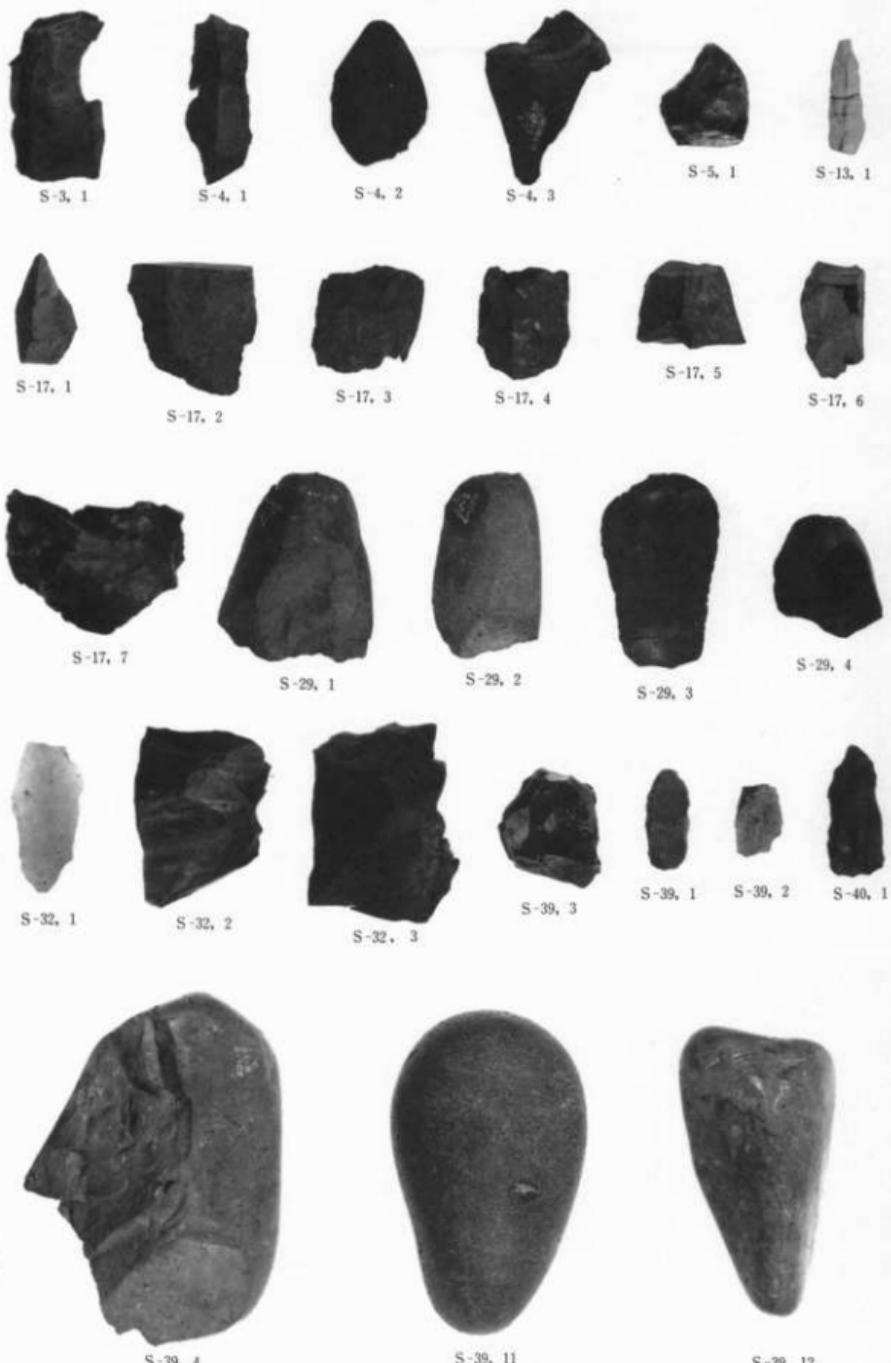


2. 第40ブロック石器出土状況



S-32, 12

3. 第32ブロック出土石器 (2/3)



旧石器時代第3文化層遺物

第3～5, 13, 17, 29, 32, 39, 40ブロック出土石器群(2/3)

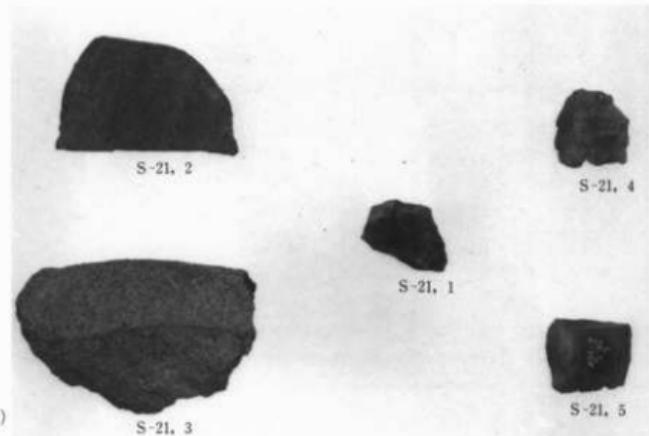


S-40, 2

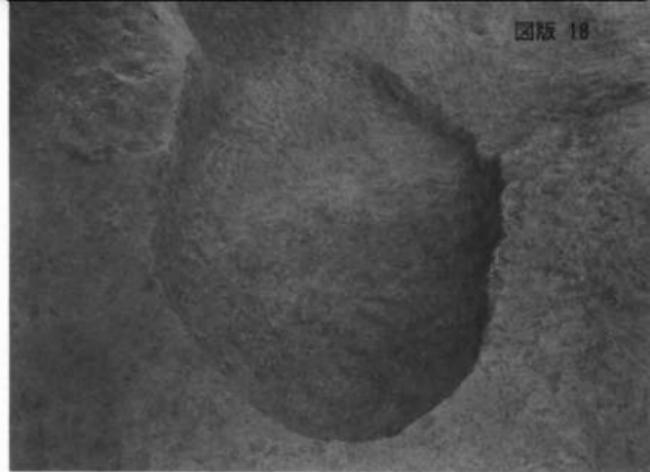
1. 第40ブロック出土石器(2/3)



2. 第21ブロック石器出土状況



3. 第21ブロック出土石器(2/3)



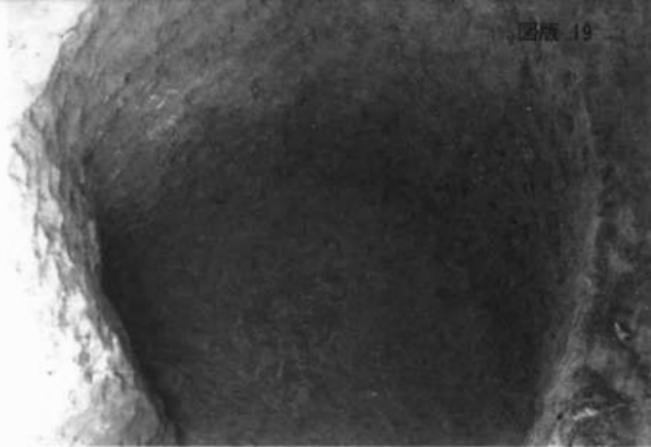
1. P 009号遺構全景



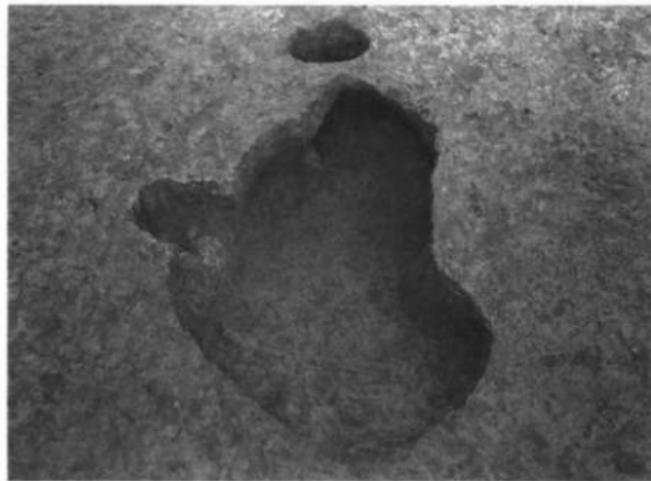
2. P 009号遺構遺物出土狀況



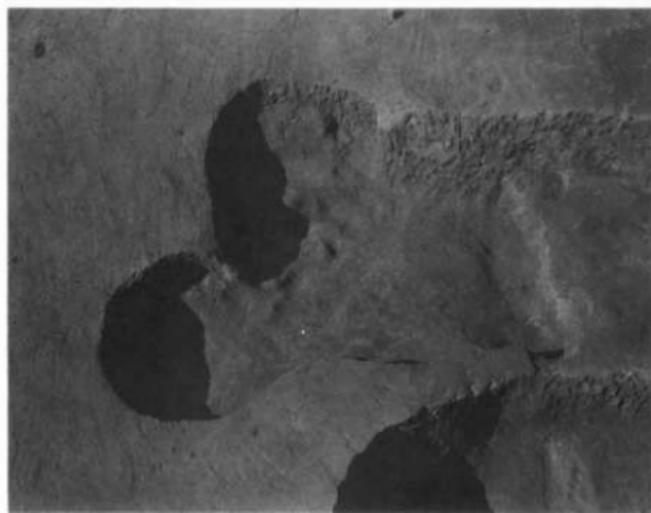
3. P 010号遺構全景



1. P011号遺構全景



2. P012号遺構全景



3. P014・015号遺構全景



1. P017号遺構全景



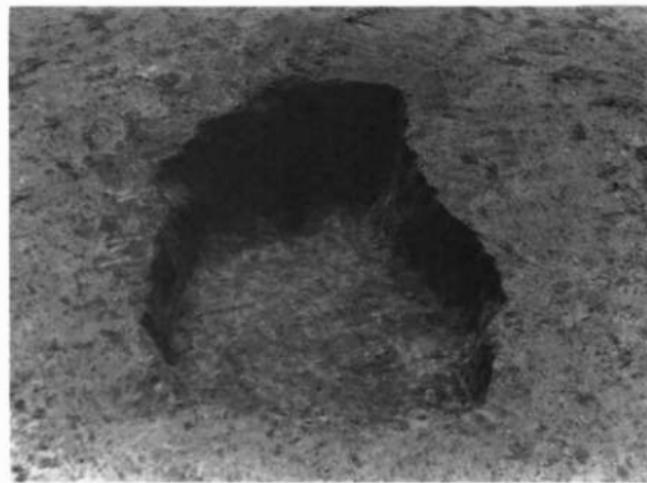
2. P019号遺構全景



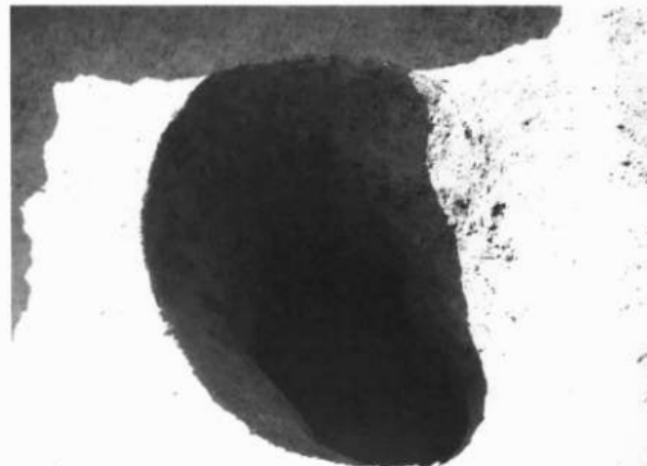
3. P020号遺構全景



1. P 022号遺構遺物出土狀況



2. P 023号遺構全景



3. P 090号遺構全景

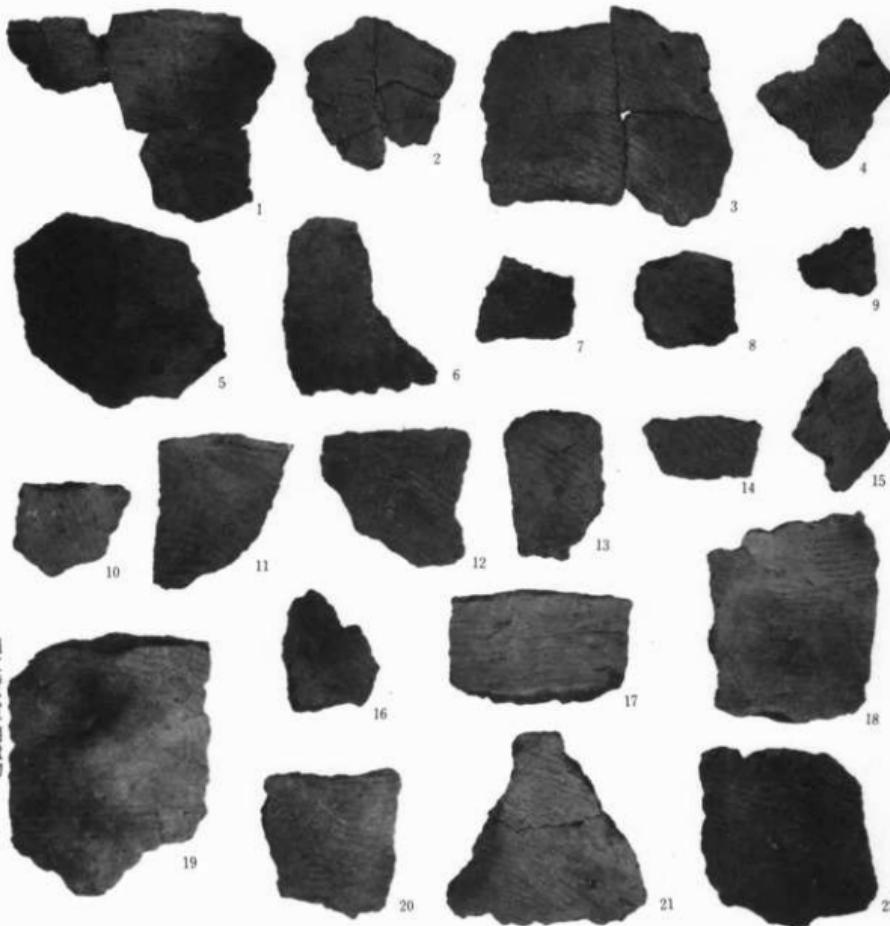


P 009, 1



P 010, 5

1. P 009・010号遺構出土遺物(1/4)

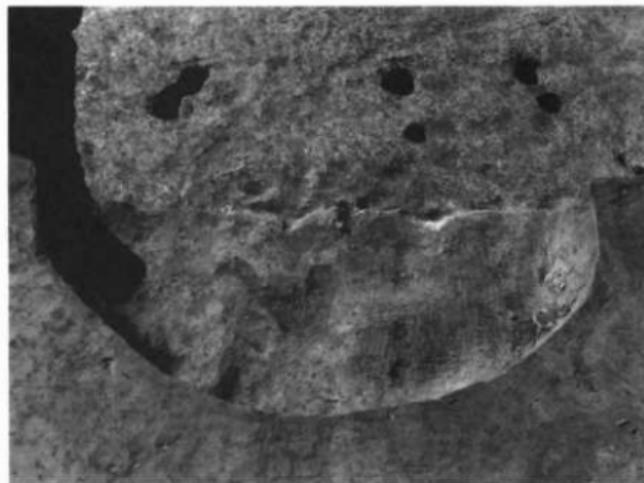


縄文時代早期遺物

2. P 019・020号遺構出土遺物(1/3)



1. P 022号遺構出土遺物



縄文時代早期遺物、  
中期遺構



1. D 028号遺構全景

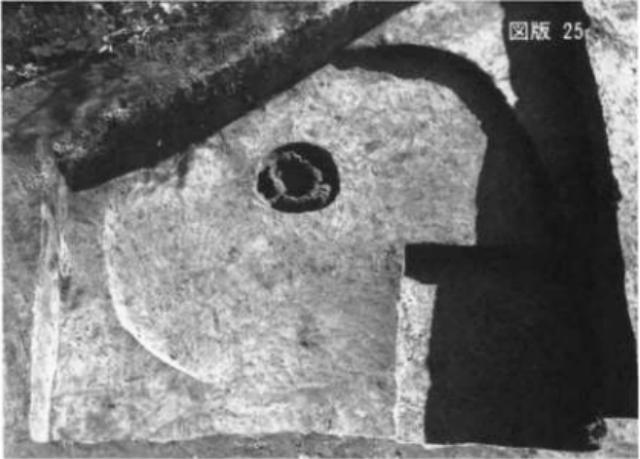


2. P 025号遺構全景

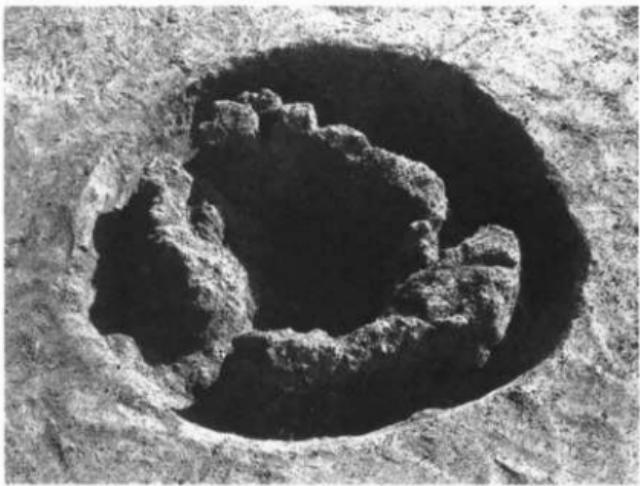


1(1/4)

3. P 025号遺構出土遺物



1. D037号遺構全景



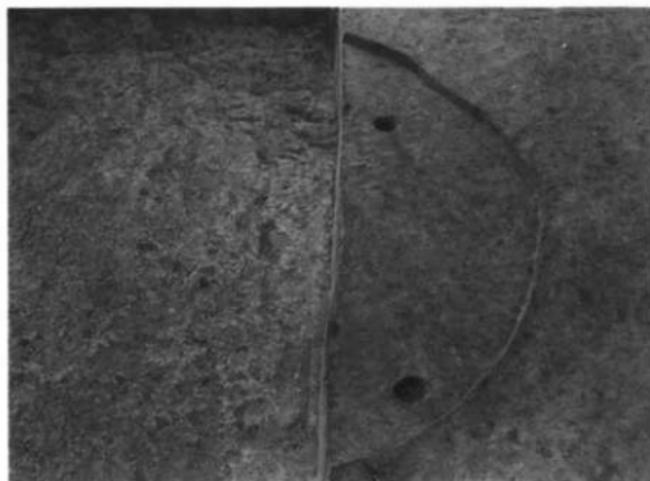
2. D037号遺構炉検出状況



3. D037号遺構遺物出土状況



1. D038号遺構全景

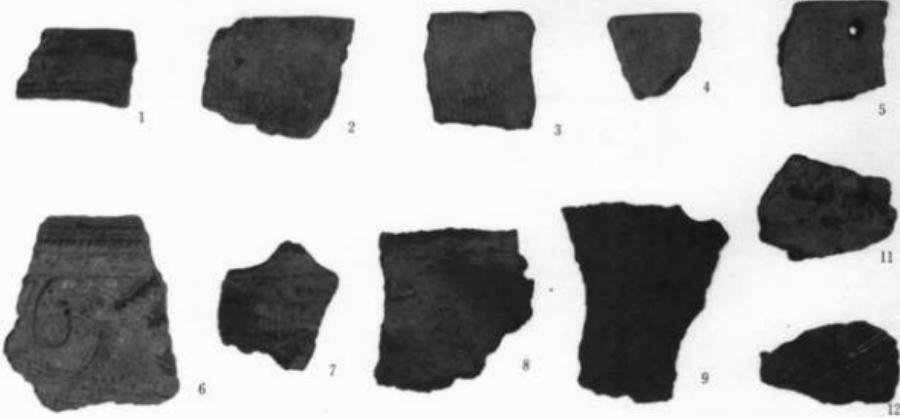


2. D039号遺構全景



3. D037号遺構出土遺物

1 (1/4)

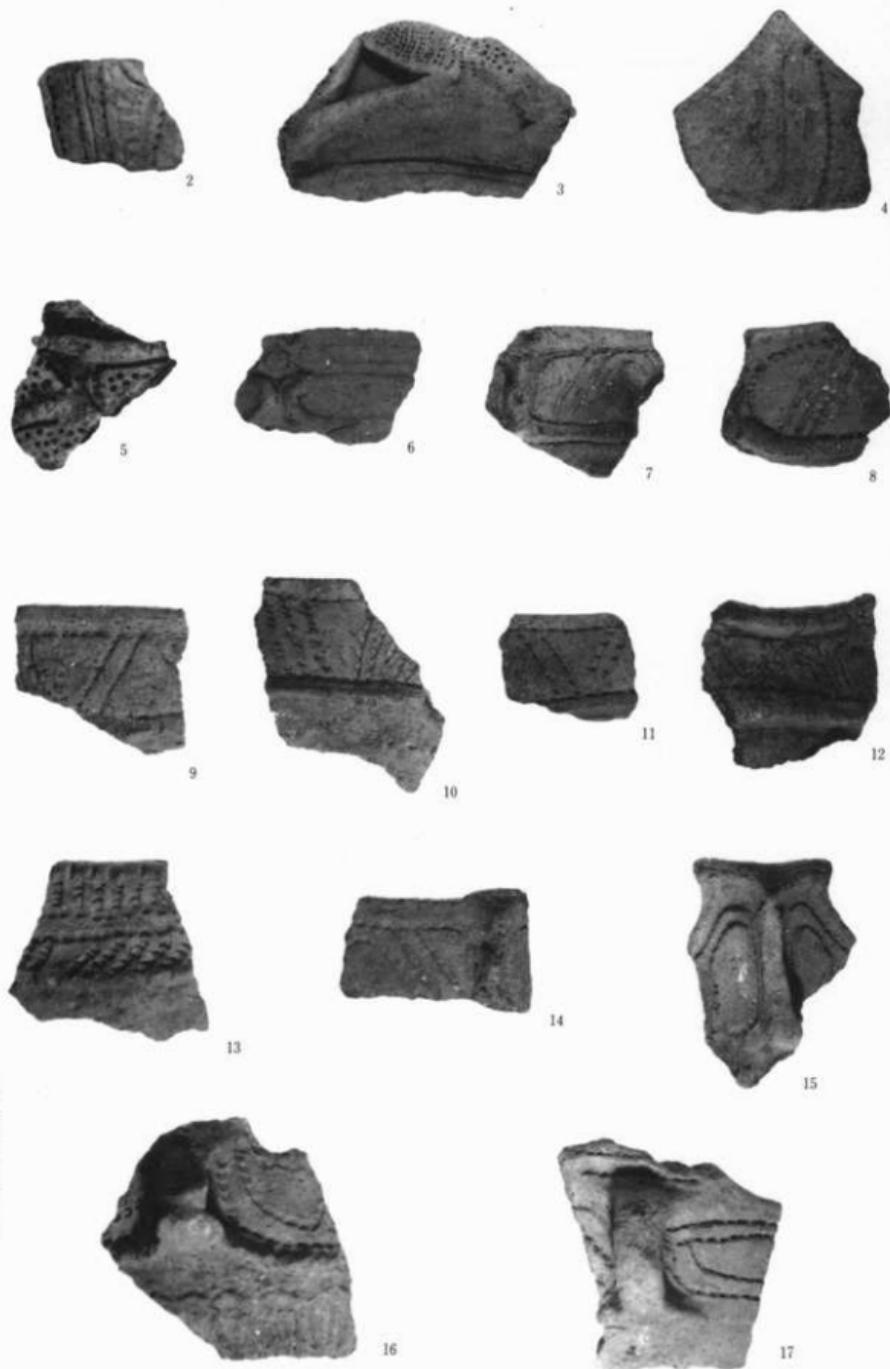


1. 第Ⅰ群土器 (1/3)



縄文時代包含層遺物

2. 第Ⅱ群土器 (1/3)



縄文時代包含層遺物

第三群土器 (1/3)



1. 第III群土器遺物出土状況



1



2. 第III群土器 (1/3)



1



2



4



3



5



6

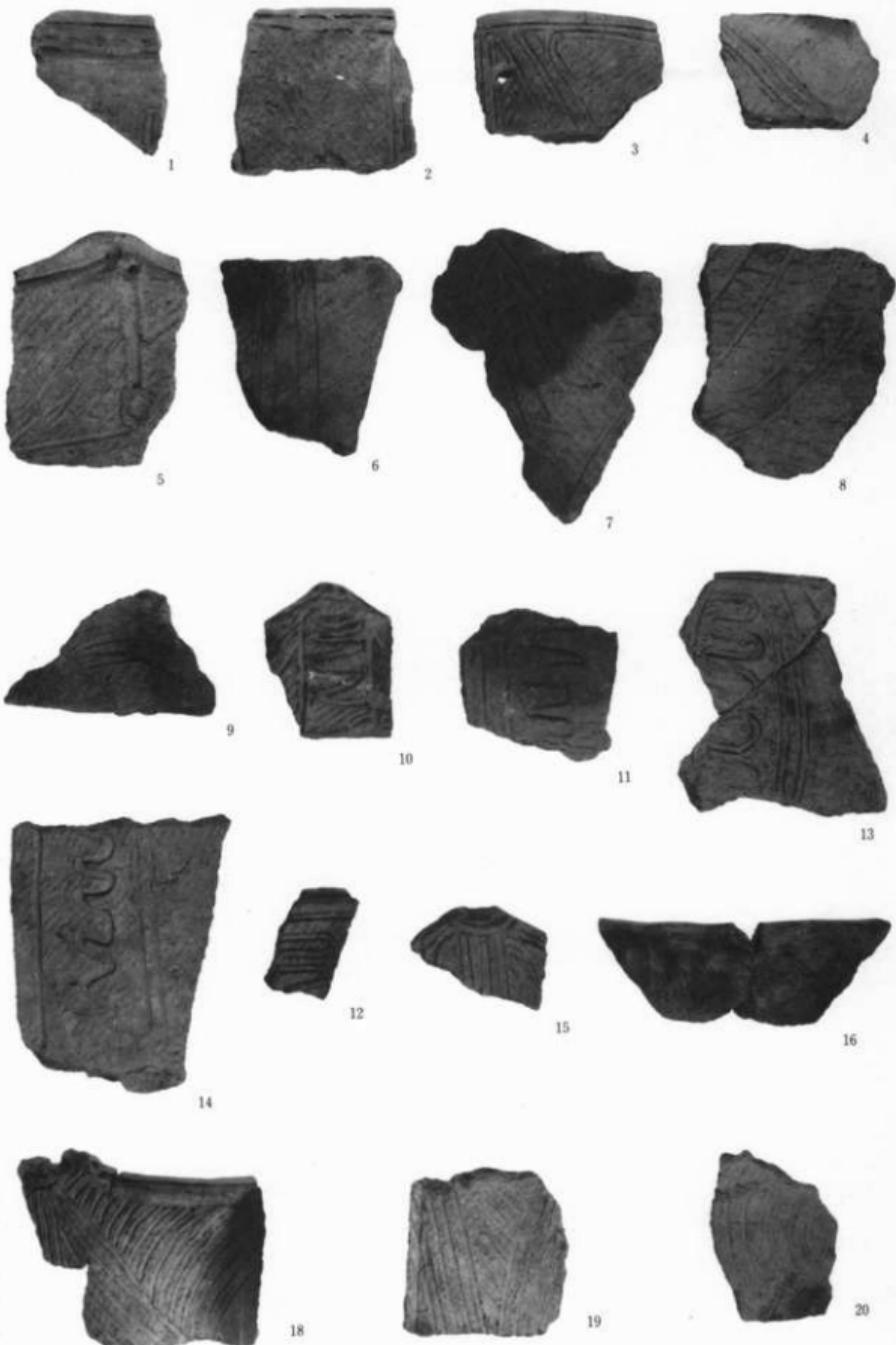


7



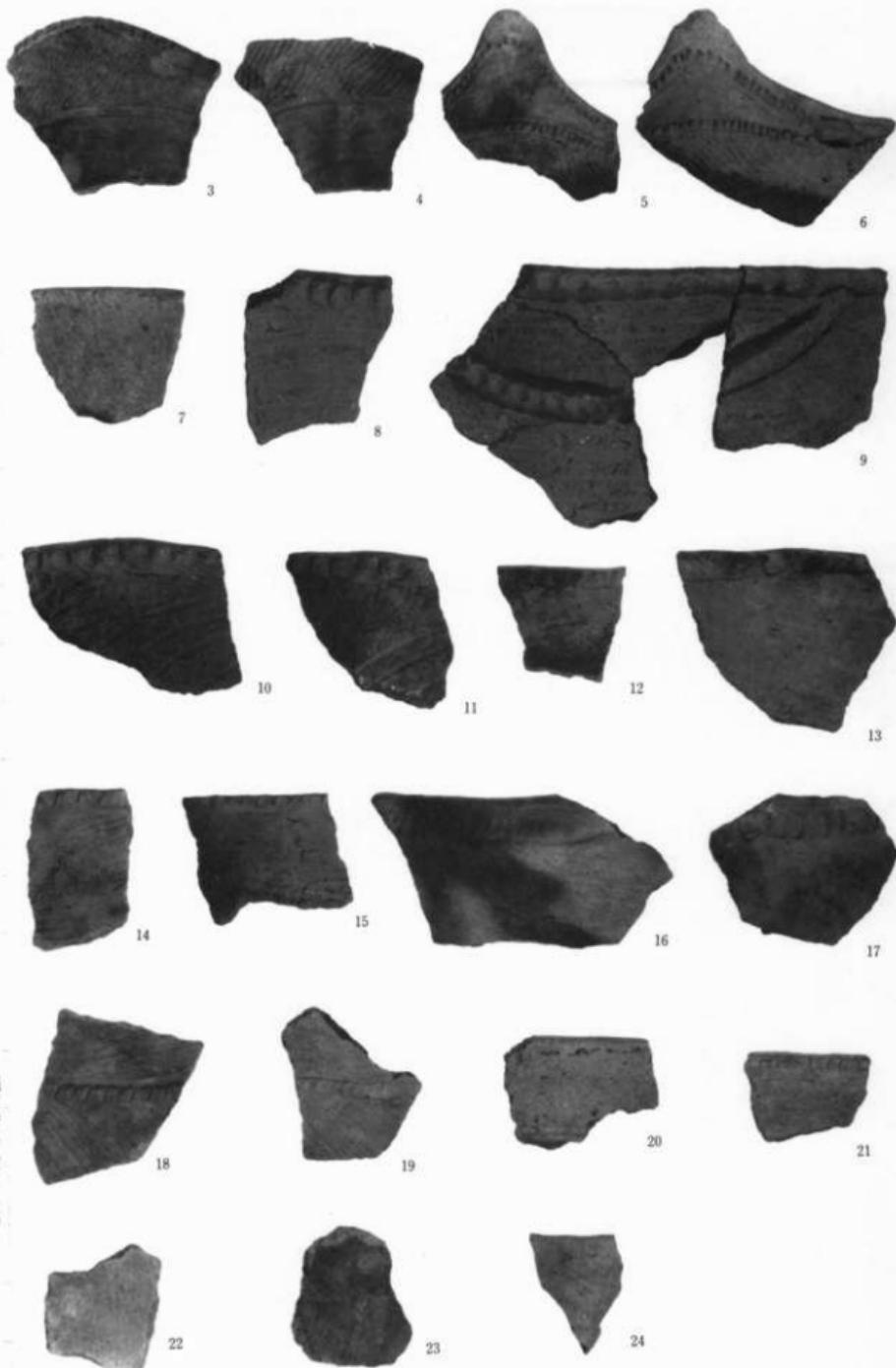
9

3. 第IV群土器 (1/3)



縄文時代包含層遺物

第V群土器 (1/3)





1. 第VI群土器

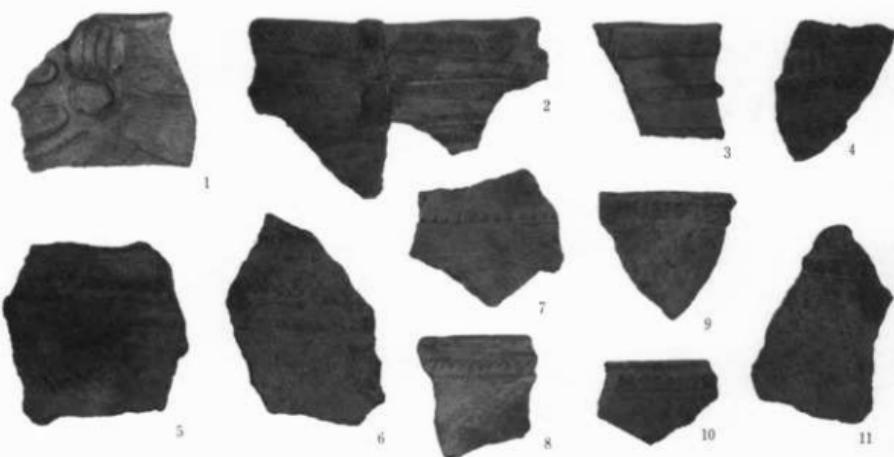


2



2. 繩文時代包含層遺物出土状況

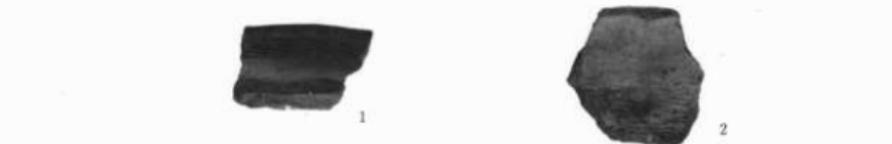
縄文時代包含層遺構、遺物



3. 第VII群土器 (1/3)

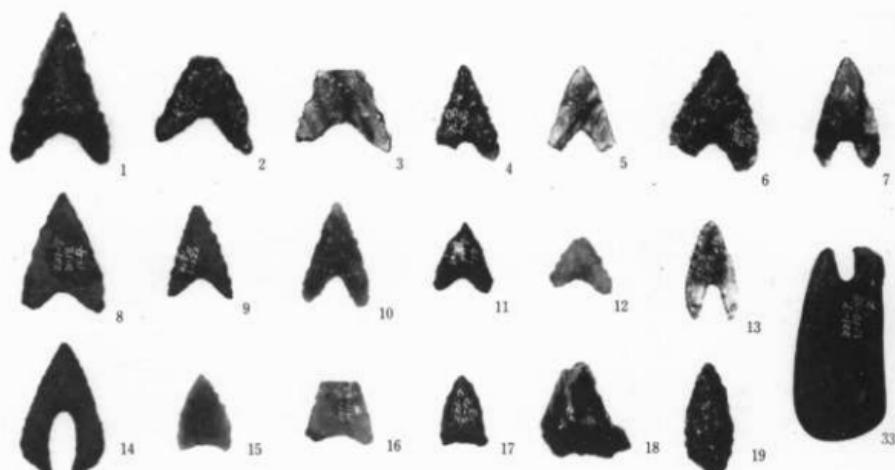


1. 第VIII群土器 (1/3)

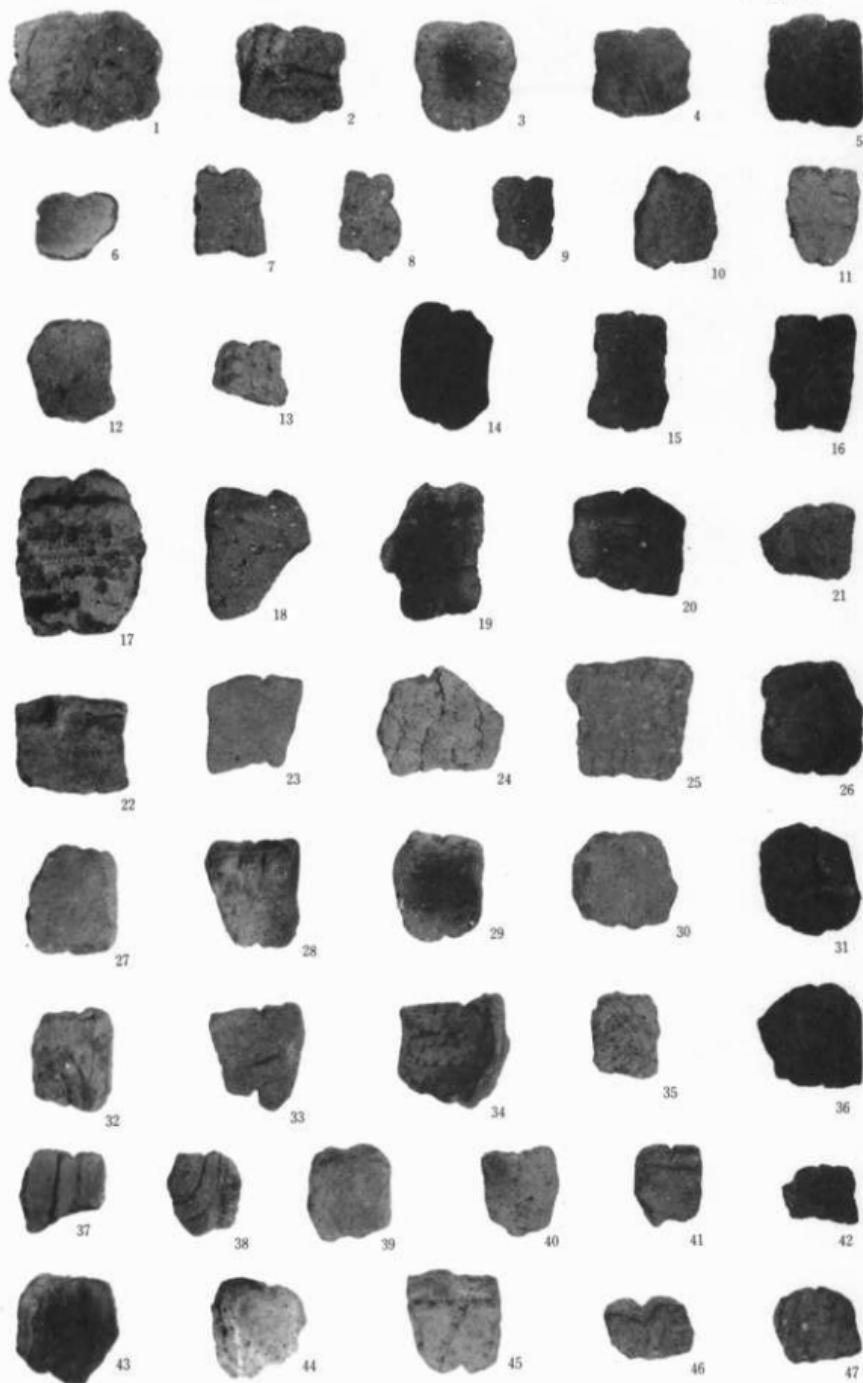


2. 第IX群土器 (1/3)

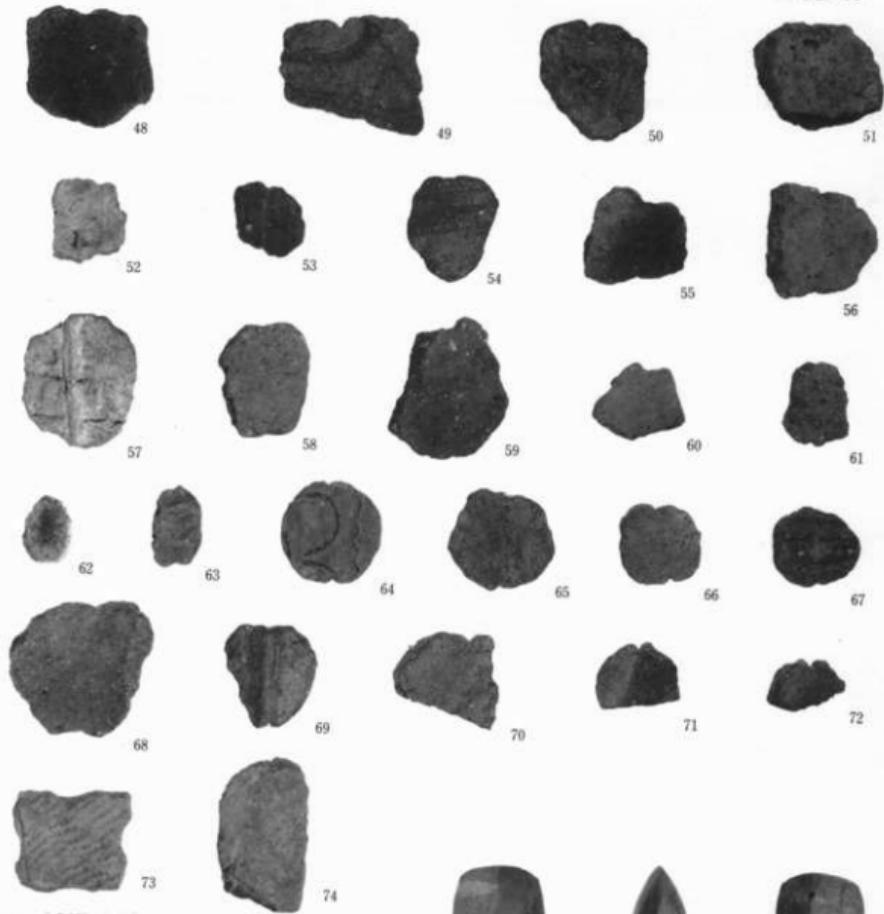
縄文時代包含層遺物



3. 石製品 (1/2)



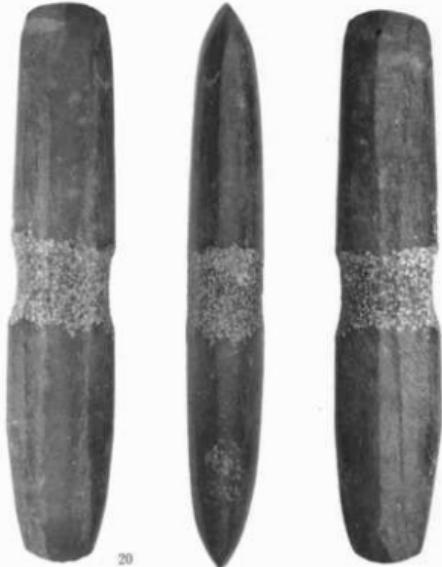
縄文時代包含層遺物



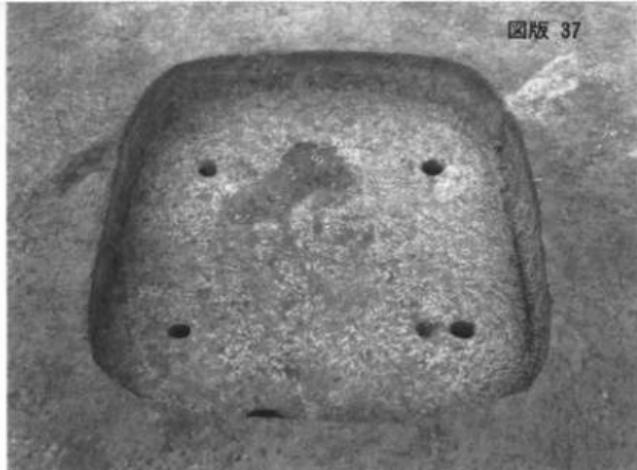
1. 土製品 (1/3)

縄文時代包含層遺物

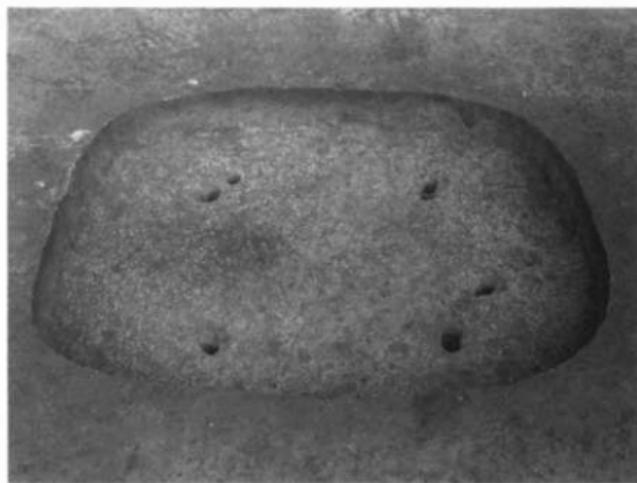
2. 石製品 (1/2)







1. D008号遺構全景

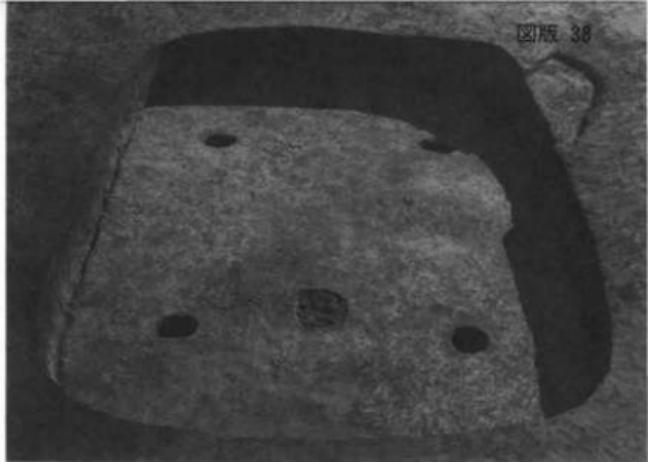


2. D014号遺構全景

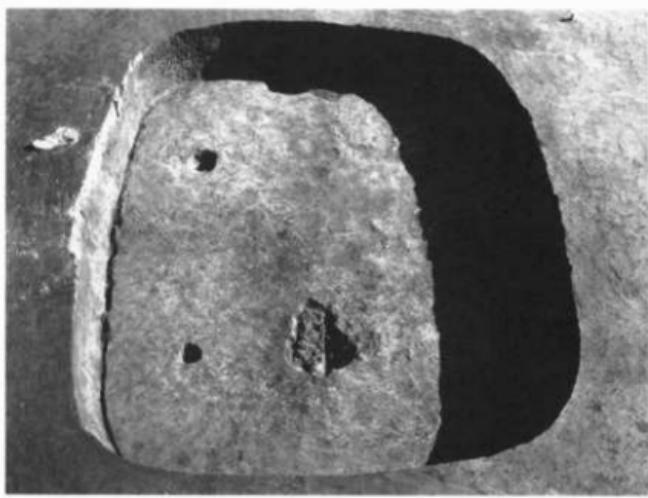


3. D015号遺構全景

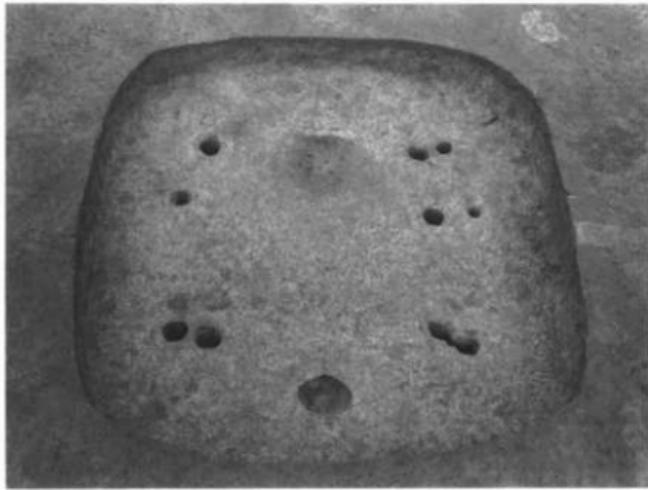
1. D016号遺構全景

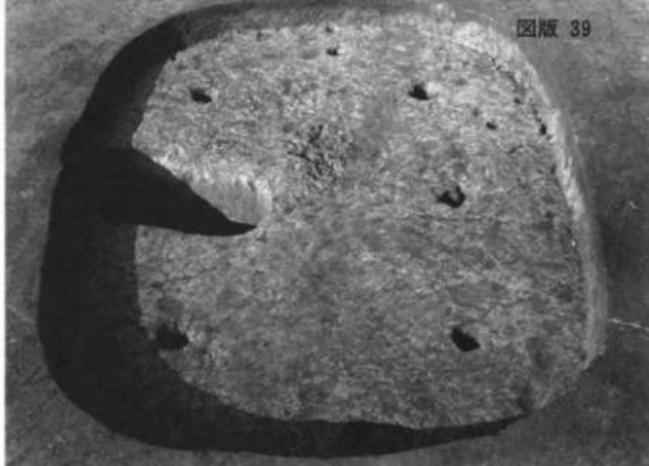


2. D017号遺構全景

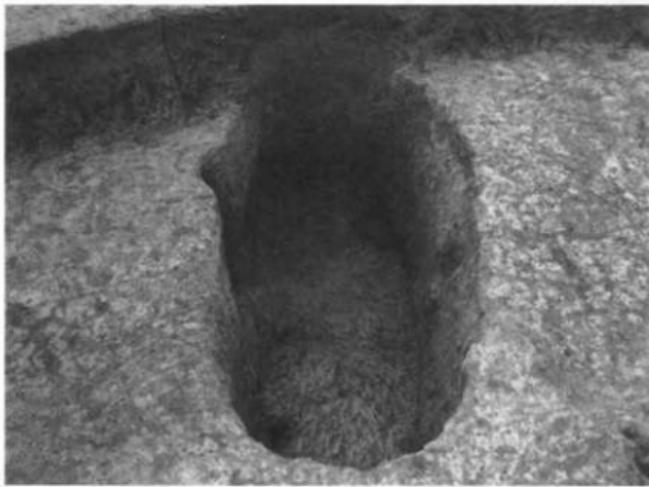


3. D018号遺構全景





1. D019号遺構全景



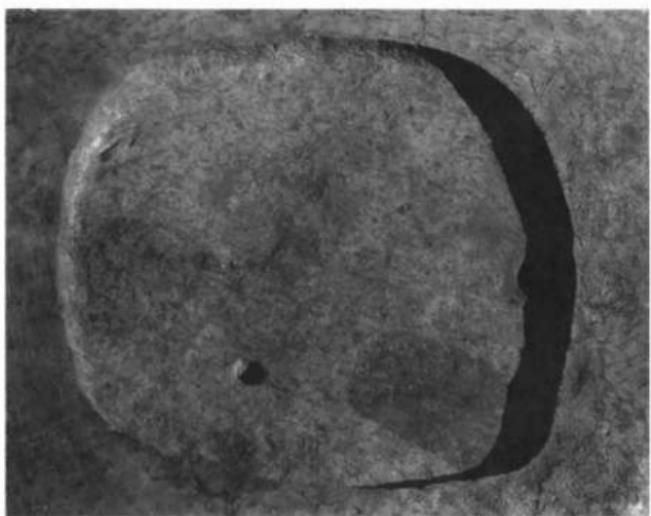
2. D019号遺構内土壤検出状況



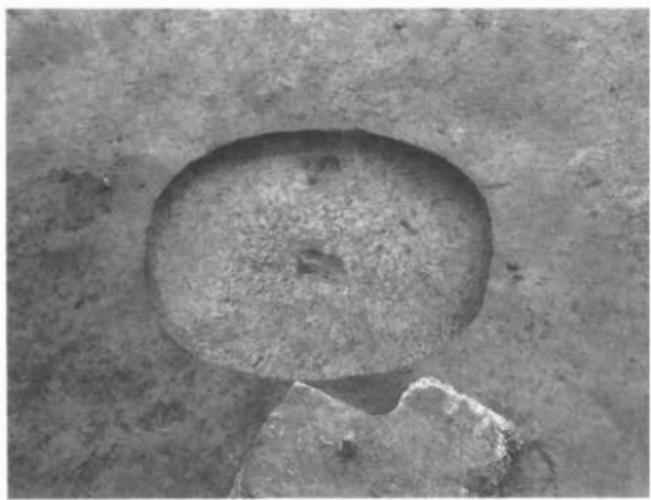
3. D021号遺構全景



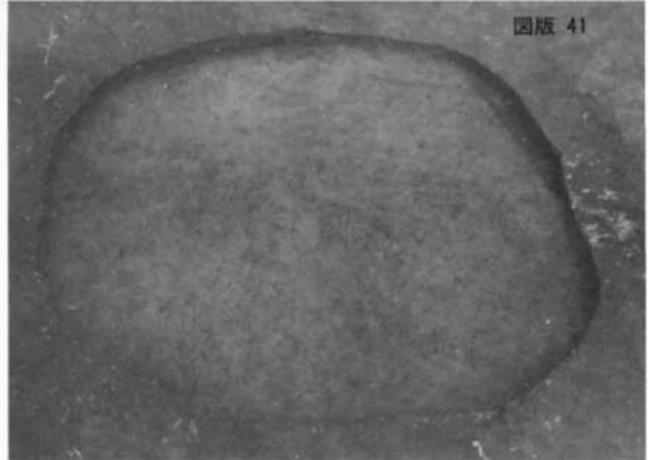
1. D022・023号遺構全景



2. D024号遺構全景



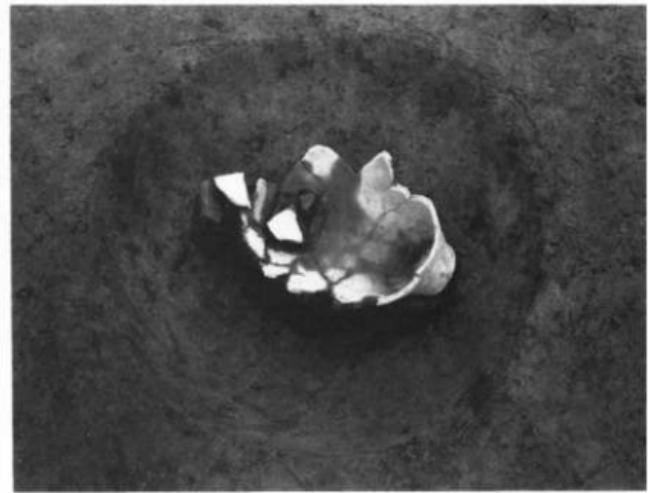
3. D027号遺構全景



1. D034号遺構全景



2. P004号遺構全景



3. P004号遺構遺物出土狀況



D008, 2(1/3)



D014, 1(1/2)



D018, 1(1/3)



D018, 2(1/2)



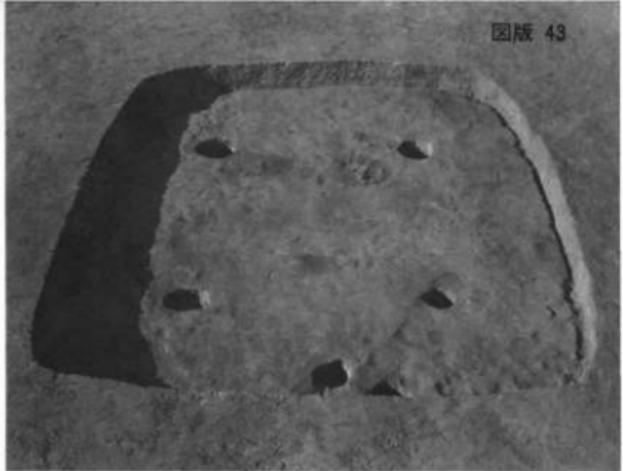
D018, 8(1/2)



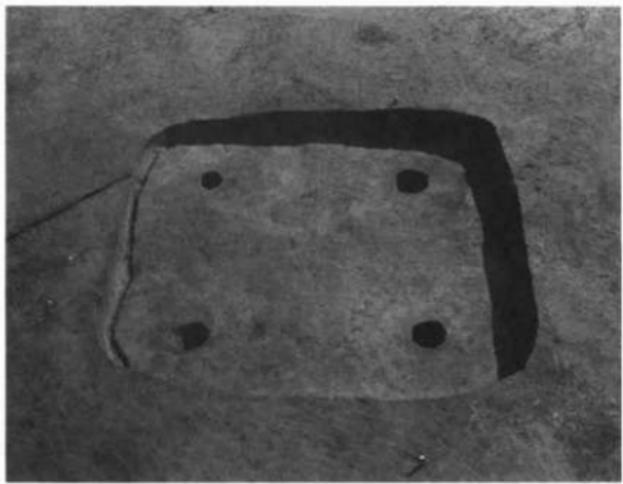
D027, 1(1/3)



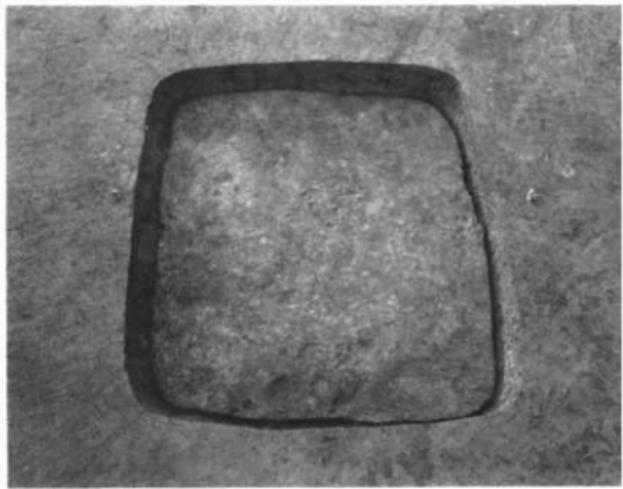
P004, 1 (1/4)



1. D001号遺構全景



2. D002号遺構全景

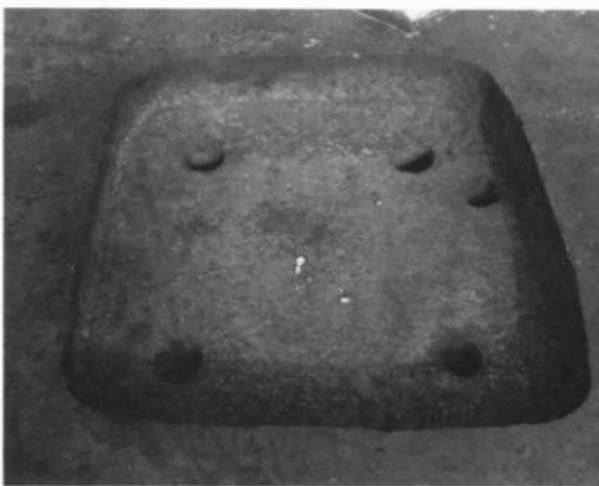


3. D003号遺構全景

1. D004号遺構全景



2. D005号遺構全景

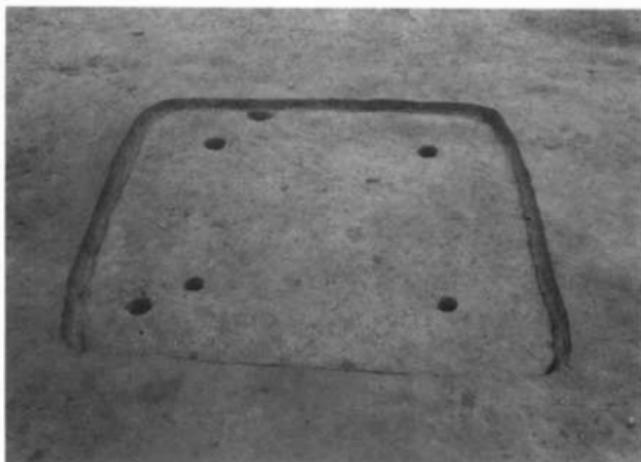


3. D006号遺構全景

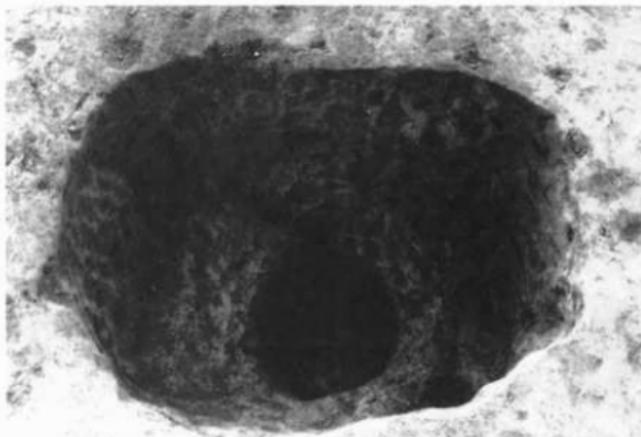




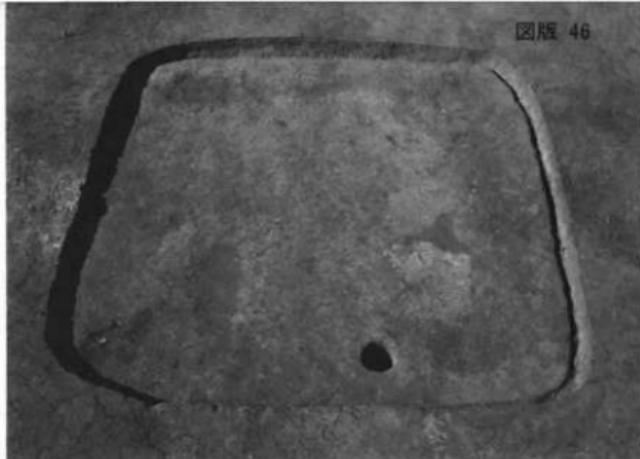
1. D006号遺構遺物 出土状況



2. D007号遺構全景



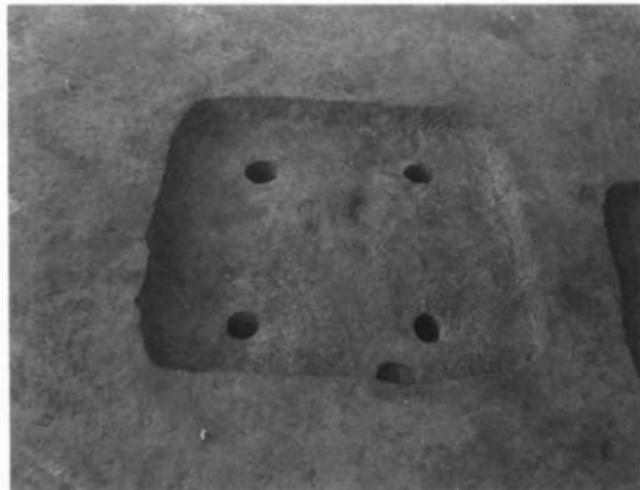
3. D007号遺構柱穴掘形  
検出状況



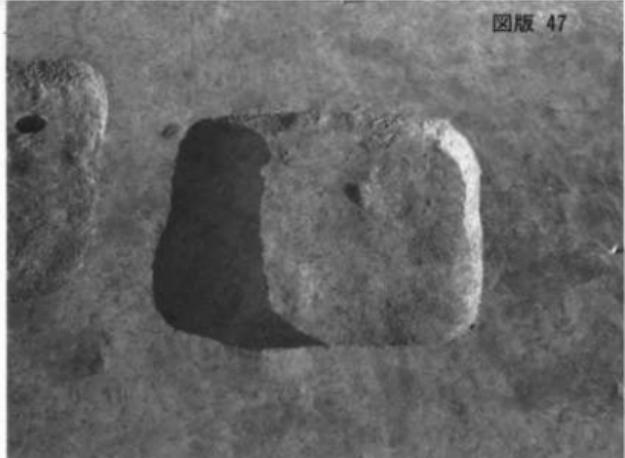
1. D009号遺構全景



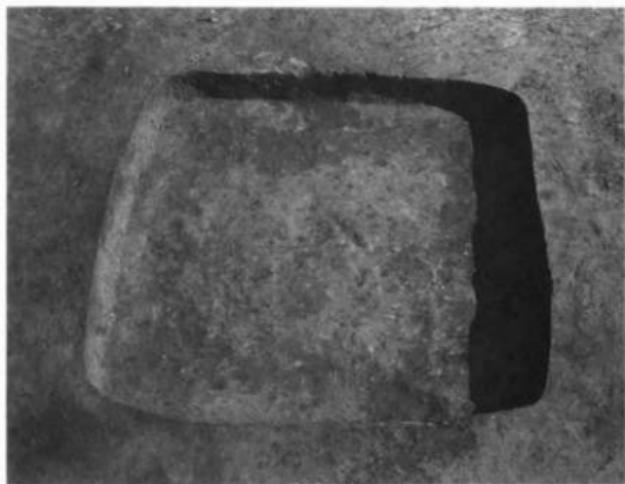
2. D009号遺構遺物出土狀況



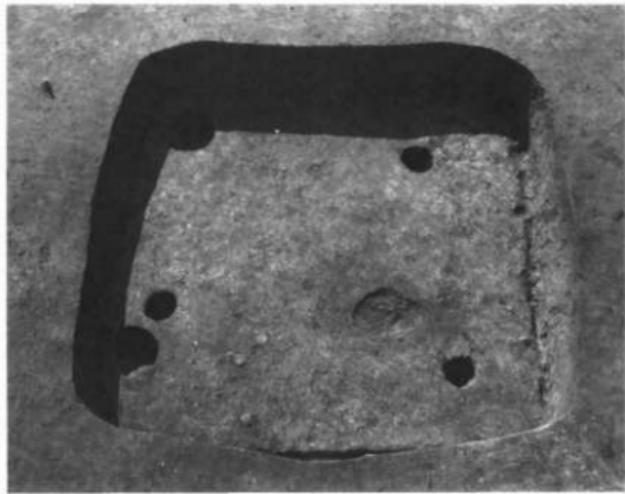
3. D010号遺構全景



1. D011号遺構全景



2. D012号遺構全景



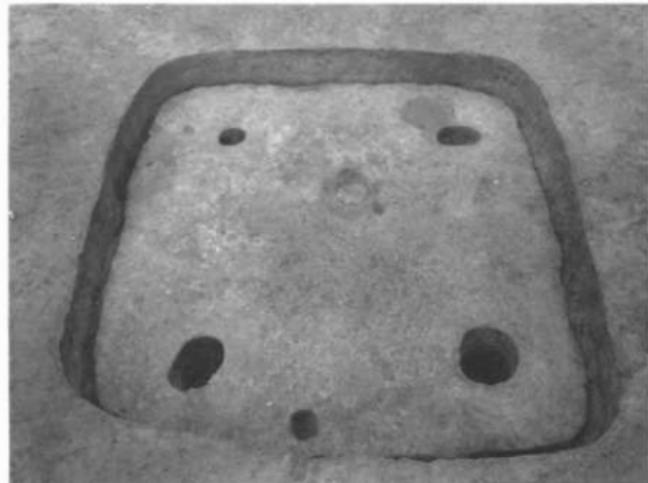
3. D013号遺構全景



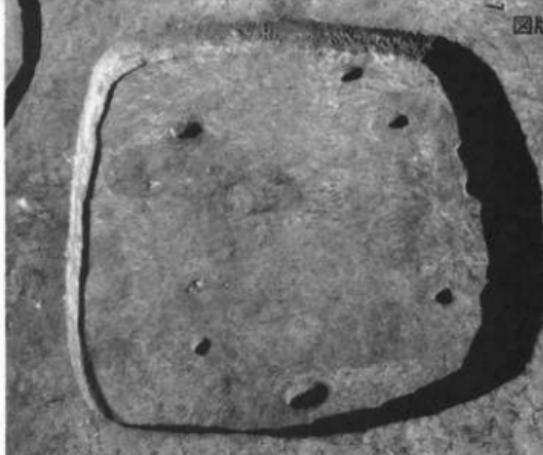
1. D013号遺構遺物出土狀況



2. D013号遺構遺物出土狀況



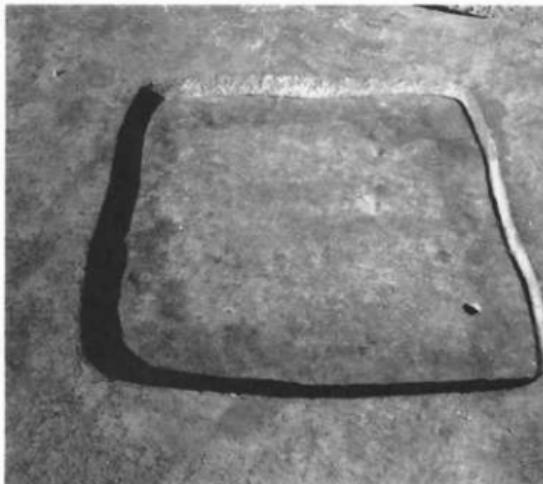
3. D020号遺構全景



1. D025A号遺構全景



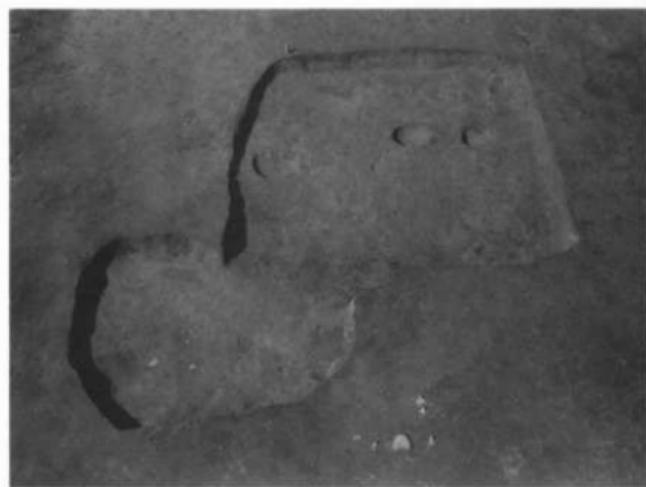
2. D025B号遺構全景



3. D026号遺構全景



1. D026号遺構遺物 出土状況



2. D029号遺構全景



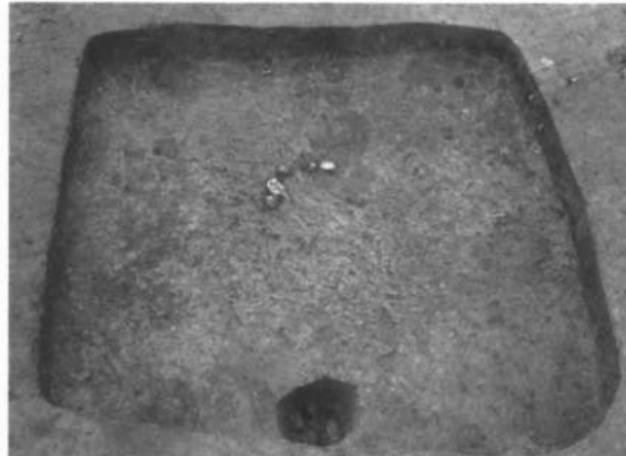
3. D031号遺構全景



1. D033号遗構全景



2. D035号遗構全景



3. D036号遗構全景



1. MB 001・002号遺構 分布状況



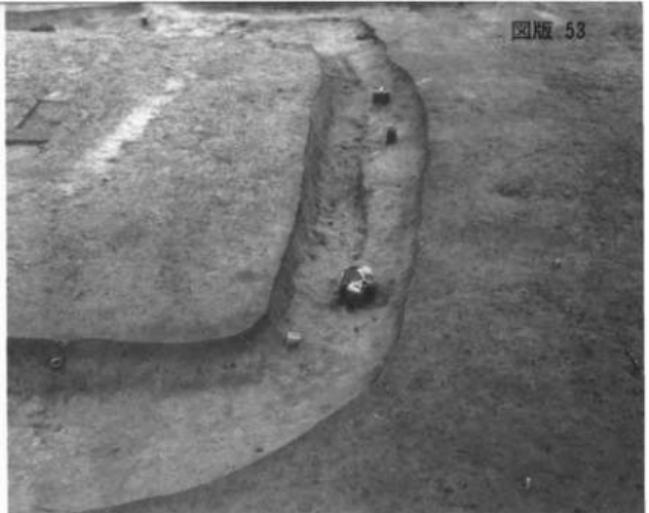
2. MB 001号遺構 全景



弥生・古墳時代第II群遺構



3. MB 001号遺構 東側部分  
4. MB 001号遺構 西側部分



MB 001号遺構遺物出土状況

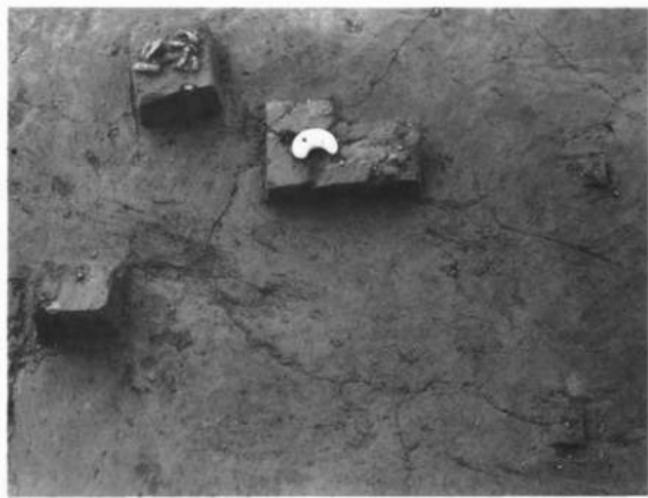




1. MB 001号遺構東溝土層  
堆積状況



2. MB 001号遺構主体部全景



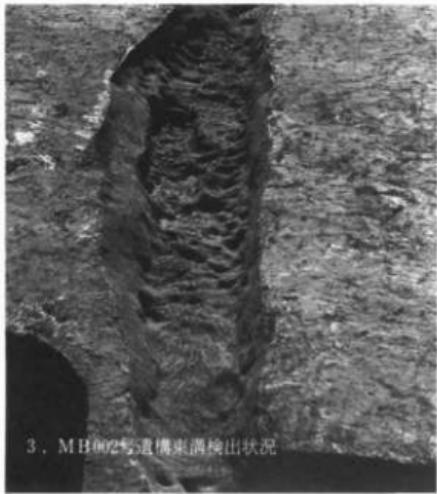
3. MB 001号遺構主体部  
遺物出土状況



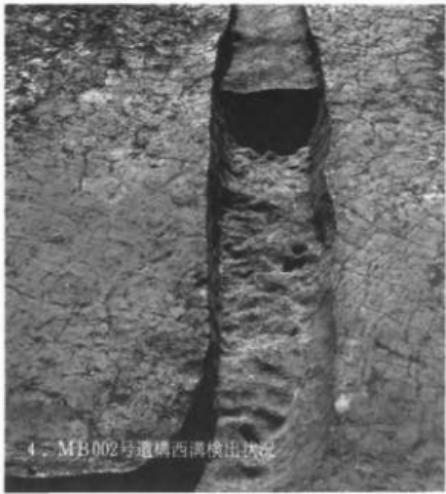
1. MB 002号遺構全景



2. MB 002号遺構西溝內土壤  
検出状況



3. MB 002号遺構東溝検出状況



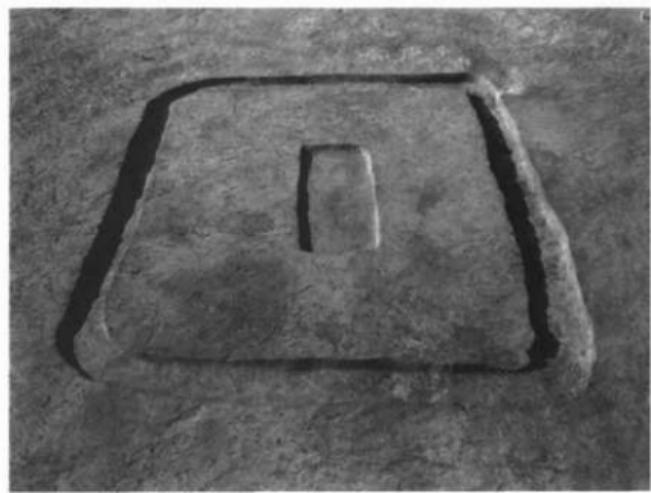
4. MB 002号遺構西溝検出状況



1. MB 002号遺構遺物  
出土狀況



2. MB 002号遺構東溝土層  
堆積狀況



3. MB 003号遺構全景



D001, 1(1/4)



D001, 4(1/3)



D001, 10(1/2)



D001, 11(1/2)



D001, 12(1/2)



D001, 14(1/2)



D002, 1(1/4)



D001, 15(1/2)



D004, 3(1/3)



D006, 1(1/4)



D006, 2(1/3)



D006, 9(1/3)



D006, 10(1/3)



D006, 11(1/2)



D006, 12(1/2)



D006, 16(1/2)



D006, 14(1/2)



D006, 17(1/3)



D006, 18(1/2)



D007, 1(1/4)



D009, 6(1/3)



D009, 8(1/2)



D009, 7(1/2)



D009, 9(1/2)



D010, 2(1/4)



D010, 3(1/3)



D011, 1(1/3)



D013, 1(1/3)



D013, 2(1/3)



D013, 6(1/4)



D013, 7(1/3)



D013, 10(1/2)



D016, 2(1/2)



D025, 1(1/4)



D020, 4(1/2)



D025, 4(1/3)





D026, 2(1/4)



D029, 1(1/4)



D029, 2(1/3)



D029, 5(1/2)



D035, 4(1/2)



D036, 4(1/3)



MB001, 1(1/4)

MB001, 2(1/4)



MB001, 5(1/2)

MB001, 3(1/4)



MB001, 7(1/2)



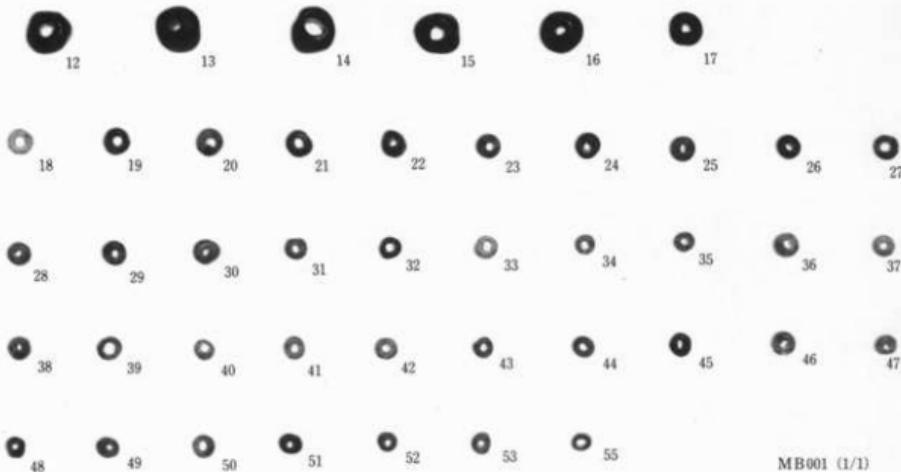
MB001, 9(1/1)



MB001, 10(1/1)



MB001, 11(1/2)



MB001 (1/1)



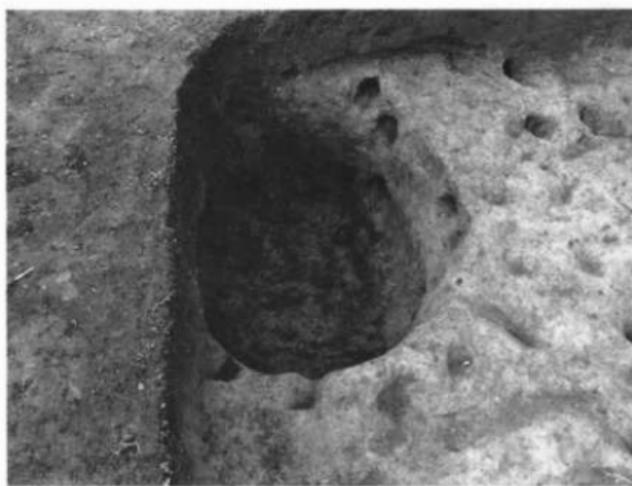
MB002, 1(1/4)



MB002, 4(1/2)



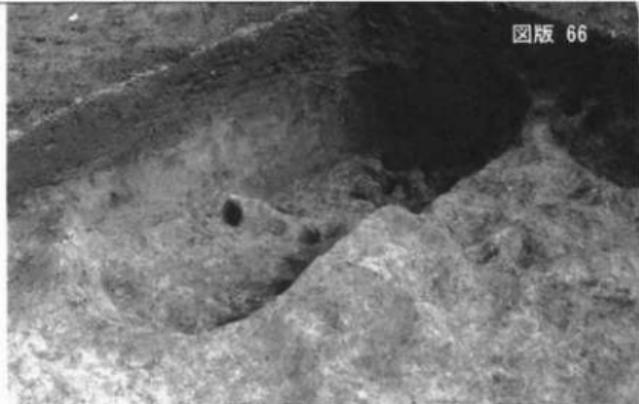
1. D030号遺構全景



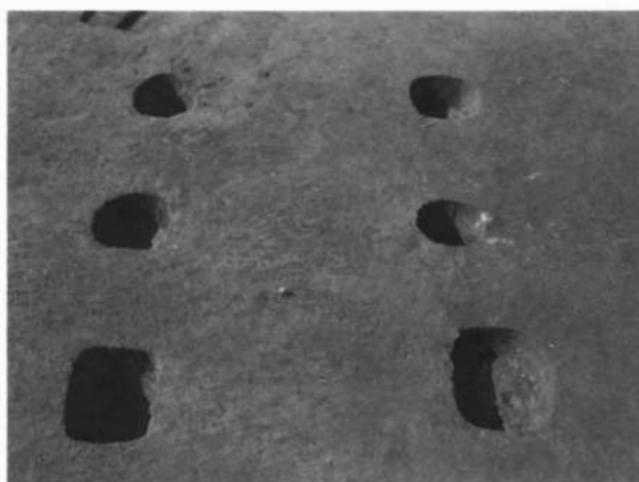
2. D030号遺構土壤檢出狀況



3. D032号遺構全景



1. D032号遺構内土壤検出状況



2. H001号遺構全景

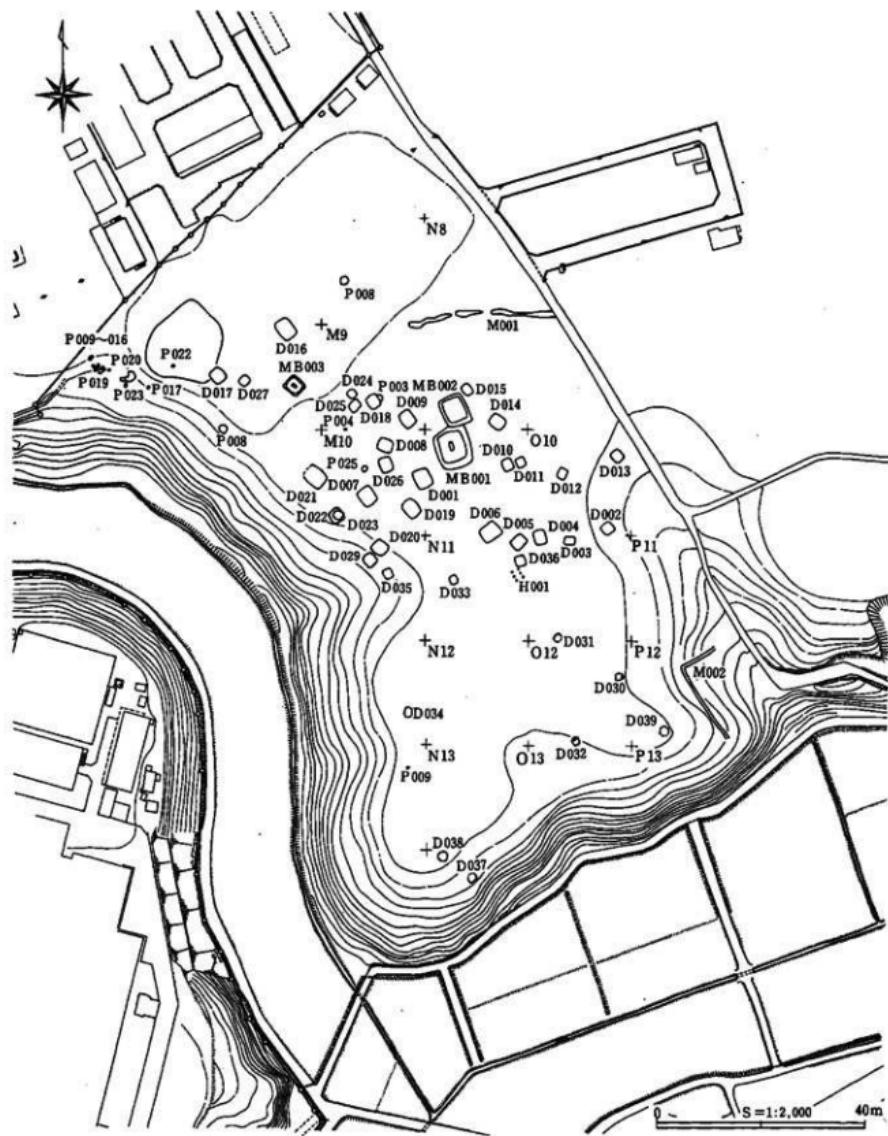


歴史時代遺構、遺物



D032. 1(1/4)

D032. 2(1/4)



### 図A 遺構配置図

---

昭和61年3月21日 印刷

昭和61年3月31日 発行

## 八千代市ヲサル山遺跡

発行 住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部  
東京都新宿区新宿4丁目3番17号

財團法人 千葉県文化財センター  
千葉県千葉市葛城2丁目10番1号

印刷 株式会社 弘文社  
千葉県市川市市川南2丁目7番2号

---